

京都府遺跡調査報告書

第 12 冊

志 高 遺 跡

1 9 8 9

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



貼石墓(2号墓)全景

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年度の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この報告書に収められた志高遺跡も、由良川河川改修に伴う発掘調査で、縄文時代前期の土器群や弥生時代中期の貼石墓を確認するなど、大きな成果を収めました。

これまで、当調査研究センターでは、『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』を通じて、各遺跡の調査成果を紹介してまいりました。これらの刊行物とあわせて、本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与すれば幸いです。

志高遺跡の調査にあたりましては、発掘調査を依頼された建設省近畿地方建設局の方がたをはじめ、京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・厳寒の中で多くの方がたが熱心に各作業に従事していただきました。ここに記して、感謝したいと存じます。

平成元年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本報告書は、京都府舞鶴市志高に所在する志高遺跡の発掘調査報告書である。
2. 志高遺跡の調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となり、昭和59年度から同63年度まで実施した。
3. 発掘調査にあたっては、当調査研究センター主任調査員辻本和美・長谷川達・小山雅人、調査員岩松 保・山下 正・肥後弘幸・三好博喜・鍋田 勇が担当して行った。なお、現地調査及び本書作成にかかる経費は、建設省近畿地方建設局が負担された。
4. 本書に掲載した写真については、現地調査分に関して、岩松・肥後・山下が主として撮影し、一部調査第1課資料係調査員田中 彰が撮影した。遺物は、田中が撮影し、一部高橋猪之介氏に委託した。
5. 噴砂に関しては、通商産業省工業技術院主任研究官寒川 旭氏に寄稿いただいた。また、地質学的な部分は、当調査研究センターの中沢圭二理事に指導を得た。縄文時代前期の動物遺存体の鑑定については、奈良国立文化財研究所文部技官松井 章氏にお願いした。なお、花粉・珪藻についての科学的考察は、朝日航洋株式会社に委託した。
6. 本書に掲載した遺構図の方位は、すべて磁北をさす。
7. 本書の執筆は、以下のとおりである。

肥後弘幸……第1章第1節・第2節、第2章、第3章第1節・第2節第1・2項・第3節・第5節・第6節・第7節・第8節、第4章第1節・第2節・第4節・第5節、第5章第1節・第2節、第6章第1節・第3節

岩松 保……第3章第8節

三好博喜……第3章第2節第2項、第6章第2節

田代 弘……第6章第5節

林日佐子……第3章第4節、第4章第3節、第5章第3節、第6章第4節

吉岡博之……第1章第3節

長谷川達……第3章第2節第4項

松井 章……第3章第2節第5項

憲川 旭……第6章第6節

橋本清一……第6章第8節

本文目次

はじめに	1
第1章 志高遺跡の概略と環境	4
第1節 志高遺跡の概略	4
第2節 志高遺跡の地理的環境と歴史的環境	7
第3節 昭和58年度以前の調査	11
第2章 調査概要	30
第3章 舟戸南地区の調査	36
第1節 層位と調査の概要	36
第2節 縄文時代	39
第3節 弥生時代	115
第4節 古墳時代	247
第5節 奈良時代(方形竪穴式住居の時代)	285
第6節 奈良時代(掘立柱建物の時代)	298
第7節 平安時代以降(掘立柱建物群消失以降の時代)	325
第8節 江戸時代以降	328
第4章 舟戸北地区の調査	330
第1節 層位と調査の概要	330
第2節 弥生時代(第7次調査B地区下層遺構群)	335
第3節 古墳時代	357
第4節 奈良時代	377
第5節 鎌倉時代	386
第6節 江戸時代(第5次調査)	387
第5章 岡安地区の調査	415
第1節 層位と調査の概要	415
第2節 弥生時代	416
第3節 古墳時代	431
第6章 総括	435
第1節 志高遺跡の変遷	435
第2節 志高遺跡出土の縄文土器	446

第3節	弥生土器の編年	449
第4節	古式土師器の編年	462
第5節	志高遺跡の碧玉製管玉生産について	469
第6節	地震跡	481
第7節	石器の材質	484
第8節	縄文時代前期の珪藻分析・花粉分析の結果	485

付 表 目 次

付表1	動物遺存体一覧表	99
付表2	舟戸南地区縄文時代前期出土石器一覧表	100
付表3	舟戸南地区弥生時代出土石器一覧表	236
付表4	第5次調査出土遺物観察表	405
付表5	京都府下玉作り関係遺跡一覧表	476
付表6	出土石器一覧表	477
付表7	珪藻分析結果一覧表	485
付表8	花粉分析結果一覧表	485
付表9	検出建物跡一覧表	486

挿 図 目 次

第 1 図	志高遺跡と京都府北部の主要集落遺跡……………	4
第 2 図	由良川下流域の集落遺跡……………	7
第 3 図	志高遺跡周辺の遺跡……………	9
第 4 図	花ノ木地区竪穴式住居跡 1・2……………	11
第 5 図	昭和56年度花ノ木地区遺構図……………	12
第 6 図	カキ安地区弥生時代前期ピット群……………	13
第 7 図	昭和57年度カキ安地区縄文時代後期・弥生時代前期遺構図……………	14
第 8 図	昭和57年度カキ安地区弥生時代・古墳時代遺構図(1)……………	15
第 9 図	昭和57年度カキ安地区弥生時代・古墳時代遺構図(2)……………	15
第 10 図	カキ安地区方形周溝墓群……………	17
第 11 図	カキ安地区 2 号方形周溝墓供献土器……………	18
第 12 図	カキ安地区 3 号方形周溝墓……………	19
第 13 図	昭和57年度カキ安地区古墳時代後期遺構図……………	20
第 14 図	昭和57年度カキ安地区奈良時代後期～平安時代前期遺構図……………	21
第 15 図	昭和57年度カキ安地区平安時代後期～江戸時代遺構図……………	21
第 16 図	昭和58年度カキ安地区弥生時代遺構図……………	23
第 17 図	昭和58年度カキ安地区古墳時代～奈良時代遺構図……………	23
第 18 図	カキ安地区竪穴式住居跡23……………	26
第 19 図	カキ安地区方形住居跡20……………	27
第 20 図	第 1 次～第 7 次調査位置関係図……………	31
第 21 図	舟戸南地区・北地区土層断面模式図……………	37
第 22 図	Gライン縄文時代土層断面図……………	39
第 23 図	縄文時代土層断面模式図……………	40
第 24 図	縄文時代前期初頭検出遺構図……………	42
第 25 図	石組遺構実測図……………	42
第 26 図	縄文時代前期中葉の検出遺構……………	43
第 27 図	SH86307実測図……………	44
第 28 図	縄文時代前期後葉の検出遺構……………	45
第 29 図	SH86302・SK86301実測図……………	46

第 30 図	縄文土器実測図(1)	62
第 31 図	縄文土器実測図(2)	63
第 32 図	縄文土器実測図(3)	64
第 33 図	縄文土器実測図(4)	65
第 34 図	縄文土器実測図(5)	66
第 35 図	縄文土器実測図(6)	67
第 36 図	縄文土器実測図(7)	68
第 37 図	縄文土器実測図(8)	69
第 38 図	縄文土器実測図(9)	70
第 39 図	縄文土器実測図(10)	71
第 40 図	縄文土器実測図(11)	72
第 41 図	縄文土器実測図(12)	73
第 42 図	縄文土器拓影(1)	74
第 43 図	縄文土器拓影(2)	75
第 44 図	縄文土器拓影(3)	76
第 45 図	縄文土器拓影(4)	77
第 46 図	縄文土器拓影(5)	78
第 47 図	縄文土器拓影(6)	79
第 48 図	縄文土器拓影(7)	80
第 49 図	縄文土器拓影(8)	81
第 50 図	縄文土器拓影(9)	82
第 51 図	縄文土器拓影(10)	83
第 52 図	縄文土器拓影(11)	84
第 53 図	縄文土器拓影(12)	85
第 54 図	縄文土器拓影(13)	86
第 55 図	縄文土器拓影(14)	87
第 56 図	縄文土器拓影(15)	88
第 57 図	縄文時代石器実測図(1)	90
第 58 図	縄文時代石器実測図(2)	91
第 59 図	縄文時代石器実測図(3)	93
第 60 図	縄文時代石器実測図(4)	94
第 61 図	縄文時代石器実測図(5)	96

第 62 図	縄文時代石器実測図(6)	97
第 63 図	縄文時代石器実測図(7)	98
第 64 図	舟戸北地区弥生時代以降土層図(23ライン)	116
第 65 図	舟戸南地区弥生時代検出遺構図	117
第 66 図	弥生時代中期土器分類図 1 (壺形土器 1)	120
第 67 図	弥生時代中期土器分類図 2 (壺形土器 2)	121
第 68 図	弥生時代中期土器分類図 3 (甕形土器)	123
第 69 図	弥生時代中期土器分類図 4 (鉢形土器・高杯形土器)	125
第 70 図	SH85202実測図	126
第 71 図	SH85202出土遺物 1 (弥生土器)	128
第 72 図	SH85202出土遺物 2 (石器)	129
第 73 図	SH85205実測図	130
第 74 図	SH85205出土遺物 1 (弥生土器 1)	131
第 75 図	SH85205出土遺物 2 (弥生土器 2)	132
第 76 図	SH85205出土遺物 3 (竹管文様のある土器・壺肩部)	133
第 77 図	SH85205出土遺物 4 (石器)	134
第 78 図	SH85205出土遺物 5 (管玉)	135
第 79 図	SH85209実測図	136
第 80 図	SH85209出土遺物(弥生土器)	136
第 81 図	SH85210実測図	137
第 82 図	SH85210出土遺物 1 (弥生土器 1)	139
第 83 図	SH85210出土遺物 2 (弥生土器 2)	140
第 84 図	SH85210出土遺物 3 (石器)	141
第 85 図	SH85210出土遺物 4 (管玉未製品)	142
第 86 図	SH85218実測図	143
第 87 図	SH85218出土遺物 1 (弥生土器)	144
第 88 図	SH85218出土遺物 2 (石器)	144
第 89 図	SH86201実測図	145
第 90 図	SH86201出土遺物 1 (弥生土器・壺)	146
第 91 図	SH86201出土遺物 2 (弥生土器・甕他)	148
第 92 図	SH86201出土遺物 3 (弥生土器・鉢)	149
第 93 図	SH86201出土遺物 4 (弥生土器・高杯ほか)	150

第 94 図	SH86201出土遺物 5 (石器 1)	151
第 95 図	SH86201出土遺物 6 (石器 2)	152
第 96 図	SH86201出土遺物 7 (管玉他)	153
第 97 図	SH86202実測図	154
第 98 図	SH86202出土遺物	155
第 99 図	SH86203実測図	156
第 100 図	SH86203出土遺物 1 (弥生土器 1)	157
第 101 図	SH86203出土遺物 2 (弥生土器 2)	158
第 102 図	SH86203出土遺物 3 (弥生土器 3)	159
第 103 図	SH86203出土遺物 4 (玉類)	159
第 104 図	SH86204実測図	160
第 105 図	SH86204出土遺物 1 (弥生土器)	161
第 106 図	SH86204出土遺物 2 (石器)	162
第 107 図	SH86212実測図	162
第 108 図	SH86212ピット内石剣出土状況実測図	163
第 109 図	SH86212出土遺物 1 (弥生土器)	164
第 110 図	SH86212出土遺物 2 (銅剣形石剣)	164
第 111 図	SH86212出土遺物 3 (台石)	165
第 112 図	SD86206実測図	166
第 113 図	SD86206出土遺物	167
第 114 図	SD85211出土遺物 1 (弥生土器 1)	171
第 115 図	SD85211出土遺物 2 (弥生土器 2)	172
第 116 図	SD85211出土遺物 3 (弥生土器 3)	173
第 117 図	SD85211出土遺物 4 (弥生土器 4)	174
第 118 図	SD85211出土遺物 5 (弥生土器 5)	175
第 119 図	SD85211出土遺物 6 (弥生土器 6)	176
第 120 図	SD85211出土遺物 7 (弥生土器 7)	177
第 121 図	SD86211出土遺物 1 (弥生土器 1)	179
第 122 図	SD86211出土遺物 2 (弥生土器 2)	180
第 123 図	SD85211・SD86211出土遺物(石器)	181
第 124 図	SD85211出土遺物(銅剣形石剣)	182
第 125 図	SK85201実測図	184

第126 図	SK85201出土遺物1(弥生土器1)……………	186
第127 図	SK85201出土遺物2(弥生土器2)……………	187
第128 図	SK85201出土遺物3(弥生土器3)……………	188
第129 図	SK85201出土遺物4(弥生土器4)……………	189
第130 図	SK85201出土遺物5(石皿)……………	190
第131 図	SK85206出土遺物……………	191
第132 図	SK85207・SK85214・SK85215実測図……………	191
第133 図	SK85207出土遺物……………	192
第134 図	SK85208出土遺物……………	193
第135 図	SK85212出土遺物……………	194
第136 図	SK85213実測図……………	195
第137 図	SK85213出土遺物……………	196
第138 図	SK86207出土遺物(弥生土器)……………	197
第139 図	SK86208出土遺物(弥生土器)……………	198
第140 図	自然流路に伴う落ち込み土層断面図(Fライン)……………	199
第141 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物1(壺)……………	200
第142 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物2(壺・甕)……………	201
第143 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物3(甕)……………	202
第144 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物4(甕・鉢)……………	203
第145 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物5(鉢・高杯)……………	204
第146 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物1(弥生土器1)……………	214
第147 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物2(弥生土器2)……………	215
第148 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物3(弥生土器3)……………	216
第149 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物4(弥生土器4)……………	217
第150 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物5(弥生土器5)……………	218
第151 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物6(弥生土器6)……………	219
第152 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物7(スタンプ文のある土器)……………	220
第153 図	舟戸南地区出土弥生時代前期の土器……………	221
第154 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物8(磨製石鏃・打製石鏃・石錐・ 石剣)……………	223
第155 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物9(石槍?・削器・石庖丁?)……………	224
第156 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物10(石鍬)……………	225

第 157 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物11(大型蛤刃石斧1)……………	226
第 158 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物12(大型蛤刃石斧2)……………	227
第 159 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物13(扁平片刃石斧)……………	229
第 160 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物14(扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・ 環状石斧)……………	230
第 161 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物15(敲き石・磨石)……………	231
第 162 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物16(砥石1)……………	232
第 163 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物17(砥石2)……………	233
第 164 図	舟戸南地区包含層ほか出土遺物18(砥石・石皿)……………	234
第 165 図	舟戸南地区古墳時代～奈良時代検出遺構図……………	249
第 166 図	古墳時代前期の土器分類図 1(壺形土器)……………	251
第 167 図	古墳時代前期の土器分類図 2(甕形土器)……………	252
第 168 図	古墳時代前期の土器分類図 3(鉢形土器)……………	253
第 169 図	古墳時代前期の土器分類図 4(高杯形土器)……………	254
第 170 図	古墳時代前期の土器分類図 5(器台形土器)……………	255
第 171 図	SD85102・SK85116実測図……………	256
第 172 図	SD85102出土遺物……………	258
第 173 図	SK86116出土遺物……………	260
第 174 図	SX85118出土遺物……………	261
第 175 図	SX85117出土遺物……………	262
第 176 図	自然流路に伴う落ち込み部遺物出土状況実測図(土器溜まり)……………	264
第 177 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 1(土器溜まり)……………	265
第 178 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 2(上層土器群)……………	267
第 179 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 3(中層土器群 1)……………	269
第 180 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 4(中層土器群 2)……………	271
第 181 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 5(下層土器群 1)……………	273
第 182 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 6(下層土器群 2)……………	274
第 183 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 7(下層土器群 3)……………	276
第 184 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 8(上層～下層 1)……………	278
第 185 図	自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 9(上層～下層 2)……………	279
第 186 図	SK85125出土遺物……………	280
第 187 図	舟戸南地区包含層出土遺物 1(土器)……………	282

第 188 図	舟戸南地区包含層出土遺物 2 (小型仿製鏡).....	283
第 189 図	舟戸南地区包含層出土遺物 3 (金環・土製品).....	284
第 190 図	SH85101 (SH86101)・SH86110 実測図.....	285
第 191 図	SH85101 (SH86101) 出土遺物.....	286
第 192 図	SH86102 実測図.....	287
第 193 図	SH86102 竈実測図.....	287
第 194 図	SH86102 出土遺物.....	288
第 195 図	SH86103 実測図.....	289
第 196 図	SH86103 出土遺物.....	289
第 197 図	SH86104 実測図.....	290
第 198 図	SH86104 竈実測図.....	290
第 199 図	SH86104 出土遺物.....	291
第 200 図	SH86105 実測図.....	291
第 201 図	SH86105 出土遺物.....	291
第 202 図	SH86108 出土遺物.....	292
第 203 図	SH86109 実測図.....	292
第 204 図	SH86110 出土遺物.....	292
第 205 図	SH86111 実測図.....	293
第 206 図	SH86111 出土遺物.....	294
第 207 図	SK86106 実測図.....	294
第 208 図	SK86106 出土遺物.....	294
第 209 図	SK86107 実測図.....	295
第 210 図	SK86107 出土遺物.....	295
第 211 図	SK85116 出土遺物.....	295
第 212 図	SH85106 出土遺物.....	296
第 213 図	SH85111 実測図.....	296
第 214 図	SH85111 出土遺物.....	297
第 215 図	奈良時代～近世検出遺構図.....	299
第 216 図	SB85017・SB85026 実測図.....	301
第 217 図	SB85017 出土遺物.....	302
第 218 図	SB85026 出土遺物.....	302
第 219 図	SB85046 実測図.....	302

第220 図	SB85046出土遺物	303
第221 図	SB86020出土遺物	303
第222 図	SB86020実測図	303
第223 図	SB86019実測図	304
第224 図	SB86019出土遺物	304
第225 図	SB85020・SB85021実測図	305
第226 図	SB85020出土遺物	306
第227 図	SB85027実測図	306
第228 図	SB85024実測図	307
第229 図	SB85024出土遺物	307
第230 図	SB85023実測図	308
第231 図	SK85044実測図	308
第232 図	SK85044出土遺物	309
第233 図	SB85003実測図	309
第234 図	SB85003出土遺物	310
第235 図	SB86003実測図	310
第236 図	SB86018・SA86042・SA86043実測図	311
第237 図	SB86003出土遺物	313
第238 図	SB86018出土遺物	313
第239 図	SA86042出土遺物	314
第240 図	SB86008出土遺物	314
第241 図	SB86008・SB86041・SA86017実測図	315
第242 図	SB85005実測図	316
第243 図	SB85005出土遺物	317
第244 図	SB85006実測図	317
第245 図	SB85006出土遺物	318
第246 図	SB85011実測図	318
第247 図	SB85011出土遺物	318
第248 図	SX85001出土遺物	320
第249 図	奈良時代包含層出土遺物1(土師器)	322
第250 図	奈良時代包含層出土遺物2(須恵器)	323
第251 図	平安時代以降包含層ほか出土遺物1(土師器・須恵器・瓦器)	326

第 252 図	平安時代以降包含層ほか出土遺物 2 (緑釉陶器)	327
第 253 図	近世墓地実測図	328
第 254 図	第 5 次調査・第 7 次調査関係図(下層)	330
第 255 図	舟戸北地区第 7 次調査 B 地区北西壁土層断面図	331
第 256 図	第 7 次調査 B 地区下層遺構図	333
第 257 図	弥生時代後期土器分類図	337
第 258 図	1 ~ 3 号墓実測図	339
第 259 図	SK86234 実測図	342
第 260 図	1 号墓出土遺物 1	343
第 261 図	1 号墓出土遺物 2	344
第 262 図	1 号墓下層(灰色粘土)出土遺物	345
第 263 図	SX86231 断面実測図	347
第 264 図	SX86231 出土遺物	347
第 265 図	SD86240 出土遺物 1 (弥生土器 1)	351
第 266 図	SD86240 出土遺物 2 (弥生土器 2)	352
第 267 図	SD86240 出土遺物 3 (石器)	353
第 268 図	自然流路に伴う遺物 1	354
第 269 図	自然流路に伴う遺物 2	355
第 270 図	自然流路に伴う遺物 3	356
第 271 図	第 7 次調査 B 地区上層検出遺構図	357
第 272 図	SK86126 出土遺物(1)	359
第 273 図	SK86126 出土遺物(2)	360
第 274 図	SK86127 出土遺物(1)	362
第 275 図	SK86127 出土遺物(2)	363
第 276 図	SK86127 出土遺物(3)	364
第 277 図	東側排水溝出土遺物(1)	366
第 278 図	東側排水溝出土遺物(2)	368
第 279 図	第 7 次調査 B 地区包含層出土遺物(1)	371
第 280 図	第 7 次調査 B 地区包含層出土遺物(2)	373
第 281 図	第 7 次調査 B 地区包含層出土遺物(3)	375
第 282 図	SX86032 出土遺物	377
第 283 図	SH86120 実測図	378

第 284 図	SH86120・SH86122出土遺物	379
第 285 図	第 7 次調査B地区奈良時代包含層出土遺物 1 (土師器 1)	382
第 286 図	第 7 次調査B地区奈良時代包含層出土遺物 2 (土師器 2)	383
第 287 図	第 7 次調査B地区奈良時代包含層出土遺物 3 (須恵器)	384
第 288 図	中世墓出土龍泉窯青磁椀	386
第 289 図	淡褐色砂上面検出遺構平面図	387
第 290 図	暗茶褐色砂質土上面検出遺構平面図	388
第 291 図	調査地土層図	389
第 292 図	SX8441実測図	391
第 293 図	SD8439・40土層図	391
第 294 図	黒色砂質土下面検出遺構平面図	392
第 295 図	第 5 次調査出土遺物(1)	394
第 296 図	第 5 次調査出土遺物(2)	395
第 297 図	第 5 次調査出土遺物(3)	396
第 298 図	第 5 次調査出土遺物(4)	397
第 299 図	第 5 次調査出土遺物(5)	398
第 300 図	第 5 次調査出土遺物(6)	399
第 301 図	第 5 次調査出土遺物(7)	400
第 302 図	第 5 次調査出土遺物(8)	401
第 303 図	第 5 次調査出土遺物(9)	402
第 304 図	第 5 次調査出土遺物(10)	403
第 305 図	岡安地区下層検出遺構図	416
第 306 図	SH86246実測図	417
第 307 図	SH86246出土遺物(1)	418
第 308 図	SH86246出土遺物(2)	419
第 309 図	SB86240・SB86249・SB86250実測図	420
第 310 図	SK86255出土遺物(1)	421
第 311 図	SK86255出土遺物(2)	422
第 312 図	SK86255出土遺物(3)	423
第 313 図	SK86256出土遺物(1)	424
第 314 図	SK86256出土遺物(2)	425
第 315 図	SK86256出土遺物(3)	426

第 316 図	岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(1)	428
第 317 図	岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(2)	429
第 318 図	岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(3)	430
第 319 図	SH86241実測図	431
第 320 図	SH86247実測図	432
第 321 図	SH86247出土遺物	433
第 322 図	SH86247出土勾玉	434
第 323 図	弥生時代前期(志高弥生 I 期)の集落分布	436
第 324 図	弥生時代中期中葉(志高弥生 III・IV 期)の集落分布	437
第 325 図	弥生時代中期後葉(志高弥生 V・VI 期)の集落分布	438
第 326 図	弥生時代中期末～後期前葉(志高弥生 VII 期)の集落分布	439
第 327 図	弥生時代後期後葉～末葉(志高弥生 IX・X 期)の集落分布	440
第 328 図	7～8 世紀中頃の堅穴式住居跡の分布	441
第 329 図	掘立柱建物群の変遷(第 II～IV 期)	442
第 330 図	弥生土器編年表 1 (壺・甕)	453
第 331 図	弥生土器編年表 2 (鉢・高杯)	455
第 332 図	弥生土器編年表 3 (壺・甕)	457
第 333 図	弥生土器編年表 4 (鉢・高杯)	459
第 334 図	古式土師器編年表 1	465
第 335 図	古式土師器編年表 2	467
第 336 図	碧玉製管玉の原石	470
第 337 図	碧玉製管玉の未製品(1)	471
第 338 図	碧玉製管玉の未製品(2)	472
第 339 図	碧玉製管玉	473
第 340 図	擦り切り施溝具及びその素材	474
第 341 図	噴砂の割れ目の分布	481
第 342 図	液状化層と噴砂の模式図	481
第 343 図	8 世紀中頃の住居跡を切る噴砂	482
第 344 図	志高遺跡と桑飼下遺跡の地震跡	482

図 版 目 次

図版第 1 志高遺跡全景

図版第 2 (1)由良川下流域全景 (2)舟戸地区近景(航空写真)

第 7 次調査・舟戸南地区 縄文時代

図版第 3 (1)舟戸地区遠景(志高城跡から) (2)縄文時代前期土層断面

図版第 4 (1)縄文時代前期前葉全景(北西から)
(2)縄文時代前期前葉跡完掘状況(北西から)

図版第 5 (1)石組遺構 (2)縄文時代前期中葉全景(北東から)

図版第 6 (1)竪穴式住居跡(SH86307) (2)縄文時代前期中葉土器出土状況

図版第 7 (1)縄文時代前期後葉全景(北西から)
(2)竪穴式住居跡(SH86302)(北西から)

第 6 次調査・舟戸南地区 弥生時代

図版第 8 (1)弥生時代中期全景(第 6 次調査舟戸南地区)
(2)弥生時代中期竪穴式住居跡群(第 6 次調査, 南西から)

図版第 9 (1)竪穴式住居跡(SH85202)(南西から)
(2)竪穴式住居跡(SH85205)(北から)

図版第 10 (1)竪穴式住居跡(SH85209)(南西から)
(2)竪穴式住居跡(SH85210)(北西から)

図版第 11 (1)溝(SD85211)(南東から)
(2)土坑(SK85201)検出状況(南東から)

第 7 次調査・舟戸南地区 弥生時代

図版第 12 (1)弥生時代中期全景(北西から)
(2)竪穴式住居跡(SH86201)(北東から)

図版第 13 (1)竪穴式住居跡(SH86202)(北東から)
(2)竪穴式住居跡(SH86203)(北西から)

図版第 14 (1)竪穴式住居跡(SH86212)(北から)
(2)SH86212ピット内銅剣形石剣出土状況

図版第 15 (1)溝(SD86206)(北西から) (2)土坑(SK86208)遺物出土状況

第 6 次調査・舟戸南地区 古墳時代～奈良時代

図版第 16 (1)竪穴式住居跡(SH85101)(北東から)

- (2) 竪穴式住居跡群(SH85107・108・112・113) (南東から)
- 図版第17 (1) 竪穴式住居跡(SH85111) (南西から)
(2) 溝(SD85102)・土坑(SK85116) (北東から)
- 図版第18 (1) 自然流路に伴う落ち込み部(北東から)
(2) 自然流路に伴う落ち込み部(土器溜まり)

第7次調査・舟戸南地区 古墳時代～奈良時代

- 図版第19 (1) 竪穴式住居跡群全景(北西から)
(2) 竪穴式住居跡(SH86101・SH86110) (南西から)
- 図版第20 (1) 竪穴式住居跡(SH86102) (南西から)
(2) SH86102竈
- 図版第21 (1) 竪穴式住居跡(SH86103) (北西から)
(2) 竪穴式住居跡(SH86104) (北西から)
- 図版第22 (1) 竪穴式住居跡(SH86109・SH86111) (北西から)
(2) 屋外炉(SX86107)

第6次調査・舟戸南地区 奈良時代

- 図版第23 (1) 下層～上層建物跡群全景(南東から)
(2) 掘立柱建物跡(SB85046) (南東から)
- 図版第24 (1) 掘立柱建物跡(SB85005) (北東から)
(2) 掘立柱建物跡(SB85006) (南東から)
- 図版第25 (1) 下層建物跡群全景(南西から)
(2) 掘立柱建物跡(SB85005・SB85011・SB85019・SB85020) (北東から)
- 図版第26 (1) 掘立柱建物跡(SB85023・SB85024) (南東から)
(2) 掘立柱建物跡(SB85024) (南東から)
- 図版第27 (1) 土坑(SK85044) (北西から) (2) 土器溜まり(SX85001)

第7次調査・舟戸南地区 奈良時代

- 図版第28 (1) 下層建物跡群全景(北東から)
(2) 掘立柱建物跡(SB86018・SB86019) (北東から)
- 図版第29 (1) 掘立柱建物跡(SB86020) (北西から)
(2) 上層建物跡群全景(北東から)
- 図版第30 (1) 掘立柱建物跡(SB86003) (北東から)
(2) 掘立柱建物跡(SB86008) (北西から)

第6次調査・舟戸南地区 近世

図版第31 (1)近世墓地(南西から) (2)近世墓

第7次調査・舟戸北地区 弥生時代

図版第32 (1)弥生時代全景 (2)1・2号墓全景(南東から)

図版第33 (1)1号墓貼り石部検出状況(西から) (2)1号墓西隅部

図版第34 (1)1号墓断面及び貼り石部分 (2)1号墓土壙内(SK86233)遺物出土状況

図版第35 (1)1号墓土壙内(SK86234)遺物出土状況 (2)SK86234完掘状況

図版第36 (1)2号墓全景(東から) (2)1号墓・2号墓(北東から)

図版第37 (1)2号墓東隅部 (2)2号墓斜面貼り石中央部

図版第38 不明遺構(SX86231)と貼り石墓群(南西から)

図版第39 (1)SX86231中央部(南東から) (2)SX86231断面

図版第40 (1)SX86231中央部貼り石除去後 (2)溝(SD86240)(南東から)

第7次調査・舟戸北地区 古墳時代～奈良時代

図版第41 (1)古墳時代～奈良時代全景(北東から)

(2)竪穴式住居跡(SH86123・SH86124)(北西から)

図版第42 (1)土坑(SK86126)遺物出土状況 (2)竪穴式住居跡(SH86120)竈

第5次調査・舟戸北地区

図版第43 (1)淡褐色砂層上面検出遺構(東北から)

(2)淡褐色砂層上面検出遺構(西南から)

図版第44 (1)近世排水施設(西から) (2)由良川旧流路肩部(東から)

図版第45 (1)黒色砂質土下面検出遺構(西南から) (2)SX8441全景

図版第46 (1)SD8440・SD8439全景(西から) (2)SD8440内土層図(東南から)

第7次調査・岡安地区

図版第47 (1)岡安地区遠景(久田美城跡から) (2)岡安地区全景(北東から)

図版第48 (1)竪穴式住居跡(SH86246)(北西から)

(2)掘立柱建物跡(SB86240・SB86249・SB86250)(南東から)

図版第49 (1)土坑(SK86255)遺物出土状況 (2)土坑(SK86256)遺物出土状況

図版第50 (1)竪穴式住居跡(SH86241)(西から)

(2)竪穴式住居跡(SH86247)(南東から)

舟戸南地区

図版第51 縄文土器(1)

図版第52 縄文土器(2)

- 図版第53 縄文土器(3)
 図版第54 縄文土器(4)
 図版第55 縄文土器(5)
 図版第56 縄文土器(6)
 図版第57 縄文土器(7)
 図版第58 縄文時代石器 1 (石鏃・石錐・異形石器)
 図版第59 (1)縄文時代石器 2 (石匕) (2)縄文時代石器 3 (磨製石斧)
 図版第60 (1)縄文時代石器 4 (磨石・敲石・石皿) (2)縄文時代石器 5 (礫石錘)
 図版第61 (1)縄文時代石器 6 (砥石)
 (2)縄文時代石器 7 (けつ状耳飾り・垂飾り類)
 図版第62 弥生時代(1)
 図版第63 弥生土器(2)
 図版第64 弥生土器(3)
 図版第65 弥生土器(4)
 図版第66 弥生土器(5)
 図版第67 弥生時代石器 1 (磨製石鏃・打製石鏃・石錐)
 図版第68 弥生時代石器 2 (石剣)
 図版第69 (1)弥生時代石器 3 (石鏃) (2)弥生時代石器 4 (大型蛤刃石斧)
 図版第70 (1)弥生時代石器 5 (扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・環状石斧・小型石斧)
 (2)弥生時代石器 6 (砥石)
 図版第71 (1)弥生時代石器 7 (砥石・石皿・凹み石)
 (2)弥生時代石器 8 (管玉・管玉未製品・管玉石材・石鋸)
 図版第72 古式土師器(1)
 図版第73 古式土師器(2)
 図版第74 古式土師器(3)
 図版第75 古式土師器(4)
 図版第76 古式土師器(5)・小型仿製鏡
 図版第77 奈良時代の土器
 図版第78 奈良時代・平安時代の土器

舟戸北地区

- 図版第79 弥生土器(1)
 図版第80 弥生土器(2)

- 図版第81 弥生土器(3)・SD86240出土石器
図版第82 古式土師器(1)
図版第83 古式土師器(2)
図版第84 古式土師器(3)
図版第85 奈良時代・鎌倉時代の土器
図版第86 近世陶磁器類(1)
図版第87 近世陶磁器類(2)
図版第88 近世陶磁器類(3)

岡安地区

- 図版第89 弥生土器(1)
図版第90 弥生土器(2)

志高遺跡発掘調査報告書

はじめに

志高遺跡は、舞鶴市志高に所在する。建設省近畿地方建設局が計画した由良川改修工事に先立って、舞鶴市教育委員会が試掘調査を行ったのち、昭和55年度から昭和57年度にかけて3次にわたる発掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期から明治時代にかけての複合集落遺跡であることが知られている。

当調査研究センターは、やはり同工事の事前調査として舞鶴市教育委員会の後を継いで、昭和59年度(第5次調査)から昭和61年度(第7次調査)にかけて、現地での発掘調査を行った。また、昭和62年度・昭和63年度は、整理作業及び報告作業を行った。なお、調査等の体制は以下のとおり^(注1,注2)である。

第5次調査(昭和59年度)

調査期間 昭和59年10月5日～昭和60年3月27日

調査地区及び調査面積 舟戸地区・約2,200m²

調査体制

発掘調査総括責任者	事務局 長	荒木 昭太郎
発掘調査責任者	調査課 長	堤 圭 三 郎
発掘調査事務責任者	総務課 長	白 塚 弘
発掘調査担当者	主任調査員	辻 本 和 美
	同 調 査 員	岩 松 保

第6次調査(昭和60年度)

調査期間 昭和60年5月30日～昭和61年3月20日

調査地区及び調査面積 舟戸地区・約2,400m²

調査体制

発掘調査総括責任者	事務局 長	荒木 昭太郎
発掘調査責任者	調査課 長	堤 圭 三 郎
発掘調査事務責任者	総務課 長	白 塚 弘
発掘調査担当者	主任調査員	長 谷 川 達
	同 調 査 員	山 下 正
		肥 後 弘 幸

第7次調査(昭和61年度)

調査期間 昭和61年4月17日～昭和62年3月20日

調査地区及び調査面積 舟戸地区・1,750m²

岡安地区・1,750m² 計3,500m²

調査体制

発掘調査総括責任者	事務局 長	荒木 昭太郎
発掘調査責任者	調査課 長	堤 圭三郎 中谷 雅治
発掘調査事務責任者	総務課 長	白塚 弘 中西 和之
発掘調査担当者	主任調査員	長谷川 達人 小山 雅人
	同調査員	三好 博喜 肥後 弘幸 鍋田 勇

昭和62年度整理作業

整理作業体制

整理作業総括責任者	事務局 長	荒木 昭太郎
整理作業責任者	次 長	中谷 雅治
	調査第2課 長	杉原 和雄
整理作業事務責任者	総務課 長	田中 秀明
整理作業担当者	調査第2課調査第1係 長	辻本 和美
	同調査員	肥後 弘幸
	調査第2課調査第2係 長	水谷 寿克
	同調査員	三好 博喜
	調査第2課調査第3係 長	小山 雅人
	同調査員	岩松 保

昭和63年度整理作業

整理作業体制

整理作業総括責任者	事務局 長	荒木 昭太郎
整理作業責任者	次 長	中谷 雅治
	調査第2課 長	杉原 和雄

整理作業事務責任者	総務課長	田中秀明
整理作業担当者	調査第2課調査第1係長	辻本和美
	同調査員	肥後弘幸
	調査第2課調査第3係長	小山雅人
	同調査員	岩松保
		三好博喜

- 注1 以下の方々に御指導・御教示を得た。記して感謝の言葉にかえたい(敬称略)。
赤澤徳明, 魚谷鎮弘, 井守徳男, 石野博信, 泉 拓良, 片岡 肇, 堅田 直, 久保弘幸, 小竹森直子, 近藤義郎, 崎山正人, 杉本嘉美, 妹尾周三, 種定淳介, 都出比呂志, 土肥 孝, 富山正明, 中村孝行, 西尾克巳, 宮本一夫, 森 浩一, 和田晴吾
- 注2 大阪市立大学学生岸岡貴英・花園大学学生田中央生の両君には, 数年間にわたって現地発掘調査, 整理作業等で協力を得た。また, 多数の地元の方々には, 作業員・整理員・調査補助員として発掘調査に参加していただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

第1章 志高遺跡の概略と環境

第1節 志高遺跡の概略

志高遺跡は、近畿北部最大の河川由良川下流域の自然堤防上に立地する集落遺跡である。国内の多くの大河川は、下流域から河口にかけて広大な沖積平野を形成し、人々は、弥生時代以降肥沃な大地をもとめて生活を営み続けている。ところが、由良川をはじめとするいくつかの河川は、狭い谷合い部を緩やかに流れ、河口付近に至るまで顕著な平野は発達しない。このような河川の下流域では、大きく蛇行するところではしばしば洪水をもたらす土砂によって自然堤防を形成する。人々は、古代からこの自然堤防の上で生活を営むことになる。由良川における志高遺跡も、こうした例の一つで、発掘調査の結果、ここでは縄文時代早期から明治に至るまでの遺構や遺物が見つかった(本章第2節)。

志高遺跡の特色の一つとして、遺構・遺物が6.5mにも及ぶ堆積層の中に求められることである(舟戸南地区)。縄文時代早期の遺物包含層は、地表下6.5m、標高0.0m付近に存在し、縄文時代前期の遺構面や包含層は、標高1m前後に存在する。また弥生時代中期の包含層と遺構面は、標高4.0m付近に存在し、これより上面に、古墳時代・奈良時代・平安時代と包含層・遺構面が順次堆積している。さらにその上には、平安時代の洪水層が存在し、その上に中世・近世の包含層と続き地表面に至る(第2章)。

縄文時代早期末(約7,000年前)から前期末(約5,000年前)にかけての遺構及び包含層が見つかったのは、舟戸南地区内の第7次調査A地区である。約2,000年に及ぶ堆積は、厚さ約2mにもなる。包含層が残っていたのは、ごく小さな面積に限られ、周囲は由良川の流れによって失われている。調査で見つかったのは、竪穴式住居跡と考えられる穴(土坑)2基と、6基の炉跡及び多量の遺物(土器・石器・石製品・獣骨等)である。土器は、縄文時代前期に多く見られる竹管文で飾られている。近畿地方でこれだけまとまってこの時期の遺



第1図 志高遺跡と京都府北部の主要集落遺跡

1. 志高遺跡 2. 石本遺跡 3. 青野遺跡
4. 竹野遺跡 5. 扇谷遺跡 6. 途中ヶ丘遺跡

物が出土したのは、ほとんどはじめてである。土器以外にも多数の石器と当時の耳飾り(球状耳飾り)等の装飾品も出土している(第3章第2節)。

縄文時代中期には、志高遺跡における空白期で、この時期の遺物は、現段階では見つからないが、縄文時代後期に関しては舞鶴市教育委員会が行った第4次調査で土坑等が見つかり、付近に集落があったことを暗示している。当調査研究センターが行った調査でも弥生時代の溝や包含層内からこの時期の遺物が出土している(本章第3節・第3章第2節・第4章第2節)。

弥生時代に入ると、志高遺跡の様相はかなり克明にわかってくる。弥生時代前期は、日本に本格的な農耕(稲作)が導入される時代である。志高遺跡にも比較的早い時期に弥生文化が入ってくる。舞鶴市教育委員会が行ったカキ安地区における第3次調査では、この時期と考えられる多数の柱穴群が見つかり、多数の竪穴式住居跡が存在していたことを窺わせる。本報告の調査地内でも遺構は検出できなかったものの、遺物は出土している。

弥生時代中期において、志高遺跡は飛躍的に発展するようである。カキ安地区における第3次調査地区から、舟戸南地区の第7次調査B地区にかけて集落遺跡が広がっている(地区については第20図参照)。その総延長は約500mである。その集落は、居住域(検出住居跡11基)を中心に大溝を挟んで方形周溝墓群が、自然河川を挟んで貼石墓群が存在するという配置をとる。出土した遺物は、第5～7次調査分だけでも整理箱約600箱に及ぶ。遺物の種類は、弥生土器をはじめ多量の石器類(石鏃・石斧・砥石・石皿等)及び石製品(磨製石剣・管玉)等である。特に、竪穴式住居跡の床下の柱穴から半截された磨製石剣が埋納されたような状態で出土しているのは、興味深い資料である(第3章第3節・第4章第2節)。

弥生時代後期になると、集落は移転する。舟戸地区からは姿を消し、岡安地区に新たに集落が営まれる。岡安地区では、竪穴式住居跡1基と掘立柱建物跡数棟が見つかり、由良川下流域の志高遺跡周辺にもこの時期の集落が営まれるようになり、後期に入ると中期の大集落の解体とともに、周辺に集落が分散してしまう可能性も指摘できる。墓も平地に営まれるのとは別に丘陵上にも造られるようになったらしく、由良川を見降ろす丘陵上にこの時期の墳墓(シゲツ墳墓群4号墓・水無月山遺跡)が見つかり(第5章第2節)。

古墳時代前期になると、本報告の調査地内では、岡安地区を除いては、竪穴式住居跡等の顕著な遺構は見つからないが、調査地全域にわたって土坑・溝等が散発的に存在している。遺物も数多く出土しており、特にこの時期に埋まってしまう自然河川の川岸部では、ほぼ完形の土器が多数出土している。土器以外に特筆すべきものとしては、包含層内から出土した小型仿製鏡がある。岡安地区では古墳時代前期後半の集落(竪穴式住居跡2

基)が検出されている。周辺には、住居跡の検出された花ノ木遺跡(志高遺跡第2次調査で検出されたものであるが、その立地から志高遺跡とは別の遺跡とする)やシゲツ墳墓群が存在する(第2章第3節・第3章第4節・第4章第3節・第5章第3節)。

古墳時代後期の遺構はあまり顕著ではない。この時期と考えられる遺構が、舟戸南・舟戸北の両地区から見つかっているが、遺構の残りが悪く遺物も少ない(第2章第3節・第3章第4節・第4章第3節)。

飛鳥時代から奈良時代中頃にかけての竪穴式住居跡が、舟戸南地区の第7次調査A地区付近で11基見つかっている。方形もしくは長方形の平面形を持ち、隅部付近に造り付けのかまどを持つものが多い。建物の方位は計画性がある。岡安地区でもほぼ同時期の竪穴式住居跡が検出されている(第3章第5節・第4章第3節)。

奈良時代にはいと、舟戸南地区では前述の竪穴式住居が掘立柱建物に建て替えられる。建物跡は20棟以上確認でき、建物跡の方位や検出面の違いから大きく2時期に分けることができる。倉庫群を伴う整然とした配置の建物群である。この建物群は、平安時代の洪水によって廃絶する。なお、第3次調査地区内でも同時期と思われる掘立柱建物跡群が見つかっている(本章第3節・第3章第6節・第4章第3節)。

志高遺跡では平安時代以降も集落が営まれ続けるようであるが、顕著な遺構が検出できていないため、その様相は不明確である。奈良時代の遺構面から中世の柱穴群が見つかっている。なお、第3次調査でも多数の柱穴群が見つかっている。出土遺物としては、前時代に比較して土錘の出土が目立つ。舟戸北地区内の第7次調査B地区で、3基の土壙墓が見つかっており、そのうちの1基からは中国南宋時代の龍泉窯産の青磁碗が出土している。京都府北部でこのような青磁碗が完全な形で出土したのはほかに例がなく、当時の志高の地に有力者がいたことを窺わせる(本章第3節・第3章第7節・第4章第5節)。

志高遺跡が終焉を迎えるのは、明治40年に由良川流域を襲った大洪水である。この洪水の後、自然堤防上にあった集落は、すべて周辺の谷あいや山麓に移転する。志高遺跡の調査では、江戸時代後期以降の集落跡が各地区で見つかっている。特に舟戸北地区内の第5次調査では、近世の遺構が多く見つかっており、遺物も陶磁器をはじめ豊富である。また、舟戸南地区内における第6次調査では、墓地も見つかっている(第3章第8節・第4章第6節)。そして明治40年以降志高遺跡は、肥沃な畑地となり現在に至る。

(肥後 弘幸)

第2節 志高遺跡の地理的環境と歴史的環境

第1項 地理的環境と由良川下流域の自然堤防上の集落遺跡

志高遺跡は、京都府舞鶴市字志高に所在し、由良川の河口から約10km上流の左岸、自然堤防上に立地する複合集落遺跡である。現在の自然堤防の高さは標高6.5mである。

由良川は、京都府北桑田郡美山町に源を發し、大小100余りの支流を併合せながら、146kmを流れ、日本海若狭湾に注ぐ。その流域面積は1,880km²(京都府約1,680km²・兵庫県約200km²)にも及ぶ。由良川は、円山川と江川とともに山陰型河川の特徴を示し、その中流域では、綾部盆地・福知山盆地等の小平野を形成するものの、下流域では平野を形成しない^(注1)。下流域においては、狭い谷を極めて緩やかに流れる。降雨量の多い季節には、上・中流域の広大な流域面積からもたらされる多量の水がこの狭い谷部に押し寄せるため、しばしば大洪水を引き起こす。その結果、由良川の蛇行の凹面に沿って、水とともに運ばれた土砂による狭長な自然堤防を形成している。その規模は、蛇行の波長に一致するほど長いが、幅は最下部で100~200mを測るだけである。これらの自然堤防は、洪水による浸食(時には決壊する)と堆積を繰り返して現在に至っている。

前述したように、由良川下流域においては、顕著な平野を形成しないために、古代から人々の生活基盤がこのような自然堤防上に求められてきたようである。自然堤防上には志高遺跡をはじめとして、数多くの集落遺跡の存在が窺える。第2図は、下流域における集落遺跡の位置と、付近の由良川の水面の高さを示したものである。

由良川には、もうひとつ他の河川にはない特徴がある。由良川は、瀬戸内海に注ぎ込む加古川とともに日本一低い分水界、中央分水界を形成し、兵庫県氷上郡氷上町石生で標高95mの日本一低い分水嶺を形成する。すなわち、交通の不便な古代において、加古川を経て由良川に抜けるのが瀬戸内海から日本海側に抜けるための最も容易なルート(『由良川・加古川の道』)となっていたと考えられる。後述するように、弥生時代中期においては土器の器形や文様は播磨地方の影響を強く受けており、銅剣形石剣の分布と重なるために『石剣の道』とも呼ばれている。



第2図 由良川下流域の集落遺跡

また、由良川下流域は、日本海文化圏内に位置する。その風土は、いわゆる山陰型の風土であり、また、隣接する北陸型の風土でもある。志高遺跡で見つかった縄文時代前期の土器様相は、福井県鳥浜貝塚の様相と近似するし、弥生時代中期後葉の方形貼石墓の分布は、志高遺跡を南限とし、丹後半島に中心がある。弥生時代後期の土器の様相は丹後半島とほぼ等しく、また、その様相は山陰・北陸に共通する点が多々ある。

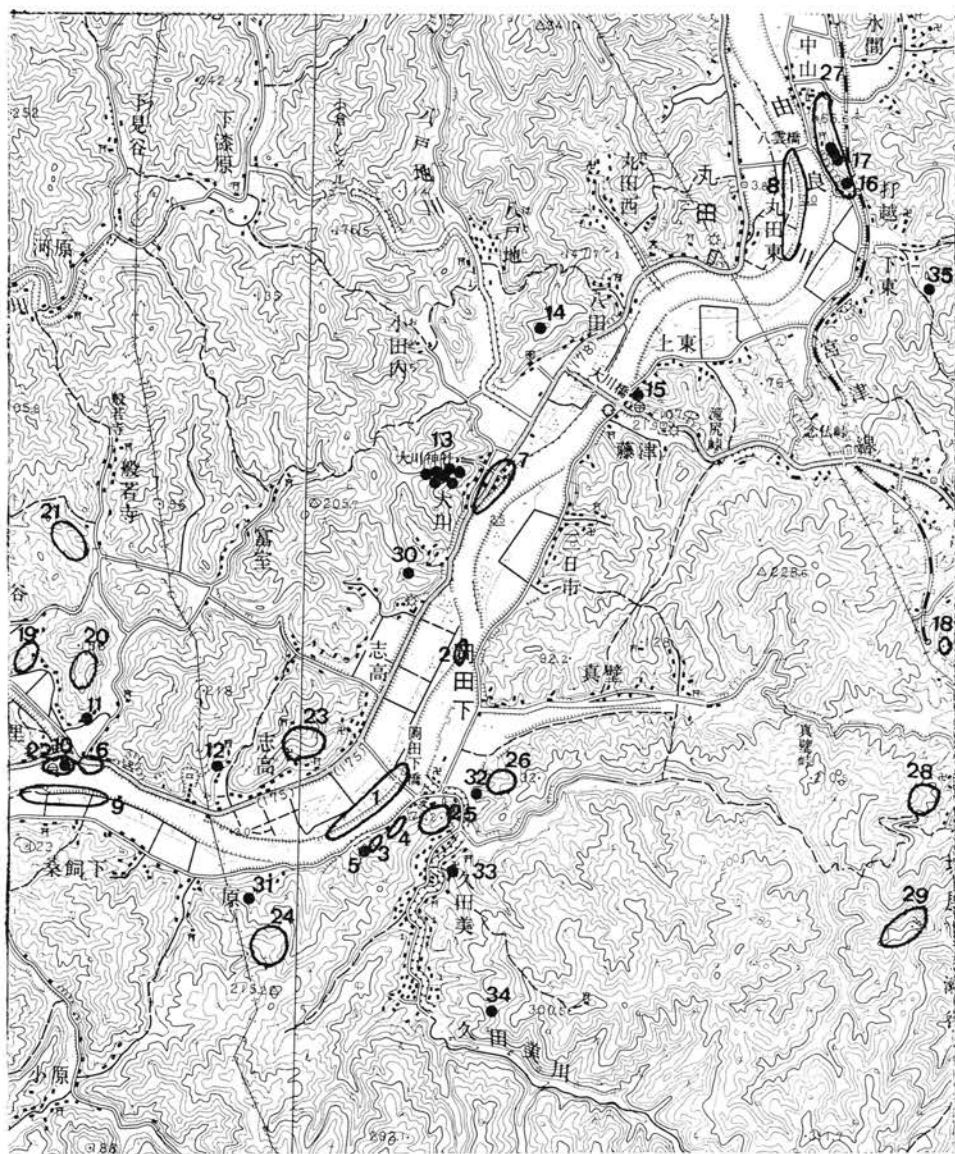
第2項 歴史的環境

第3図は、志高遺跡を中心とした周辺の遺跡分布地図で、舞鶴市教育委員会の作成したものを基本として作成したものである。この内、実際に発掘調査が行われてその様相が解明されているものは、中山城跡^(注2)・大川遺跡^(注3)・花ノ木遺跡^(注4)・シゲツ墳墓群^(注5)・シゲツ窯跡^(注6)・水無月山遺跡^(注7)・桑飼下遺跡^(注8)・桑飼上遺跡^(注9)・林溪寺裏山遺跡^(注10)である。由良川の河川敷上の他の遺跡は、川底の砂利採集時に遺物が多量に採集されたところである。^(注11)

縄文時代の遺物は由良川河床から多く出土しており、遺跡数はかなりの数を数える。^(注12)今まで発掘調査が行われているのは、桑飼下遺跡・三河宮ノ下遺跡・志高遺跡の3か所である。昭和48年に調査された桑飼下遺跡では、縄文時代後期の炉跡48基をはじめとする集落跡が検出されている。出土した縄文土器は、渡辺 誠氏により、桑飼下式が提唱されている。特筆すべき遺物としては、約600点にのぼる打製石斧がある。やや上流に位置する加佐郡大江町の三河宮ノ下遺跡では、縄文時代後期の住居跡が検出され、丹後で類例のない土偶の頭部が出土している。ほかに周辺の遺跡として、前期・中期・後期の遺物が採集されている地頭遺跡がある。

発掘調査の行われている弥生時代の遺跡は、大川遺跡・花ノ木遺跡・シゲツ墳墓群・水無月山遺跡・桑飼下遺跡・桑飼上遺跡である。この内、大川遺跡・桑飼下遺跡では遺物が数点出土しているにすぎない。花ノ木遺跡では後期の遺物が比較的多く出土しており、集落跡の存在する可能性が高い。現在調査中の桑飼上遺跡では、広範囲にわたって後期の遺物が出土しており、近い将来集落の様相が判明すると思われる。シゲツ墳墓群・水無月山遺跡はともに後期前半の墳墓群で、由良川下流域における弥生時代後期の墓制を知ることができる。ほかに石剣・石庖丁・磨製石斧が採集されている地頭遺跡がある。

古墳時代の集落遺跡として知られているのは、花ノ木遺跡・桑飼下遺跡・桑飼上遺跡で、いずれも竪穴式住居跡が検出されている。古墳は現在のところ集落に比べて知られている数が少ない。シゲツ墳墓群の調査で、この地域においてもほとんど墳丘を持たない古墳の存在が判明したので、舞鶴市教育委員会が現在行っている分布調査によって、その数が倍増することが予想される。



第3図 志高遺跡周辺の遺跡

- | | | | | |
|------------|-------------|--------------|------------|------------|
| 1. 志高遺跡 | 2. 花ノ木遺跡 | 3. シゲツ墳墓群 | 4. シゲツ東墳墓群 | 5. シゲツ窯跡 |
| 6. 岡田由里遺跡 | 7. 大川遺跡 | 8. 八雲遺跡 | 9. 桑飼下遺跡 | 10. 水無月山遺跡 |
| 11. 枝宮古墳 | 12. 葉師谷古墳 | 13. 徹光山古墳群 | 14. 八田古墳 | 15. 藤津古墳 |
| 16. 打越古墳 | 17. 中山1～3号墳 | 18. 城屋窯跡 | 19. 岡田由里砦 | 20. 荒張城跡 |
| 21. 岡田由里城跡 | 22. 水無月山城跡 | 23. 志高城跡 | 24. 原城跡 | 25. 久田美城跡 |
| 26. 土穴城跡 | 27. 中山城跡 | 28. 城屋城跡 | 29. 城屋別城跡 | 30. 小津田経塚 |
| 31. 五輪塔 | 32. 久田美遺跡 | 33. 林溪寺裏山中世墓 | 34. 宝篋印塔 | 35. 宝篋印塔 |

奈良時代の遺跡はあまり知られていないが、大川遺跡・桑飼上遺跡等が上げられる。特に、桑飼上遺跡では大規模な掘立柱建物跡群が見つかりつつある。

平安時代以降の遺跡としては、中世以降の山城が数多く知られているほかに、蔵骨器が出土した林溪寺裏山遺跡や久田美遺跡の宝篋印塔などがある。 (肥後 弘幸)



久田美遺跡宝篋印塔

第3節 昭和58年度以前の調査

志高遺跡の発掘調査のうち、舞鶴市教育委員会が調査主体となって実施した、昭和55年度から58年度にかけての調査について、その概要を年度ごとに記述する。

(1) 昭和55年度の調査^(注13) 昭和55年度の河川改修計画地の志高小字浅・上境地区を対象に、昭和55年11月20日、約350mの間に長さ30m・幅3mの試掘トレンチ6本を由良川に直交するように設定して実施した。トレンチのうち、下流側の3本は77m間隔、上流側の3本は46m間隔として、重機により由良川水面と等しい深さになるまで掘り下げて、土層の状態や遺物包含層の有無を観察した。その結果、いずれのトレンチにおいても地表下約2.5mまでは、比較的新しい時期に堆積したと思われる暗茶灰色～茶褐色の砂質土あるいは細砂質土が、その下層には茶褐色～暗灰色の粘性土がみられ、遺物包含層については全く認められなかった。しかし、改修工事の終了後、最上流部の掘削崖面において古墳時代の土師器片等が採集されたことから、56年度改修計画地における遺跡の存在が予想されることとなった。

(2) 昭和56年度の調査^(注14)(第4・5図) 昭和56年度の改修計画地となった、志高小字花ノ木地区、上流部のスド口・菽下地区、右岸の久田美地区、さらに57年度の改修計画地である志高小字カキ安地区について試掘調査を実施した。

スド口・菽下地区は、志高自然堤防の最上流部にあたり、総延長約500m・幅80mの南北に長い地区である。調査は、由良川に直交する幅3mのトレンチを50m間隔で計10本と、他に3か所にグリッドを設定して行った。それぞれのトレンチ・グリッドを、重機により約2.5～3m掘り下げて調査したが、いずれも地表面より黄褐色あるいは灰褐色の砂層が続くだけで、遺物包含層を確認することはできなかった。

久田美地区は、志高地区と由良川をはさんだ右岸に位置する。この地区の自然堤防は左岸と比較すると、2～3m低く、標高2～3mである。調査は5m四方のグリッドを9か所設定し、重機によって2～3m掘り下げて行った。その結果、第7グリッドにおいて、地表下約2.5mから江戸時代後期の水田跡と畔跡を検出した。水田には人間の足跡が数多く残されていたほか、畔には土留用の丸杭が打ち込まれていた。そしてこの畔は、現在の地表に至るまでその位置を変えることなく継承されてい



第4図 花ノ木地区竪穴式住居跡1・2



第5図 昭和56年度花ノ木地区遺構図

た。

花ノ木地区では、約60mにわたる崖面観察によって遺物包含層が由良川に近い部分だけに分布していることが判明したことから、その部分を中心に600m²について発掘調査を行った結果、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構や遺物を検出した。

他の地点については、4か所にトレンチを設定したが、包含層は確認できなかった。

弥生時代中期の遺構としては調査地の北東端で方形周溝墓の一部を検出したが、西辺溝と北辺溝の一部しか残存しておらず、大半が由良川に

より削られていた。西辺の長さ9.5m・溝幅60cm・深さ50cmを測り、溝中から供献土器とみられる壺1点が出土した。壺はその特徴から畿内第Ⅲ様式併行期に属するもので、畿内から広まった方形周溝墓が、弥生時代中期には由良川下流域で採用されていたことを窺わせる資料となった。

弥生時代後期の遺構としては、55年度改修工事により生じた長さ約60mの崖面を精査したところ、南北方向の旧河道の東岸を検出した。調査トレンチの西半部が岸となり、西側

へ落ちこんでいく地形である。旧河道の底付近から東岸への立ち上がり部で、弥生時代後期後半の土器群が出土した。この旧河道の西岸は崖面でも確認できず、その幅は60m以上ということになる。旧河道を埋めているのはすべて砂層であり、その最上層には暗灰色のシルト層が水平堆積していた。このシルト層から出土する遺物は、古墳時代前期の布留式併行期の土器であることから、旧河道は古墳時代前期にはその機能を失ったことになる。

竪穴式住居跡 6 東西6.0m・南北4.9m、現存する壁高50cmを測る隅丸長方形の住居である。流路2に北西部を削られていることから、この住居は、旧流路が埋没する以前に営まれたものと推定され、その時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

古墳時代前期になると、旧河道が埋没した後は、東岸に沿って幅10m・深さ50cmの浅い流路2が残ったが、その流路も前期のうち完全に埋まり、その上に5基の竪穴式住居が営まれた。5基のうち3基については壁が検出できず、炉跡だけを確認したものである。

竪穴式住居跡 1・2 どちらも由良川によって東辺が削られているが、1は一辺3.8mの方形プランで壁は10cm余り残っていた。床面中央やや西よりに炉跡とみられる焼土が広がっていた。2は一辺5.3m、壁の現存高20cmを測る。炉跡は検出されなかった。

竪穴式住居跡 3・4・5 いずれも床面と炉跡だけが残存していたもので、3の炉跡近くから土器が出土している。

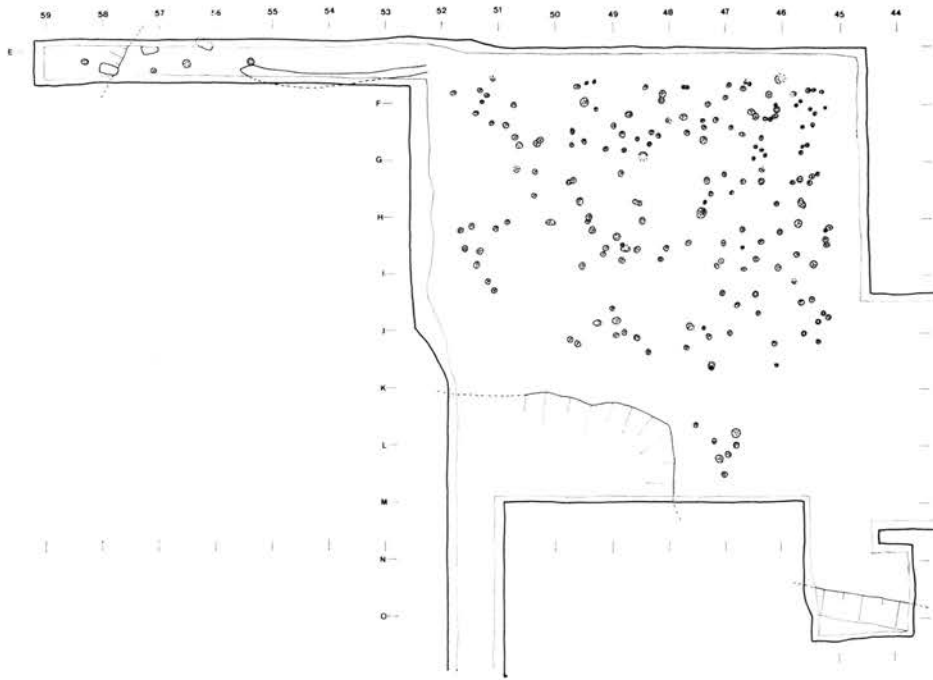
以上が昭和56年度の調査概要であるが、上流部の志高遺跡と約500mも離れていることから、この遺構群を花ノ木遺跡とした。

(3) 昭和57年度の調査^(注15)(第6図～第15図) 昭和56年度に実施したカキ安地区の試掘調査の結果、弥生時代～平安時代にかけての遺物包含層が確認されたのをうけ、まず遺跡の西端を確認するため650m²の調査区を設定し、ついで3,080m²の本調査区を設定した。調査は、西部の2,650m²については弥生時代の包含層上面まで、中央部の540m²については古墳時代

の包含層上面まで、東部の540m²については平安時代包含層上面まで、それぞれ重機によって掘り下げを行った。その結果、縄文時代後期～弥生時代前期のピット群、弥生時代中期の竪穴式住居跡と方形周溝墓群、古墳時代前期の竪穴式住居跡群と方形周溝墓群、古墳時代後期の竪穴式住居跡群、奈良時代後期～平安時代前期の掘立柱建物跡群、平安時代後



第6図 カキ安地区弥生時代前期ピット群



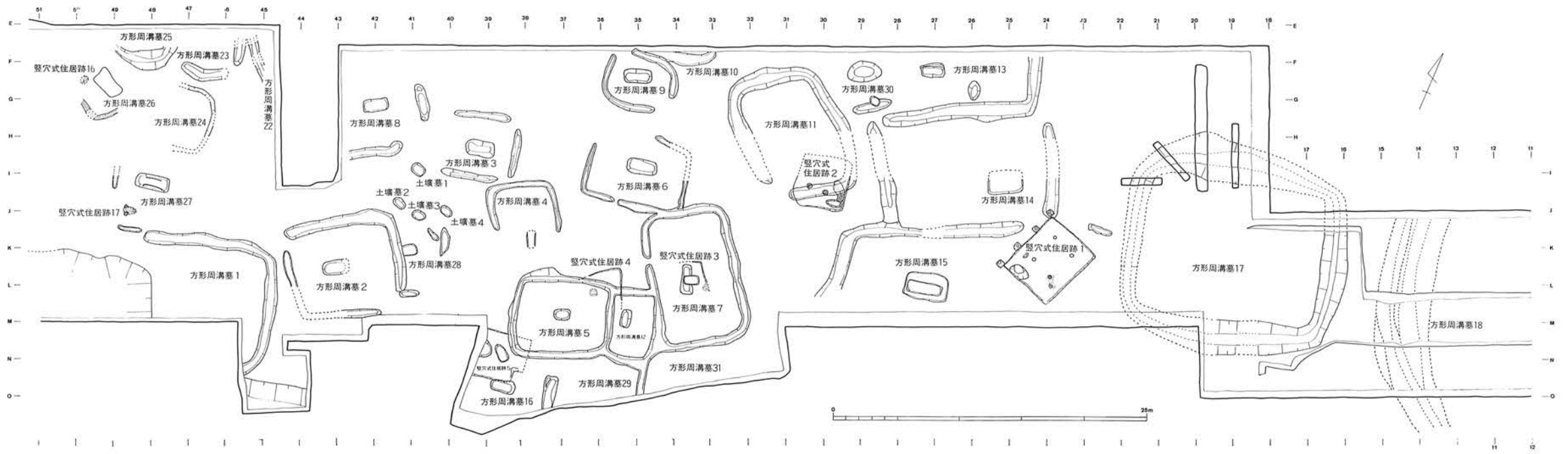
第7図 昭和57年度カキ安地区縄文時代後期・弥生時代前期遺構図(Scaleは第8・9図と同じ)

期～江戸時代の掘立柱建物跡群等を検出することができた。

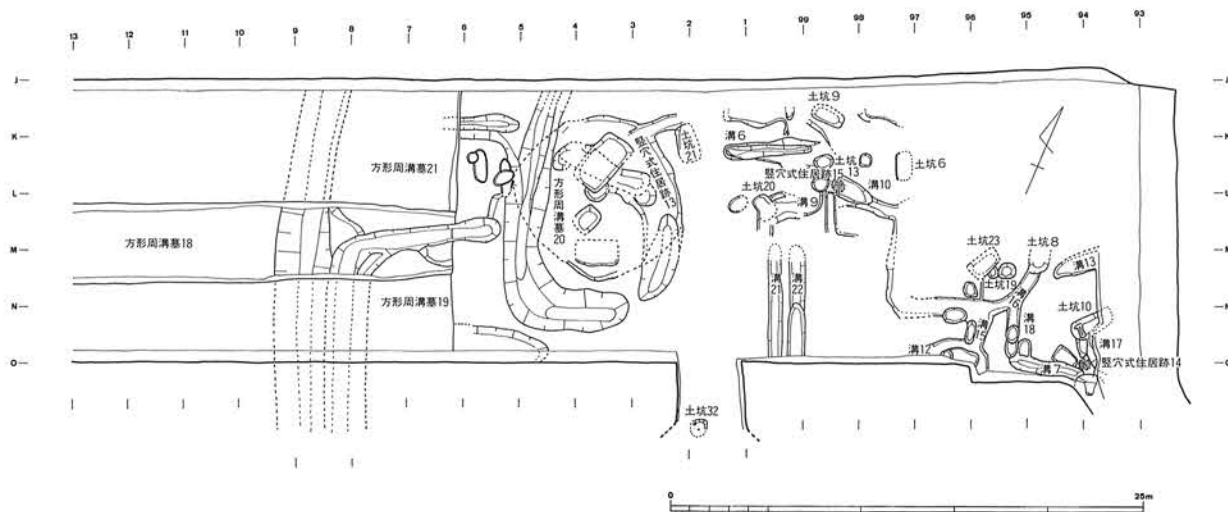
縄文時代後期～弥生時代前期 調査地の西部を中心に、地表下2.1m・標高3.9mのところで数百にのぼるピット群を検出した。ピットの大きさは、直径20～30cmの円形で、深さは10～40cmを測る。これらのピットの性格については、その埋土中から弥生時代前期の壺や、縄文時代のもともみられる打製石斧等が出土していることから、竪穴式住居の柱穴あるいは植物の根茎等を掘った穴とも考えられる。出土した弥生時代前期の壺は、沈線文をもつもの、削り出し突帯上に沈線文をもつもの、貼り付け突帯をもつものなどがあるが、貝殻施文のものはみられない。弥生時代前期の遺構に伴う資料については、由良川流域初の出土例であり、弥生文化の伝播過程を究明していく上で貴重な資料となった。

また、調査地の西端部で3基の土坑を検出したが、うち1基からは、縄文土器片が出土したほか、包含層中からも縄文土器や、打製石斧片が出土している。縄文土器は、沈線文や、条痕文をもつ縄文時代後期のものであった。これらのことから、付近に集落跡が存在する可能性は十分にあるものと考えられる。

弥生時代中期 地表下1.9m・標高4.1mのところで、調査地の全域に広がる方形周溝墓群を検出した。主体部を確認できたものから、溝の一部のみ検出したものまで含めると、その数は30基をこえるが、遺物を伴うものが少なく、すべての方形周溝墓について時期を



第8図 昭和57年度カキ安地区弥生時代・古墳時代遺構図(1)



第9図 昭和57年度カキ安地区弥生時代・古墳時代遺構図(2)

確定できなかった。そのうち、弥生時代中期の遺物を伴うものは、1号・2号・11号・13号・14号・15号・17号・18号・19号・20号・21号の方形周溝墓があげられる。

方形周溝墓2 長辺8m・短辺7mの長方形で、周囲に幅1m・深さ45cmの溝がめぐり、北西及び南東コーナーは溝が切れて陸橋部となっている。主体部は、長さ2m・幅1m・深



第10図 カキ安地区方形周溝墓群

さ60cmの長方形で、木棺を納めていたと推定される。また、溝の北東コーナー部に溝中埋葬土壇とみられる長さ1m・幅60cm・深さ10cmの土坑を検出している。遺物は、南東部溝と南西部溝のそれぞれ中央部で、供献土器とみられる壺が一点ずつ出土し、その特徴から畿内第Ⅲ様式併行期に比定される。

方形周溝墓11 長辺8.5m・短辺6mの長方形で、幅1～1.4mの溝がめぐり、南東部に陸橋部を残している。主体部については検出できなかった。第Ⅲ様式併行期に比定される。

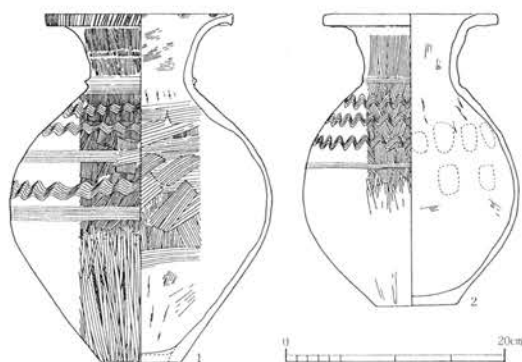
方形周溝墓13・14・15 この3基はそれぞれの溝を共有しながら並んでいる。14号墓は13号墓と15号墓にはさまれる形で、長辺13m・短辺8mを測る。3基ともに主体部を検出したが、15号墓の主体部は、長さ3.5m・幅2.2mの二段墓壇をもち、木棺部は長さ2.7m・幅90cm・深さ15cmを測るものであった。第Ⅲ様式併行期。

方形周溝墓17 長辺14.5m・短辺11mの長方形で、幅2～3m・深さ1.2mの溝をめぐらした群中最大の規模をもつものである。主体部については残念ながら検出できなかったが、南東コーナー部で供献土器とみられる壺が1点出土した。時期は第Ⅲ様式併行期。

方形周溝墓20 竪穴式住居跡13の廃絶後につくられたもので、一辺5mの方形である。溝は、西溝を中心として他の三辺を加えたと考えられ、北西及び南東コーナーに陸橋部をもつ。主体部は、竪穴式住居跡13と重複していたため特定しがたいが、中央部の長さ1.5m・幅1.1mの土坑と、南よりの長さ2.3mの長方形の土坑を主体部と考えたい。遺物は、西辺溝を中心によく出土しており、第Ⅲ様式併行期に比定される。

また、20号方形周溝墓の東部において溝と土坑が複雑に交じりあって検出された遺構についても、方形周溝墓に関連する遺構と推定される。

以上の弥生時代中期に属する方形周溝墓のうち、13号～15号・17号～21号墓についてはその溝が深いことが特徴の一つであるが、その埋土状況を見るといずれの溝についても共



第11図 カキ安地区2号方形周溝墓供献土器

通しているのは、その埋没年代が古墳時代前期であり、数百年間、溝あるいは凹地として残っていたことは非常に興味深いことである。

丹後・丹波地方における弥生時代の墓制をみると、丹後では、前期末に七尾遺跡^(注16)で出現した方形台状墓は、中期には近くのカジヤ遺跡^(注17)などでもみられるようになり、後期になると大山墳墓群^(注18)や帯城墳墓群^(注19)に代表される

ように、丘陵上に集中して築造される。この傾向は古墳時代になっても継続していく。また中期末には丘陵の頂部などを利用した大規模な木棺墓が出現する。主体部は複数あるのが通例で、坂野丘遺跡^(注20)、帯城墳墓群などでみられ、後期～古墳時代前期まで継続する。

一方、丹波においては、前期にまでさかのぼる墓制資料はないが、中期には、南丹波の南金岐遺跡^(注21)、北丹波の宮遺跡^(注22)、石本遺跡^(注23)や、七日市遺跡^(注24)(春日町)、藤岡山遺跡^(注25)(篠山町)などで、方形周溝墓がみられるようになり、丹波地方では方形周溝墓が広く採用されていったことが窺われる。しかし、後期から古墳時代にかけては豊富谷遺跡でみられるように、方形台状墓が丹波にも広がってくる。これは丹後系といわれる後期から古墳時代初めにかけての土器の広がり、その分布を同じくするようにみえる。

志高遺跡の方形周溝墓は少なくとも中期中葉には造営が始まったとみられ、前葉にまでさかのぼる可能性もある。古墳時代初頭まで継続するようだが、対岸の丘陵上に同時期の方形台状墓^(注26)が存在することから、それらとの関係を解明していく必要がある。

竪穴式住居跡13・14 竪穴式住居跡13は、方形周溝墓20に先行してつくられたもので、直径8.5m・壁高20cmの円形住居跡である。柱穴2か所を検出したが、炉跡や壁溝は検出されなかった。竪穴式住居跡14は、調査地の南東隅で炉跡とみられる焼土を検出したほか、その周辺で土器が出土したのみである。時期についてはどちらも第Ⅲ様式併行期に比定される。

弥生時代後期 竪穴式住居跡15は、竪穴式住居跡13の東側で炉跡とみられる焼土と、それに伴う土器を検出したにとどまり、全体の形などは不明である。

古墳時代前期 弥生中期の方形周溝墓群と同じ面で4基の方形竪穴式住居跡と、方形周溝墓を検出したが、住居跡はいずれも残存状態が悪く、全容の判明したものはない。方形周溝墓については、遺物が伴っていて時期のわかったものは方形周溝墓3のみである。

竪穴式住居跡 2 一辺4.2mの隅丸方形住居跡で、三辺を検出した。東辺中央やや南よりに焼土と粘土塊がみられたが、炉跡であるのかカマドであるのかが確定できなかった。出土遺物には布留式併行期の甕と、小型丸底壺がある。



第12図 カキ安地区3号方形周溝墓

竪穴式住居跡 3・4・5 竪穴式住居跡3と4は、北側コーナー部で炉跡とみられる焼土を検出したのみで

ある。竪穴式住居跡5については一辺3.9mの方形プランで、南東コーナー部にカマドをもつものである。いずれも布留式併行期の土器が出土している。

方形周溝墓 3 方形周溝墓8の東側に接してつくられている。それぞれ独立した3本の溝で構成され、長辺5.0m・短辺4.5m・深さ30cm。主体部は中央に1か所だけで、大きさは長さ2.1m・幅1m・深さ50cmを測る。北辺溝から供献土器とみられる壺が出土した。時期は布留式併行期に比定される。

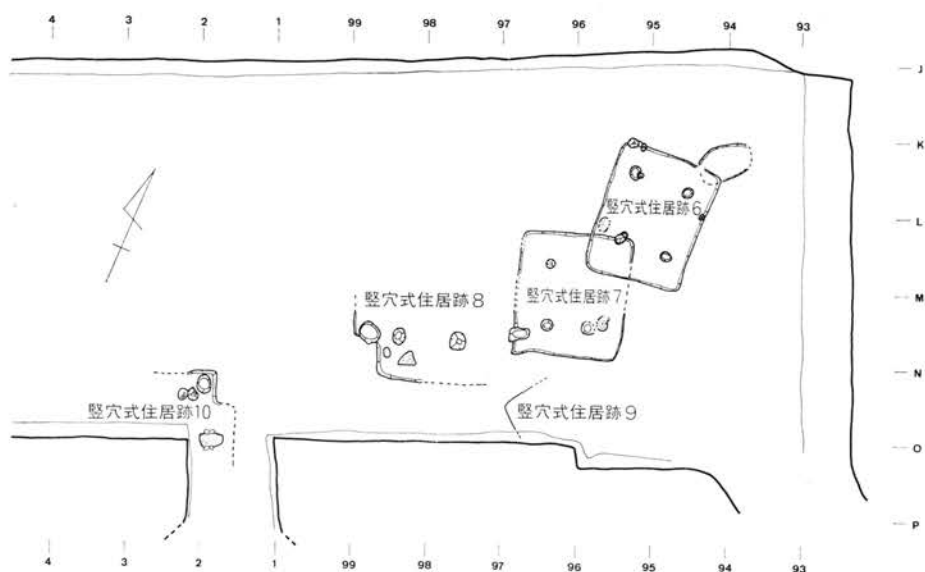
古墳時代後期 前期の住居跡群の東側約100mの付近で6基、西側30mの付近で2基の竪穴式住居跡を検出した。いずれも6世紀前半～7世紀初頭の住居跡である。

竪穴式住居跡 1 長辺5.6m・短辺4.8mの方形プランで、南壁に接して長径1.7m・短径90cmの住居内土坑を有する。南側2本の柱穴脇に焼土がみられた。壁高は15cm余り残っており壁溝がめぐる。西壁外側に掘立柱の柱穴が並ぶことから、竪穴式住居から掘立柱建物に移行した可能性がある。土坑出土遺物から7世紀代の竪穴式住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 6 長辺5.3m・短辺4.1mの方形プランで、壁高10～20cmの壁溝がめぐっている。カマドは西辺中央やや南よりにあり、南辺中央部に長径80cm・短径60cm・深さ20cmの住居内土坑をもつ。また、北西と南東の柱穴脇に1～5cm大の玉ジャリを敷いていた。土坑の須恵器からみて、6世紀末～7世紀初頭に比定される。

竪穴式住居跡 7 長辺4.9m・短辺4.4mの方形プランで、竪穴式住居跡6に先行する住居跡である。壁高5～25cmで東辺中央部にカマドをもつ。時期は6世紀後半。

竪穴式住居跡 8・9・10・11・12 8と10は方形プランであるが、住居の一隅が内側に約0.5～1mはいり込み、その部分にカマドの施設をつくるもので、綾部市青野遺跡や同市綾中遺跡で多く検出例がある。9・11・12についてはカマドまたはコーナー部のみ検出したものである。



第13図 昭和57年度カキ安地区古墳時代後期遺構図(Scale は、第14・15図と同じ)

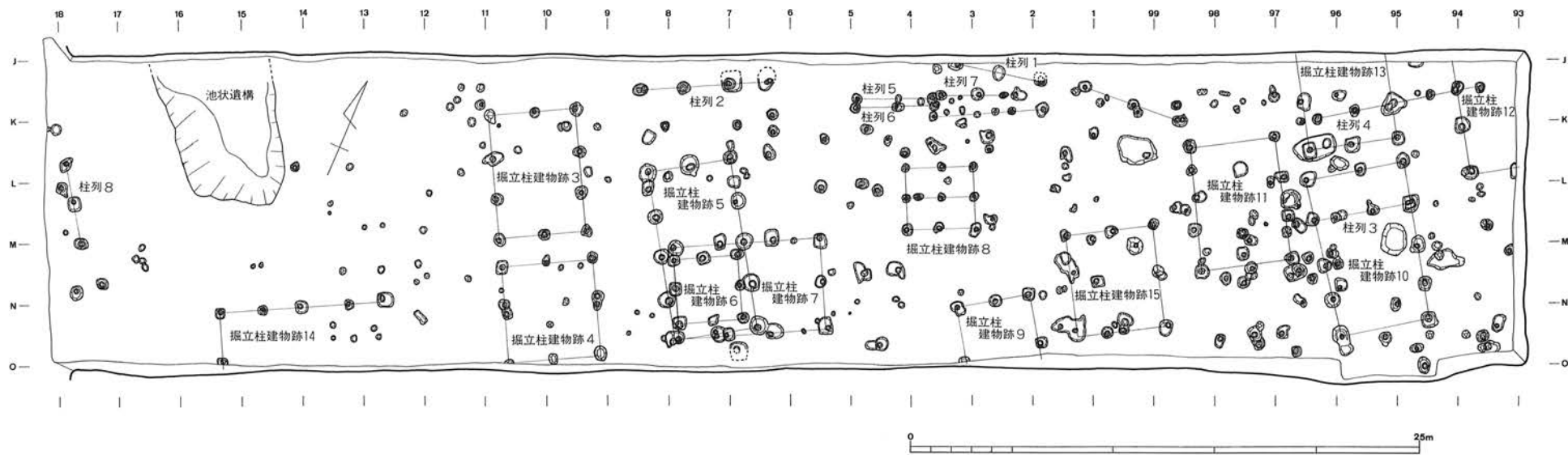
奈良時代後期～平安時代前期 調査地の東半部の地表下1.3m・標高4.8mのところでは13棟の掘立柱建物跡と柱列等を検出した。建物跡には2間×2間の倉庫とみられるものと、3間×2間または4間×2間の住居とみられるものがあり、他に柵とみられるものがある。出土遺物は極めて少ないが、包含層遺物からみて奈良時代後期～平安時代前期の建物群と推定される。

建物跡の柱穴の大きさは30～60cm、掘形は隅丸方形または円形に近いものがある。これらの建物跡群は、棟の方向、配置、重複関係から数グループに分けられる。

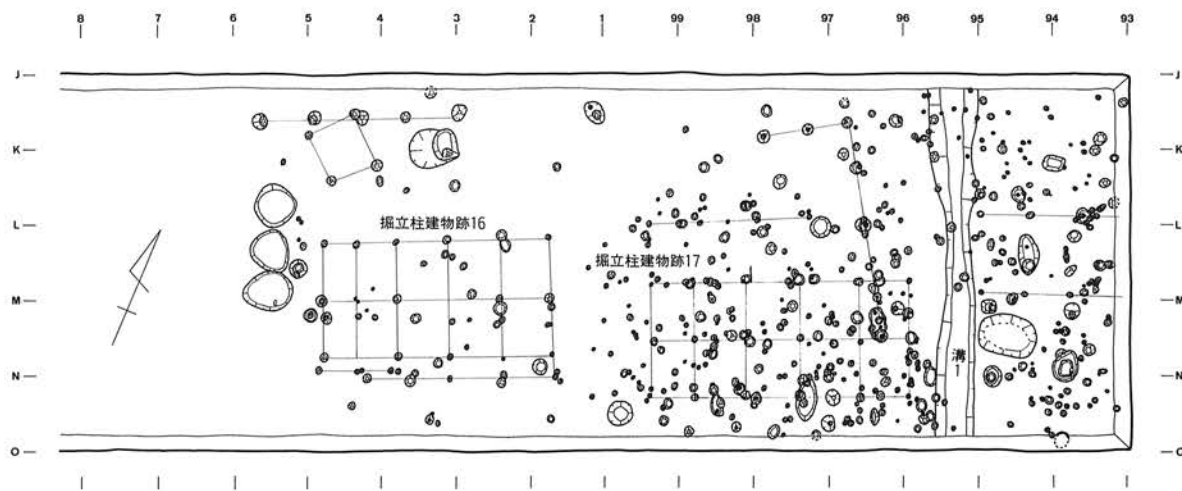
重複関係からみると、(1)掘立柱建物跡5と6と7が、(2)掘立柱建物跡10と柱列3が、(3)掘立柱建物跡13と柱列4がそれぞれ重複しており、(1)については5→6・7、(2)については10→柱列3、(3)については13→柱列4という順に建てられている。

棟方向を方位でみると、南北棟では東へ、東西棟では北へ少し振れており、35°～34°振れた掘立柱建物跡9と柱列3・4、32°～30°振れた掘立柱建物跡5・10・11・12・13・15、28°～27°振れた掘立柱建物跡3・4・6・7・14と柱列2、25°～24°振れた掘立柱建物跡8、柱列5・6・7、12°振れた柱列1の5グループがある。平安時代後期～鎌倉時代に比定される掘立柱建物跡16・17の振り角が20°前後であることから、振り角が大きいほど時期が古いという可能性もあるが、由良川の流路方向によって制約をうけていたことも十分考えられ、一概には断定し難い。

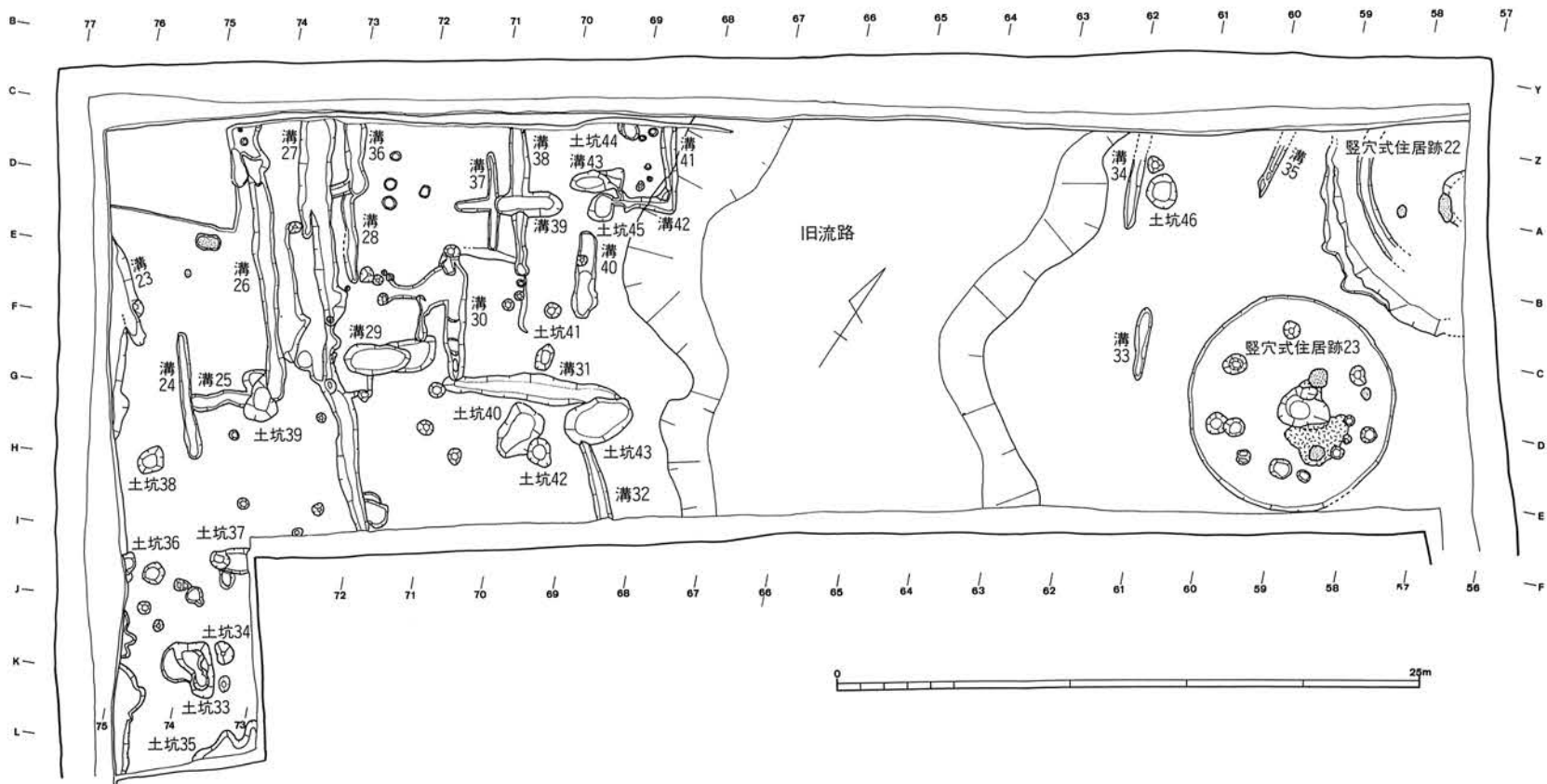
建物配置でみると、3・4・5・6・7・14と柱列2の㊸グループ、10・11・12・13・15の㊹グ



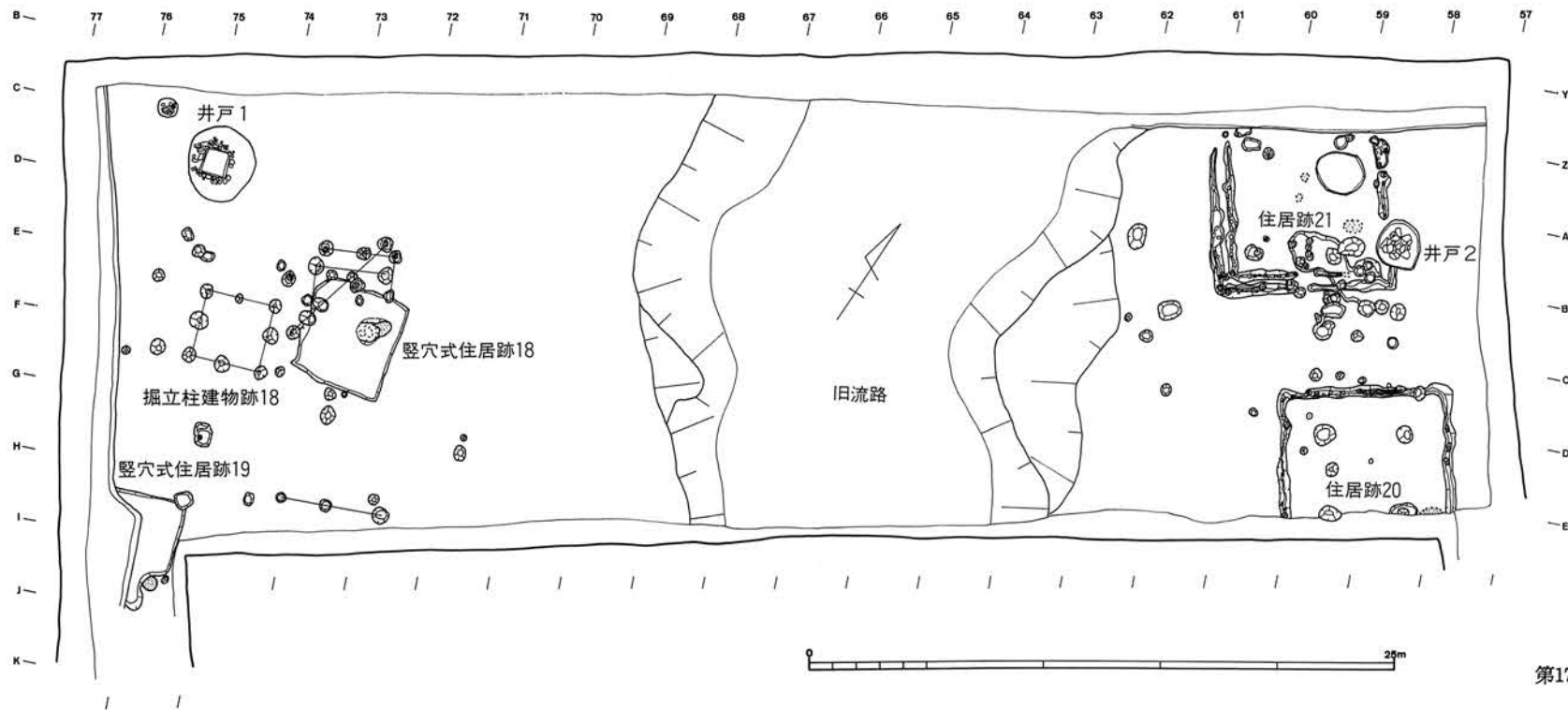
第14図 昭和57年度カキ安地区奈良時代後期～平安時代前期遺構図



第15図 昭和57年度カキ安地区平安時代後期～江戸時代遺構図



第16図 昭和58年度カキ安地区弥生時代遺構図



第17図 昭和58年度カキ安地区古墳時代～奈良時代遺構図

ループ、8と柱列5・6・7の㉔グループがまとまりをもって存在している。このうち、㉔グループの3・4・5と、㉕グループの10・11・13の配置が極めて類似していることに注目したい。これは、それらの建物の性格が同一であったことを示しているのではないかと思われる。

また、掘立柱建物跡3・4・14と柱列8に囲まれた空間には建物の柱穴がなく、幅5m・深さ40cmの池状遺構を検出している。

これらの建物群について、その特徴をあげると、官衙遺構にみられるような正殿的な建物がなく、4間×2間、3間×2間という小規模な建物で構成されていること、しかし、建物配置や棟方向は、何らかの規制をうけているとみられること、建物を画するような溝などの施設がないこと、井戸がみられないことなどである。出土遺物を見ると、公的機関の必需品ともいえる硯や、関連する墨書土器などが出土していないことがあげられる。

これらを総合すると、この建物群は、その配置に規則性が認められることから、公的機関の遺構の一部である可能性も否定できないが、その規模や倉庫からみて、まとまりのある集落と考えるのが妥当なようである。次に記述する掘立柱建物跡16・17とあわせて、文献史料にみえる、「志託郷」^(注27)や「志高荘」^(注28)などとの関係究明が今後の課題であろう。

平安時代後期以降、地表下0.6m・標高5.4mのところで、掘立柱建物跡2棟、柵列、溝、土坑等を検出した。出土遺物からみて、平安時代後期～江戸時代までの遺構である。

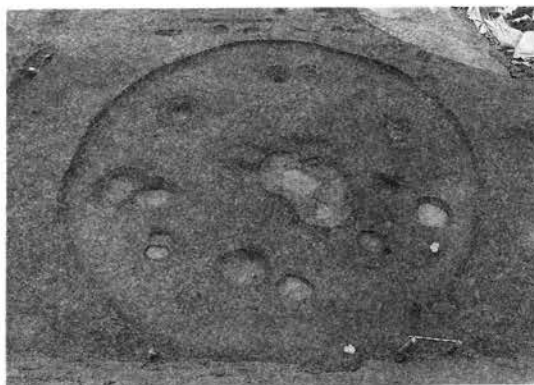
掘立柱建物跡16 桁行5間(9.0m)・梁間2間(4.6m)の総柱の東西棟で、22°北へ振っている。西側の柱間2間分が狭くなっているほか、建物の南側の庇または柵と思われる柱列がある。

掘立柱建物跡17 掘立柱建物跡16と同じく5間(10.8m)と2間(4.6m)の総柱の東西棟で、西側1間分の柱間が狭くなっている。掘立柱建物跡16・17は、平安時代末～鎌倉時代に比定される。

溝1 幅1～2m・深さ20cmの溝である。掘立柱建物跡16・17と方向が同じであることから、区画溝と考えられる。出土遺物から平安時代後期～鎌倉時代に比定される。

昭和58年度の調査^(注29)(第16～18図) 昭和57年度の調査の結果、志高遺跡は縄文時代後期から江戸時代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。その範囲については、西端が長池東側までと確認されたが、東端については全く不明であったために、カキ安地区の東側の舟戸地区・岡安地区について試掘調査を実施するとともに、カキ安地区について前年度に引き続いて発掘調査を実施した。

舟戸・岡安両地区での試掘調査は、長さ500m・幅60mの区間に、60m間隔で由良川に直交するように設定した7本のトレンチのうち、1～4トレンチでは弥生時代中期から中・



第18図 カキ安地区竪穴式住居跡23

近世の遺物包含層を確認したが、5・6トレンチでは旧流跡にあたったとみえ、包含層は確認できなかった。7トレンチでは、西端で、弥生時代後期の包含層を確認したほか、岡田下橋延長工事の際に実施した立会調査によって同時期の遺物を採集した。試掘調査によって、志高遺跡の範囲は、舟戸地区で一部途切れるものの、岡安地区にも広がっていること

が判明し、59年以降も発掘調査を継続していくことになった。

カキ安地区については、由良川に沿って長さ60m・幅20m・1,200m²の範囲で調査を行った。調査方法は、重機によって古墳時代の包含層の上面まで掘り下げ、それ以下を人手によって掘り下げていく方法をとった。その結果、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての旧流路、弥生時代中期の竪穴式住居跡2基、方形周溝墓群、溝、土坑、古墳時代前期～中期の竪穴式住居跡2基、古墳時代後期末の住居跡2基、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、近世の井戸2基を検出した。

弥生時代中期 調査地の中央を南から北へ流れる、幅15m・深さ1.2mの旧流路をはさんで、東側に竪穴式住居跡群が西側に方形周溝墓群が存在する。

竪穴式住居跡22 トレンチの北東隅部で検出した推定直径14mと大型の円形プランの住居跡で、壁の高さが60cmと、残りのよい住居跡である。床面中央に径1m以上の土坑があり、その周囲に2か所の炉跡を検出した。床面から磨製石鏃などの石器をはじめ、畿内第IV様式併行期の弥生土器が出土した。

竪穴式住居跡23 竪穴式住居跡22のすぐ南側で検出した直径9mの円形住居跡で、全容を知ることができた。壁高は20cm前後の残存状態であったが、床面は固くしまっており、中央に長径2.2m・短径1.8mの土坑が掘られていた。この中央土坑に接して2か所の炉跡があり、やや離れてもう1か所に焼土がみられた。柱は6本とみられ、それぞれ直径0.7～1m・深さ約40cmを測る。遺物は第IV様式併行期の弥生土器のほか、磨製石鏃、鉄鏃、石斧などが出土した。

竪穴式住居跡22と23の遺物を比較すると、22がやや古い様相を示しており、先行して建てられたものとみられる。

方形周溝墓群 旧流路の西側で検出したが、単独のものはみられず、いずれも溝を共有

するものである。このため、形の不定なものが多いが、5～6基あるのではないかと思われる。南北方向の溝23・24・26・27・28・30・32・36・37・38・40・41と、東西方向の溝25・29・31・39・42とがある。これらの溝にも短いものと長くのびるものがある。それぞれの溝で構成される区画は、(1) 溝23・25・26, (2) 溝24・25・27, (3) 溝27・29・30, (4) 溝27・31・32, (5) 溝30・31・39, (6) 溝28・37, (7) 溝38・41・42, 計7区画である。また不定形な土坑が多く、一応土壙墓と考えておきたいが、綾部市青野遺跡の土坑群と類似している。溝としたものの中には土壙墓が含まれている可能性もある。これらの溝や土坑から出土した遺物は、第Ⅱ～第Ⅳ様式併行期の土器、管玉、石庖丁、石斧、石鎌、砥石などさまざまなものがある。溝23からは、赤色顔料が固まって出土している。

昭和57年度に調査した方形周溝墓群とはかなり様相が異なっているが、方形周溝墓20の東側でみられた溝と土坑の状況と同じであり、その時期もともに第Ⅱ様式までさかのぼる。

古墳時代中期 旧流路の西側で2基の竪穴式住居跡を検出した。

竪穴式住居跡18 長辺4.4m・短辺4.2mの正方形に近いプランで、床面の東側に炉跡とみられる焼土を検出している。床面近くから、石製勾玉1点と白玉4点が出土した。

竪穴式住居跡19 一辺4.5mの方形プランで、東半部のみ検出した。東南隅は内側に入りこんでおり、その部分にカマドが設けられていたらしく、焼土を検出した。

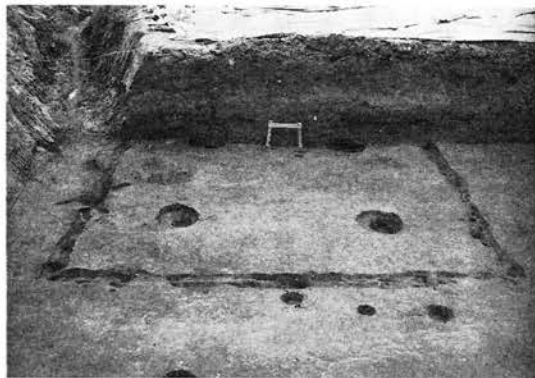
また、旧流路については、この時期にはその機能を失っていたと思われる、その埋土の上層には布留式併行期の土器がみられた。

古墳時代後期末～奈良時代 調査地東部で2基の方形住居跡を、西部で掘立柱建物跡を検出した。

住居跡20 一辺7mの方形住居跡で、幅40cm・深さ20cmの溝がめぐるが、溝中に柱を立てたと思われる直径5～10cmの小柱穴が残っていることから、柱を立てて壁をつくっていたと推察される。

主柱穴は4本で、柱間は3.3m・直径0.7～1mを測る。南東の柱穴脇に焼土がみられることから、付近にカマドがあったと思われる。

住居跡21 一辺7.2mの方形住居跡で、住居跡20と同様の構造と思われる、西辺と南辺を6.5mから7.2mにそれぞれ拡張したことが窺える。溝が新旧ともに南辺中央部で途切れて



第19図 カキ安地区方形住居跡20

いることから、この位置に出入口があったと思われる。南東柱穴脇に焼土や炭が広がっていたが、あるいは移動式カマドであったかもしれない。

この2基の住居跡について、当初は竪穴式住居が削平を受けたものかと考えたが、その溝が大きくしっかりしていることや、住居跡20南側のトレンチ壁観察でも溝の外側より内側の床のほうが高いことなど、竪穴式住居とする痕跡は全くみられなかった。時期は遺物からみて7世紀の中・後葉と考えられる。(吉岡 博之)

- 注1 国内における大河川は、いわゆる典型的な沖積平野を発達させるものが大半を占めているが、こうした沖積平野とは違った平野をもつものもかなり存在する。例えば、最上川・阿武隈川といった東北地方の河川がそれであり、中流域に盆地と狭窄部が存在するために極めて水位の高い洪水をひきおこす(東北型河川)。このような東北型河川とは別に山陰地方の由良川・円山川・江川などもこれに近いものとして存在する(山陰型河川)。山陰型河川の特徴としては、下流域に狭窄部をもち緩流であること、洪水の水位が高いことなどがあげられる。小橋拓司「由良川中・下流域低地の古地理と地形環境」『立命館文学』第483~484号 立命館大学文学部 1985
- 注2 竹原一彦・小池 寛ほか「中山城発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注3 吉岡博之『大川遺跡発掘調査概報』舞鶴市文化財調査報告第13集 舞鶴市教育委員会 1987
- 注4 吉岡博之『志高遺跡一昭和56年度花ノ木・スド口・菰下地区および久田美地区の調査概要一』京都府舞鶴市文化財調査報告第6集 舞鶴市教育委員会 1982
志高遺跡の第2次調査で発見された遺跡であるが、遺跡の性格から志高遺跡とは別の遺跡として扱うことになった。
- 注5 肥後弘幸ほか「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注6 注5に同じ
- 注7 釋 龍雄・増田信武・杉原和雄ほか『水無月山遺跡発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館 1980
- 注8 渡辺 誠・片岡 肇・鈴木忠司ほか『京都府舞鶴市 桑飼下遺跡報告書』平安博物館 1975
- 注9 肥後弘幸・細川康晴「桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注10 吉岡博之「舞鶴市内の中世遺跡について」京埋セ研修会 No.85301-103 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 注11 由良川の砂利採集に伴って発見された遺跡については、多くは杉本嘉美氏の成果によるものである。
- 注12 天野末喜・神野恵一「京都府由良川流域における縄文文化一分布調査による報告・1」『同志社考古』8 1971
- 注13 杉本嘉美『京都府舞鶴市志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981
- 注14 注4に同じ
- 注15 吉岡博之・西岡成郎「志高遺跡一昭和57年カキ安地区の調査一」(『京都府舞鶴市文化財調査報告』第4集 舞鶴市教育委員会) 1983
- 注16 田中光浩・林 和廣「七尾遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』8 峰山

- 町教育委員会) 1982
- 注17 増田信武・田中光浩・林 和廣「カジヤ遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』5 峰山町教育委員会) 1978
- 注18 平良泰久・黒田恭正・常盤井智行「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』1 丹後町教育委員会) 1973
- 注19 岡田晃治他「帯城墳墓群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会) 1987
- 注20 中谷雅治・釋 龍雄・林 和廣・田中光浩・杉原和雄「坂野」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注21 「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注22 辻本和美「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」以下注21に同じ
- 注23 辻本和美「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注24 村川義典『春日七日市遺跡—確認調査報告書—』兵庫県水上郡春日町・春日町七日市遺跡発掘調査団 1984
- 注25 直宮憲一「藤岡山遺跡」第11回埋蔵文化財研究会資料 1982,『古代祖先のあゆみ』篠山町教育委員会 1980
- 注26 注5に同じ
- 注27 「和名抄」丹後国加佐郡の項にみえ、平城官跡から「□□郡志宅里猪食部装白米五斗」と記された木簡が出土している。
- 注28 「太秦広隆寺来由記」。「廣隆寺縁記曰、今上天皇^{〇上}_嵯有勅、永於當寺、勤修上件法會、故每四時至今修焉、今上皇女御、以丹後國志高莊、而爲薬師如来燃燈之料也」(『莊園志料』より)
- 注29 吉岡博之「志高遺跡—昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要—」(『京都府舞鶴市文化財調査報告』第7集 舞鶴市教育委員会) 1984

第2章 調査概要

1. 調査に至る経過

由良川下流域では、昭和38年度以来、建設省近畿地方建設局によって由良川の河道拡幅工事(改修工事)が着手された。昭和47年度には、桑飼下で拡幅工事が行われ、その工事中に桑飼下遺跡が発見された。このため昭和47年度～48年度に桑飼下遺跡の発掘調査が行われた。昭和48年度には、大江町高河原において同じく改修工事中に遺構が検出され、翌49年度に大江町教育委員会によって調査が行われた。

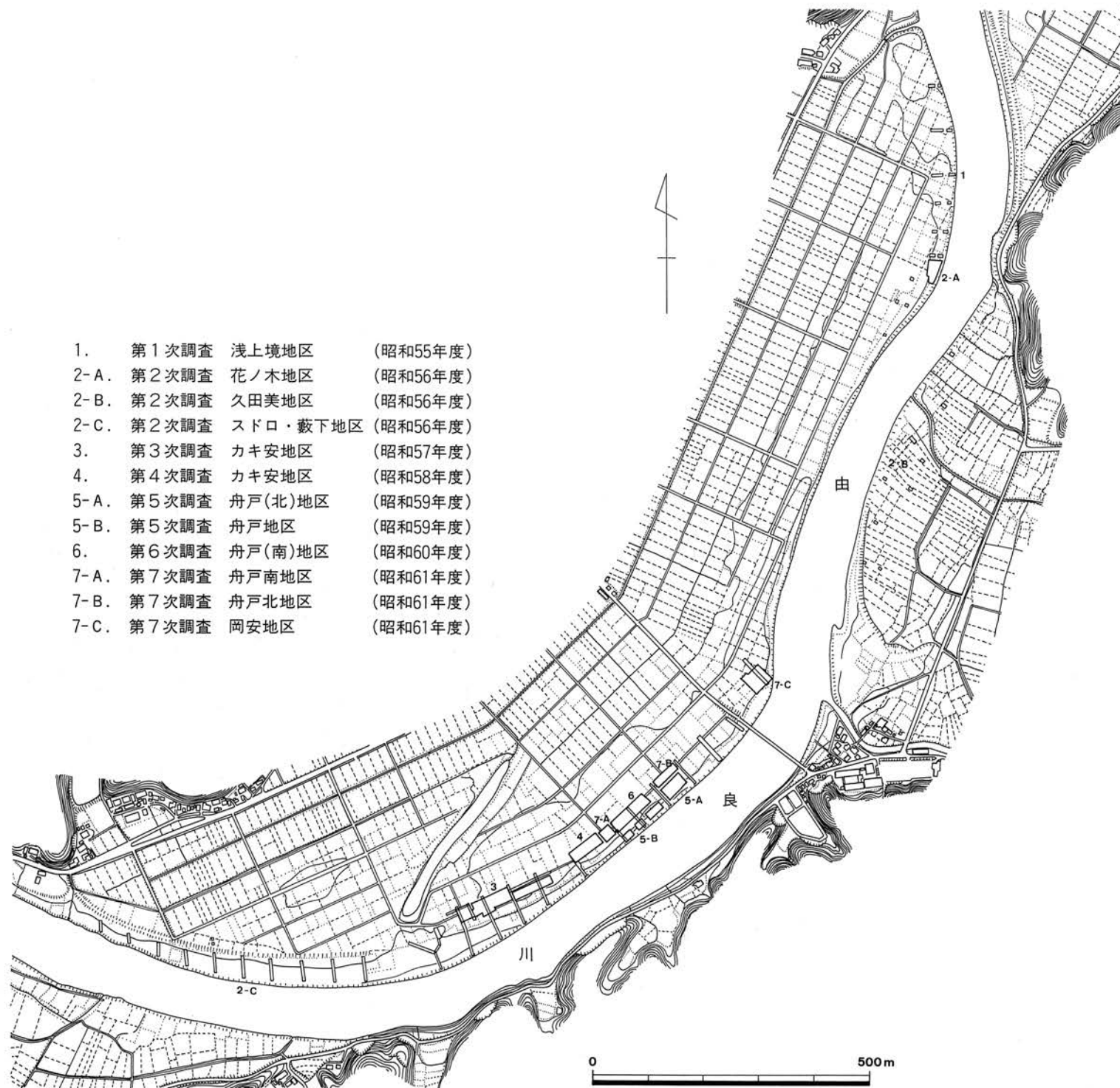
このような状況の中、昭和54年度に志高における由良川の河道拡幅工事が具体化した。このため舞鶴市教育委員会は、『京都府遺跡地図』所載の府No. 1, 393市No. 57「志高遺跡」岡田下橋下流付近、須恵器3点の記載から京都府教育庁文化財保護課の指導を得て、建設省福知山工事事務所の依頼により事前調査を行うことになった。

以上の経過を踏まえて舞鶴市教育委員会が昭和55年度から58年度まで現地調査を行った。その成果については、前章で述べたとおりである。次いで、昭和59年度からは、舞鶴市教育委員会に代わって当調査研究センターが調査を行った。

2. 第5次調査(昭和59年度)

舟戸地区で調査を行った。調査対象地が約4,000m²と広範なため、便宜上A区とB区に分けて、それぞれの調査方針を設定して調査を行った。A区は対象地内の川下の長方形部分で、全面調査を方針とした。B区は由良川に近接して細長く横たわった地区で、大半が由良川に下る崖であるため、遺構の遺存状況が悪いと推測された。そこで、A区の様相を検討した後、トレンチを設けることとした。調査地区割りは、昭和58年度の舞鶴市教育委員会の調査と方向を合わせた。地区は3m毎に設置し、南北の区割りラインを東から西へアルファベットで、東西の区割りラインを南から北へ数字で示すこととした。地区の表示は、南東隅の交点を構成する東西・南北ライン名で表すこととした。

A区の対象地では約24m×67mの調査区を設けた。舟戸地区全域にわたる昭和58年度の舞鶴市教育委員会の調査に基づいて、地表下約1.5mの淡褐色砂上面近辺までを重機で掘削し、以下順次手掘りを繰り返して各層での遺構の有無を確認した。遺構を検出したのは淡褐色砂上面・暗茶褐色砂質土上面・暗茶褐色砂混土上面・黒色砂質土下面である。淡褐色砂上面では、18世紀後期後半以降の柱穴・土坑・溝状遺構や井戸・木枠組池等が検出された。暗茶褐色砂質土上面では、弥生時代中期から奈良時代にわたる溝等の遺構を検出し



第20図 第1次～第7次調査位置関係図

た。黒色砂質土より下層は、サブトレンチによる土層観察のみに終わったが、トレンチ内からの遺物の出土はなかった。しかし、色調・土質から地山と明瞭に判断されるのは黄色砂のみである。各層の遺構とは別に、調査地の川側で、由良川に向けての傾斜が全域にわたり検出できたが、これは由良川の旧川岸と判断した。出土土器から中世頃までのものと思われる。また67ラインより川上では自然流路が見つかり、数本のサブトレンチを設けて土層観察を行った結果、調査地外までその川幅を持つことがわかった。由良川旧河道とこの自然流路のため、平面的に掘り下げて調査した面積は約480m²である。

B区は、A区の由良川旧川岸に相当する範囲が調査対象地であるため、B-1～3までのトレンチを設けてそれを確かめた。各トレンチの規模は、B-1が10m×33m、B-2が10m×18m、B-3が12m×18mである。それぞれのトレンチで、旧川岸に相当する肩部と河道内堆積と思われる粘土層を検出した。総調査面積は約2,200m²である。

3. 第6次調査(昭和60年度)

調査地は舟戸南地区の第6次調査B区に隣接する地域である。由良川に平行して、30m×80mのトレンチを設置して調査を行った。調査面積は約2,400m²である。調査地区割りには、調査の便宜上、建設省の基準杭を用いた。

掘削は昭和58年度の試掘調査に基づき、重機を用いて、地表下約1.5mの淡黄褐色粘性砂質土の上面まで掘り下げた。この面から地表下2.3mまで順次人力で掘り進めた。その間、淡黄褐色粘性砂質土の途中から切り込む掘立柱建物跡群(奈良時代後期から平安時代初頭)、褐色粘性砂質土の上から切り込む掘立柱建物跡群(奈良時代中頃～後半)、灰褐色粘性砂質土の上から切り込む方形竪穴式住居跡群(古墳時代後期から奈良時代中頃)、砂混じり黒褐色粘質土の上から切り込む円形竪穴式住居跡群(弥生時代中期)等を検出した。また、旧由良川の分流もしくは、支流と考えられる旧河道を検出した。第5次調査の自然流路と同一のものである。

調査地区外であるが、すでに護岸工事が終わっている露頭面で、地表下約4.5m付近で縄文時代前期の良好な包含層を確認した。調査地区内でも、弥生時代の遺構面調査後、重機でさらに3m掘り下げたが縄文時代の包含層は検出できなかった。

4. 第7次調査(昭和61年度)

調査は、A・B・Cの3地区で調査を行った。総調査面積は、3,500m²である。

A地区 A地区は、第4次調査地区と第6次調査地区の間に位置する。第6次調査の際、この地区の露頭で、縄文時代前期の遺物が多数表面採集されていた。なお、地区割りは第

6次調査のものを用いた。調査面積は900m²である。

調査は、地表下7mまで行った。その間、7面の遺構面で精査を行い、以下の成果を得た。地表下1.8m・標高4.7m付近と地表下2.2m・標高4.3m付近で、奈良時代から平安時代初頭にかけての掘立柱建物跡群を検出した。地表下2.2m・標高4.3m付近で、7世紀～奈良時代中頃の竪穴式住居跡群を、地表下2.5m・標高4.0m付近で、弥生時代中期の円形竪穴式住居跡群を検出した。地表下4.3～6.5m・標高0.0～2.2m付近で、厚さ約2.2mにわたる縄文時代早期末から前期末にかけての包含層を検出した。この包含層は13層の粘質土と砂層の互層から形成されている。このうち、粘質土4面の上面で遺構面を検出した。検出した遺構は、前期末の竪穴式住居跡状土坑・炉跡、前期中葉の竪穴式住居跡状土坑、前期初頭の炉跡群等である。

B地区 B地区は、第5次調査に隣接し、地区割りは第5次調査のものに準じた。調査面積は、850m²である。

この地区では、上層・下層の2面で遺構群を検出した。掘削には適宜重機を用いた。

上層では、古墳時代前期の土坑・自然流路跡・古墳時代後期の竪穴式住居跡・奈良時代の竪穴式住居跡及び中世墓等を検出した。下層では、弥生時代中期の遺構群を検出した。検出した遺構は、溝状遺構・自然流路跡・貼り石を持つ方形周溝墓及び性格不明遺構等である。

C地区 C地区は、岡田下橋より下流の旧小字岡安にあり、本文では岡安地区として扱う。岡田下橋の改築時に橋桁の下から弥生時代後期の遺物が出土し、遺構の存在が予想されていた。

調査対象面積が調査面積に対して広大であったため、まず、中央部やや下流側に、由良川に直交する5m×30mの試掘トレンチを設けた。調査の結果、試掘トレンチ内は、遺物の含まない砂質土と粘質土の堆積が見られるのみで、遺構は存在しないと予想された。このため、すでに改修に伴う掘削で包含層が露頭していた上流側に調査区を設定した。地区割りは建設省の地区杭を基準に行った。調査面積は、試掘面積を含め1,750m²である。

検出した遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構及び土坑等と古墳時代中期の竪穴式住居跡等である。

5. 整理作業

昭和62・63年度の2年度にわたり、整理作業を行った。作業を直接担当したのは、岩松・三好・肥後の3人である。岩松は第5次調査を、三好は第7次調査出土の縄文土器を、肥後は第6次調査・第7次調査(縄文土器を除く)を担当した。なお、肥後担当分のうち、

古墳時代前期の土器の整理については、林日佐子が補佐した。

この報告書では、遺構名の略号としてアルファベット2文字と数字5文字を用いた。アルファベット2文字は遺構の形状を示す。SHは竪穴式住居跡を、SBは掘立柱建物跡を、SAは柵列を、SKは土坑を、SDは溝状遺構を、そしてSXは不明遺構をそれぞれ示す。数字の最初の2文字は調査年度を示し、84は第5次調査を、85は第6次調査を、そして86は第7次調査を示す。3番目の数字は基本的には時代(検出面)を表記する。3は縄文時代を、2は弥生時代を、1は古墳時代から奈良時代中頃を、0は奈良時代中頃以降を示す。最後の2桁は通し番号である。たとえば、SH86201は第7次調査で検出された弥生時代の竪穴式住居跡である。

本報告の中で土器の形状を指す略号(例えば壺A₁)を用いているが、これについての記述は、弥生土器(中期)を第3章第3節第1項で、弥生土器(後期)については、第4章第2節第1項で、古墳時代前期の土器については第3章第4節第1項の中でそれぞれ分類案として示してある。

(肥後 弘幸)

第3章 舟戸南地区の調査

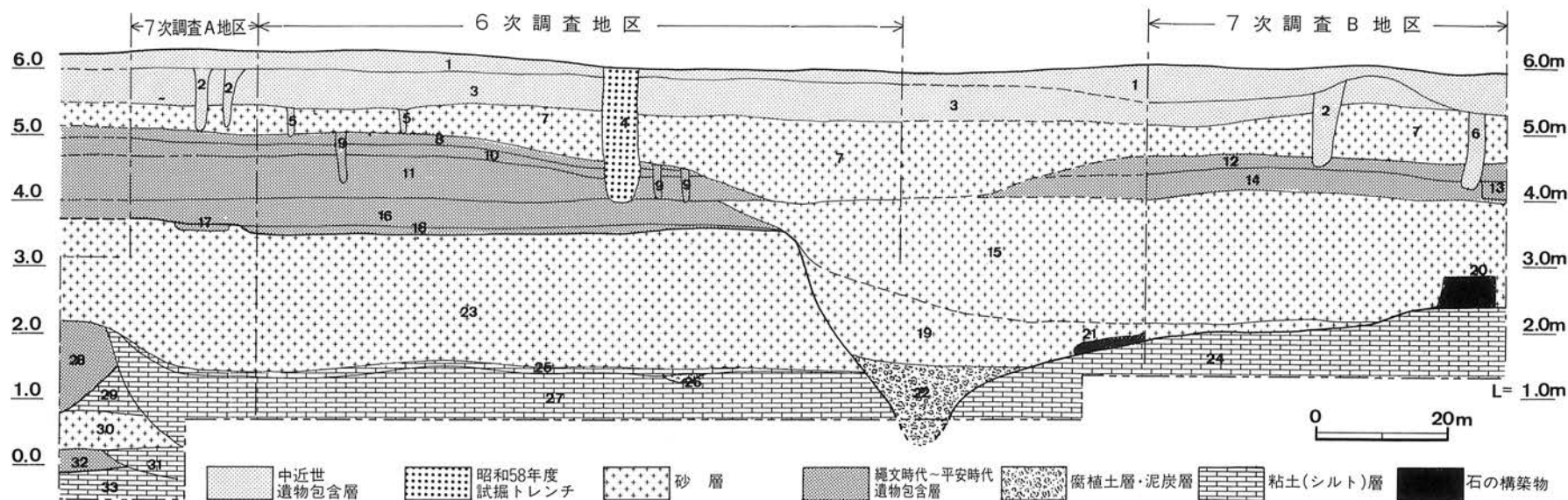
第1節 層位と調査の概要

舟戸地区は第4次調査のカキ安地区に隣接して位置する。調査の結果、舟戸地区の中央付近に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて埋没した旧河道(自然流路)が存在することがわかった。この旧河道は、埋没後も低湿地的構造を保っていたと考えられ、中世までは、顕著な遺構が残されていない。そのため中世以前はこの旧河道を境に集落が分かれていたと考えられるので、本文では、旧河道から南側を舟戸南地区として、旧河道以北を舟戸北地区として扱う。なお本章の対象とする調査区は、第6次調査区及び第7次調査A地区である。

第21図は、第6次調査の調査区西北壁・第7次調査のA地区西北壁・同B地区西北壁の断面図と、工事掘削後の露頭面の断面実測図をもとに作成した土層模式図である。水平距離で200m以上にも及ぶので、便宜上、水平距離と垂直距離を1:10で表現している。

舟戸南地区の層位について、ここでは、第21図を用いて簡単に説明する。なお、詳細な層位については、各時代の項で述べる。この地区でも、最も深いところで検出した包含層は第32層の縄文時代早期のものである。早期の包含層の上には粘土層と砂層の堆積がみられ、砂層に乗る形で縄文時代前期の包含層が存在する。前期の包含層は、10層の砂層と粘質土の互層からなり、遺構面も存在する。前期の包含層の上には、粘土層(第27層)と砂層(第23層)が堆積している。縄文時代前期の包含層は、本来さらに上流側にも広がっていたと考えられるが、粘土層堆積以前に流失したと予想される。砂層(第23層)は、厚さ2m以上に及び、その上層には、比較的安定した包含層(第9～11・16層)が存在する。第16層は、弥生時代中期の遺物を包含する黒褐色粘質土で、さらに南へ広がる。この層の上面から下面にかけて弥生時代中期の遺構群を検出した。第11層は、古墳時代前期に堆積した灰褐色粘性砂質土であるが、付近から流入したと考えられる弥生時代の中期の遺物を多量に含んでいる。この層の上面で古墳時代から奈良時代にかけての遺構群を検出した。第9・10層は、奈良時代から平安時代初頭にかけての包含層で、この層の上面で奈良時代以降の遺構群を検出した。第9層の上には、舟戸地区全域を覆う平安時代の洪水層(第7層)が堆積している。その上層には、中世の包含層(第3層)が存在し、さらに上には、明治40年の水害で移転するまで続いたと考えられる近世集落に伴う包含層(第1層)が存在する。

以上、この地区では縄文時代早期から明治40年までの厚さ6m以上に達する包含層を確認した。遺構検出面及び検出遺構は、各項で詳細に述べる。



1. 近世包含層(一部客土を含む)
2. 近世土坑(黄色粘質土・しゅくい・灰色粘土)
3. 中世包含層(灰褐色中砂質土)
4. 昭和58年度試掘調査トレンチ
5. 中世ピット
6. 中世墓
7. 平安時代前期洪水層
8. 奈良時代後期～平安時代初頭包含層(淡黄褐色粘性砂質土)
9. 平安時代初頭方形ピット
10. 古墳時代後期～奈良時代前期包含層(褐色粘性砂質土)
11. 弥生時代中期～古墳時代前期包含層(灰褐色粘性砂質土)

12. 奈良時代包含層(左へいくほど砂層に近くなる)
13. 奈良時代後期初頭竪穴式住居跡(SH86121)
14. 古墳時代前期～後期包含層(左側は砂層)
15. 古墳時代前期洪水層
16. 弥生時代中期包含層(黒褐色粘質土)
17. 弥生時代中期竪穴式住居跡(SH85210)
18. 弥生時代中期溝(SD85211・SD86211)
19. 弥生時代中期洪水層
20. 2号墓
21. SX86231
22. 泥炭層(流木・弥生中期の土器を含む)

23. 砂層(幾層にも分層可・無遺物層)
24. 青灰色粘土層(上層に弥生中期の遺物を含む)
25. 酸化黄色粘土層
26. 泥炭層
27. 淡青灰色粘土層
28. 縄文時代前期包含層(砂層と粘質土の互層からなる)
29. 黄色粘土層
30. 砂層
31. 黄色粘土層
32. 縄文早期包含層
33. 黄灰色粘土層

第21図 舟戸南地区・北地区土層断面模式図

第2節 縄文時代

第1項 概要

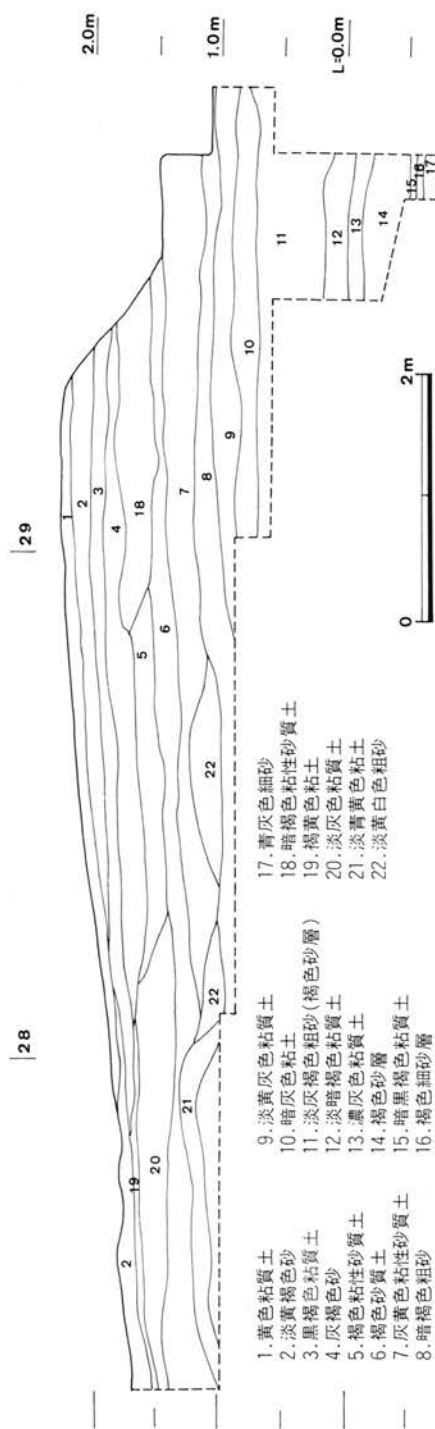
(1) 調査経過

志高遺跡で縄文時代前期の包含層が確認されたのは昭和60年のことである。第4次調査地区の護岸工事が終了している部分の露頭を観察した際に、弥生時代の包含層から厚さ約2mの無遺物層を挟んで、その下から縄文時代前期の遺物を多量に含む層が見つかった。そのため、第6次調査では、弥生時代の調査終了後、重機によって大きく断ち割ってみたが、下層には縄文時代の包含層は存在しなかった。なお、第7次調査A地区は、農業用の取水ポンプがあったため調査の行えなかった地区であったが、縄文時代前期という異例の包含層を確認したため、建設省と協議の上調査を実施することになった。

第7次調査A地区における縄文時代の調査(A地区下層の調査)は、弥生時代の調査が終了した後に重機によって無遺物層を除去した後に着手した。縄文時代の包含層は弥生時代以降の調査を行った場所の直下では、遺構・遺物の密度が極めて低く、下層に掘り進むにつれて調査区を上流側に拡張して調査を行った。拡張した地区は、調査前の露頭面の法面の直下にあたり、第4次調査地区の下層にあたる。

(2) 層序と遺構検出面

縄文時代の遺物を含む層の厚さは2.7mにも及ぶ。最も低いところは、標高-0.5mで、最も高いところは標高2.2mである。包含層



第22図 Gライン縄文時代土層断面図

は、基本的には粘質土(遺構を伴うので生活時に堆積したものか?)と砂層(洪水層か?)の互層からなる。粘質土層に多量の遺物を含み、砂層にはほとんど遺物を含まない。調査区の由良川側の断面図は第22図に図示したとおりであるが、おもに第23図の土層断面模式図を用いて下層から順次説明したい。

第16・17層は、青灰色もしくは褐色の細砂層である。下層ほど粘土化の傾向が強い。

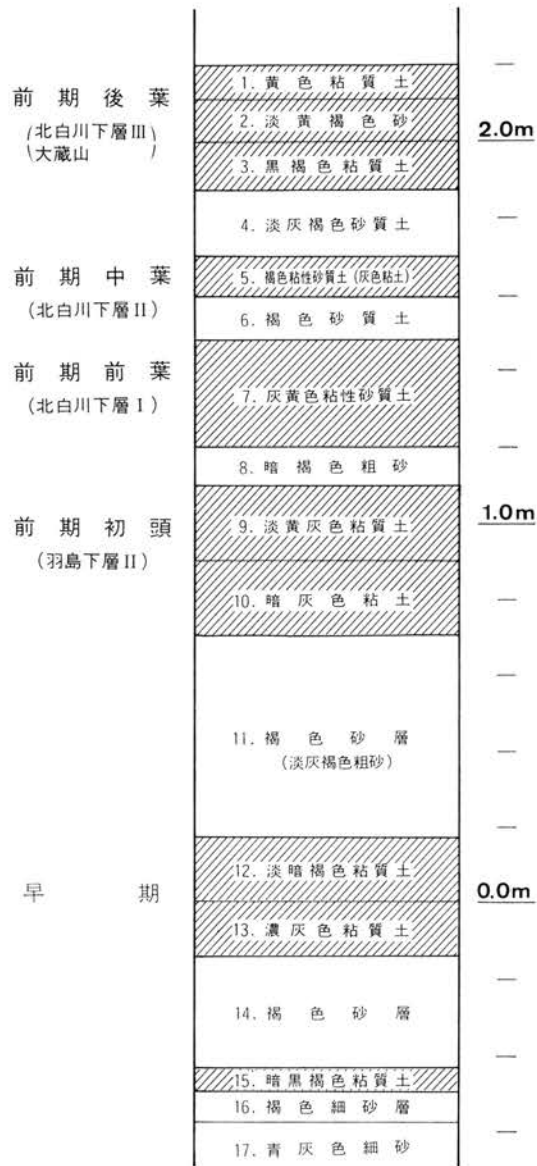
第15層は、暗黒褐色の粘質土層で、遺物を含む層としては最下層になる。標高-0.5m前後に存在する。30D・30Fの2か所の小グリッドで確認した(調査面積約2m²)。遺物は、縄文土器細片が1点出土している。

第14層は、厚さ約30cmを測る褐色の砂層で、遺物は全く含まない。

第12・13層は、淡暗褐色と濃灰色の粘質土層である。標高0.0m前後に存在する。両層ともに遺物を含み、特に両層の間から多く出土した。この層での調査面積は、約50m²である。浸水が著しいため遺物を採集する程度の作業しかできなかった。出土した土器群は早期に位置付けられる。

第11層は、淡灰褐色の粗砂層である。厚さ約50cmを測り、遺物を全く含まない。

第9層は、淡黄灰色の粘質土層である。第10層は、暗灰色の粘土層である。標高0.7~1.2mに存在する。両層ともに遺物を含み、特に両層の間から遺物が出土した。また、遺構面は第10層の上面に存在し、第9層を除去した段階で検出した。両層は、色調・性質を変えながらも下流側にも広がっていくようであるが、遺構・遺物の検出できる範囲は29ラ



第23図 縄文時代土層断面模式図

インから上流側に限られる。調査面積は約130m²である。羽島下層Ⅱ式に代表される土器群を含んでいた。

第8層は、暗褐色の粗砂層である。遺物をほとんど含まない。

第7層は、灰黄色の粘性砂質土である。標高1.2～1.5mに位置する。遺物は比較的多く出土したが、遺構は検出できなかった。他の遺物包含層に比べて砂質が強い。北白川下層Ⅰ式に代表される遺物が出土した。調査面積は約250m²である。

第6層は、褐色の砂質土層である。厚さ約12cmを測り、遺物をほとんど含まない。

第5層は、褐色粘性砂質土層及び灰色粘土層である。標高1.6～1.7m付近に位置する。遺構及び遺物を検出した。この層の広がり、下流側は28ライン付近までである。北白川下層Ⅱ式に代表される遺物が出土した。調査面積は約250m²である。

第4層は、灰褐色の砂層である。厚さ約20cmを測り、遺物をほとんど含まない。

第1層は、黄色の粘質土、第2層は淡黄褐色の砂層、第3層は黒褐色の粘質土である。標高1.9～2.2m付近で検出した。遺物は、各層とも比較的多く含んでおり、特に第3層の上面に集中する。遺構を検出したのも第3層の上面である。第1層は、比較的広範囲にまで広がっているが、遺物を多く含むのは、28ライン付近までで、27ラインから上流側には遺物は存在しない。この層は第21図の25層につながるものかもしれない。

第1層の上面には厚さ約1.5mにわたって遺物を含まない砂層(第21図23層)が堆積している。

第2項 検出遺構

縄文時代の遺構を検出したのは、第10層の上面と第5層及び第3層の上面の3面である。以下、下層から検出遺構について述べたい。

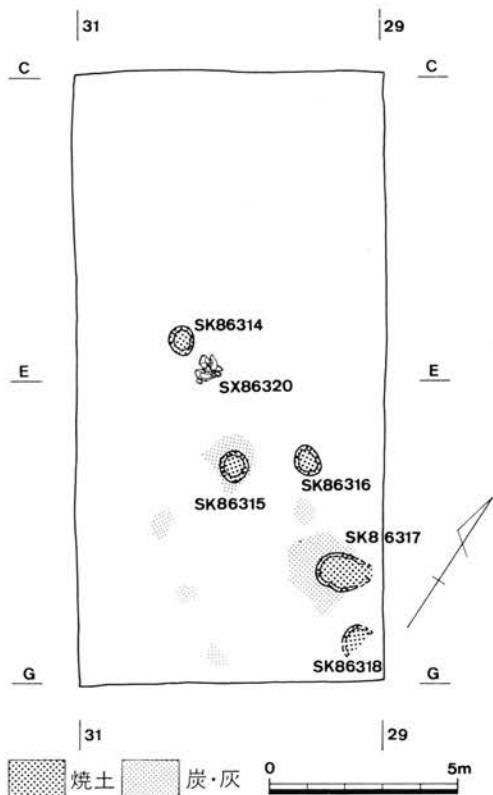
(1) 早期の遺構(第12層・13層)

前述したように、この面での調査は、浸水が著しく思うように遺構検出作業を行うことができなかった。しかし、比較的多くの遺物が出土したこと、遺物が摩滅していないことから、調査地内もしくは周辺に遺構が存在した可能性は高い。調査面積は、約50m²である。なお、調査の終了した翌年度に建設省の許可を得て、小グリッドを設けて珪藻及び花粉分析のための土壌採集を行った。

(2) 前期初頭の遺構(第10層上面)

遺構検出作業を行った面積は、約130m²である。検出した遺構は、炉跡及び石組遺構である。

炉跡(SK86314～86318) 炉跡と考えられる土坑が、5基検出された。土坑の底から壁

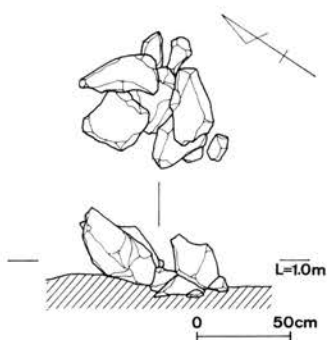


第24図 縄文時代前期初頭検出遺構図

最も厚い層を形成しているが、明確な遺構面は存在せず、遺構は検出できなかった。遺物包含層が比較的厚いことから付近に遺構が存在し、そこから流されてきたものと考えられる。

(4) 前期中葉の遺構

検出した遺構は、竪穴式住居跡と考えられる土坑1基と、方形の土坑1基及び不定形な土坑5基である。また、この時期の包含層は、褐色粘性砂質土と灰色粘質土であるが、30D区を中心とする灰色粘質土の広がりには不定形な円形土坑状を呈し、何らかの遺構の可能性もある。



第25図 石組遺構実測図

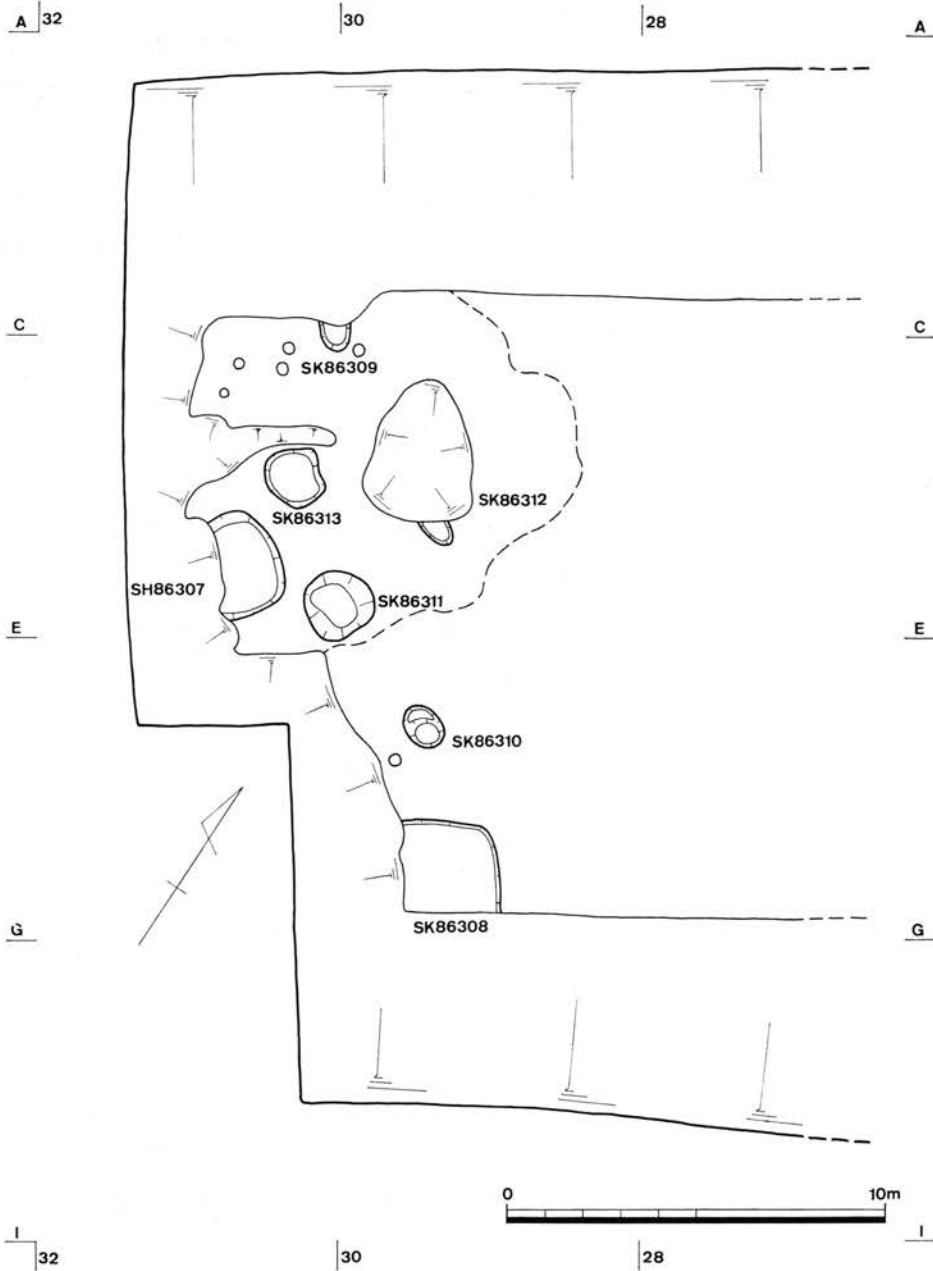
面にかけて強い火を受けたために焼土化しており、土坑内から周囲に炭及び灰が堆積している。直径60~120cmの不定形な円形を呈する。深さは20cm前後を測る。また、これら以外に、単に炭・灰のみが平面的に堆積しているものもある。

石組遺構 (SX86320) 30E区付近で検出した拳大から人頭大の石を立ち並べた遺構である。付近に炉跡であるSX86314が存在するが、検出面は石組遺構のほうがやや高く炉跡に伴うものとは考えにくい。石組は中央部がやや低くなっている。石組の下層にも土坑等の関連する遺構は存在しなかった。石組自体が直接火を受けた形跡は窺えなかった。

(3) 前期前葉の遺構

前期前葉の包含層は、第7層の灰黄色粘性砂質土である。遺物包含層としては

竪穴式住居跡 (SH86307) (第27図) 31D区付近で検出した一辺2.8mを測る隅丸方形を呈すると考えられる土坑である。土坑中央部と思われる部分に炉跡があり、竪穴式住居跡の残欠と考えられる。規模が余りにも小さいことから、この土坑自体は竪穴式住居跡の内部構造の一



第26図 縄文時代前期中葉の検出遺構

部の可能性もある。炉跡には、厚く焼土が堆積しており、土坑底には灰がほぼ全面に観察できた。土坑内から出土した遺物は、縄文土器以外に、石鏃5・磨石3・敲き石がある。

方形土坑(SK86308) 30F区付近で検出した土坑である。深さは検出面から約20cmを測る。土坑底は、ほぼ平坦となっている。第22図のGライン断面図からも窺えるように、この土坑はやや上層から構築されている。土坑内からは縄文土器のほかに、石鏃3・不定形刃器・磨石4・礫石錘2・砥石2・軽石1が出土している。

不定形な土坑(SK86309～86313) 径1.5～3.0mを測る不定形な土坑である。土坑底は、いずれも船底形を呈する。土坑内からは多くの磨石が出土した。とくにSK86313から7点出土している。

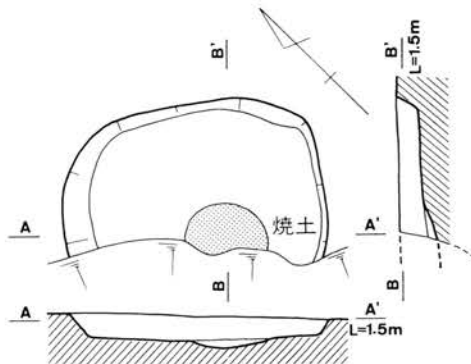
その他の遺構 その他の遺構として、径30cmほどを測る柱穴がいくつか見つかっているが建物等の復原はできない。また、遺構に伴うものかどうか不明であるが、第35図17の深鉢形土器は下半部を欠いていたものの、倒置した状態で出土している。

(5) 前期後葉の遺構(第28図)

遺構を検出したのは、第3層の黒褐色粘質土の上層を除去した時点である。なお、淡黄褐色砂を除去した時点でSH86301・SH86302・SK86303等の遺構を検出した。

竪穴式住居跡(SH86302)及びそれに伴う土坑(SK86301)(第28図) 長径約8.7m・短径約7.7mを測るやや楕円形を呈する浅い土坑状遺構である。ほぼ中央部に灰を多く含む土坑(SK86301)が存在すること、この部分だけ土がよく締まり、黒色化していたこと、石器(特に石器製作時に伴ったと考えられる剥片)が床面と考えられるところで水平に多量に堆積していたことから、住居跡である可能性が非常に高い。また、床面下から柱穴と考えられるピットが検出されている。住居内の施設としては、SK86301以外に顕著なものは存在しない。先述のように出土遺物としては石器の剥片類が目につく。

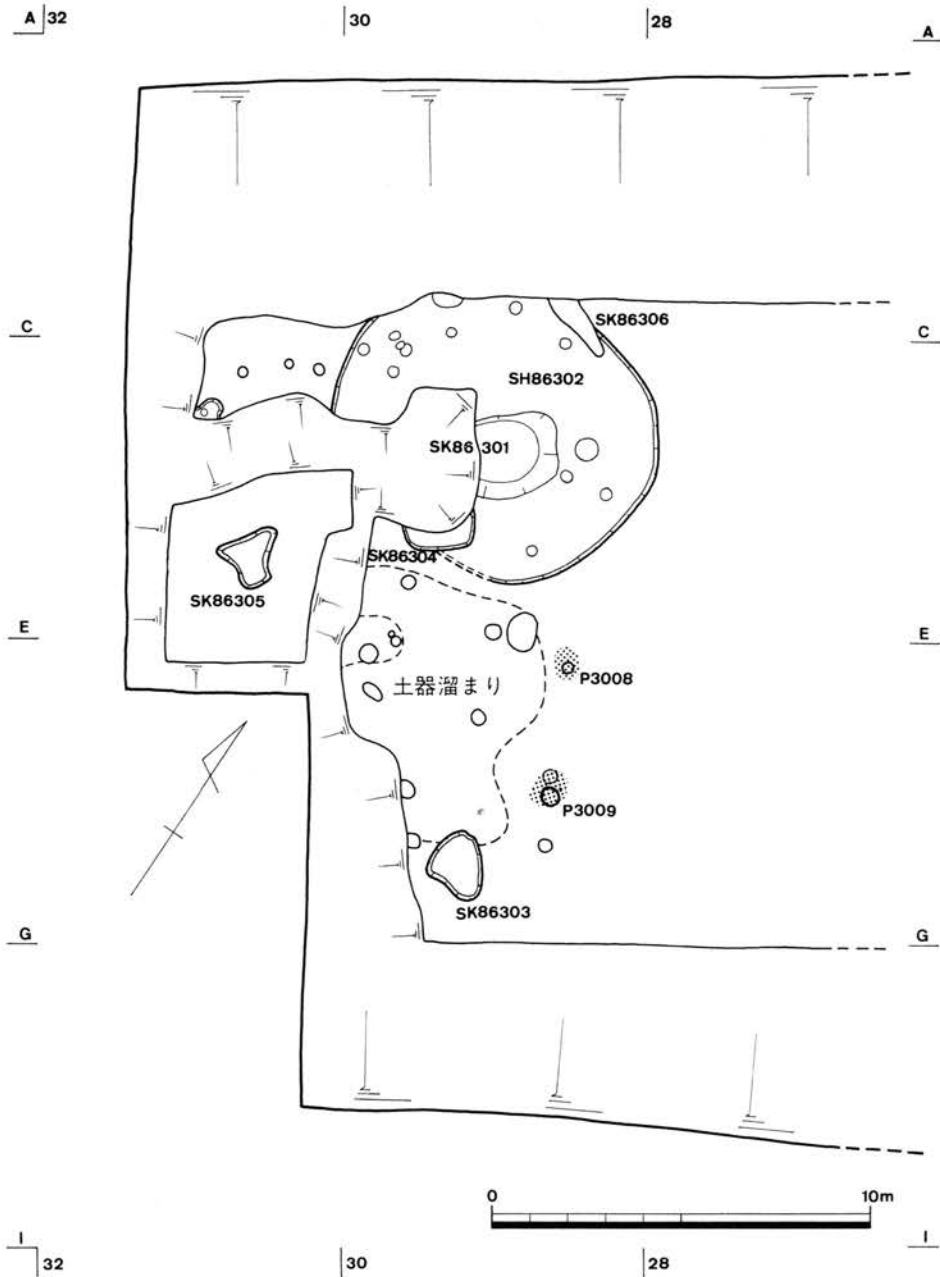
炉跡(P3008・P3009) 直径30cmと40cmを測る円形の土坑である。土坑底・壁及び土坑周辺に焼土が観察できる。土坑内に堆積していたのは、灰混じりの焼土である。炉跡であると考えられる。



第27図 SH86307 実測図

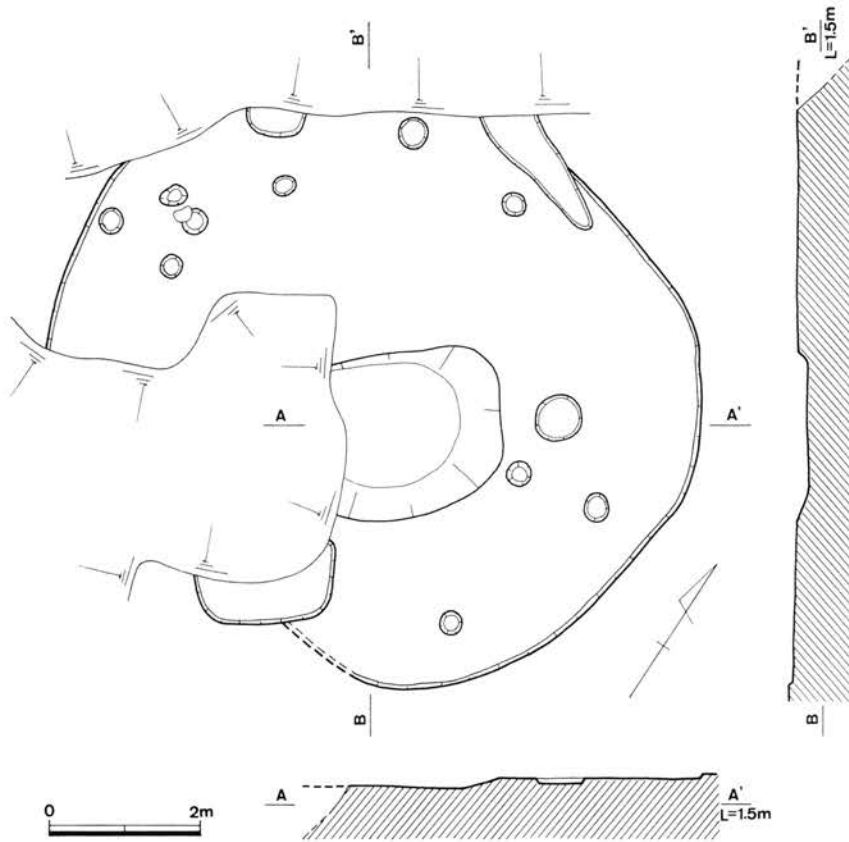
不定形土坑 SK86303・SK86304・SK86305 等の不整形な土坑と、SK86306のような溝状遺構となると考えられる土坑等がある。SK86304から装飾品と考えられる石製品が1点出土している。他には包含層出土遺物と比較して、特異な遺物は出土していない。土坑の性格は不明である。

土器溜まり 29D・29E・29F区を中



第28図 縄文時代前期後葉の検出遺構

心に土器が多数水平に堆積していた。完形に復原できる土器をはじめ，多数の遺物(整理箱約10箱)が出土している。遺物の出土状態から，単なる包含層の状況とは考えにくい。何らかの理由で継続的に遺物を投棄したものと考えられる。(肥後 弘幸)



第29図 SH86302・SK86301 実測図

第3項 縄文土器(第30～56図)

(1) 最下層出土遺物

濃灰色粘質土層(13層)及び淡暗褐色粘質土層(12層)は、遺物包含層のなかでは最下層にあたる。条痕文を主体として、縄文や爪形文・刺突文などの施文がみられる。遺物の出土量は、整理箱2箱程度である。

a 濃灰色粘質土層(13層)出土遺物

爪形文系土器(44～46・53)

44・45は、爪形文を施す土器の一群である。いずれも横方向に整然と爪形文を配している。特に1は、口縁部形態を知り得る資料である。口縁端部には口縁部以下の爪形文の方向とは逆方向の爪形文を一列配している。このため口縁端部の爪形文は、横向きの「ハ」の字状となる。また、口唇部にも爪形文を連ねている。53は、口縁端部と口唇部とを棒状工具を用いて交互に押圧したものである。このため、口縁部は小さな波形を連ねたような

形態を呈している。53では頸部以下の形態を知り得ないものの、同様の口縁部形態をもつものに、79・108の2点がある。これらでみると、頸部には粘土紐を貼り付けて段帯を形成している。粘土紐の上には爪形を押圧し、頸部下にも爪形を配している。口縁部は、頸部からわずかに外反して立ち上がっている。

46は、回転縄文を地文として爪形文を施す土器である。地文となる縄文は、右撚りと左撚りの縄を撚り合わせた正反の合によるものと思われる。

縄文系土器(47～50)

47～50は、施文原体として縄が用いられている土器の一群である。47は、破片の上部に押圧縄文、下部に回転縄文が認められる。48はRLの単節斜縄文で、49は緩い回転縄文もしくは押圧縄文であろう。50は押圧縄文と考えられる。

条痕文系土器(42・51・52)

51・52及び42は、条痕文を施す土器の一群である。51は内面、52は内面と外面とに条痕文が認められる。42は、比較的大きめの体部破片で、粘土紐の継ぎ目を明瞭に残すものである。外面の条痕文は、斜め方向が主で、横方向のものも若干みられる。

b 淡暗褐色粘質土層(12層)出土遺物

爪形文系土器(43・54～59)

43及び54～57は、爪形文を施す土器の一群である。43は、比較的厚手の土器で、破片数も多く、底部を欠くもののほぼその全容を知り得る個体である。口縁部は、粘土帯の折り返しによってやや肥厚している。底部は、乳房状に納まるものと予想される。爪形文は、口縁端部から体部上半にかけて施されている。爪形文には、鋭い爪形文と鈍い爪形文との2種類が認められ、施文原体が複数存在したように思える。また、口縁端部には縦方向の爪形文を小刻みに連ねている。体部内面には、下半部を主として条痕文風の擦痕が認められる。54～57は小破片であるため、明確にはわからない資料が多いものの、「ハ」の字状に爪形文を配置しているものと思われる。これらのうち、54は「ハ」の字状の爪形文が明瞭に表れているものである。55は、爪形文が密に施されているため、互いに重なりあっているものの、やはり「ハ」の字状を意識しているものと考えられる。同様の資料としては、106があげられる。106も爪形文が密に施されているものの、「ハ」の字状を強く意識している。56・57については、爪形文が施されてはいるが、その構成は明確にはわからない。

58・59は、回転縄文を地文として、爪形文を施す土器の一群である。58に用いられた縄文原体は、明確にはわからないものの、0段もしくは1段の3本撚りの原体を用いているらしい。破片上部には2段の爪形文が認められる。59は、RLの単節斜縄文で、縄文原体の端部が表れているものである。破片上部には爪形文が施されている。

縄文系土器(60～65)

60～65は、回転縄文を施す土器の一群である。60・64・65は、RLの単節斜縄文である。61・62は同一個体で、口縁部及び頸部の資料である。これらによると、頸部には粘土紐を貼り付けた段帯が形成されている。口縁部は、頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。縄文は、付加条を施した回転縄文である。内面には横方向の条痕文が施されている。63は、複節の斜縄文である。口縁端部は、角頭形をなしている。

条痕文系土器(66～72)

66～72は、条痕文を施す土器の一群である。70は底部の資料で、底面四角形を呈する。

その他の土器(73～78)

73～78は、75を除いて同一個体と思われる。73と74とは、口縁部及び頸部の資料である。これらによると、頸部には粘土紐を貼り付けて段帯を形成している。段帯の角部には、棒状工具によって押圧が加えられている。口縁部は、頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。口縁部外面には、横方向の条痕文が認められる。また、体部の内面にも部分的に条痕文が認められる。

c 土層サンプル採取時出土遺物

第30図A～C及び79～104は、珪藻及び花粉分析の土層試料採取に際して設けたトレンチから出土した遺物のうち、12層及び13層にあたる部分から検出したものである。これらのうち、第30図B・Cは、完形もしくは器形のわかる資料である。

条痕文系土器(第30図B・C, 98～103)

Bは、口径約25cm・器高約20cmを測る深鉢形土器である。底部は尖底気味の丸底で、胴部が大きく膨む。頸部には、浅い段をつくり、外反ぎみに口縁部を立ち上げている。口縁は平口縁である。口縁端部外面には粘土紐を貼り付けて口縁を肥厚させ、幅1.5cm程度の段状貼付隆帯を形成している。調整は、表裏面ともに条痕調整を基調としており、口縁部の貼付隆帯にも条痕が施される。胴部上半には、頸部から6条の隆起帯を垂下させている。これらの隆起帯は、長さ6cm・幅0.5cm程度のもので、隆起帯には刺突を加えている。同様の刺突は、頸部に形成された浅い段の肩部にも巡らされている。また、各隆起帯間は、沈線で充填している。口縁部内側には指頭圧痕もみられる。色調は、外面が茶褐色ないしは暗茶褐色で、内面が黒褐色を呈している。内外面ともに炭化物の付着が認められる。

Cは、推定口径23cm・器高26.5cmを測る深鉢形土器である。底部は、尖底気味の丸底で、胴部は下半部で大きく屈曲して立ち上がる。口縁は平口縁である。口縁端面は二枚貝によるものと思われる圧痕が巡らされている。調整は、内外面ともに条痕調整を基本としている。口縁部付近の内外面には、指頭圧痕もみられる。色調は、外面が茶褐色ないしは

暗茶褐色で、内面が黒褐色を呈している。内面には炭化物の付着も認められる。

98～103は、条痕文を施す土器の一群である。

爪形文系土器(79～81)

79～81は、爪形文を施す土器である。79は、53と同一タイプの破片である。

縄文系土器(第30図A, 89～97)

89～97及び第30図Aは、縄文を施す土器の一群である。Aは、RLの単節斜縄文を施すもので、器形は尖底を呈している。底部内面付近には指頭圧痕が認められ、胴部内面には擦痕がみられる。92は無節Lの斜縄文で、90は61・62と同一タイプの破片と思われる。94はLRの、89・91・93・95～97はRLの単節斜縄文である。

その他の土器(82～87・104)

82～86は、暗茶褐色を呈する同一個体と思われる土器の一群である。82・83では粘土紐を蛇行させて垂下して、その上を半截竹管状工具で刺突を加えている。また、82で一部に認められる平行刺突文は、84～86のような文様を描きだしている。口縁部の破片である82・84では、口縁部端面に半截竹管状工具による刺突が認められる。

87は、ヘラ状工具によって縦位の刺突を細かく施すものである。

104は、尖底部の破片である。

d 最下層試掘時出土遺物

なお、105～108は、13層・12層の試掘の際に出土した遺物である。105は、53や79と同一タイプの破片である。106・107は爪形文を施すもので、106は「ハ」の字状を強く意識しているものと考えられる。108は、条痕文を施す土器である。

(2) 暗灰色粘質土層(10層)・淡黄灰色粘質土層(9層)出土遺物

10層・9層は、遺物の様相や破片の接合状況からみて、厳密に区別しうる層ではなかったため、ここでは一括して取り扱うことにする。遺物の出土量は合わせて整理箱4箱程度である。条痕調整を基本とする土器の一群で、3字状刺突文を施すものと条痕調整のままのものに大きく分かれる。

刺突文系土器

3字状刺突文(4～6・109～130) 6は、口径27.5cm・器高21.8cmを測る中型の深鉢形土器である。口縁部の一部を欠くもの、全容を知り得る資料である。器形は、やや尖りぎみの底から、張った胴部下半を経て、中央でくびれたのち、大きく外反する口縁部に至る。口縁は波状を呈している。内外面に貝殻腹縁による条痕調整を施し、口縁部に4段、胴部下半に5段の3字状刺突文が施されている。口縁部端面にも同様の刺突が施されている。

この土器に特徴的なのは胴部内外面に付加された3字状刺突文によるモチーフである。胴部外面の波頂部直下にはaパターンのモチーフが4か所に表わされ、これらのモチーフの間にはbパターンのモチーフが4か所に付加されている。口縁部内側には波頂部の下4か所にモチーフがあり、向き合う波頂部ごとにcパターン・dパターンのモチーフが表現されている。このようなモチーフを持つ土器は、他にも4・114・116の3点を確認している。いずれも波状口縁を呈しており、平口縁のものには用いられていないと考えられる。

4は、口径39cm・現存高18.5cmを測る大型の深鉢形土器である。胴部下半以下を欠く。口縁は特異な波形を呈する波状口縁である。4か所に突起を配しているが、3個の突起で波形を形成する部分と1個の突起で波形を形成する部分がそれぞれ対じしている。調整は、内外面ともに条痕調整であり、3字状刺突文が口縁部に8段、胴部下半に3段以上施されている。また、2か所の単突起の下にも3字状刺突文からなるモチーフが付加されている。口縁部端面に刺突は認められない。口縁部付近に補修孔が一对ある。同様な様相を持つ個体として116がある。116についてもこの種の器形を呈するものと思われる。

5は、口径37cm・器高28cmを測る大型の深鉢形土器である。口縁は、平口縁である。器形は、丸底の底部から胴部下半で強く屈折して立ち上がったのち、外反する口縁部へと続く。内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整である。口縁部には4段ないし5段、胴部下半にも4段ないし5段の3字状刺突文を付加している。また、口縁部端面にも同様の刺突を加えている。現時点では、平口縁の土器にはモチーフは認められない。

117は4や116のような口縁部形態をとる大型の深鉢形土器の胴部下半の資料と思われる。胴部最大径は復原30cmを測る。内外面ともに強い条痕調整で、3字状刺突文を5段以上施している。

109～130は、3字状刺突文を施文する土器の一群である。二連一単位のもものがほとんどであるが、120のように結合が弱く3字状が崩れるものや、130のように三連一単位のものもみられる。また、129のようにD字状の刺突文へと移行しつつあるものも認められる。

条痕文系土器(1～3・131～140)

丸底ぎみの底部から胴部下半で屈折して立ち上がり、外反する口縁部へと続く器形を呈するものが多い。口縁は、平口縁のもものがほとんどである。いずれも深鉢形土器で、小型のもの(140)や中型のもの(1・2)、大型のもの(3)がある。131や135の口縁端部には、細かいキザミメが施されている。また、139には補修孔が認められる。

その他の土器(141・142)

141は、平行沈線文によって文様を構成するものである。142は、やや尖りぎみの底部の資料で、文様は認められない。

(3) 暗褐色粗砂層(8層)出土遺物

粗い砂の層で、遺物の包含は少ない。整理箱1箱にも満たない出土の量である。条痕文がほとんどで、これに刺突文が加わるものもある。

刺突文系土器

143は、ヘラ状工具によって縦位の刺突を数段施している。144は、ヘラ状工具で連続的に刺突を加えるものである。145は、3字状刺突文の結合が弱くなったもので、間隔が大きく開いている。

条痕文系土器

7・8及び146～149は、条痕文を施す土器である。底部は148・149で見る限り、丸底もしくは丸底ぎみを呈している。

(4) 灰黄色粘性砂質土層(7層)出土遺物

他の安定した粘質土層に比べて砂質が強いものの、比較的安定した包含層である。出土した遺物の量は、整理箱2箱程度である。条痕文を施す土器が主体で、3字状やD字状・C字状などの刺突文が加えられている。縄文を施す土器もみられる。

刺突文系土器

3字状刺突文(150～154・165) 150～154は、3字状刺突文を施す土器である。154は、3本1単位のもので、串状工具が用いられているものと考えられる。165もこのタイプかもしれない。

D字状刺突文(9・155～159) 9及び155～159は、D字状刺突文を施す土器である。155～157は、3字状刺突文の結合がなくなり、1列ごとに独立したD字状刺突文が施されるものである。9及び158・159では、比較的大きめの施文具が用いられている。

9は、口径16.2cm・器高17.2cmを測る小型の深鉢形土器である。口縁は平口縁である。器形は、尖底の底部から屈曲して胴部が立ち上がり、開きぎみにのびる口縁部へと続く。調整は、内外面ともに条痕調整である。外面の文様は、口縁部に3段、胴部下半にも3段のD字状刺突文が巡る。口縁端部にも密な刺突が加えられている。色調は、全般的には黒褐色を呈しているものの、一部明茶褐色の部分もみられる。

C字状刺突文(166～169) 166～169は、条痕文を地文としてC字状刺突文を施す土器である。施文具は、半截竹管状工具と思われるが、こぶりの二枚貝を用いた可能性もある。

その他刺突文(160～164) 160～164は、ヘラ状工具による刺突文と考えられるが、160～162については、2本1単位の刺突の可能性もある。160・163の口縁端部には、キザミメがみられる。

縄文系土器

170は、LRの単節斜縄文である。

条痕文系土器

10・11及び171～174は、条痕文を施す土器である。11は小型の鉢形土器であり、10・173は中型の深鉢形土器、174が大型の深鉢形土器である。底部は、依然として丸底が主流を占めている。

(5) 褐色砂質土層(6層)出土遺物

遺物の包含量は整理箱2箱程度で、他の砂質土層に比べると多い。ただし、復原のできない破片がほとんどである。刺突文は、C字状のものの占める割合が増す。

刺突文系土器

D字状刺突文(175・176) 175・176は、D字状刺突文を施す土器である。

C字状刺突文(177～179・182・183・187) 177・178は、比較的小さな半截竹管状工具を用いたものである。177には縄文が伴っている。179もC字状刺突文と考えられるが、施文の方法に違いがみられる。地文は条痕である。187は、LR及びRLの縄文を地文としている。刺突は、ヘラ状に近い半截竹管状工具で行っており、同じ施文具で平行沈線も引いている。182・183は、比較的大きめの半截竹管状工具を用いたものであり、あるいは二枚貝を施文具としているのかもしれない。182の地文は条痕である。183の口縁端部内側にはキザミメが施されている。

連続C字状刺突文(184～186) 184～186は、C字状刺突文を千鳥状に施した連続C字状刺突文である。184・185は、直線的に数段認められるのに対して、186では鎖状の施文もみられる。184・186の口縁端部にはキザミメが認められる。

条痕文系土器

180・181は、条痕文を施す土器である。

縄文系土器

188・189は、内面に条痕調整を施し、外面に縄文を施す土器である。縄文は、RLとLRとによる羽状縄文である。

(6) 灰色粘質土層(5層)及び褐色粘性砂質土層(5層)

これらの層は、ほぼ同一レベルに堆積しており、灰色粘質土層(5層)が発掘区の西側を、褐色粘性砂質土層(5層)が発掘区の東側を占めていた。出土遺物の様相は、ほとんど同じである。刺突文では、C字状のものが主体を占め、連続C字状刺突文もみられるようにな

る。条痕文を施す土器の割合が減少し、代わって縄文を施す土器の割合が増加する。縄文系土器のうちでも羽状縄文の占める割合が大きい。遺物の出土量は、灰色粘質土層(5層)が整理箱4箱程度、褐色粘性砂質土層(5層)が整理箱2箱程度である。

a. 灰色粘質土層(5層)出土遺物

刺突文系土器

C字状刺突文(12・14・15・18・193・198・199・204~208)

12は、復原口径42cm・現存高20cm程度を測る大型の深鉢形土器である。口縁は、波状口縁で、4か所に波頂部をもつ。調整は、内外面ともに条痕調整である。C字状刺突文は幅広く、口縁部外面に4段、内面には1段施している。口縁部には、キザミが加えられている。色調は、淡茶褐色が主体である。

14は、SK86311から出土した深鉢形土器である。復原口径26.5cm・器高22.2cm・底径10cmを測る。口縁は平口縁で、底部も平底である。器形は、丸みをもつ胴部から、口縁部が外反して立ち上がる。器面には、擦痕状の調整がみられる。

15は、復原口径17cm・器高12.4cm・底径11cmを測る小型の鉢形土器である。器形は、底部は平底で、直立した胴部から口縁部へ外反していくものである。口縁部は波状口縁で、4か所に波頂部をもつ。波頂部には内部に突起が貼り付けられている。口縁端部にはキザミが加えられている。調整は内外面とも条痕調整で、半截竹管状工具による平行沈線文や刺突文が施される。文様帯は、口縁部・胴部上半・胴部下半に分かれる。口縁部文様帯は、平行沈線文2組を口縁に沿って巡らし、間をC字状刺突文で埋めている。胴部上半文様帯も口縁部文様帯と同じ構成をとっている。また、4か所の波頂部からは、C字状刺突文を垂下させて胴部上半文様帯と連結している。胴部下半文様帯は、他の文様帯とは構成を逆にしており、2段のC字状刺突文を巡らした間に1組の平行沈線文を施している。色調は、黄褐色を基調としているが、黒褐色化した部分も多い。

18は、復原口径35cm・現存高25cmを測る深鉢形土器である。口縁は、4か所に波頂部をもつ波状口縁である。器形は、バケツ形の胴部に口縁部がのる。文様帯は、LRの縄文を施す胴部文様帯と、C字状刺突文を施す口縁部文様帯とに大きく分かれる。C字状刺突文は、口縁に沿って2列、頸部に3列巡らされ、波頂部下にできた空間には弧状にC字状刺突文を配している。色調は、暗茶褐色を呈している。

193・198・199は、半截竹管状工具による比較的大きなC字状刺突文を施す土器である。198には口縁端部にキザミメが認められる。

204~209は小さめの半截竹管状工具で施文した土器である。204・205には2種類の刺突が認められるが、施文手法の差異によって、表現された文様に違いが生じたものと考えら

れる。204～208には、RLもしくはLRの単節斜縄文が伴う。209には、口縁端部にキザミが加えられている。

連続C字状刺突文(14・190～192・194・195) 14は、SK86311から出土した深鉢形土器である。復原口径26.5cm・器高22.2cm・底径10cmを測る。口縁は平口縁で、底部も平底である。器形は、丸みをもつ胴部から、口縁部が外反して立ち上がる。器面には、擦痕状の調整がみられる。口縁部から胴部上半にかけて5段の連続C字状刺突文が巡らされ、最下段には刺突文が1列加えられている。口縁端部内側にも刺突が加えられている。色調は、明茶褐色ないし暗茶褐色を呈している。なお、口縁部には1対の補修孔がある。

190～192・194・195は、半截竹管状工具もしくは二枚貝を用いて連続的にC字状刺突文を施した土器である。直線的な配列以外に、192のように鎖状に配するもの、191のように曲線を描くものなどがみられる。195は、LR及びRLからなる羽状縄文を伴う。191・194は、口縁端部にキザミをもつ。

押し引き刺突文(19) 19は、復原口径37cm・現存高25cmを測る深鉢形土器である。口縁は波状口縁で、4か所に波頂部をもつ。文様は、ヘラ状工具による押し引き刺突で、口縁に沿って3列施している。地文はLRとRLとからなる羽状縄文である。口縁端面にも縄文が施されている。

その他の刺突文(196・197・202・203) 196・197は、ヘラ状工具によって刺突を施す土器である。196は、波状口縁の波頂部で、口縁端部にキザミをもつ。内面条痕調整で、外面胴部下半には縄文を施している。197は、内外面ともに条痕調整を施している。

202・203は、棒状工具で刺突するものである。202は波状口縁の波頂部で、地文は内外面ともに条痕文である。203は、口縁端部にキザミをもつ。

隆線上施文土器(200・201) 200・201は、隆線上にC字状刺突文を施すものである。201は波状口縁の波頂部で、3つの突起がつく。文様には連続C字状刺突文が伴う。200・201も口縁端部を刻む。

縄文系土器

210～213は、いずれも内面を条痕調整し、外面に縄文を施した土器である。211は波状口縁の波頂部で、波頂部に突起を貼付している。212は無節Rの斜縄文で、210・211・213はLR及びRLの単節斜縄文を用いた羽状縄文を施している。

条痕文系土器

13・214・215は、条痕文を施す土器である。13は、復原口径27.5cm・現存高15.5cm程度を測る鉢形土器である。口縁は、平口縁で、内外面ともに条痕調整が施される。215の口縁端部には縄文が押圧されている。

底部資料

216～218は、底部の資料である。216には、内外に縄文が認められる。217は、指押さえによって仕上げられている。218は、底部側面に8か所の窪みが認められる。

b. 褐色粘性砂質土層(5層)出土遺物

刺突文系土器

C字状刺突文(16・17・222～224) 16は、SK86308から検出された小型の深鉢形土器である。口縁は、大半を欠くものの、4か所に波頂部をもつ波状口縁を呈するものと考えられる。調整は、内外面ともに条痕調整である。文様は、半截竹管状工具によるC字状刺突文を施す。口縁部には波状に5段のC字状刺突文が小刻みに施される。胴部には小刻みなC字状刺突文が5列巡らされる。口縁部文様帯と胴部文様帯との間には、独立したC字状刺突文を1列巡らして、両者を画している。口縁端部内側にもC字状の刺突文を1列施している。また、口縁端部にもキザミが加えられている。色調は明茶褐色であるが、一部黄褐色を呈している。

17は、口径31.8cm・現存高19cmを測る深鉢形土器である。口縁は、平口縁である。底部を欠く。器形は、朝顔形を呈している。文様は、器面上部がC字状刺突文、下部が羽状縄文である。C字状刺突文は、口縁部から胴部上半まで、7列巡らしている。このうち2列は波状に配しており、文様帯を上下対称となるように構成している。胴部下半には、LR及びRLの単節斜縄文からなる羽状縄文を施している。口縁部内側にはキザミをもつ。

222～224は、C字状刺突文を施した土器である。222・223は、口縁端部を刻んでいる。224にはRLの単節斜縄文が伴う。

連続C字状刺突文(226・227・229～231) 226・227・229～231は、大きめの半截竹管状工具もしくは二枚貝を用いて連続C字状刺突文を施す土器である。227・229～231には胴部下半に縄文が伴う。226は、波状口縁の波頂部付近で、隆線上刺突文が伴う。226・227は、口縁端部を刻んでいる。

くさび状刺突文(225) 225は、ヘラ状工具で刺突を施す土器である。

連続くさび状刺突文(228) 228は、ヘラ状工具を用いて連続刺突文を施す土器である。内外面には条痕調整が認められる。

条痕文系土器

233は、内外面に条痕文を施す土器である。口縁端部を刻む。

縄文系土器

219～221・232・234は、縄文を施す土器である。219・221は、羽状縄文を施すもので、221には隆起線が伴う。219の内面は、条痕調整である。220・234は、内面を条痕調整して、

外面に無節Lの斜縄文を施す。232は、内面を条痕調整して、外面に無節Rの斜縄文を施す。

(7) 淡灰褐色砂質土(4層)出土遺物

砂質土層である。遺物の出土量は、整理箱3箱程度と比較的多い。しかし、復原可能な個体はない。文様は、C字状刺突文や連続C字状刺突文が主体を占める。隆起線上に施文するものも多くみられる。

刺突文系土器

D字状刺突文(235・241) 235・241は、D字状の刺突文を施す土器である。

C字状刺突文(236～240・242～264) 236～240・242～264は、C字状刺突文を施す土器である。238・242・244は、口縁端部に小突起をもつ。ほとんどが口縁端部を刻んでいる。249・250は、他に比べて大きめの施文具を用いている。256～260には単節斜縄文が伴う。252～256・258・259・261～263は、沈線で区画線を引いている。261は、曲線的な意匠がみられる。260・264は、直線的な配列と蛇行する配列とを交互に織り混ぜている。口縁端部内側にもC字状刺突文が施されている。

連続C字状刺突文(265～276) 265～276は、半截竹管状工具もしくは二枚貝で連続的に刺突を加えたものである。271～274・276には縄文が伴う。269・270は、隆起線上にC字状刺突を加えたものである。ほとんどが口縁端部を刻んだり、押圧を加えたりしている。

押し引き刺突文(279・280・287) 280・287は半截竹管状工具、279はヘラ状工具によって、押し引き刺突を加えるものである。279は、縄文を地文として、波頂部から短い隆起線を垂下させている。口縁端部にも縄文が施されている。280も縄文を地文としており、口縁端部には刺突を加えている。

くさび状刺突文(277・281～293) 277・281～293は、ヘラ状工具で刺突を加えるもので、277・281・282には縄文が伴う。

その他の刺突文(278) 278は、列点文を区画帯として縄文を施す土器である。

沈線文系土器

284～286は、縄文を地文として沈線文を施す土器である。285は、口縁端部に刺突を加えている。

隆起線上施文土器

288～297は、隆起線上に施文する土器である。隆起線上を刻むものが多いが、293・294のように縄文を施すもの、288・294のようにC字状の刺突を加えるものなどもみられる。289～292・295～297は、隆起線上を縦あるいは斜めに刻んでおり、297では山形の刻みもみられる。

縄文系土器

299～302・304～307は、羽状縄文を施す土器である。299は、口縁端部にも縄文を施す。298は、RL及びLRの単節斜縄文を施す。端部には刺突を加えている。303・308は、RLの縄文を施している。

(8) 黒褐色粘質土層(3層)・淡黄褐色砂層(2層)・黄色粘質土層(1層)出土遺物

縄文時代遺物の大半は、これら3つの層から出土している。出土量は、整理箱25箱程度である。これらの土器には以下で分類するように4形態の土器群が認められる。けれども、土器の接合状況からみると層位的な識別はつかない。このため、ここでは一括して取り扱うことにする。文様は、特殊突帯文をもつものがほとんどである。

20～41・309～441は、口縁端部内面に粘土紐を貼付して、縄文を施す土器の一群である。口縁部装飾技法の違いによって、大きく4形態に分かれる。

a. 第1形態(20・22～29・309～341)

口縁端部内側に貼付された粘土紐が細く、縄文帯の幅が狭くなるものである。外面に縦位の短い隆起線を貼付するもの(b類)と、貼付しないもの(a類)とがある。

a類(20・335～338・340・341) a類の口縁部形態は、内湾するものがほとんどである。口縁部外面には、ほとんどの場合縄文を施文する。口縁部直下には335・338・340のように粘土紐の貼り付け痕が明瞭に残り、隆起線上に縄文を施すものが多い。頸部以下は、縄文施文のみのものや、隆起線を巡らすもの、特殊突帯文を展開させるものなどがある。

20は、口径32cm・現存高40cmを測る深鉢形土器である。胴部下半を欠くため、底部の形態は不明である。器形は、胴部上半で張ったのち、頸部で一旦くびれて口縁部に至る。文様は、RLとLRとからなる羽状縄文である。口縁部は、上端及び下端にやや幅広の粘土紐が貼り付けられ、この上にも縄文が施される。口縁端部にも粘土紐を貼り付け面をつくり、縄文を施している。口縁部内面には、生爪によるものと思われる調整痕が随所に見られる。色調は、おおむね赤褐色を呈しているが、部分的に黒褐色となっているところもある。

b類(22～29・309～333・339・345) b類の口縁部形態は、内湾するものがほとんどで、「く」の字状に強く屈折させるものも多い。口縁部外面の地文は縄文で、羽状縄文が多用されている。縄文帯の下部は、無文帯にするか、生爪痕を内外面に残す場合が多い。頸部以下には、特殊突帯文が展開する。328～330・332・333・339は、四角形を呈する土器である。322や326・331のように口縁部直下から特殊突帯文が意匠されるものや、326のように縄文が施文されないものは、比較的少ない。

22は、復原口径39cm・現存高24cmを測る深鉢形土器であるが、胴部下半を欠く。口縁は、平口縁である。器形は、胴部上半が大きく張り、頸部で一旦くびれたのち口縁部へと続くものである。口縁部上半は「く」の字状に屈曲して終わっている。文様は、LRの縄文を地文として、貼り付け隆線によって構成されている。口縁部には、幅広の隆帯を3条貼り付け、隆帯上には縄文を施している。縄文は、口縁端部にも施されている。口縁部上半には、縦位の短隆線を8か所に貼り付けている。頸部には2条の貼り付け隆線を巡らし、胴部上半には連弧状の貼り付け隆線を3段巡らしている。連弧状の貼り付け隆線は、8単位からなっている。また、口縁部内外面を始めとして、生爪によるものと思われる調整痕が随所に認められる。色調は明黄褐色が主体となっているが、明黒灰色になっている部分も認められる。

23は、復原口径29cm・現存高11.5cmを測る深鉢形土器である。地文は縄文で、羽状縄文を構成している。特殊突帯文は、胴部上半に山形に施されている。口縁端部の短隆起線は、斜めに貼付されている。

24は、復原口径29.5cm・現存高14cmを測る深鉢形土器である。地文は縄文で、羽状縄文を構成している部分もみられる。特殊突帯文は、頸部に2条が巡り、下段の1条にU字状の特殊突帯文がとりつく構成をとっている。

25は、口径33cm・現存高25cmを測る深鉢形土器である。口縁は、平口縁で、底部を欠く。器形は、小さな底部から胴部上半で大きく張り、頸部で一旦くびれたのち、口縁部へと続く。口縁部は、2段で構成されている。地文は縄文で、胴部はRLとLRとの縄文を用いて羽状縄文を構成している。口縁部はRLの縄文が地文となる。特殊突帯文は、頸部に2条が巡らされ、胴部上半には連弧状の特殊突帯文が8単位連なっている。口縁部下半には12単位のレンズ状の特殊突帯文を連ねている。内外面ともに生爪によると思われる調整痕がめだつ。色調は、明茶褐色が主体である。

26は、復原口径35cm・現存高17cmを測る深鉢形土器である。地文は縄文で、羽状縄文を構成している部分もみられる。特殊突帯文は、頸部に巡らされた1条が直線的であるほかは、U字を重ねた状況であったり、同心円状であったり、曲線的な特殊突帯文が用いられており、その構成も複雑である。

27～29は、角形を呈する土器である。器形は、胴部上半で大きく張り、頸部で一旦くびれたのち、外反して口縁部へ至る。口縁部は、上半を内側に強く屈折させている。口縁は波状口縁で、4か所に波頂部をもつ。文様は、RL及びLRの縄文を地文として、主として特殊突帯文で構成されている。

27は、口縁部一辺19cm・現存高8cmを測る深鉢形土器である。胴部以下の大半を欠く。

特殊突帯文の構成は曲線的で、U字を重ねた状況を呈している。同様の文様構成をとるものに、図版第56—442・443がある。

28は、復原口縁部一辺25cm・現存高17cmを測る深鉢形土器である。胴部下半を欠く。特殊突帯文の構成は直線的で「く」の字を連ねた状況を呈している。

29は、復原口縁部一辺30cm・現存高17cmを測る深鉢形土器である。胴部下半を欠く。特殊突帯文の構成は曲線的で、同心円状を呈している。

b. 第2形態(21・30・342~344・346~378・380~389)

口縁端部内側に貼付された粘土紐が帯状で、縄文帯の幅が広がるものである。口縁端部にキザミや押圧を加えるもの(d類)と、加えないもの(c類)とがある。

c類(21・30・342・344・346~352・370) c類の口縁部形態は、頸部から内湾ぎみに立ち上がってくるものが多い。口縁部外面の文様には、縄文だけのものや、隆起線上に刺突を加えたもの、特殊突帯文を巡らすものなどがある。

21は、復原口径35.5cm・現存高8.5cmを測る深鉢形土器の口頸部である。外面には粘土紐を貼り付け、縄文を施している。

30は、復原口径31.5cm・現存高9.5cmを測る深鉢形土器の口頸部である。外面には縄文を施し、口縁部下に1条の特殊突帯文を巡らしている。口縁端部には、半截竹管状工具による小刻みな刺突が加えられている。

d類(353~369・371~389) d類の口縁部形態や文様は、c類とほとんど同じである。口縁端部には、キザミを加えたり押圧を加えて、口縁部をさざ波状に装飾している。口縁部外面の施文は、縄文だけのものや、幅広の隆起線上に縄文を施すもの、隆起線上を刻むもの、特殊突帯文を巡らすものなどがある。稀に無文のものや、371のように隆起線文上を貝殻で押圧したものなどもみられる。

c. 第3形態(31~34・334・379・390~412)

第1形態のa類・b類及び第2形態のc類・d類の口縁端部に楕円形もしくは円形の特殊突帯文がとりつくものである。

a類(31・32・34・334・406・408) 31は深鉢形土器の口頸部で、復原口径30cm・現存高5cmを測る。特殊突帯文は頸部に1条みられ、口縁部外面には縄文を施している。口縁端部には、8か所に楕円状の特殊突帯文が付加されている。

32は深鉢形土器の口頸部で、復原口径32cm・現存高5cmを測る。特殊突帯文は、口縁部外面に鎖状に連ねられているほか、頸部に1条みられる。地文として縄文を施している。口縁端部に8か所の楕円状の突起を貼付して、特殊突帯文を付加している。

34は、四角形を呈する土器の資料である。口縁部一辺20cm・現存高11cmを測る深鉢形

土器である。胴部以下の大半を欠く。特殊突帯文の構成は曲線的で、U字を重ねた状況を呈している。波頂部には円形の、辺中央部には楕円形の特殊突帯文を付加している。

b類 図示してはいないものの、四角形土器の波頂部に円形の特殊突帯文を施すものが認められている。

c類(392・393・395・410・412) 410には特殊突帯文が山形に配されている。

d類(33・379・394・396~405・407・409・411) 33は、口径約33cm・現存高21cm程度を測る深鉢形土器である。胴部下端を欠くため底部の形態は不明である。器形は、胴部で大きく張ったのち、頸部で一旦くびれ、外反して立ち上がる口縁部へと続く。口縁は波状口縁で、6か所に波頂部をもつ。波頂部には長楕円状の突起を貼り付けて、内外に半截竹管状工具による刺突を加えている。地文はRLの縄文である。文様は主として特殊突帯文で構成されている。文様帯は、頸部に巡らされた1条の特殊突帯文によって、口縁部文様帯と胴部上半文様帯とに分かれ、胴部下半には縄文帯をそのまま残している。口縁部文様帯は、6連からなる連弧状の特殊突帯文を規則的に6段連ねている。胴部下半は、2本1単位の特殊突帯文を4組垂下させ、間を横位の特殊突帯文6本で充填している。なお、胴部下半をはじめとして、外面には生爪によるものと思われる調整痕が随所にみられる。口縁部内面には、粘土紐を貼り付けて肥厚させ、RLの縄文を施して文様帯を形成している。口縁端部には棒状工具による連続的な押圧が加えられている。色調は、部分によって異なるが、おおむね淡黒灰色ないし明黄褐色を呈している。

d. 第4形態(35~41・413~441)

口縁端部内側に粘土紐を貼付して縄文を施し、さらに粘土紐を貼り付けて口縁端部の内外からΣ字状工具によって刺突を加えたものである。口縁部形態は、頸部から内湾ぎみに立ち上がるものが多い。口縁部外面の文様は、縄文を地文として、キザミを施した隆起線を巡らしたり、特殊突帯文を展開させている。羽状縄文は、認められない。また、四角形を呈する土器も認められない。

35は、口径約31cm・現存高15cmを測る深鉢形土器である。器形はキャリパー形を呈する。RLの縄文を地文として、文様帯を口頸部に集約させている。文様の構成は、1単位8反復である。口縁は、波状口縁で、8個の波頂部をもつ。口縁部内外面は、粘土紐を貼付して肥厚させ、縄文を施している。口縁部端面は、粘土紐で被覆し、内外からΣ字状工具を用いて刺突を加えている。口縁部下には2条、頸部屈折部には1条の隆線が巡っており、これらの隆線上には縦位のキザミメが加えられている。また、口縁部下隆線と頸部隆線との間には、8個の弧状隆線を貼付してΣ字状工具で加飾している。胴部は、RLの縄文が全面に施されているだけで、他に施文はみられない。色調は、淡茶褐色が基調で、一

部が黒褐色となっている。なお、口縁部には1対の補修孔がある。

36は、復原口径27cm・現存高9cm程度を測る深鉢形土器である。文様は、刻み目突帯文と特殊突帯文とからなる。刻み目突帯文は、頸部に2条巡らされている。特殊突帯文は、胴部に展開されており、円形や直線的なもので構成されている。

37は、復原口径32cm・現存高20cm程度を測る深鉢形土器である。文様は、刻み目突帯文と特殊突帯文とからなる。刻み目突帯文は、胴部下半を主として、頸部及び口縁部直下に巡らされている。特殊突帯文は円形を主として、曲線的な文様で構成されている。円形特殊突帯文は、口縁部下半に連ねられている。

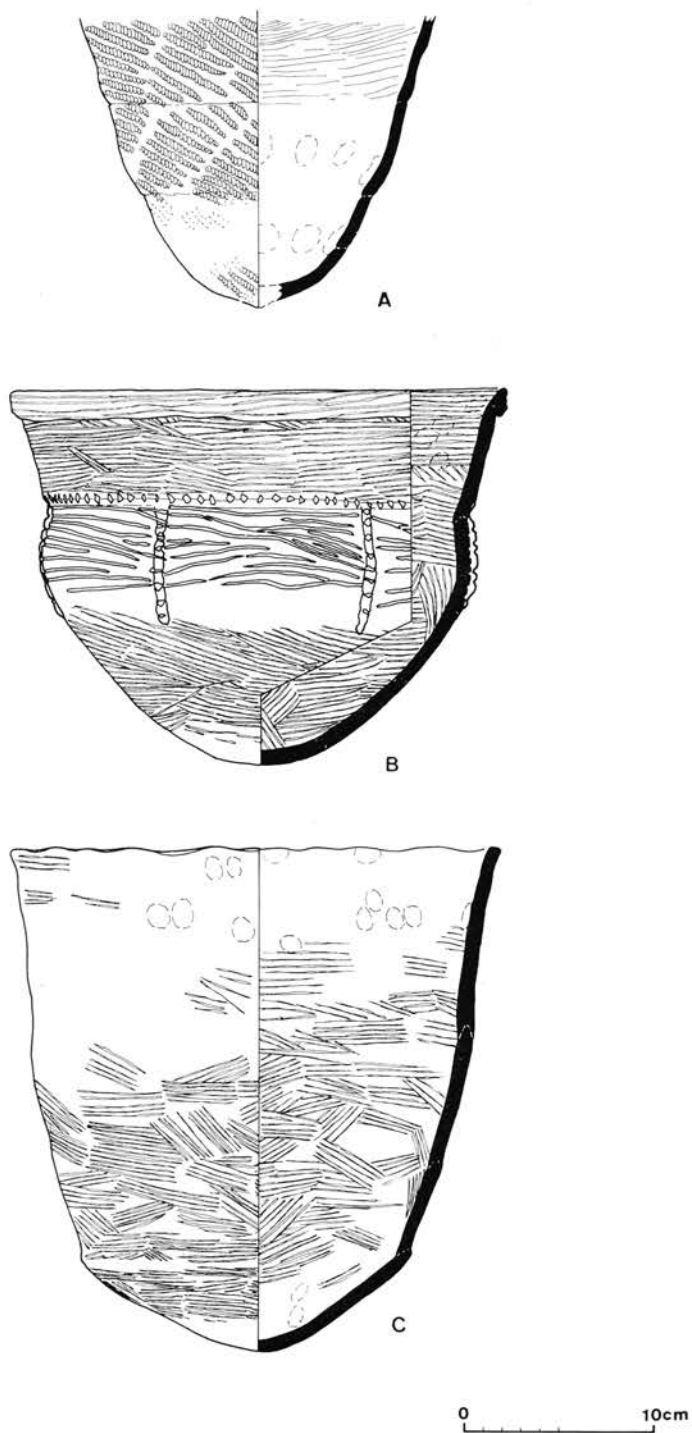
38は、深鉢形土器の口頸部で、復原口径30cm・現存高6cm程度を測る。口頸部の文様構成は37に近似しているが、38は刻み目突帯文はみられない。

39は、復原口径29cm・器高約29cm・底径約10cmを測る深鉢形土器である。器形は、キャリパー形を呈する。口縁は、平口縁である。LRの縄文を地文とし、器面を口頸部・胴部上半・胴部下半に3分割して文様帯を構成している。各文様帯は、1単位6反復を基本として描き出されているものと考えられる。口縁端部は、内側に粘土紐を貼付し、内外からΣ字状工具で刺突している。口縁部は、内側を若干肥厚させて内外に縄文を施している。しかし、内面の縄文帯は、端部に貼付された粘土紐のため目立っていない。口縁部下には2条、頸部屈折部には1条の隆線が巡り、これらの隆線の間には8個の弧状隆線が貼付されている。口頸部の隆線には、Σ字状工具による刺突が加えられている。胴部上半には、推定12個の環状隆線を配置している。環状隆線は、一つおきに上向きの弧状隆線で連繫し、頸部隆線からも隆線を垂下させて連結している。残る6個の環状隆線は、下向きの弧状隆線で連繫している。胴部上半に展開する各隆線は、Σ字状工具によって刺突が加えられている。胴部下半には、2本1単位6反復、12本の隆線を垂下し、隆線上には二枚貝の圧痕文を施している。底部側縁には、二枚貝の押圧によるくぼみを6か所に設けている。色調は、明赤褐色が基調である。

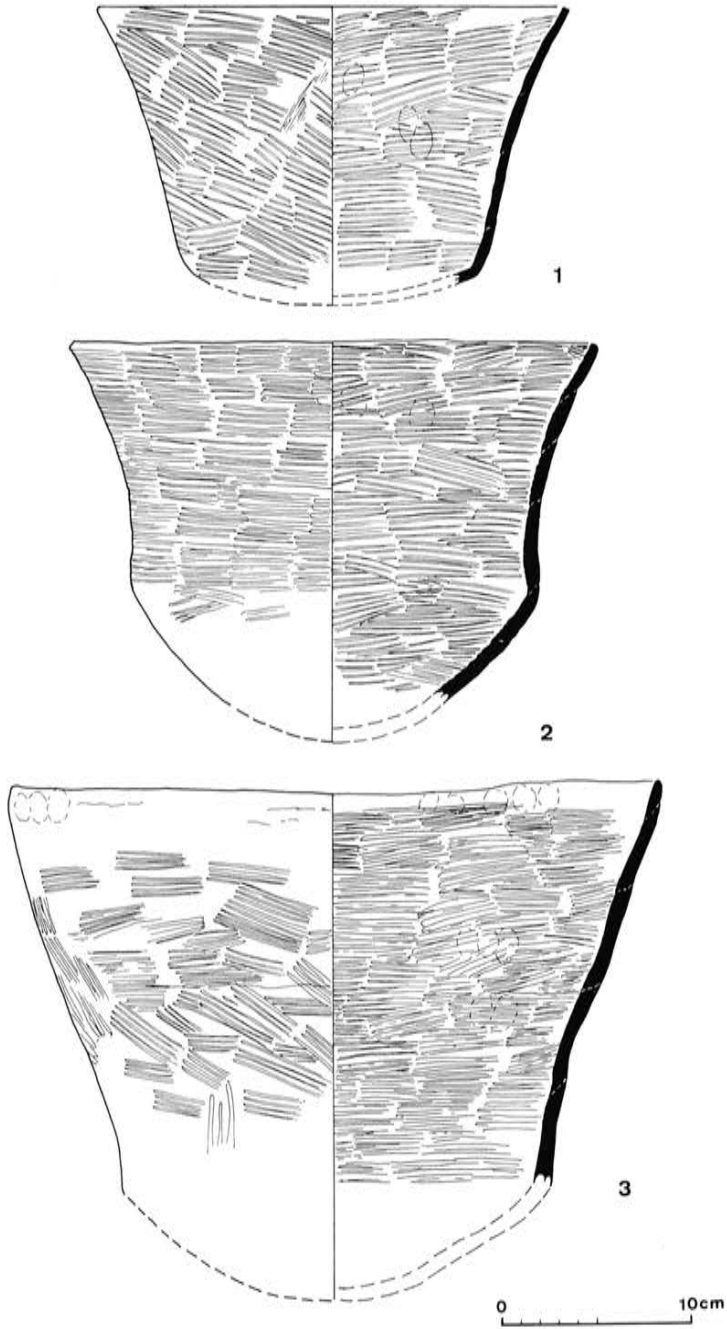
40は、深鉢形土器の口頸部で、復原口径34cm・現存高7.5cm程度を測る。頸部に1条、口縁直下に2条の隆起線を貼付して、Σ字状工具で刺突を加えている。

41は、復原口径30cm・現存高9cm程度を測る深鉢形土器である。文様は、頸部に2条の特殊突帯文が巡らされている。

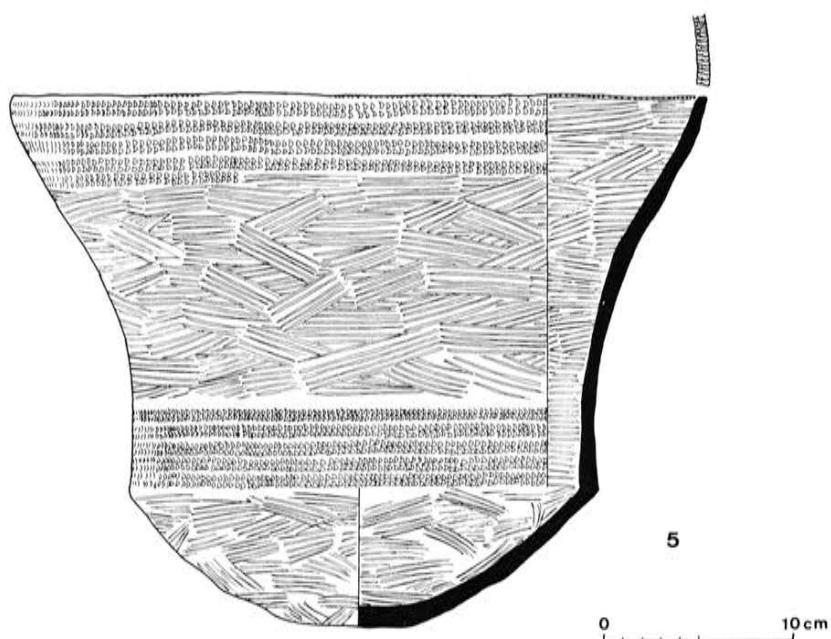
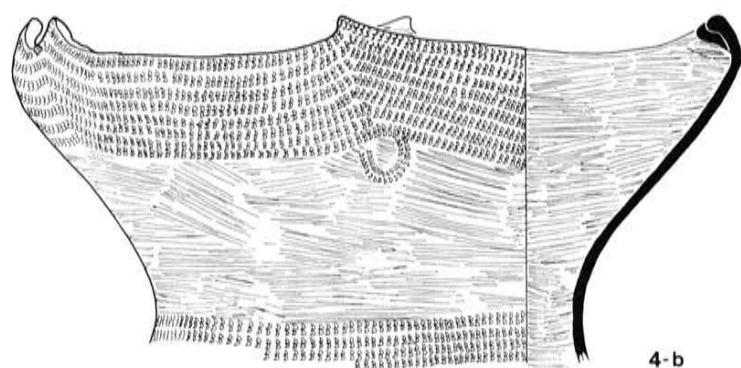
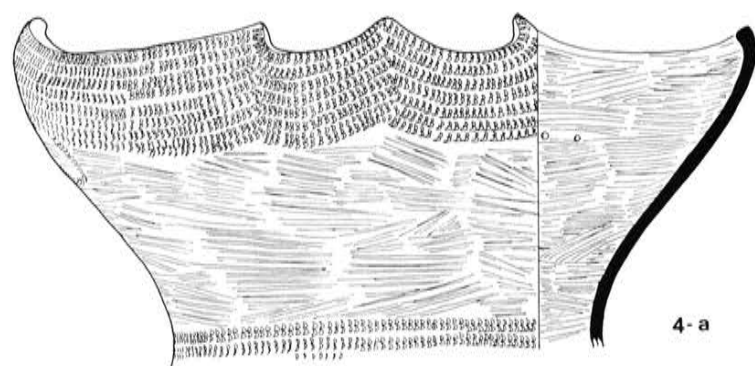
(三好 博喜)



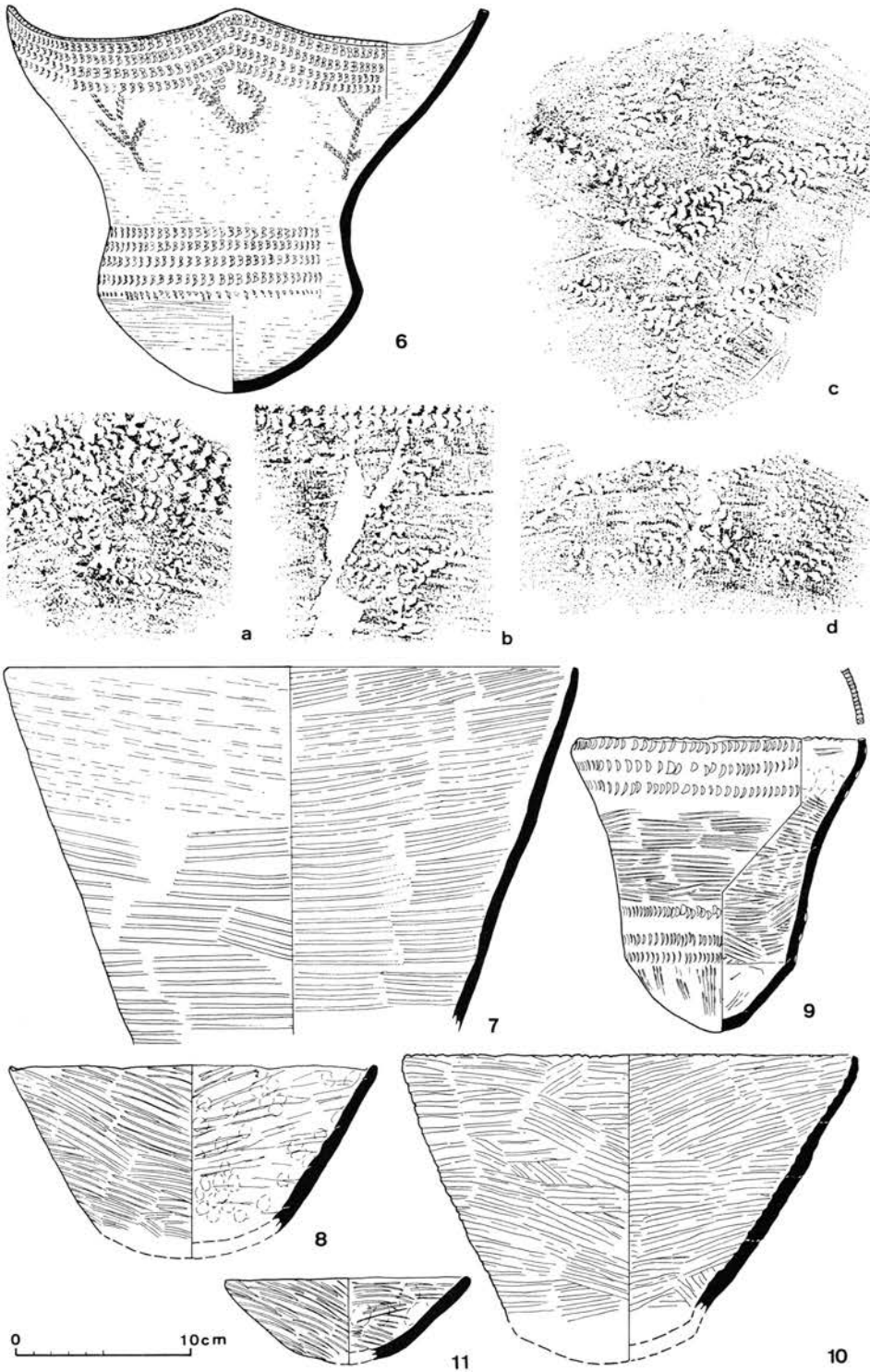
第30図 縄文土器実測図(1)



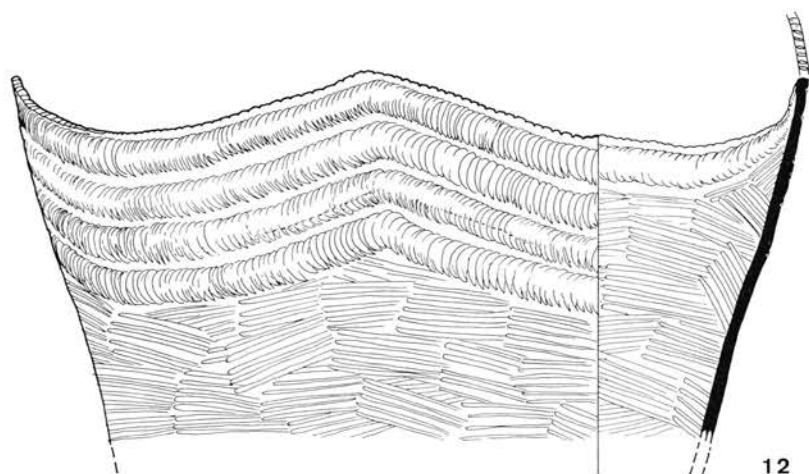
第31図 縄文土器実測図(2)



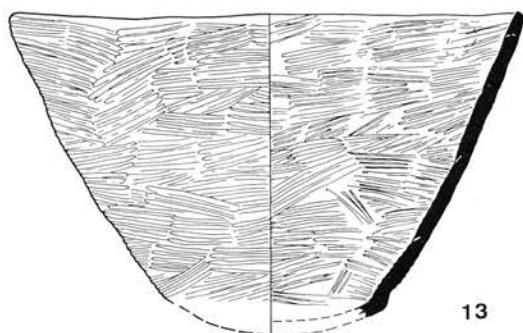
第32図 縄文土器実測図(3)



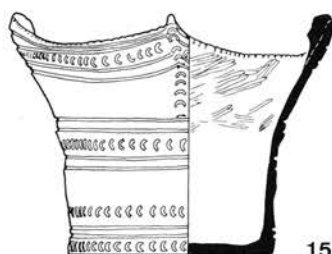
第33図 縄文土器実測図(4)



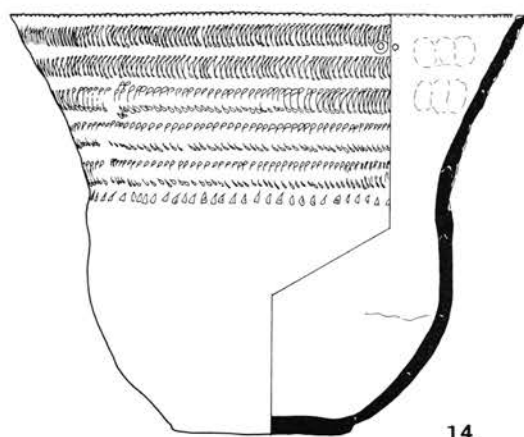
12



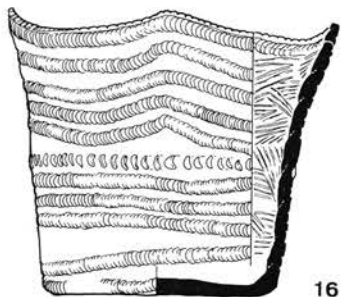
13



15



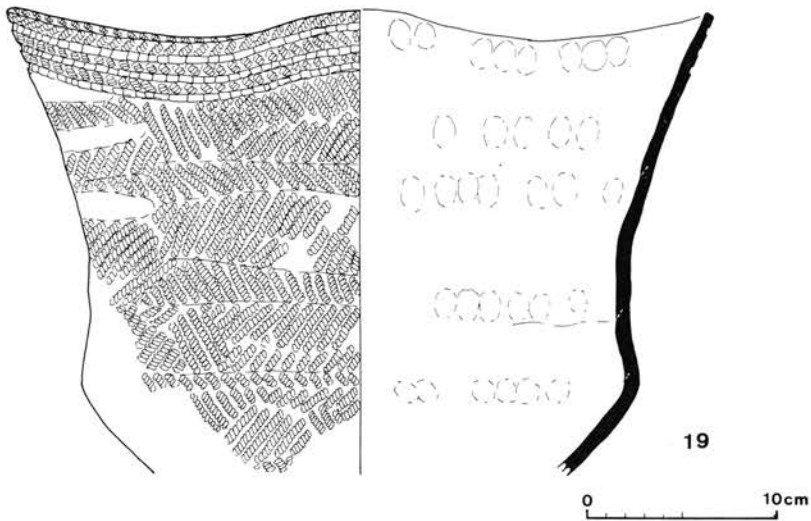
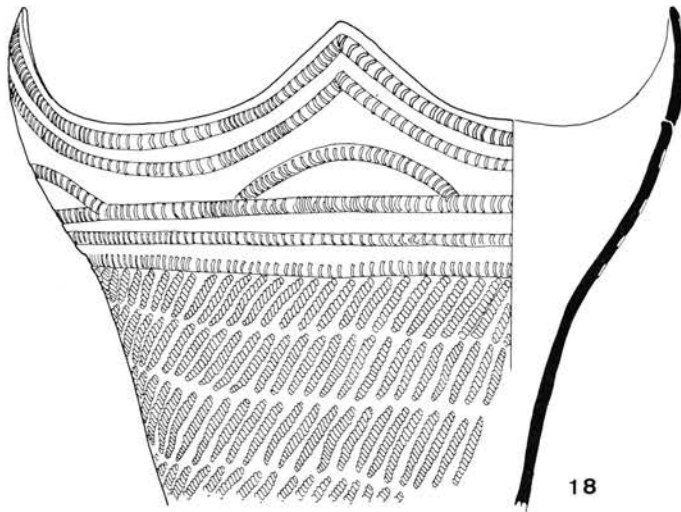
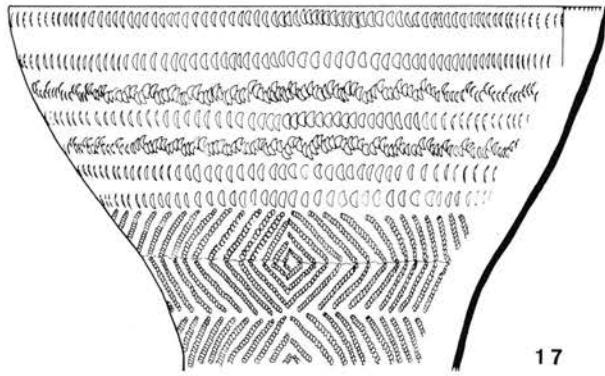
14



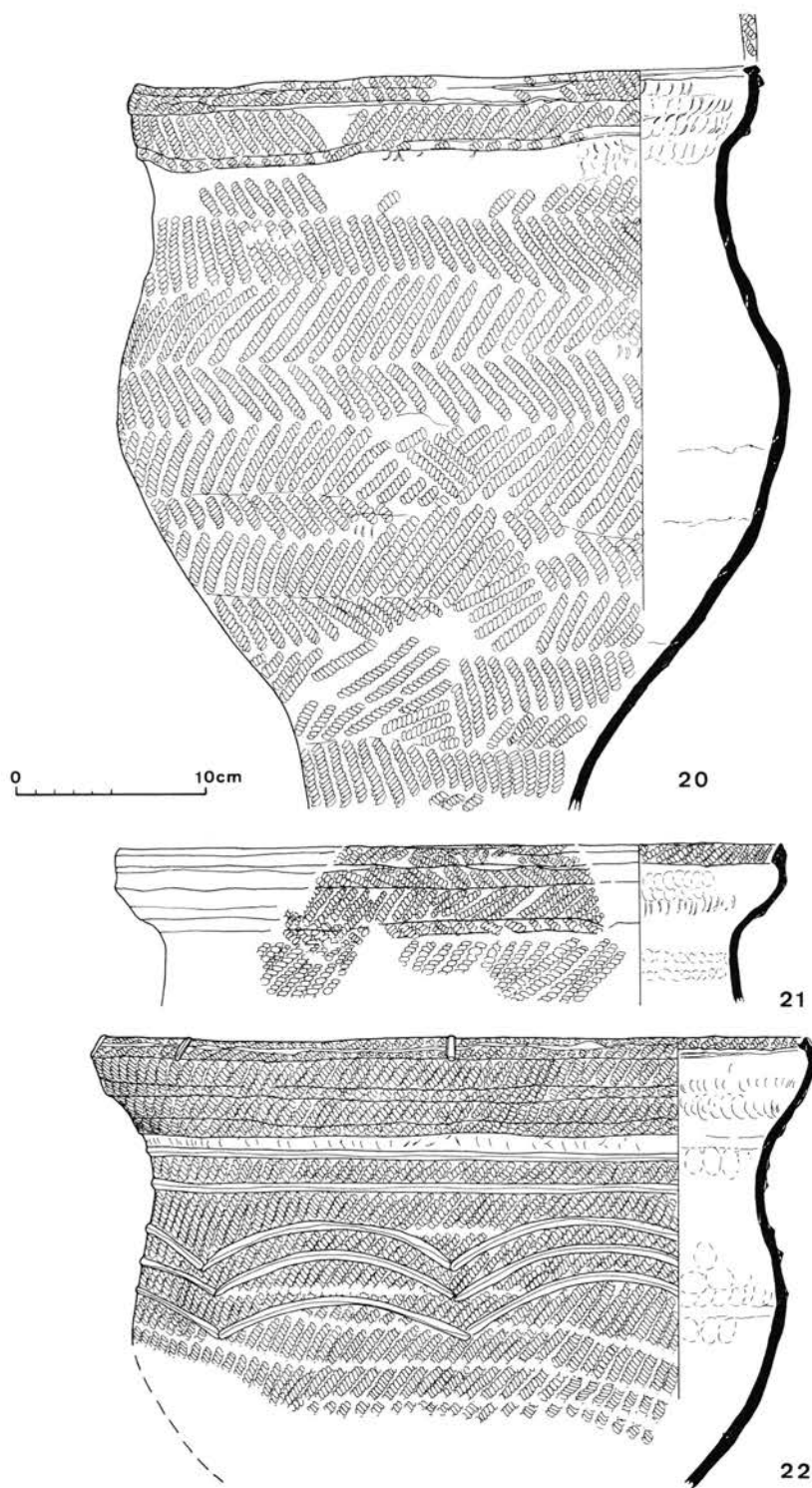
16

0 10cm

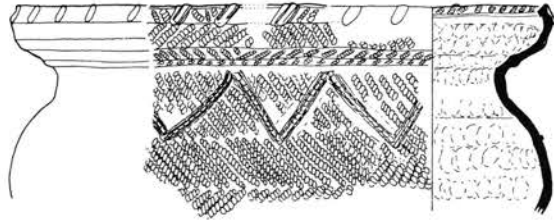
第34図 縄文土器実測図(5)



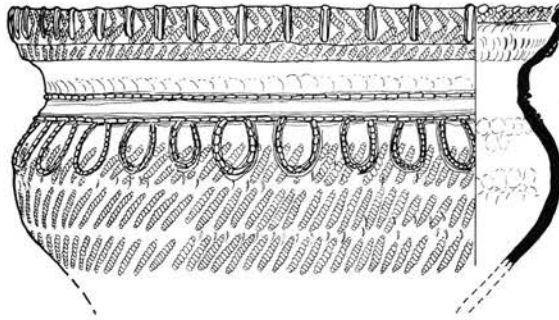
第35図 縄文土器実測図(6)



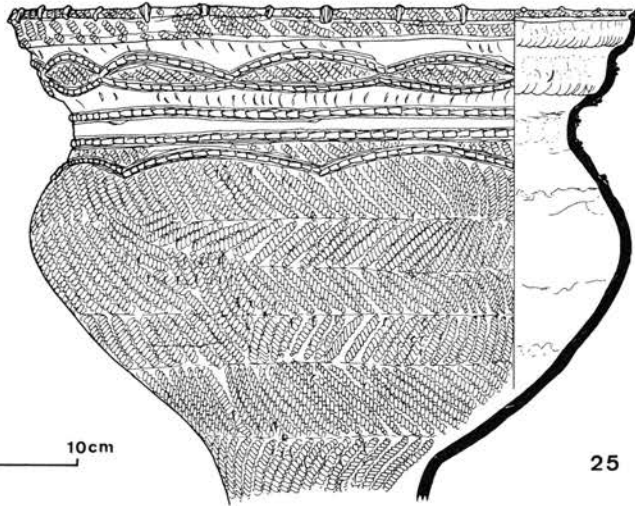
第36図 縄文土器実測図(7)



23

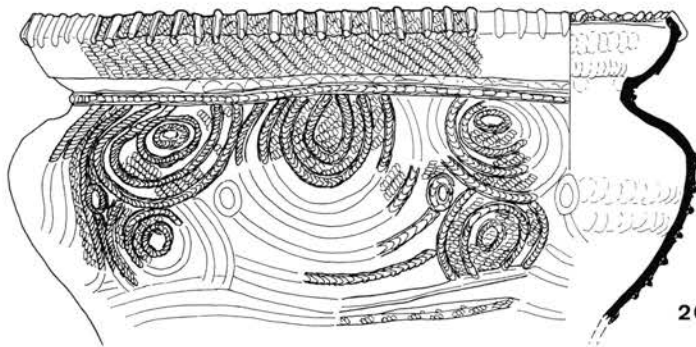


24



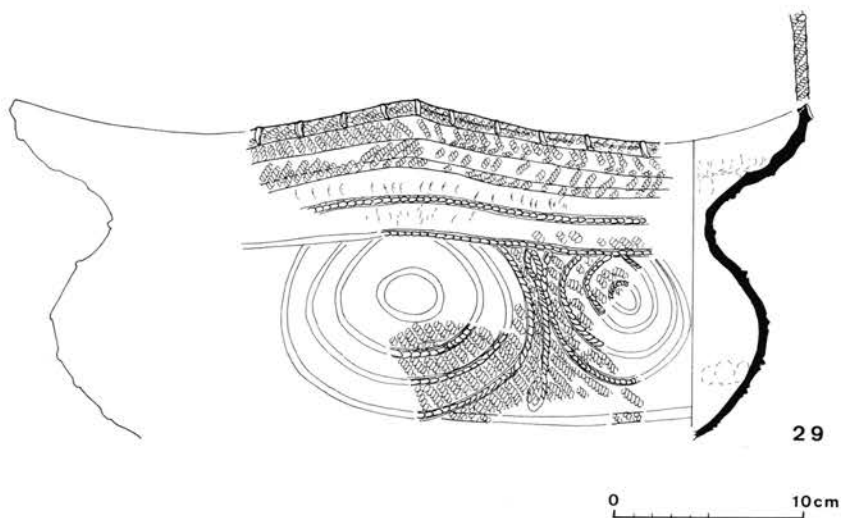
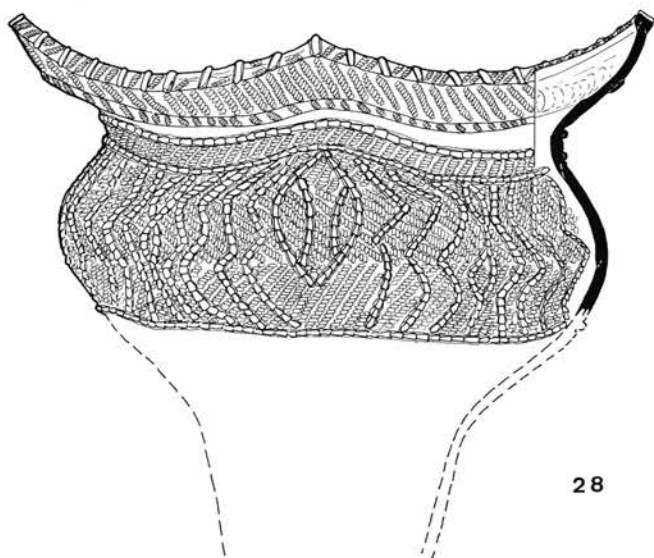
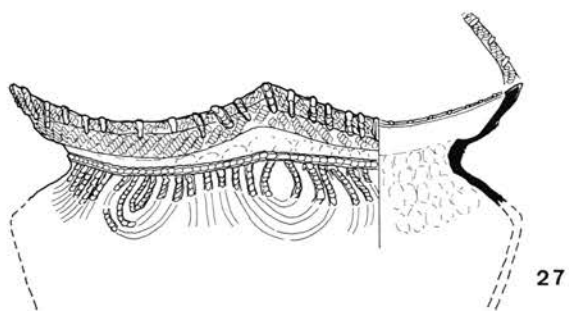
0 10cm

25



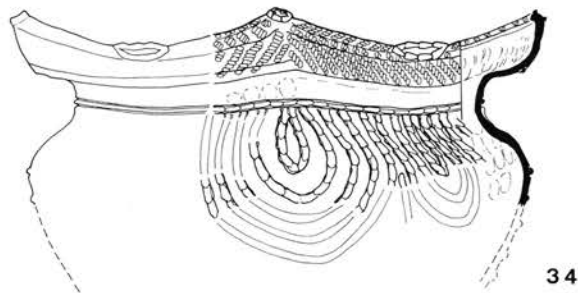
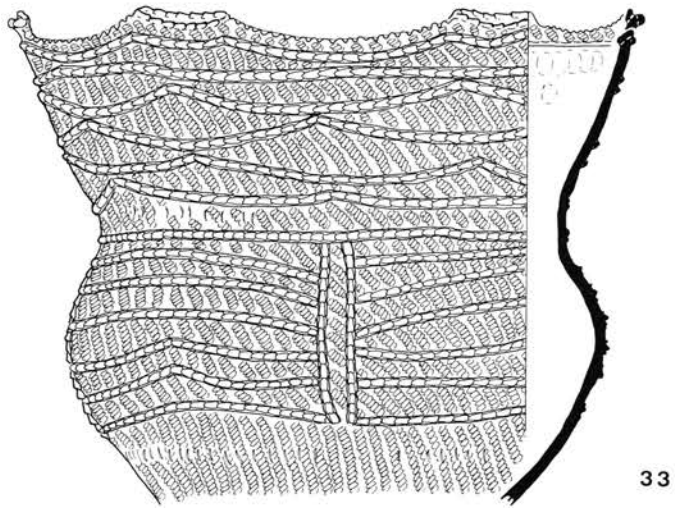
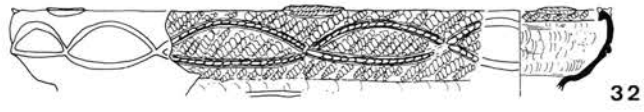
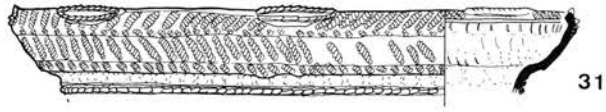
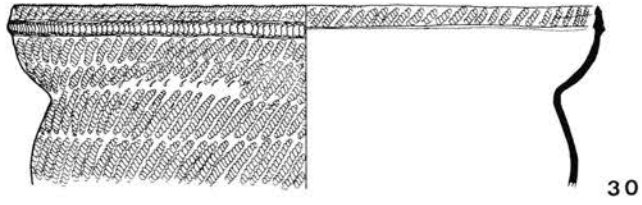
26

第37図 縄文土器実測図(8)



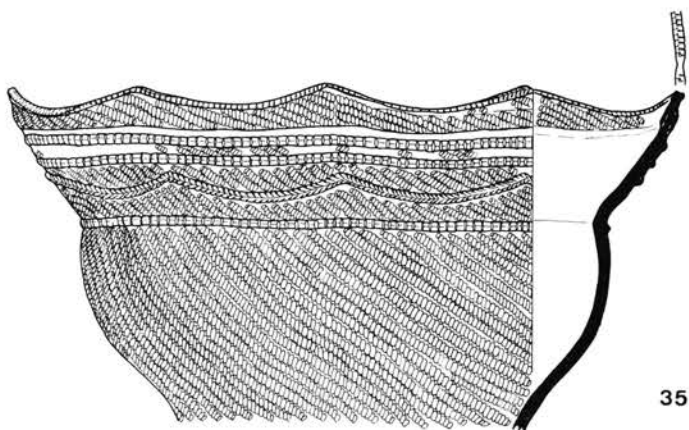
0 10cm

第38図 縄文土器実測図(9)

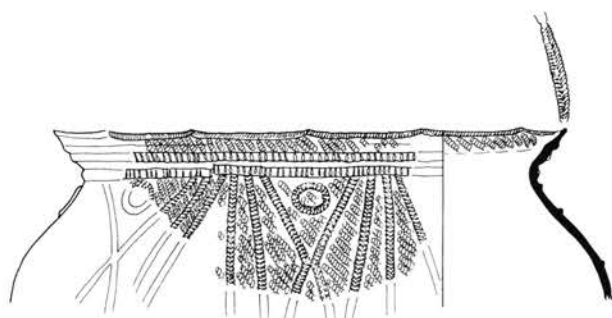


0 10cm

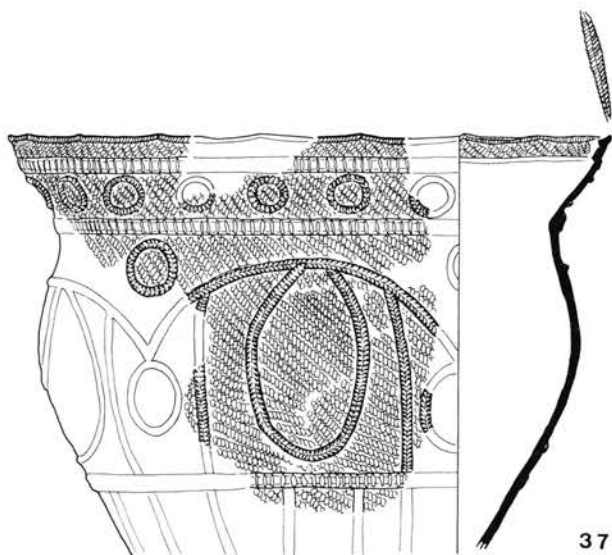
第39図 縄文土器実測図(10)



35



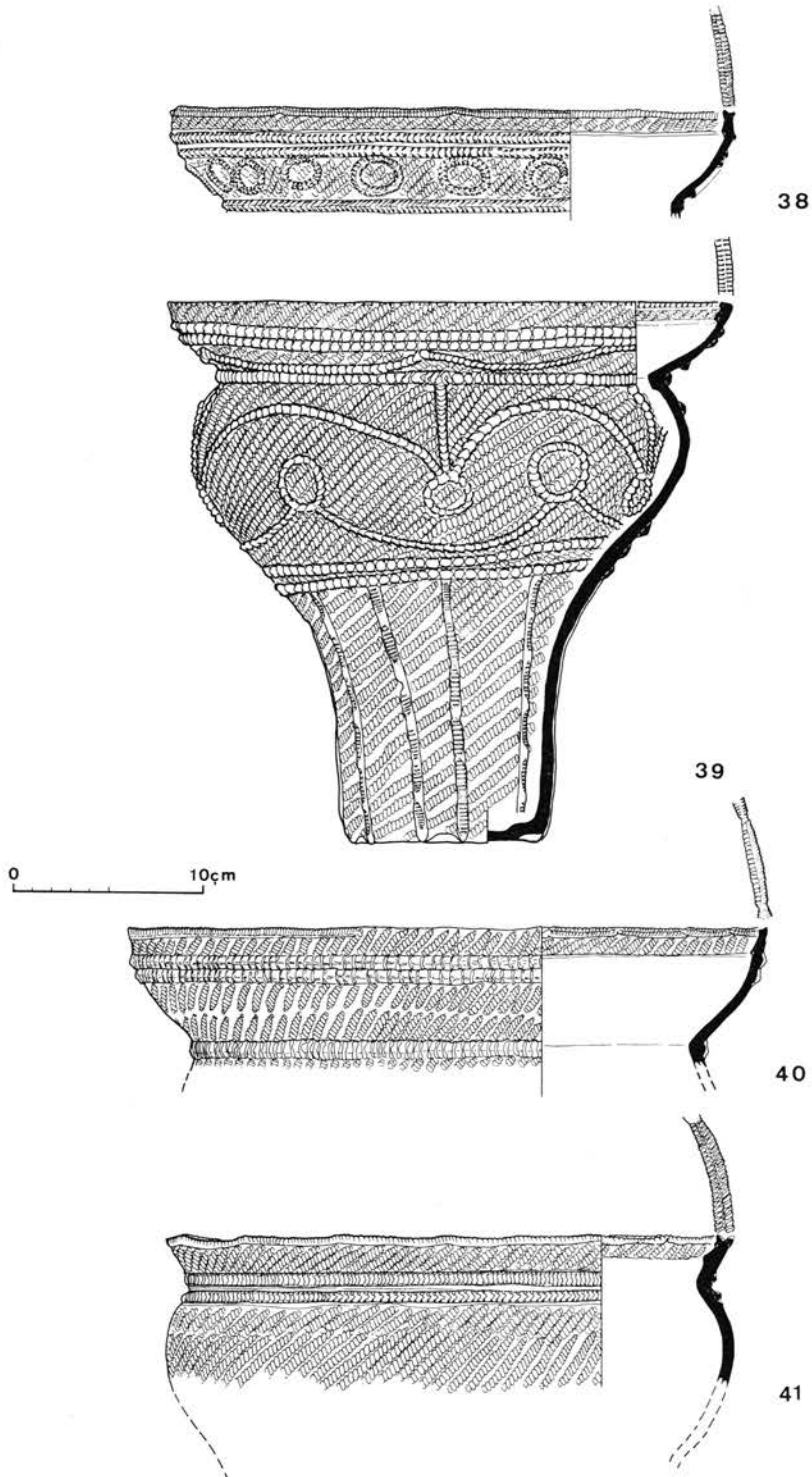
36



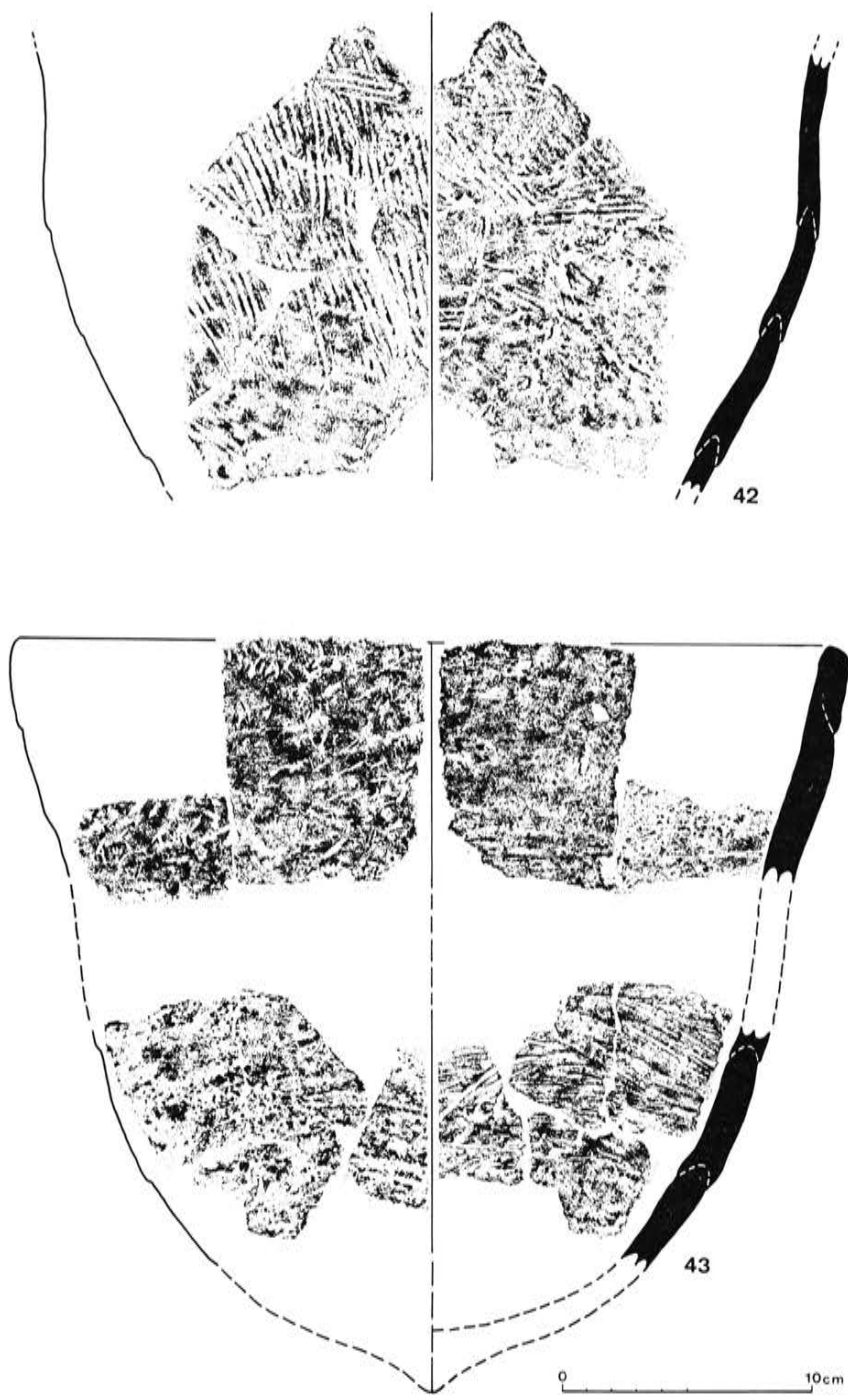
37

0 10cm

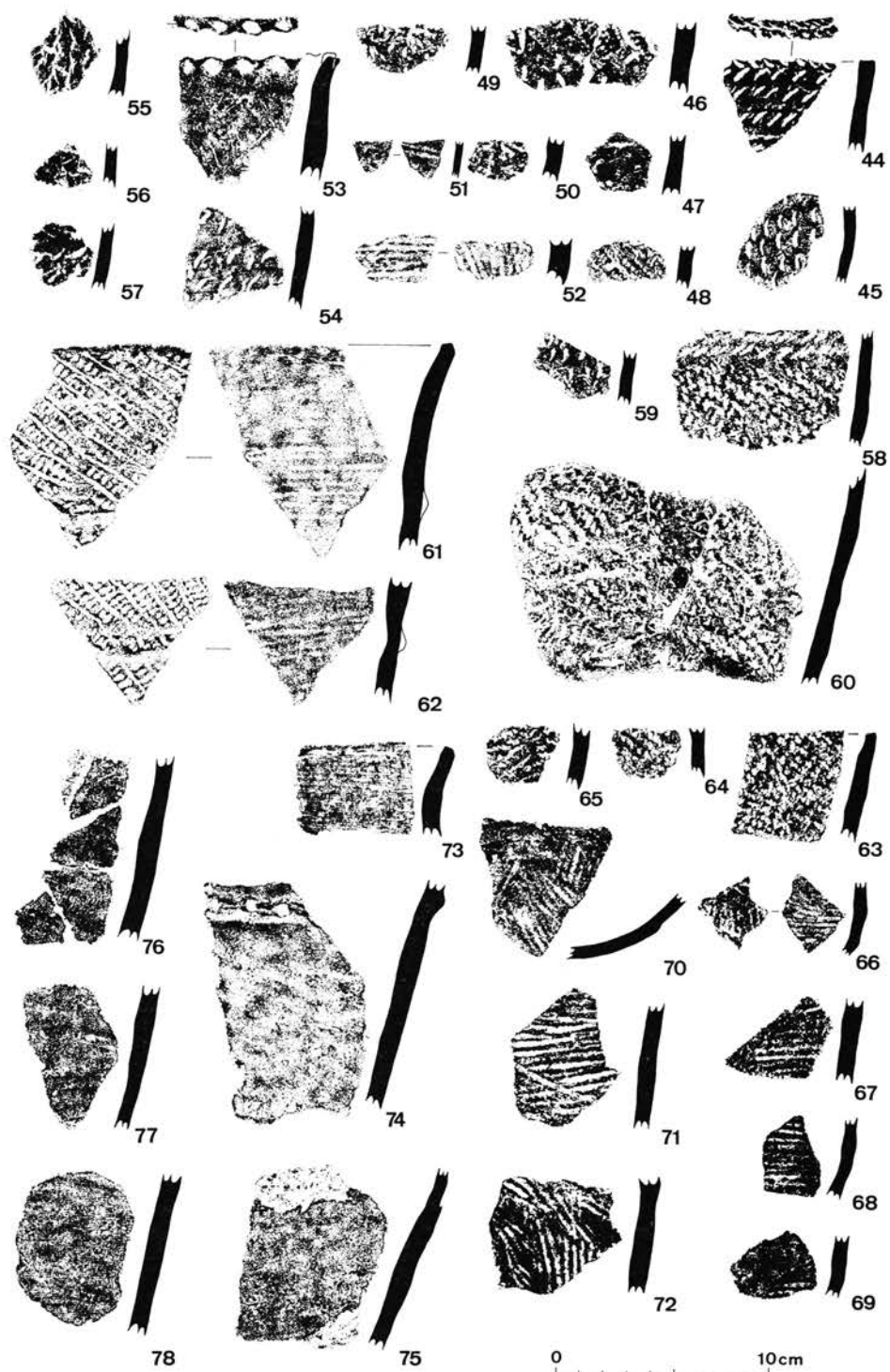
第40図 縄文土器実測図(1)



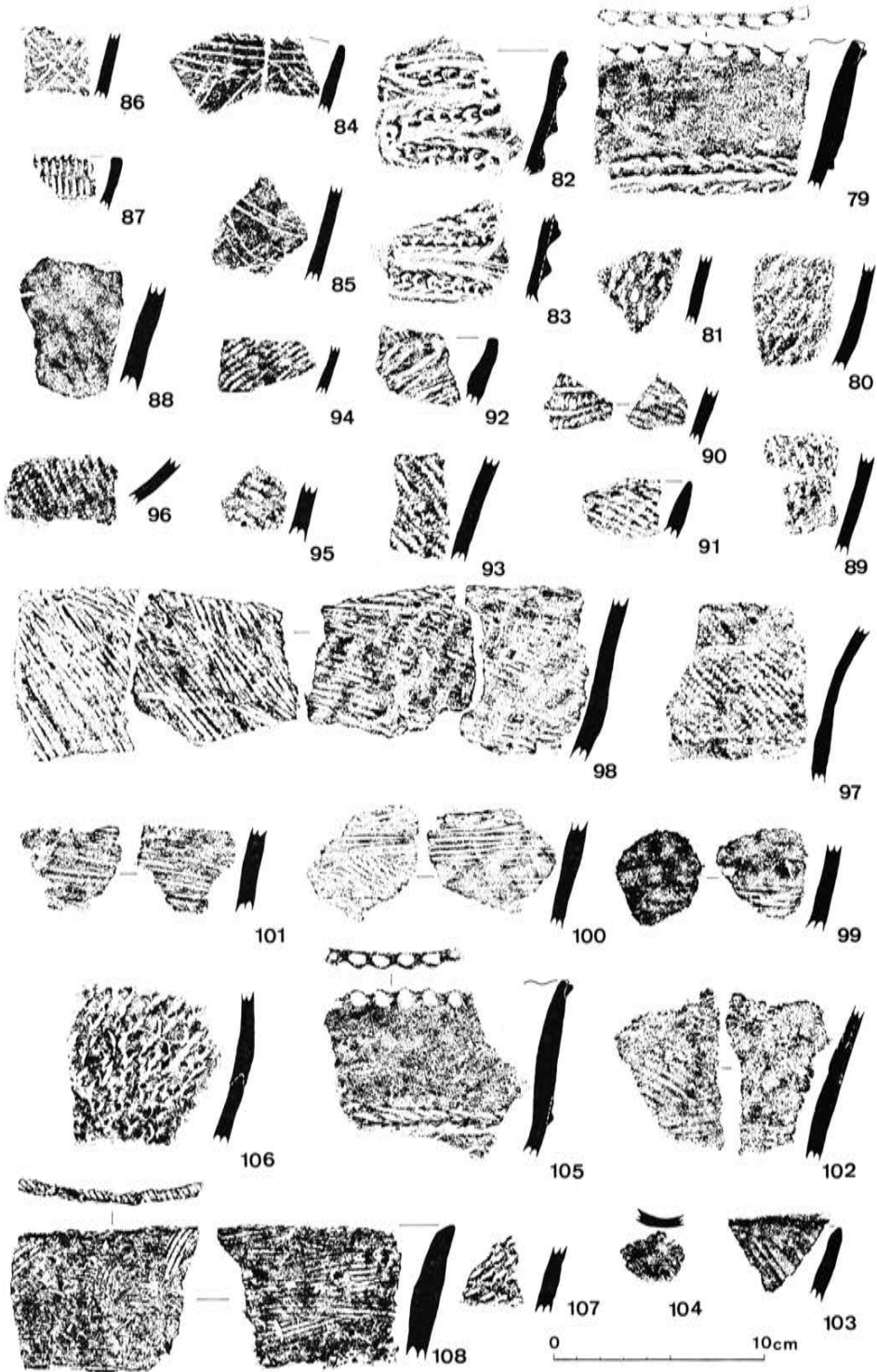
第41図 縄文土器実測図 (12)



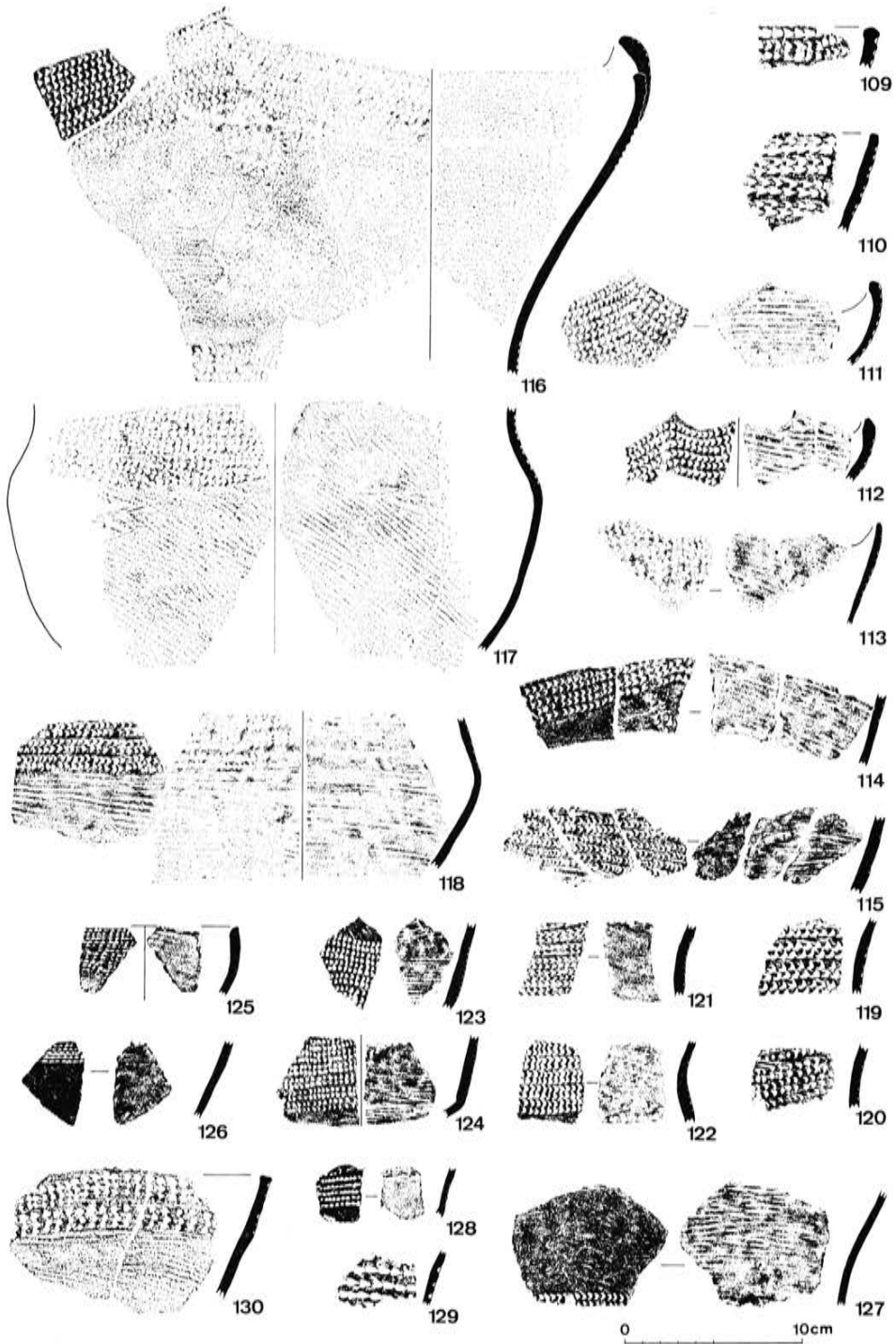
第42図 縄文土器拓影 (1)



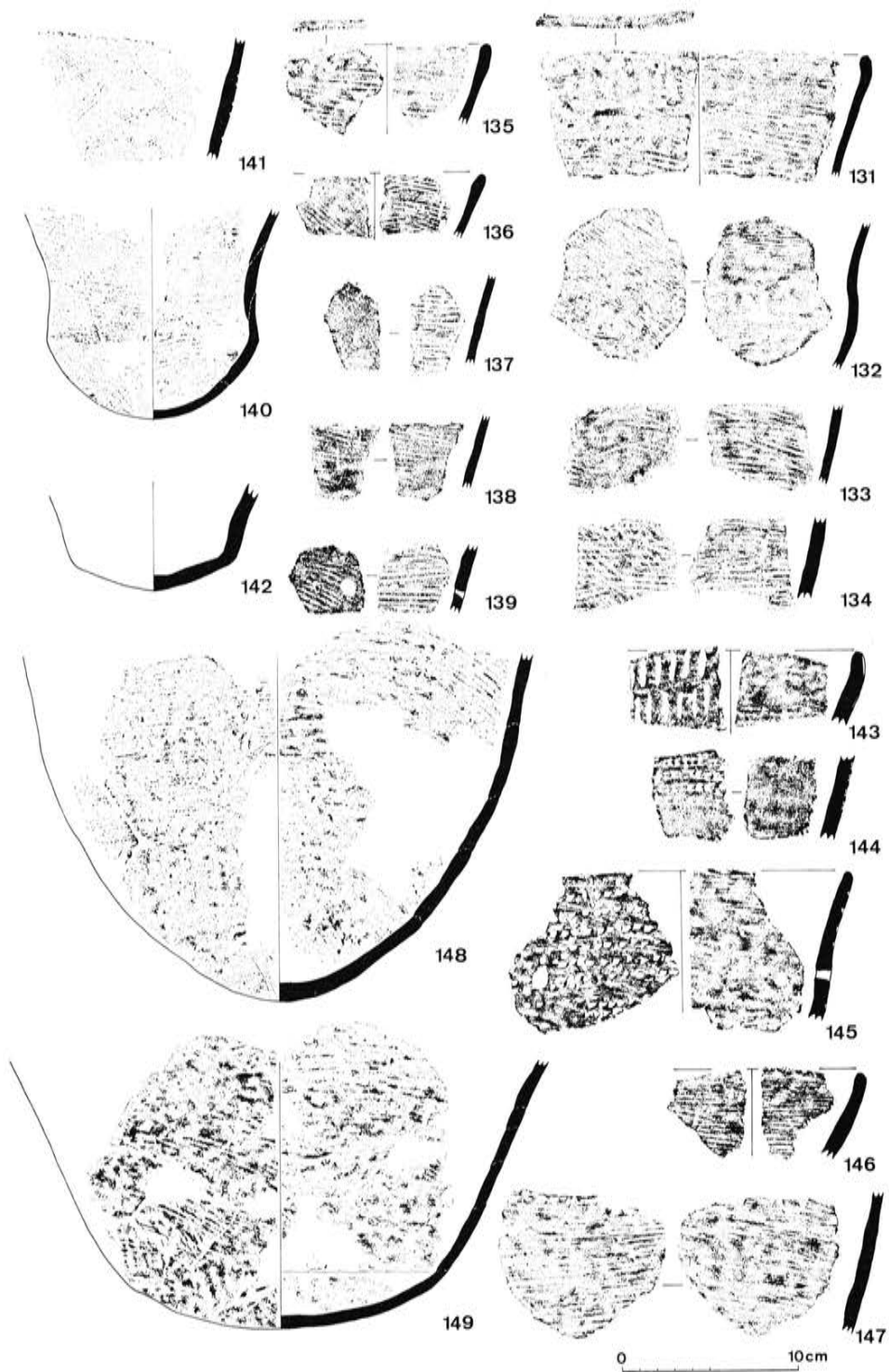
第43図 縄文土器拓影(2)



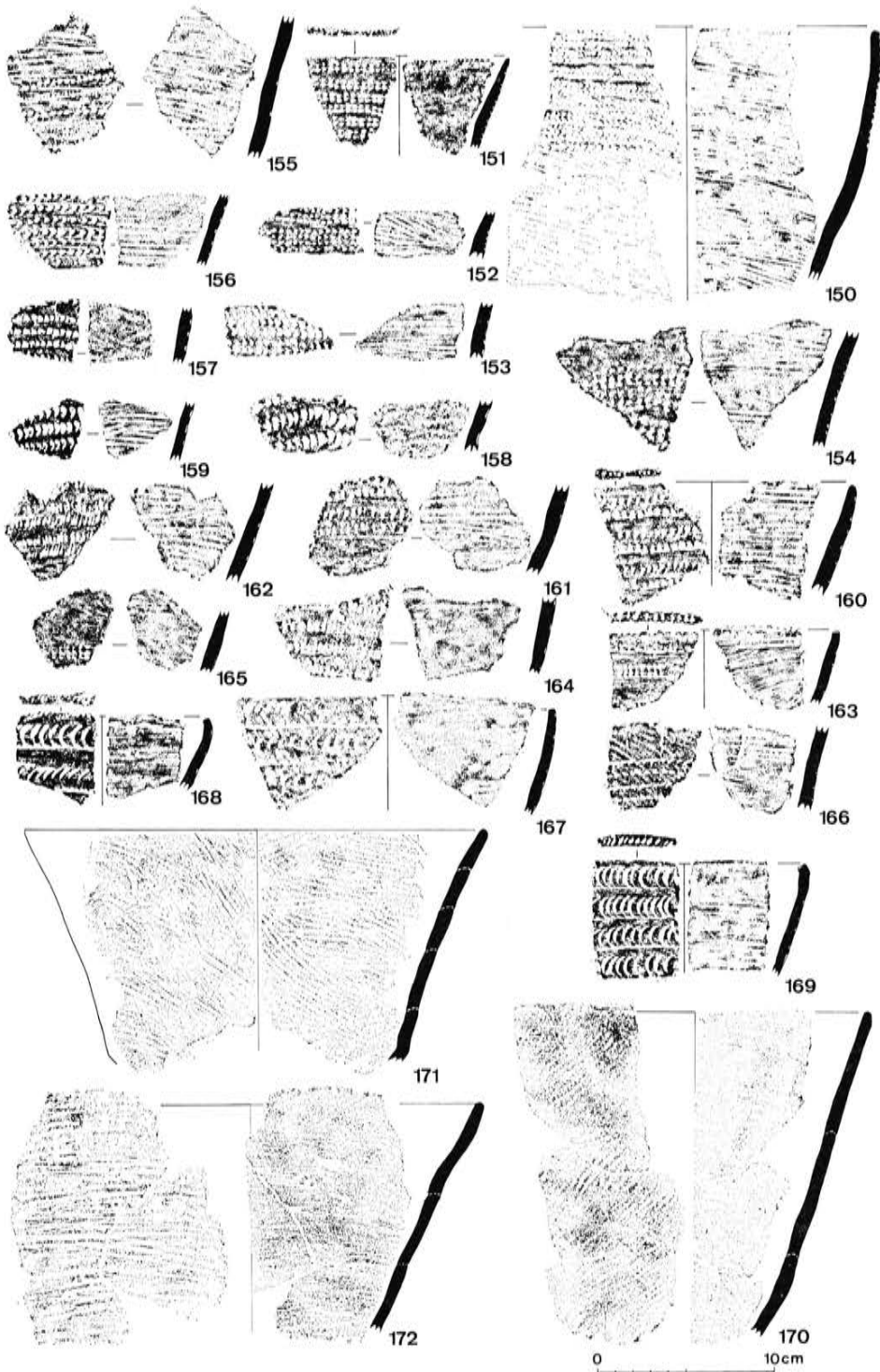
第44図 縄文土器拓影(3)



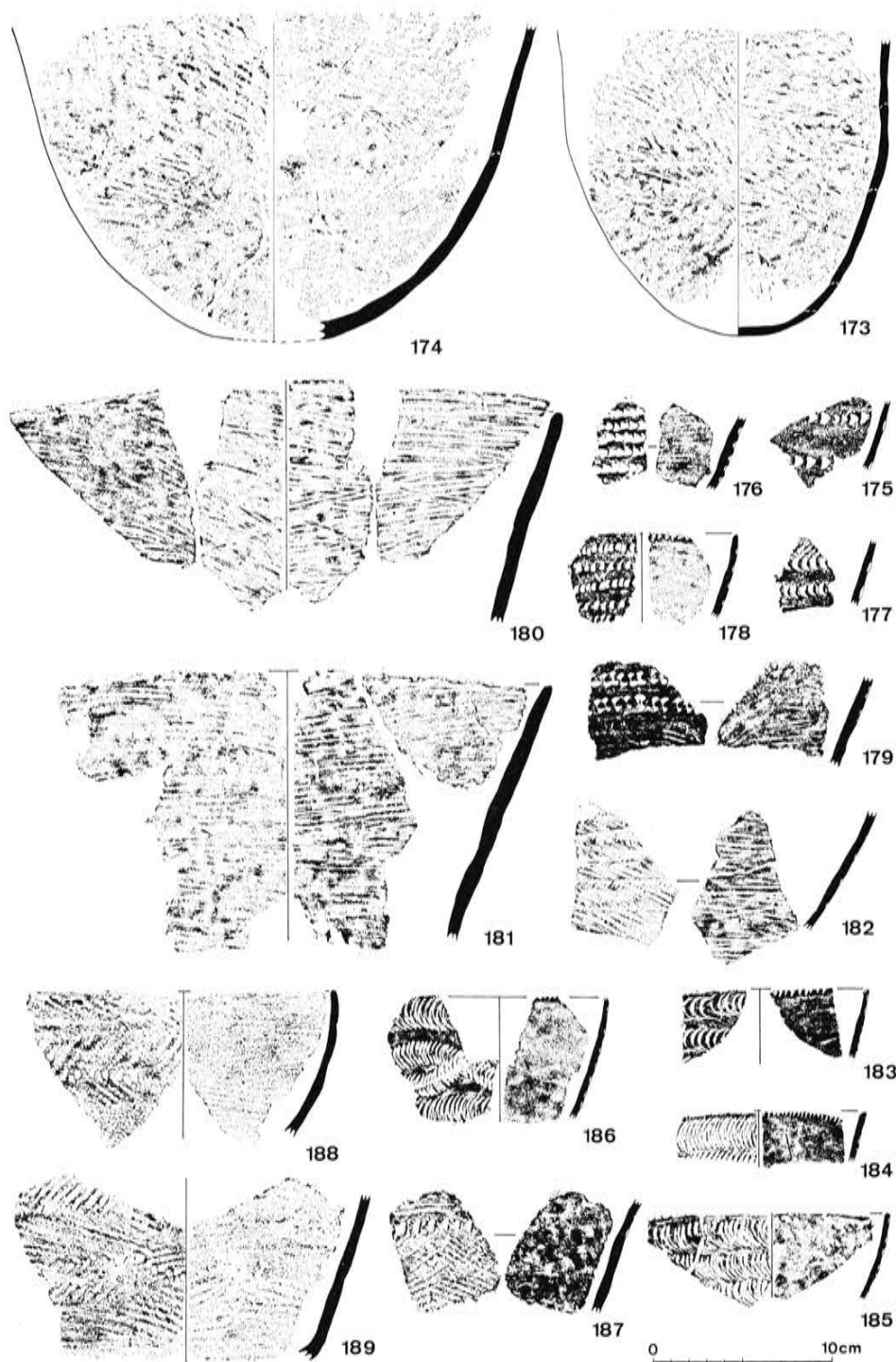
第45図 縄文土器 拓影 (4)



第46圖 縄文土器拓影(5)



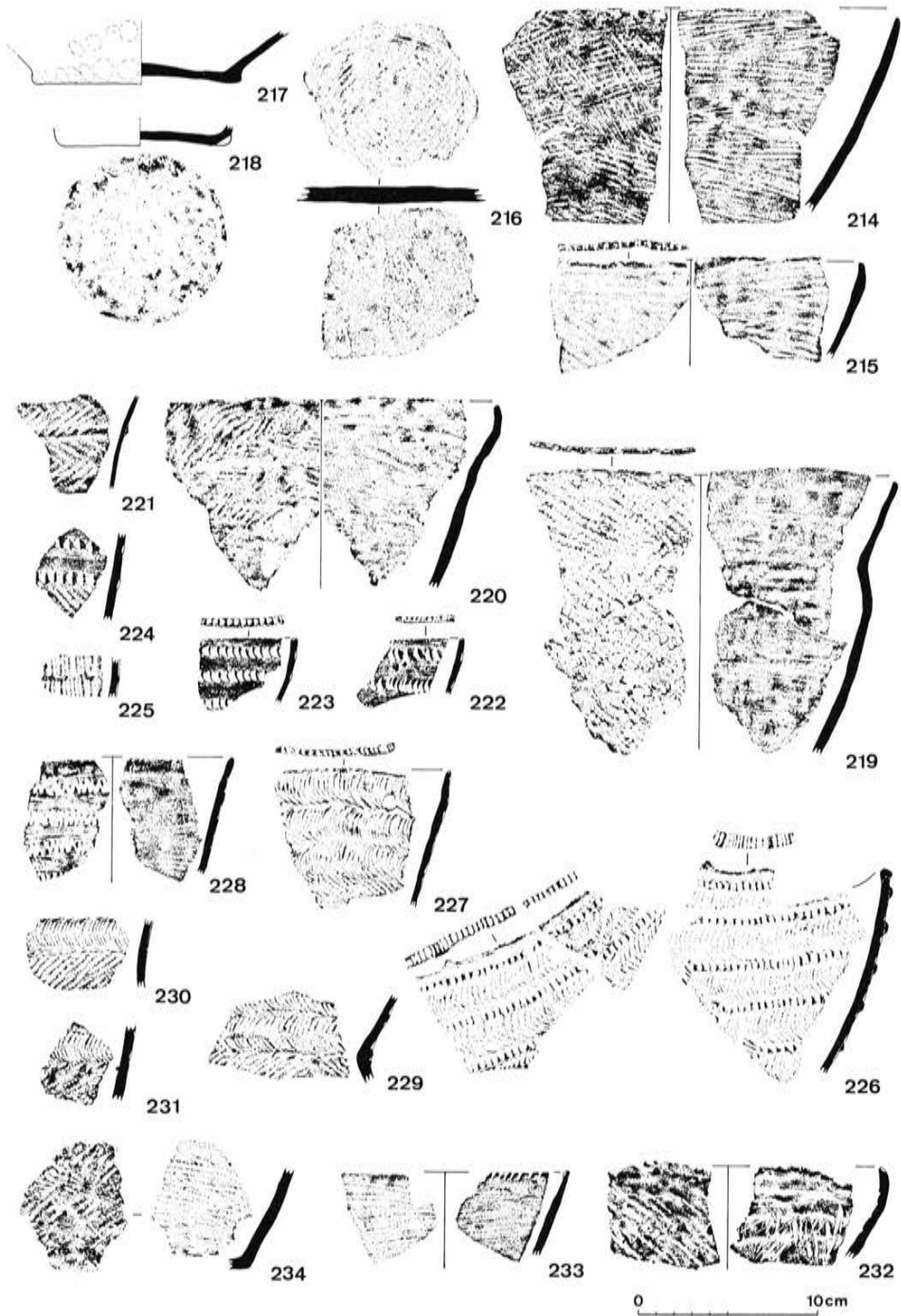
第47図 縄文土器拓影 (6)



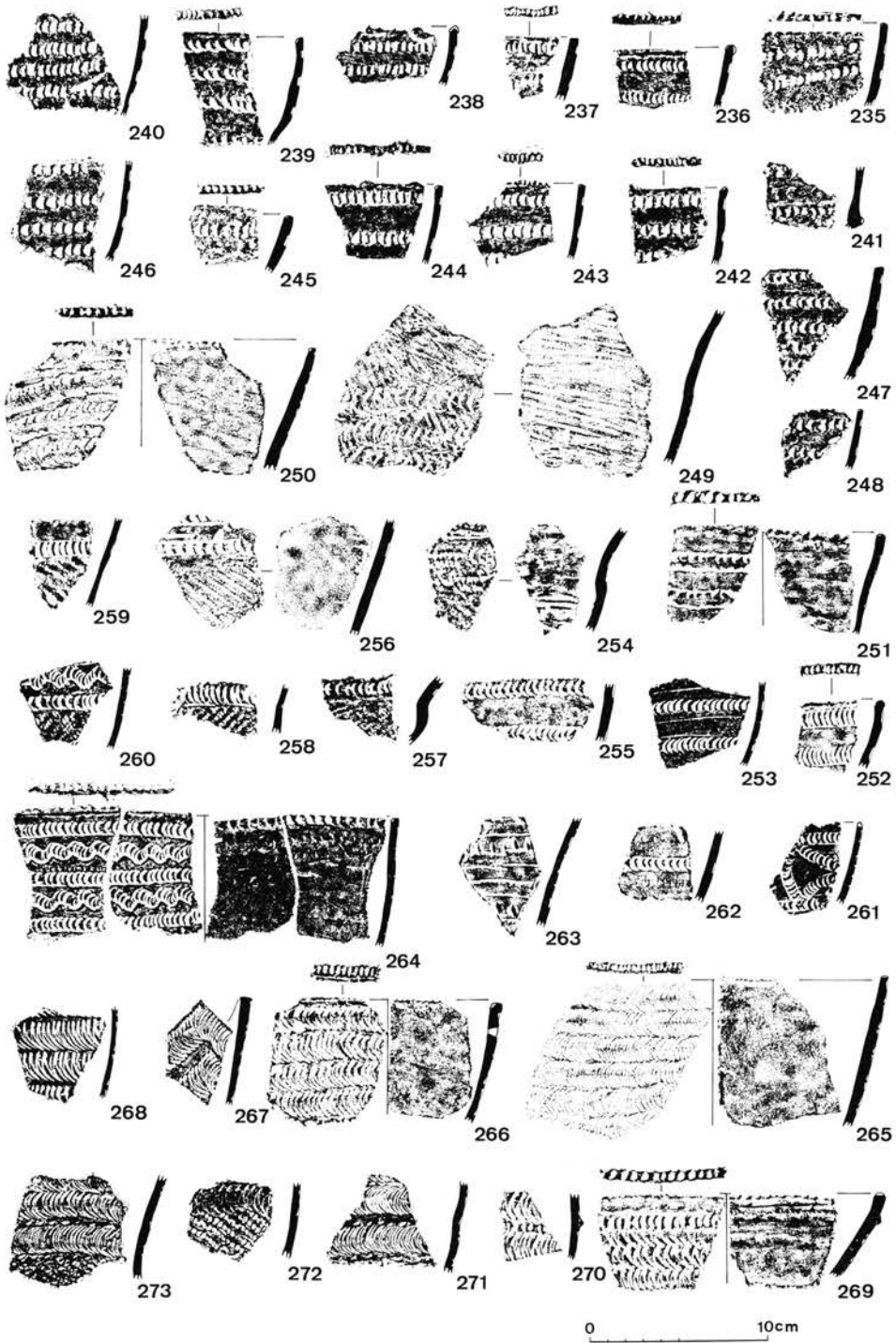
第48圖 縄文土器拓影(7)



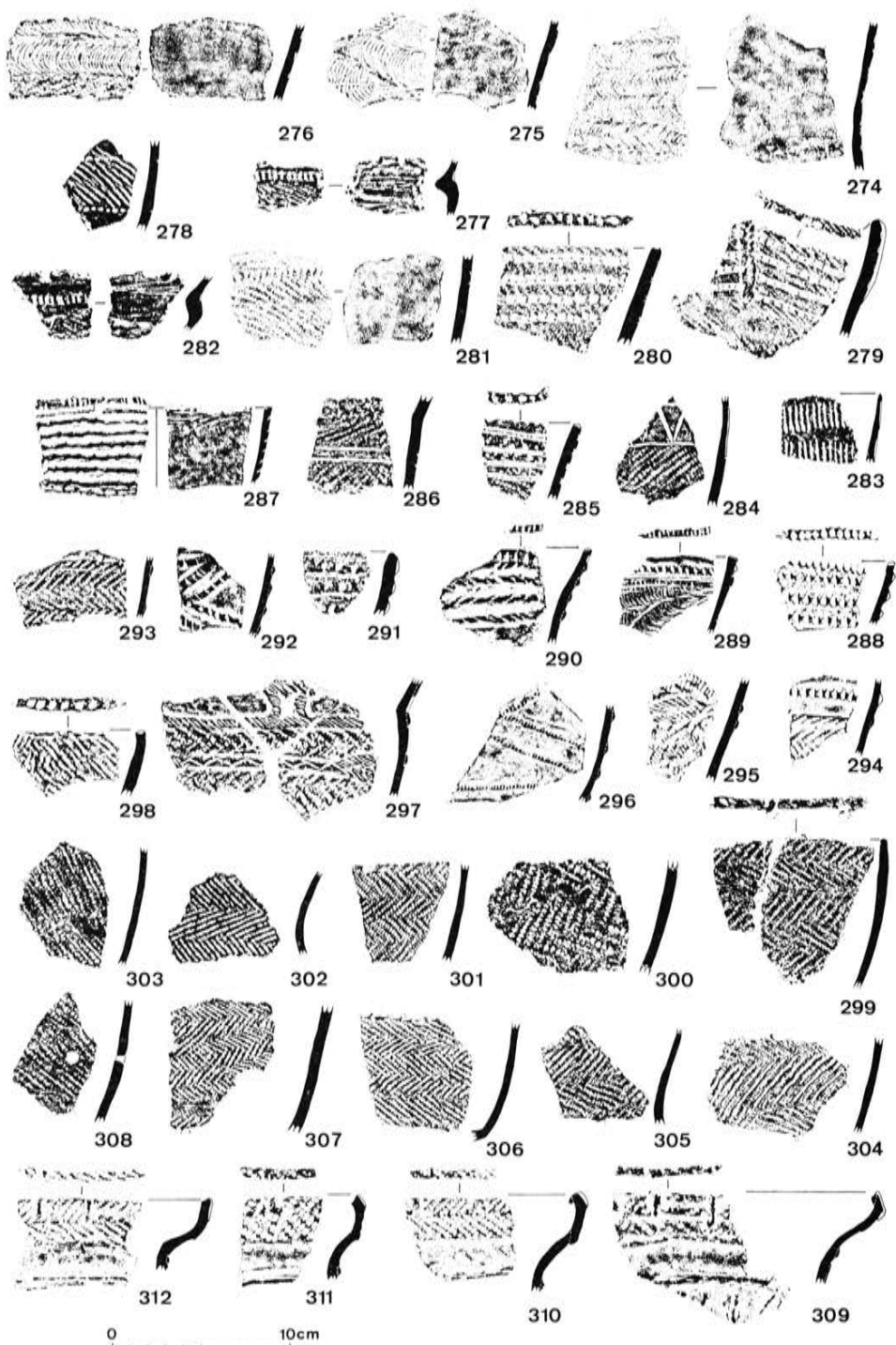
第49圖 繩文土器拓影 (8)



第50圖 縄文土器拓影(9)



第51図 縄文土器拓影 (10)



第52図 縄文土器拓影 (1)



第53図 縄文土器拓影 (2)



第54図 縄文土器拓影 ⑬



第55図 縄文土器拓影 (1)



第56図 縄文土器拓影 (5)

第4項 石器・石製品

(1) はじめに

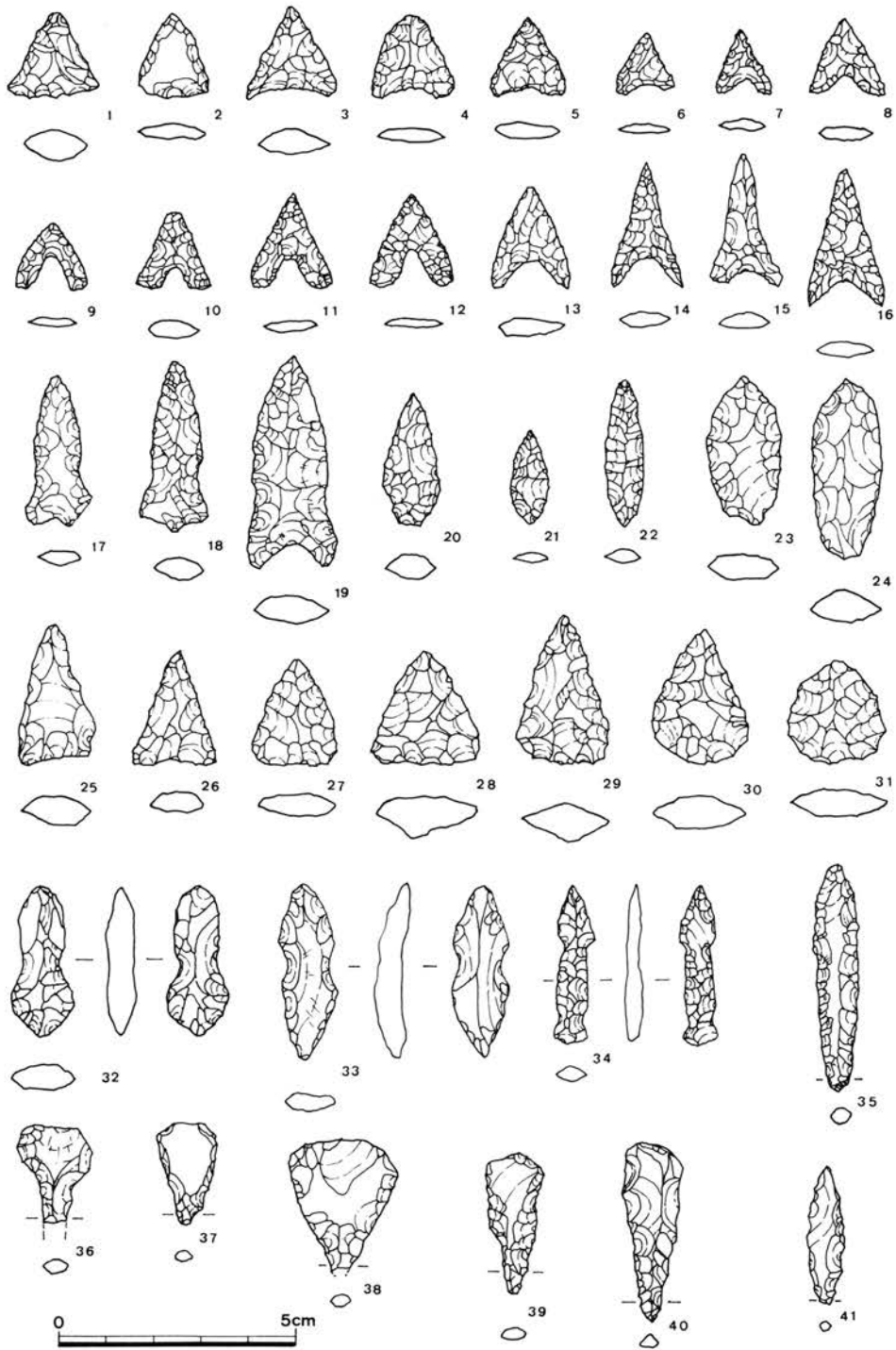
本遺跡から出土した縄文時代の定形的な石器・石製品は、別表のとおりである。住居跡、土坑等の遺構から検出されたものもあるが、その多くは遺物包含層から出土している。時期は、その大半が縄文時代前期に属するが、一部早期のものもある。前期のなかでも、大歳山式・北白川下層Ⅲ式(第1～3層)、北白川下層Ⅱ式(第4・5・6層)の資料が圧倒的に多く、遺構・土器類等の出土状況と一致している。それ以下では第7層が北白川下層Ⅰ式、第9・10層が羽島下層Ⅱ式に対応し、それ以下が早期に属する。なお、各石器をはじめ、楔形石器や不定形の搔器、削器類等、十分な検討にいたらず、今後課題を残している点も多い。

石材について、産地同定は行っていないが、小型利器には、いわゆるサヌカイトに類似した無斑晶安山岩、チャート、流紋岩が多用されている。チャートは、由良川が貫流する丹波山地や周辺の洪積世層中に包含され、この水系や海浜部でも転石等を採用することができる。また、他の二者については、近傍で明確な産地は知られておらず、少量ではあるが、使用されている黒曜石同様に遠隔地から搬入された可能性も強い。無斑晶安山岩は、そのなかでさらに産地が分化するものと考えられる。

(2) 石鏃(第57図)

石鏃は、周辺での採取品も含めると300余点あり、石器の中では群を抜く出土数である。石材は、無斑晶安山岩がもっとも多く、チャート、流紋岩がそれにつぎ、少量ながら、頁岩、黒曜石等も用いられている。形態は、変化に富むが、基部で見ると、凹基式のものが多く、平基式がそれにつぐ。他に、木葉形、柳葉形、菱形などの形態があるが、明確な茎部をつくりだしたものはない。細部で見ると、数の多い凹基式の中でも、脚部の形状や長さ、えぐりの深浅、側縁の線形(直線、曲線)、先端部の角度などに変化があり、さらに多くの形態に分けることができる。重量では、1g前後のものが多いが、中には7gに及ぶものがあり、石鏃として分類しているが、石槍としての用途を考えなければならぬものも含んでいる。

石材について、資料の多い北白川下層Ⅲ式期と同Ⅱ式期で比較すると、前者では、安山岩が圧倒的に多く、約2/3をしめ、残りの約1/3ではチャートと流紋岩がほぼ同数である。後者では、安山岩とチャートがほぼ同数であるのに対し、流紋岩はそれらの1/10と減少している。



第57図 縄文時代石器実測図(1) 石鏃・異形石器・石錐

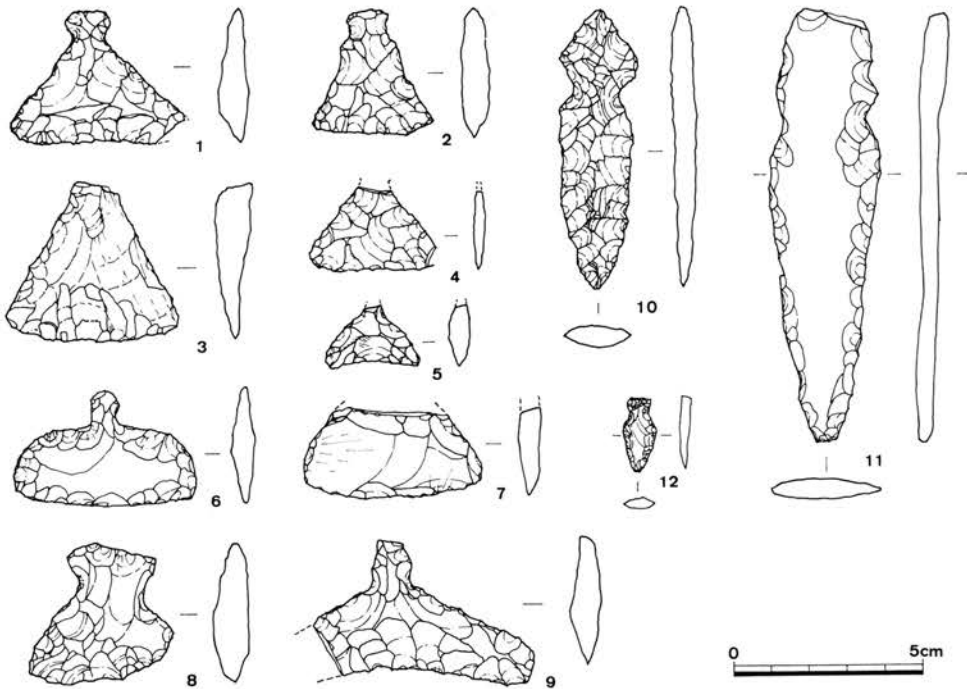
(3) 石七(第58図)

15点出土し、形態には、北白川下層式の時期に特徴的とされる三角形のもの、その他の横長のもの、縦長のものがある。横型のものの刃部には、直線、内湾、外湾するものの3種が見られる。片面または両面に大きく初期剥離面を残すものが多いが、縦型の10は、両面ともにていねいな押圧剥離が行われ、断面も薄いレンズ状を呈し、石槍としての用途も考えさせられるものである。

石材は、石鏃と同様に、安山岩、チャートが多いが、12は、黒曜石製で極めて小型である。また、3と5は、石英(水晶)が用いられている。石英は加工の困難な石材とされるが、この地方では、数は少ないものの、数か所の遺跡で、石鏃・石七として出土している。

(4) 石鏃(第57図)

棒状のものと、平面が三角形に近いものがある。チャート及び無斑晶安山岩が用いられ、14点を数える。形状では、石鏃と極めて類似するものも見受けられる。



第58図 縄文時代石器実測図(2) 石七

(5) 石斧類(第59図)

磨製石斧は、16点出土しているが、欠損品が多く、全体の形状のわかるものは少ない。大きくは、刃部でみると、幅5cm前後の大型品と、幅2cm強の小型品に分けられる。各部から全体を類推すると、大型品は、丸みをもったやや平坦な頭部から、下方に広がる側縁を持ち、蛤刃状の刃部が形つくられ、全長は、残りのよいものの1つで12.5cmを測る。小型品は、比較的扁平で、刃部の角度も鋭く、完形品で全長8cmである。石材は、蛇紋岩が多く、ほかにひん岩、粘板岩、流紋岩等が用いられている。

打製石斧は、1点あり、扁平な粘板岩を用い、一部に自然面を残している。縁辺に粗い剝離を加え、形を整えている。

(6) 異形石器(第57図32~34)

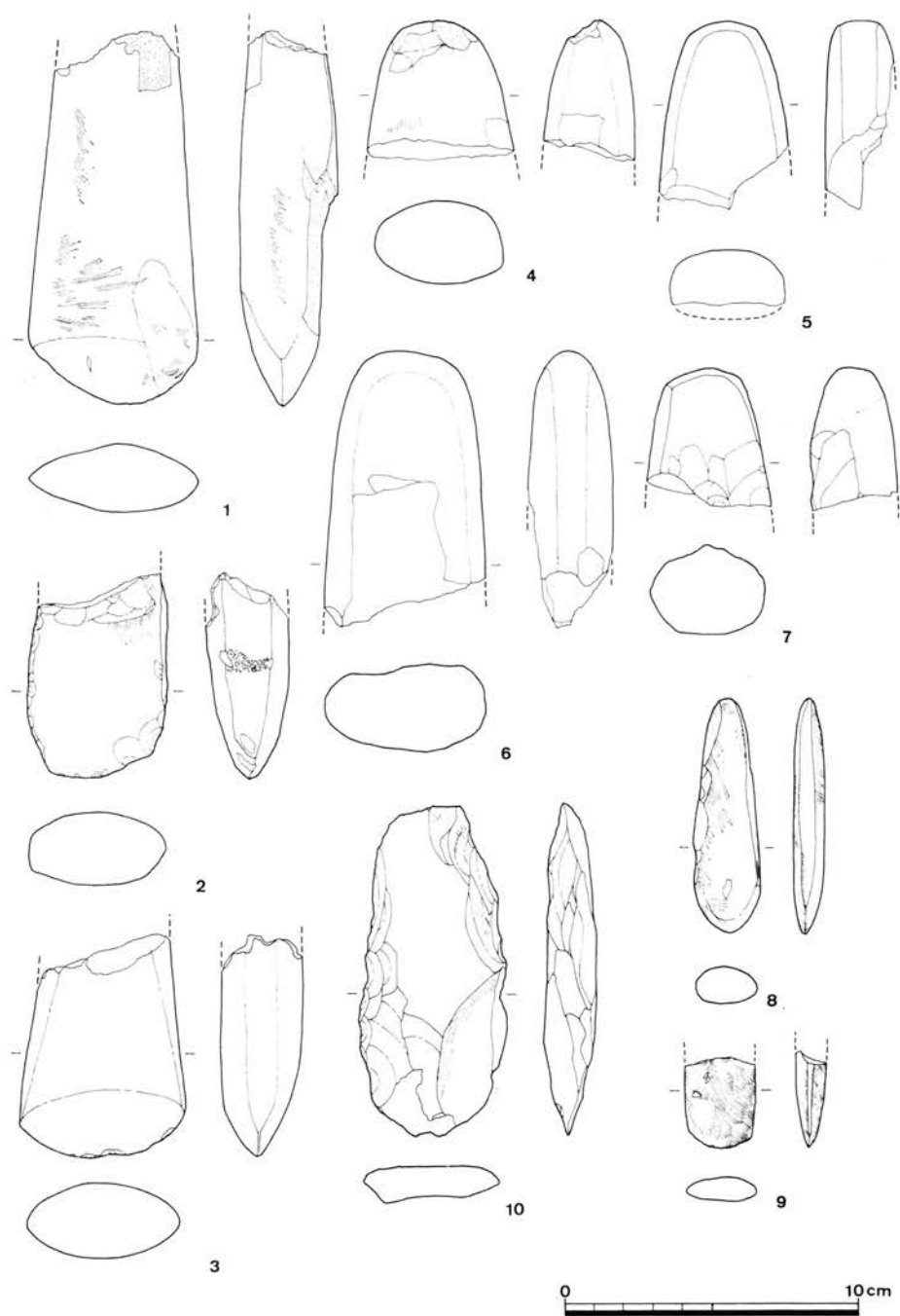
32と33は、いわゆるリボン状とか、蝶ネクタイ状の石器と形容されるものである。ともに無斑晶安山岩の横長剥片を用い、長軸の中央部に両側から抉り込みをいれている。33は、剥片の湾曲線を残し、調整がやや粗い。34は、矢印状を呈する石器で両面ともていねいな調整が施されている。茎状にのびる下端にも小さい抉り込みがある。石ヒあるいは石鏃の範疇に入るものと考えられるが明確ではない。

(7) 磨石・敲石類(第60図)

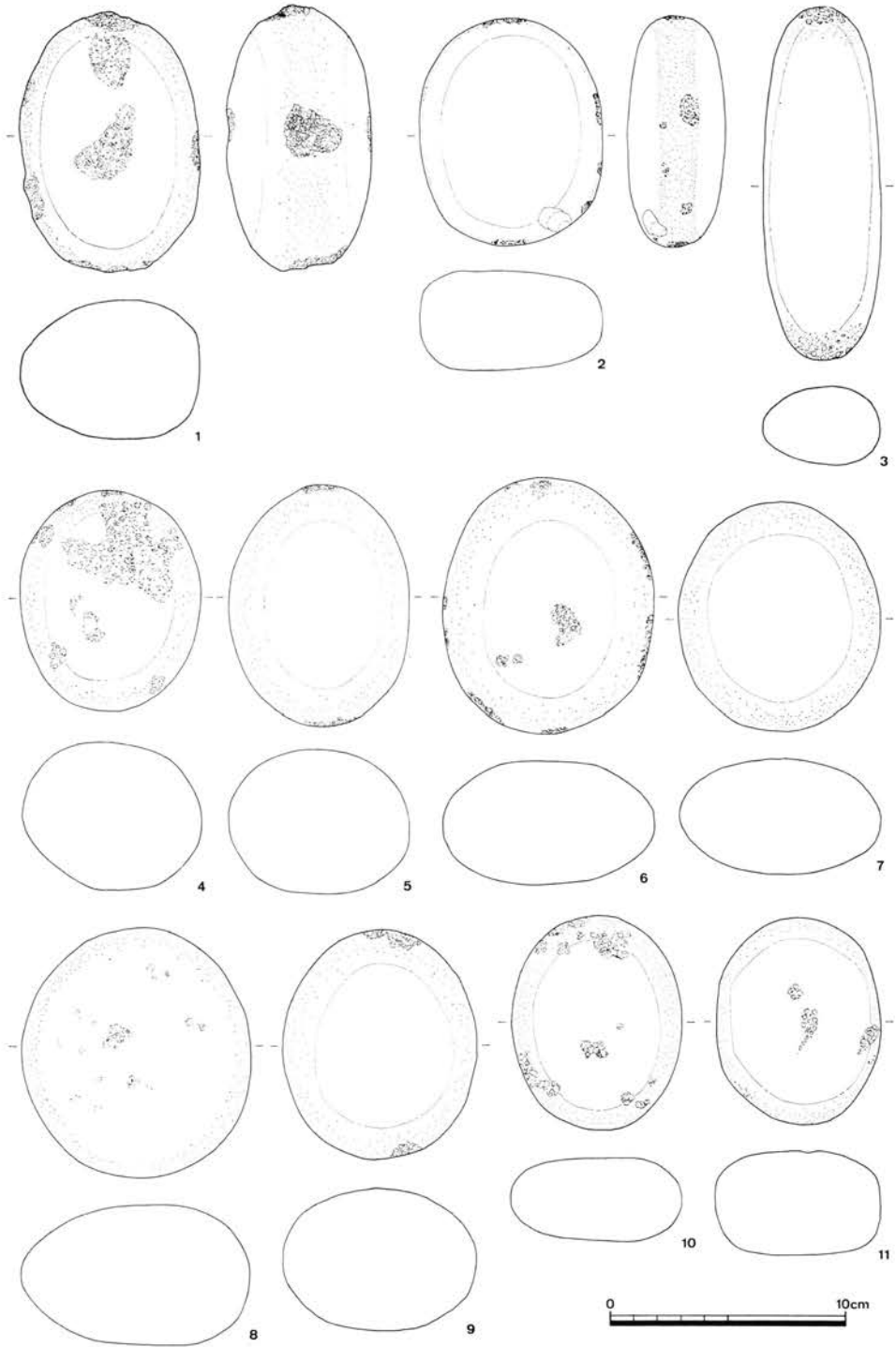
完形品・破片を合わせて192点確認されている。石鏃につぐ点数を有するが、その多くに二者の用途を分離しきれないものも多く、一括して別表に記載している。形態は、円形または楕円形、あるいは棒状の海浜、河岸の転石を用い、石材としては花崗岩が大半である。礫・石器類に用いられる石材の多くは、同水系及び海浜部で採取されたと考えられるが、それでも現況では10km以上の移動が行われたこととなる。数多い点数を一括しているが、重さでは100g未満のものから1kgを越えるものまであり、断面も扁平な長楕円形から円形のものまで多岐にわたり、さらに多くの機能分化が考えられる。

(8) 石皿

全容のわかる大型の完形品では、板状の花崗岩の自然石を用い、長辺約40cm・短辺25cm・厚さ6.5cmを測る。板面中央に、長さ22cm・最大幅9cmの水滴形のくぼみが使用痕として残り、深い部分で1.8cmの深さがある。また、くぼみ周辺も顕著ではないが、使用されている。裏面は使用されていない。



第59図 縄文時代石器実測図(3) 石斧類



第60図 縄文時代石器実測図(4) 磨石・敲石類

(9) 砥石(第62図)

砂岩、泥岩等で、比較的軟質な石材を用い、溝状の使用痕をもつものと、面的に使用されたものがある。溝は、断面が三角形・U字形で、明瞭なものと、ゆるやかにくぼみとなっているものがある。使用されている石の形は、扁平な自然石が一般的であるが、断面が三角形を呈するものも見受けられ、複数の面が使用されている。石質の関係上、風化が進み、使用痕を明確に残していないものもある。

(10) 礫石錘(第61図)

多くは、扁平な楕円形の自然の転石を用い、長軸の両端に数回の打撃を加えて打ち欠いている。一部には、やや方形を呈する扁平な石も使用されている。26点出土しているが、石材は花崗岩・チャート・砂岩・粘板岩等で、特に選択はされていない。重量は、20gから1,100gと、大きな幅があるが、200~400gのものが比較的多い。長さは、4.3~11.4cmで、6~9cmの間に大半のものが入っている。検出された層位は、北白川下層Ⅱ式以下であり、早期に属するものも認められるが、ここでは大歳山・北白川下層Ⅲ式の層位では出土していない。磨石等から転用されたものも認められる。

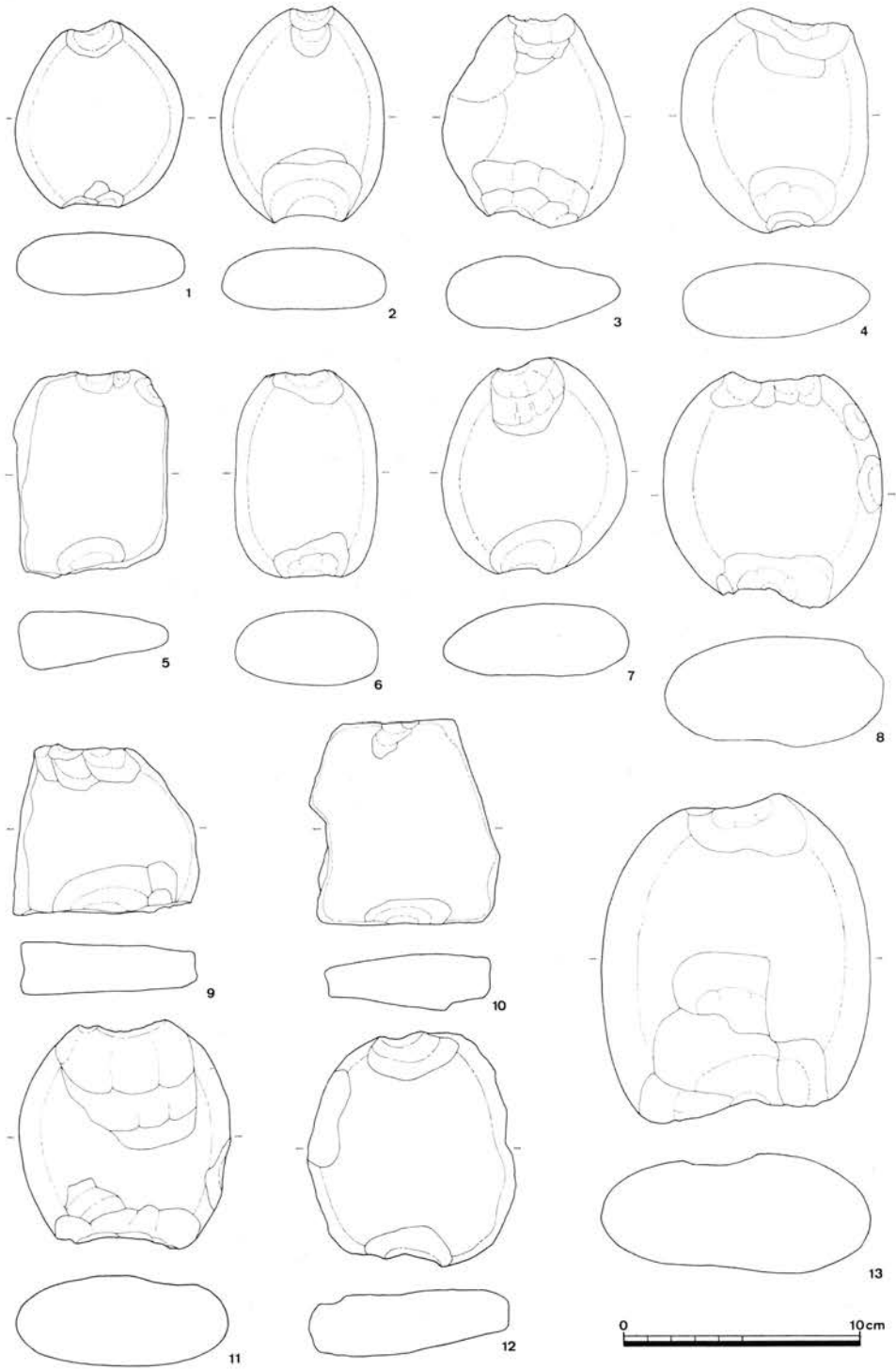
(11) 軽石

14点あり、すべて浮き石凝灰岩である。不定形であり、明瞭な加工痕を残すものは認められないが、浮子等として利用されたと考えられる。主に、北白川下層Ⅱ式の層位に集中している。

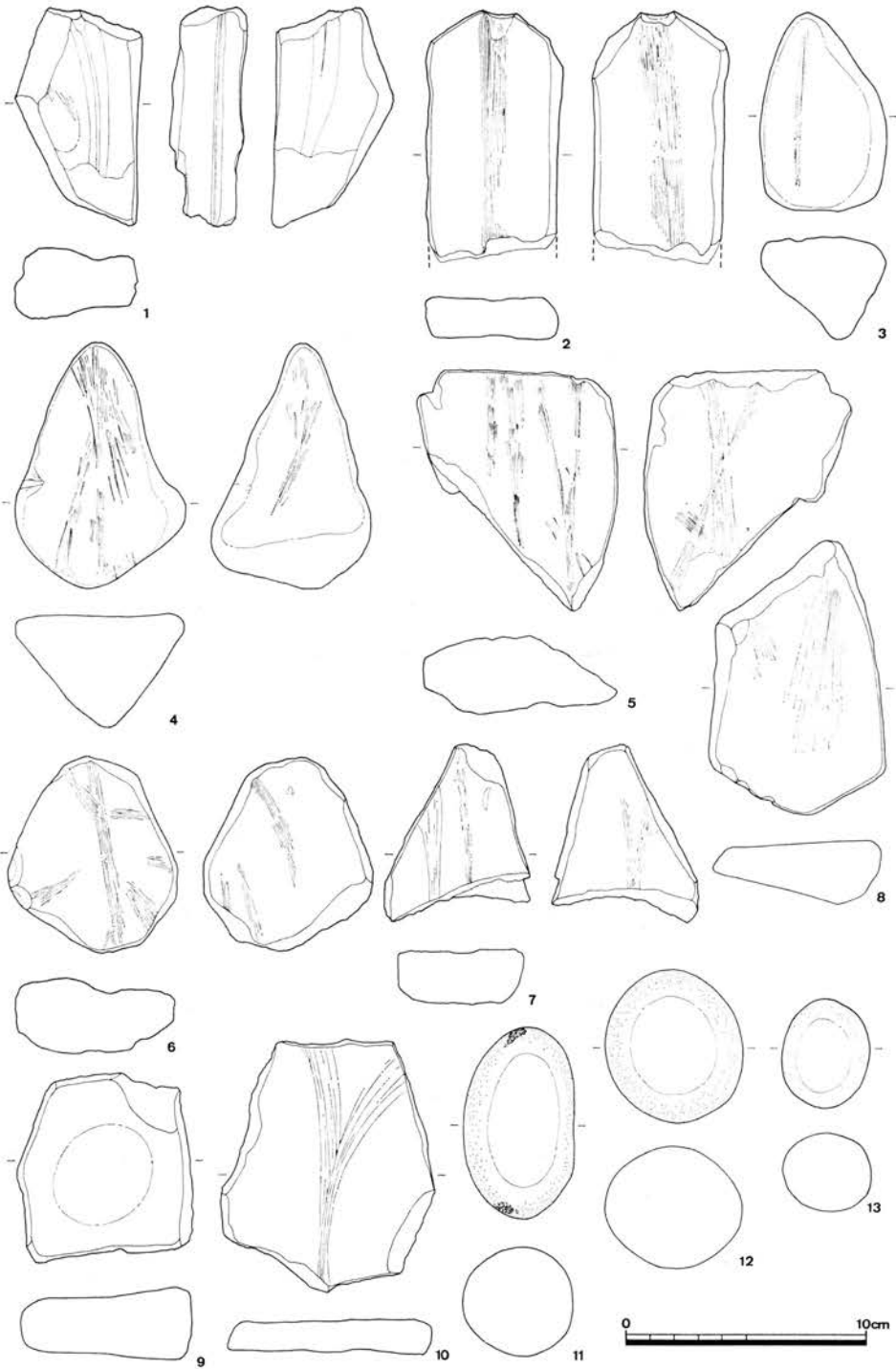
(12) 玦状耳飾り・垂飾り類(第63図)

玦状耳飾りは、4点出土している。すべて小破片で、本来の形状のわかるものはないが、すべて1~2か所に補修もしくは再利用のための穿孔が施されている。また、破断面の多くは再度研磨されている。石質は、1点が蛇紋岩で、3点は滑石製である。

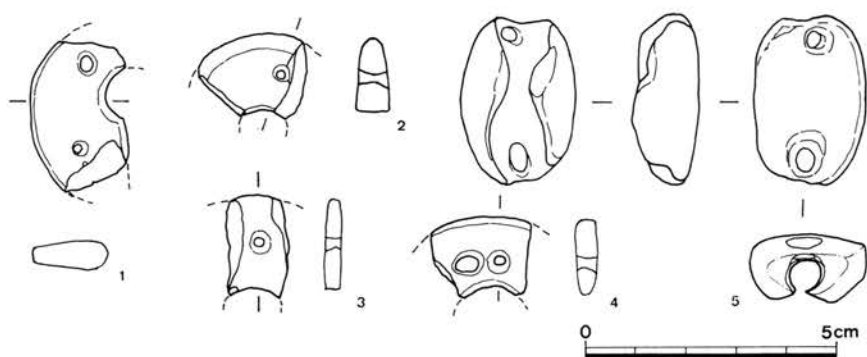
5は、本来平面・断面ともに楕円形で、長軸にそって両端から穿孔されていたものを、破損後さらに2か所に孔を施し、再利用したものと考えられる。黄褐色の蛇紋岩製で、破損断面を含め、ていねいに研磨されている。ほかに、小玉が3点出土している。厚さ6~9mm・直径1.1~1.3mmで、平面形はほぼ円形であるが、全体として球形に近いものと板状のものがあり、中央付近で穿孔されている。玦状耳飾り・垂飾り類ともに第4・5層出土で、北白川下層Ⅱ式の時期に属するものである。(長谷川 達)



第61図 縄文時代石器実測図(5) 礫石錘



第62図 縄文時代石器実測図(6) 砥石・磨石・敲石



第63図 縄文時代石器実測図(7) 塊状耳飾り類・垂飾り類

第5項 動物遺存体

動物遺体の残欠と思われる骨片が第5層と第9層から出土した。遺体の採集は、掘削時に目についたものを拾い上げたものと、サンプルとして採集した土壌を洗浄して得たものがある。第5層の資料は極めて小片で、第9層のものは大破片のものもあったが、極めて状態が悪く、ほとんど取り上げることができなかった。これらのわずかな資料を奈良国立文化財研究所の松井 章氏に鑑定していただいた結果が以下のとおりである。

採集できた破片は、すべて焼けており、白色の硬い骨質部である。普通、骨は捨てられるとすぐにバクテリア、雨水などの作用で分解が始まり、土中に埋没するまでに痕跡すらなくなってしまう。今回の資料は火熱を受けたことによって無数のひび割れを生じて細片化が進み、同定できた破片はその一部に留った。同定できた破片にはニホンジカが多く、イノシシがわずかにみられた。同定できた部位はやはり、骨質部の厚い指骨(基節骨、中節骨、末節骨)、中手骨または中足骨が多い。しかし大部分の破片は、上腕骨、大腿骨、頸骨などの大きな四肢骨の破片であろう。このような部位の破片は関節部が残らないと同定することが不可能である。

今回の成果としては、一般の包含層からも土を洗うことによって、火熱を受けて無気質化して保存された、発掘時には目につきにくい動物遺存体を検出することが可能であることを示したところにあるだろう。(松井 章)

付表1 動物遺存体一覧表

No.	遺構・層名	種名	部位	左右	備考
1	第5層(灰色)	イノシシ?	犬歯(下側)		未崩出
2	S H86307	イノシシ?	天骨	右	近位端
3	S H86307	イノシシ?	橈骨	不明	近位端
4	第5層(褐色)	ニホンジカ	中手骨又は中足骨	右	遠位端
5	第5層(褐色)	?	肋骨		
6	第5層(褐色)	イノシシ	末節骨	不明	
7	第5層(灰色)	ニホンジカ	中手骨又は中足骨	不明	遠位端
8	第5層(灰色)	ニホンジカ	中足骨	不明	小破片
9	第5層(灰色)	イノシシ	臼歯		破片・未崩出(顎骨の中)
10	第5層(灰色)	イノシシ	中手骨又は中足骨	不明	遠位端
11	第5層(褐色)	ニホンジカ	中節骨	不明	近位端
12	第5層(褐色)	ニホンジカ	末節骨	不明	小破片
13	第5層(褐色)	イノシシ	臼歯		破片
14	第5層(灰色)	ニホンジカ	基節骨		近位端
15	第5層(灰色)	ニホンジカ	尺骨	右	遠位端
16	S K86313	ニホンジカ	橈骨	左	遠位端
17	S K86313	ニホンジカ	基節骨	不明	
18	第8層	ニホンジカ	下顎	左	第2後臼歯・第3後臼歯あり

付表2 舟戸南地区縄文時代前期出土石器一覽表

1. 石 鏃

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
1		1	2.0	0.9	0.3	0.34	完存	流紋岩	
2		1	2.2	1.5	0.3	0.46	完存	無斑晶安山岩	
3		1	2.0	0.8	0.3	0.32	完存	チャート	
4		1	2.3	1.5	0.5	0.87	完存	チャート	
5		1	1.6	1.6	0.7	1.22	先端欠損	流紋岩	
6	29D E	1	1.6	2.0	0.5	1.34	先端欠損	流紋岩	
7	29D E	1	1.3	1.6	0.3	0.38	先端欠損	無斑晶安山岩	
8	29D E	1	1.7	1.5	0.4	0.44	完存	無斑晶安山岩	
9	29D E	1	1.2	1.2	0.3	0.24	脚部欠損	流紋岩	
10	29D E	1	1.5	1.5	0.4	0.54	完存	無斑晶安山岩	
11	29D E	1	2.4	1.3	0.3	0.46	一部欠損	無斑晶安山岩	
12	29D E	1	2.4	1.9	0.3	0.59	一部欠損	無斑晶安山岩	
13	28 E	1	1.6	1.2	0.3	0.24	完存	無斑晶安山岩	
14	29 E F	1	2.0	1.4	0.3	0.64	一部欠損	無斑晶安山岩	
15	29 E	1	2.0	1.4	0.2	0.37	片脚欠損	チャート	
16	28 C	1	2.4	1.2	0.3	0.51	片脚欠損	無斑晶安山岩	
17	28 E	1	2.0	1.0	0.3	0.35	脚部欠損	無斑晶安山岩	
18	28 F	1	1.3	1.3	0.3	0.23	完存	流紋岩	
19	28 E	1~3	1.9	0.9	0.3	0.40	脚部欠損	無斑晶安山岩	
20	28 E	1~3	1.9	1.0	0.4	0.62	完存	無斑晶安山岩	
21	28 E	1~3	1.6	1.1	0.2	0.21	完存	無斑晶安山岩	
22	27 E	1	2.0	1.4	0.3	0.47	完存	チャート	
23	29 E	1	3.2	1.4	0.4	1.24	一部欠損	流紋岩	
24	29 D	1	2.0	2.0	0.8	2.04	先端欠損	流紋岩	
25	29 D	1	2.2	1.9	0.6	1.77	完存	チャート	
26	29 C	1	1.9	1.5	0.5	0.79	完存	無斑晶安山岩	未製品
27	29 C	1	2.1	2.0	0.5	1.26	先端欠損	無斑晶安山岩	
28	29 C	1	1.7	1.4	0.3	0.41	一部欠損	無斑晶安山岩	
29	29 D	1	1.9	1.4	0.5	1.00	先端欠損	流紋岩	
30	29 D	1	2.1	1.2	0.4	0.71	完存	チャート	
31	29 D	1	2.1	1.3	0.3	0.33	片脚欠損	無斑晶安山岩	
32	29 D	1	1.5	1.2	0.2	0.20	完存	チャート	
33	30 C	1	2.5	1.6	0.5	1.51	完存	無斑晶安山岩	
34	30 C	1	2.0	1.3	0.3	0.43	完存	無斑晶安山岩	
35	28 C	1	2.2	1.5	0.6	0.99	完存	無斑晶安山岩	
36	29 F	1	2.6	1.6	0.9	2.30	完存	無斑晶安山岩	未製品
37	27 F	1~3	3.1	2.1	0.8	4.34	完存	チャート	
38	27 F	1~3	1.8	1.6	0.3	0.80	先端欠損	無斑晶安山岩	
39	27 F	1~3	1.7	1.2	0.3	0.42	完存	無斑晶安山岩	
40	29 B	1	1.4	1.4	0.4	0.50	先端欠損	無斑晶安山岩	
41	28 D	1~3	4.4	1.9	0.6	3.89	完存	無斑晶安山岩	
42	28 D	1~3	2.9	1.5	0.5	1.57	一部欠損	チャート	
43	28 D	1~3	2.8	1.8	0.5	1.73	完存	無斑晶安山岩	
44	28 C	1	2.3	2.1	0.8	3.52	完存	無斑晶安山岩	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
45	30C	1	1.9	1.0	0.3	0.33	一部欠損	無斑晶安山岩	
46	29E	1~3	2.9	1.8	0.4	1.13	一部欠損	無斑晶安山岩	
47	29F	2	2.3	1.2	0.3	0.55	完存	無斑晶安山岩	
48	29F	2	3.2	2.1	0.7	2.97	完存	流紋岩	
49	29F	2	1.9	1.4	0.6	0.89		無斑晶安山岩	未製品
50	29F	2	—	—	—	0.63	先端脚欠	流紋岩	
51	29F	2	2.4	2.3	0.9	4.02	脚部欠損	無斑晶安山岩	
52	28F	2	2.2	1.7	0.5	1.23	完存	無斑晶安山岩	
53	28D	2	2.1	1.2	0.3	0.36	片脚欠損	無斑晶安山岩	
54	28D	2	2.3	1.3	0.6	1.40		無斑晶安山岩	未製品
55		3	1.5	1.6	0.3	0.51	完存	無斑晶安山岩	
56		3	1.4	1.2	0.3	0.28	一部欠損	チャート	
57		3	2.3	1.3	0.3	0.47	一部欠損	流紋岩	
58		3	1.9	1.0	0.3	0.27	一部欠損	チャート	
59	28F	3	1.7	1.3	0.4	0.54	片脚欠損	流紋岩	
60	29C	3	1.9	2.0	0.5	1.18	完存	チャート	
61	29C	3	2.1	0.9	0.5	0.93	完存	流紋岩	雑か
62	29C	3	1.8	0.9	0.3	0.39	1/2欠損	無斑晶安山岩	
63	29E	3	1.9	1.3	0.5	0.76	完存	無斑晶安山岩	
64	29E	3	2.7	1.5	0.3	0.73	完存	無斑晶安山岩	
65	29E	3	1.7	1.0	0.4	0.38	片脚欠損	流紋岩	
66	29E	3	1.0	1.5	0.3	0.29	先端欠損	チャート	
67	29D	3	2.1	1.6	0.4	1.28	完存	チャート	
68	29D	3	2.4	1.2	0.6	0.70	完存	無斑晶安山岩	
69	29D	3	1.8	1.5	0.4	0.69	完存	流紋岩	
70	29C	3	1.2	1.5	0.3	0.33	先端欠損	チャート	
71	30C	3	3.0	1.7	0.8	2.46	完存	流紋岩	
72	30C	3	2.4	1.4	0.4	0.65	片脚欠損	無斑晶安山岩	
73	30C	3	1.5	1.5	0.3	0.68	先端欠損	流紋岩	
74	28D	3	2.2	1.4	0.5	1.49	完存	無斑晶安山岩	
75	28D	3	2.7	1.2	0.5	1.43	完存	無斑晶安山岩	
76	28D	3	1.8	1.4	0.5	0.65	完存	無斑晶安山岩	
77	28D	3	2.2	1.7	0.9	2.07	一部欠損	流紋岩	
78	28D	3	2.0	1.5	0.4	0.49	片脚欠損	流紋岩	
79	28B	3	2.0	1.3	0.4	0.51	先端欠損	無斑晶安山岩	
80	28B	3	1.9	1.2	0.4	0.58	一部欠損	無斑晶安山岩	
81	28B	3	1.4	1.3	0.4	0.40	先端欠損	無斑晶安山岩	
82	29E	3	2.9	1.6	0.4	0.81	完存	無斑晶安山岩	
83	28C	3	2.9	1.7	0.3	0.84	一部欠損	無斑晶安山岩	
84	29D	3	2.0	1.6	0.7	1.72	完存	無斑晶安山岩	
85	29D	3	2.7	1.8	0.4	1.16	一部欠損	無斑晶安山岩	
86	29D	3	2.3	1.7	0.6	1.43	一部欠損	流紋岩	
87	29E	3	2.2	2.1	0.7	2.50	完存	チャート	未製品
88	28C	3	—	—	0.2	0.16	一部のみ	チャート	住居跡内
89	29E	3	1.8	1.4	0.5	0.72	完存	無斑晶安山岩	土器だまり
90	29E	3	1.7	1.4	0.3	0.37	片脚欠損	無斑晶安山岩	土器だまり

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
91	28C	3	1.6	2.2	0.3	0.56	先端欠損	無斑晶安山岩	
92	28D	3	2.6	1.4	0.6	1.80		無斑晶安山岩	錐か
93	29F	3	1.8	1.8	0.4	0.93	先端欠損	チャート	
94	28C	3	2.0	1.5	0.3	0.62	完存	無斑晶安山岩	
95	28C	3	2.0	1.4	0.5	1.38	完存	流紋岩	
96	29D	3	2.0	1.6	0.5	1.45	完存	チャート	
97	28E	3	1.9	1.5	0.4	0.92	完存	流紋岩	
98	28E	3	2.3	1.3	0.4	0.59	片脚欠損	無斑晶安山岩	
99	28E	3	1.5	1.2	0.2	0.27	1/2残存	無斑晶安山岩	
100	29D	3	3.4	2.7	1.0	7.63	完存	無斑晶安山岩	
101	28E	3	1.9	1.9	0.4	0.82	完存	無斑晶安山岩	
102	28E	3	2.4	1.7	0.5	1.32	一部欠損	無斑晶安山岩	
103	28E	3	2.3	1.7	0.7	1.60	完存	無斑晶安山岩	
104	29E	3	1.8	2.1	0.4	1.01	一部欠損	チャート	未製品
105	30C	3	3.1	2.4	1.3	6.23	完存	流紋岩	中層
106	30C	3	2.0	1.6	0.5	1.30	片脚欠損	流紋岩	中層
107	29E	3	1.4	1.2	0.3	0.26	完存	無斑晶安山岩	
108	29E	3	2.0	1.8	0.2	0.44	完存	チャート	
109	29E		2.0	1.3	0.5	0.94	完存	無斑晶安山岩	
110	28E	3	2.1	1.5	0.4	0.65	一部欠損	無斑晶安山岩	
111	28E	3	3.6	1.5	0.6	1.99	完存	無斑晶安山岩	
112	28C	3	2.1	1.7	0.5	1.31	先端欠損	無斑晶安山岩	
113	29D	3	2.9	1.1	0.5	1.33	完存	無斑晶安山岩	住居跡内
114	29E	3	2.5	1.6	0.7	2.61	一部欠損	無斑晶安山岩	錐か
115	29E	3	2.1	1.4	0.4	0.99	一部欠損	無斑晶安山岩	錐か
116	29D	3	2.0	1.3	0.4	0.65	一部欠損	無斑晶安山岩	
117	29D	3	2.0	0.9	0.4	0.52	完存	無斑晶安山岩	
118	29D	3	2.3	1.7	0.4	0.96	片脚欠損	無斑晶安山岩	
119	28E	3	1.6	1.3	0.3	0.29	片脚欠損	無斑晶安山岩	未製品
120	28F	3	1.9	2.8	0.3	0.40	完存	チャート	
121	29D	3	2.1	1.5	0.5	1.57	一部欠損	流紋岩	
122	28D	3	2.8	1.5	0.4	0.81	完存	無斑晶安山岩	
123	28D	3	2.8	1.3	0.7	1.74	完存	無斑晶安山岩	錐か
124	29C	3	2.6	1.3	0.5	1.47	1/3欠損	無斑晶安山岩	
125	29C	3	1.8	1.6	0.4	0.86	片脚欠損	無斑晶安山岩	
126	29B	3	2.5	1.5	0.3	0.46	片脚欠損	無斑晶安山岩	
127	28C	3	1.8	1.7	0.4	0.79	先端欠損	無斑晶安山岩	住居跡内
128	28C	3	2.1	1.5	0.4	0.75	片脚欠損	無斑晶安山岩	住居跡内
129	28C	3	2.0	1.4	0.4	0.47	片脚欠損	無斑晶安山岩	住居跡内
130	28C	3	1.3	1.3	0.3	0.36	片脚欠損	無斑晶安山岩	住居跡内
131	29F	3	1.7	1.4	0.3	0.31	片脚欠損	無斑晶安山岩	
132	29D	3	2.5	2.2	0.7	3.02	一部欠損	チャート	
133	29F	3	1.6	1.1	0.3	0.33	一部欠損	無斑晶安山岩	
134	30C	3	1.5	1.2	0.4	0.38	完存	流紋岩	
135	30C	3	2.2	1.3	0.5	1.12	完存	流紋岩	
136	29E	3	2.0	1.5	0.3	0.72	完存	チャート	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
137	28E	3	1.2	1.1	0.3	0.23	一部欠損	無斑晶安山岩	
138	29D	3	1.8	0.9	0.5	0.64	一部欠損	無斑晶安山岩	
139	29D	3	1.9	1.1	0.2	0.29	片脚欠損	チャート	
140	28C	3	1.5	1.5	0.4	0.37	片脚欠損	無斑晶安山岩	住居跡内
141	28C	3	2.6	1.6	0.8	1.99	完存	無斑晶安山岩	住居跡内
142	28C	3	1.9	0.8	0.3	0.43	完存	黒曜石	石匙か
143	28C	3	1.0	1.0	0.2	0.16	片脚のみ	無斑晶安山岩	円形住居跡内
144	28C	3	2.7	1.1	0.4	1.05	完存	無斑晶安山岩	未製品
145	28C	3	2.3	1.1	0.6	1.10	完存	無斑晶安山岩	未製品
146	28C	3	1.3	1.1	0.3	0.18	完存	無斑晶安山岩	未製品
147	29E	3	2.4	1.7	0.4	0.91	片脚欠損	無斑晶安山岩	未製品
148	29E	3	1.6	1.6	0.5	0.73	完存	無斑晶安山岩	未製品
149	30C	4	2.2	1.8	0.5	1.62	完存	チャート	
150	30C	4	2.0	1.9	0.7	2.13	完存	チャート	
151	30C	4	1.8	1.4	0.5	0.72	一部欠損	チャート	
152	29C	4	2.4	1.2	0.4	0.97	一部欠損	チャート	
153	29E	4	2.1	1.5	0.5	0.76	完存	チャート	
154	29E	4	1.4	1.5	0.2	0.22	完存	チャート	
155	29E	4	1.2	1.8	0.3	0.44	1/3欠損	チャート	
156	29E	4	3.3	2.5	1.2	6.95	完存	チャート	未製品
157	29D	4	2.2	1.6	0.6	1.28	完存	無斑晶安山岩	
158	29D	4	2.3	1.4	0.3	0.66	完存	無斑晶安山岩	
159	29D	4	2.4	1.7	0.6	1.08	完存	無斑晶安山岩	
160	29D	4	1.8	1.0	0.4	0.45	完存	チャート	
161	29D	4	2.1	1.8	0.4	1.37	1/4欠損	チャート	
162	29D	4	1.6	1.8	0.6	1.46	1/3欠損	チャート	
163	29D	4	1.4	1.8	0.4	0.73	先端欠損	無斑晶安山岩	
164	28F	4	2.2	1.3	0.5	0.90	1/2欠損	チャート	
165	28F	4	2.5	0.9	0.6	1.09	完存	チャート	錐か
166	28F	4	1.8	2.3	0.4	1.26	先端欠損	チャート	
167	28F	4	1.9	1.6	0.2	0.40	完存	無斑晶安山岩	
168	28F	4	2.2	2.2	0.3	0.69	完存	無斑晶安山岩	
169	29F	4	2.3	1.9	0.4	1.57	1/4欠損	無斑晶安山岩	
170	29F	4	1.3	1.3	0.3	0.35	先端欠損	無斑晶安山岩	
171	29F	4	1.5	0.8	0.3	0.22	一部のみ	チャート	
172	29C	4	2.2	1.5	0.4	1.22	一部欠損	チャート	
173	29C	4	2.5	2.2	0.6	2.50	完存	チャート	
174	28D	4	2.1	0.7	0.4	0.49	完存	無斑晶安山岩	
175	28D	4	2.0	1.3	0.4	0.67	1/3欠損	無斑晶安山岩	
176	29E	4	2.0	1.4	0.3	0.45	片脚欠損	チャート	
177	29E	4	1.5	1.1	0.3	0.28	1/2欠損	無斑晶安山岩	
178	29F	4	1.4	1.4	0.3	0.35	完存	無斑晶安山岩	
179	29E	4	2.5	1.9	0.8	2.55	完存	チャート	未製品か
180	29E	4	1.7	1.5	0.3	0.41	先端欠損	無斑晶安山岩	
181	29E	4	1.6	1.7	0.3	0.39	完存	チャート	
182	29E	4	1.8	1.9	0.3	0.57	完存	チャート	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
183	28E	4	2.2	2.0	0.2	0.57	完存	チャート	
184	28E	4	1.7	1.1	0.3	0.37	片脚欠損	チャート	
185	30D	4	1.9	1.6	0.3	0.67	一部欠損	無斑晶安山岩	
186	30C	4	2.0	1.9	0.3	0.65	完存	無斑晶安山岩	
187	30C	4	1.6	1.6	0.4	0.62	完存	チャート	未製品
188	30C	4	1.9	1.9	0.6	1.06	—	チャート	
189	30C	4	1.4	1.9	0.3	0.59	先端欠損	チャート	
190	30C	4	1.2	2.0	0.3	0.38	1/2欠損	チャート	
191	30C	4	2.2	1.2	0.3	0.56	1/2欠損	無斑晶安山岩	
192	29F	4	2.3	2.0	0.6	1.88	完存	チャート	
193	29D	4	1.6	1.7	0.4	0.71	完存	無斑晶安山岩	
194	29D	4	1.7	1.2	0.3	0.32	片脚欠損	無斑晶安山岩	
195	29D	4	1.2	1.4	0.3	0.25	脚部欠損	無斑晶安山岩	
196	29E	4	2.6	1.4	0.3	0.49	完存	無斑晶安山岩	
197	29F	4	2.2	1.7	0.5	0.82	完存	無斑晶安山岩	
198	29F	4	1.5	1.1	0.4	0.55	完存	チャート	
199	29F	4	1.6	1.3	0.4	0.56	完存	チャート	
200	29F	4	1.7	1.7	0.2	0.48	完存	無斑晶安山岩	
201	29F	4	3.8	1.0	1.2	0.64	脚部欠損	チャート	
202	28C	4	2.1	1.5	0.4	0.56	片脚欠損	無斑晶安山岩	
203	28C	4	2.8	1.0	0.4	0.87	完存	無斑晶安山岩	
204	29F	4	1.9	1.2	0.3	0.28	完存	チャート	
205	28B	4	3.3	0.8	0.4	0.96	後端欠損	チャート	
206	29F	4	1.5	1.3	0.3	0.43	先端欠損	チャート	
207	29F	4	1.6	2.1	0.2	0.22	1/2欠損	チャート	
208	29F	4	1.4	1.5	0.2	0.27	一部欠損	チャート	
209	29F	4	2.0	1.9	0.5	0.42	2/3欠損	チャート	
210	29F	4	1.4	1.6	0.2	0.28	完存	無斑晶安山岩	
211	29F	4	1.7	1.5	0.2	0.46	完存	無斑晶安山岩	
212	29F	4	2.4	1.0	0.3	0.66	完存	無斑晶安山岩	
213	29F	4	2.1	1.3	0.4	0.57	片脚欠損	無斑晶安山岩	
214	29F	4	1.6	2.1	0.3	0.25	片脚欠損	無斑晶安山岩	
215	29F	4	1.3	1.1	0.2	0.24	完存	無斑晶安山岩	
216	29F	4	2.0	1.7	0.6	1.05	一部欠損	無斑晶安山岩	
217	29F	4	2.4	2.3	1.0	3.07	完存	無斑晶安山岩	
218	28D	4	2.3	0.9	0.3	0.37	完存	無斑晶安山岩	
219	28E	4	2.0	1.4	0.3	0.57	一部欠損	無斑晶安山岩	
220	28E	4	2.9	1.3	0.3	0.81	片脚欠損	無斑晶安山岩	
221	28E	4	2.1	1.3	0.3	0.61	一部欠損	チャート	
222	28E	4	2.4	1.2	0.5	1.53	完存	無斑晶安山岩	
223	29E	4	2.9	0.8	0.5	0.76	完存	無斑晶安山岩	
224	28C	4	4.7	1.0	0.6	2.54	完存	チャート	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
225	28D	5	1.8	1.9	0.8	1.60	完存	チャート	
226	29C	5	2.7	1.2	0.5	1.36	完存	無斑晶安山岩	
227	29C	5	1.7	1.8	0.5	0.75	完存	チャート	
228	29D	5	2.2	1.6	0.3	0.74	完存	チャート	
229	29D	5	1.6	1.8	0.4	0.68	完存	無斑晶安山岩	
230	29D	5	2.3	0.7	0.3	0.49	完存	無斑晶安山岩	
231	29D	5	1.3	1.3	0.3	0.23	完存	チャート	
232	28C	5	1.4	1.0	0.3	0.24	完存	流紋岩	
233	29D	5	2.0	1.7	0.3	0.70	一部欠損	無斑晶安山岩	
234	28D	5	2.3	1.8	0.3	0.71	片脚欠損	無斑晶安山岩	
235	28C	5	1.9	1.9	0.3	0.64	完存	無斑晶安山岩	
236	28C	5	1.8	1.5	0.3	0.51	一部欠損	無斑晶安山岩	
237	28C	5	2.2	0.9	0.3	0.60	完存	無斑晶安山岩	
238	29C	5	2.2	1.4	0.3	0.73	完存	無斑晶安山岩	
239	29C	5	2.0	1.2	0.3	0.55	完存	流紋岩	
240	29C	5	2.0	1.9	0.6	1.19	完存	チャート	
241	30D	5	2.5	1.6	0.3	0.51	完存	流紋岩	
242	30D	5	2.1	1.2	0.2	0.48	完存	無斑晶安山岩	
243	30D	5	2.1	1.6	0.3	0.41	完存	チャート	
244	28・29F	5	2.6	1.6	0.3	0.54	片脚欠損	無斑晶安山岩	
245	28・29F	5	1.8	1.5	0.5	0.66	片脚欠損	無斑晶安山岩	
246	28・29F	5	1.7	1.3	0.3	0.35	片脚欠損	チャート	
247	29E	5	2.4	2.1	0.6	2.92	完存	チャート	
248	29E	5	3.7	2.0	0.7	3.79	完存	無斑晶安山岩	
249	29E	5	2.4	1.8	0.5	1.54	片脚欠損	チャート	
250	29E	5	2.2	2.1	0.6	2.13	完存	チャート	
251	29E	5	1.9	1.5	0.6	1.57	完存	チャート	
252	29F	5	1.7	1.4	0.3	0.44	一部欠損	流紋岩	
253	29F	5	1.7	1.2	0.2	0.36	片脚欠損	チャート	
254	28F	5	1.9	1.5	0.3	0.58	完存	チャート	
255	29B	6	2.4	1.5	0.4		片脚欠損	無斑晶安山岩	
256	29B	6	1.8	1.5	0.3		一部欠損	無斑晶安山岩	
257	29D	9	1.4	1.5	0.2		1/2欠損	チャート	
258	28F	5	3.1	0.8	0.3		完存	チャート	
259	S K 86302	3	2.1	1.5	0.4	0.64	一部欠損	無斑晶安山岩	
260	S K 86306	3	1.9	1.3	0.4	0.44	一部欠損	流紋岩	
261	S K 86307	5	2.4	1.8	0.4	1.15	片脚欠損	無斑晶安山岩	
262	S K 86307	5	2.2	1.6	0.6	1.62	一部欠損	流紋岩	
263	S K 86307	5	2.0	1.4	0.4	0.66	完存	無斑晶安山岩	
264	S K 86307	5	2.8	1.5	0.4	0.88	一部欠損	無斑晶安山岩	
265	S K 86307	5	1.5	0.9	0.2	0.13	一部欠損	無斑晶安山岩	
266	S K 86308	5	2.5	1.9	0.7	2.09	片脚欠損	無斑晶安山岩	
267	29F	10	1.3	1.4	0.3	0.35	完存	チャート	
268	S K 86313	5	1.5	1.3	0.4	0.51	完存	無斑晶安山岩	
269			2.2	2.0	0.6	2.05	完存	チャート	
270			1.8	1.3	0.3	0.44	片脚欠損	チャート	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
271	28・27F		2.0	1.6	0.5	1.51	一部欠損	チャート	
272			2.8	1.8	0.6	1.78	一部欠損	黒曜石	未製品
273		3	1.8	0.8	0.5		完存	無斑晶安山岩	錐か
274		2	2.0	1.3	0.4			チャート	
275		2	1.7	1.3	0.4		完存		
276		2	1.7	1.4	0.4		完存	チャート	
277		2	2.6	1.5	0.6			安山岩	未製品
278		表採	2.1	1.7	0.3	0.60	先端欠損	無斑晶安山岩	
279		表採	1.7	1.5	0.3	0.34	先端欠損	無斑晶安山岩	
280		表採	3.0	1.1	0.8	2.61	完存	チャート	
281		表採	1.5	1.6	0.3	0.36	先端欠損	チャート	
282		表採	1.6	1.4	0.3	0.37	片脚欠損	チャート	
283		表採	1.9	1.3	0.3	0.36	1/3欠損	チャート	
284		表採	1.3	1.5	0.2	0.28	一部欠損	チャート	
285		表採	1.5	1.2	0.2	0.26	一部欠損	無斑晶安山岩	
286		表採	1.4	1.2	0.2	0.16	一部欠損	無斑晶安山岩	
287		表採	0.9	0.9	0.2	0.10	先端欠損	無斑晶安山岩	
288		表採	2.1	2.0	0.4	0.86	完存	チャート	
289		表採	1.6	1.7	0.4	1.11	完存	チャート	
290		表採	1.6	1.6	0.5	0.99	完存	チャート	
291		表採	1.8	1.9	0.5	1.54	完存	安山岩	
292		表採	3.0	2.1	0.4	1.36	完存	チャート	
293		表採	2.0	1.8	0.7	1.96	完存	チャート	
294		表採	1.6	1.3	0.4	0.45	完存	安山岩	
295		表採	2.2	1.6	0.2	0.52	完存	頁岩	
296		表採	1.8	1.5	0.3	0.52	先端欠損	頁岩	
297		表採	2.0	1.6	0.5	0.51	完存	チャート	
298		表採	2.1	2.3	0.5	1.51	片脚欠損	チャート	
299		表採	2.6	1.0	0.3	0.56	完存	頁岩	
300		表採	1.9	1.3	0.4	0.66	完存	流紋岩	
301		表採	1.7	1.9	0.3	0.65	片脚欠損	チャート	
302		表採	1.6	1.2	0.4	0.35	一部欠損	安山岩	
303		表採	2.0	1.4	0.3	0.39	完存	安山岩	
304		表採	2.5	2.1	0.8	3.17	完存	安山岩	
305		表採		2.2		4.02	脚部欠損	チャート	
306		表採	2.1	1.5	0.4	0.50	完存	チャート	
307		表採	2.4	1.7	0.6	1.10	先端欠損	黒曜石	
308		表採	3.0	1.8	0.4	1.09	完存	安山岩	
309		表採	2.5	1.5	0.4	0.74	完存	流紋岩	
310		表採				2.11	完存	チャート	
311		表採	1.1	1.6	0.2	0.22	完存	安山岩	
312		表採	2.4	1.0	0.5	0.58	完存	チャート	
313		表採				0.67	完存	チャート	
314		表採	2.8	1.8	0.7	2.41	完存	安山岩	
315		表採	2.5	1.2	0.4	1.24	1/2残	チャート	
316		表採	1.9	1.4	0.4		完存	安山岩	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
317		表採	2.7	1.6	0.3		完存	チャート	
318		表採	1.3	1.6	0.3		完存	安山岩	
319		表採	2.1	1.5	0.4		1/2欠損	チャート	

2. 異形石器

1	28C	5	3.2	1.4	0.6	2.16	完存	無斑晶安山岩	第57図32
2	28E	5	3.3	1.0	0.5	0.91	完存	チャート	第57図33
3	28E	5	3.7	1.3	0.8		完存	無斑晶安山岩	第57図34

3. 石 錐

1	29F	3	2.2	1.3	0.4	0.88	一部欠損	チャート	第57図37
2	29E	3	2.2	1.7	0.4	0.90	完存	無斑晶安山岩	
3	30C	3	2.4	1.2	0.4	1.03	完存	無斑晶安山岩	
4	28E	3	3.0	1.2	0.5	1.25	完存	無斑晶安山岩	第57図39
5	28C	3	2.1	1.6	0.5	1.43	一部欠損	無斑晶安山岩	第57図36
6	29F	4	3.8	1.0	1.2	3.29	完存	チャート	第57図40
7	29D	4	2.7	2.4	0.7	3.93	一部欠損	流紋岩	
8	30D	5	2.0	1.3	0.4	0.70	完存	チャート	
9	30D	5	2.7	0.9	0.6	1.65	完存	無斑晶安山岩	
10	S K 86303	3	2.8	0.9	0.6	1.40	完存	チャート	
11		表採	3.0	1.8	0.4	1.13		チャート	

4. 石 匙

1	30C	1	1.6	2.5	0.5	1.6	基部欠損	水晶	第58図 5
2	28E	3	4.2	4.5	0.8	13.6	基部欠損	石英	第58図 3
3	29D	3	3.5	3.2	0.7	4.9	完存	流紋岩	第58図 2
4	28C	3		1.8	0.6	8.7	完存		第58図10
5	29F	3	4.0	7.7	0.7	11.5	刃一部欠	無斑晶安山岩	
6	29F	4	3.5	4.6	0.9	6.9	一部欠損	流紋岩	第58図 1
7	30D	5	2.5	4.7	0.6	7.8	基部欠損	無斑晶安山岩	第58図 7
8	28C	5	3.9	6.1	1.6	29.0	基部欠損	チャート	
9	29C	5	3.8	3.9	1.0	10.6	完存	無斑晶安山岩	第58図 8
10	30C	5	3.1	4.9	0.6	5.9	完存	無斑晶安山岩	第58図 6
11	28・27F		2.2	3.3	0.3	2.2	つまみ欠	無斑晶安山岩	第58図 4
12			2.4	2.2	0.4	1.5	つまみ欠	チャート	
13		表採	2.6	2.8	1.0	3.6	完存	チャート	
14		表採	2.4	2.4	1.0	3.7	完存	チャート	
15		表採	3.8	4.3	0.8	6.8	完存	チャート	
16	28C	3	1.9	0.8	0.3	0.43	完存	黒曜石	第58図12
17	29F	3							第58図11

5. 玦状耳飾り・垂飾り

1			—	1.8	0.3		1部のみ	蛇紋岩	
2	30C	4	—	1.8	0.6		(完存)	滑石	破損後再利用

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
3	28D	5	—	1.5	0.9		1部のみ	滑石	
4	30C	5	—				1部のみ	滑石	
5	30D	4	3.1	2.3	1.1	11.0	完存	蛇紋岩	
6	30C	5	—	径1.0	0.5	0.9	完存	蛇紋岩	
7	28E	5	—	径1.1	0.9	2.3	完存	蛇紋岩	
8	28E	5	—	径1.2	0.6	1.9	完存	蛇紋岩	

6. 石 斧

1	27C	1	12.5	5.8	3.3	333	一部欠損	玢岩	第59図 1
2	27C	1	4.5	4.9	2.4	—	基部残	斑れい岩	
3	28E	1	4.7	5.0	3.1	—	基部残	玢岩	第59図 4
4	29E	3	4.7	4.2	3.0	—	基部残	玢岩	第59図 7
5	28F	3	6.9	4.8	2.8	122	一部欠損	砂岩	第59図 2
6	29E	4	5.7	4.7		—	1/2欠損	流紋岩	
7	28D	4	6.4	4.4	2.3	—	先端欠損	粘板岩	第59図 5
8	28C	4	1.6	1.3	0.3	9.3	基部欠損	頁岩～粘板岩	
9	29B	4	10.5	6.3	1.5	129	完存	粘板岩	打製石斧 第59図10
10	28E	5	10.1	6.4	2.7	273	基部欠損	蛇紋岩	
11	29B-B	6	9.3	5.5	3.0	203	先端欠損	蛇紋岩	第59図 6
12	29D	6	7.6	5.7	2.8	144	基部欠損	蛇紋岩	第59図 3
13	30D	7	8.0	2.2	1.1	27	完存	蛇紋岩	第59図 8
14	30E-A	9	2.9	2.4	0.9	65	基部欠損	蛇紋岩	第59図 9
15	南壁	20	6.8	2.4	1.1	—	一部残	蛇紋岩	
16		表採	8.2	5.5	2.6	140	先端欠損	蛇紋岩	

7. 磨石・敲石類

1	27C	1	9.1		5.0	280	1/2欠損	花崗閃緑岩	
2	27D	1	10.9	11.4	7.1	1180	完存	花崗岩	
3	28D	1	10.5	8.8	4.6	535	一部欠損	花崗岩	
4	27D	1	8.4	6.7	5.3	350	1/3欠損	花崗岩	
5	28D	1		9.4	4.1	280	1/2欠損	花崗岩	
6	27E	1		8.9	5.8	393	1/2欠損	花崗岩	
7	27E	1	9.7	8.3	6.1	705	完存	花崗岩	
8	30C	1	9.7	8.6	4.8	560	完存	花崗岩	
9	29C	1		7	4.2	215	1/3欠損	花崗岩	住居内
10	27F	1		9.5	4.8	415	1/2欠損	花崗岩	
11	27B C	1			4.9	115	1/4残	花崗岩	
12	28F	1	6.0	5.1	3.9	175	完存	花崗岩	
13	28E	1	6.3	6.0	5.3	240		花崗岩	
14	28F	1	11.2	11.0	6.0	955	一部欠損	花崗岩	
15	28D	3		7.5	5.6	275	1/2欠損	花崗岩	
16	28E	3				265	2/3残	花崗岩	
17	28F	3	6.9	5.2	2.6	125	完存	花崗岩	
18	28F	3				115	2/3欠損	花崗岩	
19	29C	3	6.4	4.6	4.3	165	一部欠損	斑れい岩	小型

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
20	28E	3	6.8	5.2	4.0	185	完存	花崗岩	
21	29E	3	11.7		50.8		3/4残	花崗岩	
22	29E	3	9.8	7.6	4.5	450	完存	花崗岩	
23	28D	3					一部のみ	花崗岩	
24	29C	3			4.3		1/4残	花崗岩	
25	29E	3	8.6	7.9	4.3	395	完存	花崗岩	
26	29E	3			3.9		1/5残	花崗岩	
27	28D	3	8.3	8.0	4.2	383	完存	チャート	
28	28E	3					一部のみ	花崗岩	
29	30C	3	11.5	10.3	4	730	完存	花崗岩	
30	29F	3	3.5	3.5	3.1	50	完存	花崗岩	小型
31	29E	3	11.5	8.7	5.9	850	完存	花崗岩	
32	29E	3	9.8	9.0	4.8	535	完存	花崗岩	
33	29E	3	11.0	9.8	5.6	925	完存	花崗閃緑岩	
34	29C	4	5.6	4.8	3.1	110	完存	花崗岩	小型
35	29E	4		8.8	5.8		1/2欠損	花崗岩	
36	28C	4	6.9	5.8	3.0	200	完存	花崗岩	
37	28C	4	8.8	5.5	4.9	363	完存	花崗閃緑岩	楕円形
38	28E	4	7.0	5.8	3.6	203	完存	花崗岩	小型
39	29E	4	10.5	6.3	4.5	435	完存	玢岩?	楕円形
40	28C	4		8.4	4.9		1/2欠損	角閃石花崗岩	
41	28C	4	5.1	4.4	3.5	105	完存	花崗岩?	
42	30D	4	6.0	5.3	3.7	157	完存	花崗岩	小型
43	29D	4	8.1	6.9	3.7	360	完存	斑れい岩	
44	29F	4			5.9		1/2欠損	花崗岩	
45	28D	4	10.2	9.7	5.9	900	完存	花崗岩	
46	28C	4	?	?	?		1/2残	花崗岩	
47	29D	4	8.3	6.5	4.8	378	完存	花崗岩	
48	28D	4	9.5	9.2	6.2		一部欠損	花崗岩?	加熱
49	28F	4	6.2	5.3	4.2	180	完存	花崗岩	
50	29E	4	7.4	6.1	3.1	205	完存	花崗岩	
51	28F	4	8.7	8.4	4.9	510	完存	花崗岩	
52	28E	4	5.2	3.6	3.2	115	完存	花崗岩	
53	29E	4			4.9		1/3欠損	花崗岩	
54	28F	4		11.0	4.9		1/2欠損	花崗岩	
55	28F	4	9.4	8.3	5.0	550	完存	花崗岩	
56	28E	4	6.9	6.6	3.6	240	完存	花崗岩	
57	30D	4	10.2	10.0	5.2	730	完存	花崗岩	
58	28D	4	10.3	8.3	5.2	820	完存	花崗閃緑岩	
59	30D	4	8.7	7.7	5.6	518	完存	花崗岩	
60	28E	4	11.2		3.8		1/3残	安山岩?	
61	28F	4	7.5	5.3	4.1	235	完存	花崗閃緑岩	
62	30E	4	9.8	8.9	6.1	750	完存	花崗岩	
63	30C	4	11.0	10.2	5.0		1/4欠損	花崗岩	
64	30C	4	6.9	6.1	4.4	248	完存	花崗岩	
65	28C	4	10.4	9.2	5.5	780	完存	花崗岩	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
66	28D	4	9.8	8.2	4.8		一部欠損	花崗岩	
67	28C	4	9.3	7.7	6.3	580	完存	花崗岩	敲打痕あり
68	28D	4	11.3	9.8	5.7	880	完存	花崗岩	敲打痕あり
69	28C	4	10.3	8.6	8.8	732	完存	花崗岩	敲打痕あり
70	29E	4	—	8.5	6.0		1/3欠損	角閃石花崗岩	
71	29C	4	—	—	—		1/2欠損	花崗岩	
72	28D	5	11.2	9.1	5.2	740	完存	花崗岩	
73	28D	5	6.2	4.8	6.0	153	完存	花崗岩	
74	28D	5			4.7		1/3欠損	花崗岩	
75	28D	5	3.8	3.5	2.7	45	完存	花崗岩	
76	29D	5	11.0	7.9	6.0	740	完存	花崗岩	
77	29B	5	10.0	9.5	6.3	800	完存	花崗岩	
78	30D	5	10.0	7.9	6.3	668	完存	花崗岩	
79	28D	5	11.5	9.2	5.4	830	完存	花崗岩	
80	28D	5	6.5	5.8	5.1	250	完存	花崗岩	
81	29C	5	8.4	4.6	3.2	175	完存	花崗岩	
82	29C	5	6.7	4.9	3.9	175	完存	花崗岩	
83	29D	5	10.3	9.4	6.5	835	完存	花崗岩	
84	29C	5	9.6	8.0	4.7	525	完存	花崗岩	
85	29D	5		10.9	5.1		1/3欠損	角閃石花崗岩	
86	29C	5	6.3	5.2	3.3	158	完存	花崗岩	
87	29C	5	6.5	4.7	4.3	185	完存	花崗岩	
88	29C	5	9.4	7.1	4.5		一部欠損	花崗岩	
89	28C	5	9.0	7.7	4.8		一部欠損	花崗岩	
90	28C	5	9.8	5.1	4.0	225	完存	凝灰岩	
91	29D	5	6.5	5.5	4.5	230	完存	石英	
92	29D	5					一部のみ	花崗岩	
93	28C	5			4.8		1/4欠損		
94	29E	5	6.6	5.4	3.3	208	完存	花崗岩	
95	30D	5	6.1	5.3	2.9	145	完存	花崗岩	
96	28C	5	6.9	4.9	4.1	174	完存	花崗岩	
97	28C	5	8.0	7.0	3.4	260	完存	花崗岩	
98	29D	5					2/5欠損	花崗岩	
99	28C	5			4.2		1/3欠損	花崗岩	
100	28B	5	11.2	8.8	4.9	660	完存	花崗岩	
101	29D	5	7.1	6.9	5.5	320	完存	花崗岩	
102	28D	5	10.4	9.7	4.8	750	完存	花崗岩	
103	29D-C	5	12.5	9.9	6.4	1190	完存	花崗岩	
104	28C-D	5	5.7	5.3	4.1	178	完存	花崗岩	
105	28D	5	9.7	8.4	6.3	630	1/3欠損	角閃石花崗岩	
106	28D	5	8.3	5.7	3.3	185	1/3欠損	花崗岩	
107	29D	5		9.3	5.5	645	1/3欠損	花崗岩	
108	28E	5	9.0	7.3	3.3	355	完存	花崗岩	
109	29E	5	8.3	6.4	3.4	285	完存	花崗岩	
110	30E	5			14.5	—	1/2欠損	花崗岩	大型石皿か
111	30C	5	4.2	3.9	3.2	68	完存	花崗岩	小型

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
112	30C	5	6.7	6.1	3.5	240	完存	チャート	
113	29E	5	7.4		6.2	185	1/3欠損	花崗岩	
114	28E	5	9.2		4.4	345	1/3欠損	花崗岩	
115	28D	5	3.6	3.5	2.8	84	完存	花崗岩	小型
116	29E	5	3.9	3.8	3.2	65	完存	花崗岩	小型
117	29E	5	6.7	4.7	3.7	165	完存	花崗岩	
118	29E	5	11.8	3.6	2.6	179	完存	チャート	棒状
119	28F	5	7.4	5.0	4.7	230	完存	花崗岩	
120	28E	5	7.5	6.9	4.2	310	完存	花崗岩	
121	28F	5	14.9	5.0	3.5	414	完存	花崗岩	棒状
122	28F	5	10.2	7.7	6.1	630	完存	花崗岩	
123	28F	5	6.5	5.3	3.9	180	完存	花崗岩	
124	29E	5	5.2	4.1	3.8	105	完存	花崗岩	
125	28F	5		7.7	5.3	520	1/4欠損	花崗岩	
126	28F	5				314	1/3残	玢岩	
127	30C	5	8.5	5.6	5.0	350	完存	花崗岩	
128	28F	5			5.8	460	1/2欠損	角閃石花崗岩	
129	30C	5	9.9	6.5	5.4	500	完存	花崗岩	
130	28F	5	6.6	6.1	3.7	210	完存	花崗岩	
131	29E	5			4.7	524	1/3欠損	花崗岩	
132	28F	5	5.9	5.6	3.3	140	完存	花崗岩	
133	28F	5	4.5	3.7	3.3	110	完存	花崗岩	
134	29D	5	19.1	8.6	4.1	470	完存	花崗岩	
135	30B	6	10.3	8.6	5.3	638	完存	花崗岩	
136	30C	6	5.0	4.5	2.9	90	完存	花崗岩	
137	30C	6	11.0	9.5	5.3	838	完存	花崗岩	
138	29B	6	6.4	5.8	5.3	255	完存	花崗岩	
139	29E-B	6	8.9	7.7	3.9	385	完存	花崗岩	
140	29B	6				50	一部のみ	花崗岩	
141	28F	6	10.7	8.7	5.3	705	完存	花崗岩	
142	南壁	6	10.5		5.0	511	1/2欠損	花崗岩	
143	南壁	6	10.9	9.1	5.7	790	完存	花崗岩	
144	29E	7	11.6	9.4	5.3	816	完存	花崗岩	
145	29E	7	7.6	7.2	4.0	298	完存	花崗岩	
146	29E	7		11.3	4.8		1/5欠損	花崗岩	
147	30D	7	8.5	8.3	4.2	415	完存	花崗岩	
148	29D-A	7			4.0	265	1/2欠損	角閃石花崗岩	
149	29D	7	5.3	4.9	2.8	120	完存	花崗岩	
150	29E-C	7	9.6	7.9	4.6	500	完存	花崗岩	
151	30C	7	3.3	2.9	1.7	23	完存	石英	
152	29F-A	8	10.6	9.8	6.2	870	完存	花崗岩	
153	30D-A	8	13.5	7.1	4.5	676	完存	花崗岩	
154	29D-B	8	9.8	8.4	4.9	555	完存	花崗岩	
155	29F-A	8	12.5	10.5	6.4	1250	完存	花崗岩	
156	28B	8			4.8	248	1/3残	チャート	
157	30C	9	8.8	7.1	4.5	452	完存	花崗岩	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
158	29D	9	12.3	10.6	6.8	1330	完存	花崗岩	
159	29F	9	8.6	8.0	5.4	516	完存	花崗岩	
160	29E	9	11.1	8.7	5.2	730	完存	花崗岩	
161	30C	9	11.4	9.2	7.3	1070	完存	花崗岩	
162	31ライン	9	10.2	7.8	4.6	606	完存	花崗閃緑岩	
163	31ライン	9	6.1	4.5	4.0	175	完存	花崗岩	
164	31ライン	9	9.5	8.0	5.5	544	完存	花崗岩	
165	30C	10	4.9	4.4	2.5	78	完存	花崗岩	小型
166	28F	10	8.9	5.6	4.1	315	完存	花崗岩	卵型
167	30C	10	10.6	10.1	4.8	703	完存	花崗岩	
168	28F	10	6.8	6.5	3.2	199	完存	石英	
169	30D	10		9.2	6.1	800	完存	花崗岩	
170	29ライン	12				275	1/2欠損	花崗岩	
171	29ライン	12	10.8	9.1	5.6	698	完存	花崗岩	
172	S H86302	3	7.7	5.5	4.6	253	一部欠損	花崗岩	
173	S H86307	5		10.6	5.7	425	1/2欠損	安山岩	
174	S H86307	5	11.0	9.2	5.5	700	完存	花崗岩	
175	S H86307	5	8.4	4.7	5.5		1/2欠損	花崗岩	敲打痕あり
176	S K86308	5		5.4	3.7	143	一部欠損	花崗岩	
177	S K86308	5	5.9	3.6	3.1	93	完存	花崗岩	
178	S K86308	5	6.1	5.0	4.0	380	完存	花崗岩	
179	S K86308	5		7.7	4.7	165	1/3欠損	花崗岩	
180	S K86310	5	8.0	4.6	4.5	225	完存	花崗岩	
181	S K86311	5	13.8	6.2	3.3	385	完存	花崗岩	
182	S K86311	5	9.3	6.9	4.5	415	完存	花崗岩	
183	S K86311	5		8.3	3.8	450	1/3欠損	チャート	
184	S K86313	5	5.3	4.6	4.2		完存		
185	S K86313	5	9.1	7.4	4.0	390	完存	花崗岩	
186	S K86313	5	8.8	8.0	5.2	510	完存	花崗岩	
187	S K86313	5	12.2	10.7	7.1	1300	完存	花崗岩	
188	S K86313	5		6.5	4.1	225	1/3欠損	花崗岩	
189	28・27F	東断割	4.9	3.6	2.8	70	完存	花崗岩	
190	29B	断割溝	10.2	8.8	4.8	640	完存	花崗岩	
191	A	攪乱			4.8	200	1/4残	花崗岩	
192	28・27F	東断割	6.1	4.9	2.9	125	完存	花崗岩	

8. 砥石

1	28E	1	11.3	6.8	2.7	330	完存	凝灰岩	
2	30D	4	8.9	5.3	3.3	180	1/2残存	砂岩	
3	29E	3	—	—	—	90	一部のみ	花崗岩	
4	29F	4	5.9	4.2	2.8	60	完存	砂岩	
5	29C	5	7.3	6.1	2.3	100	1/2欠損	砂岩	
6	29C	5	4.6	3.3	1.3	10	完存	花崗岩質砂岩	
7	29C	5	10.5	9.0	1.5	235	完存	閃緑岩	
8	30D	5	10.1	7.2	4.6	220	完存	砂岩	
9	29D	5	7.8	3.4	1.3	265	完存	砂岩	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
10	29D	5	10.0	8.4	3.2	40.5	一部のみ	流紋岩	
11	30D	5	5.5	3.1	3.4	60	完存	砂岩	
12	28C	5	8.3	8.2	2.4	159	完存	閃緑岩	
13	30D	5	11.4	5.5	4.9	653	完存	花崗岩	
14	30C	5	4.9	4.1	1.5	40	完存	泥岩	
15	28E	5	7.9	7.5	3.0	268	完存	砂岩	
16	29F	5	11.3	7.5	3.7	280	完存	閃緑岩	
17	29F	5	7.7	6.6	1.6	113	一部欠損	安山岩	
18	29F	5	8.1	5.4	4.2	160	完存	砂岩	
19	29E	5	11.6	8.2	2.7	330	完存	砂岩	
20	28C	5				198	—	砂岩	
21	29ED	6	6.7	4.9	3.0	85	1/2欠損	砂岩	
22	S K86308		8.1	7.0	3.1	175	完存	砂岩	
23	S K86308		12.8	4.0	2.4	110	完存	泥岩	
24	西断割		10.4	5.7	1.8	200	完存	砂岩	
25						314	—	花崗岩	

9. 軽石

1	28C	3	4.4	3.3	1.9			浮石凝灰岩	
2	30C	4	2.6	2.3	1.8			浮石凝灰岩	
3	29C	5	4.7	4.3	3.8			浮石凝灰岩	
4	29C	5	5.0	4.3	3.5			浮石凝灰岩	
5	29C	5	5.6	3.9	2.3			浮石凝灰岩	
6	30C	5	3.1	2.3	1.4			浮石凝灰岩	
7	28F	5	3.9	3.0	1.8			浮石凝灰岩	
8	28F	5	3.5	2.3	1.5			浮石凝灰岩	
9	28D	5	5.3	4.3	1.9			浮石凝灰岩	
10	28D	5	3.8	3.5	2.9			浮石凝灰岩	
11	29F	5	5.2	4.9	1.2			浮石凝灰岩	
12	東断割	6	7.7	4.8	3.4			浮石凝灰岩	
13	S K86308		4.2	3.9	2.1			浮石凝灰岩	
14	28・27F	東断割	5.8	4.3	3.5			浮石凝灰岩	
15	29E	5	5.3	3.0	1.1			浮石凝灰岩	

10. 石 錘

1	28C	5	8.6	8.1	2.4	265	完存	流紋岩	第61図10
2	28D	5	8.8	8.1	3.4	320	完存	花崗岩	第61図 8
3	28D	5	9.1	7.9	3.0	300	完存	チャート	第61図 7
4	28D	5	5.2	4.3	0.8	20	完存	粘板岩	
5	29D	5	8.1	7.9	1.6	110	完存	粘板岩	
6	28F	5	9.5	7.9	3.1	270	完存	花崗岩	第61図 4
7	28F	5	9.8	9.0	3.9	478	完存	花崗岩	
8	30D-A	5	9.0	7.8	3.1	216	完存	チャート	第61図 3
9	30C	7	12.7	10.6	6.2	1020	完存	花崗岩	
10	29E	7	9.5	8.8	3.3	380	完存	チャート	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
11	30C	7	8.6	7.6	5.0		一部欠損	頁岩	敲き石兼用
12	30D-C	7	9.7	6.6	3.7	305	完存	花崗岩	
13	29D	7	10.5	8.0	2.7	315	完存	流紋岩	
14	29D	8	10.0	9.3	4.6	570	完存	チャート	
15	28B	8	13.8	11.4	5.2	1105	完存	花崗岩	第61図3
16	29Dあぜ	8	8.7	6.1	3.2	240	完存	花崗岩	第61図6
17	29Dあぜ	8	7.1	7.9	2.3	195	完存	泥質凝灰岩	第61図9
18	30C-B	9	10.3	5.0	2.4		1/2残存	チャート	
19	30C	10	7.2	6.0	2.2		一部欠損	チャート	
20	29ライン	12	9.9	7.9	1.7		完存	花崗岩	
21	29ライン	13-1	7.9	7.2	2.6	205	完存	チャート	第61図1
22	29ライン	13-1	9.1	7.0	2.6	200	完存	花崗岩	第61図2
23	29ライン	13-1	8.0	8.2	3.3	260	完存	花崗岩	
24	29F	SK 308-10	9.9	9.5	2.1	170	完存	頁岩	
25	29F	SK 308-12	8.6	6.5	2.5	193	完存	砂岩	第61図5
26		表探	9.9	8.8	2.8	339	完存	チャート	第61図12

第3節 弥生時代

第1項 概要

(1) 弥生時代から近世以降における層序(第64図)

本節では、弥生時代の報告を取り扱うが、便宜上ここで弥生時代以降の層序について述べることにする。

縄文時代の包含層の上には、いく層からもなる厚い無遺物の砂層が堆積している。この砂層は舟戸南地区の北端を流れる自然流路に至るまで普遍的に存在し、この無遺物の砂層によって縄文時代の包含層と弥生時代以降の包含層が隔絶されている。一方、弥生時代中期から現代に至る包含層は、平安時代の洪水層を挟みはするが、比較的連続し、洪水等による一時的流失と堆積による断絶はあるが、自然堤防上に集落が継続的に営まれていた様相が窺える。

包含層の最下層を構成するのは、弥生時代中期の遺構面の存在する暗褐色の細砂質土と黒褐色の粘質土である。多くの遺構は、黒褐色粘質土の上層もしくは途中から切り込むと考えられるが、この面で遺構を検出するのは困難で、多くは暗褐色細砂質土・褐色砂質土の上面で検出している。黒褐色粘質土は、弥生時代中期の遺物を多量に含んでいる。なお、カキ安地区に見られるような弥生時代前期の遺構面は存在しない。

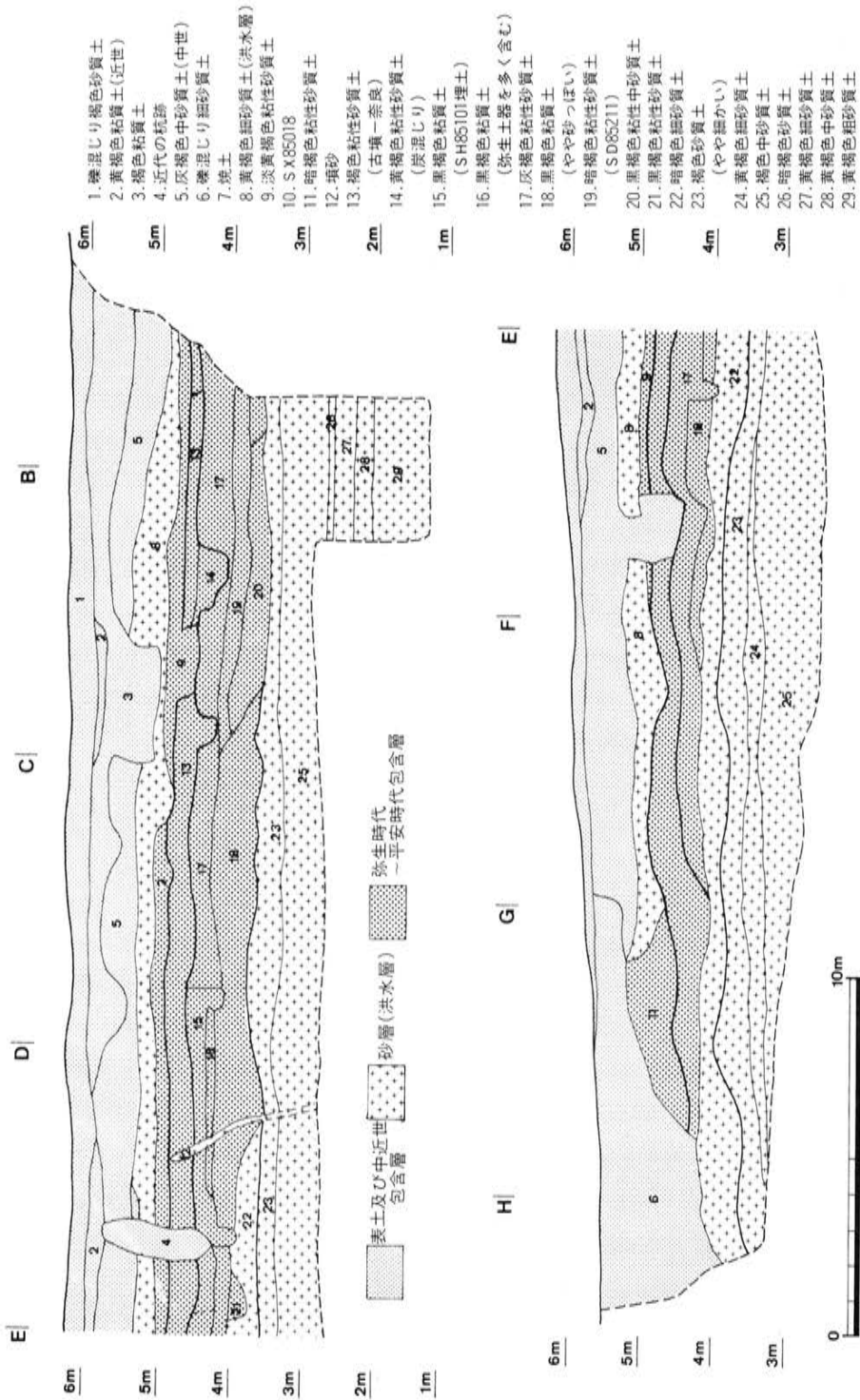
弥生時代中期の包含層の上には、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を含む灰褐色の粘性砂質土が堆積している。遺物の大半は弥生時代中期のもので、洪水によって流されてきたとも考えられる。上層での検出作業が困難であった古墳時代後期～奈良時代中期の遺構の多くはこの層の上面で検出した。

灰褐色粘性砂質土の上には、褐色の粘性砂質土が堆積している。この層は、古墳時代後期から奈良時代前半までの遺物を包含する。この層の上面で奈良時代の掘立柱建物跡群(下層)が掘り込まれていると考えられるが、多くはこの層を除去した段階で検出している。

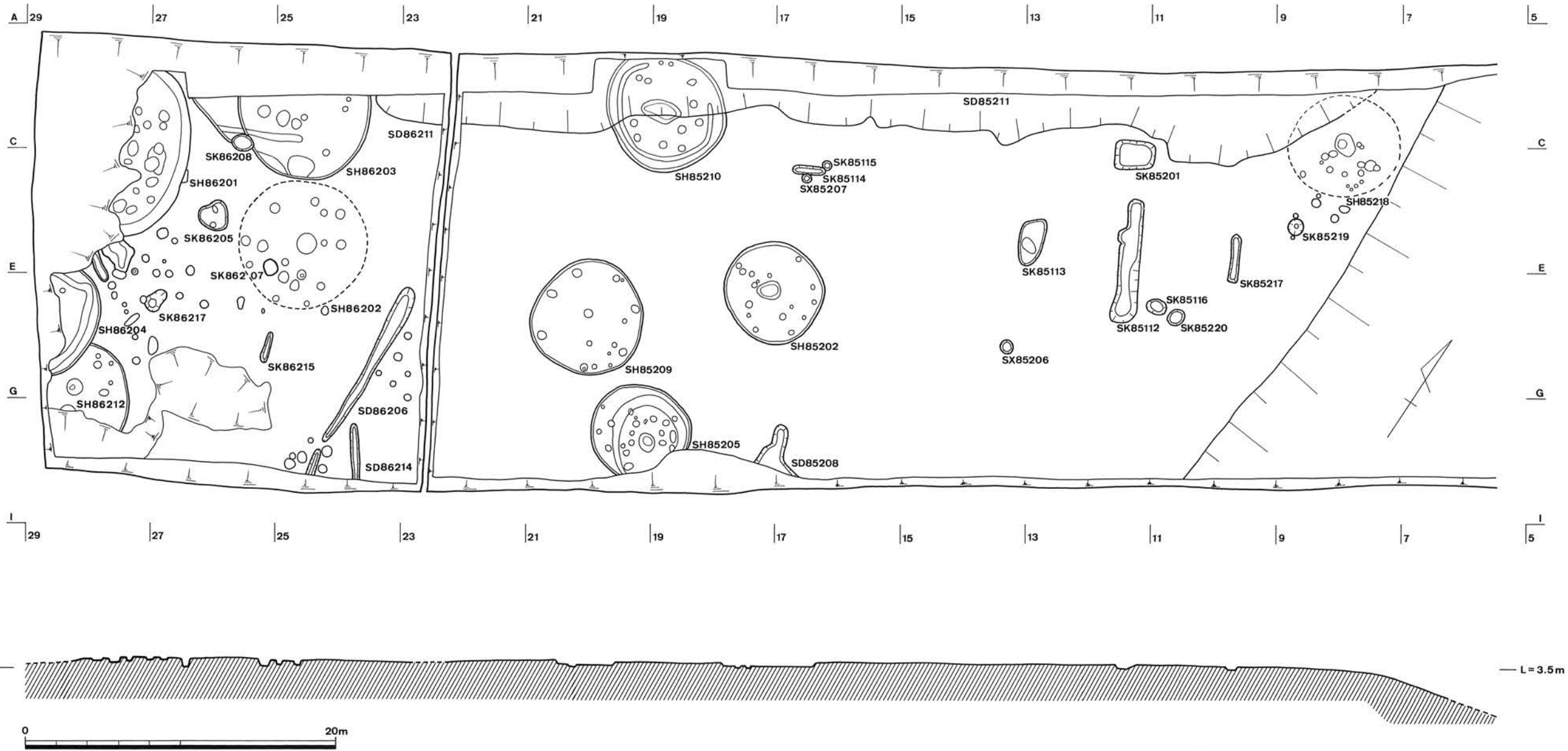
褐色粘性砂質土の上層には淡黄褐色の粘性砂質土が堆積している。奈良時代後半の遺物を包含する。この層の上層には平安時代の洪水層と考えられる砂層が堆積し、この洪水によって完全に流失する以前の掘立柱建物跡群(上層)をこの層の上層で検出した。

洪水層と考えられる砂層は、舟戸地区全域に広がっており、カキ安地区にまで広がっているようである。奈良時代から平安時代初頭の遺物を含む。洪水層の上層には中世の包含層が存在し、この層からいくつかの遺構が切り込まれているのが断面で観察できた。

近世の包含層の中には、断面で土坑・井戸及び漆喰等が観察できた。一方、近世墓地に伴う墓壇群が奈良時代の遺構面にまで達している。



第64図 舟戸北地区弥生時代以降土層図(23ライン)



第65図 舟戸南地区弥生時代検出遺構図

(2) 遺構の概要

舟戸南地区は、弥生時代中期における集落内の居住域にあたる。第6・7次調査で検出した竪穴式住居跡は、計10基であるが、隣接する第4次調査地区内でも2基検出されており(ただし内1基は、今回報告のSH86201と同一のもの)、居住域の広がりを知ることができる。検出遺構は、竪穴式住居跡以外に土坑・溝状遺構・ピット等がある。弥生時代中期の基盤層は無遺物の褐色の砂層であるが、この層の上面に暗褐色の細砂質土が堆積しており、これが本来の遺構面の名残りと考えられる。この層の上には黒褐色粘質土が堆積しており、遺構の一部はこの層の上面でも一部検出できた。暗褐色細砂質土も黒褐色粘質土も、ともにわずかに現由良川とは反対方向に向かって傾斜しており、弥生時代の自然堤防が現由良川の上に大きく張り出していたことが窺える。すなわち、弥生時代中期の集落は、本来現由良川の上に大きく張り出していたと推定され、由良川によって遺跡の大半が流失したと思われる。

居住域の南端は、第4次調査に報告されている大溝により区画され、北端は自然河川(旧河道)によって制限されている。

(3) 遺物の概要

出土した遺物は、弥生土器・石器及び石製品である。今回の調査で出土した遺物は、この時期のものが大半を占める。整理箱にして約400箱である。その内、石器・石製品等は約20箱で、残りは弥生土器である。

出土した土器の内、畿内第Ⅰ様式・第Ⅱ様式・第Ⅴ様式に併行するものは僅少で、多くが第Ⅲ様式・第Ⅳ様式に併行するものと考えられる。ここでは、この時期の遺物を次項以後の記述を簡略化するために弥生時代中期の土器の分類案を示しておく^(注1)。

出土した器種は、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器の4器種で、器台形土器は現状では見当たらない。4器種のほかにミニチュア土器がある。分類は口縁部の形態を重視して行ったため、本来の形態の違うものが同一器種として扱われているものもある。なお、簡略化のため以後、本文中では壺形土器を壺と表示することが多々ある。

壺形土器(第66・67図)

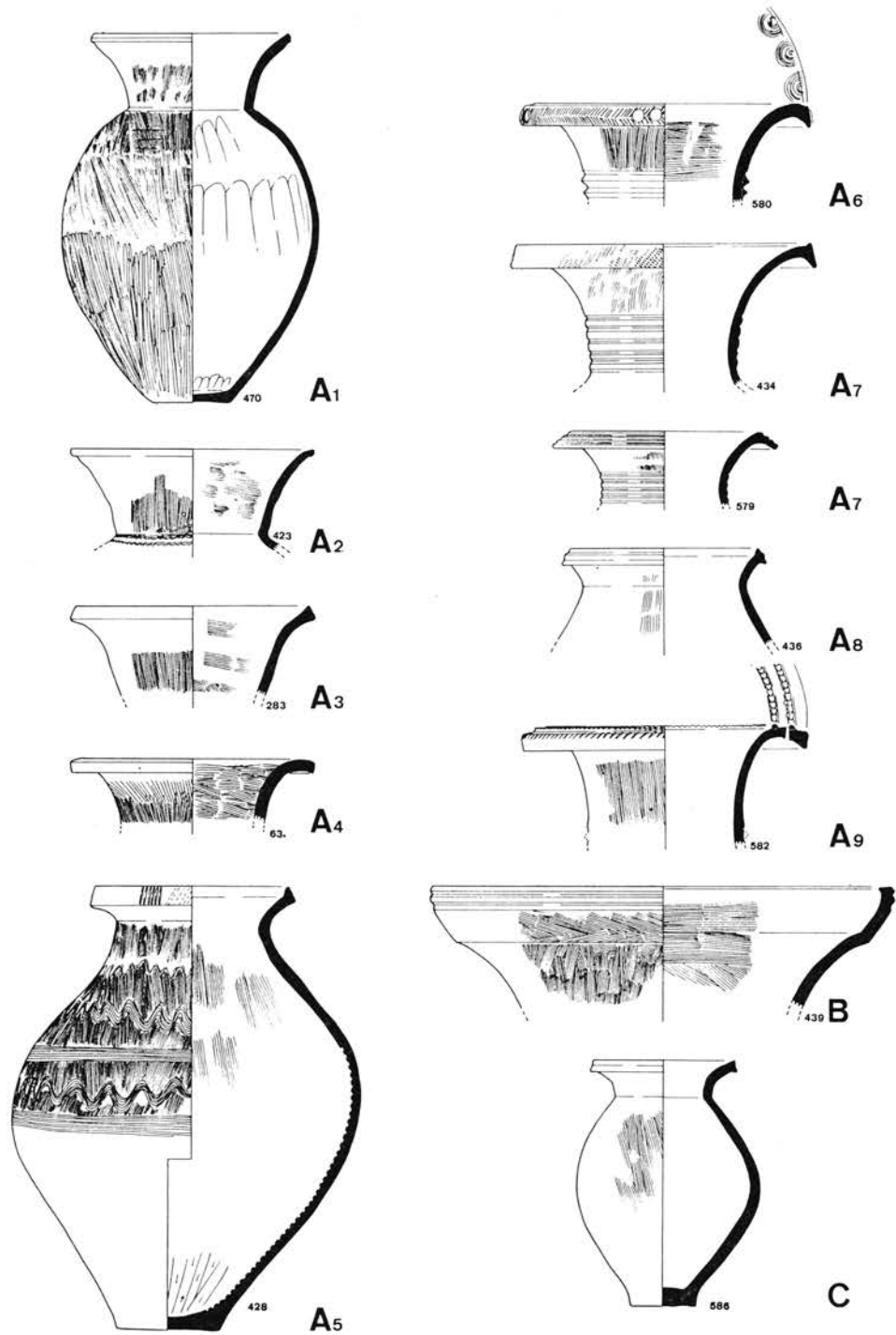
壺A 頸部から斜め上方にのびた口縁が大きく水平方向に開く、いわゆる広口壺である。主に口縁部の形態により以下のとおり細分する。

壺A₁——口縁端部が肥厚せず、狭い端面をつくる。

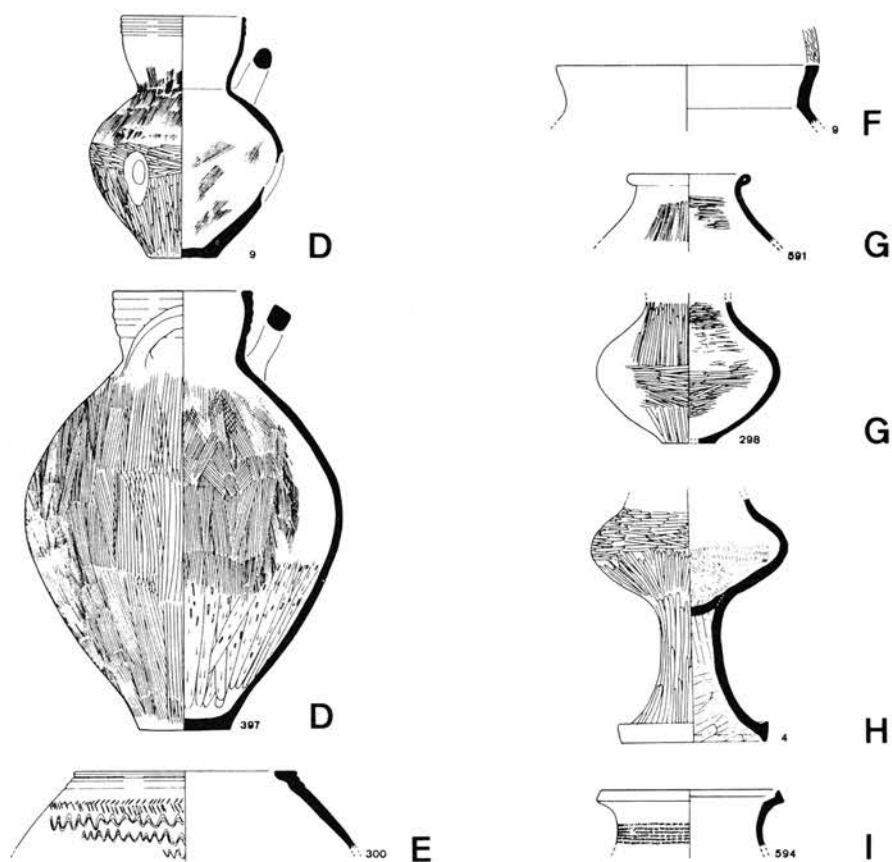
壺A₂——口縁下端部がわずかに肥厚する。

壺A₃——口縁端部が上下にわずかに肥厚する。

壺A₄——口縁端部が口縁内面よりも下方にのびる。



第66図 弥生時代中期土器分類図1 (壺形土器1)



第67図 弥生時代中期土器分類図2(壺形土器2)

壺A₅——口縁端部を上下に拡張し、やや幅広い端面をもつ。

壺A₆——口縁端部を上下に拡張し、やや幅広い端面をもち、内面を飾る。

壺A₇——口縁端部を垂下させ、幅広い端面をもつ。

壺A₈——比較的短い頸部をもつ。

壺A₉——口縁部内面に貼り付け突帯文をもつもので、播磨地域や山陰地域に見られるもので搬入品である。

壺B 頸部から斜め上方にのびた口縁部が屈曲して上方に立ち上がる。大型のものが大半を占める。大型のものは胎土に統一性があり、摂津地域の搬入品とも考えられる。

壺C 短く直立する頸部から水平に開く口縁部をもつ小型の壺で、加飾しないものが多い。

壺D 垂直方向もしくは、やや斜め上方に開く長い頸部をもつ。いわゆる水差し形の壺を含む。頸部と口縁部の境は明瞭ではない。把手をもつ。球形の胴部をもつものと長胴の

胴部をもつものがある。大型のものもある。

壺E いわゆる無頸壺である。後述する鉢A₁・鉢A₂との差が顕著ではなく、加飾の著しいもののみ壺Eとした。

壺F 直立した短い頸部・口縁部をもつ。

壺G 口縁端部を折り返した壺である。内外面ともミガキで調整し、紐穴をもつ。

壺H 台付の壺を総称して扱う。該当品はほとんど選別できなかった。

壺I 受け口状口縁をもつもので近江地方からの搬入品と考えられる。

甕形土器(第68図)

甕A 頸部が緩やかに屈曲し、いわゆる如意形口縁をもつ。口縁端部をへら状工具で加飾するものもある。多くは数か所に波状を呈する押圧文をもつ。

甕B 頸部が「く」の字状に屈曲するもの。口縁端部の形態で細分する。

甕B₁——端部が丸くおわるかあるいは小さな端面をもつ。口縁端部の数か所に波状を呈する押圧文を伴うものもある。

甕B₂——端部をやや上方につまみあげる(はねあげ口縁)。

甕B₃——拡張しない端面をもつ。大型品を中心に存在する。

甕B₄——端部を上下に拡張して端面をもつ。

甕B₅——端部を上下、特に下方に大きく拡張して幅広い面をもつ(播磨以東の搬入品か)。

甕C 受け口状口縁をもつもので、近江地域からの搬入品と考えられるものである。

鉢形土器(第69図) 鉢形土器には小型のものから大型のものまで存在し、また器種も豊富である。ここでは、主に口縁部の形態により分類を試みる。完形に復原できるものが少なく、底部の形が不明であるが、脚部をもつものは少なくないと考えられる。脚部については高杯の脚部とともに後述する。

鉢A 口縁部が内傾するものである。口縁端部の形態により細分する。台付無頸壺に属するものも含まれる。

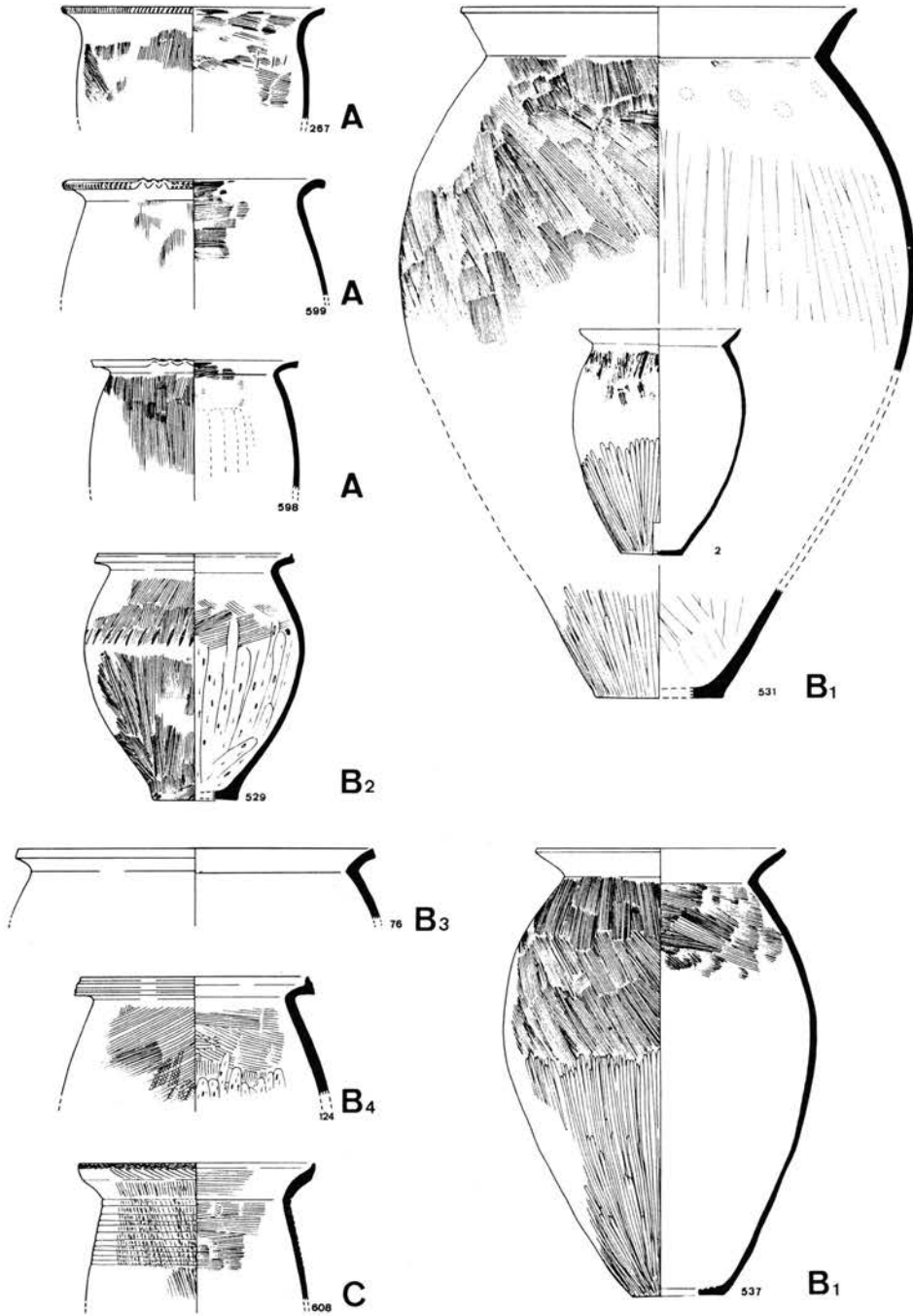
鉢A₁——口縁端部をほとんど拡張しない。

鉢A₂——口縁端部を内側に拡張する。

鉢A₃——口縁端部を外側に拡張する。

鉢B 口縁部外面下方にキザミメを施した貼り付け突帯をもつものである。

鉢B₁——口縁部が内傾する。



第68图 弥生時代中期土器分類图 3 (甕形土器)

鉢B₂——口縁部がほぼ直立する。

鉢C 中型もしくは大型のものが大半で、椀形の体部から上方もしくは外側に開く口縁部をもつ。深い器形をもつものが大半を占め、口縁端部にキザミメを施すもの、口縁部下方を凹線文・圧痕文突帯で加飾するものがある。やや器形の異なるもので、浅く把手をもつものがある。

鉢D 短く屈曲した「く」の字を呈する頸部をもつ。脚台の有無で細分する。

鉢D₁——深い器形を呈する。口縁部のみでは甕B₁との区別が難しい。体部最大径が口縁部径を超えず、器高が低い。煤が付着しないことから甕と区別した。

鉢D₂——鉄鉢状の体部から屈曲して口縁部にいたる。脚台をもつと考えられる。

鉢E 小型で、体部下半を大きく屈曲させる。高杯の可能性もある。

鉢F 脚部をもたない小型の鉢を総称する。

鉢G 受け口状の口縁部をもつ。近江地域からの搬入品と考えられるものが含まれる。

高杯形土器(第69図) 畿内地方を中心に普遍的に存在する高杯A・Bのほかに、播磨地域にも散見できる高杯Cがある。また、特殊なものとして高杯D・Eがある。

高杯A 杯部から口縁部が屈曲して立ち上がる。

高杯B 木製の高杯を似せたと言われるもので、椀状を呈する杯部の口縁部を水平方向にのぼし、内面に1条の突帯を付けたものである。口縁端部の垂下の有無で細分する。

高杯B₁——口縁端部は水平に開いて終わる。

高杯B₂——口縁端部を垂下させる。

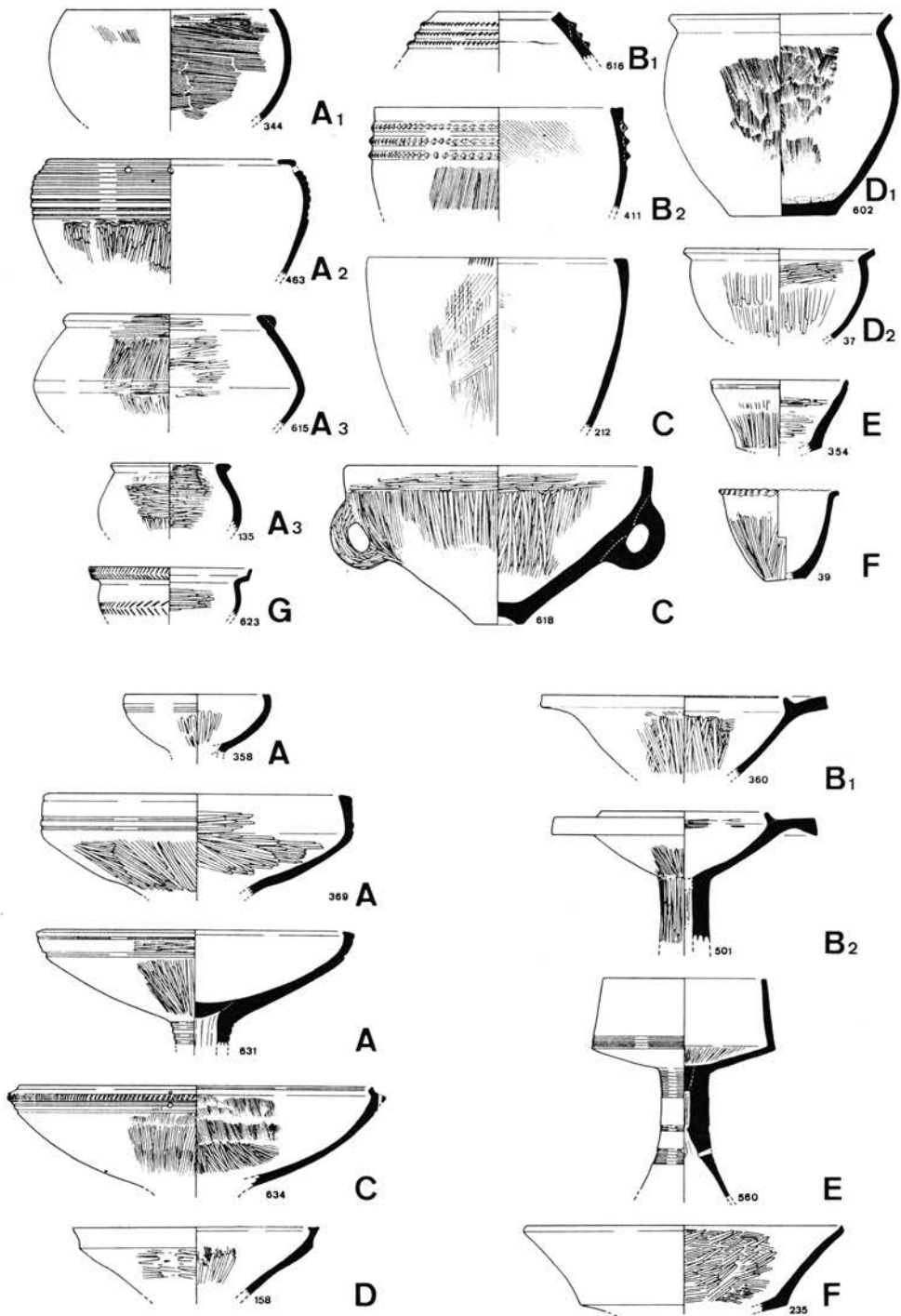
高杯C 杯部底部からゆるやかに湾曲しながら口縁部に至るものである。口縁端部内側に突帯を付ける。

高杯D 後期に通有の高杯に似たもので、杯部から屈曲して外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。器台の可能性もある。

高杯E 内傾気味に直立する長い口縁部をもつ。

高杯F 口縁部が大きく外反して長くのびる。端部に面をもち、丹を塗ることが多い。

底部 平らな底部を持つものは壺・甕・鉢であるが、このうち鉢の多くは内面にヘラミガキが観察でき比較的明瞭に区別できる。壺・甕の底部は大型のものと一部のものを除くと器形・手法(調整を含む)から区別をすることは困難である。以下の文章中では、煤の付着しているものを甕として扱っているが、口縁付近の形態から壺と分類したものの中にも煤が付着しているものがあり、的をえているとは言えない。



第69图 弥生時代中期土器分類图 4 (鉢形土器・高杯形土器)

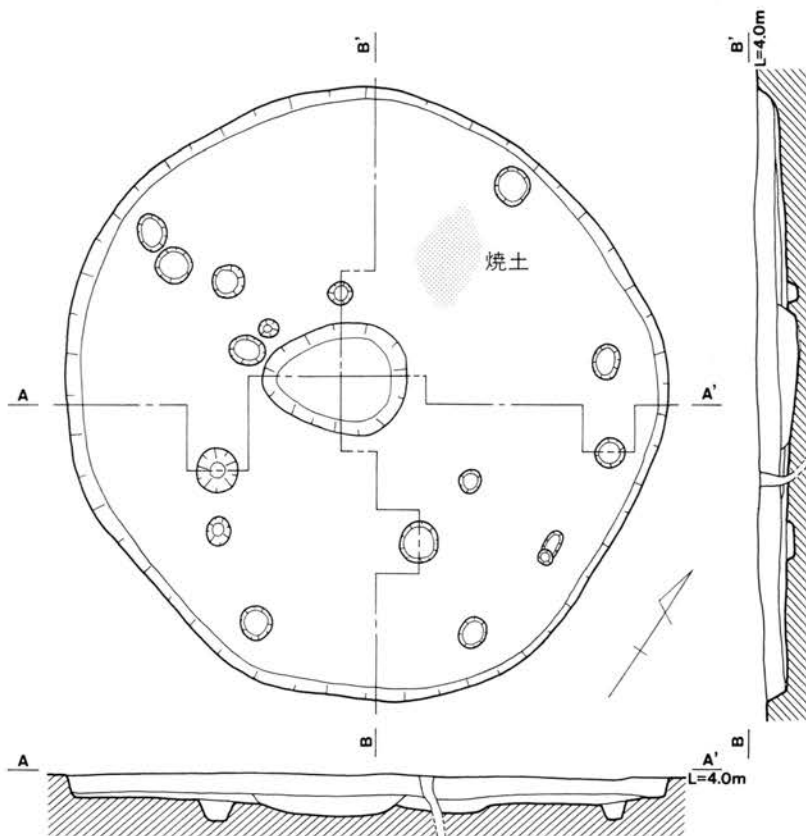
脚部 出土した脚部は鉢形土器・高杯形土器に伴うものである。鉢・高杯ともに体部・杯部との接合例が少なく、その関係はあまりよくわからない。数例ある高杯の接合例から、裾部の接地面(裾端部)を上下に拡張し、内面をヘラケズリする定型化したものは高杯に伴うものと考えられる。また柱状脚も高杯に伴うものと考えられる。それ以外の種類に富むものは多くが鉢に伴うものであろう。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

検出した遺構には竪穴式住居跡10基をはじめとして溝状遺構・土坑・柱穴及び自然河川等がある。

(1) 竪穴式住居跡

検出した竪穴式住居跡は、計10基である。その内、2基は壁部を流失している。大型の住居跡SH86201を除くと、いずれも直径6~8mを測るものである。



第70図 SH85202 実測図

SH85202(第70~72図) 17E区付近で検出した円形の竪穴式住居跡である。直径は約6.5mを測る。検出面から床面までの深さは約25cmを測る。床面には厚さ約10cmにわたって比較的締まった黒色土があり、床土と考えられる。埋土は灰褐色の粘性砂質土で、分層はできなかった。中央部付近に長径1.5m・短径1.2m・深さ23cmを測る土坑があり、炭・灰の混じる粘性砂質土が堆積していた。土坑の壁や底に直接火を受けた痕跡は見られなかった。この土坑から約1m北の床面で焼土が観察できた。柱穴と考えられるピットをいくつか検出したが、主柱穴を構成するものがどれであるかは不明である。周壁溝は検出できなかった。住居内南東よりの床面に石皿が残されていた。

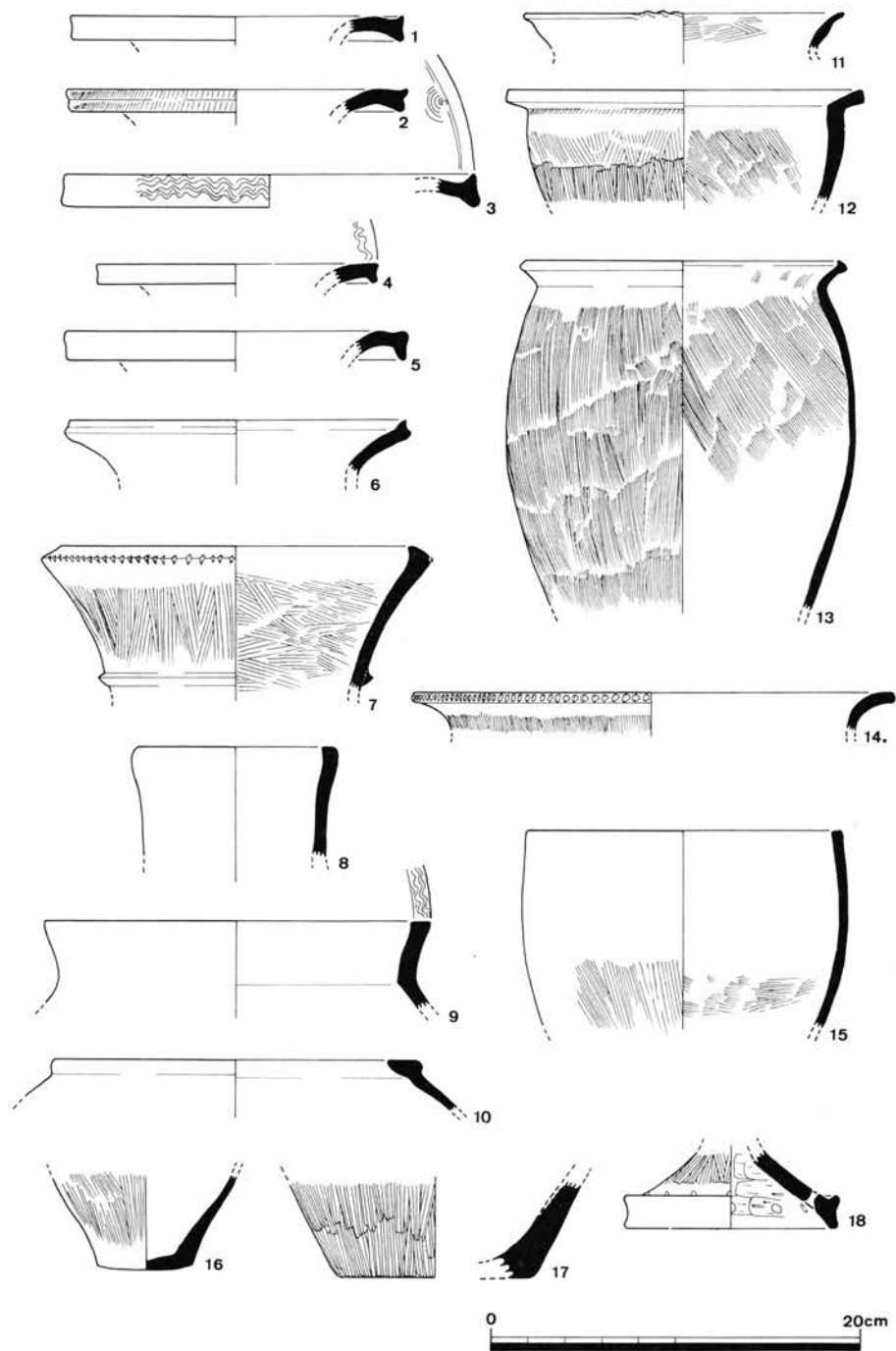
住居床面・土坑内及び埋土から、弥生土器・石器・石製品が出土している。

出土した弥生土器の総量は比較的少なく、整理箱1箱に満たない。その内、口縁部が残存している器形のわかるものは、28個体である。その構成比は、壺形土器が54%(15個体 壺A₃ 7・壺A₆ 1・壺A₇ 2・壺D 3・壺E 1・壺F 1)、甕形土器が43%(12個体 甕A 4・甕B₁ 4・甕B₂ 3・甕B₃ 1)、鉢形土器が4%(鉢A₁ 1個体)である。

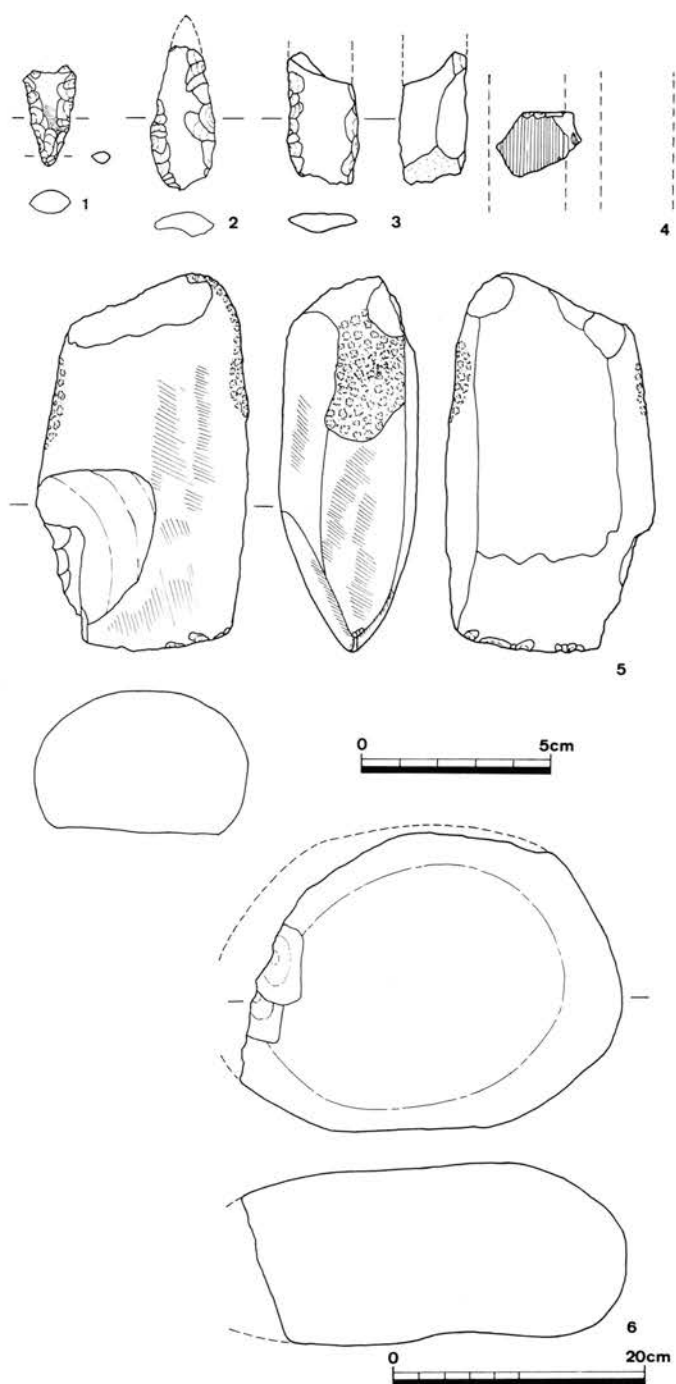
1~10は、壺形土器である。1・2・6・7は、壺A₃である。2・6は、口縁端面の中央部を強くナデて、2はその上に縦に浅いキザミメを施している。7は、口縁端部を斜め上方に拡張し、端面下半にヘラによるキザミメを施す。頸部には断面三角形の貼り付け突帯を巡らす。3は壺A₆で、口縁内面を扇形文で飾る。4・5は、壺A₇に属するものと考えられるが、垂下部は短い。4の口縁内面は2条の櫛描波状文を施す。壺Dには8のように、口縁部を飾らないものと凹線文で飾るものがある。なお、この住居に伴う土器群の中で凹線文をもつものは、床面からやや遊離して出土した壺Dのみである。9は壺Fで、口縁端面に4条の櫛描波状文が施されている。口縁部内面にも摩滅が著しいために不明瞭ではあるが、櫛描波状文が観察できる。10は、壺Eである。これらの他に圧痕文突帯をもつ壺の頸部や、櫛描直線文と波状文で飾られた壺の体部がある。

11~14は、甕形土器である。11は、口縁端部に3個単位で波状に押圧を加える甕Aである。口縁部内面にはハケが残る。12は、口縁端面を造りだす甕B₃である。体部外面のかなり上位からヘラミガキを行っている。13は、甕B₂である。内外面ともハケで調整し、内面はその上からナデ調整を行っている。体部下半にヘラミガキは施されていない。他の土器に比べて器壁も薄くていねいに造られている。14は、甕Aで、床面に唯一密着した状態で出土した土器である。端部にヘラ状工具によるキザミメがある。

15は鉢Cである。16は甕の底部である。17は外面をヘラミガキで調整したもので壺に伴うものと考えられる。18は高杯もしくは鉢の脚部である。内面はヘラケズリを残す。穿孔は12か所ある。



第71図 SH85202 出土遺物 1 (弥生土器)



第72図 SH85202 出土遺物 2 (石器)

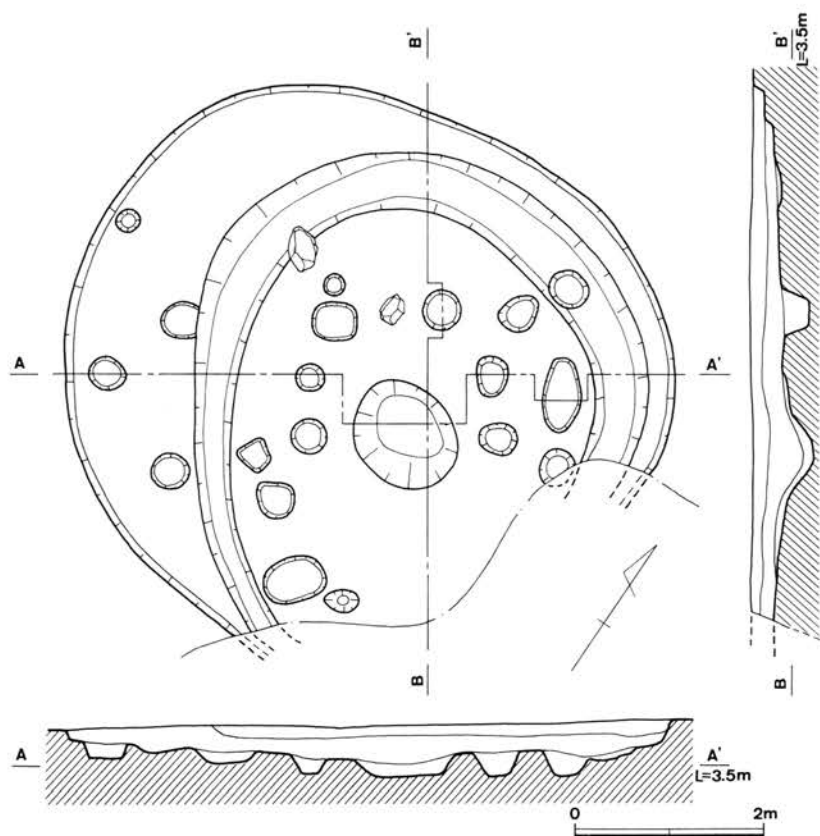
1 : 石錐, 2 : 石鏃, 4 : 銅剣形石剣, 5 : 太型蛤刃石斧, 6 : 石皿

出土した弥生土器の胎土はさまざまで、石英・チャート・くさり礫・長石を含み淡乳褐色を呈するもの(2・3・10・15), 0.5mm以下の長石・石英を含み淡褐色を呈するもの(5・11・14), 金雲母・長石・石英を含む淡褐色を呈するもの(13)等がある。

出土した石器には図化した1～6のほか、砥石等がある。1は錐, 2は石鏃である。3は、刃部を造りだす利器であるが、用途は不明である。片面のみを加工する。1～3は無斑晶安山岩製である。4は、銅剣形石剣の破片である。頁岩製である。5は、蛇紋岩製の太型蛤刃石斧である。挟り部を敲打により作っている。6は、花崗岩製の石皿である。使用したと考えられる部分が平坦になっている。

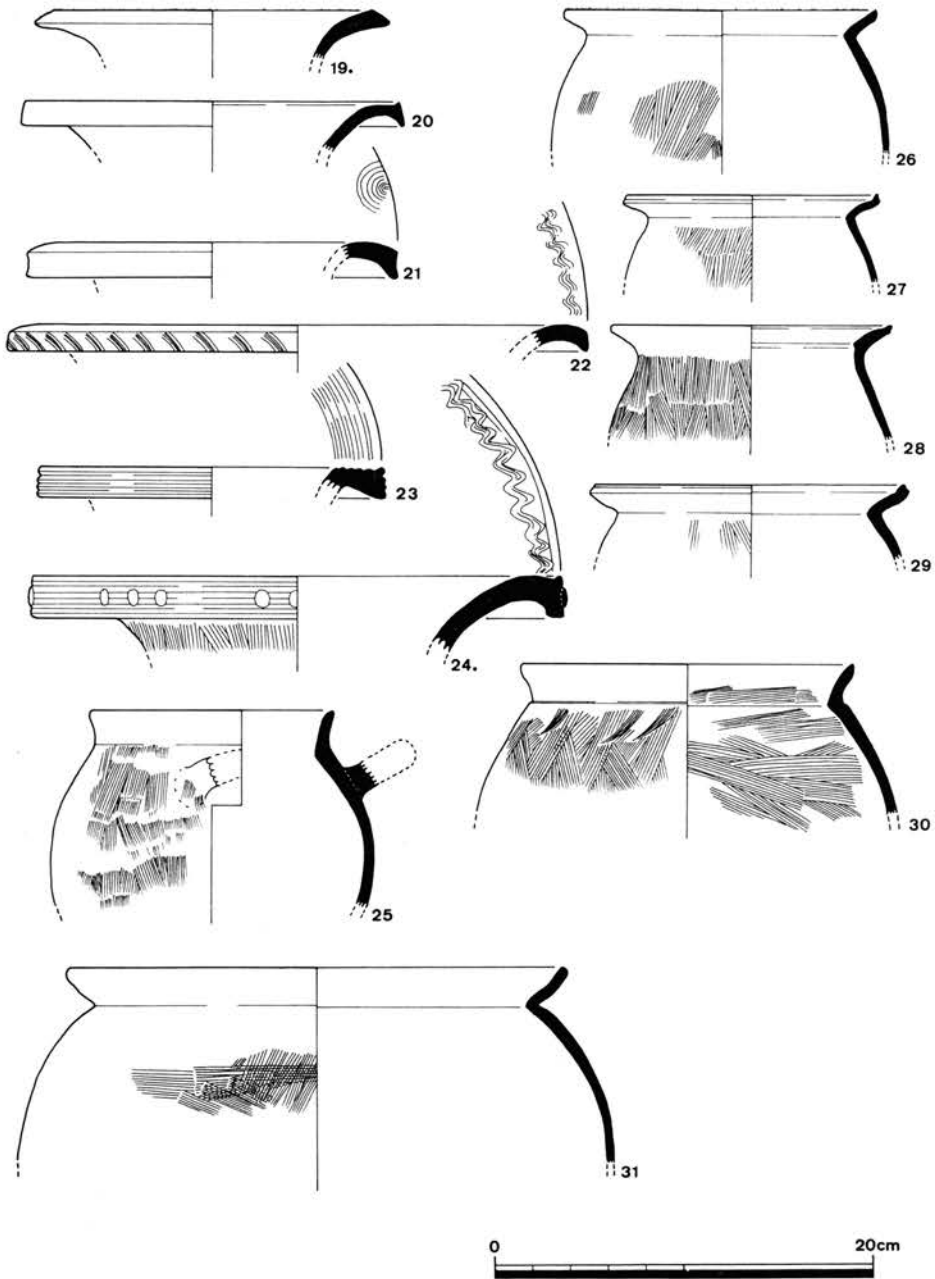
SH85205 (第73～78

図) 19G区付近で検出した円形竪穴式住居



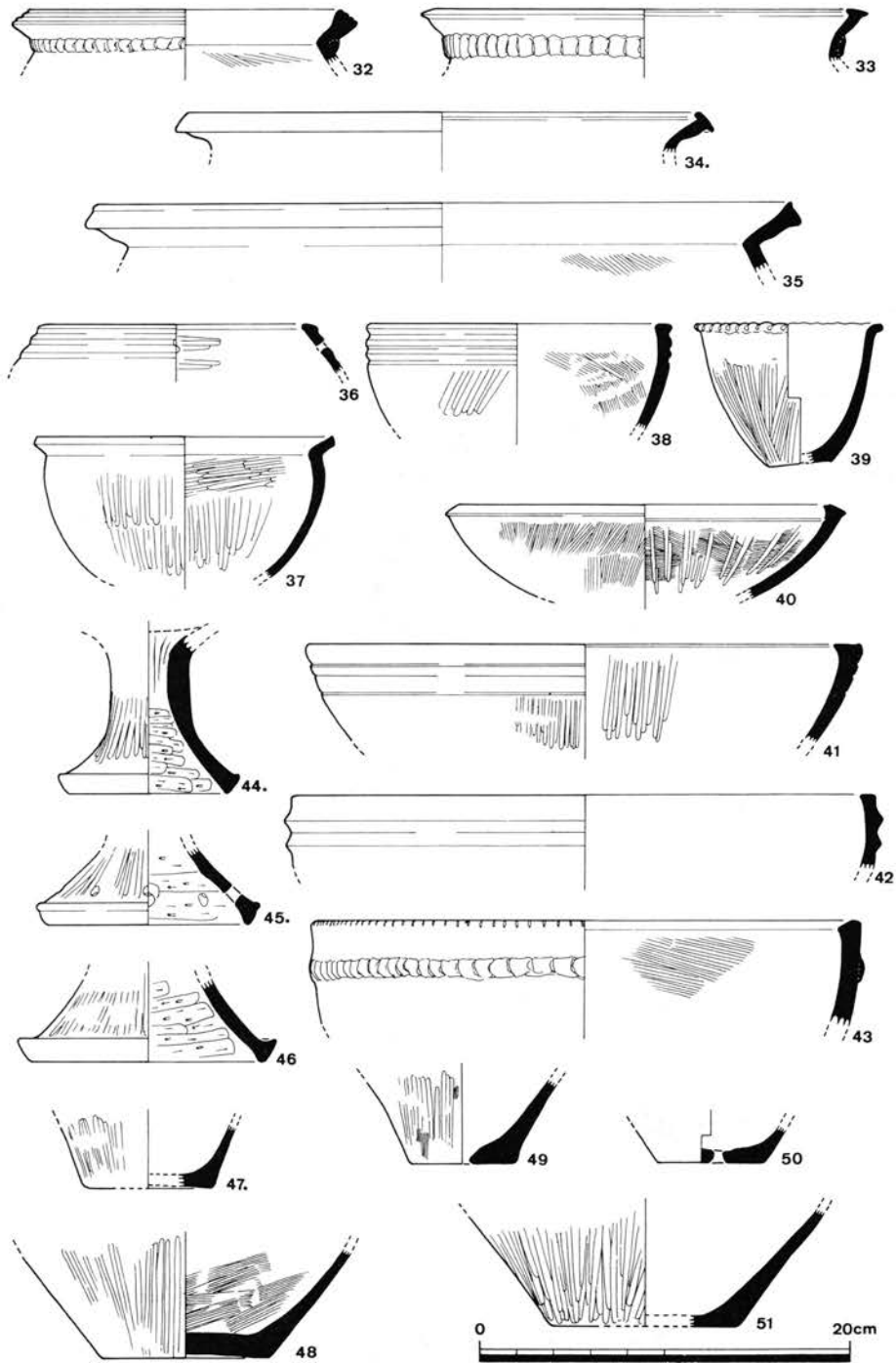
第73図 SH85205 実測図

跡である。直径約6.5mを測る。検出面から床面までの深さは32cmを測る。SH86202のように床を層的に把握することはできなかった。埋土は、上層と下層に比較的明瞭に分層することができた。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、中央部には、直径約1.1mを測る不整形な円形土坑が存在し、炭・灰が堆積していた。土坑の壁や底には直接火を受けた痕跡は見られなかった。この土坑を中心として半径2.3mの円を描くように浅い溝状遺構が存在する。検出当初2基の竪穴式住居跡が切り合っている可能性(SH85205の建て替え)も考えて調査を進めたが、断面観察等では、その形跡は窺えなかった。また、志高遺跡の調査で検出された弥生時代中期の竪穴式住居跡は、すべて周壁溝を持たないことから、この溝が建て替え以前の住居の周壁溝であるとは考えにくい。ただ、土層断面の埋土上層の堆積状態やSH85210の同様の溝のあり方から、この住居は土坑を中心として半径2.3mの正円を描く溝を配し、その外側に半径約3mの正円を描く形で周壁を持つ竪穴式住居跡と考えられる。なんらかの原因で西側を拡張したと考えられる。床面で多数のピットを検出したが、支柱穴を構成するものは限定できなかった。床面上には石皿(台石)2点が残されていた



第74図 SH85205 出土遺物 1 (弥生土器 1)

19: 床面出土, 24: 中央の土坑内



第75図 SH85205 出土遺物 2 (弥生土器 2)

34 : 中央の土坑内, 44・45・47 : 床面出土

た。

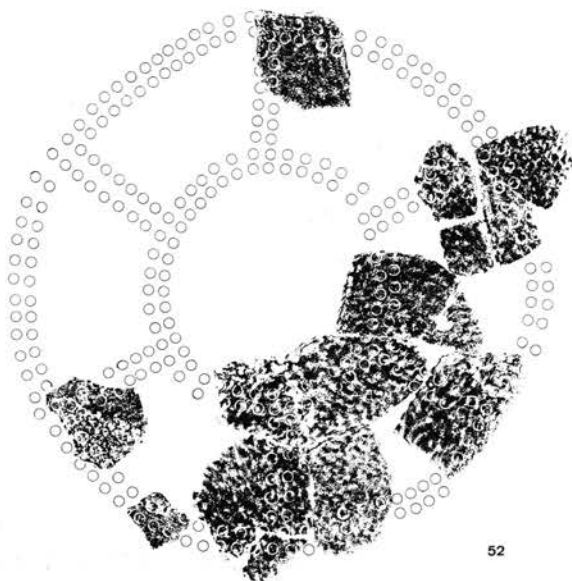
床面・土坑内及び埋土から、弥生土器・石器・石製品が整理箱にして約4箱出土した。

出土した弥生土器の内、口縁部が残存し器種のわかるものは50個体である。器種構成は、壺30%（15個体 壺A₃ 3, 壺A₄ 1, 壺A₅ 4, 壺A₆ 4, 壺A₇ 2, 壺F 1）、甕50%（25個体 甕A 2, 甕B₁ 9, 甕B₂ 9, 甕B₄ 5）、鉢16%（8個体 鉢A₃ 1, 鉢C 4, 鉢D 2, 鉢F 1）、高杯4%（高杯C 2）である。図化したものの内、埋土上層から出土したものは、20・21・23・25・27・28・31・33・39・42・43・46・49・50である。下層から床面に掛けて出土したものは、22・26・29・30・32・34・36・37・38・40・48・51である。床面に密着していたものは、19・44・45・47である。24・34は、中央の土坑内の炭・灰層から出土した。

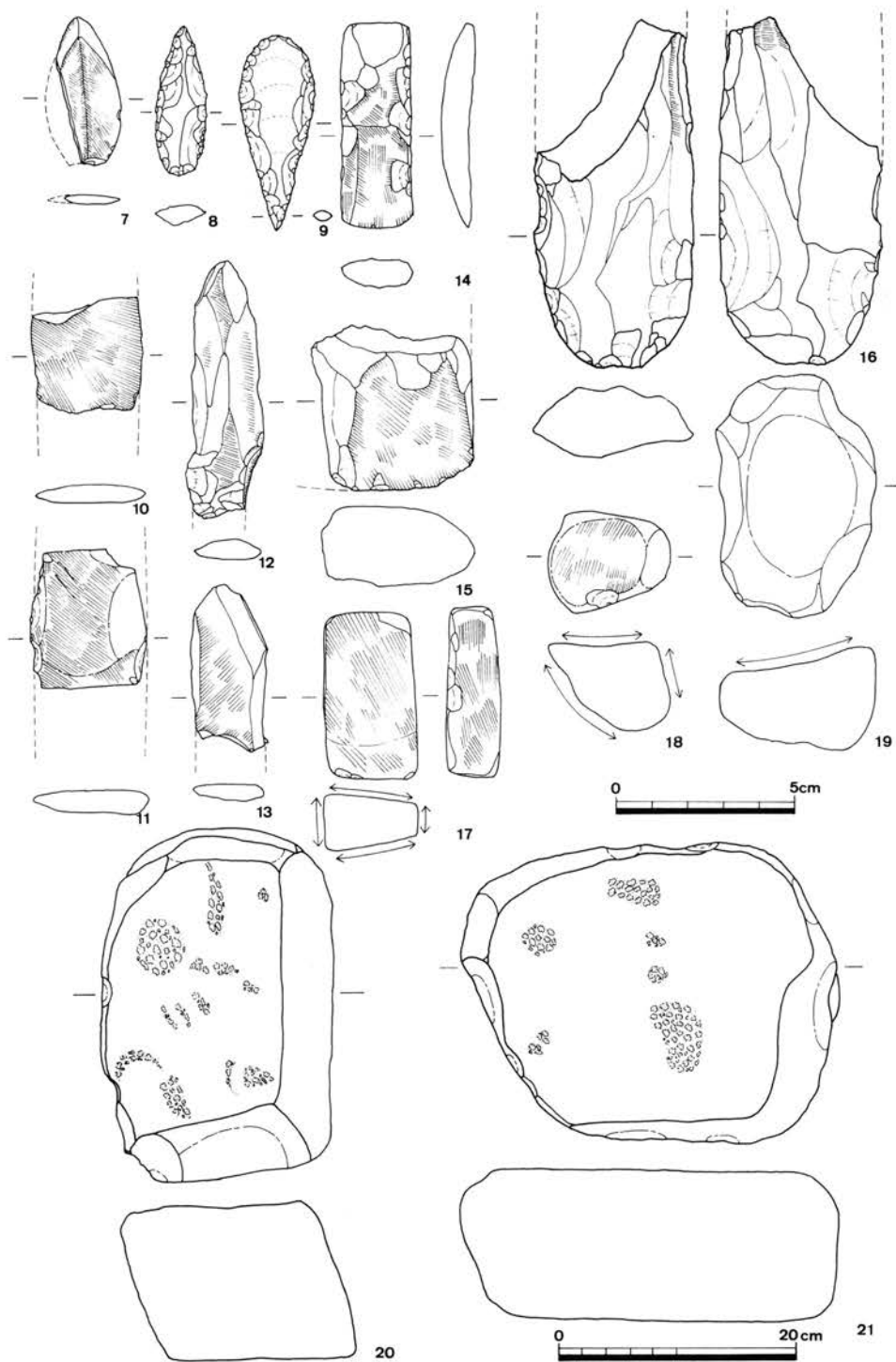
19～25は、壺形土器である。19は、壺A₃であるが、口縁端部を外側にやや肥厚するものである。壺A₁とすべきかもしれない。他の壺A₃は、SH86202の1と同様のものである。壺A₄は1点のみで図化したものはない。壺A₅のうち、図化したものは20である。21～23は、壺A₆である。21・22は、口縁端部が内面よりも下に位置し、口縁部内面を、21は扇形文で、22は4条の楕描波状文で飾る。22は、口縁部端面も内面と同じ原体の楕で飾っている。23は、口縁部内面と端面を凹線文で飾るものである。口縁部を水平方向に屈曲させ、屈曲部から外側を加飾している。ほかに、21に似たものが1点ある。24は、壺A₇である。口縁端部を下方に大きく拡張し、端面に凹線文を配し、3個単位の円形浮文を貼り付ける。口縁部内面は、4条の楕描波状文で飾る。ほかに、端部を凹線文で飾るものがある。25は、把手を持つ短頸壺（壺F）である。

ほかに体部を楕描直線文と波状文で飾り、頸部にヘラ圧痕文突帯を持つもの等がある。なお、壺の肩部に竹管文で幾何学的文様を描くものがある（第76図52）。

甕Aは、小破片が2点出土している。28・30は、甕B₁である。甕B₁の多くが28のように体部外面にのみハケを残す。30は、特異な例で体部径が口縁径をはるかに上回り、体部内面にハケを残す。甕B₂には、27のように口縁端部に明瞭な面をもち、端



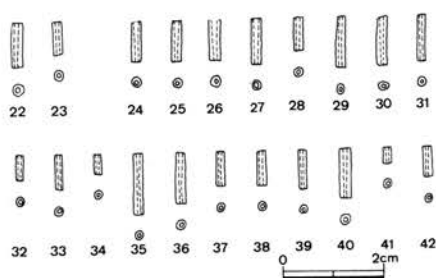
第76図 SH85205出土遺物3（竹管文様のある土器・壺肩部）



第77図 SH85205 出土遺物 4 (石器)

7 : 磨製石鏃, 8 : 石鏃, 9 : 石錐, 10・11 : 石剣, 14・15 : 磨製石斧, 16 : 石鋏
 17~19 : 砥石, 20・21 : 石皿

面を上方に意識的につまみあげるもの(2個体)のほかに、26・29・31のように口縁部上半部を内湾気味に強くナデるために口縁端部がわずかに上方に突出するもの(7個体)がある。後者の胎土は、石英・金雲母・長石を含み淡黄褐色を呈する。甕B₄には34・35のように、やや大型で飾らないものと、32・33のように中型で口縁端面の凹線文や頸部のヘラによる



第78図 S H85205 出土遺物 5 (管玉)

よる圧痕文突帯で加飾するものがある。ほかに口縁端面に凹線文を持たず、頸部にヘラによる圧痕文突帯を貼り付けるものもある。

36は、鉢A₃である。口縁部外面に4条以上の凹線文を施す。紐孔をもつ。鉢Cには38・42・43がある。38は、中型で口縁部が直立するものである。口縁部外面に3条の凹線文を施す。同様の器形をもち、口縁端部にキザミメを持ち1条の凹線文を施すものがある。42・43は大型のもので、それぞれ断面三角形貼り付け突帯・ヘラ圧痕文突帯をもつ。43は、口縁端部にキザミメをもつ。37は、鉢Dである。内外面ともていねいなヘラミガキを施し、胎土も極めて精良である。鉢Fには、口縁端部を短く屈曲させた端部にキザミメを施すもの(39)がある。

40・41は、高杯Cである。ともに口縁部内側を拡張する。40は、脚部46と胎土が同じで、同一個体と考えられる。41にも同一個体と考えられる脚部がある。

脚部には44~46がある。44は円孔を持たないものである。

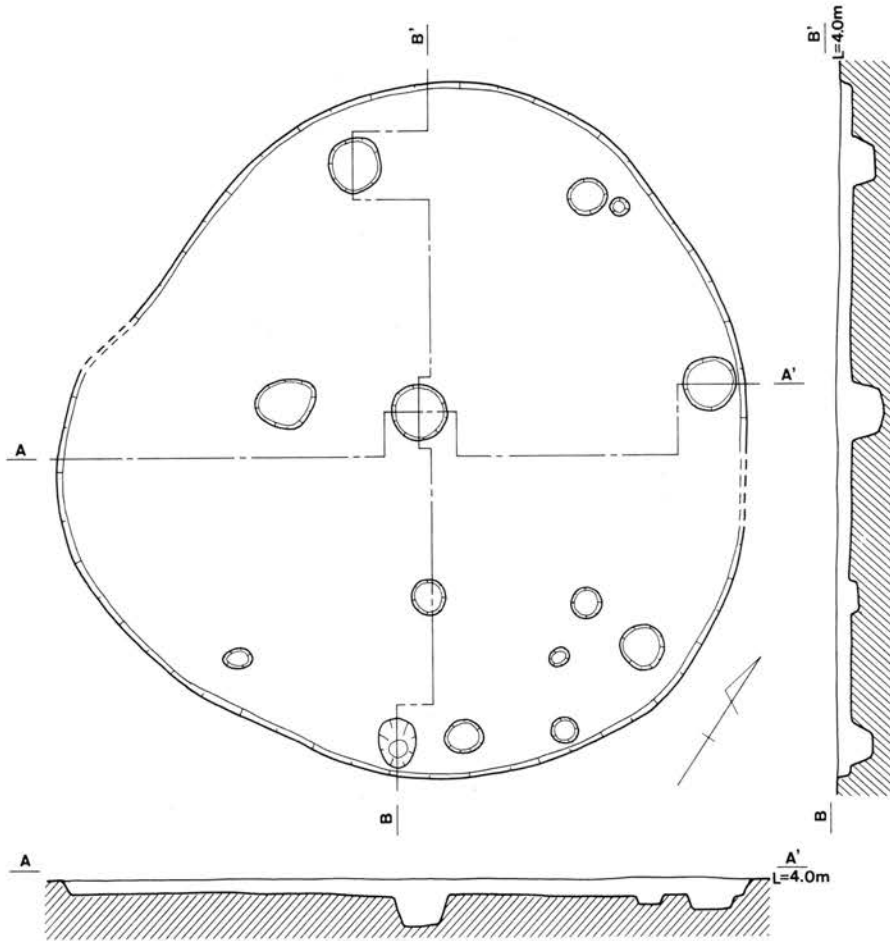
底部には49・50のように穿孔して甑として利用したものがある。なお、底部外面の調整は確認できた19個体中、ヘラミガキを施すものが84%(16個体)を占める。

胎土にはさまざまなものが見られるが、淡褐色を呈しチャート・くさり礫・長石・石英を含むものが壺を中心に多くみられる。甕B₂については先述のとおりである。

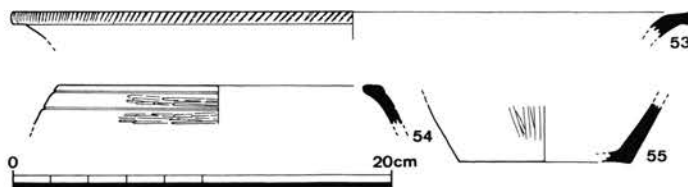
出土した石器には、磨製石鏃(7)・打製石鏃(8)・錐(9)・磨製石剣片(10・11)・磨製石斧(14・15)・石鏃(16)・砥石(17~19)・石皿(20・21)等がある。石材は、7・14が珪質頁岩、8がサヌキトイド、9・10・11・12・15が頁岩、16・17が花崗岩質アプライト、18・19が砂岩、20が花崗岩である。10・11は、著しく破損しているが、両面がていねいに研磨されており、鉄剣形石剣と考えられる。12・13にも研磨痕があり、石鏃もしくは石剣の未製品であろうか。16は、先端には摩滅痕を残していないが、短冊形の石鏃である可能性が高い。17・18は仕上砥石で、19は中砥もしくは粗砥である。20・21は、ともに表に敲打痕を残す石皿もしくは台石である。図化しなかったものに錐1点と多数の砥石とサヌキトイドの剣片類が

ある。

住居跡内床面から碧玉製の細身の管玉が2点(22・23)出土している。また、住居外南西から同様の管玉が19個(24~42)まとめて出土している。出土地点がSH85205に隣接すること、竪穴式住居跡の検出面から出土していることから、SH85205に伴う遺物の可能性もあり併せて報告する。出土状況は30cmの範囲内に集中して出土していることから、埋没



第79図 SH85209 実測図



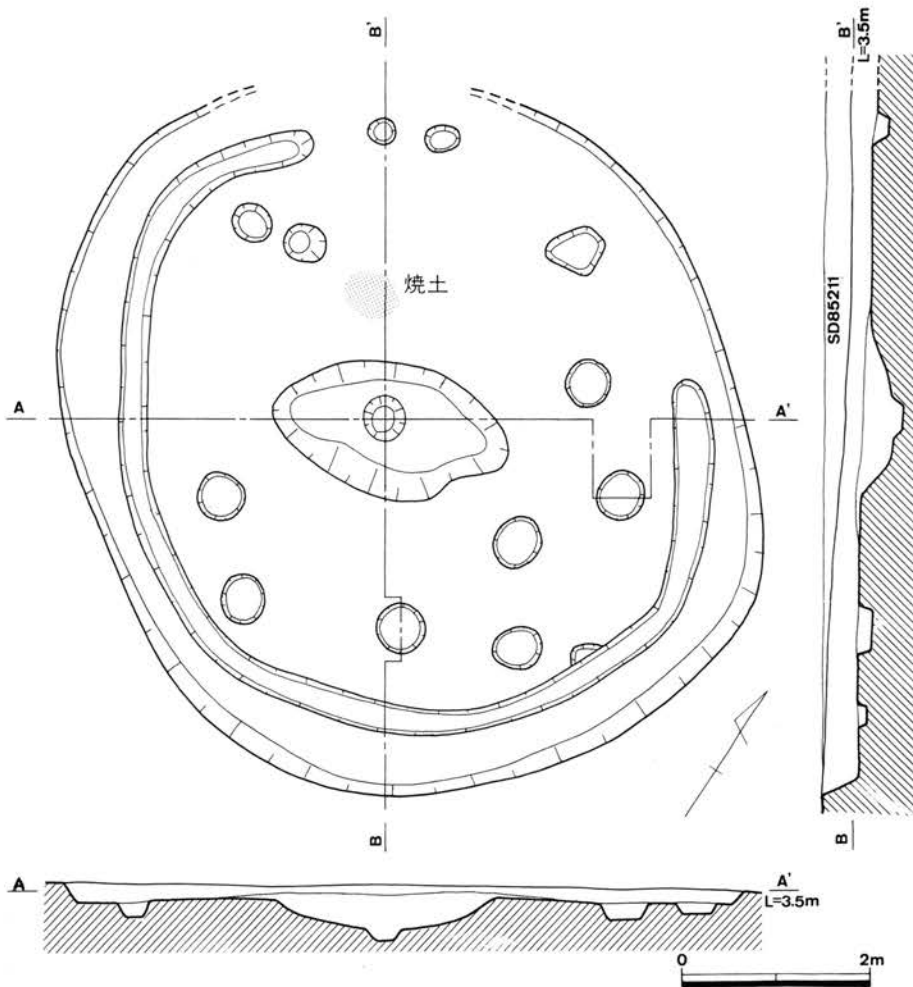
第80図 SH85209 出土遺物(弥生土器)

時には紐で繋がっていた可能性が高い。管玉の直径は2mm前後を測る。長さは1cm前後のものが多いが破損して短くなっているものもある。

他に鉤もしくは刀子の一部と思われる鉄片が出土している。

SH85209(第79~80図) 20E区付近で検出した円形竪穴式住居跡である。直径7.3mを測る。検出面から床面までの深さは18cmを測る。他の住居跡と違い、中央には土坑は存在せず、柱穴がある。他に壁の内側に沿って等間隔に並ぶ5個の柱穴があり、本来は壁に沿って等間隔で7個の柱穴を持っていたものと思われる。

出土遺物は極端に少ない。53は、甕である。口縁端部にヘラ状工具による斜めのキザミメを持つ。甕Aの可能性が高い。54は、鉢A₂である。口縁部外面に3条以上の沈線化し



第81図 SH85210 実測図

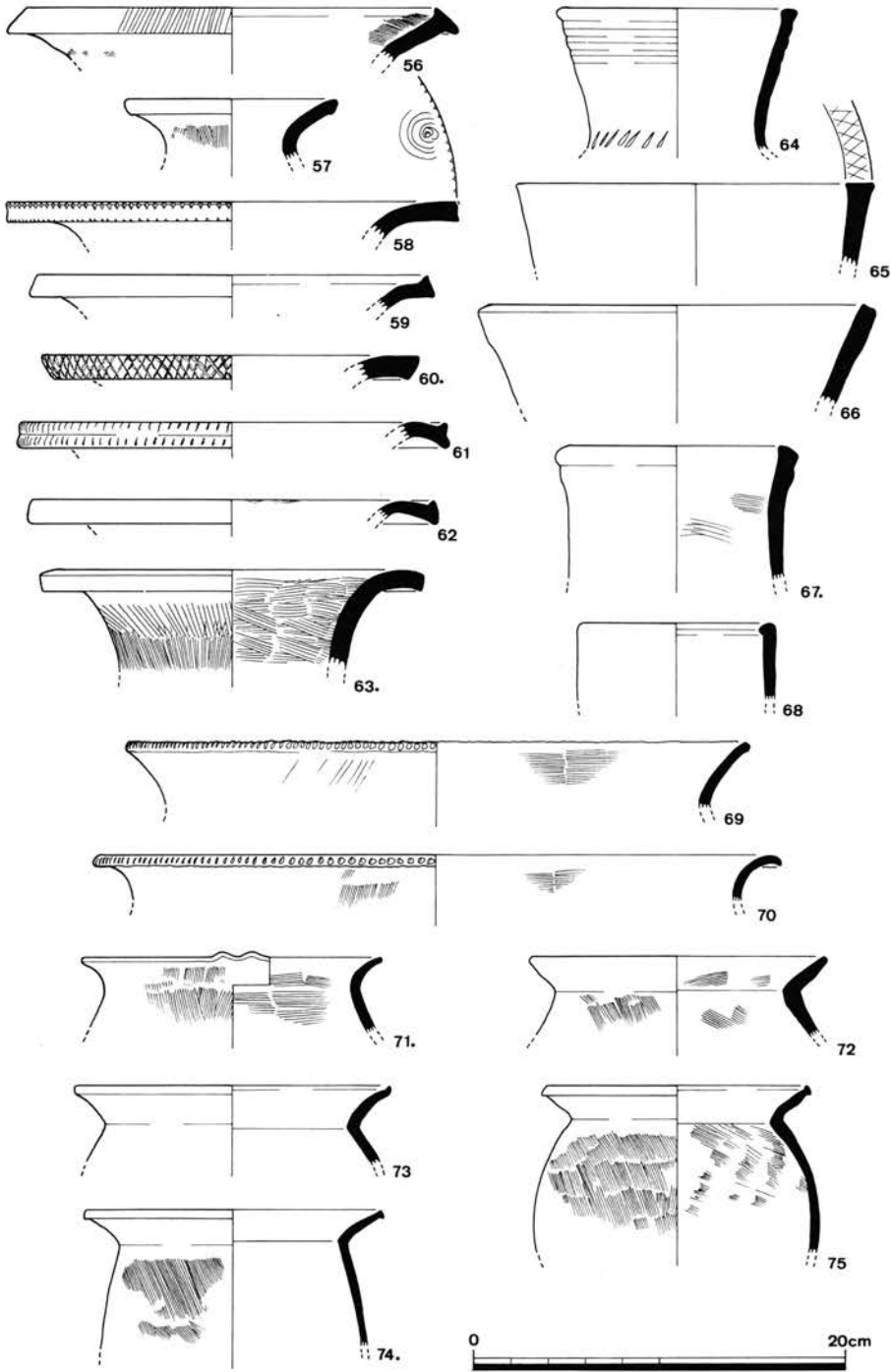
た凹線文を施す。図化したもの以外に甕B₁の口縁部と、縄文時代後期の大きく突出する波長部をもつ浅鉢の口縁部がある。床面から砥石が出土している。砂岩製である。

SH85210(第81～85図) 19C区付近で検出した円形竪穴式住居跡である。直径約7.5mを測る。SD85211によって約3分の2が削平されているが、床面は完存していた。検出面から床面までの深さは残りのよいところで25cmを測る。中央部には、長径2.5m・短径1.5m・深さ20cmを測る土坑が存在する。土坑内には多量の炭・灰が堆積しており、灰は、土坑周辺部にまで広がる。土坑外北西側に焼土が存在した。柱穴と考えられるピットがいくつか存在し、支柱穴は5～6本想定できる。壁部からやや離れて内側に、幅25cm・深さ10cm未満の浅い溝状遺構が存在する。この溝は北側で途切れており、またこの部分の床が比較的良好に締まっていたことから入口部分に相当するものと考えられる。床面には、石皿は残されていなかったが、柱穴に落ち込むような形で大型の砥石(52)が出土している。なお、住居の埋土は基本的に1層である。

埋土及び床面・土坑・柱穴内から出土した遺物には、弥生土器をはじめ土製品・石器・石製品等がある。その量は整理箱約5箱分である。

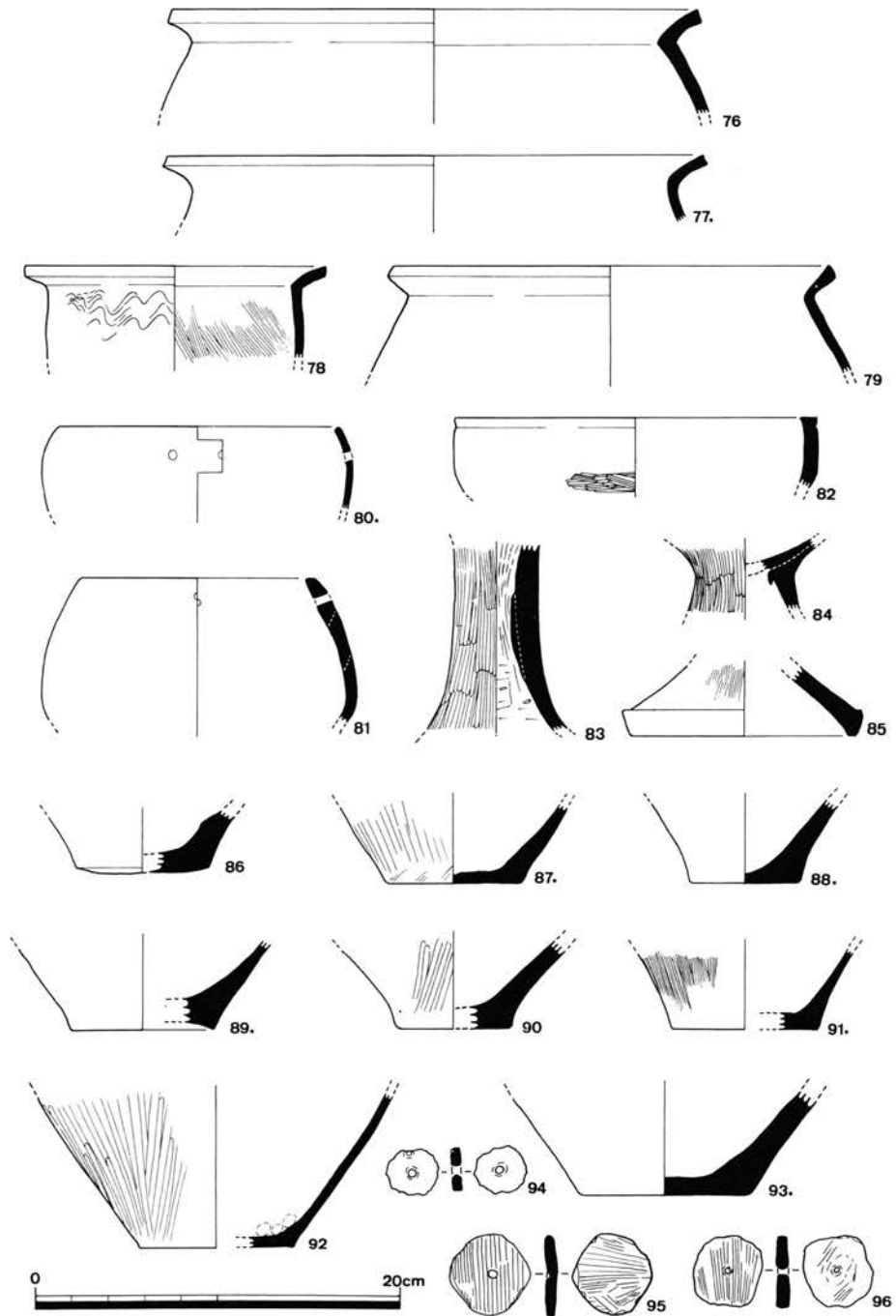
出土した弥生土器は60個体である。^(注2)器種構成比は、壺38%(23個体 壺A₁ 1, 壺A₃ 5, 壺A₄ 1, 壺A₅ 7, 壺A₆ 1, 壺A₇ 1, 壺C 2, 壺D 4, 壺F 1), 甕48%(29個体 甕A 15, 甕B₁ 9, 甕B₂ 1, 甕B₃ 3, 甕C 1), 鉢10%(6個体 鉢A₁ 2, 鉢A₃ 2, 鉢C 2), 高杯3%(2個体 高杯A 1, 高杯B₁ 1)である。遺物の出土した層位は、60・63・67・71・74・77・87・88・89・91・93が床面付近で、それ以外は埋土内である。なお、埋土出土のものにはSD85211のものも含まれる可能性がある。

66は、壺A₁である。60は、口縁端面をヘラ状工具による斜格子文で飾る壺A₃である。壺A₃には口縁端面の上端・下端を別々に刻むものと、上端のみを刻むもの及び端面を飾らないものがある。63は、壺A₄である。頸部内面までハケを残す。56・59・61・62は、壺A₅である。56は、幅広い端面に12本を単位に縦方向に沈線を施すものである。59は、口縁端部を上方に拡張するものである。61・62は、壺A₄に似た口縁部をもち、端部を上方に拡張するものである。61は、口縁端面に浅い列点文を施す。壺A₆(58)は、口縁端面の上端と下端に別々にキザミメを施し、口縁部内面を扇形文で飾るものである。壺Cには、57のように、小型のものほかに中型のものがある。64・67・68は、ほぼ直立する口縁をもつ壺Dである。64は、口縁部外面に4条の浅い凹線文を施し、頸部と体部の境にハケ状工具によるキザミメをもつ。SD85211に属する可能性が高い。67は口縁部外面に1条の強いナデ(凹線)を施す。68は口縁端部を内側に短く折り返したもので、外面に煤が付着してい



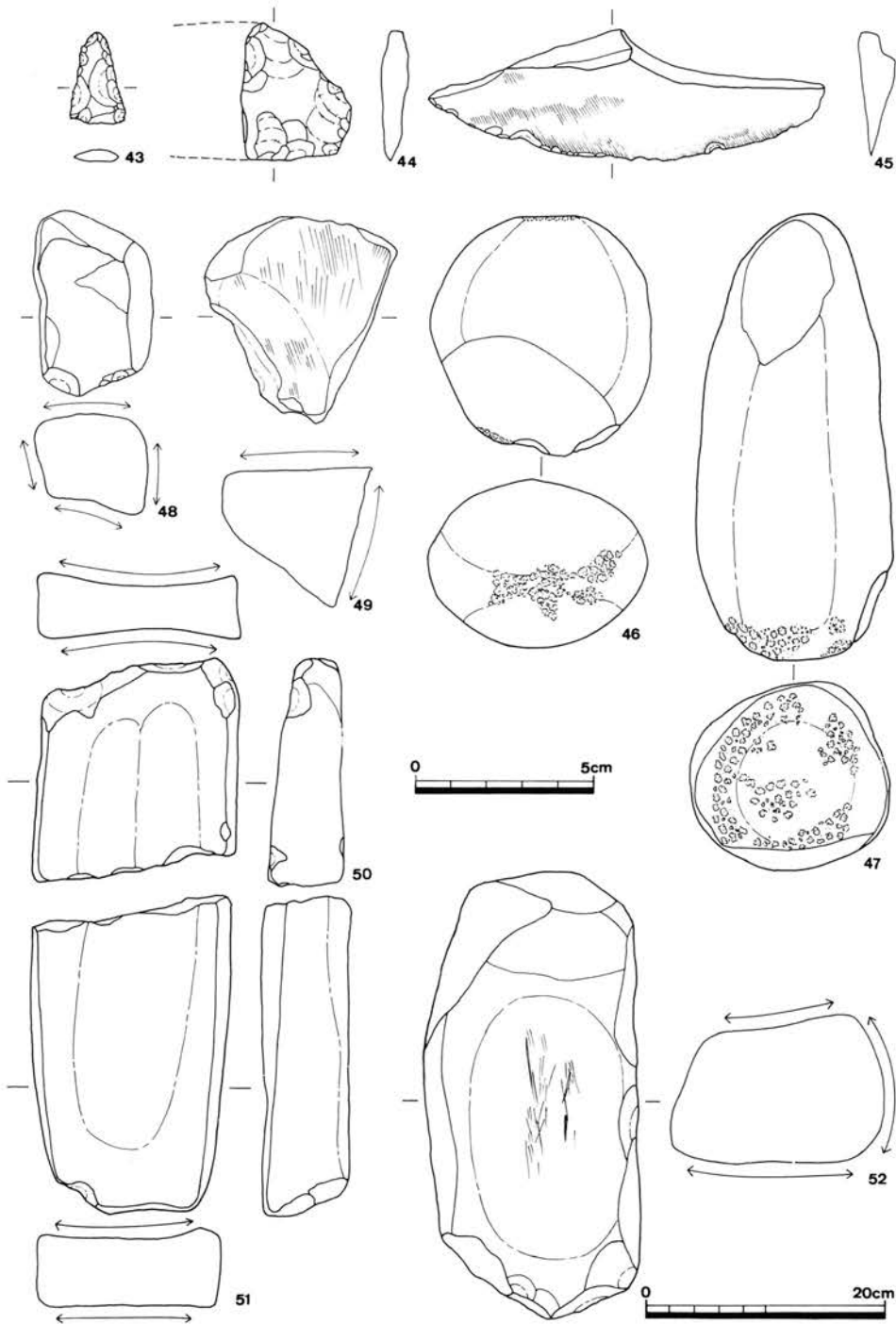
第82図 SH85210 出土遺物 1 (弥生土器 1)

60・63・67・71・74：床面出土



第83図 SH85210 出土遺物 2 (弥生土器 2)

77・91：床面出土，80：中央の土坑内出土



第84図 SH85210 出土遺物 3 (石器)

43 : 石鏃, 44・45 : 刃器, 46・47 : 敲き石, 48~52 : 砥石

る。短頸壺(壺F)と思われる65は、直上にのびる口縁部の端面に斜格子文をもつ。壺形土器のうち体部との関係のわかるものはないが、壺の体部片には櫛描文(16個体)が多く見られる。櫛描文の構成のわかるもののうち、波状文のみのもの(1個体)と、波状文と直線文を交互に配するもの(7個体)がある。

69~71・77は、甕Aである。甕Aのうち69・70のみが口縁端部にキザミメを施し、多くは、71のように口縁部の3~4か所に波状を呈する押圧文を加えるものである。後者には、口縁部内面にやや粗いハケを残し、体部外面をやや粗いハケで縦方向に調整するものと、口縁部内面のハケをナデ消し、体部外面をやや細かいハケで調整するものがある。甕Aには77のように大型で口縁端面をもつものもある。72~75は、甕B₁である。体部内面にハケを残すものと残さないものがある。73~75のように口縁端部がやや肥厚したものがあるが、意識的に端面を造りだしたものではない。1個体のみ口縁端部にキザミメをもつものがある。甕B₂は小破片が1個体ある。76・78・79は甕B₃である。78は、体部が張らないもので3条2帯の櫛描波状文で体部を飾る。甕Cには、口縁部の内湾するものがある。

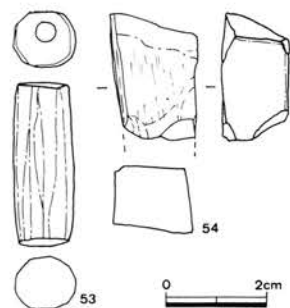
鉢Aには紐孔をもつA₁(80・81)のほか、口縁部を外側に折り曲げて面取りしたA₃がある。鉢Cには口縁部外面に1条の強いナデ(凹線)をもつものがある。

高杯には口縁部に1条の強いナデを施す高杯A(82)のほかに、SD85211の埋土との境から高杯B₁が出土している。脚柱部(83)もSD85211との境付近から出土したものである。

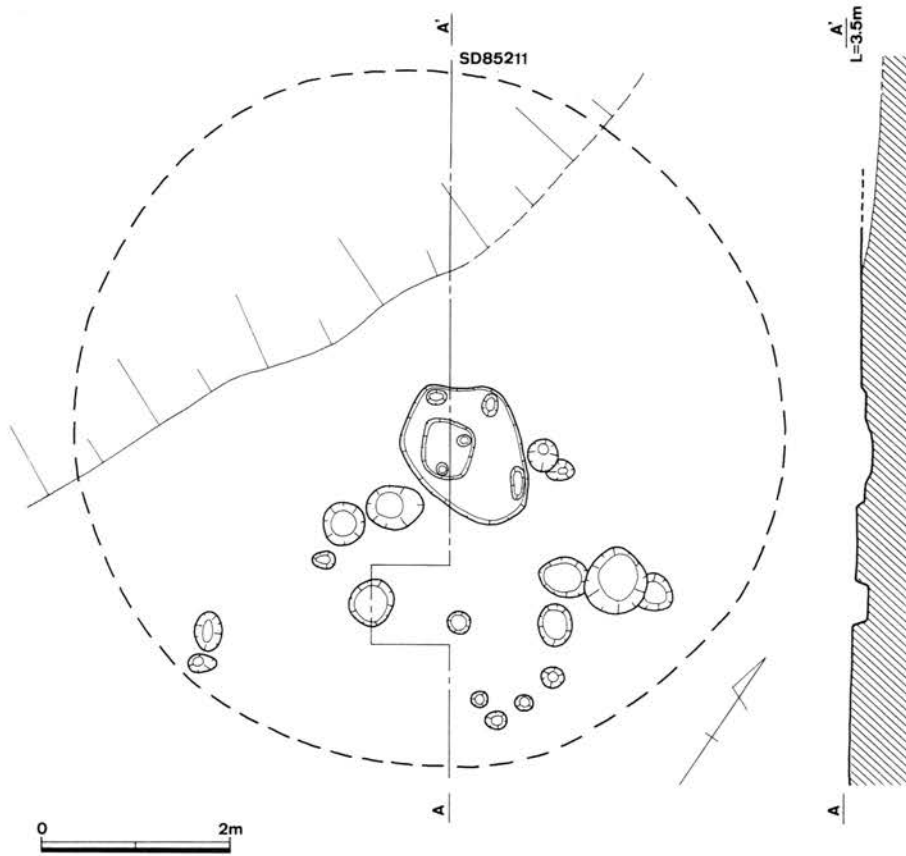
壺・甕・鉢の底部が計22個体ある。底部外面にヘラミガキがあるのは20個体である。

土器片を利用した有孔円板が3個体出土している(94~96)。95・96は、円板状に打ち欠いた土器片の周囲を研磨し、95は片側から、96は両側から中央に穴をあける。なお、95は、貫通しておらず、紡錘車の役目をなしえない。94は、縁部を研磨しないものであるが、中央以外に1か所片面から穿孔を施した形跡がある(貫通しない)。これらの有孔円板は、通常言われる紡錘車の可能性以外に、94・95の例と住居跡内から管玉未製品が出土していることから玉造りに伴うもの^(注3)の可能性もある。

出土した石器・石製品には、石鏃・不定形刃器・敲き石・砥石等が出土している。他にサヌキトイド(無斑晶安山岩)の剥片が多数出土している。43は、サヌキトイド製の石鏃である。44は、両極打法により作られたもので、いわゆるピエス・エスキューユと呼ばれるものである。刃器として使われた可能性が高い。サヌキトイド製である。45は、研磨痕のあるものである。磨製石剣・磨製石鏃の未製品とも考えられるが、刃部らしきところに使用痕が認められ、



第85図 SH85210出土遺物4
(管玉未製品)

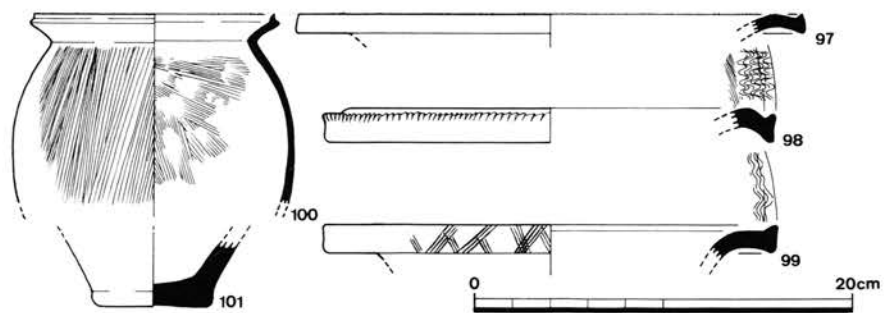


第86図 SH85218 実測図

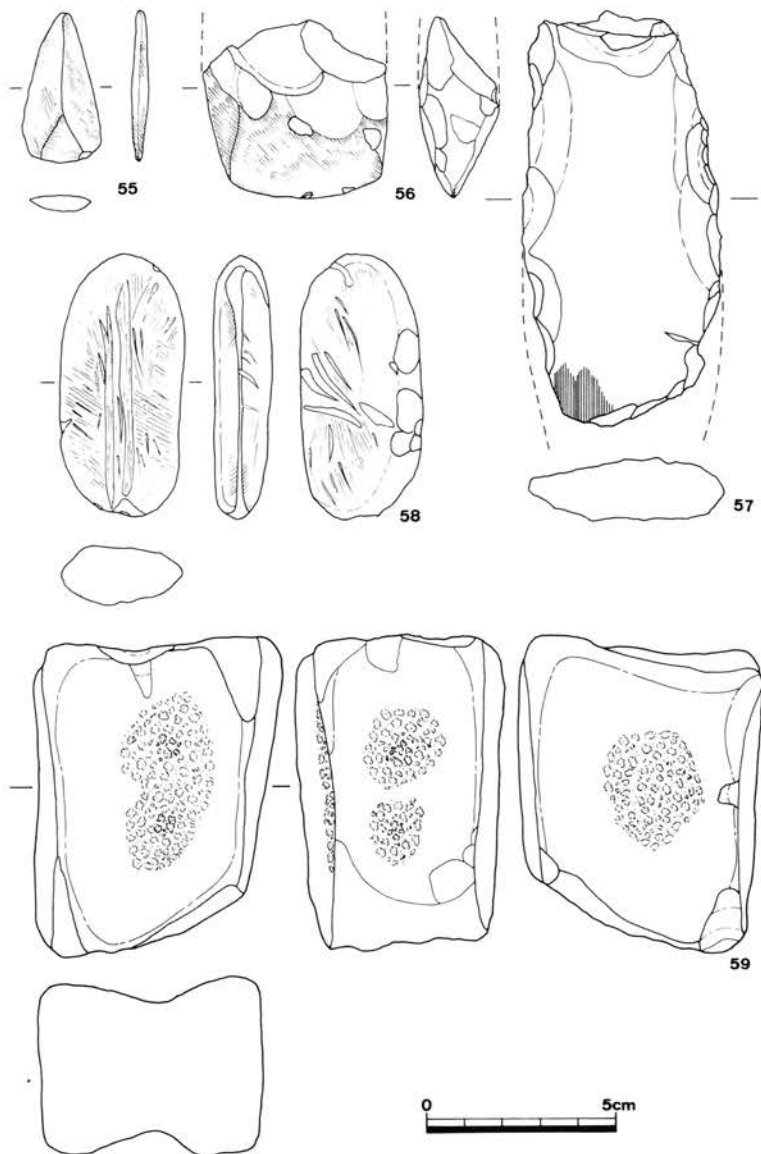
刃器として利用された可能性が高い。珪質頁岩製である。46・47は、両端もしくは一端に敲打痕をとどめる敲き石である。46は、円礫の両端部を使用している。47は、棒柱状の礫の平坦な一端を使用している。石材は、46が砂岩、47がチャートである。48～51は、花崗岩質アプライト製の砥石である。50・51は、1個体であったものが二つに割れたのち、別々に使用したものである。50のほうの使用頻度が高くくぼみが著しい。52は、長さ35.4cmを測る極めて大型の砥石である。砥面として3面利用されており、図化した1面のくぼみが著しい。結晶の細かい花崗岩製である。

石製品として管玉の製作工程を知る資料が2点出土している。54は、管玉の原石である碧玉の原石を割って作りだされた方柱状のブロックである。擦り切り技法の痕跡を明瞭に留める。53は、方柱状の原石を研磨して多面体にしたものである。穿孔は、約1cmのところどとまっている。詳細については総括に譲ることとする。

SH85218(第86～88図) 8C区付近で検出した。SD85211と旧河道によって壁等を失っ



第87図 SH85218 出土遺物 1 (弥生土器)



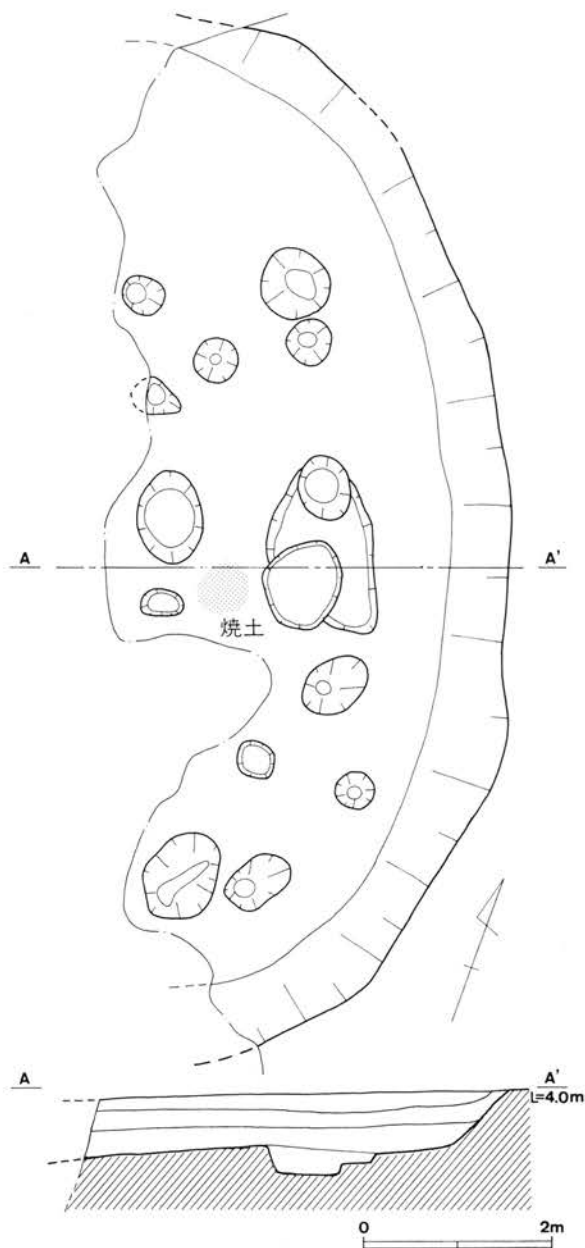
第88図 SH85218 出土遺物 2 (石器)

55：磨製石鏃，56：磨製石斧，57：石鏃，58：砥石，59：くぼみ石

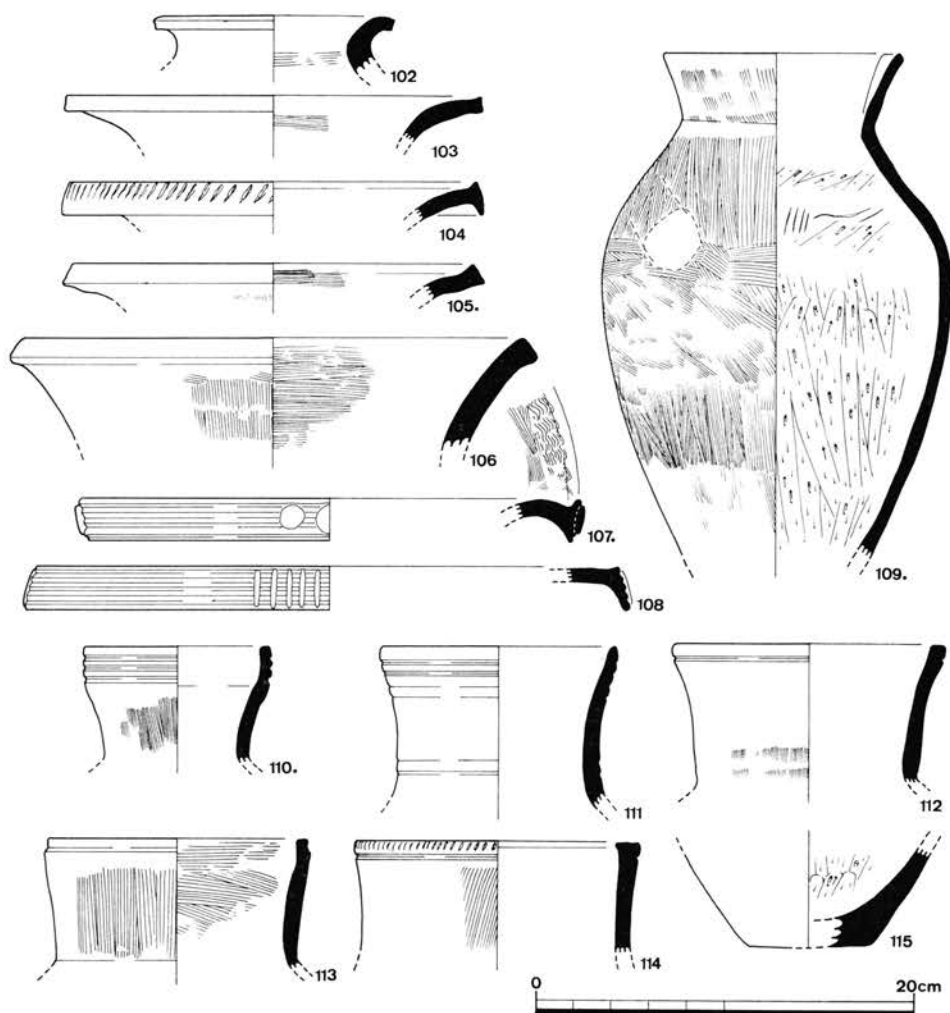
ているが、中央土坑と柱穴の存在から円形の堅穴式住居跡と考えられる。中央付近に位置すると考えられる土坑には、炭・灰の混じった黒色土が堆積していた。検出面から土坑底までの深さは約15cmを測る。柱穴内及び床面と考えられるところから、弥生土器・磨製石鏃・砥石等が出土した。

図化した弥生土器は柱穴内からのもの(97~99・101)と、周辺(床面か?)から出土したもの(100)である。壺形土器には壺A₅(97)と壺A₆(98・99)がある。98は口縁端部上面にヘラによるキザミメを施し、内面を複帯構成の櫛描文で飾る。99は口縁端面に櫛描斜格子文を、内面に櫛描波状文を施す。櫛の原体は同一である。100は、口縁端部を上方向につまみあげる甕B₂である。内外面ともハケで調整する。

出土した石器には磨製石鏃・磨製石斧・石鏃・砥石・くぼみ石等がある。55は、三角形を呈する磨製石鏃で頁岩製である。56は珪質頁岩製の太型蛤刃石斧の先端部である。57は、粘板岩の板石を利用した石鏃である。先端部が欠損している。59は、結晶の細かい花崗岩で作られたくぼみ石である。くぼみは4面に見られ、うち3面は2個ずつある。くぼみの深さは、5mm前後を測る。また、くぼみ石として利用される以前は、砥石として利用されていたようである。



第89図 SH86201 実測図



第90図 SH86201 出土遺物 1 (弥生土器・壺)

105・107・109：床面出土，111・112・114：下層出土，102・103・115：中層～下層出土

104・106・108・113：中層出土

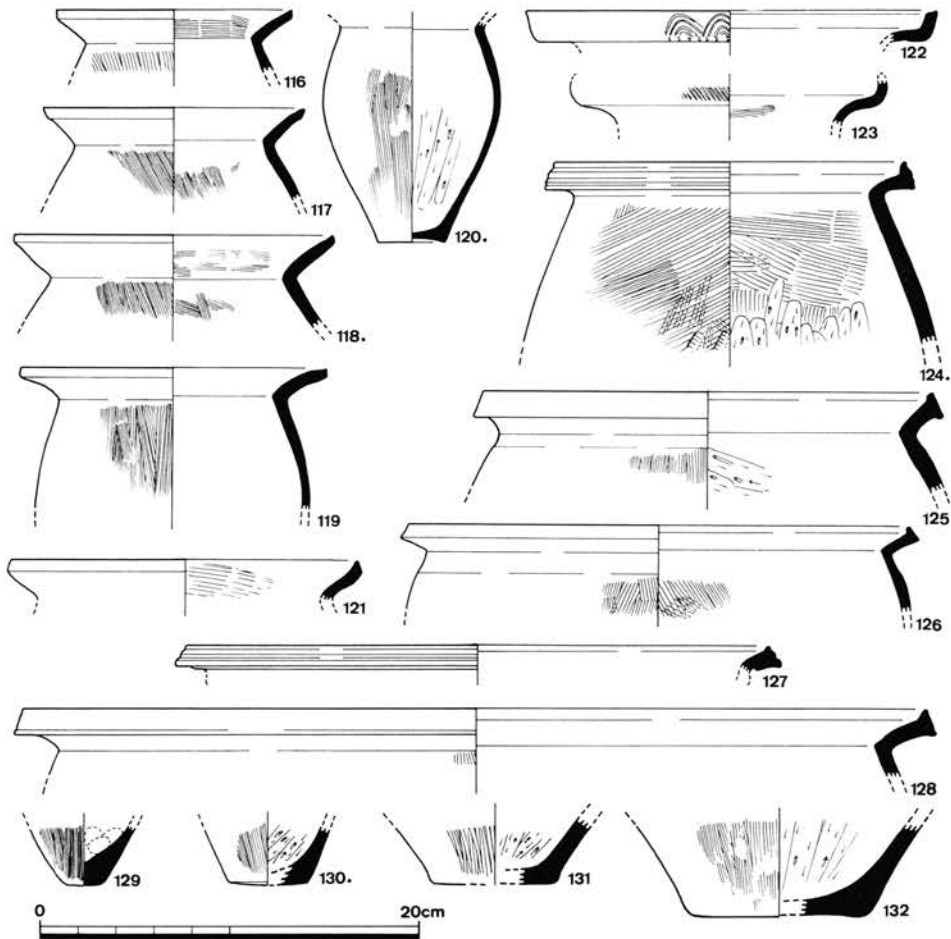
SH86201(第89～96図) 27C区付近で検出した大型の円形竪穴式住居跡である。約4分の1を検出した。第4次調査の竪穴式住居跡23(SH8323)と同一のものである。直径約13mを測る。検出面から床面までの深さ約60cmと深く、床面が中央部に向かってやや低くなる傾向がある。埋土は、上層(黄褐色細砂質土)・中層(褐色粘性砂質土)・下層～床面(黒褐色粘性砂質土)と明瞭に分層することができる。床面及び床下から大小多数のピットを検出した。床面の1か所で焼土を検出した。遺物は、ピットと床面付近及び埋土から弥生土器をはじめ、石器・土製品・石製品・鉄製品等が整理箱にして約8箱分出土した。

出土した土器には壺・甕・鉢・高杯がある。埋土中から出土したものが大半を占めるが、

床面から出土したのも比較的多くある。出土した土器の個体数は114個体である。その器種構成比は、壺30%(34個体 壺A₁ 1, 壺A₂ 3, 壺A₃ 8, 壺A₄ 1, 壺A₅ 2, 壺A₆ 4, 壺A₇ 4, 壺B 1, 壺C 2, 壺D 8), 甕28%(33個体 甕B₁ 14, 甕B₂ 5, 甕B₃ 2, 甕B₄ 10, 甕C 2), 鉢24%(27個体 鉢A₁ 2, 鉢A₂ 14, 鉢A₃ 2, 鉢B 1, 鉢C 5, 鉢F 2), 高杯18%(20個体 高杯A 13, 高杯B 5, 高杯C 1, 高杯D 1)である。また、下層と床面出土のものに限定してみると個体数は65個体となり、その構成は、壺28%(18個体 壺A₃ 6, 壺A₆ 2, 壺A₇ 2, 壺C 2, 壺D 6), 甕28%(18個体 甕B₁ 7, 甕B₂ 3, 甕B₃ 1, 甕B₄ 6, 甕C 1), 鉢26%(17個体 鉢A₁ 2, 鉢A₂ 8, 鉢A₃ 2, 鉢B 1, 鉢C 2, 鉢F 2), 高杯18%(12個体 高杯A 8, 高杯B 2, 高杯C 1, 高杯D 1)となる。下層及び床面から出土したものを中心に図化した。

壺形土器のうち図化したものは102~115がある。壺A₁(103)は、口縁端部にも面をもつが拡張せず、頸部内面には比較的粗いハケが観察できる。壺A₂には、106のように口径26.8cmを測る大型のものがある。壺A₃は口縁端部を肥厚させるが、壺A₅・壺A₆との区別が難しい。105のように口縁部端面に文様を施さないものと、口縁端面に櫛描波状文や斜格子文を施すものもある。また、口縁部内面頸部よりを扇形文で飾るものもある。壺A₄は、埋土上層から1個体出土している。104(壺A₅)は、口縁端面上半にハケ状工具の刺突によるキザミメをもつものである。下方への拡張が著しい。壺A₅には他に口縁端面に櫛描波状文を施したのち円形浮文を張り付けたものがあり、内面を飾らないことを除けば107に器形は一致する。壺A₆のうち、図化したもの(107)は、口縁端面に凹線文を施して円形浮文を張り付け、口縁部内面を櫛描文で飾る。ほかに、口縁内面を扇形文で飾るもの(2個体)と、口縁端面から内面にかけて凹線文を施すものがある。壺A₇は、108のように口縁端部が垂下するものである。108は、幅の広い口縁端面に凹線文を施し、棒状浮文を張り付けるものである。ほかに垂下した口縁端面に凹線文を施すもの(2個体)と、口縁部内面を櫛描波状文で飾り、垂下した端面に凹線文を施したのち、櫛で加飾するものがある。壺Bには、中層から出土した小型のものがあるのみである。壺Cが2個体出土している。図化した102は、口径12.8cmを測る小口径のもので、器壁は厚く頸部内面にハケを施す。図化しなかったものも102と同様に、小口径で、器壁は厚く頸部内面にハケを残す。109~114は、壺Dである。109は、他の壺Dと器形を異にする。口縁部に受け口(片口)がある。内面は頸部近くまでヘラケズリを施し、外面は全面ハケ調整する。口縁部は全く飾らず、口縁部は外上方に緩やかにのびる。110~114は、球形の体部をもつものと考えられ、いずれも口縁部外側に凹線を施す。壺Dは、いずれも壺Aに比べて薄くていねいな造りである。

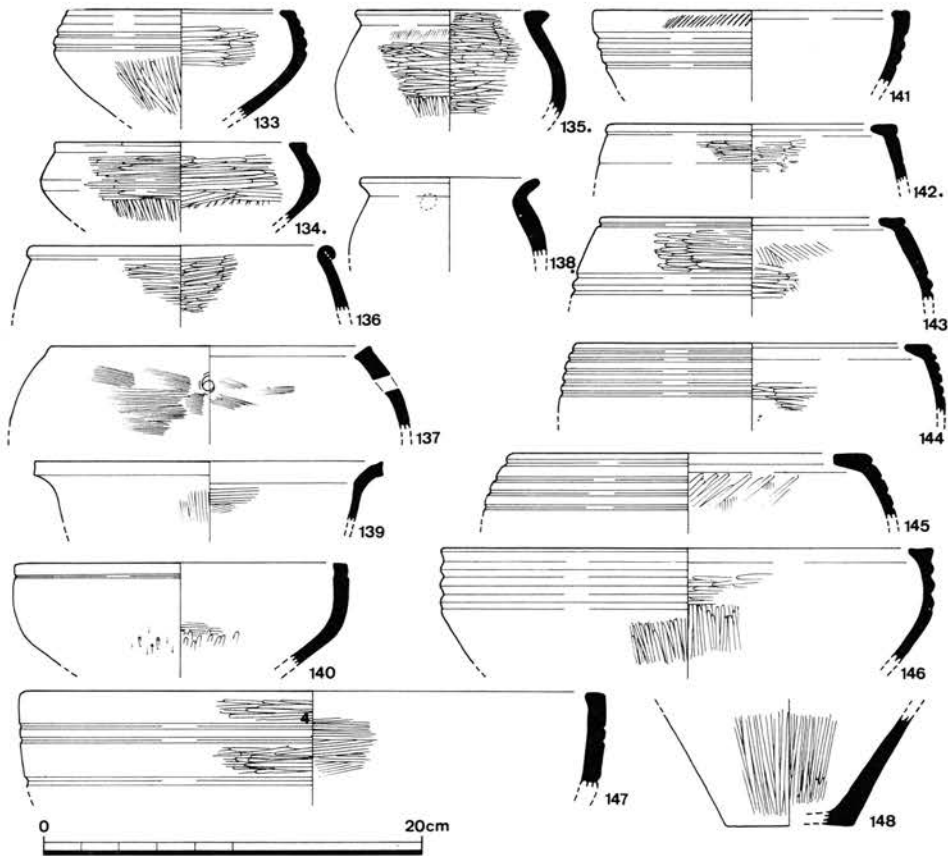
甕形土器には図化したものとして121~128がある。甕Aは存在せず、主体となるものは



第91図 SH86201 出土遺物 2 (弥生土器・甕他)

118・120・124・130：床面出土，121・123・128：下層出土，127：中層～下層出土
 116・117・119・122・126・129・131・132：中層出土，125：ピット内出土

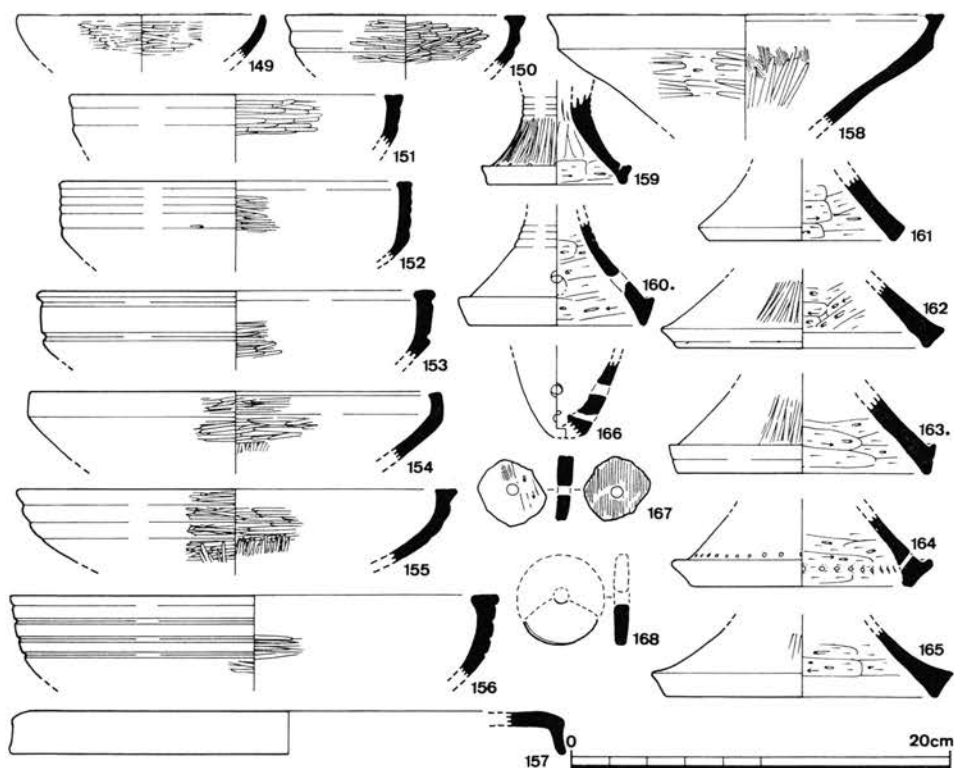
甕B₁(116～119)と幅広い口縁端面をもつ甕B₄である。ほかに近江系甕(甕F)が出土している。甕B₁は14個体出土しているがすべて0.5～1.0mm大の長石・石英を含み、胎土を同一にするものである。多くが焼成堅緻で赤褐色の色調を呈する。器壁は1～3mmと極めて薄い。内面にはケズリの痕跡は観察できない。頸部付近の内面と口縁部内面にハケが観察できるものもあるが、多くはナデを施したものか調整痕をとどめない。外面は、体部上半をハケで、下半を粗いヘラミガキで調整する。甕B₂は、口縁端部を上方につまみあげたものであるが、126のようにつまみあげが著しく、幅広い端面を造りだすものがある。体部内面はハケもしくはケズリで調整する。甕B₃には甕B₂の大型品(口径30cm)とも考えられるものがある。体部内面はハケで調整する。甕B₄は、拡張した口縁端面をもつもので甕B₁と



第92図 SH86201 出土遺物 3 (弥生土器・鉢)

134・135・138・142：床面出土，133・140・144・145：下層出土，141：中層～下層出土
136・143・148：中層出土，137・139：ピット内出土

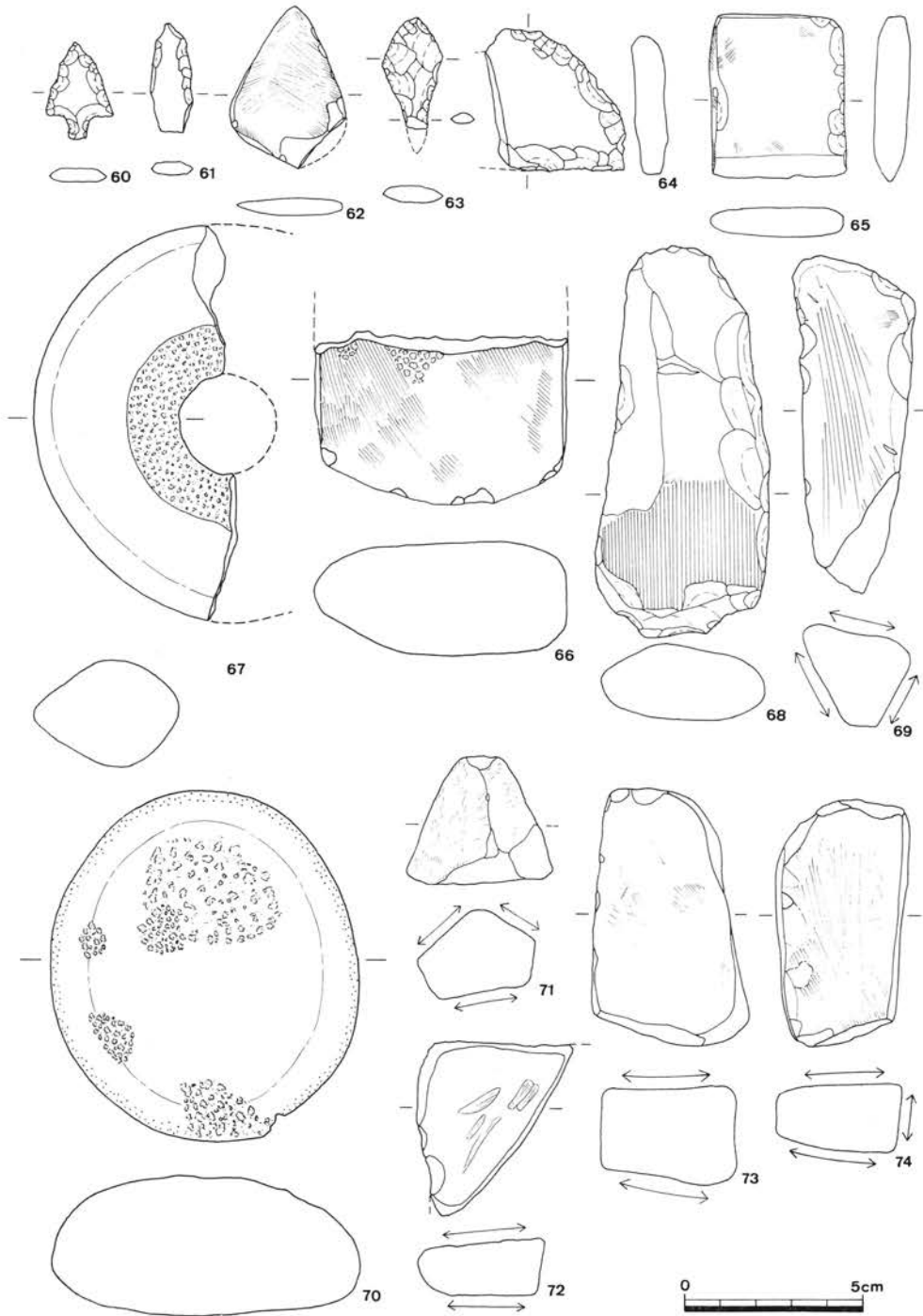
ともに出土数(10個体)が多い。口縁端面を飾らないもの(125・128)が6個体あるが、大口径の128は、ナデが強いためか擬凹線文を施しているかのように見える。体部内面の調整はハケを施すものと頸部付近にまでヘラケズリの及ぶもの(125)がある。口縁部を凹線文で飾るもの(124・127)が4個体ある。その内2個体は頸部に圧痕文突帯をもつもの(127)である。124は、体部内面下3分の2をヘラケズリし、上3分の1に粗いハケ調整を残す。外面は内面と同一原体のハケで施す。受け口状口縁をもつ近江系の甕(甕C 122・123)が出土している。2点とも淡乳褐色を呈し、軟質である。122は、垂直に立ち上がる口縁部の外面に4条の櫛により断続的な波状文を施し、下面に同じ原体による列点文を施す。120は、ていねいに造られた器高約12cmを測る極めて小型の甕である。口縁部が欠損する。内面は底部から頸部に至るまで、縦方向にていねいにヘラケズリを行う。外面はハケで調整する。129～132は、甕もしくは壺の底部である。内面をヘラケズリするものが多い。



第93図 SH86201 出土遺物 4 (弥生土器・高杯ほか)

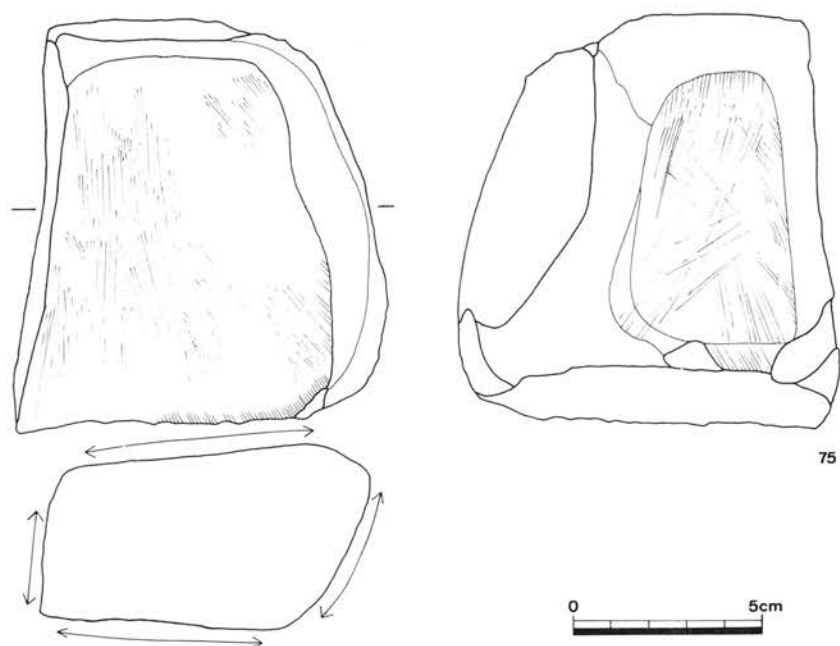
160・163：床面出土，149・150・153・155・157・158・162・166・168：下層出土
 152・154・159・161・164・167：中層出土，151・165：ピット内出土
 156：土坑内出土

鉢形土器のうち図化したものは、133～148がある。内傾する口縁部をもち端部を拡張しない鉢A₁には、口径17.0cmを測る中型のもの(137)のほか小型のものもある。137は内外面をハケで調整する。内傾する鉢の口縁端部を内側に拡張する鉢A₂としたものは14個体ある。口縁端部を短く水平方向に拡張するもの(133・134)と、口縁端部を水平方向に大きく拡張するもの(142～146)に細分することができる。前者は後者に比べて口径が小さい。鉢A₂には凹線文の多用が著しい。内外面はていねいにヘラミガキを施す。146の外面には煤が付着している。鉢A₃は、内傾する口縁端部を外側に拡張するもの(135・136)である。内外面をていねいにヘラミガキするが、凹線文はもたない。鉢B₂には、口縁部外面下方に圧痕文突帯をもつものがある。鉢Cは5点出土したが、器形に統一性がない。140は、高杯の杯状の形態をもつ。141は、口縁端部を内側水平方向に拡張し、外面を列点文と凹線文で飾る。147は、大型で外面に凹線文を施す。148は鉢の底部と考えられ、内外面をヘラミガキ調整する。



第94図 SH86201 出土遺物 5 (石器1)

60・61：石鋏，62：磨製石鋏，63：石錐，64：ピース・エスキューユ，65～67：石斧，
68：石鋏，69・71～74：砥石，70：敲き石(磨石)



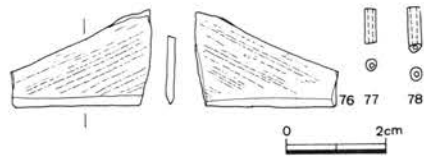
第95図 SH86201 出土遺物 6 (石器2) 75:砥石

高杯は、大半が高杯Aで、高杯Bは少ない。ほかに高杯Dがある。高杯Aは、口縁部が直立するもの(152・153)のほかに、口縁部の短いもの(154)、口縁部と杯部の境の稜が消失したもの(149・150・155・156)がある。152・153は、直立する口縁部をもち外面を凹線文で飾る。154は、直立する口縁部の短いもので凹線文をもたない。149・150は、小型の高杯である。150は、凹線文をもつため、まだ本来の高杯Aの形態を失っていないが、149は、凹線文をもたず椀状を呈している。155・156は、口縁部と杯部の境の稜を失い、口縁部外面を凹線文で飾る。なお、高杯Aのうち丹を塗ったものが4個体(31% 152・153)ある。高杯B(157ほか)は3点出土しているが、3点とも高杯B₂である。158は、志高遺跡ではほかに例がなく、高杯Aから高杯Dに変化する過程のものとも考えられるし、器台の可能性もある。外面をヘラミガキするものの、調整は粗くヘラケズリ痕を残す。内面はハケの上から粗くヘラミガキを施す。159~165は鉢・高杯の脚部である。いずれも内面をヘラケズリする。脚端部の上下への拡張は小さくなる傾向にある。図化はしなかったが、脚柱部が159・160以外に2個体出土しており、2個体とも螺旋状の凹線文を施す。

166は、形態不明の土器で内面に白い付着物がある。底部付近を中心にいくつか穿孔されており、半液体状のものを絞りだす容器とも考えられる。ほかに有孔円板が2点(167・168)出土している。

出土した石器・石製品には、石鏃・錐・石斧・砥石・くぼみ石・敲き石・石鋸等がある。

60は、有茎式の石鏃である。61は、尖基式の石鏃である。基部が欠損している。未製品の可能性もある。ともにサヌキトイド製である。62は、長さ4.6cm・幅3.3cmを測るやや大型の円基式の磨製石鏃である。珪質頁岩製である。63は、サヌキトイド製の錐である。64は、



第96図 SH86201 出土遺物 7 (管玉他)
76：石鏃，77・78：管玉

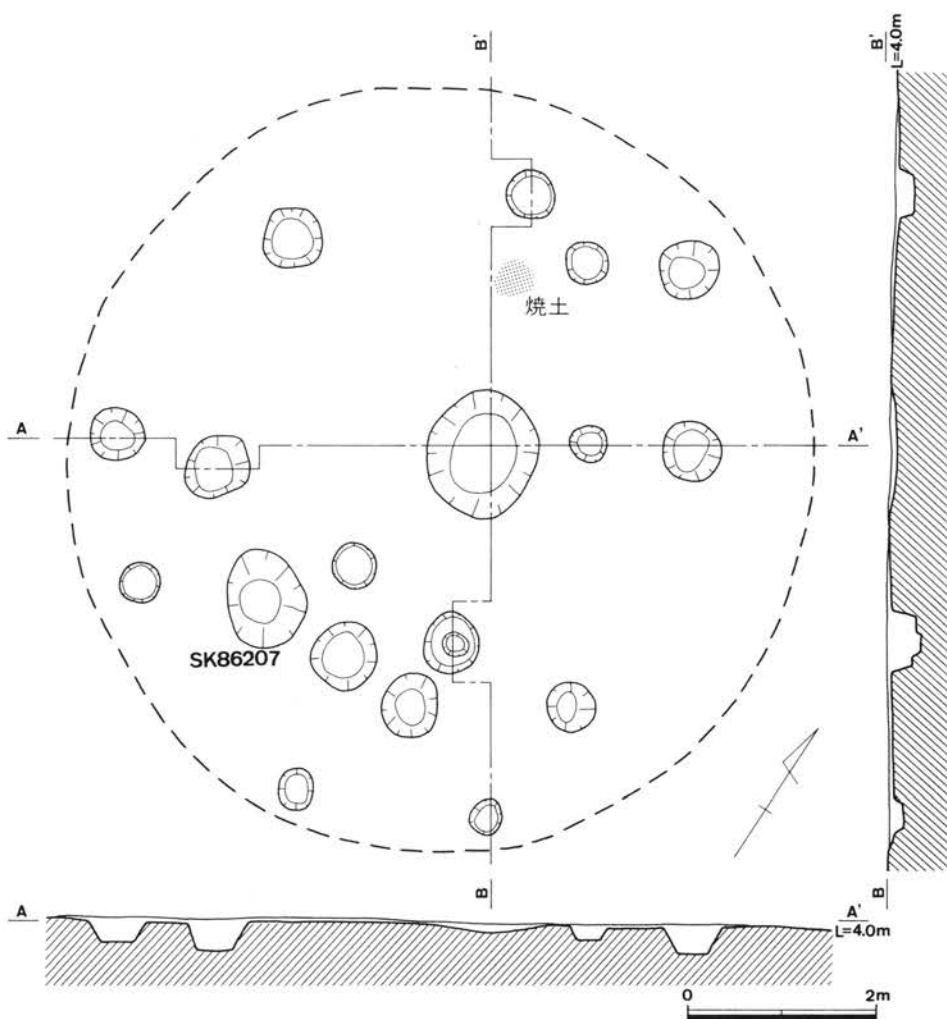
切断面をもつピエス・エスキューユである。裏面は部分的に自然面を残す。石材はサヌキトイドである。二上山産のサヌカイトの可能性もある。65は、小型の扁平片刃石斧である。床下の土坑内から出土している。珪質頁岩製である。66は、床面から出土した大型蛤刃石斧の先端部である。ハンレイ岩製である。67は、床面から出土した環状石斧である。約2分の1が欠損している。直径10cm前後を測るものと考えられる。ハンレイ岩製である。168は粘板岩製の石鏃である。先端部の使用による摩滅が著しい。砂地(志高遺跡の土は、多くの砂を含んでいる。)で用いたためであろう。70は、敲打痕のある磨石である。磨石と敲き石を兼用したものであろう。花崗岩製である。69・71～75は、砥石である。69・72は砂岩製の中砥で、71・73～75は、花崗岩質アブライトの仕上砥である。75は粘板岩製である。75は、研磨痕が明瞭で鉄製品を研いだ可能性もある。図化しなかったが、他に砥石等が出土している。

上記の石器以外にも、玉作りに使用した紅簾片岩製の石鏃(76)と、細身の管玉4点(77・78)が出土している。石鏃の縁部には刃部が作られている。77・78は、ともに直径2mm前後の細身のもので碧玉製である。

住居跡の床面から3点、埋土内から2点鉄製品が出土している。1点は鉄剣の一部と考えられる。鉄製品の詳細については機会を改めて紹介したい。

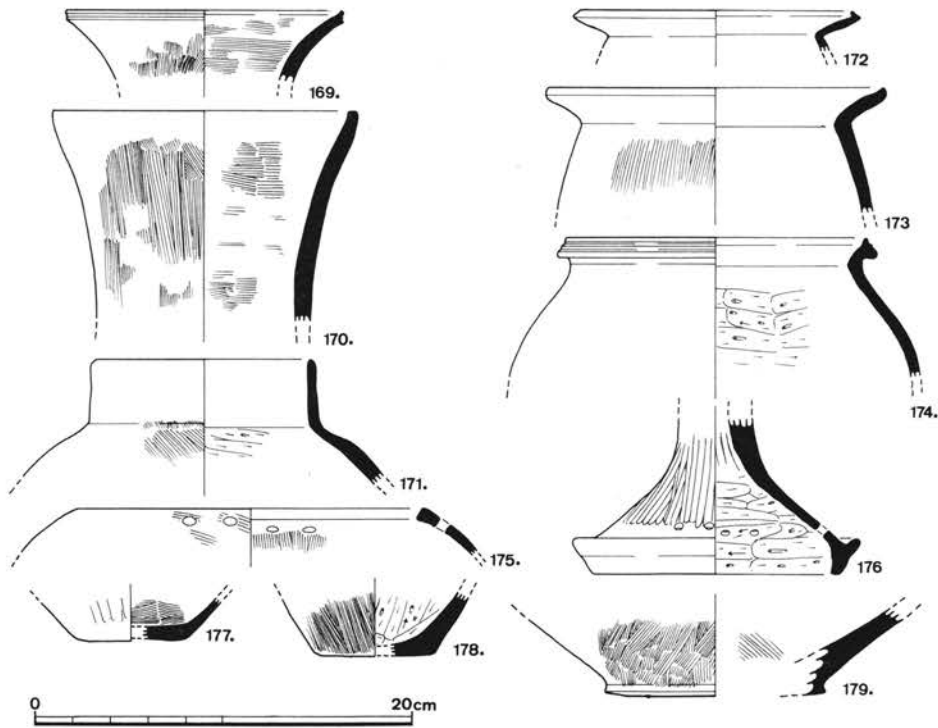
SH86202(第97・98図) 24D区付近で炭・灰の堆積した土坑を検出した。この土坑を中心にピットが存在するため、円形の堅穴式住居跡の残欠と考えられる。土坑の周辺は土がよく締まっており、床面として認識した。主柱穴は、6本と考えられる。主柱穴の位置から住居の堅穴の直径は、約8mと復原できる。中央の土坑は、長径1.5m・短径1.2mを測る楕円形を呈する。深さは12cmを測る。土坑内には炭・灰が堆積しているが、壁や底には直接火を受けた痕跡は窺えなかった。炭・灰が土坑から溢れるように北西側に広がっており、その先端部分に焼土が存在する。土坑内・柱穴及び床面から少量ながら弥生土器・石器・石製品が出土している。

出土した弥生土器については、ここでは図化したもの限定して紹介したい。169～171・174・177～179は、床面から出土した。175は中央土坑内から、172・173・176は、柱穴内から



第97図 SH86202 実測図

出土した。169は、壺A₁の口縁端部に2条の擬凹線状文様を施すものである。口縁部内外面にハケ調整を残す。SK85208出土の壺(470)と同一の器形と考えられる。170は、いわゆる長頸壺であるが、SX85222(土器溜まり)から同一の器形を呈するものが出土しており、倒卵形の体部をもつものと考えられる。171は、短頸壺(壺F)である。内面は頸部までヘラケズリを行う。甕B₂には、内湾気味に立ち上がる口縁の端部が上方に明瞭につまみあげるもの(172)と、SH85205に多く見られる口縁部上半を内湾気味に強くナデるために、端部がわずかに上方に突出するもの(173)がある。甕B₄(174)は、口縁端部に2条の凹線文を施し、内面は頸部下方にまでヘラケズリが及ぶ。176は、高杯の脚部である。脚端部を上下に大きく拡張する。2個1組で4方向に穿孔を施す。外面を丹塗りする。



第98図 SH86202 出土遺物

169～171・174・175・177～179：床面出土，172・173・176：ピット内出土

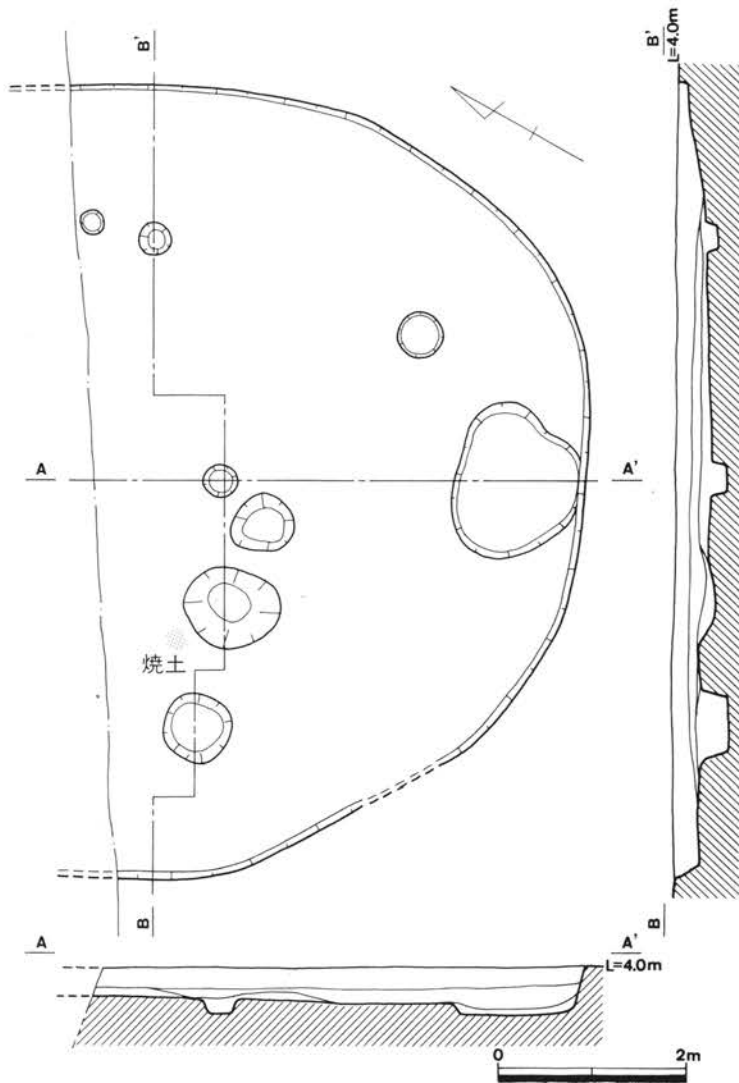
出土した土器群は、床面及び中央土坑内出土のものと、柱穴出土のものが様相を異にしており、前者が新しい様相を、後者が古い様相を示す。

他に中央土坑付近の床面上から、碧玉製の細身の管玉1点が出土している。

SH86203(第99・103図) 24B区付近で検出した円形堅穴式住居跡である。調査区内ではその半分を検出した。検出した堅穴の直径は8.4mを測る。検出面から床面までの深さは、約30cmである。住居の埋土は、上層と下層の2層に大別することができる。下層の下には、中央部を中心によく締まった張り床と考えられる層が部分的に存在する。中央から西寄りに、直径1.0mを測る炭・灰の堆積する土坑が存在する。この土坑から西側の床面には炭・灰が散っていた。焼土は土坑のすぐ西側で検出した。南側の壁に接するように、直径1.5mを測る不整形な平底の円形土坑が存在する。この住居跡を検出した付近は、土色の判別が極めて困難であった。中央に位置すべきはずの炭・灰の堆積した土坑が中央からかなり南寄りに位置することからも、検出できた平面形は必ずしも正しいものとは言い切れない。出土遺物には弥生土器をはじめ、石器・石製品等がある。

出土した弥生土器は計61個体ある。図化した遺物の出土位置は、184・189・193・195・196・

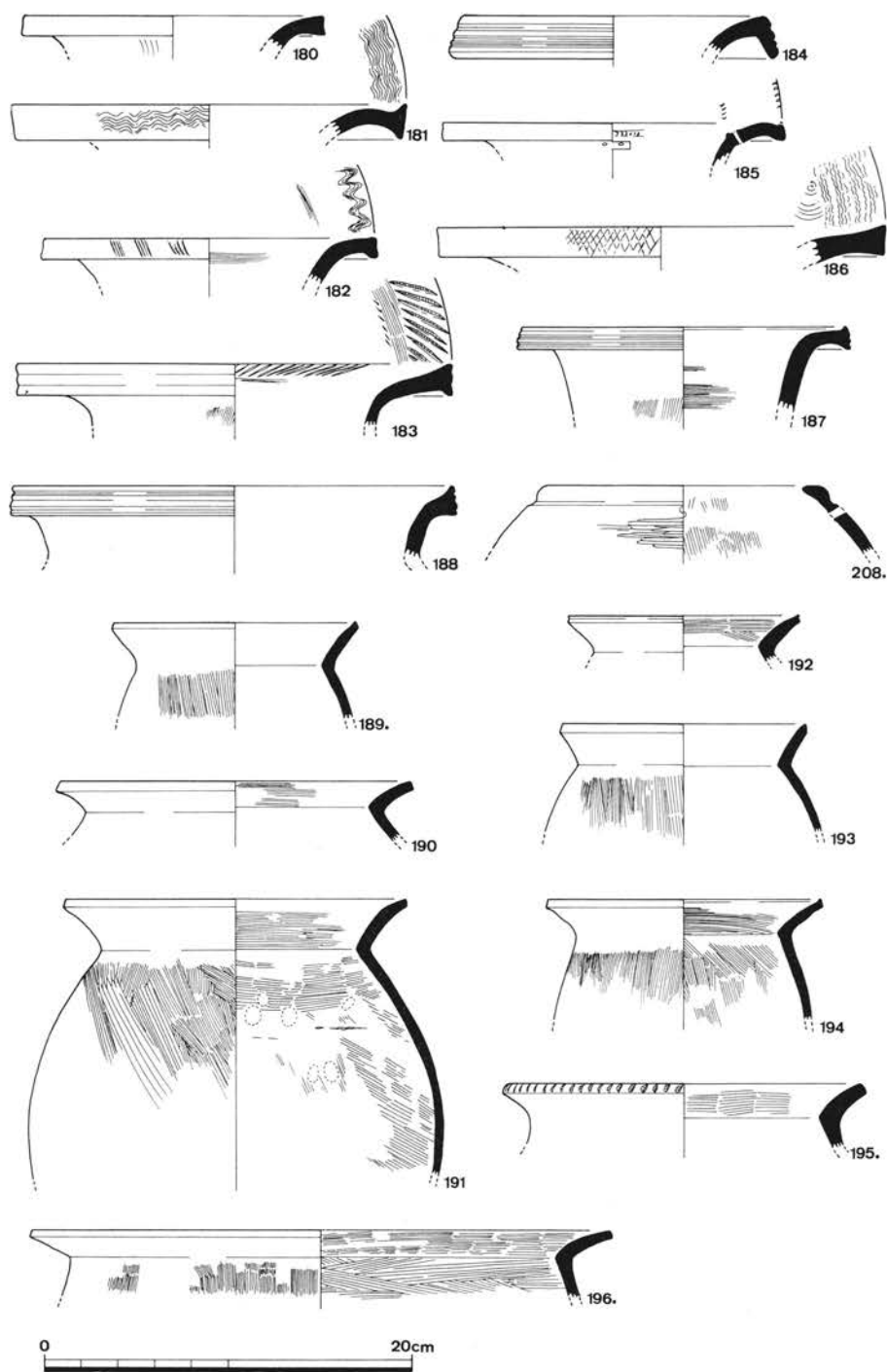
198・200・209～
 211・217～220・
 222・224が床面
 から、180・185・
 191・192・197・
 201・202・213・
 215・219が埋土
 下層から、181～
 183・186～188・
 190・194・199・
 203～207・212・
 214が埋土上層
 から、216・221・
 224～226が南側
 の土坑及びピッ
 ト内から出土し
 ている。上層出
 土の土器群と下
 層から床面出土
 の土器群様相が
 やや異なり、上
 層の土器群には
 新しいものが多
 く含まれている。



第99図 SH86203 実測図

器種構成は、壺21%(13個体 壺A₃ 1, 壺A₅ 1, 壺A₆ 4, 壺A₇ 1, 壺A₈ 1, 壺A₉ 2, 壺B₂, 壺G 1), 甕57%(35個体 甕A 11, 甕B₁ 15, 甕B₂ 3, 甕B₃ 2, 甕B₄ 4), 鉢18%(11個体 鉢A₁ 3, 鉢A₂ 4, 鉢A₃ 1, 鉢B₂ 1, 鉢C 1), 高杯4%(2個体 高杯A 1, 高杯B 1)である。下層から床面にかけて出土したものに限定すると、個体数は30個体になる。その構成比は壺17%(5個体 壺 A₃ 1, 壺A₇ 1, 壺A₉ 1, 壺B 2), 甕67%(20個体 甕A 6, 甕B₁ 9, 甕B₃ 2, 甕B₄ 3), 鉢16%(5個体 鉢A₁ 1, 鉢A₂ 3, 鉢C 1), 高杯0%となる。

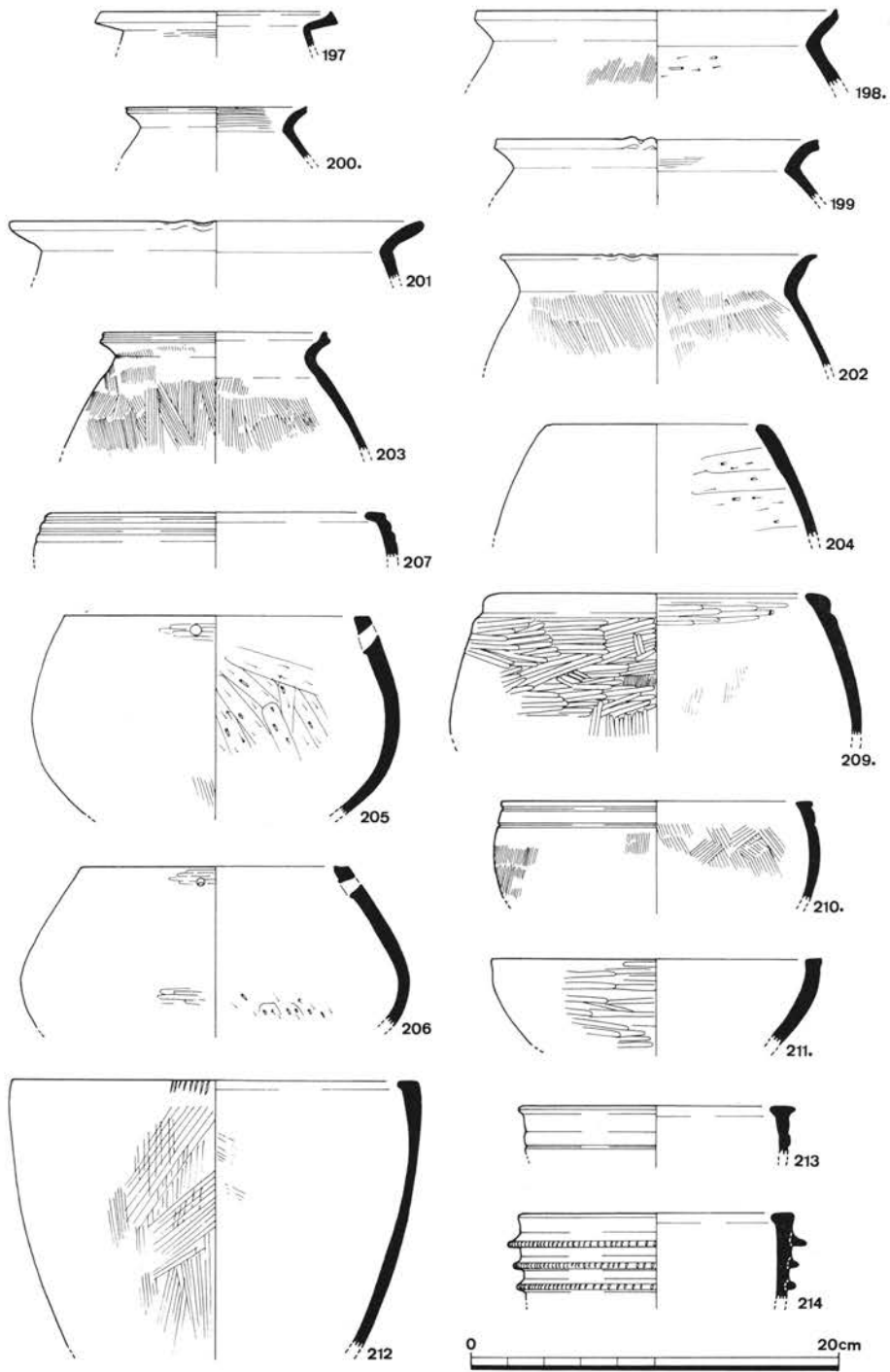
壺には180～188がある。壺A₅(187)は、斜め上方にのびた口縁部が水平方向に開くもので、口縁端面には凹線文を施す。壺A₆の口縁部内面の文様は、櫛描波状文が多く見られる。



第100図 SH86203 出土遺物 1 (弥生土器 1)

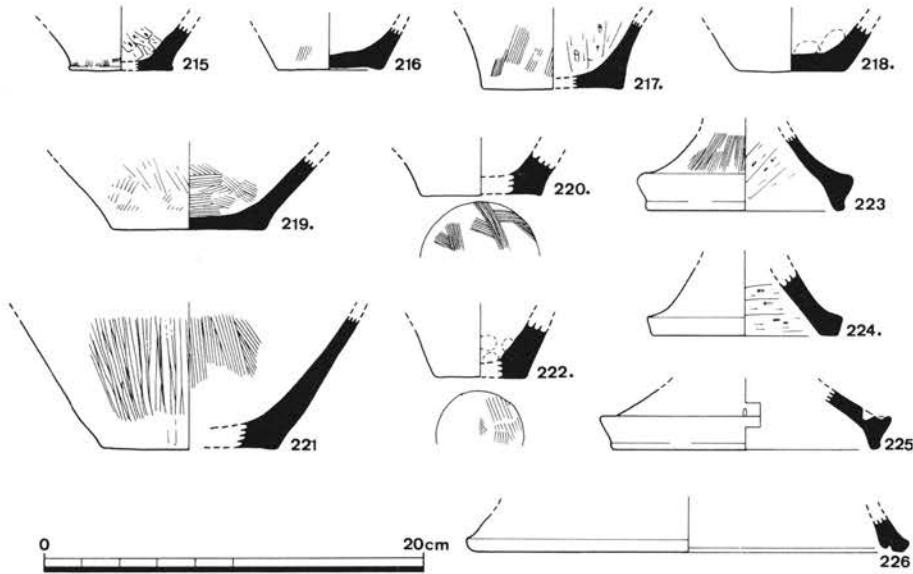
184・189・193・195・196・208 : 床面出土, 180・185・191・192 : 下層出土

181・182・183・186・187・190 : 上層出土



第101図 SH86203 出土遺物 2 (弥生土器 2)

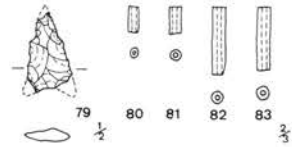
198・200・209～211：床面出土，197・201・213：下層出土，199・203・206・207・212・214：上層出土



第102図 SH86203 出土遺物 3 (弥生土器3)

217~220・222・224 : 床面出土, 215・223 : 下層出土, 216 : ピット内出土, 225・226 : 土坑内出土

口縁端面は、櫛で飾るもの、ヘラで飾るもの(斜格子文)、凹線文で飾るものがある。壺A₇(184)は、垂下する口縁端面に凹線文を施す。188は、短い口縁部をもつ壺A₈で、口縁端面に凹線文を施す。壺Bは、2個体出土しており、ともに1~2mm大の石英を含み、乳白色を呈する大型のものである。口縁部外面を櫛描斜格子文で飾るものがある。埋土上層から壺Gが出土している。口径約11cmを測り胎土は極めて精良である。



第103図 SH86203出土遺物4 (玉類)

79 : 石鏃, 80~83 : 管玉

甕には189~203がある。甕Aは、比較的多く出土しているが、いわゆる如意形口縁をもつものではなく、頸部は明瞭には屈曲しないものの、「く」の字状を呈するものが多い。細片が多く図化したものはない。甕B₁(189~194・196・199~201)は、頸部が「く」の字状を呈するものである。191のように頸部が明瞭に屈曲するものと、202のように屈曲が緩やかで甕Aに近いものがある。口縁端部に押圧による波状部をもつものがある。甕B₂(197・198)のうち、198は頸部付近にまでヘラケズリが及ぶ甕B₃には、口縁端面にハケ状工具によるキザミメをもつもの(195)のほかに、口縁端面上半にヘラによるキザミメを施すものがある。甕B₄には、口縁端面に凹線文を施すもの(203)と施さないものがある。

鉢には図化したものとして、204~212・214がある。鉢A₁には、内面をヘラケズリとナデで調整するもの(205・206)と、ヘラケズリで調整するもの(204)がある。鉢A₂(208~210)は、口縁部外面に1条もしくは2条の凹線文を施す。208・209は、内外面にヘラミガ

キを施すが、口縁部直立気味の210は、ハケで調整を行う。直立する口縁部の外面に貼り付け突帯文をもつ鉢B₂(214)は、突帯の上にヘラ状工具によってキザミメを施す。鉢Cは深い212と、浅い211が出土している。212は、口縁端部にヘラ状工具によるキザミメを施す。211は、鉢として分類したが、高杯の可能性もある。同一個体がSD86206から出土している。

高杯の出土量は少なく、口縁部で確認できたものは上層から出土した2点のみである。

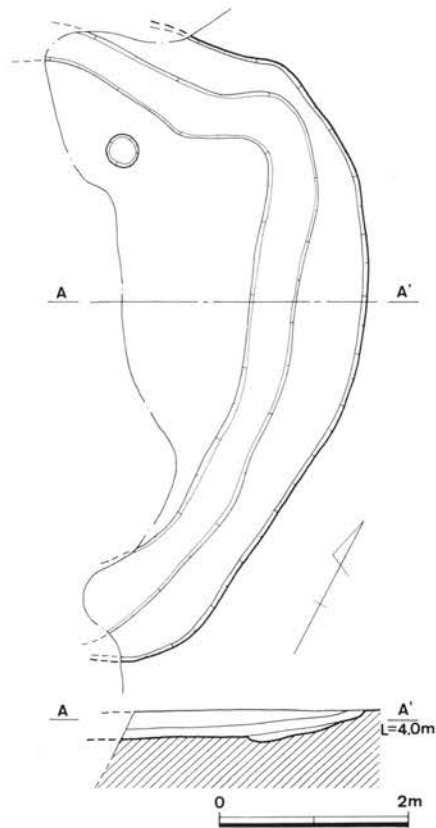
底部には215～222等があり、内面をヘラケズリするもの、ハケで調整するもの、ナデるものがある。220・222の底部にはハケメを施す。脚部には223～226等がある。

出土した石器・石製品には石鏃と管玉がある。ほかにサヌキトイド製の剥片類がある。79は、凹基式の石鏃である。サヌキトイドを石材とする。80～84は、碧玉製の細身の管玉である。82・83は、欠損していないもので、長さ1.3cm・1.4cmを測る。

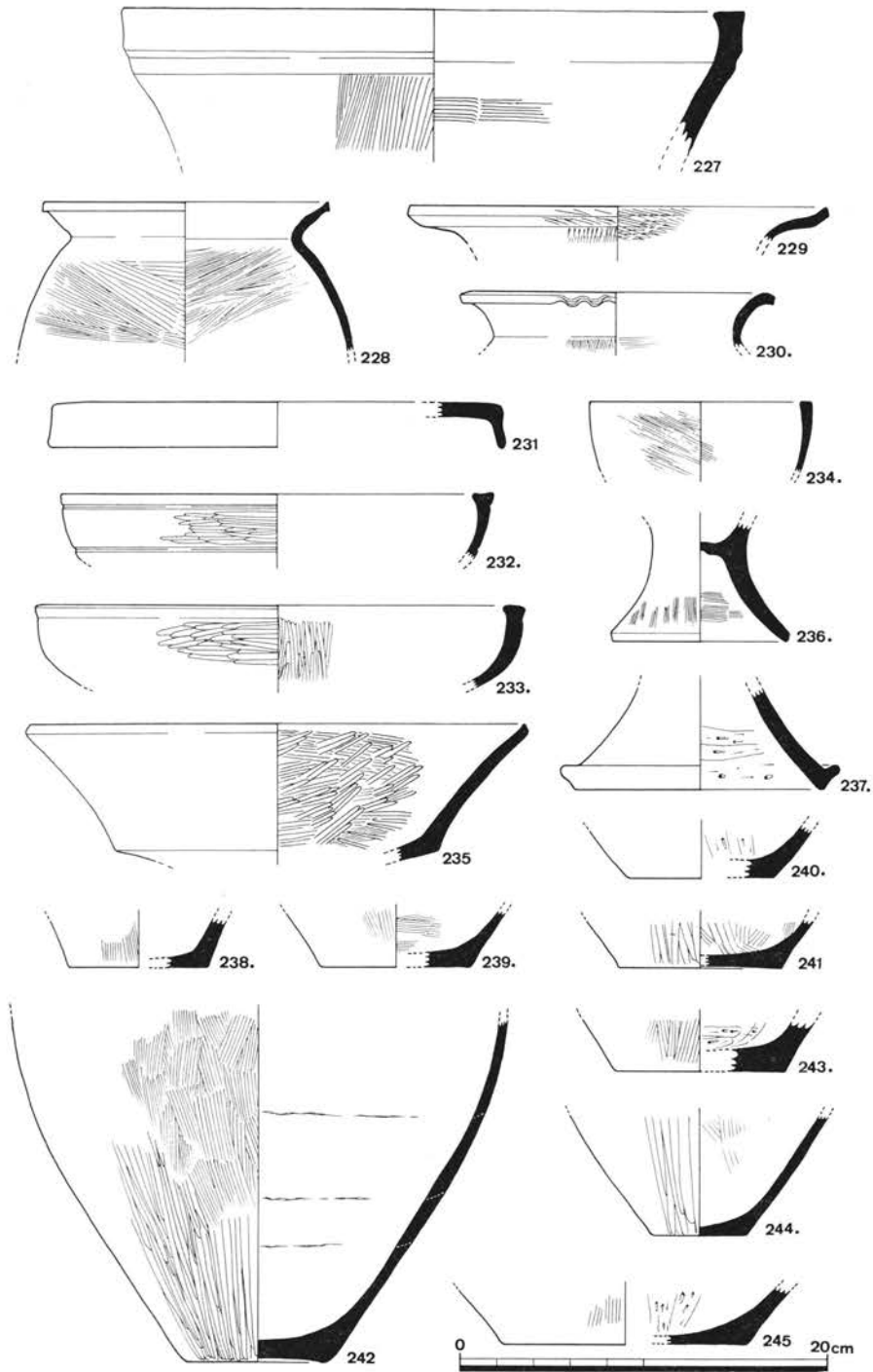
他に鉄鏃と考えられる鉄製品が出土している。

SH86204(第104～106図) 28E区付近で検出した円形竪穴式住居跡である。検出したのはその一部にすぎず、その構造・規模は充分把握できない。推定される住居の規模は、直径8m前後である。住居の埋土は、2層に分層することができた。床面は層として把握することはできなかったが、下層の下半分～地山にかけてよく締まった面があり、これを床面と認めることができる。床面上から、数個体の土器と多数の剥片(サヌキトイド)が出土した。床下にはSH85210等に見られるのと同じ性格と考えられる溝状遺構が存在する。出土遺物には弥生土器をはじめ石器・石製品等がある。

出土した土器の個体数は、計27個体である。その器種構成は、壺41%(11個体 壺A₃ 4, 壺A₄ 1, 壺A₆ 2, 壺A₉ 1, 壺B 1, 壺C 2), 甕35%(9個体 甕A 5, 甕B₁ 2, 甕B₂ 1, 甕C 1), 鉢4%(1個体 鉢A₁ 1), 高杯22%(6個体 高杯A 4, 高杯B 1)である。図化したものの内、床面から出土したものに230・232・234・235・238～240・242～244がある。ほ



第104図 SH86204 実測図



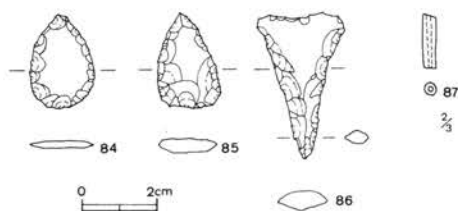
第105図 SH86204 出土遺物 1 (弥生土器)

230・234・236～240・242～244：床面出土，232：下層～床面出土，227・235：下層出土，
229：上層出土

かは、埋土中から出土した。

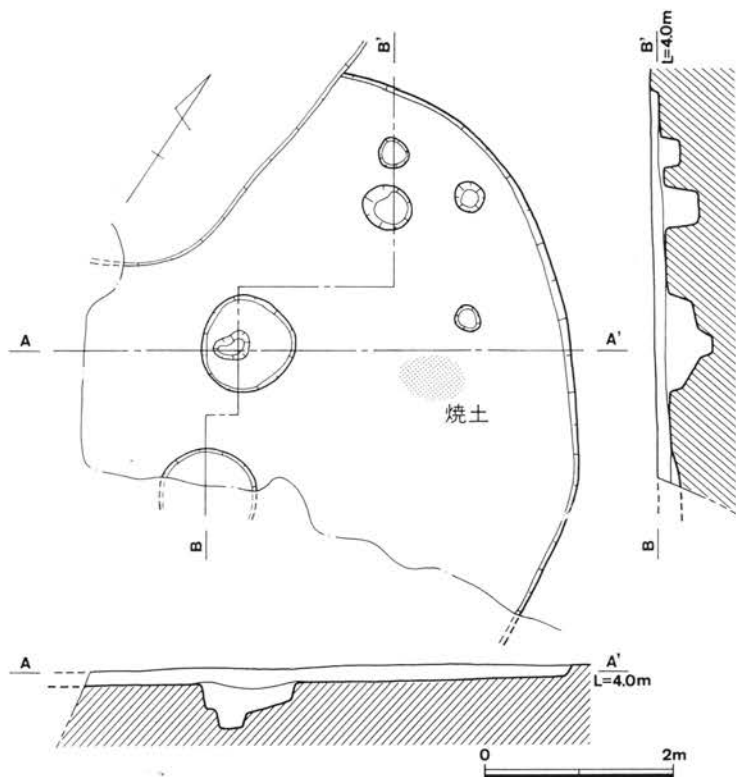
壺A₅には、口縁部にハケ状工具を向きを変えて交互に刺すことによって鋸歯文もしくは斜格子文をつくるものがあり、床面から出土している。埋土から出土したものは、口縁端面に櫛描波状文を施すものと、斜格子文を施すもの及び無文のものがある。

壺A₆には、口縁端部には施文を行わず、内面に扇形文を施すもの(床面出土)と、端部に凹線文を施し、内面に櫛描波状文を施すもの(埋土出土)がある。壺A₉は、埋土から出土したもので、口縁内面に外側から斜格子文・凹線文2条、凹線文による凸部にキザミメを加えたもの2条・櫛描波状文の順で施文されている。壺A₉として分類したが、いわゆる搬入土器ではなく、志高遺跡の壺A₆に見られる胎土で造られている点や凹線文を利用して、突帯文の上にキザミメを施すものに似せている点から、この地域で壺A₉を真似て造られたものと考えられる。壺B(227)は、口径34cmを測る大型のもので、直立する口縁端部下端に



第106図 SH86204 出土遺物2 (石器)

84・85:石鎌, 86:石鎌, 87:管玉



第107図 SH86212 実測図

1条の凹線を施す。

甕には、甕Aが比較的多く見られ、床面からは甕B₁は出土していない。228は、頸部の屈曲が「く」の字状に近い甕Aである。口縁部は全周するものの、波状を呈する押圧文は施されていない。229は、口縁部の内外を粗いハケ(櫛か)で調整する受け

口状口縁をもつ甕Cである。230は、口縁端部に押圧による波状部をもつ。埋土中から出土した甕B₁は、典型的な甕B₁とは違い、屈曲部がやや緩やかで口縁部内面にハケを残す。

鉢には、234がある。口縁部は内傾しないが、鉢A₁とした。236は、鉢に伴う脚部である。鉢A₁に伴うものと考えられる。237も鉢の脚部の可能性が高い。

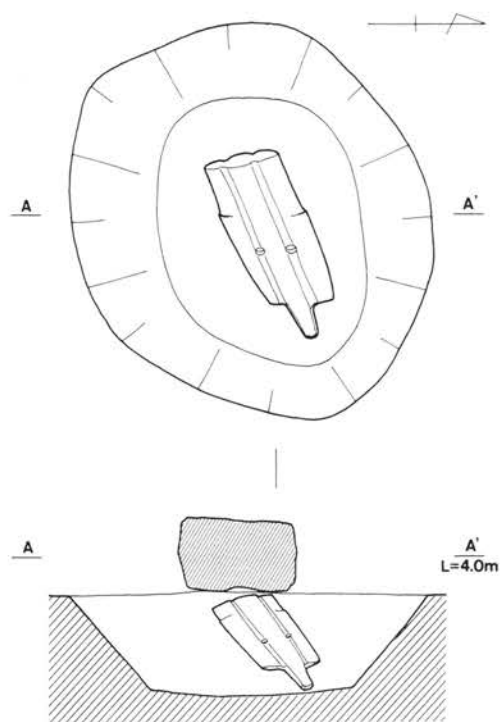
高杯には、高杯A(232・233)と高杯B(231)がある。232は、口縁部の上端と下端に凹線文を施すものである。233は、凹線文をもたない。235は、高杯Fである。器台になる可能性も考えられる。口縁部内面に、ハケの上から粗くミガキを施す。外面には全面に丹が塗られており、調整は不明である。SH86203・SD85208

付近、自然流路岸部弥生包層から同一の器形(635)が出土している。

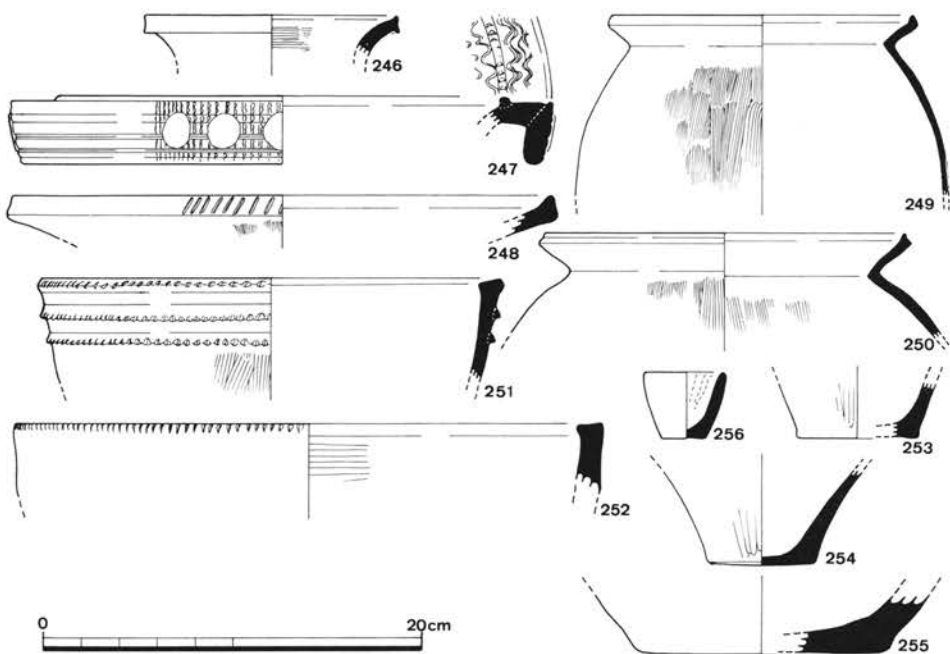
底部が多数出土している(238~245)。外面の調整は、ハケを施すものとミガキを施すものがある。内面の調整は、ヘラケズリとハケ及びナデがある。

石器・石製品としては、床面から多量のサヌキトイドの剝片に混じって、石鏃・石錐・管玉が出土している。84は円基式の石鏃である。85は平基式の石鏃である。86は、鋭角二等辺逆三角形を呈する石錐である。石鏃・石錐ともにサヌキトイド製である。87は、長さ1.1cm・直径3mmを測る細身の碧玉製の管玉である。

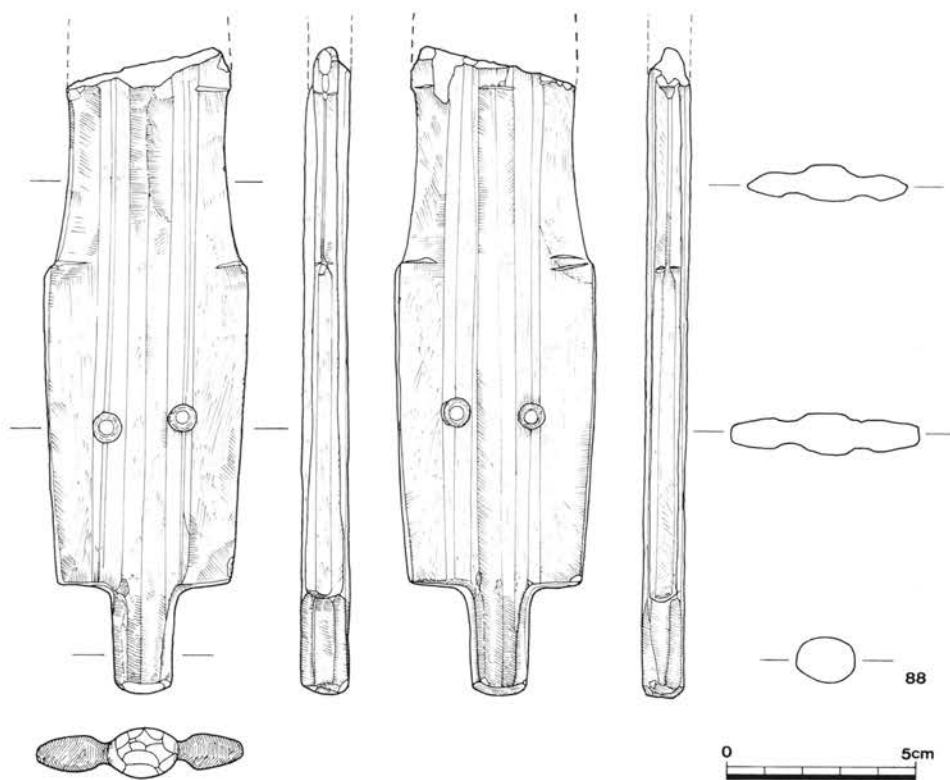
SH86212(第107~111図) 28G区付近で検出した円形竪穴式住居跡である。SH86204と切り合い関係にありSH86204が先行する。検出できたのは約5分の2程度で残りの部分はすでに失われていた。直径は8m前後と推定される。検出面から床面までの深さは、約14cmを測る。中央部南東寄りて炭・灰の堆積する土坑を検出したが、その大半が攪乱により失われており、規模は不明である。中央部北西寄りに直径1.0mを測る土坑が存在するが、住居に伴うものかどうか不明である。床面中央部北東寄りて焼土を検出した。焼土の近辺の床面上に台石が逆向きに置かれており、その下で直径30cmに満たない小ピットを検出した。そこから半截された銅剣形石剣が基部を下にして立てかけるように置かれていた。



第108図 SH86212ピット内石剣出土状況実測図



第109図 SH86212 出土遺物 1 (弥生土器)



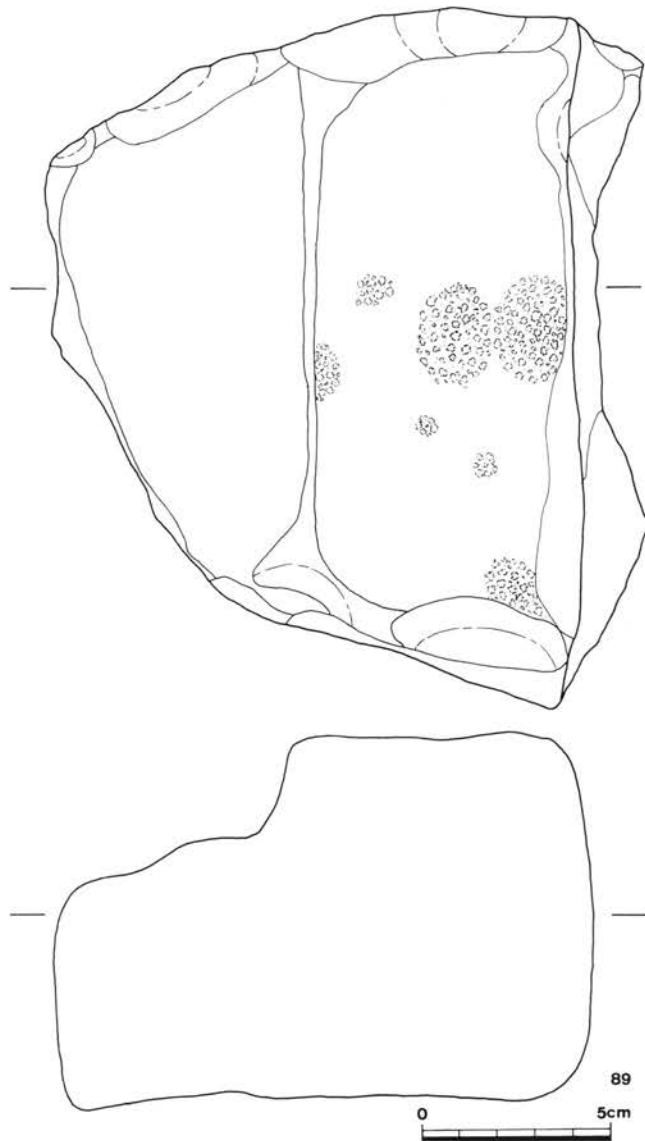
第110図 SH86212 出土遺物 2 (銅剣形石剣)

床下に石剣を埋納もしくは
は廃棄したと考えられ
る。

出土した弥生土器の量
は少なく、整理箱にして
2分の1に満たない。個
体数も12個体と少なく、
その構成比は、壺25%（3
個体 壺A₅ 1, 壺A₉ 1,
壺C 1）、甕67%（8個体
甕A 3, 甕B₁ 2, 甕B₂ 3）、
鉢17%（2個体 鉢B₂ 1,
鉢C 1）、高杯0%、ミニ
チュア土器8%（1個体）
である。

壺A₅(248)は、主に上
方に拡張した口縁部の端
面にヘラ状工具により、
斜のキザミメを施すもの
である。法量から壺Cに
なる可能性もある。壺
A₉(247)は、垂下した口
縁端面に凹線文を施し、
その上からヘラ状工具に
よって縦に沈線を重ね格
子文を造りだす。さらに

上から円形浮文を貼り付ける。内面は、櫛描文とキザミメを施した貼り付け突帯文で飾る。胎土は精良で灰褐色を呈し、ほかに例を見ない。甕Aは、3個体出土しており、1個体は口縁部に波状部をもち、胎土に多量の金雲母を含む。甕B₁は、口径約30cmを測る大型品である。甕B₂(249・250)の中に口縁端面に1条の凹線(250)をもつものがある。鉢B₂(251)は、口縁部外面に3条の貼り付け突帯をもつ。突帯の上端にはキザミメを施す。鉢Cとした252は、口縁端部にキザミメを施す。内面にハケをもつことや、その器形から壺Bの可



第111図 SH86212 出土遺物 3 (台石)

能性もある。

ミニチュア土器(256)は、逆台形を呈し、内面に指頭圧痕を残す。

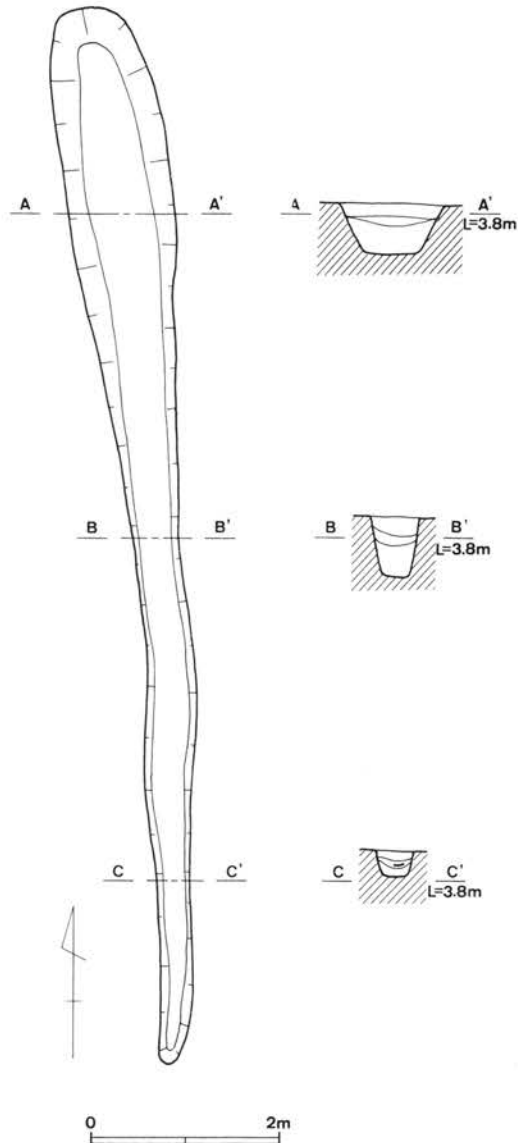
出土した石器類は前述した台石・銅剣形石剣のほかにサヌキトイド製の剥片類がある。88は、銅剣を忠実に模倣して作られている。全面をていねいに研磨し、基部は多面体を呈する。現存長17.4cm・最大幅5.3cmを測る。先端の欠損は1回で折られた形跡をもつ。復原長は約30cm程度を測る。頁岩製である。89は、花崗岩質の台石もしくはくぼみ石である。表面に敲打による凹凸が観察できる。石剣が出土したピットの上に逆さ向けに置かれていた。

(2) 溝状遺構

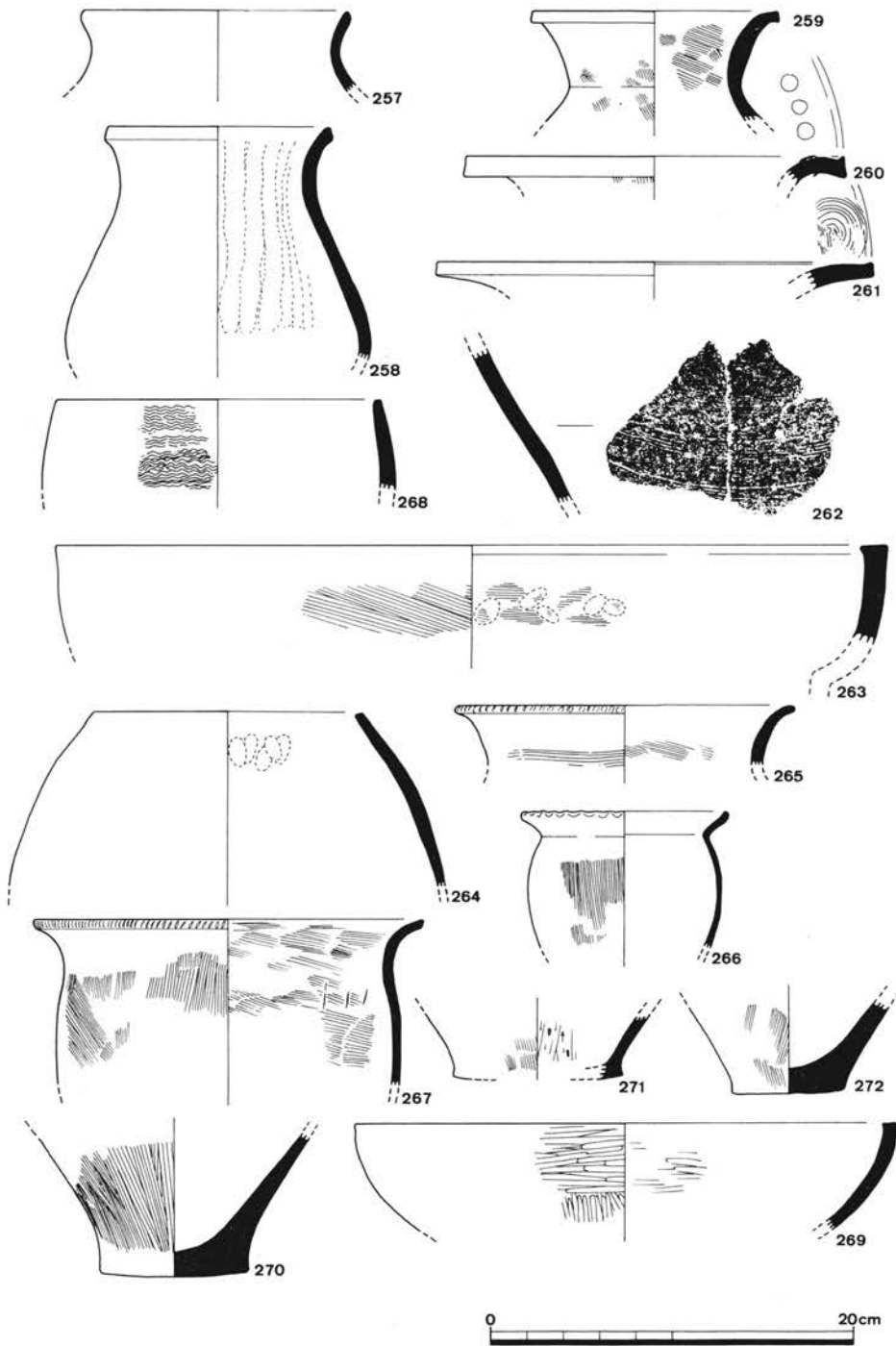
この地区における弥生時代の溝状遺構は、自然流路に注ぐと考えられるSD85211(SD86211)と、住居等に先行して存在するSD86206・SD86214等のみである。

SD86206(第112・113図) 23E区付近で検出した長さ11.2mを測る溝状遺構である。溝の向きはほぼ磁北である。溝は幅の広いところで1.1m

を測る。溝は、北側で途切れているが、南側は1度途切れてさらに北に続く可能性がある。溝の埋土は3層に分かれており、下層・中層からは、住居跡等から出土する遺物に比べて古い様相を示す遺物が出土した。埋土は、上層から暗黄褐色粘性砂質土(上層)・暗褐色粘性砂質土(中層)・灰褐色粘性砂質土(下層)である。上層の埋土は、竪穴式住居跡(SH86203・SH86204・SH86212)の埋土とほとんど同じである。遺物の大半は、上層から中層にかけて出土した。



第112図 SD86206 実測図



第113図 SD86206 出土遺物

257・258は、太い頸部に短く外反する口縁部をもつ壺である。便宜上、壺Cとして扱う。257は、張りの小さい体部から太い頸部に至り、口縁部がやや外反気味に終わり、外面をヘラミガキで調整する。胎土には石英を多量に含む。259は、壺A₁として分類したが、口縁端部付近は壺Cのように水平方向に開くものである。260・261は、口縁内面を飾る壺A₆である。260は円形浮文を、261は扇形文をもつ。262は、壺の体部(肩部)片である。複帯構成の櫛描直線文が施されている。263は、大型の壺Bである。胎土に石英を多く含み、乳白色を呈する。264は、鉢A₁と分類したいいわゆる無頸壺(壺E)である。外面には全く加飾を行っていない。胎土には石英・長石・雲母を含み淡灰褐色を呈する。如意形口縁をもつ甕A(265・267)は、体部径が口縁径を超えないものである。口縁端面にヘラ状工具によるキザミをもつ。265は、体部上半に櫛描直線文が施されている。なお、267の胎土は264と全く同一のものである。甕B₁(266)は、上層から出土したもので、口縁端部の押圧文が全周する例のないものである。鉢A₁(268)は、外面に複帯構成の櫛描波状文を施す。同一個体が他にもあり、波状文の施される範囲は口縁部から3分の2までである。底部は4個体出土しているが、外面はすべてハケで調整されている。

SD86206から出土した1群は、畿内第Ⅱ様式併行まで遡る要素を含むものから第Ⅲ様式まで含まれている。なお、出土層のわかるもののみを挙げると、上層出土のものが259・260・266・267で、中層出土のものが258・261・262・270である。

土器以外に砥石等の石器の剥片類が出土している。

SD85211・SD86211(第114～124図) 7～24A区に位置する長さ34m以上を測る溝状遺構である。幅は、溝の北肩が調査区外に位置するため不明であるが、拡張した部分の断面から推定すると約4mを測ると考えられる。溝の深さは30～50cmを測る。埋土は、基本的に上層と下層に分層することができた。この溝は、東側に広がる自然流路に注いでいたと考えられるが、東と西の底のレベル差は顕著ではなく、常に水が流れていたとは考えにくい。この溝は、SD85210・SH85218を削って営まれている。溝内からは、弥生土器をはじめ石器・石製品が多数出土した。

出土した弥生土器は整理箱にして約30箱あり、ここでは図化した土器の説明をするにとどめたい。土器は、溝底に集中して出土したわけではない。全体的に新しい様相のもの(凹線文盛行期)の占める割合が高いが、古い様相のものも含まれている。

SD85211から出土したものの内、273～392を図化した。広口壺(壺A)には、壺A₁(273・274)・壺A₂(277)・壺A₃(279・282・283・286)・壺A₅(275・281・284・289・291)・壺A₆(276・278)・壺A₇(280・288・290)・壺A₈(285)・壺A₉(287)がある。壺A₁は、頸部から口縁部が直線的に斜め上方にのびる。274のように小型品もある。壺A₃には、頸部から斜上方にのびた口

縁部が途中で緩やかに屈曲するもの(279・283)と、外反する短い口縁部をもつもの(282・286)がある。279の口縁端面は楕描波状文と円形浮文で、282は刺突文で加飾する。282は、2~5mm大の石英の角礫を含み淡褐色を呈する。壺A₅には、口縁端面に凹線文を施すもの(281・289・291)が多い。275は、口縁端面には凹線文を施さないものの、頸部に2条以上の凹線文を施す。281は、小型品で口縁端部を主に上方に拡張する。284は、口縁部が途中で緩やかに屈曲するものである。289は、やや小型で、口縁部の上下への拡張が著しい。他地域の影響を強く受けたものと考えられる。胎土にはチャート・石英を含み橙褐色を呈する。壺A₆(276・278)には、口縁内面には扇形文、ヘラによる沈線文を施す。壺A₇の垂下する口縁部端面には、すべて凹線文が施されている。口縁内面に楕描波状文を施すもの(290)がある。285は、太い頸部から緩やかに外反して口縁端部に至る壺A₈である。口縁端面にハケによる列点文を施す287は、口縁部内面側に紐穴をもち突帯を張り付けたものである。突帯は破損してないため、突帯の形状は不明である。壺Dはいずれも口縁部に凹線文を施す。292~294は、口径10~14cmを測り、凹線文の位置は口縁部上半に限定される。調整はヘラミガキである。295は、口径24cmを測る大口径のもので、ほかに口径30cmを測るものがある。大口径を測るものは、凹線文が口縁部上半と頸部上半に施される。外面の調整は、ヘラミガキではなくハケである。大口径のものは小口径のものに比べて、口縁が外傾しており、別器種の可能性もある。胎土は壺Dではほぼ同一であるが、小口径のもの胎土は、大口径のものに比べて精良である。色調は褐色から橙褐色を呈する。296・297は、口縁端部を外側に丸め込む(折り曲げる)壺Gである。胎土は極めて精良で調整も極めていい(精製土器)である。298は、小型の精製土器で、296・297は胎土・法量が一致する。このことから壺Gの下半部に属する可能性が極めて高い。299は、精製土器とはいえない蓋形土器であるが、法量が壺Gの口縁部に一致することや、紐孔があることから壺Gの蓋である可能性が高い。300は、無頸壺(壺E)とした。口縁端部を内側に拡張するなど、鉢A₂と器形上の差はほとんど見られない。口縁部から凹線文・綾杉文・楕描波状文の順に文様を配する。

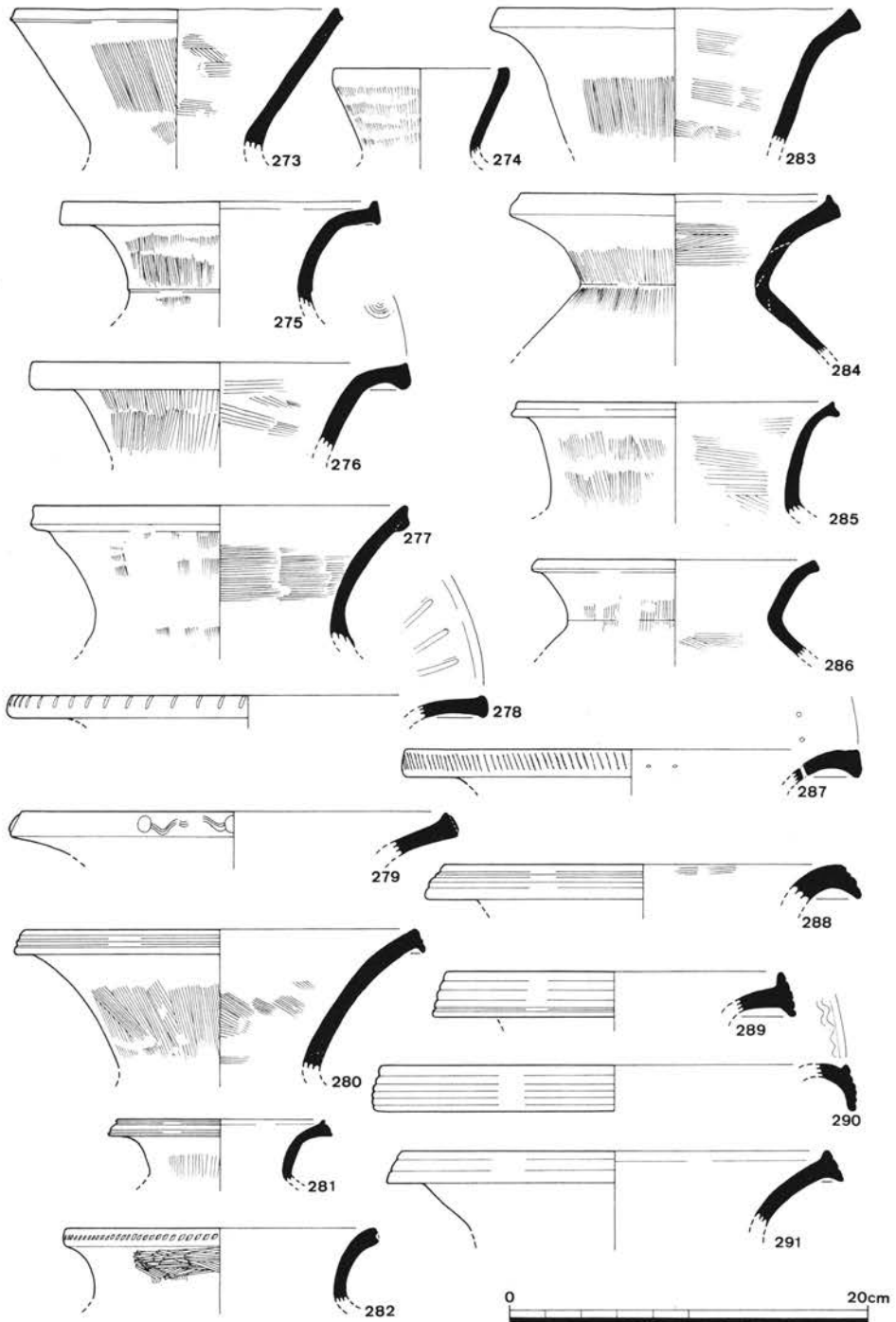
甕には301~334がある。典型的な甕Aはないが、甕Aとして分類できるものに、323と330がある。323は、水平方向に長くのびた口縁部をもち、口縁端部を甕B₂のように上方につまみあげる。330は、胎土に石英・チャート・くさり礫を含むもので淡褐色を呈する。

甕B₁は、出土した甕の大半を占めるものである。また、甕B₁の内、大半が長石・石英を含む赤褐色から暗赤褐色を呈するSH86201の甕B₁に一致する。内面をハケで調整したのち、ナデを施す。体部外面下半は粗いヘラミガキで調整する。口径14cm前後を測る小型のもの(302~304・306~308)、口径18cm前後を測る中型のもの(309~314)、口径30cm前後を測

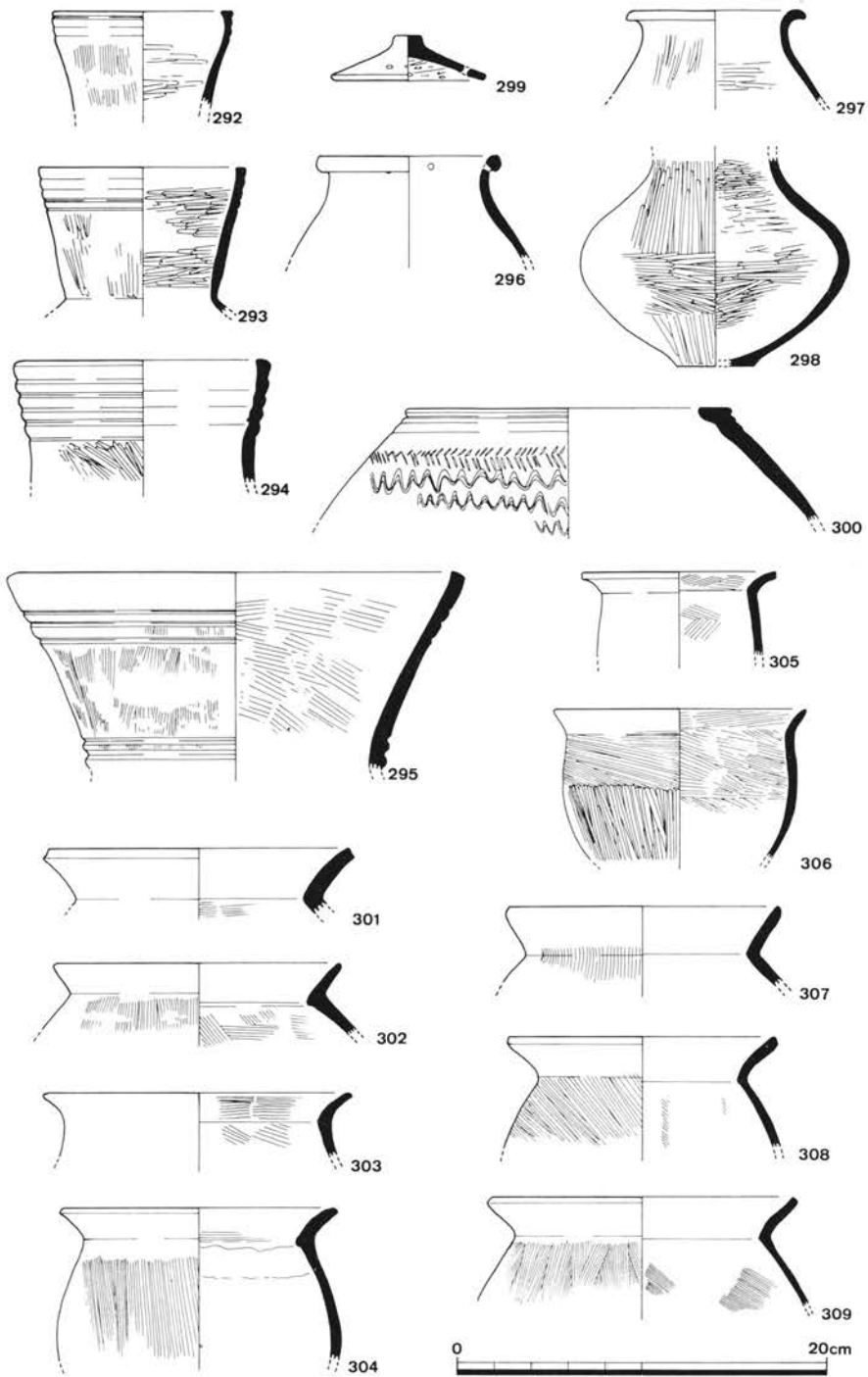
る大型のもの(315~317・319)がある。小型のものは口縁端部に面を持たないものが多いが、中型のもの多くは面を持つものが割合を増し、大型品は強いナデにより、中央部が凹む端面をもつようになる。頸部は、明瞭な「く」の字形を呈するものが中型・大型品では多くなる。頸部に接合痕を明瞭に残すものもある。この甕は、志高遺跡をはじめ、この地域における弥生時代中期後葉の通有な甕として理解できる。同様の甕が出土した遺跡として、桑飼上遺跡・石本遺跡・青野遺跡・観音寺遺跡・興遺跡・春日七日市遺跡等があげられる。色調・胎土が似ているが、くさり礫を含むものとして301・305・318がある。320は、石英・雲母を含む淡灰褐色を呈するものである。329は、口径27cmを測る大型の甕B₁で、口縁端面に13個を単位とするキザミメをもつ。灰褐色を呈する。ほかに頸部の形から甕B₁とするものに、逆「L」字状を呈する口縁部をもつ体部がほとんど張らない331・333・334がある。331は、4条の櫛描波状文を2段に施している。口縁端部を上方につまみあげる甕B₂には、321・324・325がある。321は、内面をヘラケズリする。324は口径7.4cmを測る極めて小型のもので、鉢Fと分類することも可能である。321・324の胎土は、甕B₁に多く見られるものに一致する。325は、石英を多く含み、淡乳褐色を呈する。325は、体部の最大径の位置がかなり上にあると考えられる。口縁端部に意識的な面をもつ甕B₃には、326・327・328がある。326は、胎土の極めて精良な(雲母を含む)淡灰褐色を呈する土器で、内外面ともハケを2回施すことを特徴とする。口縁端部は上下にわずかに肥厚する。口径24.8cmを測る。328は、口径20.2cmを測る中型のものである。胎土に2~3mm大の石英を含む。332は、搬入土器で近江系の甕(甕C)である。胎土は、やや粗く、1mm大の石英を多く含む。内外面を粗いハケ(櫛か)で調整したのち、同じ工具を櫛として利用して口縁部内面に波状文を、口縁端面に縦方向の沈線を施す。

鉢には344~349・351~355がある。344・345は、口縁部が内傾する鉢A₁である。胎土は甕B₁に多く見られる在地系のものである。346・347は、内側に拡張した口縁部をもつ鉢A₂である。346は、口径22.6cmを測り、体部屈曲部に凹線文を施す。347は、口径30.0cmを測る大型のもので、口縁部に凹線文を施す。ともに胎土は精良である。348・349は、口縁端部を外側に拡張する鉢A₃である。口縁端部に粘土帯を張りつけることにより拡張する。口縁部下方に張り付け突帯をもつ鉢B₂には、突帯を2帯以上もつもの(352)と、1帯のみ張り付けその上にキザミメを施すもの(353)がある。353は、壺になる可能性もある。354・355は、鉢Eである。特殊な器形を呈するもので、その出土数は極めて少ない。長い脚部が付く可能性が高く、高杯と分類すべきかも知れない。

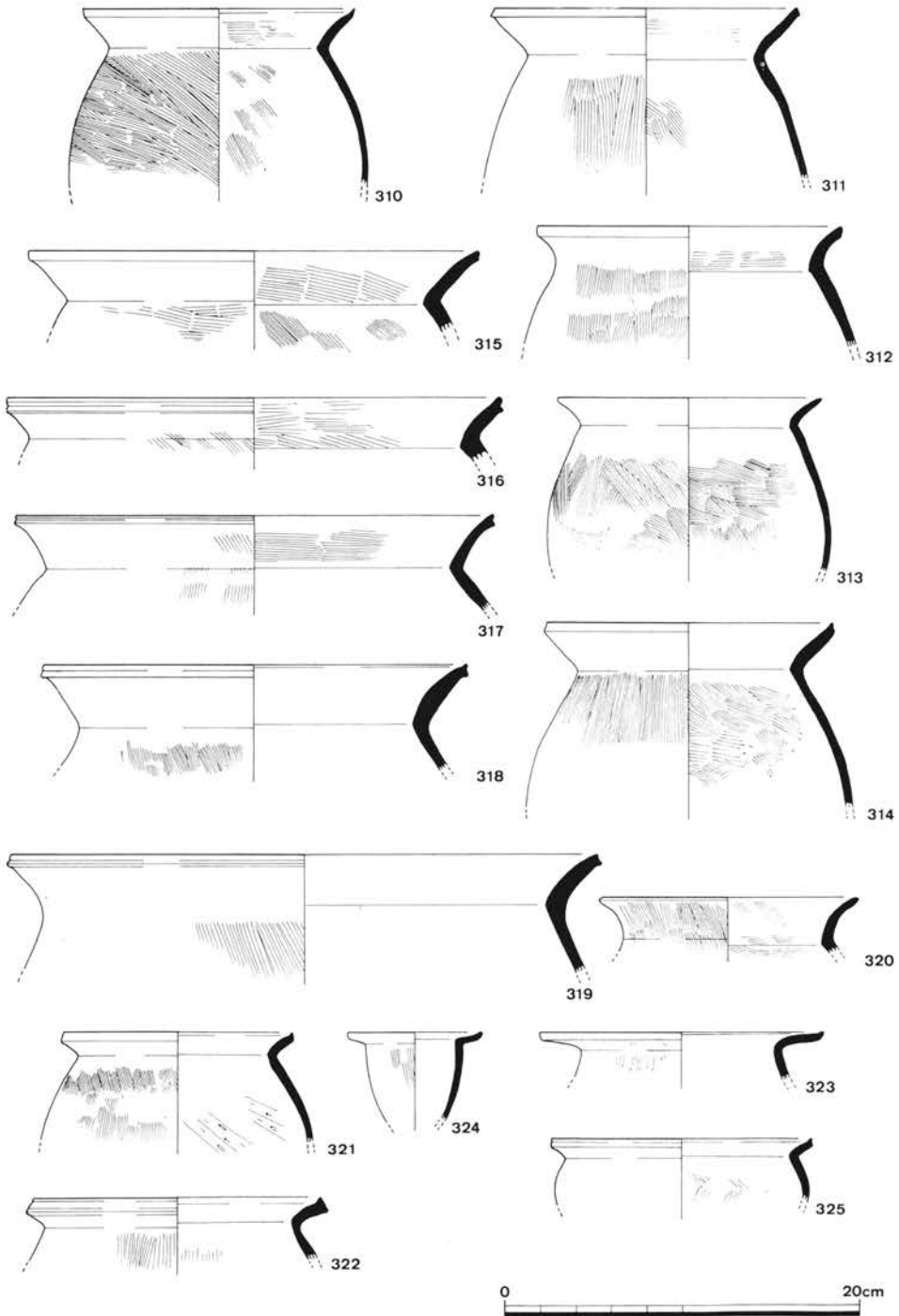
高杯には350・351・356~371がある。出土した高杯のうち大半は高杯Aで高杯Bは少ない。他に高杯C・高杯Dが出土している。高杯Aには、口径21.0cmを測る小口径のものから、



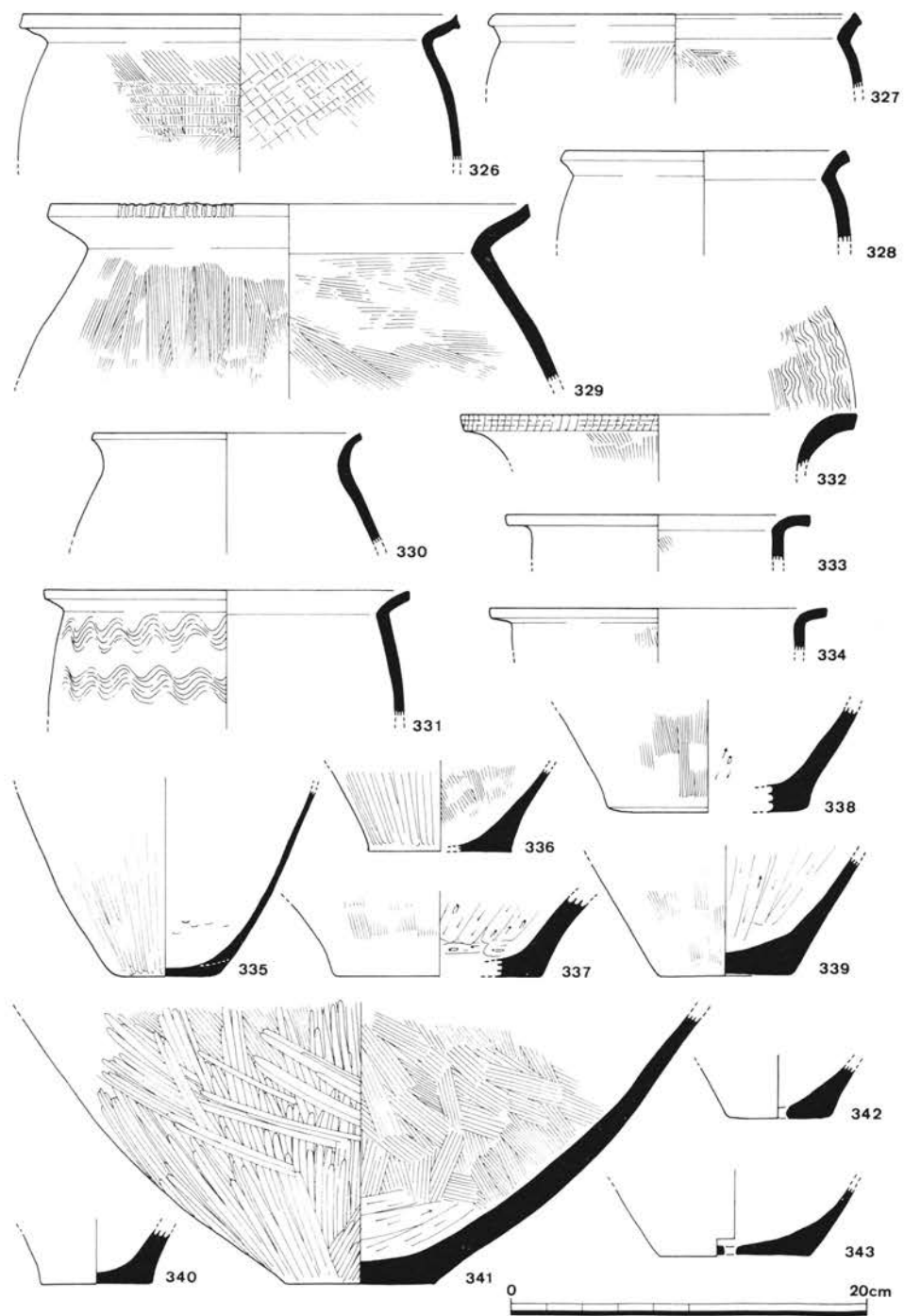
第114図 SD85211 出土遺物 1 (弥生土器 1)



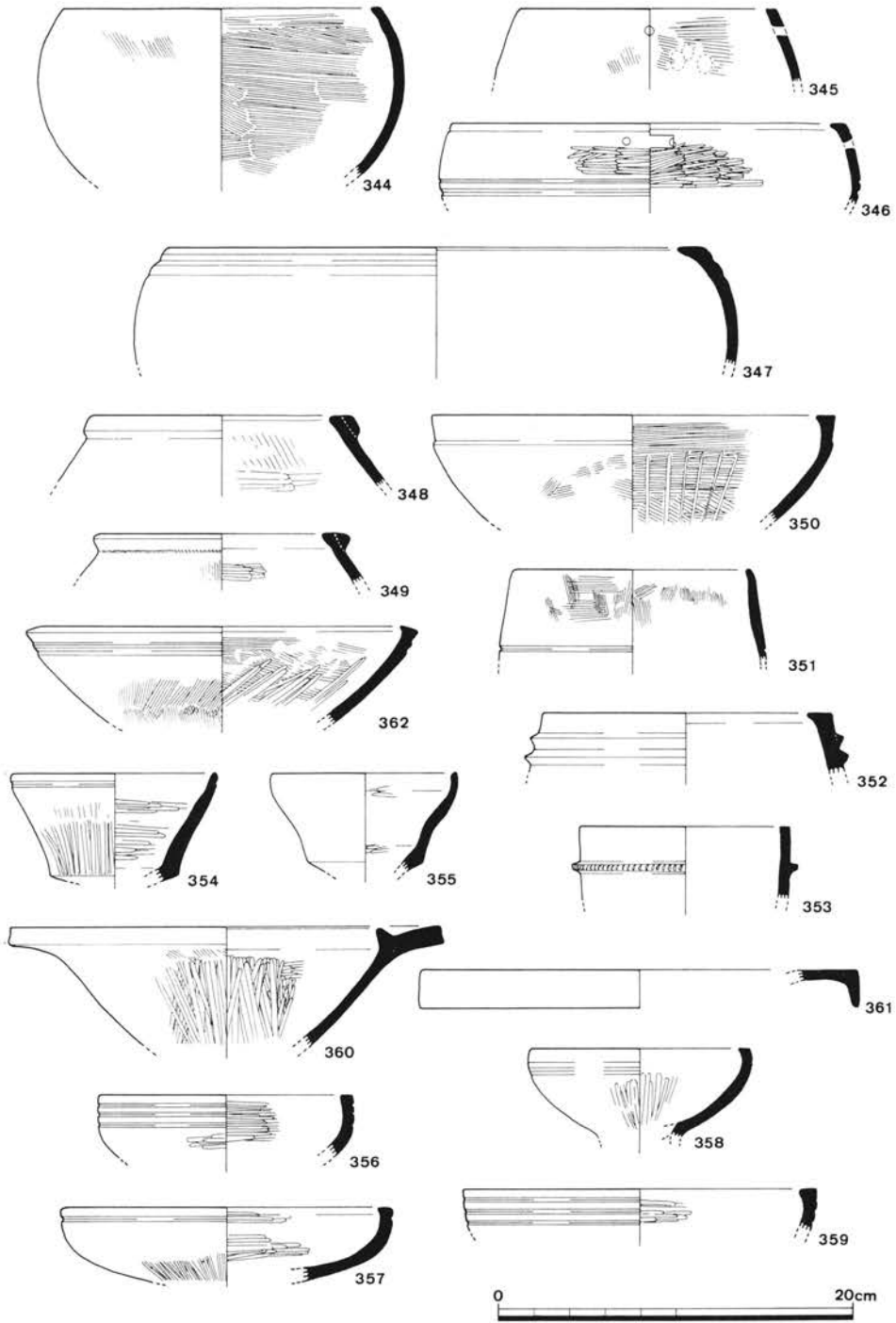
第115図 SD85211 出土遺物 2 (弥生土器 2)



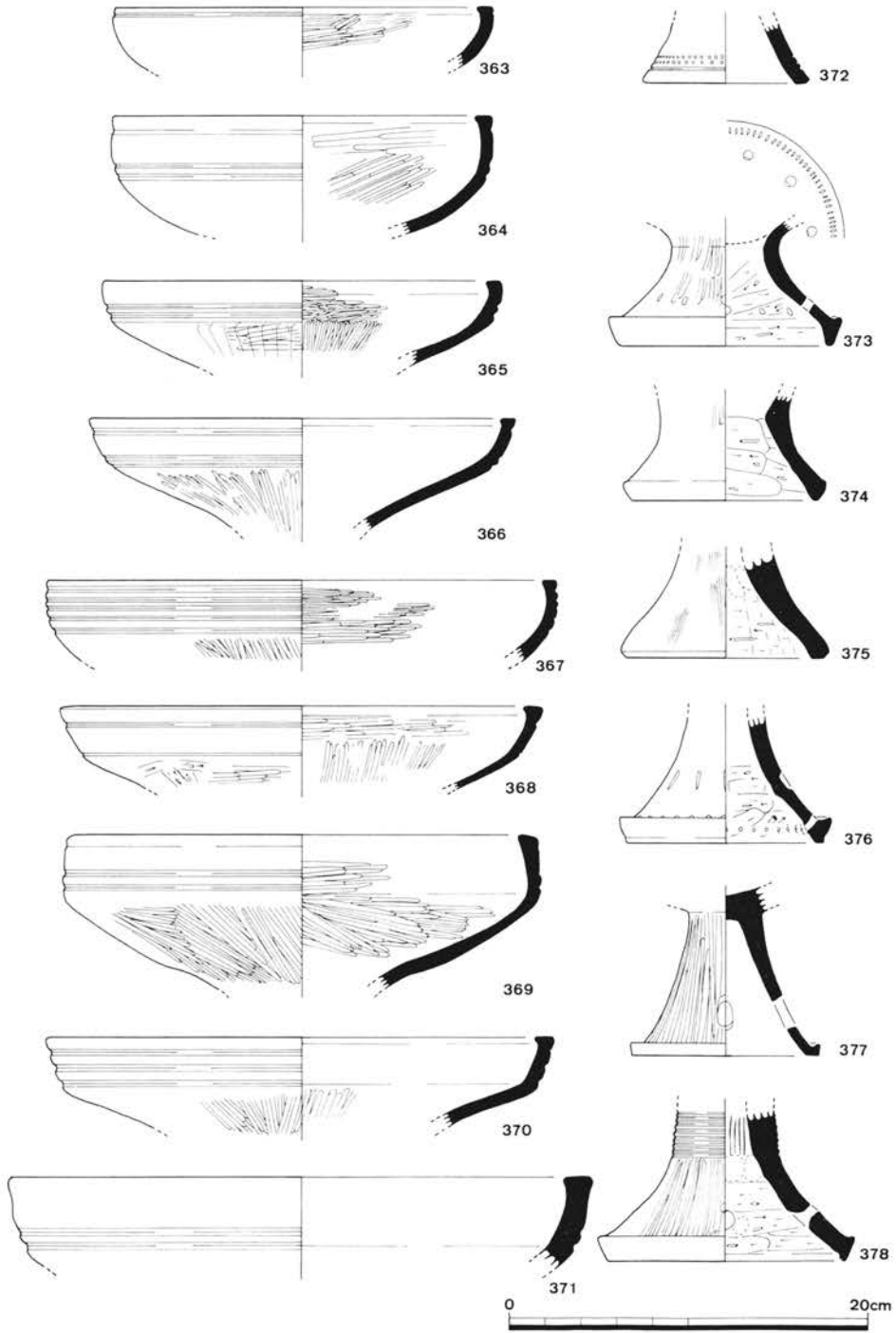
第116図 SD85211 出土遺物 3 (弥生土器 3)



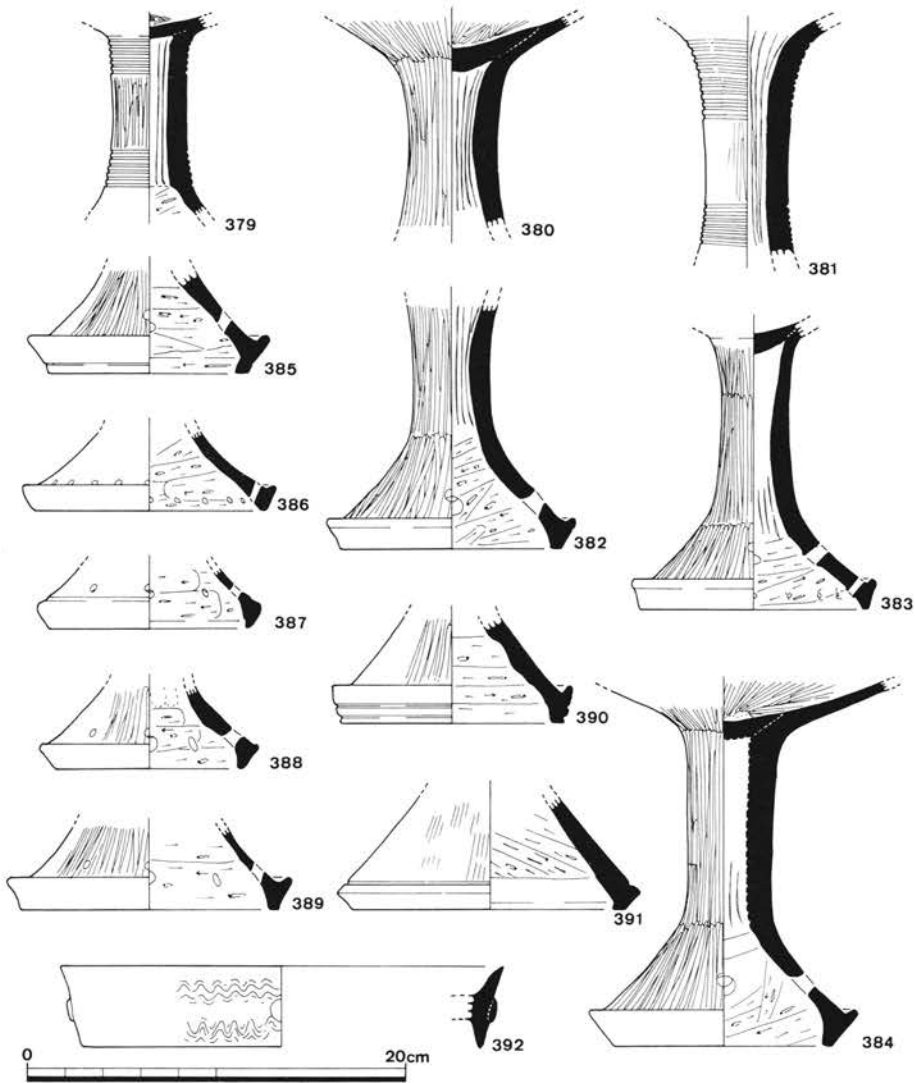
第117図 SD85211 出土遺物 4 (弥生土器 4)



第118図 SD85211 出土遺物 5 (弥生土器 5)



第119図 SD85211 出土遺物 6 (弥生土器 6)



第120図 SD85211 出土遺物 7 (弥生土器 7)

口径32.2cmを測る大口径のものまでである。高杯Aの口縁部には全個体凹線文(1条のものを含む)が施されている。その施文位置には、いくつかのパターンがある。口縁端部付近に1条施すもの(A類, 357・363), 口縁端部と屈曲部に1条~2条施すもの(B類, 364・366・368・369), 屈曲部のみに施すもの(C類, 365・371), 口縁部に面的な広がりをもって数条施すもの(D類, 356・358・359・367・370)などがある。A類は、口縁部が緩やかに屈曲するもので、杯部が浅い傾向がある。D類は、口縁部が緩やかに屈曲し、杯部が比較的深い傾向がある。胎土には精良なものと比較的粗いものがある。258は、2mm大前後の石英を含むものである。365・369には、丹が塗られている。高杯Bは、出土数が少なく、図化できた

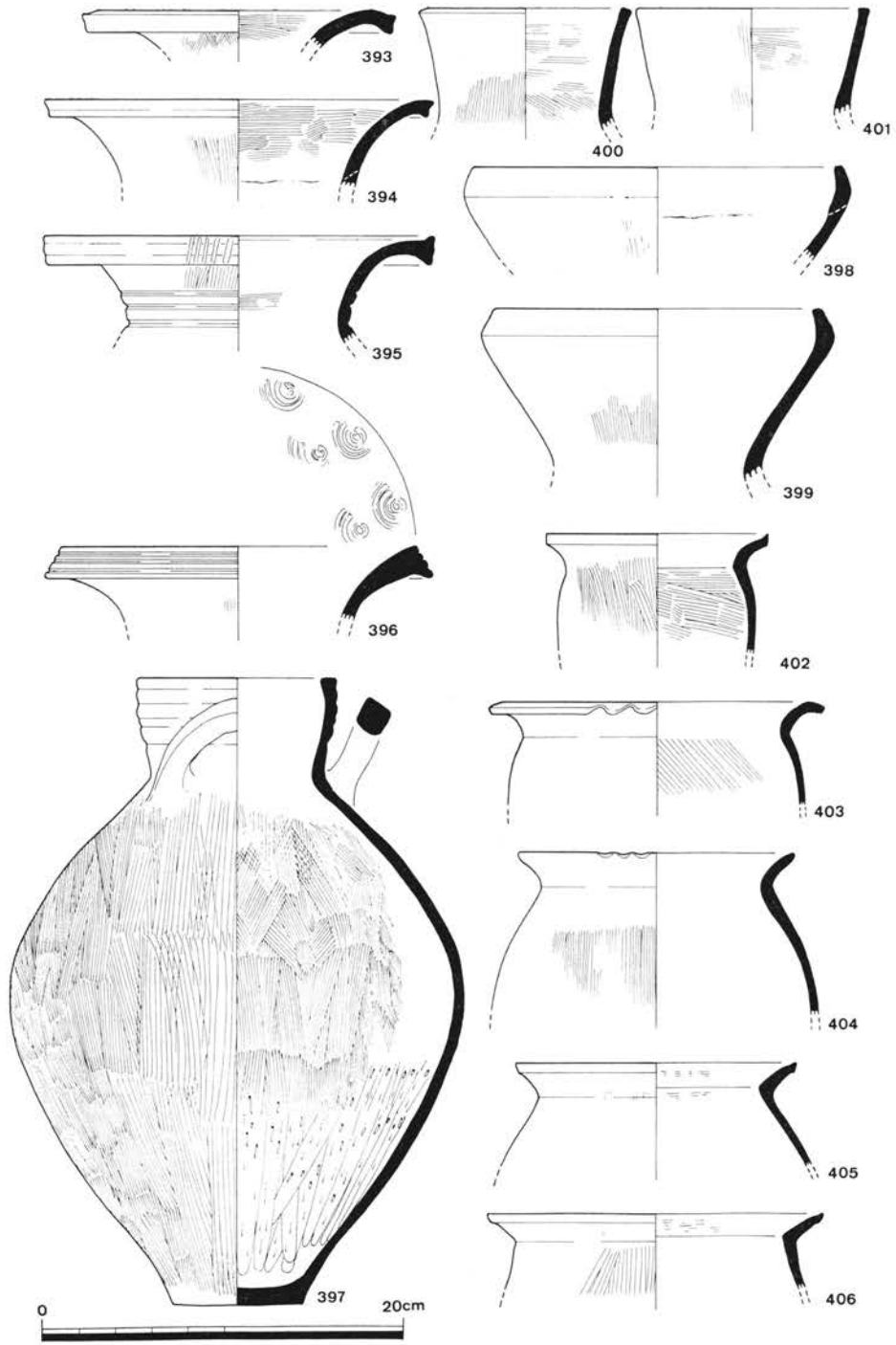
ものは高杯B₁(360)と高杯B₂(361)である。380は、全面に丹が塗られている。362・350を高杯Cとした。外面をハケで調整し、内面はハケ調整のちへラミガキを粗く施すことを特徴とする。350は、大きく開いた口縁部が屈曲して直立するもので、高杯A・高杯Dとの共通性が窺える。351は、高杯Eの口縁部と考えられる。丹で塗られている。

鉢・高杯の脚部と考えられるものに372~391がある。372~375・377は、鉢に伴うものと考えられる。372は、脚端部付近に棒状工具による2列の刺突文と凹線文を配するもので、胎土に金雲母・石英を含み淡灰褐色を呈する。373は、8個の円孔の下にへら状工具の先端による刺突文を施す。376は、脚端部の直上に36個?の円孔を穿ち、その上に貫通しないへら状工具による刺突を12か所に施す。377は、脚端部を上方にのみ拡張し、4方向に楕円形の孔を穿つものである。高杯の脚部及び脚柱部と考えられるものに378~384がある。脚柱部には螺旋状の凹線文を施すもの(378・379・381)がある。高杯の脚端部は上下に拡張する。脚裾部内面はへらケズリを行う。高杯は、脚部から口縁部まで連続して造り、杯部に円板を充填する方法を用いていることが窺える。385~391は、脚裾部のみで、不明な点も多いが、大半が高杯であると考えられる。381・383は、丹塗り土器である。

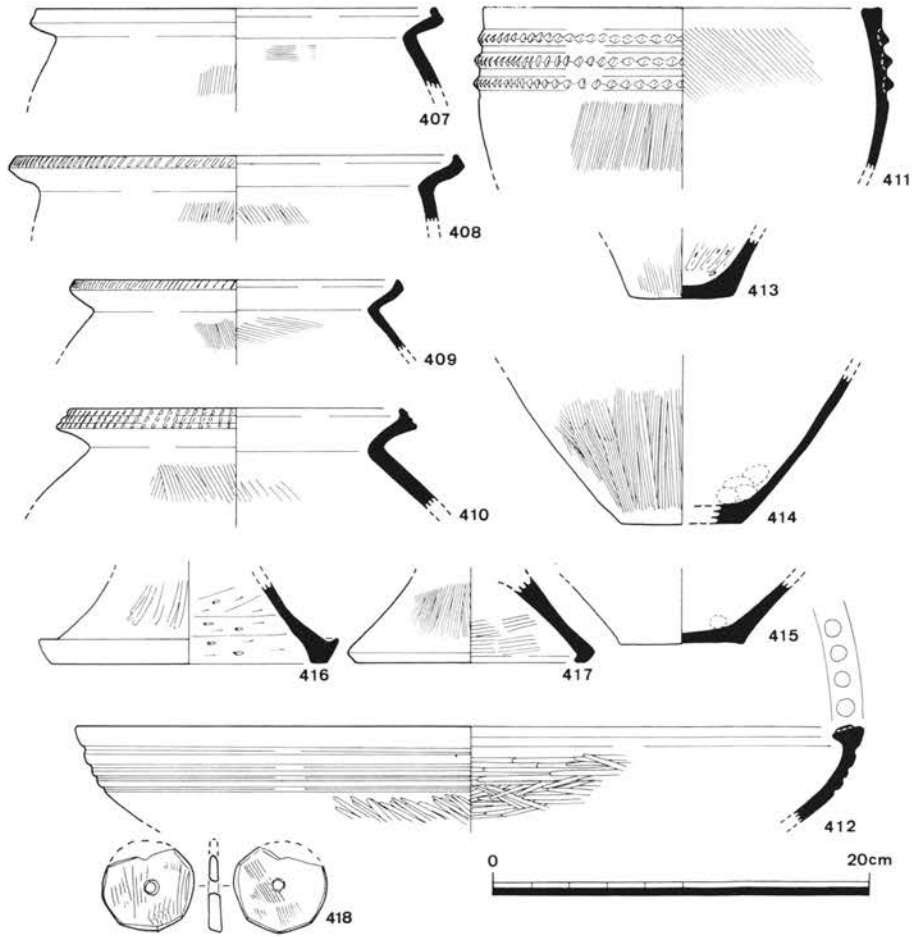
392は、器形の不明なもので、器台もしくは壺の口縁部と考えられる。上下に大きく拡張した口縁部を櫛描波状文と円形浮文で加飾する。

SD86211から出土した土器のうち、図化したものに393~417がある。前述したSD85211出土の遺物には甕Aの割合が少なかったのに対し、ここでは甕Aが比較的に目立って存在する。また、第7次調査では上層と下層にわけて遺物の取り上げを行った。遺物の多くは上層から出土した。下層から出土したものは403・408~411・415~417である。他は上層から出土した。

393は、胎土に2~3mm大の石英・長石と細かい黒色鉱物(雲母と角閃石か)を含み、淡褐灰色を呈する壺A₄である。他地域からの搬入品と考えられる。394は、在地系の赤褐色を呈する胎土(甕B₁に多く見られる)で造られた壺A₅である。395は、上下に拡張した口縁端面に凹線文を施し、5本を単位として縦方向にキザミメを施す。頸部にも3条の凹線文を施す。胎土はくさり礫・長石・石英を含み、色調は淡褐色を呈する。壺A₅である。396は、口縁端部を垂下させる壺A₇である。口縁端面に凹線文を口縁部内面に2列の扇形文を施す。赤褐色を呈する在地系の胎土で造られている。壺Bには、典型的なものは存在しないものの、壺Bを真似て作られたと考えられるもの(398・399)がある。赤褐色の在地系の胎土をもつ。壺Dには、397・400・401がある。397は、ほぼ完形に復原できた。4条の凹線文を施した直立する口縁部と倒卵形の体部をもつ。把手を1つもつ。体部外面の調整はすべてハケである。内面は下3分の1をへらケズリし、上3分の2は、ハケで調整を行う。胎土に



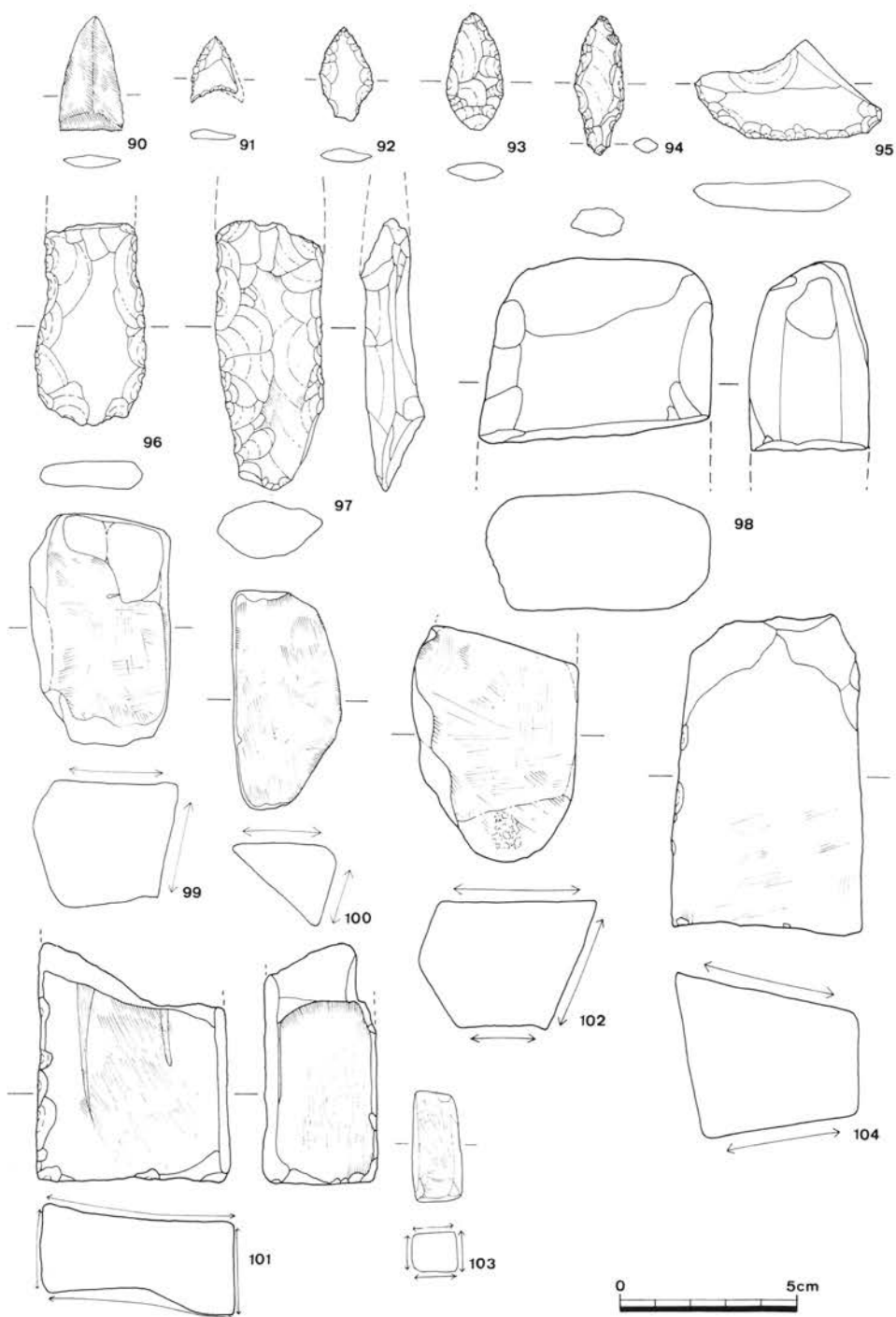
第121図 SD86211 出土遺物 1 (弥生土器 1)



第122図 SD86211 出土遺物 2 (弥生土器 2)

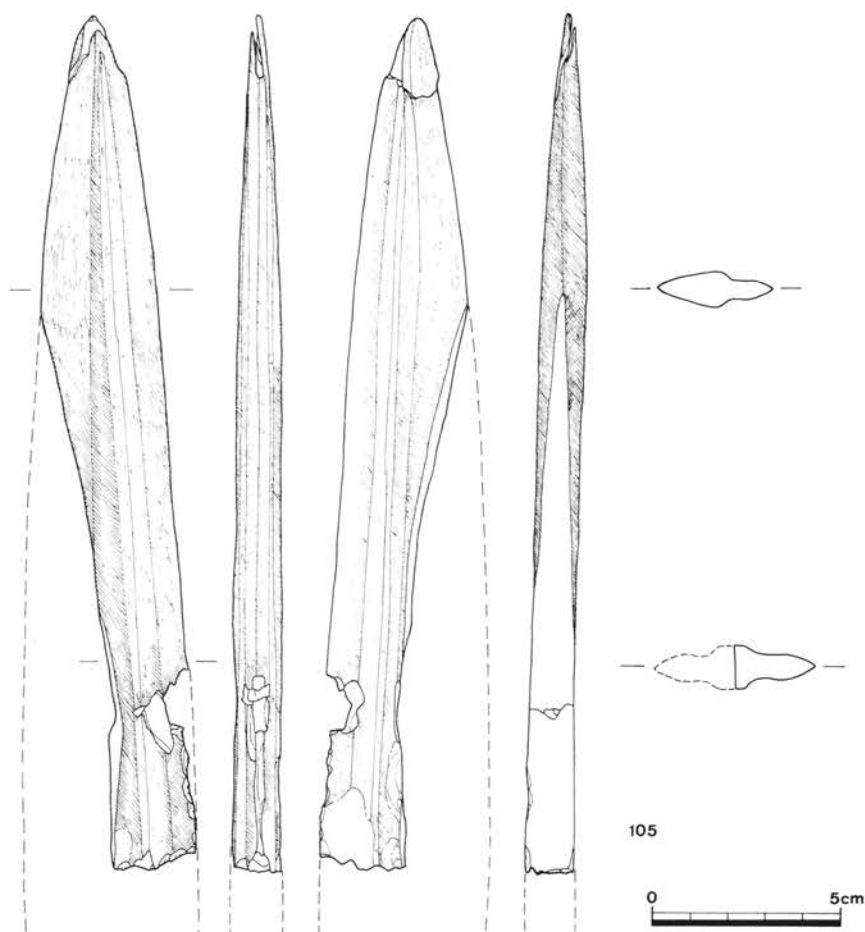
は石英・チャート・長石を含み淡褐色を呈する。400・401は、口縁部を凹線文で飾らないもので、内外面をハケで調整する。

甕には、甕A、甕B₁、甕B₂、甕B₄がある。甕Aは図化しなかったものも含めて同一の胎土で作られている。また、甕B₁も図化しなかったものも含めて、同一の胎土(赤褐色を呈する在在系)で作られている。甕Aの胎土は甕B₁の胎土に似ているが、くさり礫を含んで淡褐色を呈する。402は、口径12.4cmを測る小型の甕Aで、口縁端部を上方につまみあげる。体部内面に明瞭にハケを残す。403・404は、口縁端部の数か所に押圧による波状部をもつ甕Aである。屈曲部は比較的明瞭で甕B₁に近い器形を持つ。405・406は、甕B₁である。図化しなかったが、甕B₁のなかに口縁端部にヘラ状工具によりキザミメを施すものがある。407～409は、口縁端部を上方につまみあげる甕B₂である。色調は、甕A・B₁に比べて淡く、胎土の差も明瞭である。3個体の中で胎土の同じものはない。407は、口縁端部を



第123図 SD85211・SD86211 出土遺物(石器)

90：磨製石鎌，91～94：石鎌，95：不定形刃器，96・97：石槍，98：磨製石斧，99～104：砥石



第124図 SD85211 出土遺物 (銅剣形石剣)

上方に折り曲げたものである。408・409は、ともに口縁端面にヘラ状工具によりキザミメを施す。410は、拡張した口縁端面に凹線文を施したのちに、ヘラ状工具によりキザミメを入れる甕B₄である。胎土は淡褐色を呈し、胎土に石英・金雲母を含む。

鉢で図化したのは411の鉢B₂のみである。411は、口縁部外面に3条の断面三角形の突帯を貼り付けたのち、突帯に鋭利な工具で断面三角形のキザミメを施したものである。突帯より下半はハケで調整する。胎土に石英・雲母を含み色調は淡褐色を呈する。

412は、口径44.0cmを測る大型の高杯Aである。口縁端面に4個を単位とした円形浮文を数か所(4か所)に貼り付ける。口縁部に4条の凹線文を施す。内外面に丹以外の染料が塗られていた形跡が窺える。胎土に石英・雲母・長石を含み色調は淡乳褐色を呈する。

土製品として418の有孔円板がある。周縁部を研磨している。紡錘車として用いたものと考えられる。

SD85211・SD86211から出土した石器類には、磨製石鏃・打製石鏃・錐・削器・磨製石斧等がある。このうち、主なもののみを図化した。90は、頁岩製の磨製石鏃である。平基式の形態をとる。91は、凹基式の石鏃である。92は、有茎式の石鏃で、茎が欠損している。93は、円基式の石鏃である。94は、錐とも考えられるが、錐と考えた場合の先端部が基部に比べて特に厚いという観察が得られないため、尖基式の石鏃と考えたい。この石鏃と同様の形態をもつものが包含層内からほかに2点出土している。図化しなかったが、逆三角形を呈する錐が出土している。打製石鏃及び石錐は、無斑晶安山岩(サヌキトイド)製である。95は、一側辺に両面から2次調整を行った削器で、無斑晶安山岩製である。96・97は、細長い剥片の両縁部を2次加工している。石槍の基部付近の可能性もある。96は、無斑晶安山岩製で、97は、頁岩製である。98は、磨製石斧の基部で先端部が欠けている。磨製石斧は他にも1点破片が出土している。99～103は、砥石である。

105は、銅剣形石剣である。基部付近が欠損している。下端部分は接合したもので、21F区から出土した。すなわち、この石剣は別の場所で破砕され、たまたま、その大破片がSD85211内に混入(投棄)したと考えられる。また、この石剣は、廃棄される以前の使用中に先端部が片側面を中心に大きく破損したと考えられ、再研磨して作り直されている。そのために、先端部付近にまで、錆が1本のみ伸びている。頁岩製である。

(3) 土坑

土坑を多数検出したが、その性格は不明なものが多い。本報告では主なものを取り上げるに止めたい。

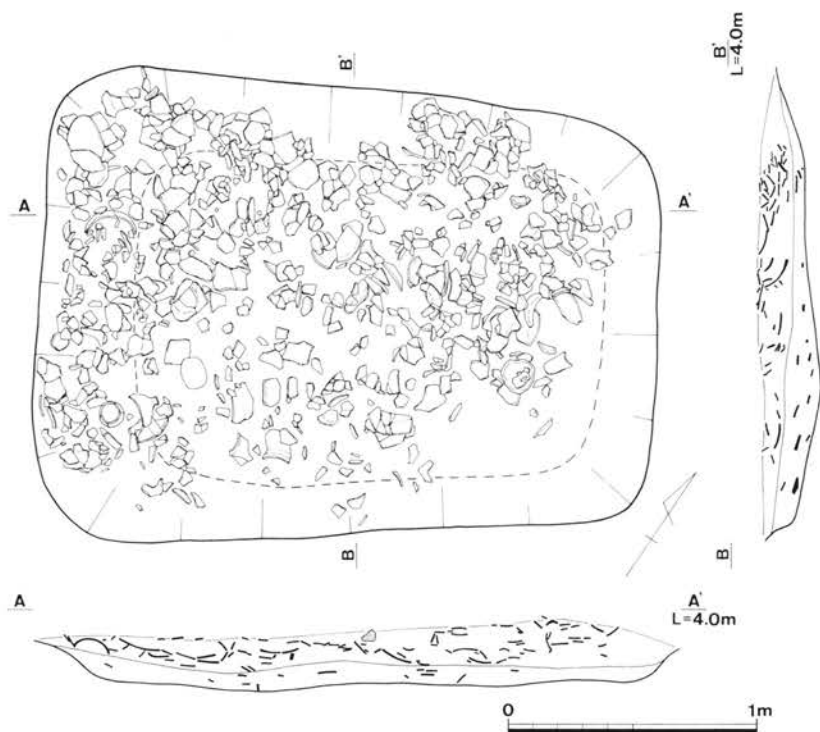
SK85201(第125～130図) 11C区で検出した長方形を呈する土坑である。規模は、長辺約2.8m・短辺約1.5m・深さ20～30cmを測る。底はほぼ平坦である。埋土は、上層と下層に分層できる。上層には多量の弥生土器が投棄された状態でぎっしり詰まっていた。下層には黒褐色粘性砂質土が堆積していた。長方形の整然とした平面形を持つことと、出土土器の大半が壺形土器であることから、その性格は単なるごみ捨て場的な存在とは考えにくい。出土した遺物は整理箱にして約10箱に及ぶ。

出土した遺物の大半が土器であるが、ほかに砥石もしくは石皿と考えられる石器(106)が出土している。

出土土器の遺存状態は極めて悪いが、遺存状態の悪さを差し引いてもこの土器群は本来破片群である可能性が高い。出土した土器には、壺・甕・鉢・高杯がある。個体数は、140個体である。その器種構成比は、壺76%(106個体 壺A₁ 35, 壺A₂ 9, 壺A₃ 17, 壺A₅ 18, 壺A₆ 2, 壺A₇ 5, 壺A₈ 1, 壺B 1, 壺D 18), 甕14%(20個体 甕B₁ 18, 甕B₂ 2), 鉢6%(9個体 鉢A₁ 2, 鉢A₂ 4, 鉢A₃ 1, 鉢C 2), 高杯4%(5個体 高杯A 3, 高杯E 1)

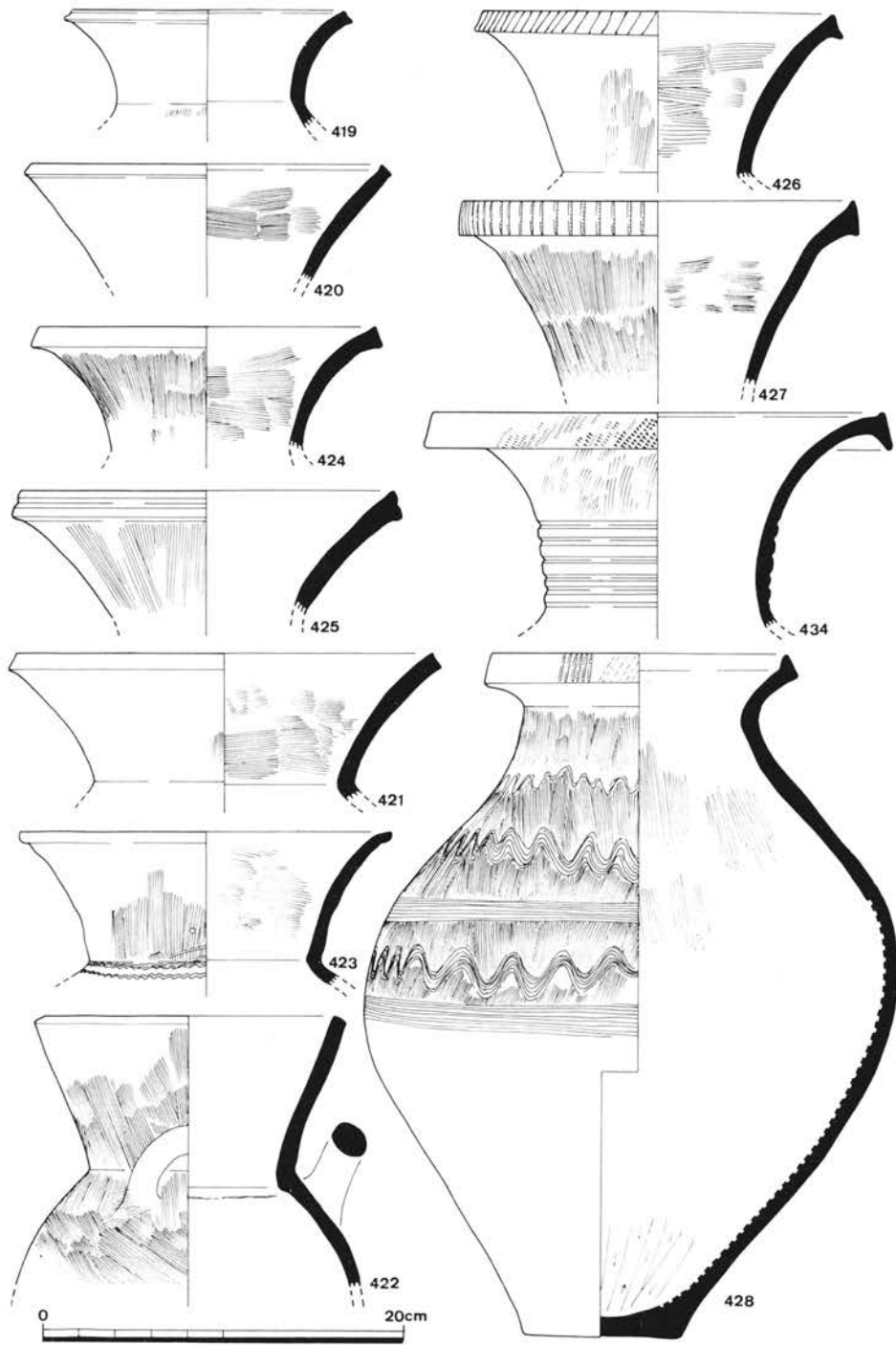
である。在地の赤褐色の胎土で作られた壺A₁・壺A₂・壺A₃・甕B₁が多く、甕Aは存在しない。壺Dも多く存在する。

壺A₁は、35個体と多数存在する。図化したものに419～422がある。胎土はすべて同じといってよいほど統一性が見られる。長石・石英の砂粒を含み褐色から赤褐色を呈する。甕B₁に普遍的に見られる胎土と共通する。口縁部内外面をハケで調整し、部分的にナデを施す。口縁部が頸部から外反気味に開くものと直線的に開くものがある。口縁部が直線的に斜上方に立ち上がる422は、把手を2つもつ。壺A₂は、口縁部を下方に肥厚させるが、壺A₁・壺A₃との区別が難しい。壺A₁と同じ胎土をもつと考えられるが、焼成不良のものが多いためか、褐色から灰褐色を呈するものが目立つ。図化したもの(423)は、頸部に楕円波状文を施す。壺A₃もその多くが壺A₁に共通する胎土をもつ。胎土の異なるものに、長石・くさり礫を多く含み灰褐色を呈する。図化したものに424がある。図化しなかったが、頸部にハケによる刺突文を施すものがある。壺A₄は、出土していない。壺A₅には、小型のものと大型のものがある。胎土はくさり礫を含んだり、石英を多く含むものがある。425は、口縁端部を下方に拡張し、拡張した端面に1条の凹線を施す。口縁部外面は、ハケを施したのちの調整を行わない。内面はハケをナデ消す。胎土には石英・長石の他に、くさり礫・頁

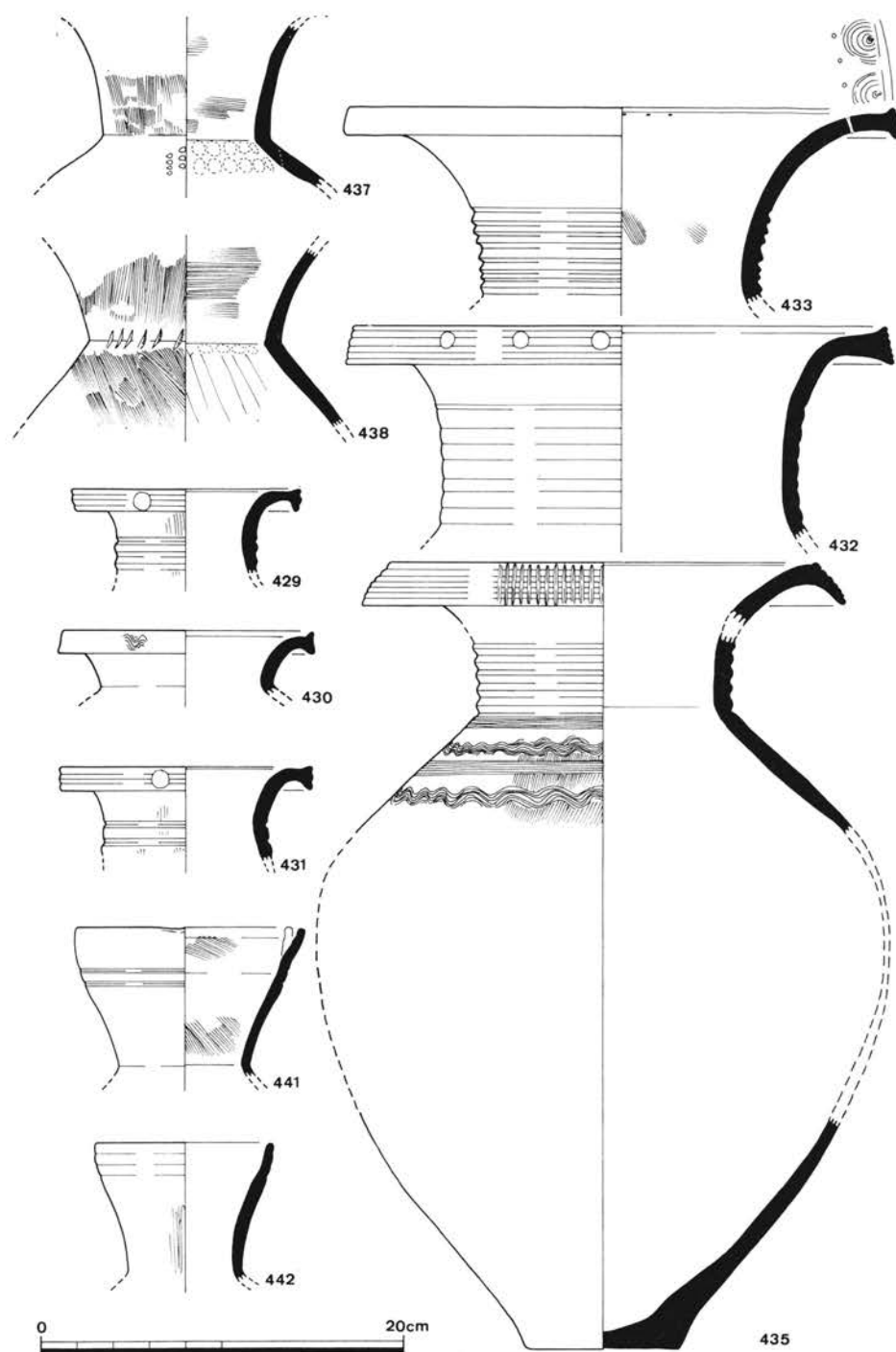


第125図 SK85201 実測図

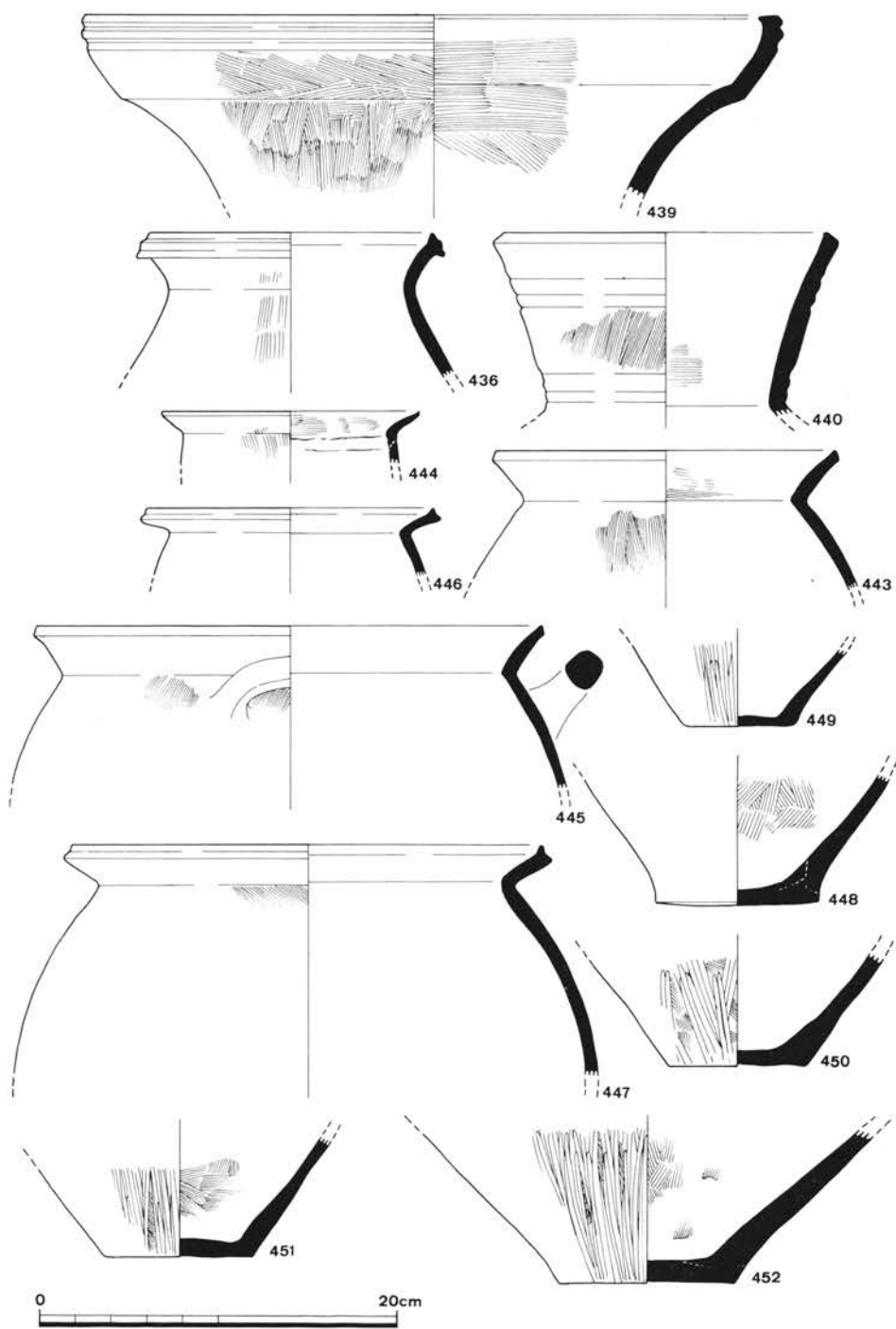
岩等を含むが、壺A₁と明瞭な差異は認められない。426は、口縁端部を下方に拡張して、口縁端面に斜にキザミメを施すものである。胎土は壺A₁のものに共通する。427は、口縁端部を上下に拡張して幅広い端面を作り出す。端面にはハケ状工具を右から左へと刺突することによって縦方向のキザミメを施すようである。胎土は、砂粒を多く含みやや粗く、石英を多く含み淡乳褐色を呈する。壺A₇の434に胎土が一致する。428は、口縁端部を上方に拡張したもので、壺A₅として分類した。口縁部が比較的短く、他の壺A₅とは器形を異にし、壺A₈に近い形態を呈する。体部に櫛描文を施す。櫛描文の構成は、頸部の方から3条の波状文・8条の波状文・8条の直線文・8条の波状文・8条の直線文の順である。拡張した口縁端面にはハケ状工具を右から左へ展開した刺突文(6~13個を単位とする)を6方向に施す。また、刺突文と刺突文の間にはヘラ状工具による斜のキザミメを部分的に施す。口径16.8cm・体部最大径29.5cm・器高32.8cmを測る。胎土はチャート・長石を含むが、色調は壺A₁に共通する。432は、上下に拡張した口縁端面と、太い頸部に凹線文を施す。口縁端面には凹線文の上から円形浮文を貼り付ける。胎土中にチャートが目立つ。429~431は、口径12~14cmを測る小口径のものである。上下に拡張した口縁部と、口径に比べて比較的太い頸部をもつことを特徴とする。429・431は、口縁端面と頸部に凹線文を施す。ともに口縁端面に円形浮文を貼り付ける。432の小型品と考えられる。色調も一致する。430も胎土がほぼ一致するが、口縁端面に櫛描波状文を施す。壺A₅には、ほかに大型のもので、口縁端面に凹線文を施すもの、綾杉文を施すもの等がある。口縁部に凹線文を施すものの中に、434と同じ胎土をもつものがある。壺A₆は、433を図化した。433は、頸部に凹線文を施す。上下に拡張した口縁端面の文様は、器壁が荒れているため定かではないが、弱い凹線文のあった可能性が高い。口縁部内面には、半円形を呈する扇形文を施す。扇形文の下に6方向の3個単位の直径2mm前後の貫通する円孔をもつ。図化しなかったものに、上下に拡張した口縁端面に3条の凹線文を施し、口縁部内面を2列の扇形文で飾る。壺A₆の胎土は壺A₁にほぼ一致する。壺A₇では、434・435を図化した。434は、垂下する口縁端部に列点文(ハケ状工具)を施し、頸部に凹線文を施す。胎土が明瞭に他の土器群と区別でき、石英を含み淡灰褐色を呈する。435は、ほぼ1個体分の破片が出土しているが、摩滅が著しく復原するには至らなかった。垂下する口縁端部に凹線文を施し、棒状浮文(十数个を単位とする)を数か所に貼り付ける。頸部には凹線文を施し、体部上半に櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配する。胎土は精良であるが、壺A₁に共通するものと考えられる。ほかに垂下する口縁部に凹線文を施すものがある。壺A₈(436)は、短く外反する口縁をもち、上下に拡張した口縁端面に2条の凹線文を施す。壺Aにはほかに、肩部に三角形刺突文による記号文をもつもの(437)と、頸部にハケによるキザミメを施すもの(438)がある。



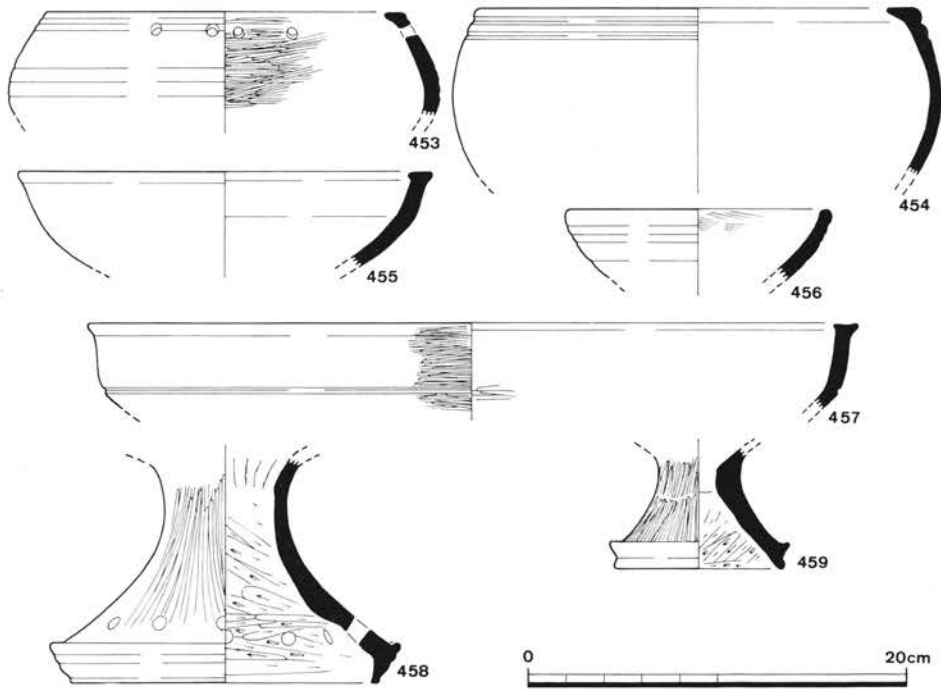
第126図 SK85201 出土遺物 1 (弥生土器 1)



第127図 SK85201 出土遺物 2 (弥生土器 2)



第128図 SK85201 出土遺物 3 (弥生土器 3)



第129図 SK85201 出土遺物 4 (弥生土器 4)

壺B(439)は、口径38.6cm・底径約15cmを測る極めて大型の壺で、器高は約1mぐらいと予想される。図化したのは口縁部のみであるが、ほかに頸部・体部・底部の破片が出土している。破片は多数出土しているが、1個体には満たない。口縁端部に2条の凹線文を施し、頸部に指頭瓦痕文貼り付け突帯を巡らす。内外面の調整は、粗いハケを用いる。胎土は2~4mm大の石英・長石を多く含み、色調は淡乳褐色を呈する。他地域からもたらされた土器である。

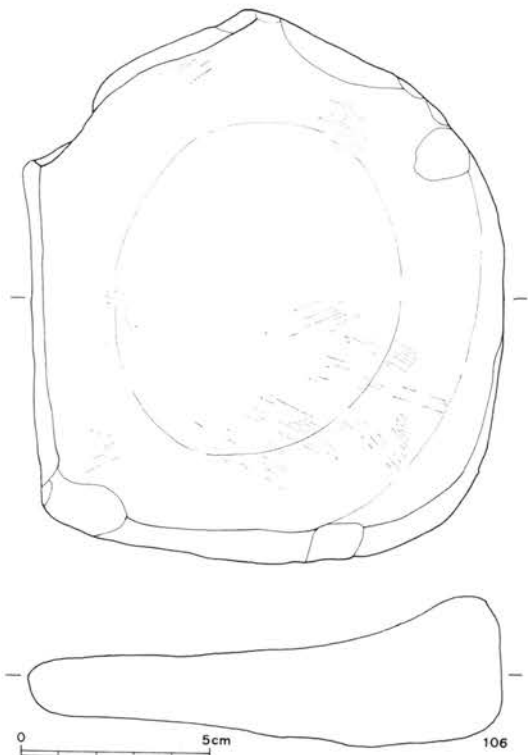
壺Dには、口径13cm前後を測る小口径(9個体)のものと、口径18cm前後を測る大口径(9個体)のものがある。図化したのは、440~442である。壺Dも胎土に統一性が高く、長石・石英を含み褐色から赤褐色を呈し、壺Aに多く見られたものに共通する。唯一胎土の違うものとして、大型の把手付きのものがある。胎土に、チャート・くさり礫を含み淡褐色を呈する。出土した壺Dは、全個体口縁部に凹線文を施す。大口径のものは、口縁部上半と、頸部付近に凹線文を施すもの(440)と、上半部のみに施すものがある。小口径のもの(441・442)は、口縁部上半のみに凹線文を施す。

甕には甕Bが存在するのみで、甕Aはない。甕の胎土は、くさり礫の目立つ446を除くとほぼ同一である。胎土に石英・長石を含み、褐色から赤褐色を呈する在地系のものである。褐色を呈するもの(447)は、石英・長石等の砂粒が小さい。甕B₁には小型のもの(444)、

中型のもの(443)、大型のもの(445)がある。445は、一对の把手を持つ。甕B₂は、出土した2個体(446・447)ともに口縁端部のつまみあげが顕著で、甕B₁に近いものである。446は、つまみあげるのに伴って(細い粘土紐で拡張したとも考えられる)口縁端面に1条の凹線を生じている。口径26.4cmを測る口径の大きなものは、頸部の屈曲が不明瞭で、体部は球形に広がる。

448は、壺の底部である。449から452は、壺または甕の底部である。

出土した鉢のうち図化したのは453~455である。453・454は、鉢A₂である。453は、口径17.2cmを測り、口縁部付近と最大径を測る位置に凹線文を施す。454は、口径20.0cmを

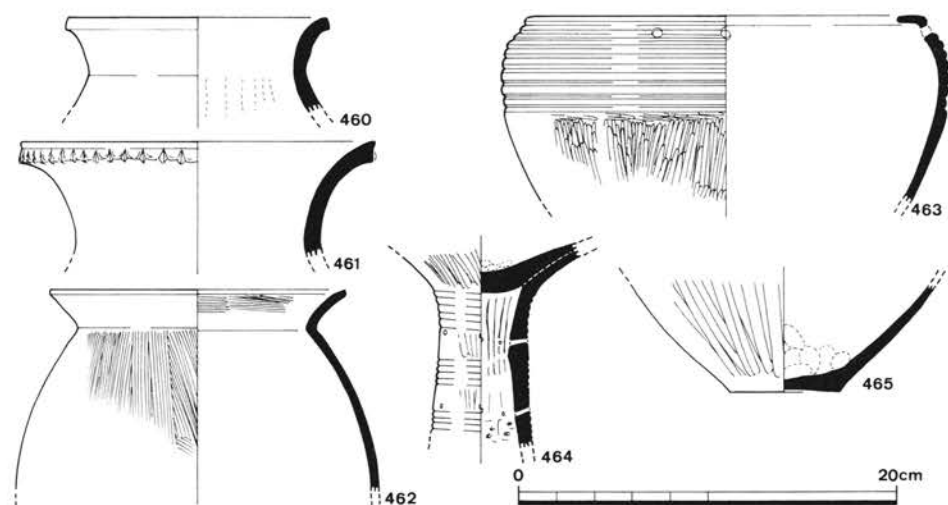


第130図 SK85201 出土遺物 5 (石皿)

測るやや大型のもので、口縁部付近に凹線文を施す。ともに、淡赤褐色を呈し、壺・甕に多く見られた胎土に一致すると考えられる。なお、453は、極めて精良な胎土を用い、外面を丹塗りする。455は、鉢もしくは高杯である。口縁端部の作り方は高杯Aに一致するものの、杯部が深く鉢状を呈する。

出土した高杯のうち図化したのは456・457であるが、他にSD85211で多く見られる高杯Aと特殊な杯部をもつ高杯Eがある。456は、口径13.2cmを測る小口径の高杯Aである。杯部が碗状を呈する。口縁部付近に凹線文を施し、内面のハケ調整を部分的に残す。457は、口径40.6cmを測る大型の高杯である。便宜上、高杯A₁として分類したが、口縁端部が外半気味に立ち上がり、器壁も薄く、高杯Dに近い様相を示す。凹線は口縁部下端に1条施すのみである。胎土は、極めて精良で、内外面を丹塗りする。図化しなかったが、高杯Eと考えられるものが出土している。口縁部は、内傾して直線的のび、口縁下端部はほぼ直角に屈曲して杯底部に至る。口縁部には片口を持つ。胎土は、極めて精良で杯部内外面に丹を塗る。458・459は、高杯もしくは鉢の脚部である。2点とも丹塗り土器である。

石器で出土したのは、石皿状を呈する砥石(106)である。表面に細い溝が数条入り、金



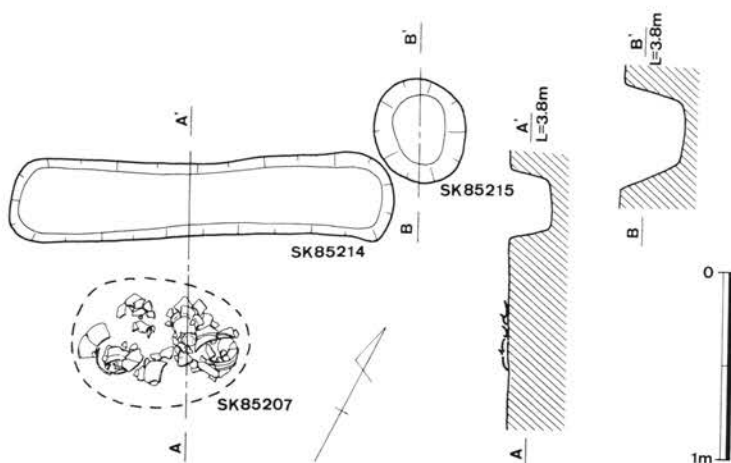
第131図 SK85206 出土遺物

属器を研磨した可能性が高い。砂岩製である。

SK85206(第131図) 13E区で検出した円形の小土坑である。比較的まとまって弥生土器が出土した。

出土した遺物には壺・甕・鉢・高杯がある。460は、短い口縁の端部を水平方向に短く屈曲させるもので、壺Cと分類した。胎土にチャート・くさり礫・石英を多く含み、淡乳褐色を呈する。461は、口縁端面下端にヘラ状工具によるキザミメを施す壺A₃である。色調は淡褐色を呈し、胎土は460に一致する。462は、この遺跡に多く見られる甕B₁である。463は、口縁部に8条の凹線文を施す鉢A₂である。口縁端部の内側水平方向への拡張は比較的長い。胎土・色

調は460にほぼ一致する。464は、高杯の脚柱部である。螺旋状の凹線文を3か所以上に施す。凹線文と凹線文の間に5方向に直径2mmの円孔を穿つ。脚柱部から杯部にかけて連続して作り上



第132図 SK85207・SK85214・SK85215 実測図

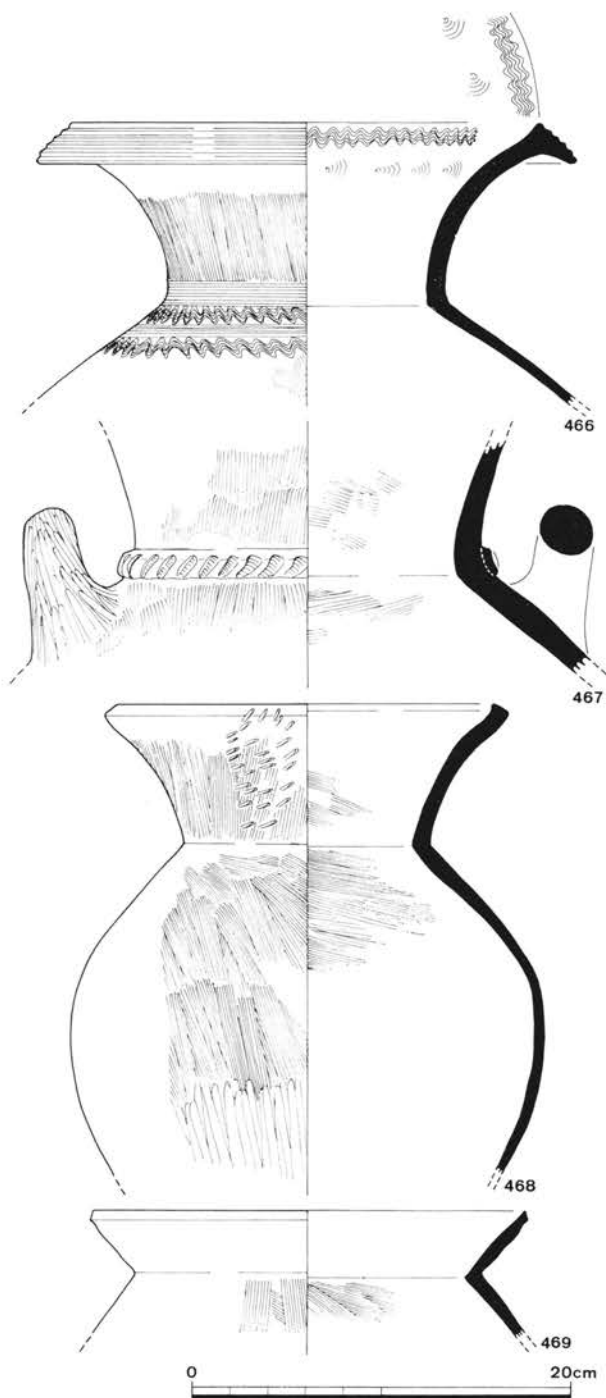
げ、杯底部に円板を充填する。
胎土に1~5mm大の石英・長石を含む。

SK85207(第132・133図)

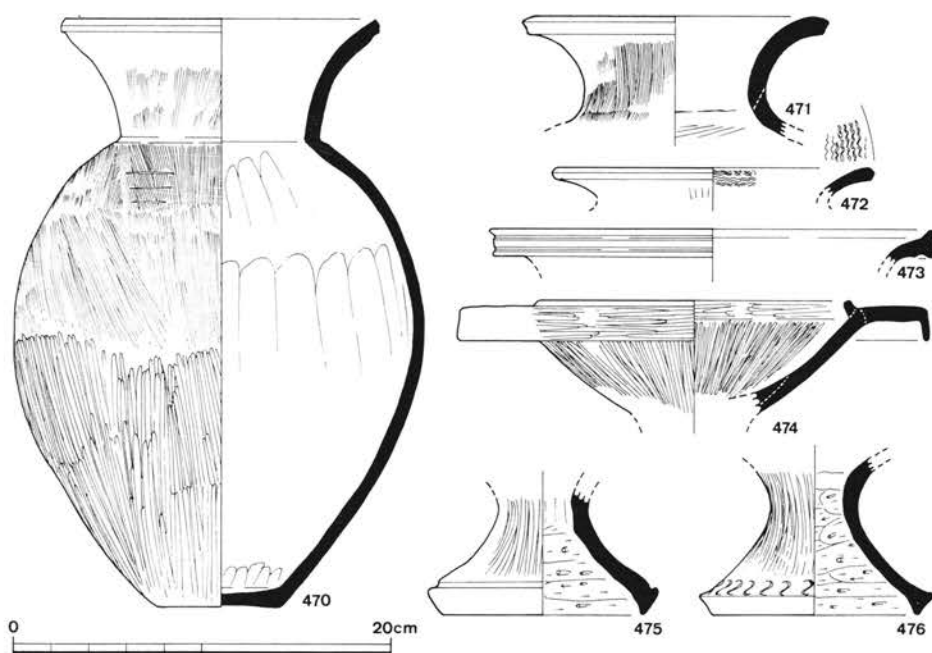
16C区で検出した浅い土坑状を呈する土器溜まりである。出土状態から土器棺的なものとも想定できたが、土器が数個体にわたり、その性格は不明である。

出土した弥生土器は、壺6個体と甕1個体である。すべて、石英・長石を含む赤褐色を呈する在地系の胎土をもつ。

466は、口縁端部を垂下させる壺A₇である。口縁端面には凹線文を施し、口縁部内面を櫛描波状文と扇形文で飾る。頸部は、高杯の脚柱部にしばしば見られる螺旋状の凹線文を施す。肩部を櫛描波状文・櫛描直線文で加飾する。口径25.6cmを測る大型品である。467は、大型の壺の頸部である。頸部径20.4cmを測る。頸部にハケ圧痕文突帯を貼り付ける。肩部に1対の把手をもつ。468は、口縁端部が肥厚する壺A₃である。口縁部外面にハケ状工具の刺突による記号文をもつ。外面は口縁部から体部上半にかけてハケ



第133図 SK85207 出土遺物



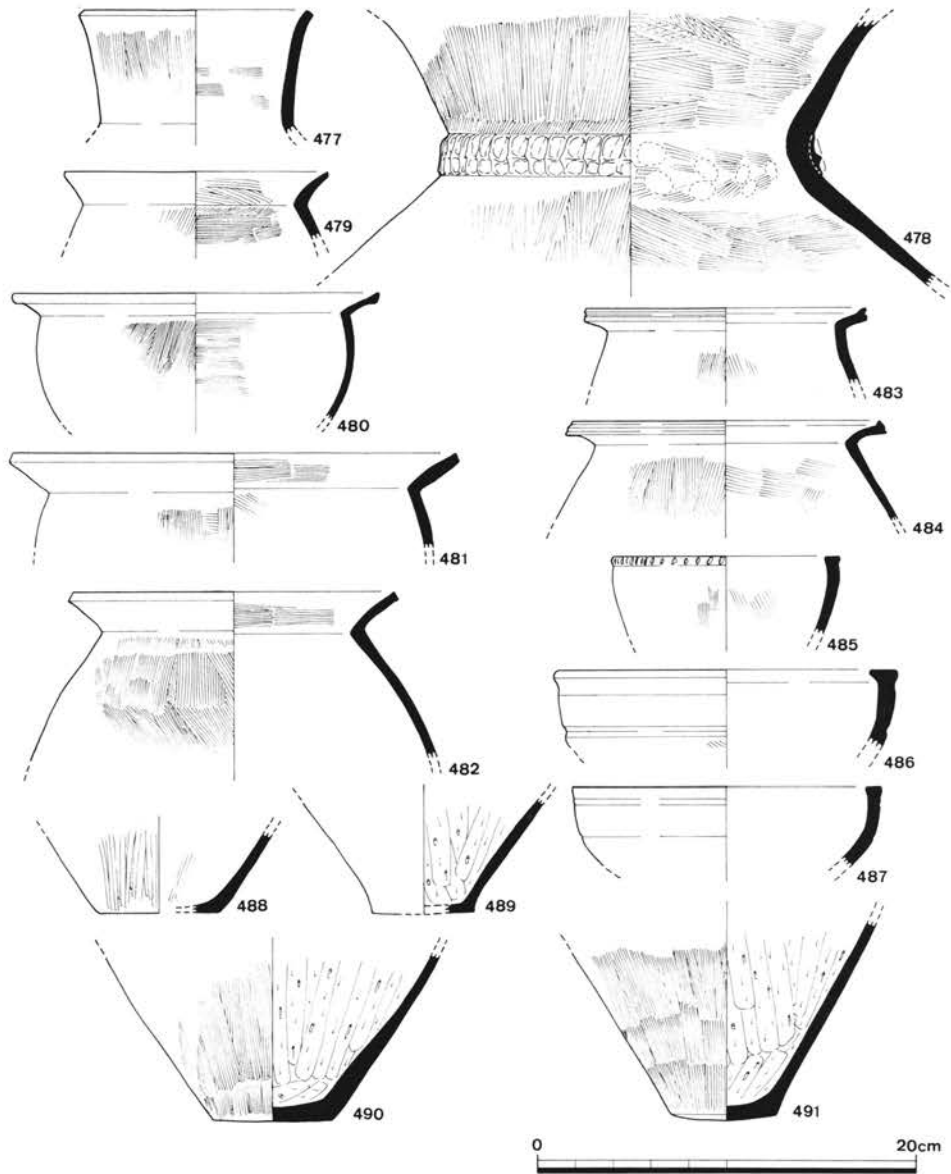
第134図 SK85208 出土遺物

を施し、体部下半を幅広の工具でヘラミガキする。内面は口縁部と頸部付近のみハケを残す。図化しなかった3個体は、いずれも468と同じ器形で、法量も大差ない。469は、口径23.0cmを測る大型の甕B₁である。

SK85208(第134図) 17G区で検出した不整形な土坑である。概報等でSD85208と報告したものであるが、本報告で土坑に訂正したい。検出面から土坑底までは約50cmを測る。470の壺をはじめ、多くの土器が入っていた可能性が高いが、度重なる雨によってその埋土の大半が調査途中で流失してしまった。埋土は1層で470の土器はほぼ正置していた。土坑は、調査地の北壁までは及んでいない。

遺物は、土器が多数出土している。主なもののみ報告する。

470は、完形で出土した壺A₁である。卵形の体部に外反気味に開く口縁部を持つ。口縁部外面及び体部外面上半をハケで調整し、体部下半を粗いヘラミガキで調整する。内面はハケ・ケズリの痕跡は観察できず、工具不明の縦方向の調整痕が観察できる。肩部にヘラ状工具を用いて施された記号文が存在する。胎土は、長石・石英を含み、赤褐色を呈する。口径16.4cm・頸部径10.6cm・体部最大径20.9cm・底径6.4cm・器高31.2cmを測る。この遺跡で出土した壺の多くは、468に代表されるような調整痕を内面に残すもので、ハケメのないハケ状工具で器壁を半乾燥の段階で薄く削り(搔き上げたのか)、全体をナデたものと予想される。このことは、器壁のより薄い甕B₁にも共通すると考えられる。471は、



第135図 SK85212 出土遺物

口縁部が470よりも外反気味に開く壺A₁である。内面頸部下半にハケメを残す。胎土には石英・長石のほかにくさり礫が目立ち、色調は黄褐色を呈する。472は、口縁部内面に楕描波状文(粗いハケ状工具を用いたものか)を施し、外面を粗いハケで調整する甕Cである。473は、口縁端部を上下に拡張し、拡張した口縁端面には凹線を施す。胎土・色調は、471に共通する。474は、水平方向に拡張した口縁端部が垂下する高杯B₂である。丹が鮮やかに残存しており、杯部内外面全面と口縁部外面に塗られていたことがよくわかる。胎土は

極めて精良で、内外面にヘラミガキをていねいに施す。475・476は、鉢もしくは高杯の脚部である。474は、脚裾部に半截竹管文をS字状に刺突するものである。

SK85212(第135図) 11D区付近で検出した深さ約20cmを測る細長い土坑である。土坑の性格は不明である。ここでは主な出土遺物のみを紹介したい。

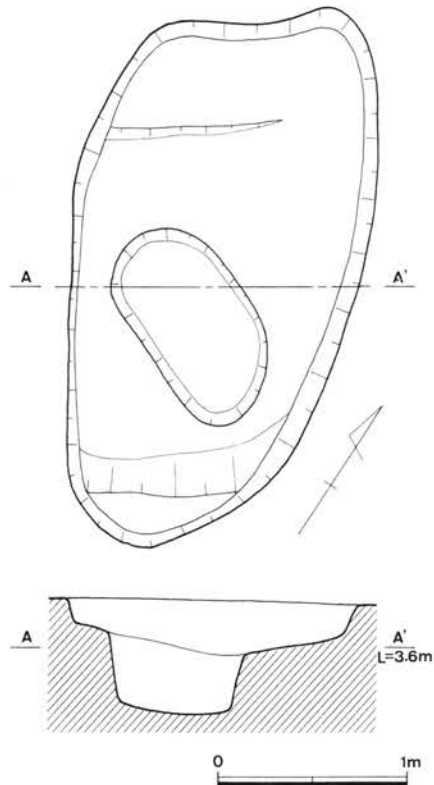
出土した弥生土器には、壺・甕・鉢・高杯があり、整理箱にして約2箱分ある。いずれも破片であり、完形に復原できるものや、意図的に投棄されたものはないものと考えられる。甕の出土量が多く。壺・甕の体部下半をヘラケズリするものが目立つ。

477は、壺Dの口縁部である。胎土に石英・長石を含み赤褐色を呈する。478は、大型の壺Aの頸部である。頸部に2段の指頭圧痕文貼り付け突帯を巡らす。胎土に石英・チャート・くさり礫からなる砂粒を含む。479～482

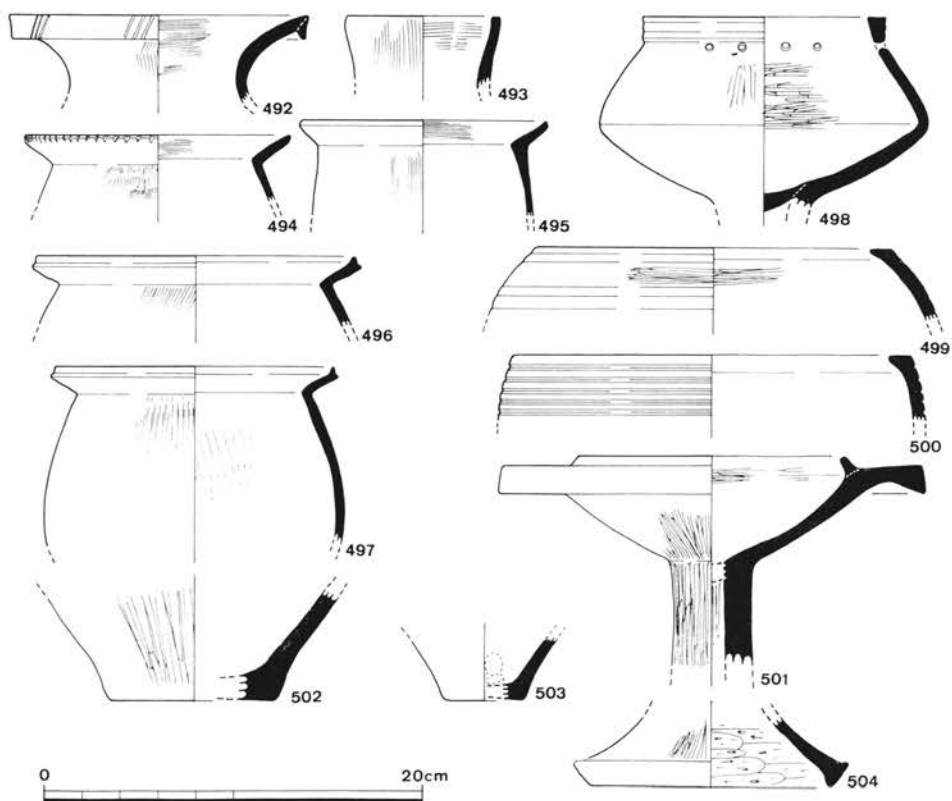
は、在地系の甕B₁である。胎土に石英・長石を含み赤褐色を呈する。480は、口径と器高が接近する鉢状(鉢D₁か?)を呈する。甕B₁の底部は、488のように外面に粗いヘラミガキを施すものが対応する。483・484は、口縁端部を上方に拡張して端面を作り出し、端面に凹線文を施す。口縁端部の拡張は小さく、甕B₂に近い形態をもつ。483は、胎土に石英・雲母を含み、褐色を呈する。484は、胎土に石英を含み、淡褐色を呈する。ともに体部内面上半にハケの調整痕を残す。底部には内面をヘラケズリするもの(489～491)が対応すると考えられる。485は、直上にのびる口縁端部をわずかに外側に拡張してキザミメを施す鉢Fである。486は、直立する口縁部に凹線文を施し、口縁端部を内側に拡張した鉢もしくは高杯である。器壁が厚い。487は、486に比べて口縁端部の拡張が顕著でないもので、高杯Aの可能性が高い。

土器以外に、石皿と146の石器が出土している。石皿は、扁平な花崗岩を利用したものである。

SK85213(第136・137図) 12D区で検出した不整形な楕円形を呈する土坑である。長径



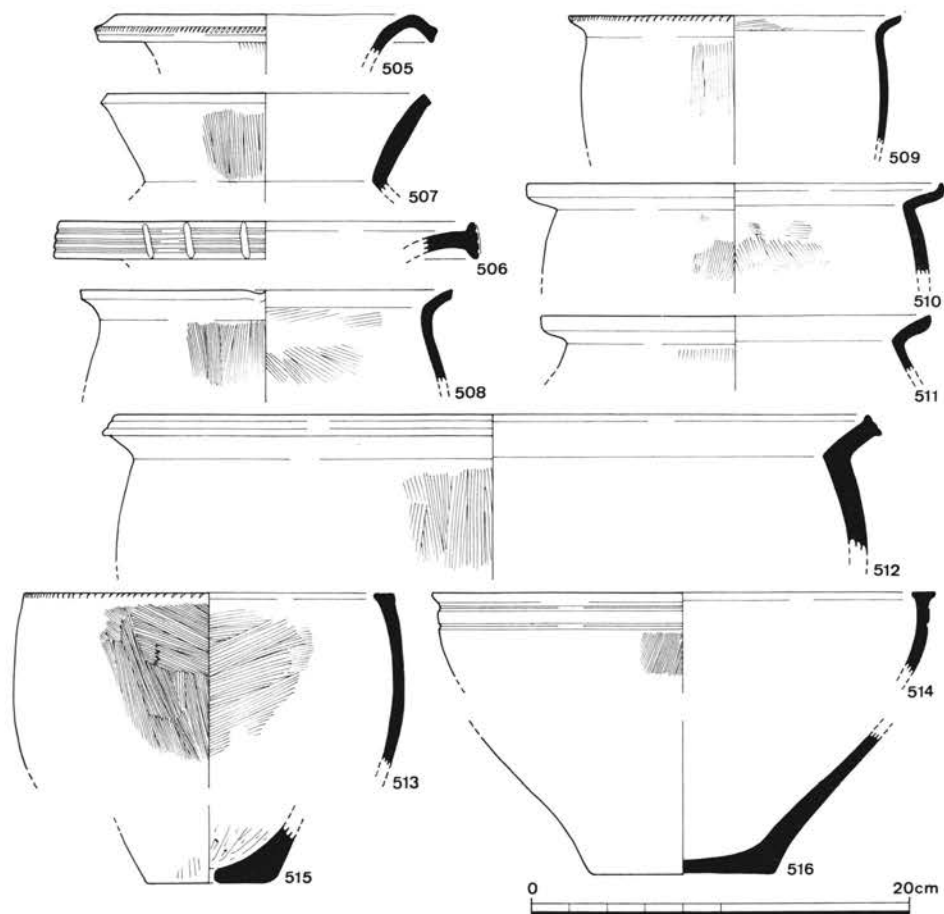
第136図 SK85213 実測図



第137図 SK85213 出土遺物

2.5m・短径1.5m・深さ0.6mを測る。土坑は、2段になっており、埋土もその段を境に明瞭に変化する。下層の埋土には炭・灰・焼土が含まれている。遺物の多くは上層と下層の境から出土した。

出土土器には丹塗り土器や黒色を呈するものがある。492は、下方に拡張した口縁端部をもつ壺A₅である。口縁端面には部分的にヘラ状工具によるキザミメ(単位は3個以上)を施す。胎土に石英・くさり礫・長石を含み淡褐色を呈する。493は、小型の壺Dの口縁部である。甕には甕B₁(494・495)と甕B₂(496・497)がある。甕B₁はいずれも石英・長石を含む暗赤褐色を呈し、口縁内面にハケを残す。494は、口縁端部にキザミメを施すものである。甕B₂は口縁端部を強くナデることによって上方に短く拡張し、端面はあたかも1条の凹線文を施したかのように見える。496は、淡褐色を呈する。498は、内傾する口縁部を外側に拡張した鉢A₃である。内傾する口縁部から続く体部は屈曲して底部に至る。脚部を持ち、底部に円板充填を行う。1対の紐穴をもつ。内外面とも丹を塗った痕跡が窺える。499・500は、内傾する口縁端部を内側に拡張した鉢A₂である。499・500ともに凹線文で飾

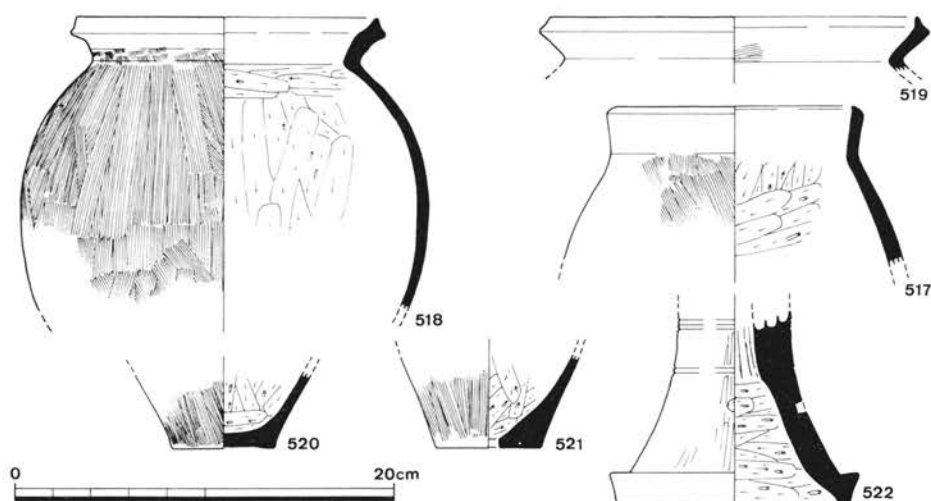


第138図 SK86207 出土遺物(弥生土器)

る。499は、外面に丹を塗ったものである。高杯には501に代表させる高杯B₁がある。501は、杯部内外面と他の部位の外面には丹を塗っている。口縁端部の垂下が顕著ではない高杯B₁は、もう1個体あり、杯部内面に、黒色のものが塗られている。

SK86207(第138図) SH86202の床下から検出した不整形な円形を呈する土坑である。ここではSH86202に先行する土器群として紹介するに留める。

出土した土器には壺・甕・鉢がある。505は、口縁端部が口縁部より下方にある壺A₄である。胎土はかなり精良で、石英・長石を含み、淡褐色を呈する。口縁端面上端にキザミメを施す。506は、口縁端部を上下に拡張する壺A₅である。口縁端面の施文は、凹線文+棒状浮文の構成をとる。胎土は精良で、チャート・長石を含み淡褐色を呈する。507は、壺A₈と分類するものである。胎土は、石英・長石を含み、色調は、淡赤褐色を呈する在地系のものである。508・509は、甕Aである。508は、口縁端部に押圧による波状部をもち、

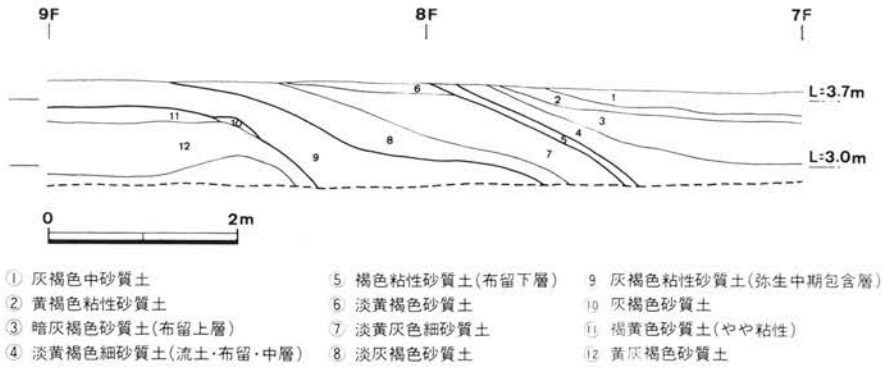


第139図 SK86208 出土遺物(弥生土器)

509は、口縁端部にキザミメをもつ。508は、在地系に近い胎土をもつが、509は、石英を含み胎土が異なる。510は、口縁端部を上方につまみあげる甕B₂である。体部内外面をハケで調整する。胎土は、石英・長石・雲母を含み精良である。511は、口縁端面をもつ甕B₃である。胎土にくさり礫・石英・チャート・雲母を含み、淡黄褐色を呈する。512は、上下に拡張した口縁端面に凹線文を施す大型の甕B₄である。胎土に2~3mm大の石英を含み、大型の壺Bに一般的に見られるものと共通する。513は、口縁端部を内側に短く拡張するものの、内外面をハケで調整する特徴から鉢Cと分類する。口縁端面にキザミメを施す。胎土は、精良で石英・長石・雲母を含み褐色を呈する。514は、高杯Aと分類した。口縁端部付近に凹線文を施す。515は、焼成後、底部に穿孔を行ったもので、甌として利用されたものであろう。

SK86208(第139図) SH86203と切り合い関係にある楕円形を呈する土坑である。SH86203が先行する。ここでは、遺物の紹介をするのみにとどめたい。

出土した土器のうち、517~522を図化した。517は、直立する短い口縁部をもつ壺Fである。体部外面をハケで調整し、内面をヘラケズリする。胎土は精良で、石英・長石を含み暗褐色を呈する。518は、口縁端部を上下に拡張した甕B₄である。幅広い口縁端面に加飾を行わない。外面をハケで調整し、内面は頸部までヘラケズリを行う。胎土は精良で、石英・くさり礫を含む。外面に煤が付着している。519は、口縁端部を上方につまみあげた甕B₂である。同一個体と考えられる体部片が出土しているが、内面をヘラケズリしている。図化した底部はいずれも外面と底部外面にハケを施し、内面をヘラケズリする。521は、焼成後穿孔を行ったものである。522は、鉢の脚部と考えられる。太い脚柱部に浅い凹線文



第140図 自然流路に伴う落ち込み土層断面図 (Fライン)

を施す。脚端部は上方に拡張するが下方には拡張しない。裾部に穿孔を行うが貫通していない。胎土に2~4mm大の石英を含み淡褐色を呈する。

その他の土坑(第65図) 前述した土坑以外に、大小さまざまな土坑を検出したが、ここでは割愛する。

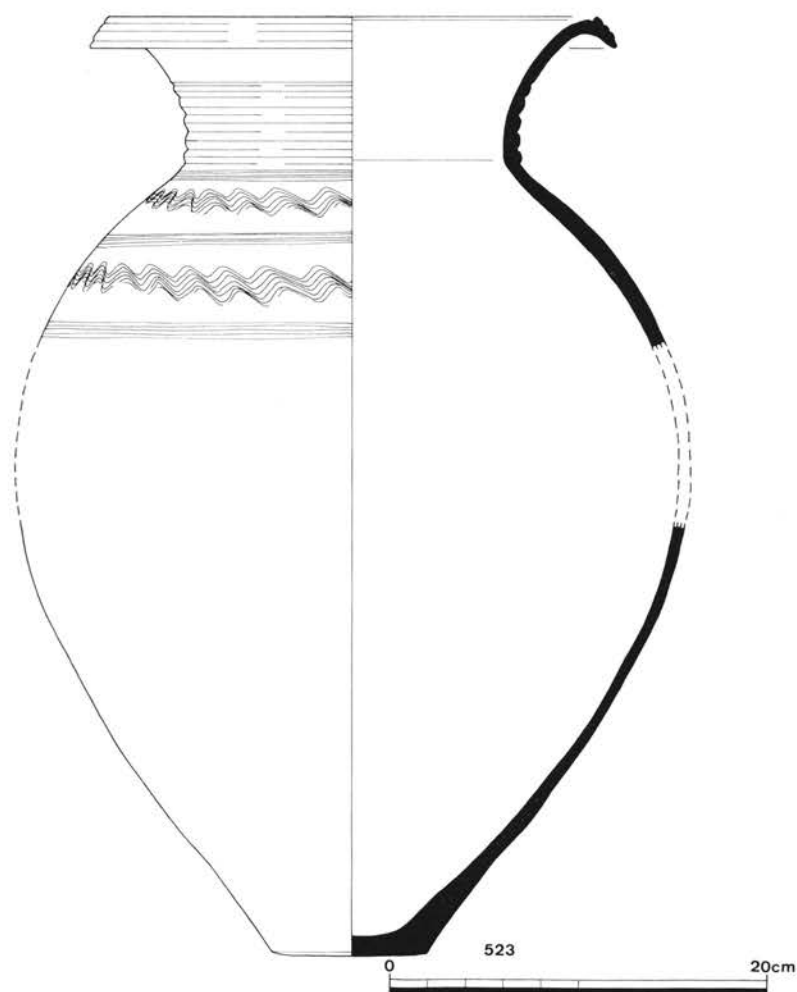
(4) 自然流路(第140~145図)

10ライン以西で、西側に広がる自然流路に伴う落ち込み(谷状地形)を検出した。この自然流路によって志高遺跡のある自然堤防は寸断されている。自然流路に伴う落ち込みは、第5次調査地区・第7次調査B地区でも検出されており、その幅は約97m(第6次調査で検出した自然流路の肩部に直交する谷地形の予想幅)を測る。谷地形内の調査を第6次調査時に1ライン付近と9G区で行ったが、砂層と浸水のため標高2.0m付近で中止せざるを得なかった。このため、調査によって自然流路についての資料はほとんど得られなかったが、工事掘削終了後の土層観察で、若干の資料を得ることができた(第21図参照)。自然流路の底は、標高0.8mよりも下にある。現在、この遺跡付近の由良川の水面高が0.4m付近であることから、この流路は埋没以前に流路として機能していた可能性が高い。水の流れていた幅は6m前後と予想される(標高0.5m付近)。この自然流路は弥生時代中期後葉にその機能を停止する。谷地形の標高1.5m付近にまで自然木からなる泥炭層が堆積しており、弥生土器が流入していた。泥炭層の上には、厚さ2.5mに達する砂層が堆積している。砂層の堆積は弥生時代中期末から古墳時代前期にかけて顕著である。古墳時代前期末にはこの落ち込みはすっかり埋没してしまう。自然流路の流れていた方向については、正確な判断を下す資料を得ることができなかったが、土層観察中、絶えず水が由良川に向かって湧き出ていたことから、北から南へと流れていた可能性が指摘できる。

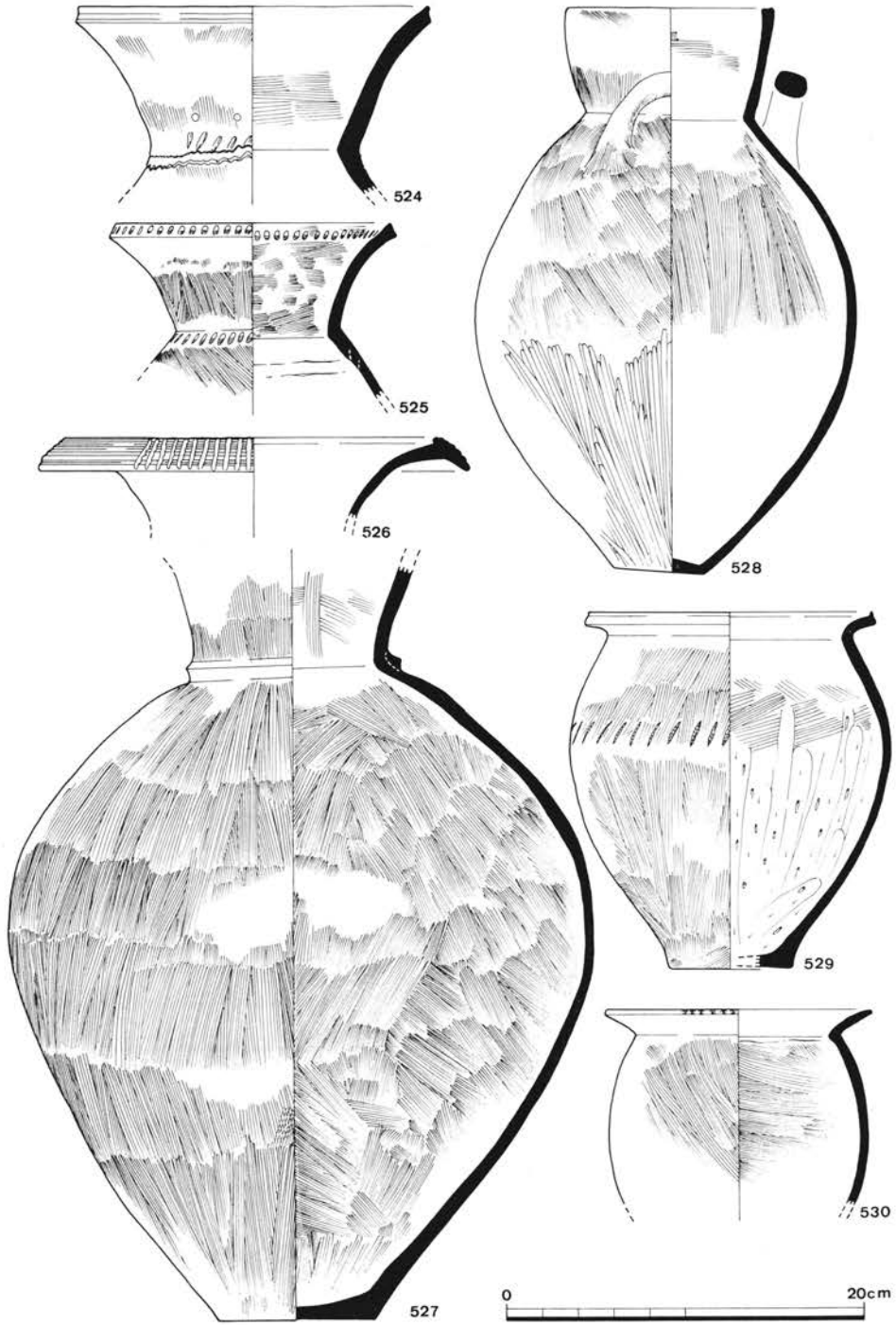
自然流路への落ち込み部分に粘性砂質土と砂質土の互層が存在し、粘性砂質土内、及び

その上面から比較的多数の弥生土器・古墳時代前期の土師器が出土した。とくに古墳時代の土器には完形のものも多く、谷地形斜面上で何かが行われた可能性が指摘できる。弥生時代の包含層は灰褐色～黒褐色の粘性砂質土である。この層は、Eライン以北にはほとんど存在せず、Gライン以南では2層に分かれ(間に砂層を挟む)、遺物も完形に近い弥生土器をはじめ豊富であった。出土した遺物には弥生土器をはじめ、石器・石製品等がある。ここではその内の主なもののみを採り上げて紹介するに留めたい。

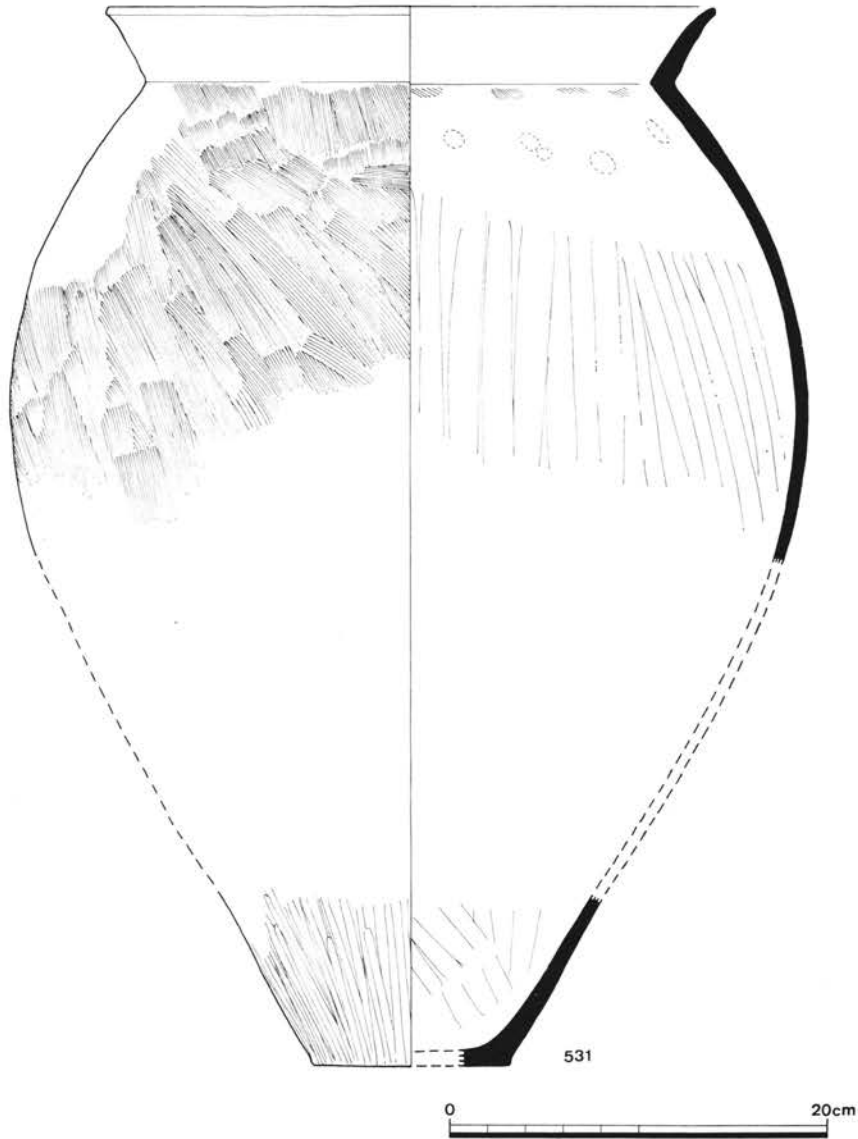
523は、口径26cm・器高推定48.6cmを測る大型の壺A₇である。垂下する口縁端面とやや太い頸部に凹線文を施し、肩部に櫛描直線文と波状文を交互に配する。胎土は大型品としては精良でチャート・石英を含み、色調は淡褐色を呈する。524は、頸部に間隔の開いた2



第141図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物1 (壺)

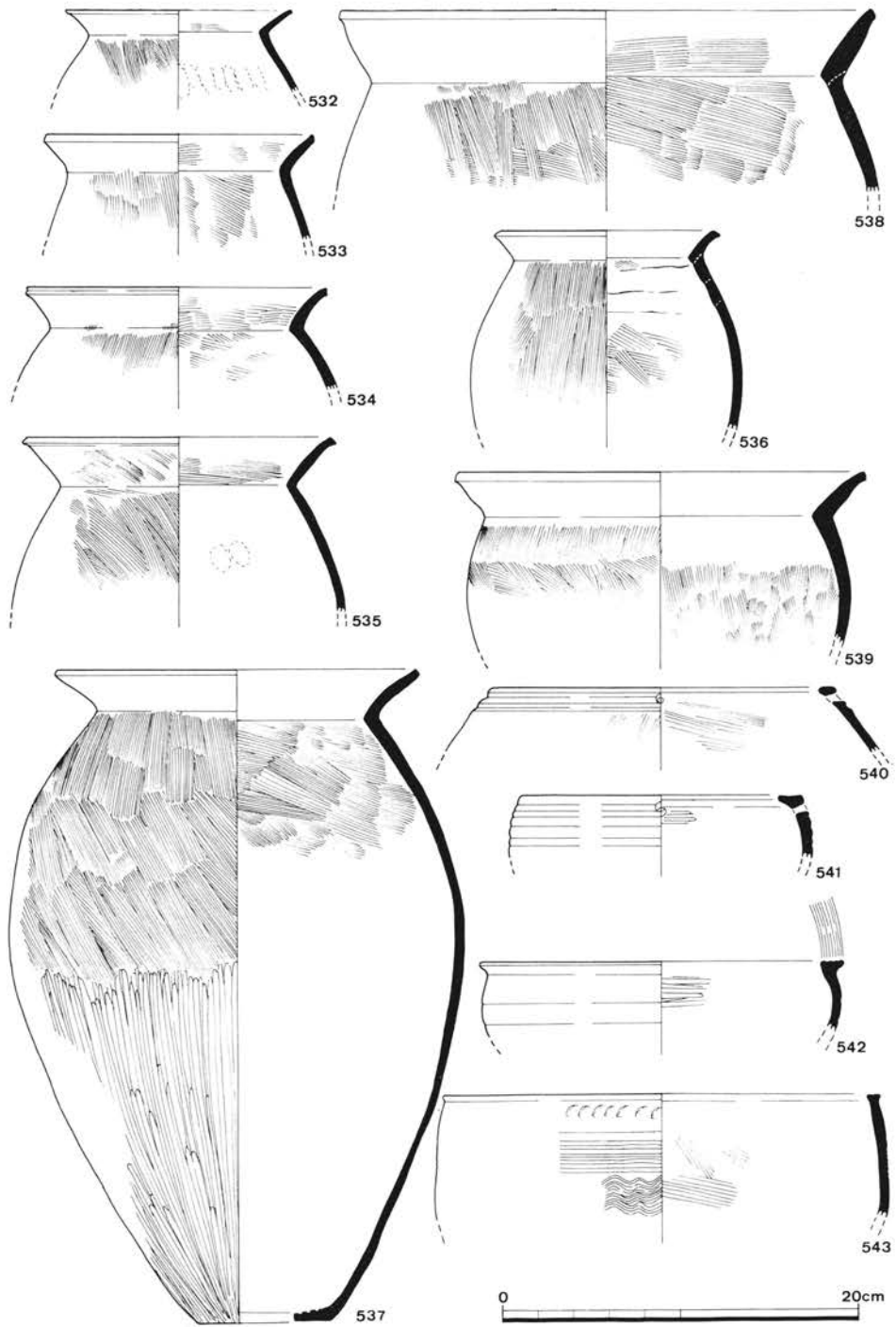


第142図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物2 (壺・甕)

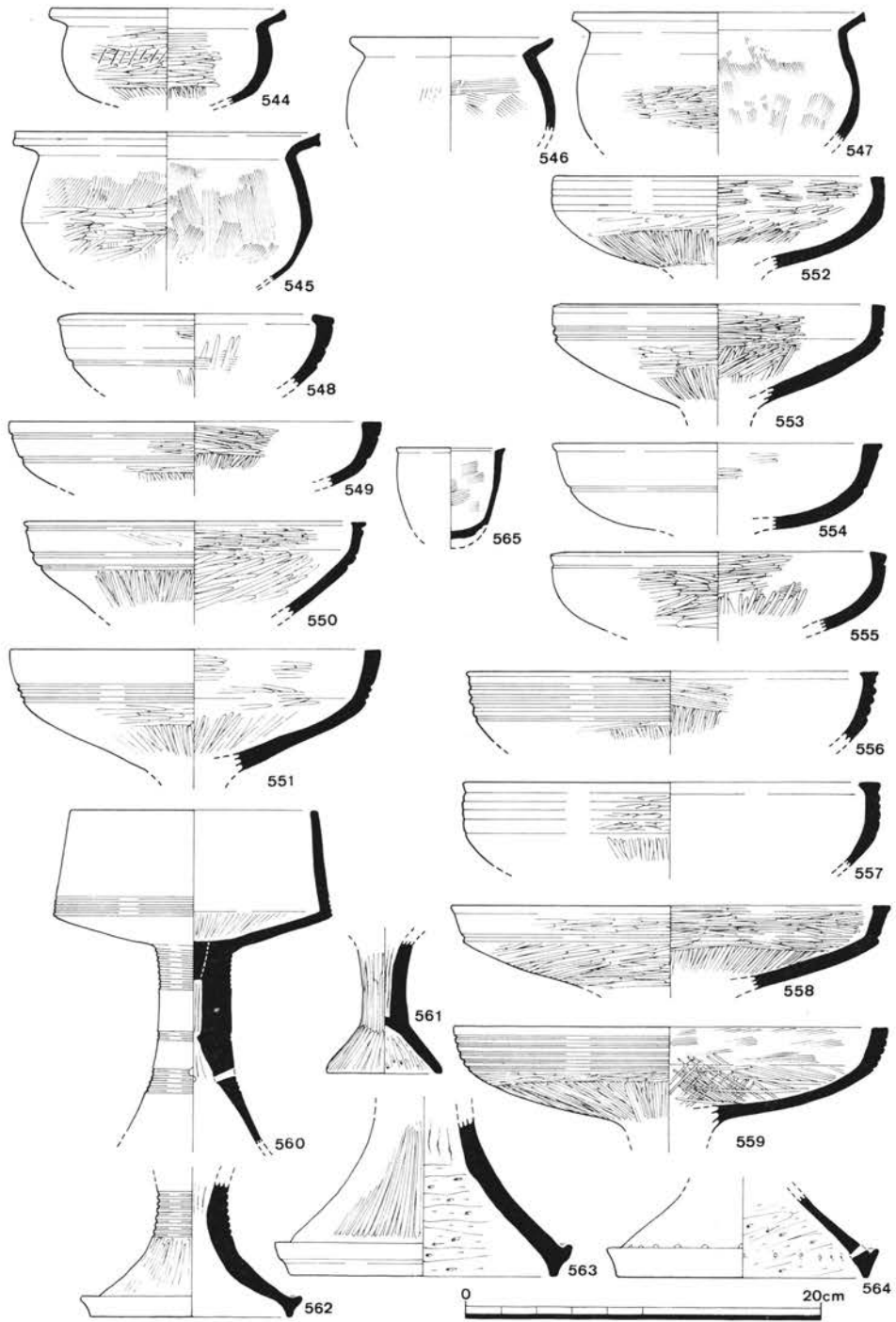


第143図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物3（壺）

条の楕描波状文をもつ壺A₃である。頸部6個単位のキザミメを施し記号文とする。その上に貫通しない円孔があり、これも記号文に属する可能性もある。口縁端面を強くナデることによって、擬凹線文的な効果をもたらしている。胎土は、SK85201の壺A₁に共通する。525は、頸部・口縁端面・口縁部内面にハケ状工具による米粒状の刺突文を施す壺A₃である。胎土に石英・くさり礫・長石を含む。526は、垂下した口縁端面に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼り付ける壺A₇である。胎土にくさり礫・チャート・長石を含み、淡黄褐色を



第144図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物4（甕・鉢）



第145図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物5 (鉢・高杯)

呈する。527は、壺Aである。口縁部が欠損しているため細分はできない。頸部に断面三角形突帯を貼り付ける。内外面をハケで調整する。チャート・くさり礫・頁岩などの砂粒を含み、淡褐色を呈する。528は、直立した口縁部をもち、最大径がほぼ中央部にある長い胴部の壺Dである。口縁部に凹線文を施さない。胎土は、甕B₁や壺A₁に多く見られる赤褐色を呈する在地系のものである。体部下半を粗くヘラミガキすることも壺A₁に共通する。肩部に把手を1つ付けるいわゆる水差し形土器である。口縁部には片口をもたない。

甕には甕B₁・甕B₂があるのみで、甕Aは出土していない。529は、口縁端部を上方につまみあげる甕B₂である。甕Aに比べ、口径の割には器高が小さく、胴部の張りも顕著である。体部外面を全面ハケで調整し、内面は、上半をハケで調整した後、下半をヘラケズリする。体部最大径のところにハケによる刺突文を施す。刺突文は、右から左へ施され全周する。胎土にチャート・石英を含み、明褐色を呈する。530～539は、甕B₁で、すべて石英・長石を含む赤褐色を呈する在地系の胎土をもつ。調整もすべて同じで、体部外面は上半をハケ調整した後、下半をヘラミガキする。口縁部内面は、ハケ調整の後ナデを施す。体部内面はハケ状工具もしくはヘラ状工具を用いて器壁を薄くしたと考えられるが、その痕跡は観察できない。ていねいにナデたのであろうか。頸部付近にハケを残すものがある。530は、口縁端部に部分的にキザミメを施す。内面にハケがナデ消されずに残っている。531は、口径32.2cm・推定器高約60cmを測る極めて大型の甕Bである。内面に粘土を掻き上げたような痕跡が残る。532～536は、口径13～16cmを測る。537は、完形で出土したもので、口径20.2cm・器高36.9cmを測る。やや長胴である。体部内面頸部付近にハケを残す。底部中央が外側から破砕されている。538は、531と同じく口径30cmを測る大型の甕である。539は、体部最大径が口縁部径を超えない。鉢D₁の可能性もある。

鉢には、540～547がある。540は、大きく内傾する鉢A₂である。口縁部に凹線文を2条施し、紐穴をもつ。胎土に石英の角礫を含み、乳白色を呈する。大型の壺Bの胎土に一致する。541は、口径15.8cmを測る鉢A₂である。胎土にくさり礫を含む。542は、拡張した口縁端部の上面に凹線文を施す鉢A₃である。最大径を測るところにも凹線文を2条施す。胎土は精良で、くさり礫などを含み、淡褐色を呈する。543は、口縁端面を内外面に拡張するが、便宜上鉢A₂とした。外面は、上からハケ状工具を用いて、左から右へ列点文・楕円直線文・楕円波状文を施す。胎土にくさり礫・長石を含み、淡黄褐色を呈する。544～547は、「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ鉢Dである。胎土はすべて等しいと考えられ、長石のめだつ極めて精良なものである。色調は、明黄褐色を呈する。544は、内外面をていねいにヘラミガキし、外面にハケ状工具による刺突文を施す。545～547は、外面をハケ調整のちヘラミガキし、内面をハケ調整の後ナデるかヘラミガキする。3個体とも頸部

のナデが著しい。545・547は、口縁に端面をつくりだす。546は、口縁端部が甕B₂に似た形態をもつものである。

高杯には、図化したものに548～560がある。548～559は、高杯Aである。高杯Aは、口径から、口径15cm前後を測るもの(548)、口径20cm前後を測るもの(549～555)、口径24cm前後を測るもの(556～558)に分けることが可能である。また、凹線文の施文位置によっても、A類(555)・B類(548～550・553・554)・C類(551・558)・D類(552・556・557・559)に分けられる。548は、口縁端部を内側に拡張し、胎土に2～4mm大の石英を含み、色調は淡褐色を呈する。551と555も胎土内に石英が目立ち、淡灰褐色を呈する。552は、胎土が極めて精良で、内外面に丹を塗る。他に丹を塗るものとして553がある。他の高杯Aは、石英・長石もしくは石英・長石・くさり礫を含み、淡褐色から赤褐色を呈する。557は、体部から口縁部が明瞭に屈曲して、直線的に短くのびる。内外面に丹を塗っていた痕跡が窺える。図化しなかったが、高杯B₂が数点出土している。560は、内傾気味に直立する長い口縁部をもつ杯部と柱状脚をもつ高杯Eである。杯部境部に浅い凹線文を施す。脚柱部には、3か所に浅い凹線文を施す。裾上部の3方向に小さな孔を穿つ。胎土は、石英を含み乳白色を呈する。杯部内外面をていねいにヘラミガキした高杯Fも出土している。鉢もしくは高杯の脚部で図化したものに561～564がある。561は、小型の脚部である。562は、螺旋状の凹線文を施す。563は、丹塗りのもので、高杯の脚部と思われる。564は、脚端部付近に24方向の穿孔をもつ。

ほかにミニチュア土器(565)がある。

土器・土製品以外に、磨製石鏃・砥石等が出土しているが、ここでは割愛する。

第3項 包含層出土遺物

包含層内から弥生時代の遺物が出土している。その量は整理箱にして約250箱で、この地区から出土した遺物の大半を占める。遺物の大半は、弥生時代の包含層から出土したが、土器に限れば、その出土層は奈良時代の包含層にまで及んでいる。古墳時代～奈良時代の包含層から出土した遺物は、上流(カキ安地区)から運ばれてきたと考えられる。出土遺物は、中期の土器が大半を占めるが、石器類も比較的多く出土している。また、少量ながら前期に含まれると思われる土器も出土している。

(1) 中期弥生土器

出土した遺物の大半を占める。壺・甕・鉢・高杯があるが、器台は存在しない。第Ⅱ様式のものも少量含まれるが、大半は第Ⅲ・Ⅳ様式併行期のものである。図化したのは、特徴的なものが多く、壺A₁～壺A₃や、甕B₁等の普遍的なものは極力図化するのを避けた。

なお、前項で紹介できなかった遺構出土のものも一部併せて紹介する。

壺形土器(第145～148図, 566～597)

566～570は、中期土器群の中で古い様相を示す。566は、やや長い頸部から大きく外反する口縁部をもつ。頸部下半に4条を単位とする櫛描直線文を施す。胎土に2～4mm大のくさり礫と石英を多く含み、淡黄褐色を呈する。567は、水平気味に開く口縁部をもつ。外面を横方向にヘラミガキする。胎土に石英・長石を含み、淡褐色を呈する。568は、水平方向に開いた口縁部端面をヘラによる沈線で上下に分割し、上半をヘラによる右下がりのキザミメで、下半を斜格子で加飾する。頸部に櫛描直線文を施す。胎土には、壺Bに通有に見られる2～4mm大の石英を含み、乳褐色を呈する。569は、SK86218から出土した無頸壺(壺E)である。6条の櫛を用いて直線文と扇形文で加飾する。570は、口縁端部を上下に拡張し、ヘラ状工具によるキザミメを施している。以上の土器群は、いずれも特徴的で、畿内第Ⅱ様式からⅢ様式古段階に併行すると考えられる。

571～597は、第Ⅲ様式新段階以降のものと考えられる。形態ごとに説明する。

広口壺(壺A)として分類したものには、壺A₁～壺A₉までである。量的に最も多いのは、赤褐色の胎土をもつ壺A₁である。口縁端部を肥厚する壺A₃には、571がある。571は、外面をハケで調整し、内面は体部下半3分の1をヘラケズリし、他をハケで調整する。胎土は精良である。口縁端部を上下に拡張する壺A₅は、施文の方法が種類に富み、結果的に多く図化することになった。図化したものに572・575～578がある。572は、頸部と口縁端面に凹線文を施す。精良な胎土をもち、暗赤褐色を呈し、比較的多く存在する。575は、やや高い算盤玉状の体部から外半気味に開いた口縁の端部を上方に拡張している。体部内面下半をヘラケズリする。外面は、上半を粗いハケで調整した後、櫛描直線文と波状文で加飾する。体部中位を横方向のヘラミガキで、下半を縦方向のヘラミガキで調整する。淡褐色を呈する。576は、壺A₄の口縁端部を上方に拡張した壺A₅である。頸部に断面三角形の貼り付け突帯をもち、拡張した口縁端面には、ハケ状工具による刺突を施す。577は、頸部が太く、やや器壁が厚い。口縁端部を主に上方に拡張する。578は、凹線文・櫛描文・突帯文で加飾する壺である。口縁端部は、主に上方に拡張し、沈線に近い凹線文を施して、3個単位の円形浮文を貼り付ける。頸部に櫛描直線文を施し、肩部に波状文と直線文を交互に配する。また、別に縦方向に扁平な突帯を貼り付け、キザミメを入れる。胎土・色調に際だった特徴は見られない。口縁部内面を加飾する壺A₆には、573・574・580がある。573は、口縁端面と内面を3条の櫛を用いて加飾する。胎土に石英・金雲母・長石を含む。口縁端部を主に下方に拡張し、口縁部内面が口縁端部より高い。頸部に3条の凹線文をもつ。574は、口縁部内面に12個の円形浮文を貼り付ける。580も口縁端部が内面よりも下方に位置し、

口縁部内面を扇形文で飾る。下方に拡張した口縁端面を、ハケ状工具の刺突による綾杉文と円形浮文で加飾する。頸部には断面三角形貼り付け突帯をもつ。胎土にチャート・石英などの砂粒を含み、白褐色を呈する。口縁端部を垂下させる壺A₇には、579がある。579は、斜下方に垂下させた口縁端面と頸部に凹線文を施す。頸部の凹線文は5条以上と多条である。胎土にチャート・石英を含み、淡褐色を呈する。581は、SD86216から出土したもので、壺A₈と分類した。頸部から外反する短い口縁部をもち、拡張した口縁端面に凹線文もしくは擬凹線文を施すものである。582・583は、口縁部内面にキザミメを施した2条の突帯をもつ壺A₉である。口縁部上端にもキザミメをもち、2個単位の紐穴を数か所(2～6か所)にもつ。頸部に断面三角形貼り付け突帯をもつもの(582)と、ヘラ圧痕文突帯をもつものがある。包含層及び遺構内から10個体前後出土している。胎土は、概ね等しく、他地域からの搬入品と考えられる。SK86205から出土したものに、内面をていねいにヘラでキザミメを施した断面三角形の突帯をもつものがあり、口縁端面に斜格子文を施しているものもある。

壺Bは、壺Aの上に直立する口縁部を足した形を呈する。明らかに搬入品と考えられる大型品(584)と、中型品(585)がある。584は、胎土に2～5mm大の石英を含み、乳白色を呈する。胎土・土器の厚さから明瞭に他の土器と区別できる。内外面をハケで調整し、内面に指頭痕を残すものが見られる。585は、直立する口縁部に凹線文を施す。胎土は、石英・長石・くさり礫を含み褐色を呈し、多くの壺の胎土に一致する。

壺Cには、ほぼ完全に復原できた586がある。短く開いた口縁端部は肥厚する。体部外面は粗いハケで調整する。器壁は全体に厚く、色調は淡褐色を呈する。出土量は少なく、すべて586に代表される法量をもつ。胎土が異なるものの中に、壺A₄に分類できるものがある。

壺Dは、壺Aについて出土量が多い。多くは、588のように、口径10cm前後を測るが、口径14cm前後を測る直線的な口縁部をもつもの(587)と、斜上方にのびる口縁部をもつ大型のもの(589)がある。ほかに、赤褐色の在地系の胎土をもつ凹線文をもたないもの(590)がある。587は、口縁端部付近と頸部付近に2条の貼り付け突帯をもつ。587のような器形を呈するものの多くは凹線文を施しており、587のような例は少ない。588は、比較的薄い器壁をもち、胎土に石英・くさり礫・長石を含み、外面に丹を塗っている。SK86215から出土した。589は、口径29.4cmを測る大型のものである。口縁端部を内外に拡張し、口縁部上端と頸部付近に凹線文を施す。胎土に石英・長石・くさり礫を含み褐色を呈する。SD85211とSH85210の境界から出土した。

壺Eには、口縁端部を外側に拡張し、外面の加飾の著しい593がある。分類で示したよ

うに壺Eと鉢Aとの区別は明瞭ではなく、593も加飾をないものとすれば、鉢A₃に分類できる。外側に拡張した口縁端部(口縁端部外面に突帯を貼り付けている)外面に凹線文を施し、その上に円形浮文を貼り付ける。肩部には、櫛描波状文と直線文を交互に配して加飾する。胎土にくさり礫・長石ほかの砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。SK85208から出土した可能性が高い。

壺Fには、極めて短い頸部をもつ592がある。体部外面をヘラミガキし、内面を頸部付近までヘラケズリする。胎土に石英が目立ち、淡褐色を呈する。

壺Gは、口縁端部を外側に折り曲げて玉縁状の口縁端部を造り出す小型の精製土器である。図化したものに591がある。内外面をていねいにヘラミガキし、胎土は極めて精良で、色調は赤褐色を呈する。10数点出土している。

近江地域からの搬入品と思われる壺Iが、数点出土している。図化したものに594と595があるが、いずれも口縁のみで器形がよくわからない。594は、頸部下半に3条を単位とする櫛描列点文を2列以上配する。受け口状口縁を呈する甕Cと胎土が同じである。595は、摩滅が著しいため、調整等が不明である。胎土は他の近江からの搬入品と異なり、淡黄褐色を呈する。

ほかに、596・597の壺がある。596は、細い頸部から口縁部が外反して、口縁端部が直立する。口縁端部外面に竹管文を施す。胎土にチャート・くさり礫・石英を多く含み淡褐色を呈する。597は、大型の壺で、口縁端部に斜格子文を施す。

甕形土器(第148・149図, 598~601・603~612)

甕形土器には、甕A・甕B(甕B₁, 甕B₂, 甕B₃, 甕B₄)・甕Cがある。壺のように第Ⅱ様式まで遡るものが甕Aの中に含まれていると思われるが、抽出することはできなかった。出土した甕のうち大半を占めるものが甕B₁で、ついで甕B₂・甕Aが多い。

甕Aは、第Ⅱ様式から続く古い形態を残したものである。頸部が緩やかに曲がり、頸部から口縁部にかけて如意形を呈する。口縁端部の形態は、キザミメをもつもの、キザミメをもち数か所に波状部をもつもの(599)、数か所の波状部のみをもつもの、口縁部に加飾を行わないものがある。量的に最も多いのは、数か所に波状部のみをもつものである。図化したもの(598)は、口縁端部の4か所に波状部をもつ。口縁端部は、ほぼ水平方向にまで開く。口縁部内面にハケを残すのを特徴とする。概して、胎土に石英・長石・くさり礫を含み、淡褐色から褐色を呈する。志高遺跡における中期中葉(畿内第Ⅲ様式併行)の普遍的な在地の甕と考えられる。599は、口縁端部にキザミメ文を施し、4方向に波状文をもつ。如意形を呈する口縁部の端部は口縁内面より下がる。型式学的に598に先行する可能性が高い。

甕B₁は、志高遺跡出土の甕の大半を占め、口径の小さいものから大きなものまで存在するのは先に述べたとおりである。胎土に統一性が高く、ほとんどが赤褐色を呈する石英・長石を含む。志高遺跡における中期後葉(畿内第Ⅳ様式併行)の在地の甕である。図化したものに600・601・605がある。600は、中型のもので、口縁部内面と体部内面頸部付近にハケを残す。601は、口径26cmを測るやや大型のもので、土器溜まり(SX86222)から出土した。605は、口径35.0cmを測る大型のものである。甕B₁は、鉢D₁(602)との差異が口縁部のみでは不明瞭である。また鉢D₁は、多くの場合甕B₂と共通する。差異は、鉢D₁の場合体部最大径が口径を超えないこと、外面下半をハケで調整することである。

甕B₂には、さまざまな胎土をもつものがあり、形態・調整にも統一性が顕著ではない。体部内面をヘラケズリするものが多くを占める。図化したものに603・604がある。603は、同一個体と考えられる底部が同地点で出土したもので、図面上で復原した。体部外面を全面ハケで調整し、内面は上半をハケで、下半をヘラケズリする。底部には焼成後、穿孔する。604は、口径33.4cmを測る大型のものである。

甕B₃は、出土量が少なく図化したものはない。口径の大きなものが目立つ。

甕B₄については、第7次調査区を中心に出土している。口縁端面に凹線文を施すもの、口縁端面を加飾せず頸部に圧痕文突帯をもつもの、口縁端面に凹線文を施し、頸部に圧痕文突帯をもつもの、加飾しないものがある。

甕B₅は、播磨以西からの搬入品と考えられる。611は、口縁端部を斜め下方に垂下させ、口縁端部に凹線文を施す。頸部下半をヘラケズリする。胎土に2~5mm大の石英を含むが、壺Bの胎土とは異なり、淡黄褐色を呈する。

甕Cは、近江系の甕である。その出土点数は20点に満たない。内外面に櫛と粗いハケ(櫛もハケも同一工具か?)により装飾的效果を持たせている。受け口状口縁をもつもの(607~610)ともたないもの(606)がある。606は、口縁部内面に櫛状工具による緩やかな波状文を施すが、装飾的效果に乏しい。607では、頸部付近に櫛描直線文が観察できる。壺になる可能性がある。この土器のみ、他のものに比べ胎土が粗く、石英・長石・金雲母を含んでいる。608は、その全容がほぼわかる。口縁端部の極めて狭い部分に櫛描波状文を施している。口縁部を含めて外面は粗いハケで調整する。頸部から下は、ハケの上から平行直線文を施すが、施文の単位が数条(2~3条)の櫛であるのか、1本ずつ引いているのか不明である。口縁部内面を粗いハケで調整する。609は、口縁部内面に3条単位の櫛による列点文を施し、受け口部外面下半に波状文を施す。610は、内外面を粗いハケのみで調整している。これら近江系甕の粗いハケと櫛は同一原体によるものであろうか。607以外、その胎土は、等しく、精良で淡褐色を呈する。

鉢形土器(第150図, 613~627)

鉢形土器も多種存在している。鉢形土器のうち最も多いのが鉢Aである。

鉢A₁は、内湾する口縁部が拡張せず、概して、加飾的效果をもたないものが多い。また、その多くは赤褐色を呈する在地系のものである。特にここでは図化しなかった。

鉢A₂は、鉢の中で最も多い器形である。613のように、体部が明瞭に屈曲するものが多い。613は、屈曲部に2条の凹線文をもつ。いわゆる台付き無頸壺と呼ばれる器形を呈する。胎土にはわずかに石英を含むが、極めて精良である。淡褐色を呈する。

鉢A₃は、口縁端部を外側に拡張する。614・615を図化した。614は、体部が張らないもので、鉢Cに属する可能性がある。拡張した口縁端部と3条の凹線文の間にヘラ状工具による浅いキザミメをもつ。口縁部以外の内外面にハケを残す。胎土に石英・長石をわずかに含むものの、概して精良である。淡灰褐色を呈する。615は、口縁端部を外側に拡張する以外、全く加飾的效果をもたない。内外面をていねいにヘラミガキする。胎土は極めて精良である。

鉢B₁は、内傾する口縁部の外面に突帯文をもつ。616を図化した。その出土数は極めて少ない。616は、大きく内傾する口縁部に3条の突帯文を貼り付けたもので、突帯の上には、斜のキザミメを施す。器壁は厚く、胎土に石英・チャート他を含み淡褐色を呈する。3本目の突帯の下に櫛描直線文状のものが観察できる。

鉢B₂は、出土量こそ少ないが、普遍的に見られる。617は、わずかに内傾する口縁部の外面に断面三角形の突帯を3条貼り付ける。突帯の上にはヘラ状工具による浅いキザミメを施す。胎土は粗く、1~2mm大の石英を多量に含む。

鉢Cは、口縁部がほぼ直立する。図化したものに618と619がある。618は、鉢Cと分類したが例外的なものである。上げ底状の小さな底部から大きく開く体部をもち口縁部が短く直立する浅い器形をもつ。把手を1対もつ。他に出土例がない。内外面をていねいにヘラミガキし、淡褐色を呈する。619は、深い器形を呈し、口縁端部にキザミメを施す以外に、凹線文・ヘラ圧痕文突帯・ハケ状工具による刺突文(列点文)を施す。内面をハケで調整する口径29.8cmの大型品である。胎土に石英・くさり礫を含み淡褐色を呈する。

小型の鉢Fでは、620・621を図化した。620は、甕B₁に共通する口縁部をもち、外面をヘラミガキする。内面はハケで調整し、器壁は極めて薄い。胎土も甕B₁に共通し、赤褐色を呈する。622は、上げ底状の底部をもち、口縁部を短く屈曲させる。外面をヘラミガキし、内面はヘラケズリを行った後、頸部付近をナデている。外面に爪の圧痕による文様を施す。器壁は比較的厚く、胎土にチャート・石英の砂粒を含んで淡褐色を呈する。

鉢Gは、受け口状口縁をもつもので、622・623を図化した。622は、把手をもち、口縁

部を除いてその形は後期に見られる鉢によく似ている。底部に円板充填を行い、突出した小さな平底を造り出す。胎土は極めて精良で、内外面をていねいにヘラミガキして、全面に丹を塗る。623は、ハケ状工具の刺突による綾杉文を口縁部と体部に施文する。胎土に長石ほかを含み淡褐色を呈する。

鉢の脚部と思われるものに624～627がある。624は、鉢A₁もしくは鉢A₂を伴って台付き無頸壺になるとと思われる。短い脚柱部に凹線文を施し、脚裾部には20数個の円孔を穿つ。胎土に石英・長石を含み赤褐色を呈する。625は、大型の脚部である。太い脚柱部に10条の凹線文を施す。脚裾部に8個の円孔を穿つ。胎土は、やや粗く、石英・長石・くさり礫等の砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。626は、脚裾部に円孔をもたない。鉢脚部の多くは1～24個の円孔をもつものが多く、626のような例は少ない。胎土に1～2mm大の石英・チャートを多く含み、淡黄褐色を呈する。627は、直立する長い脚端部の7方向に透かしをもつ。鉢脚部の中で極めて特異な例で、出土例はこの1点のみである。脚柱部に2個を単位とする1対の円孔と、7条の凹線文をもつ。脚裾部には9方向に円孔を穿つ。胎土は、比較的精良であるが、石英・長石を含み、在地系土器に似ている。

高杯形土器

出土した高杯には高杯A・高杯B・高杯C・高杯Eがある。高杯Aが圧倒的に多く、高杯Bは、高杯の中で1～2割程度を占めるにすぎない。高杯C・高杯Eは、極めて量が少ない。

高杯Aは、高杯の約8割を占め、杯部の形態にもいくつかの種類があるように思われる。628～631を図化した。628は、口縁部の屈曲が特に著しい。また、口縁部は、直線的に上方にのびる。内外面をハケで調整した後、ヘラミガキを行っている。外面に丹を厚く塗っている。胎土に特異性は見られず、長石を含み褐色から赤褐色を呈する。629は、深い杯部をもつ。口縁部はやや内湾する。口縁部上端と下端に凹線文を施す。胎土にチャート・長石を含み、淡褐色を呈する。SK85208に伴う可能性がある。630は、緩やかに立ち上がる口縁部に凹線文状の沈線を5条施す。高杯Aの中にはこのようなものが散見でき、凹線文との区別が困難である。630の場合、明らかに凹線文の効果を意識しているが、施文工具の幅が極めて小さいため、沈線の周囲にまでナデが及ばず、凹線文とは明瞭に区別できる。沈線の幅は、1mmに満たない。1条ずつ施文されていることから、後期に見られる擬凹線文とも明瞭に区別できる。高杯の脚柱部に散見できる螺旋状を呈する凹線文とよく似ており、この沈線文も螺旋状を呈する可能性がある。口縁端部をわずかに内側に拡張する。胎土は極めて精良で、淡赤褐色を呈する。外面全面と内面の一部に丹が塗られている。631は、口縁部の短いものである。口縁部の上端と下端に凹線文を施す。数少ない脚柱部との

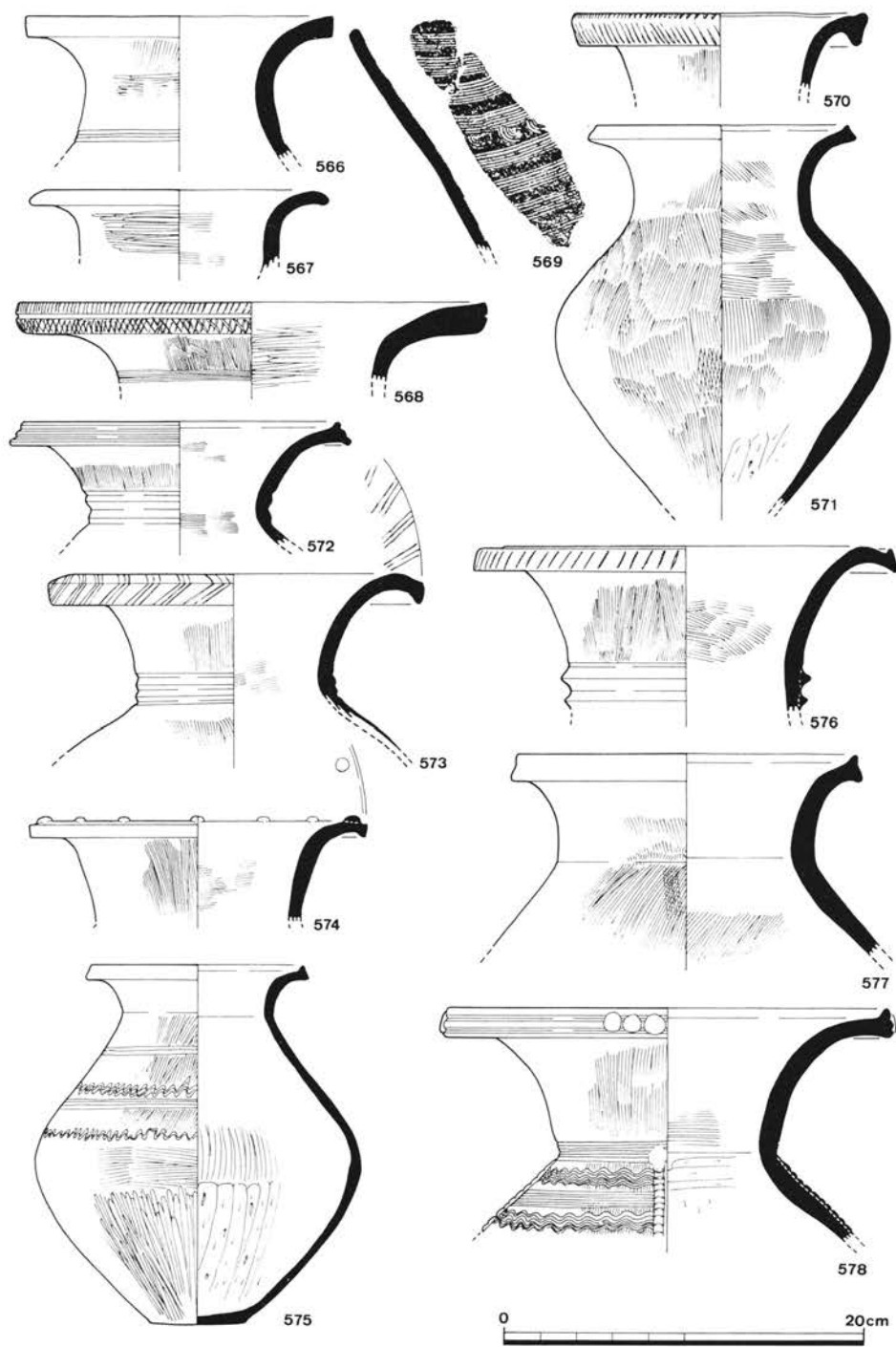
接合例で、脚柱部上端にも4条の凹線文が施されていることがわかる。胎土はやや粗く、チャート・くさり礫ほかの砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。

出土した高杯Bの多くは、口縁端部を垂下させる高杯B₂であり、高杯B₁の出土数は少ない。高杯B₂は、632・633のように杯部の深いものと、高杯Aに共通する比較的浅い杯部をもつものがある。632は、杯部が深く、口縁端部の垂下が顕著なものである。胎土に石英・チャートが目立ち、淡褐色を呈する。633も深い器形をもち、口縁端部の垂下は632に比べてやや短い。胎土に長石・石英ほかを含み、褐色を呈する。

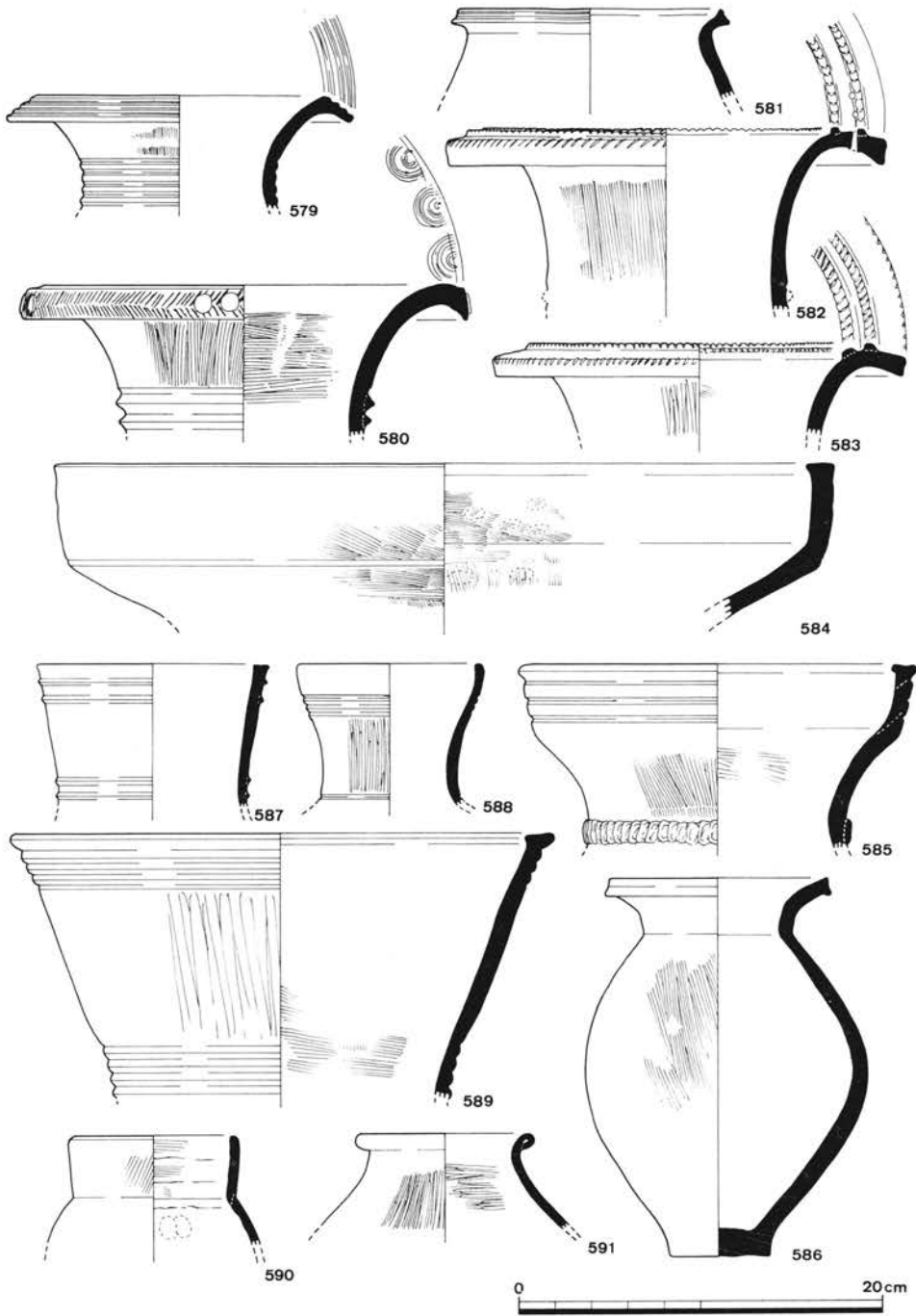
高杯Cは、中型のもの大型のものが散見でき、多くは、口縁端部を内側に大きく拡張し(突帯と考えるべきか)、口縁端面下端にキザミメ文を施す。図化した634は、大型のもので、口径30.2cmを測る。口縁端部にキザミメを施し、2条の凹線文を施文する。紐穴と思われる円孔を穿つ。外面をハケで調整し、内面はハケを施した後、底部付近を中心にヘラミガキを行う。

高杯Eは、杯底部から外半気味に開く長い口縁部をもつ。器台あるいは鉢になるのかもれない。丹が塗られているものが多い。出土当初、古墳時代前期に属する可能性を考えていたが、SH86203・SH86204等の遺構内及び自然流路に伴う落ち込みやSK85208付近から出土しており、弥生時代中期の土器と認定するに至った。なお、第4次調査の堅穴式住居跡22(SH86201と同一)内出土の遺物としても報告されている。また、この土器に関連するものとして鉢Eの存在がある。図化した635は、SK85208から出土したと考えられる。口縁端部がやや肥厚して終わる。内外面とも最終調整はヘラミガキであるが、口縁部下半のヘラミガキがやや粗いため、ミガキの下にハケが観察できる。外面を口縁端部に至るまで丹塗りしている。胎土は精良で、石英・長石を含み褐色を呈する。搬入土器ではないと考えられる。

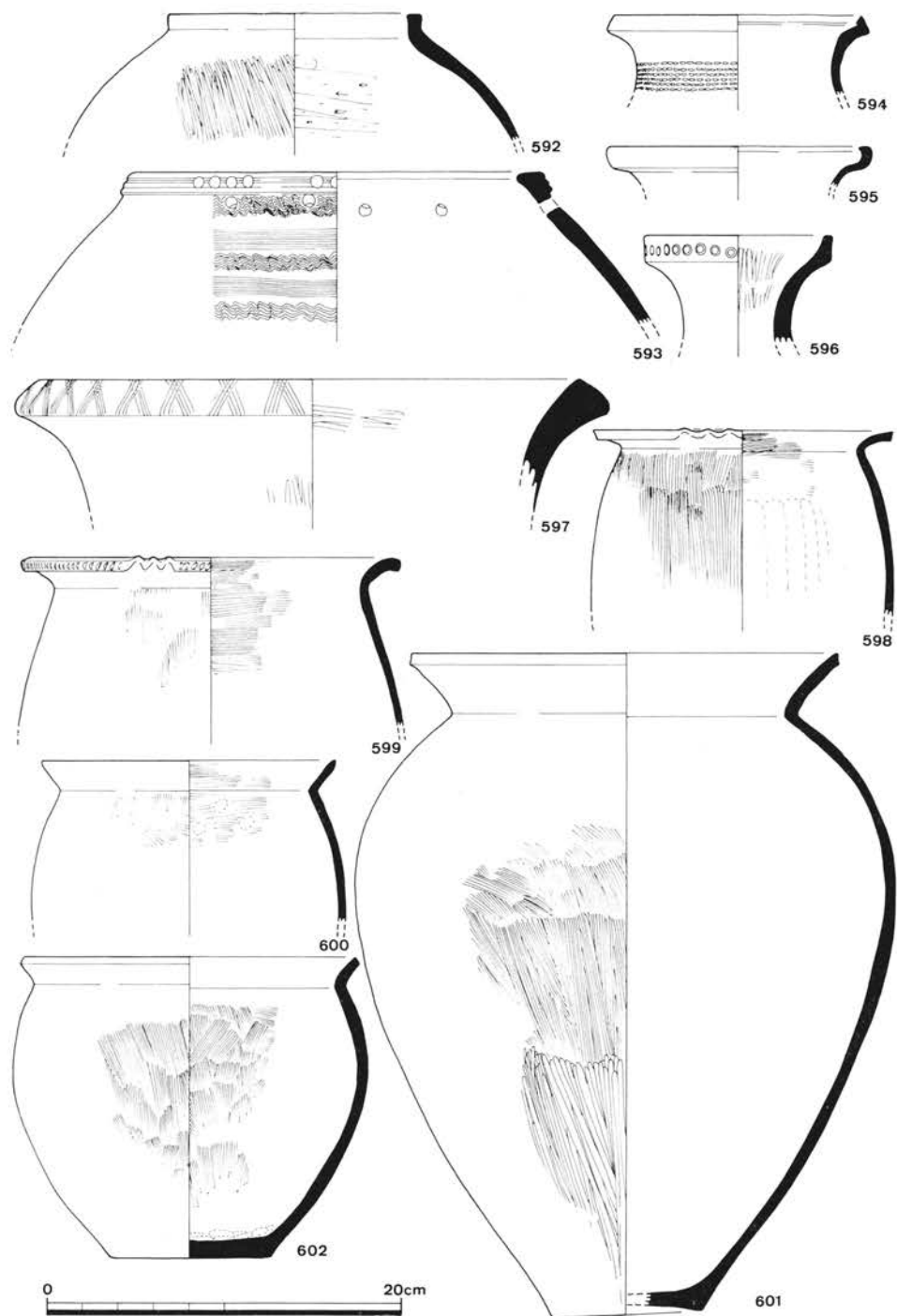
高杯の脚部と考えられるものを4個体図化した。636は、深い杯部からやや短い脚柱部を経て、ラップ状に開く脚部に至る。脚端部の拡張は上方のみで、下方への拡張は見られない。脚裾部内面をハケで調整しており、ほとんどの高杯がヘラケズリするのに相反している。脚裾部に円孔を見ない。胎土に石英・長石を含み、黄褐色を呈する。高杯Bの脚部と思われる。637は、ラップ状に開く脚部の裾下端に5条の凹線文を施す。裾部に円孔を持たず、脚端部の上下への拡張は比較的小さい。胎土はやや粗く、石英・金雲母・長石を含み淡灰色を呈する。明らかに他地域からの搬入品である。638は、脚柱部の上端と下端に凹線文をもつ。下端の凹線文は螺旋状を呈する。脚裾部に12個の円孔を持ち、脚端部は上下に大きく拡張する。外面に丹を塗っていた形跡が窺える。胎土に石英・長石を含み淡黄褐色を呈する。高杯脚部の形態は、638の形態で、4方向に円孔を穿つものが最も普遍



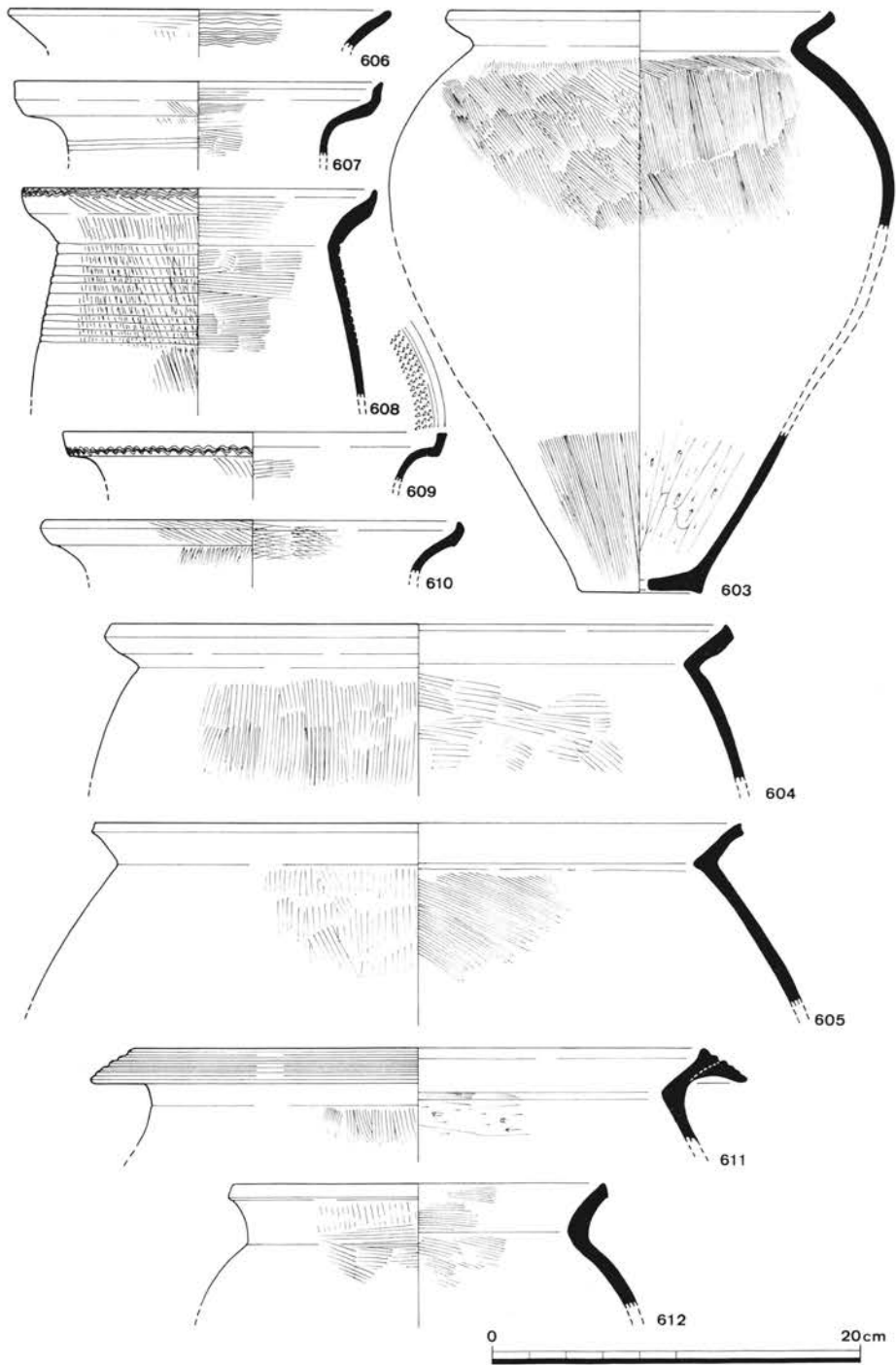
第146図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物1 (弥生土器1)



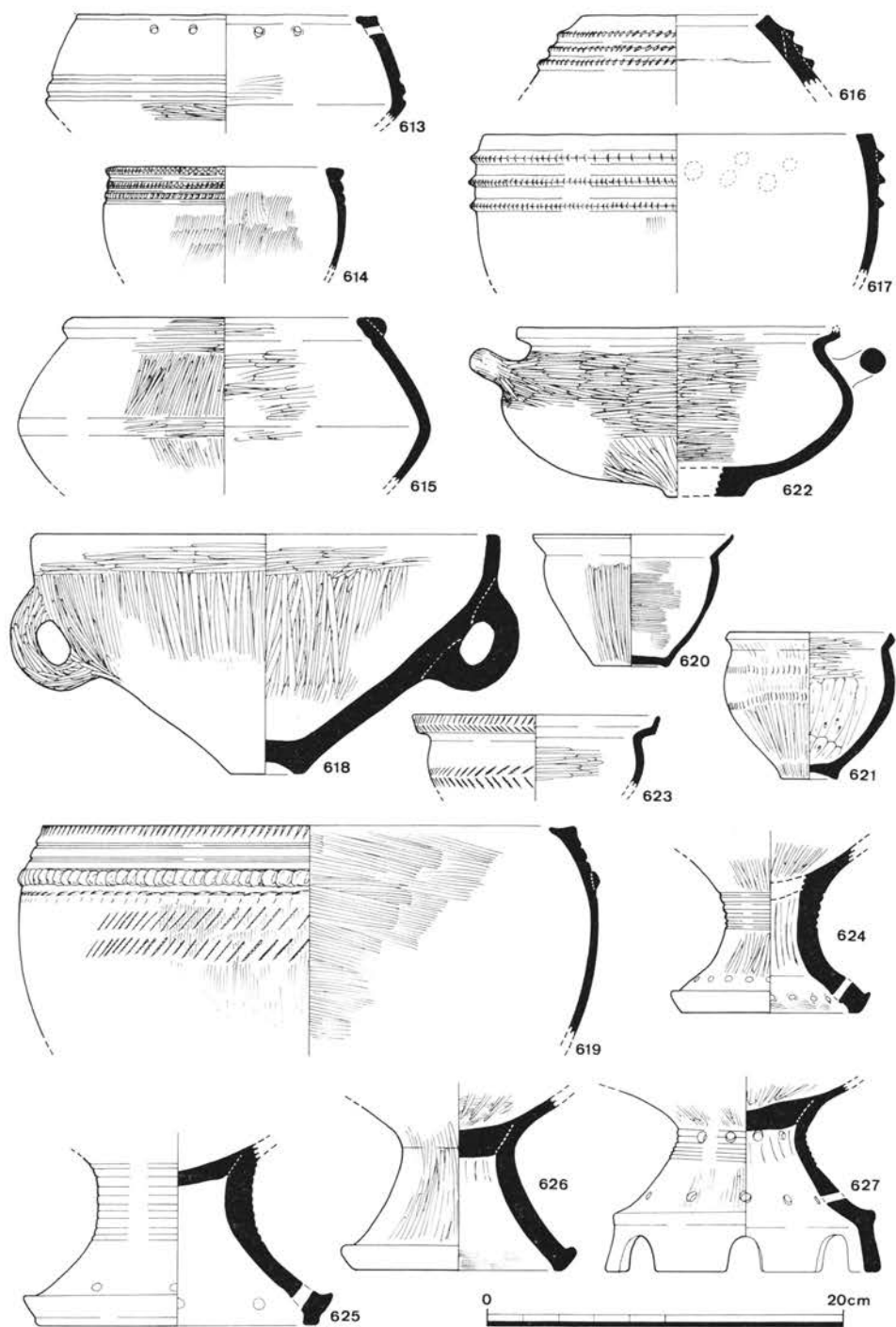
第147図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物2 (弥生土器2)



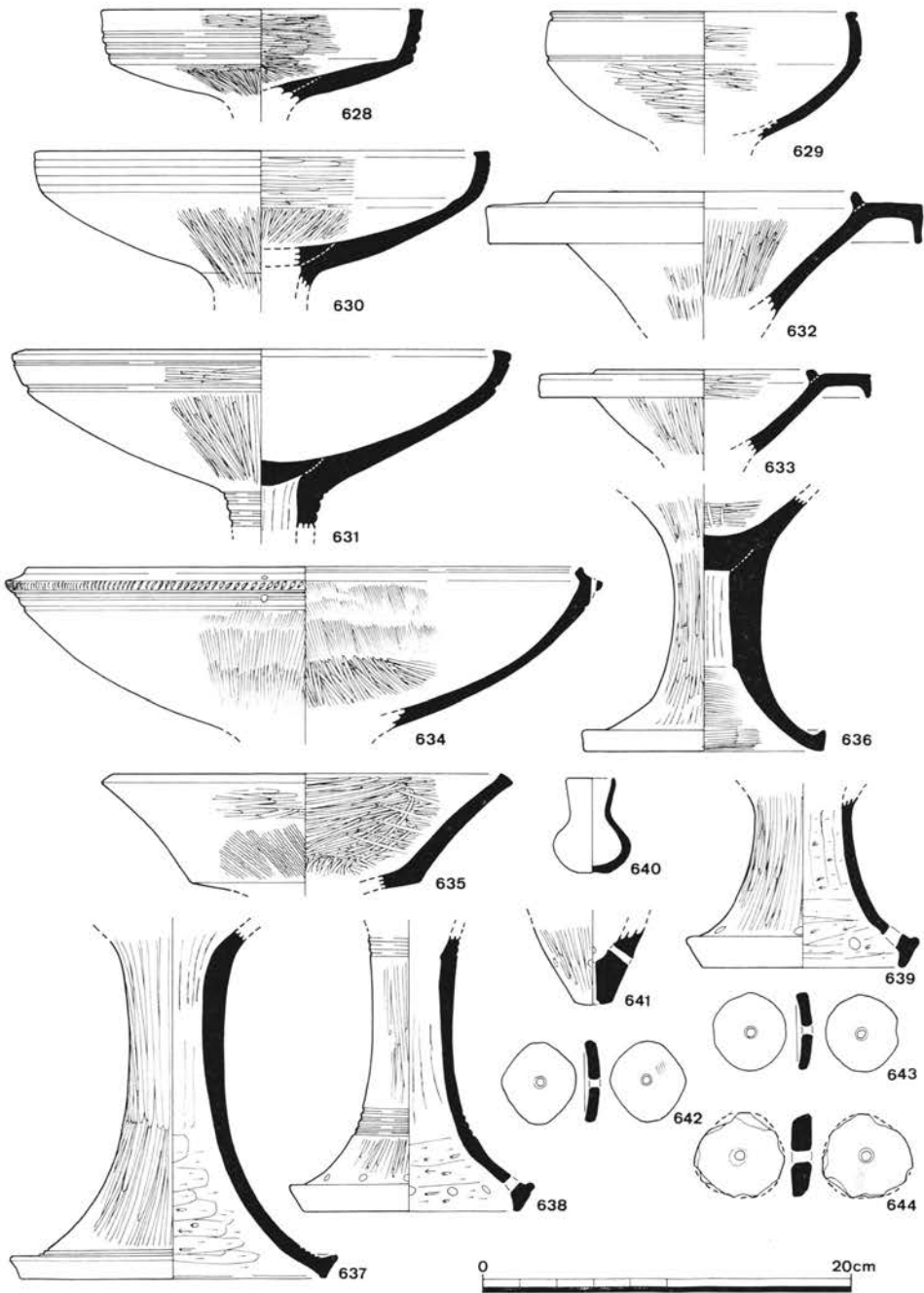
第148図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物3 (弥生土器3)



第149図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物4（弥生土器4）



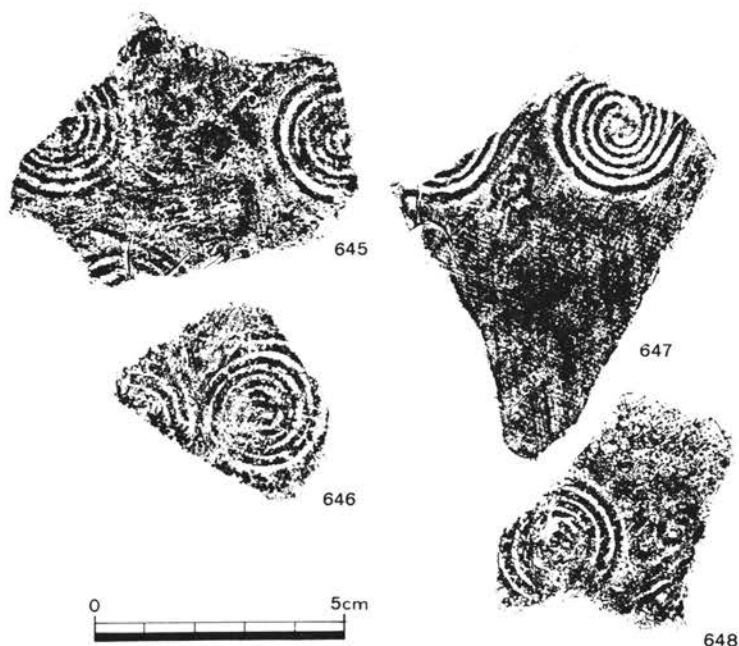
第150図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物5 (弥生土器5)



第151図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物6（弥生土器6）

的である。639は、短い脚柱部をもつ。裾部下端に円孔を5方向に穿ち、脚端部を上下に（特に下方に）拡張する。

その他(第151図, 640~644)ほかにミニチュア土器・多孔土器・有孔円板(紡錘車)等が出土している。640



第152図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物7 (スタンプ文のある土器)

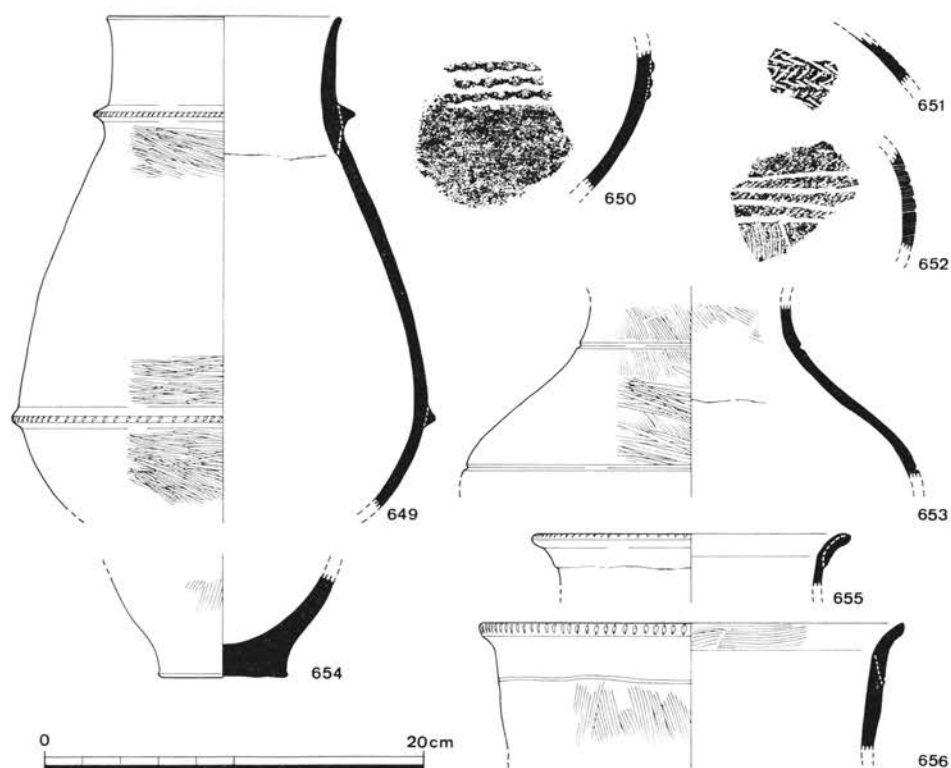
は、ミニチュアの壺形土器である。算盤玉形の体部に長い頸部をもつ。施文は観察できない。胎土に長石・石英を含む。641は、6個の円孔を有する。内面に白い付着物がある。よく似たものとして、SH86201出土の166がある。642~644は、土器片の縁部を研磨して、中央に円孔を穿っている。紡錘車として利用された可能性が高い。

スタンプ文のある土器(第152図) 舟戸南地区内からは、絵画土器は1点も出土することがなかった。また、記号文をもつ土器については、まだ抽出できていないものがある可能性がある。機会を改めて報告したい。ここでは、渦巻きタタキ印痕を残す土器の紹介にとどめたい。渦巻き状のタタキメ(スタンプ文)を残すものは、この地区出土のすべての土器片を調べたが、わずかに4個体を確認したにすぎない。いずれも小片であるため、渦巻き文であるか蕨手文であるか不明である。施文はハケ調整を行った後に行われており、極めて装飾的効果が高い。647・648には、小さな渦巻きも観察できる。

(2) 弥生前期の土器(第153図)

舟戸南地区においては、カキ安地区(第3次調査)で見られたような弥生時代前期の包含層は存在しなかったが、弥生時代中期の包含層内に少量ながら弥生時代前期の土器が含まれていた。数点ながらここで紹介する。

649は、壺である。頸部から口縁部がやや外反気味にのび、体部最大径を測る位置(腰部)がかなり下にある。頸部と腰部に突帯文を貼り付け、ヘラ状工具によるキザミメをもつ。



第153図 舟戸南地区出土弥生時代前期の土器

外面は、全面ヘラミガキで調整する。突帯文の存在，調整手法及びその器形から畿内第Ⅰ様式に併行する土器と考えられる。650は、体部最大径を測る位置に貼り付け突帯をもつ壺の体部である。突帯上に圧痕文を加える。651は、壺の肩部である。貝殻(タマキ貝?)による羽状文が施されている。652は、ヘラ描き沈線文をもつ壺の体部である。653は、径部から体部にかけての比較的大きな破片である。径部と体部の1条にヘラ描き沈線文をもつ。654は、壺の底部である。外面には、部分的にハケメが観察できる。655は、甕の口縁部である。口縁部は粘土帯を外側に折り返し，2重に重ねることによって成形されており，外面にその痕跡が明瞭に残って段を形成している。口縁端部にキザミメを施す。第3次調査の溝7に同様の土器があり，第Ⅱ様式の土器と共伴しており，第Ⅱ様式に属する可能性もある。他の遺跡では亀岡市太田遺跡に出土例がある。この種の土器については田代 弘氏の論文に詳しい^(注4)。656は，短く外傾する口縁の端部にキザミメを施し，頸部下半に1条のヘラ描き沈線文をもつ甕である。いずれも畿内第Ⅰ様式新段階に属するであろう。

(3) 石器・石製品(第154~163図・付表3)

舟戸南地区から出土した石器・石製品の量は莫大で，製品のみで総数436点を数える。

その多くは包含層内から出土している。ここでは、重複することになるが、前項で一部紹介した竪穴式住居跡・溝内出土のものもあわせて簡単に紹介することにする。なお、個々の石器については、節末に一覧表を掲げた。また、分類を行えなかったもの(ピース・エスキューユ、一部の不定形刃器、不明石器)があり、機会を改めて紹介したい。

出土した石器・石製品の総数436個体内訳は、磨製石鏃(9点)・打製石鏃(48点)・錐(10点)・石剣(23点破片含む)・石槍?(1点)・削器(1点以上)・石庖丁(1点)・石鍬(29点)・太型蛤刃石斧(43点)・扁平片刃石斧(15点)・柱状片刃石斧(7点)・環状石斧(2点)・器種不明小型石斧(2点)・敲き石(7点)・磨石(29点)・石皿(7点)・台石及びくぼみ石(13点)・管玉(40点・未製品を含む)・石鋸(10点)・砥石(143点)である。

磨製石鏃 出土した磨製石鏃の総点数は9点である。凹基式・平基式・円基式・有茎式と各種ある。109は、製作過程上で円孔を利用する。110は、中央部に円孔を穿つ。111は、未製品と考えられ、部分的に研磨痕が見られる。石材は珪質頁岩・頁岩～粘板岩を用いており、石剣の石材に共通する。

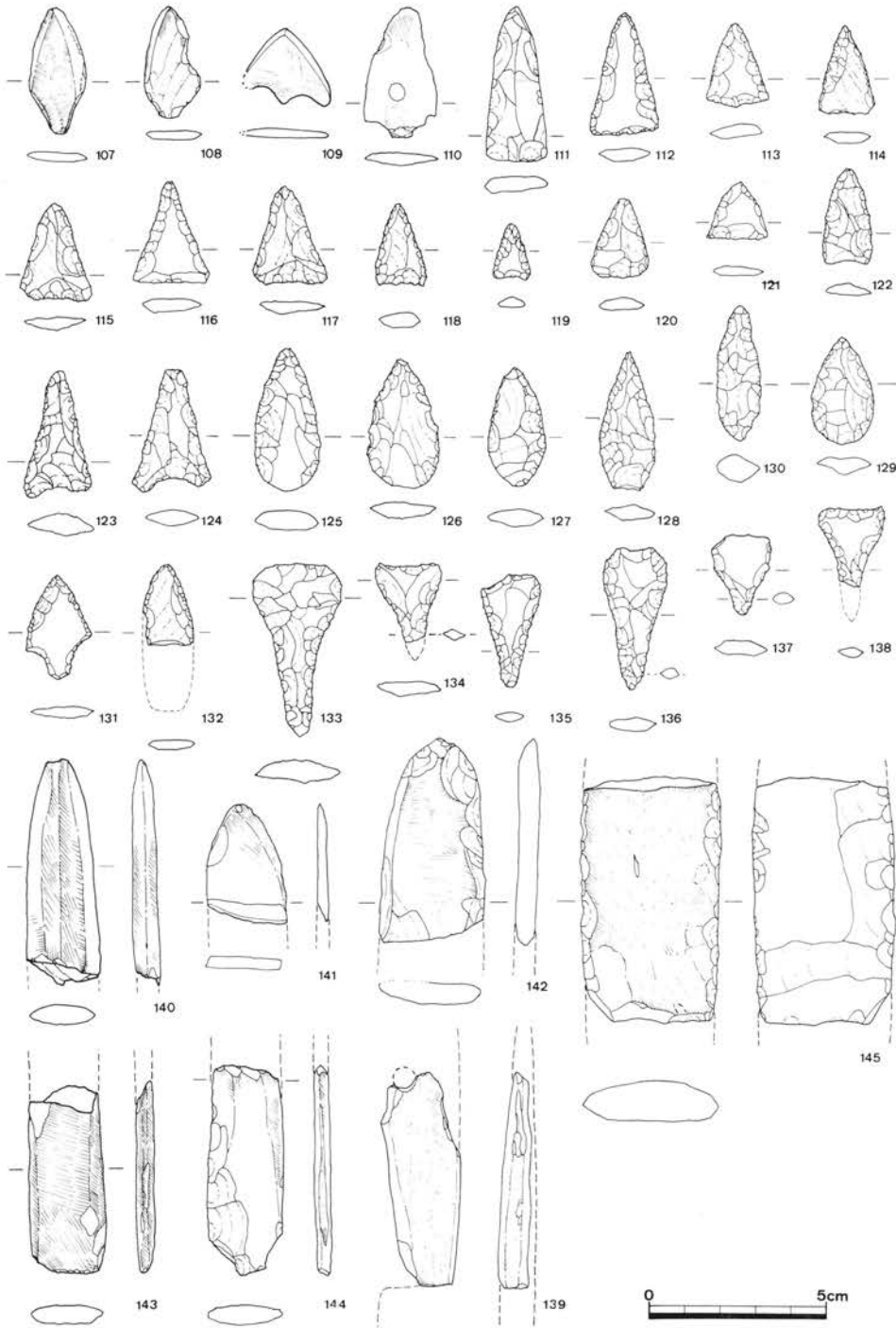
打製石鏃 出土した打製石鏃の総点数は48点である。この内、基部の形態がわかるものが45個体ある。基部による分類別の個体数は、平基式14、円基式15、凹基式8、尖基式3、有茎式5^(注5)である。石鏃と錐の判別が難しいものがあったが、先端部の薄いものは石鏃とした。尖基式の3個体は錐の可能性もある。石材はすべて無斑晶安山岩である。石鏃以外の打製石器もすべて無斑晶安山岩で造られている。畿内地域に見られる石鏃の大型化傾向は見られない。

錐 出土した総点数は10点である。すべて無斑晶安山岩でつくられている。先端部の欠損しているものが多い。

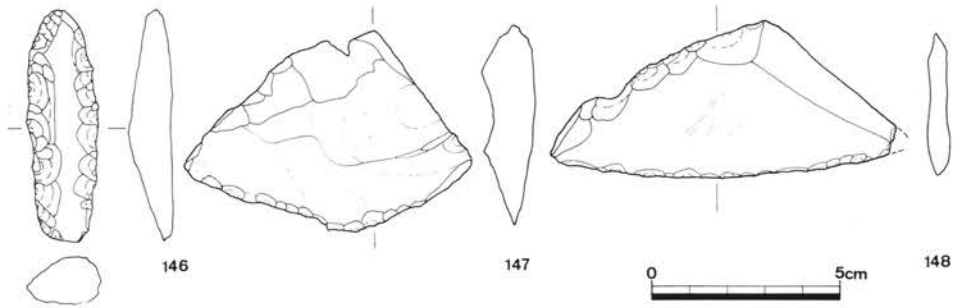
磨製石剣(銅剣形石剣・鉄剣形石剣) 磨製石剣には銅剣形石剣と鉄剣形石剣がある。銅剣形石剣は銅剣を忠実に模倣したもので、88・105からその全容が窺える。銅剣形石剣は、7点出土しているが、上記の2点を除くといずれも細片である。105の出土地区の離れた接合例のことを考え合わせると、銅剣形石剣が使用されなくなった時点で意図的に破砕して廃棄した可能性が高い。鉄剣形石剣は計16点出土しているが、やはり破片が多い。鉄剣形石剣は幅2cm前後を測る小型のものと、幅3cm以上の大型のものが存在する。なお、石剣の石材は頁岩～粘板岩が多く、珪質頁岩のものもある。

石槍?・不定形刃器(削器・石庖丁?) 146は、縦長剥片の両縁部を加工した石槍状を呈する石器である。147は、大型剥片の一辺に刃部を付けた削器である。148は、粘板岩を利用したもので、石庖丁の可能性もある。

石鍬 弥生時代中期の遺構内及び包含層内から石鍬(土掘り具)と思われる石器が29点出



第154図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物8 (磨製石鏃・打製石鏃・石錐・石剣)

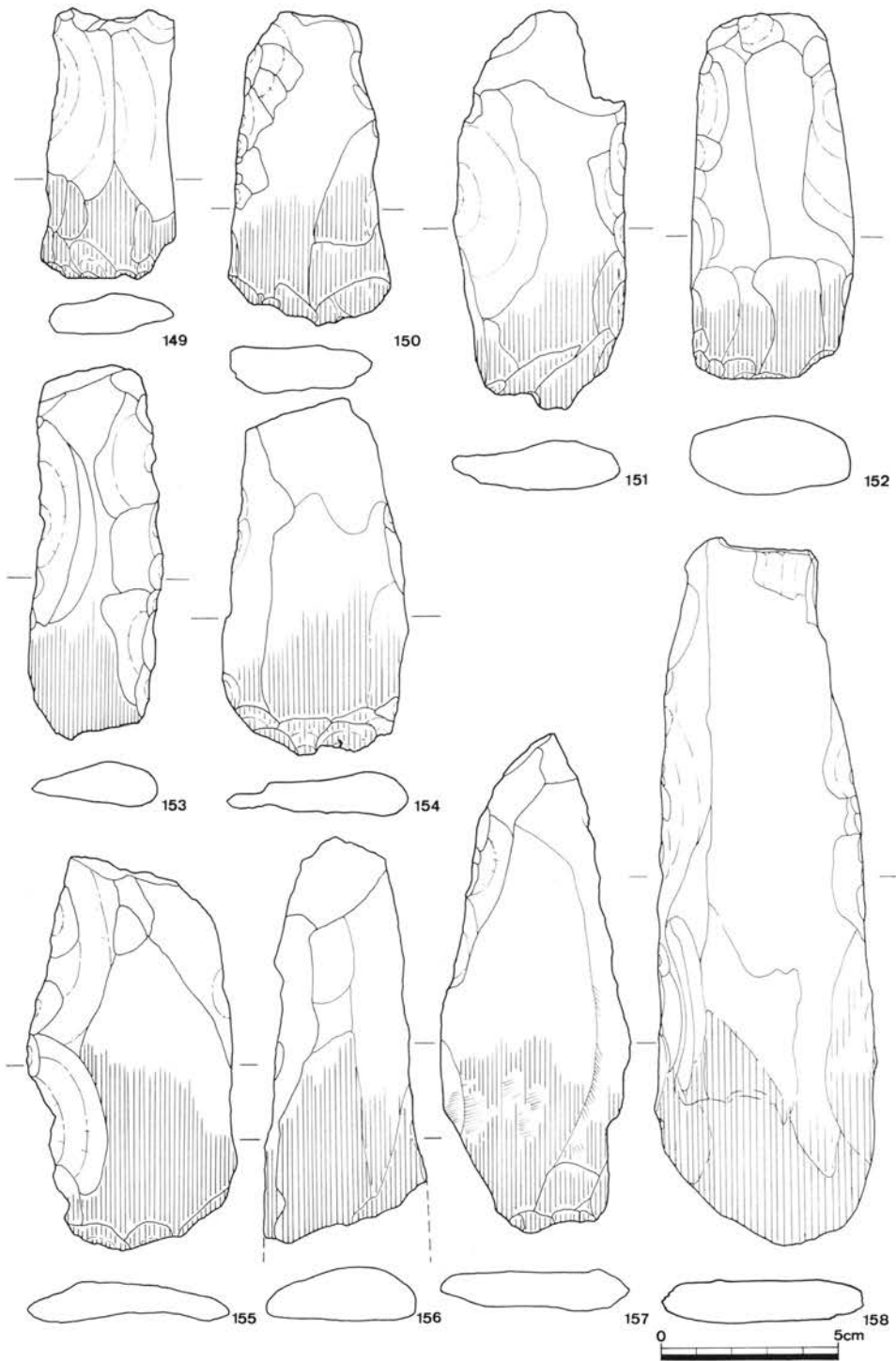


第155図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物9 (石槍?・削器・石庖丁?)

土している。これ以外に多数の破片が出土している。調査当初、これらの石器が3km上流の桑飼下遺跡出土の縄文時代後期の打製石斧に酷似しているため、縄文時代後期の遺物が混入したものと^(注6)も考えた。しかし、住居跡内からも出土した^(注7)こと、縄文後期の土器片がわずかに3点の細片しか出土しなかったことから、弥生時代中期の石器と認定した^(注7)。

出土した石鎌は、形態・石材・使用痕ともに桑飼下遺跡から出土した打製石斧に酷似しており、差異は認められない。形態は、短冊形を呈する。長さは、11cm前後を測る。長さ19.4cmを測る大型のもの(158)もあるが、量的には少ない。幅は、4~5cmを測る。石材はすべて薄く割れる性質の粘板岩を巧みに利用している。先端部に明瞭な使用痕(擦痕)を留めている。この擦痕は、砂地である志高遺跡の土を掘削した時に生じた土擦れによるものである。石材に用いられた粘板岩は、志高遺跡右岸のやや上流で多く産する。法量的にこの石鎌を素手でもって使用することは困難であり、木製の柄に装着して使用したと考えられる。集落内から鉄製品が出土していることから、当然木製の鎌(先)を製作することは容易であったと考えられる。そのような状況下で、縄文時代以来の石製の鎌先を使用していたのは、粘板岩の入手の容易さと砂地である志高遺跡の土壌に関係するのであ^(注8)らう。

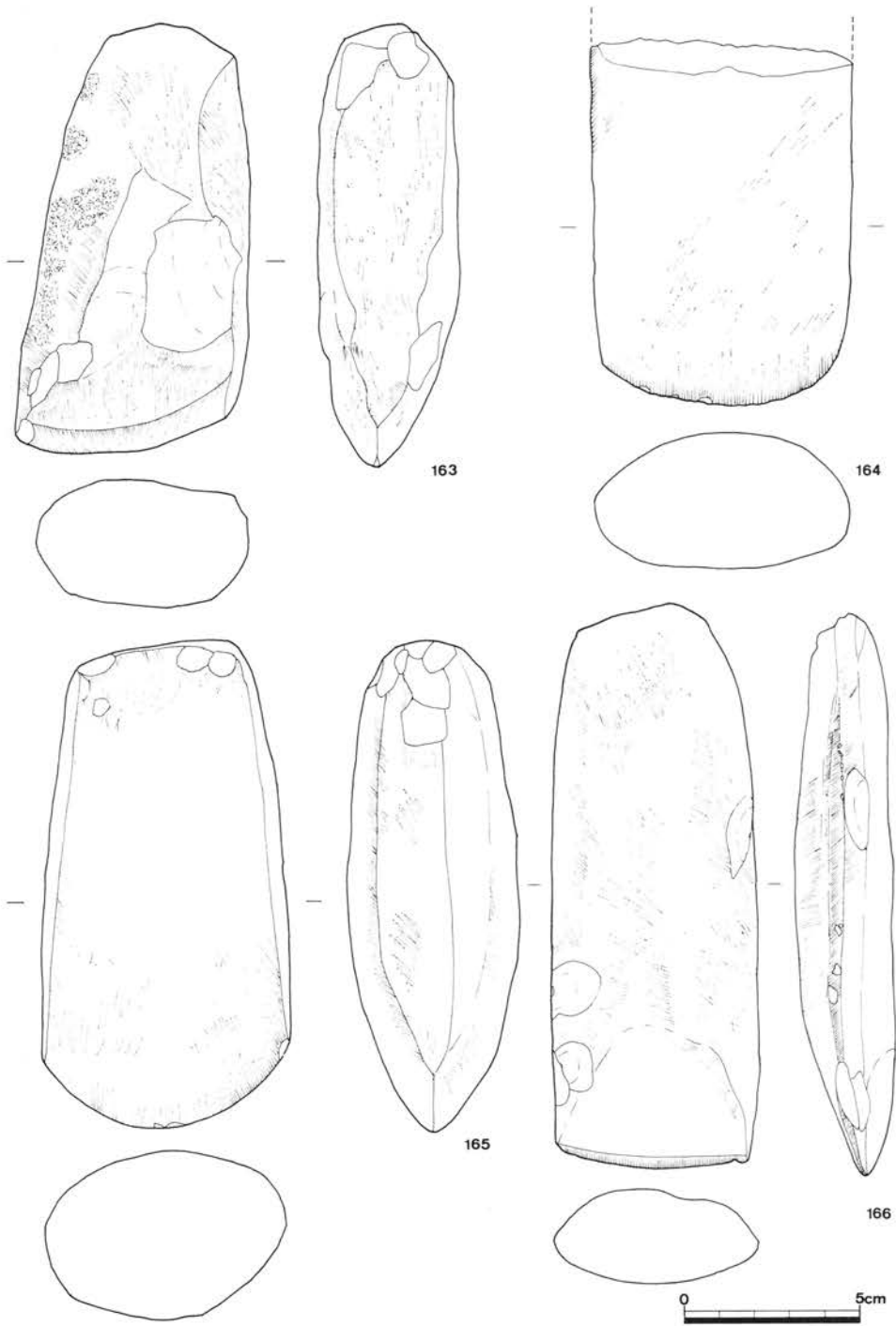
大型蛤刃石斧 多くは包含層内から出土しており、遺構内から出土したものは少ない。この状況は、石鎌が遺構内から比較的多数出土しているのと対照的で、大型蛤刃石斧が居住域内でも住居外で多く用いられることがあったことを反映している可能性がある。形態にはさまざまなものが存在する。164は、典型的な大型蛤刃石斧である。このような形態をとるものは少ない。花崗岩製である。159・160の形態は、比較的多く存在する。なお、159・160は、中央部基部よりに敲打痕をもつ。160は、片側の刃部の摩滅が著しいため、研磨により刃部が斜めになってい。同様の形態をもつものが他に1個体ある。166は、やや扁平で扁平片刃石斧に近い形状を呈する。先端部付近が扁平なものは、他にもあり、この形状の石材は珪質頁岩に限定される。用途の異なるものであ^(注8)らう。大型蛤刃石斧の石材には珪



第156図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物10 (石鍬)



第157図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物11 (大型蛤刃石斧1)



第158図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物12 (大型蛤刃石斧2)

質頁岩(12点)・ハンレイ岩(10点)を用いるものが多く、他に砂岩・閃緑岩・蛇紋岩・花崗岩・玢岩等が用いられている。

扁平片刃石斧 長さ5cmを測るものから11.5cmを測るものがある。珪質頁岩を用いるものが最も多く(7個体)、次いでハンレイ岩・粘板岩を用いる。太型蛤刃石斧には用いられなかった粘板岩を用いていることは、扁平片刃石斧の形態に起因するものであろう。

柱状片刃石斧 出土数は少なく、6点を数えるにすぎない。中型のものと小型のものがある。珪質頁岩(3点)・蛇紋岩(3点)で作られている。

環状石斧 計2点出土している。いずれも約半分に破損した状態で出土した。

器種不明小型石斧 SH86205内から出土した小型の石斧は、刃部をもつ特殊なものである。ほかに鑿状の先端部をもつものがある。

敲き石 敲打痕の認められる石器である。形態的に長楕円形の円礫を用いたもの(180)と磨石と同様の丸い円礫を用いたもの(184)に分類できる。前者の量が多いが、磨石の中に敲打痕を残すものがあり、量的比較は行えない。

磨石 丸い円礫を用いたものが多く、長楕円形を呈する。擦痕を明瞭に留めるもののみを扱ったが、他に磨石として持ち込まれ、使用痕の明瞭でないものも多くある。形態的に縄文時代前期のものと同じである。花崗岩を用いたものが大半を占める。敲打痕をもつものもある。

石皿 人頭大の扁平な花崗岩を用いたものが多く、使用のために中央部がわずかにくぼんでいる。

くぼみ石及び台石 形態的に3類に分類できる。1類は石皿とほぼ同規模かやや小さいもので、表面に石皿のような滑らかな面を持つかわりに、あばた状の面をもつ(20等)。2類は板状の石材を用い、表面に滑らかな面(砥面か?)とあばた状の面をもつ。3類は小型で6方体を呈する砥石の砥面がくぼむもの(59等)である。

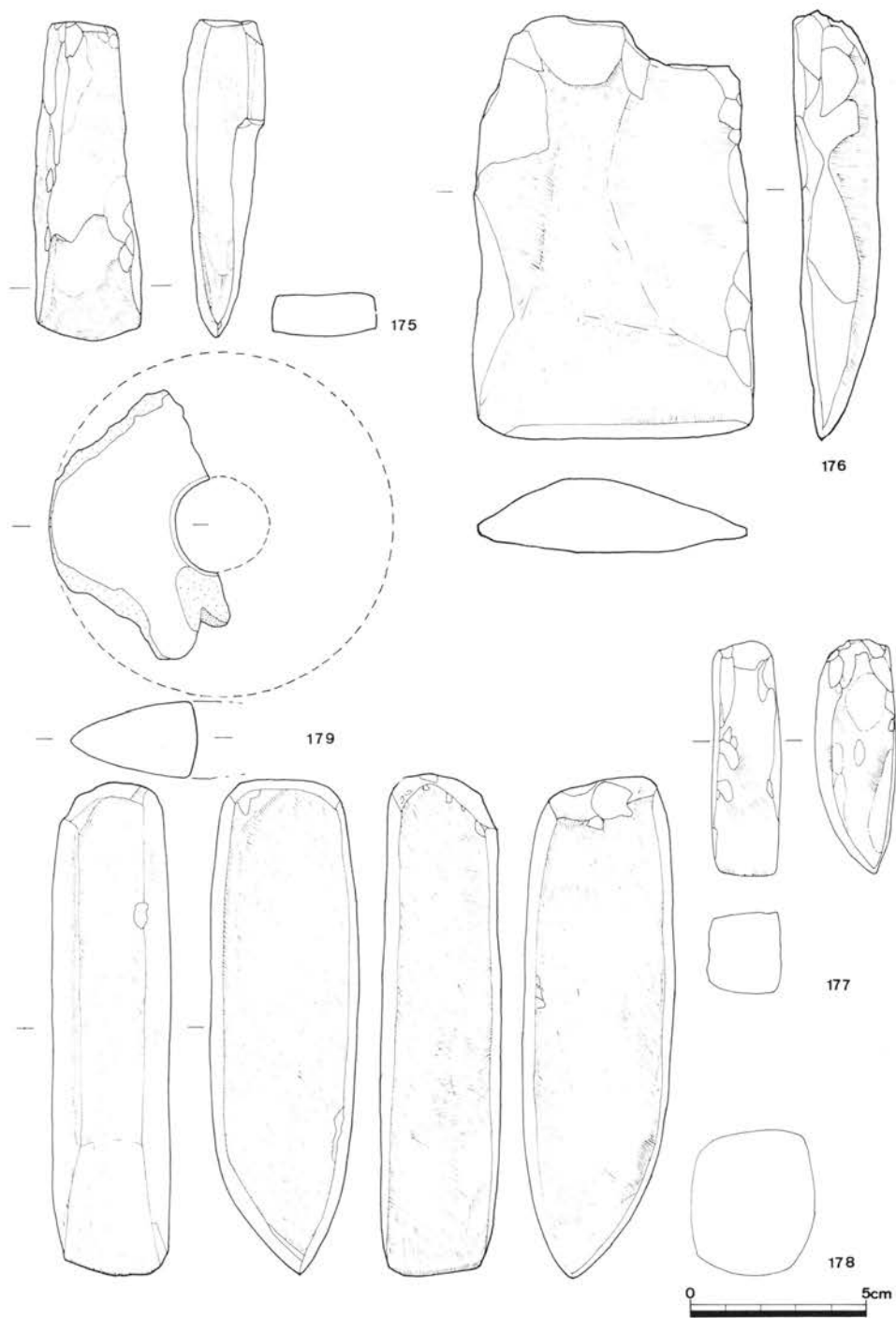
管玉 細身の管玉と太身の管玉が出土している。また、SH85210から出土した未製品(53・54)等や碧玉の原石(7個体)も出土している。住居跡内から出土したものが多い。

石鋸 管玉の製作過程上用いられた工具で、すべて紅簾片岩製である。

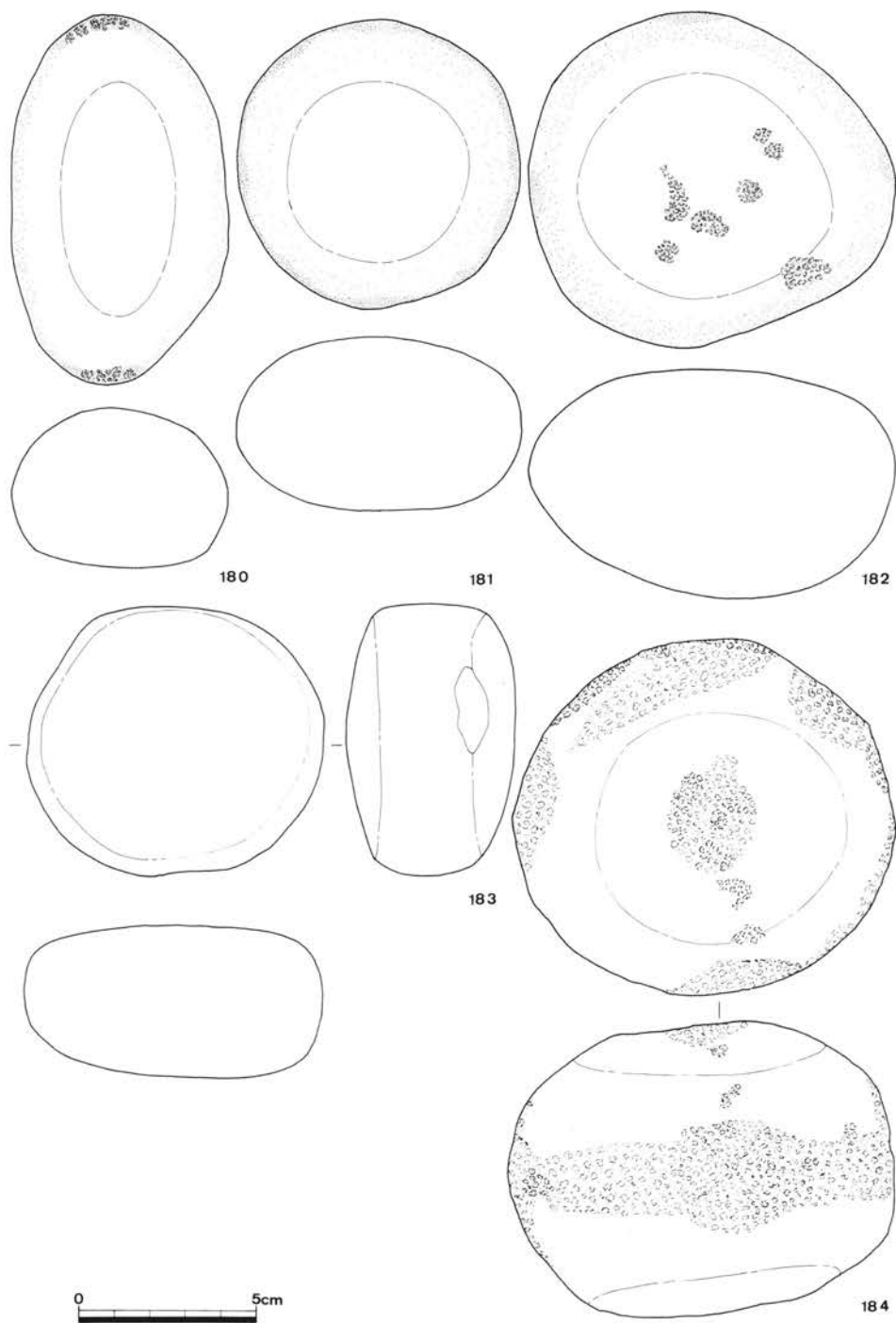
砥石 その出土量は極めて多く、砥面を残すもののみで143個体を数える。砥石は量こそ少なくなるものの、ほとんど形態の変化がないままに後世まで残るものであり、扱った資料は古墳時代の包含層出土品を含んでおり、実際の弥生時代の砥石は数%程度少ないと思われる。大きさは、極めて小さなもの(17)から、石皿とほぼ同じ大きさのものまで存在する。形態も実にさまざまであるが、その大きさ・形態から携帯用と据え置き用が存在することが窺える。また、石材から仕上砥(花崗岩質アプライト)と粗砥(砂岩・花崗岩)が存



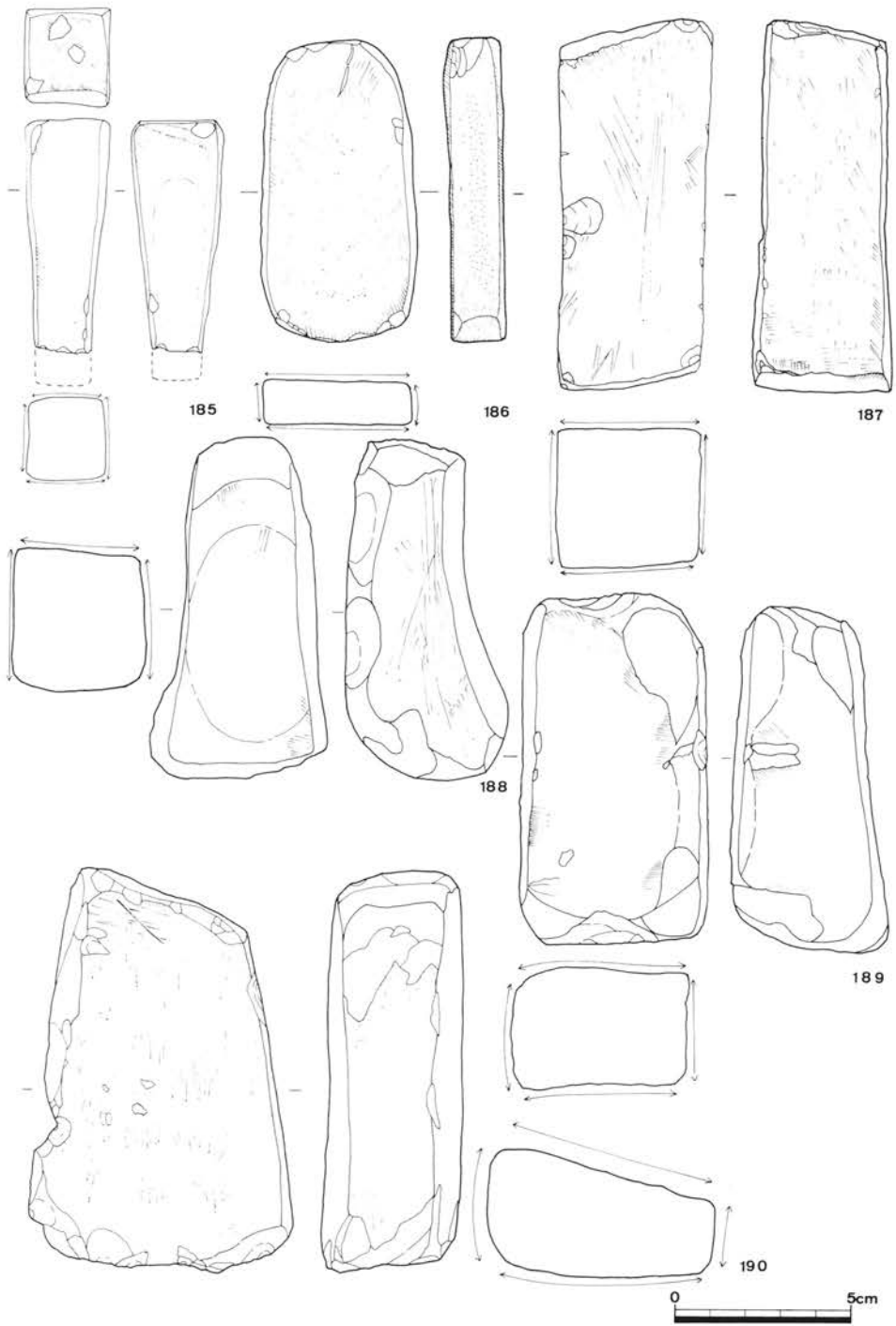
第159図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物13 (扁平片刃石斧)



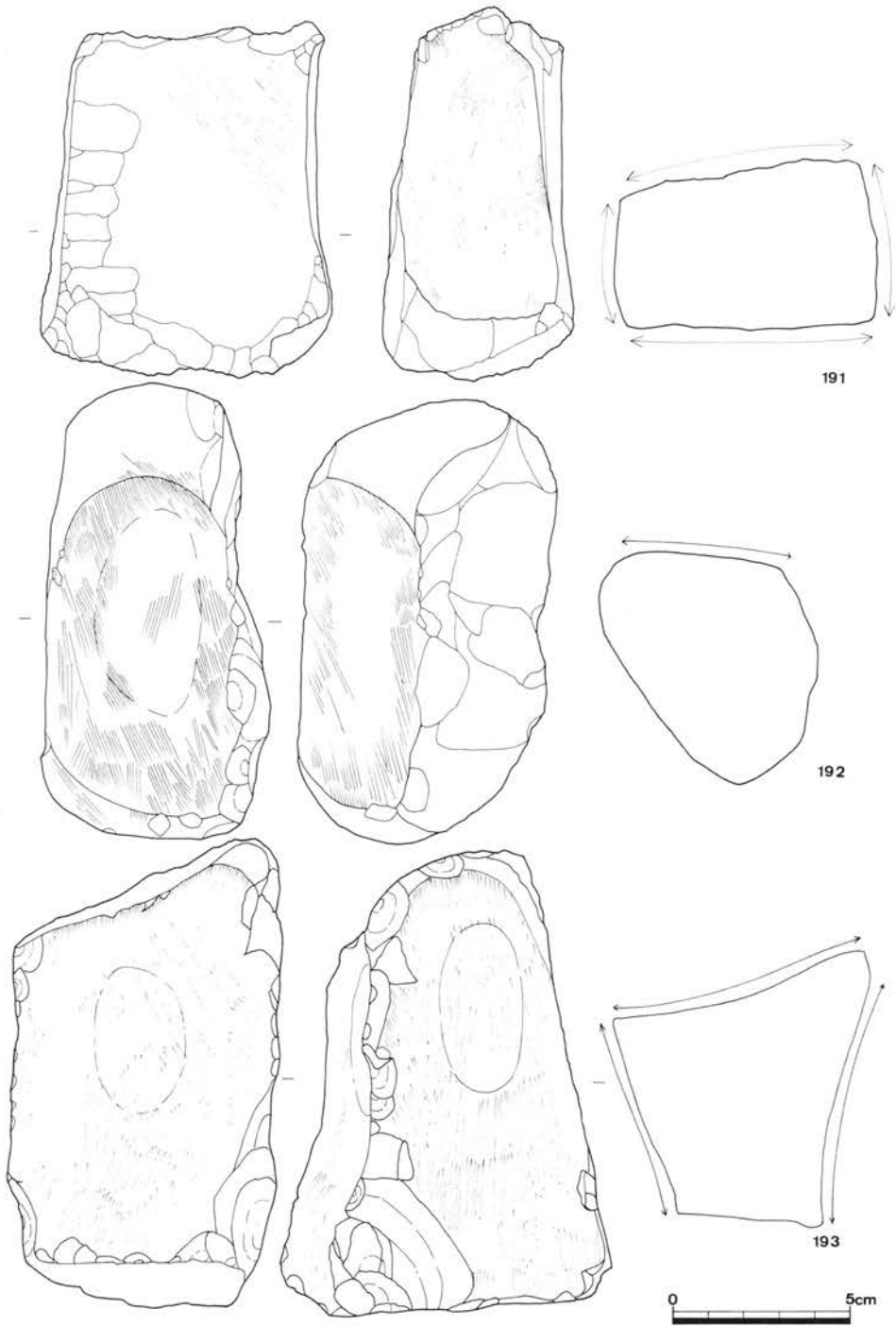
第160図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物14 (扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・環状石斧)



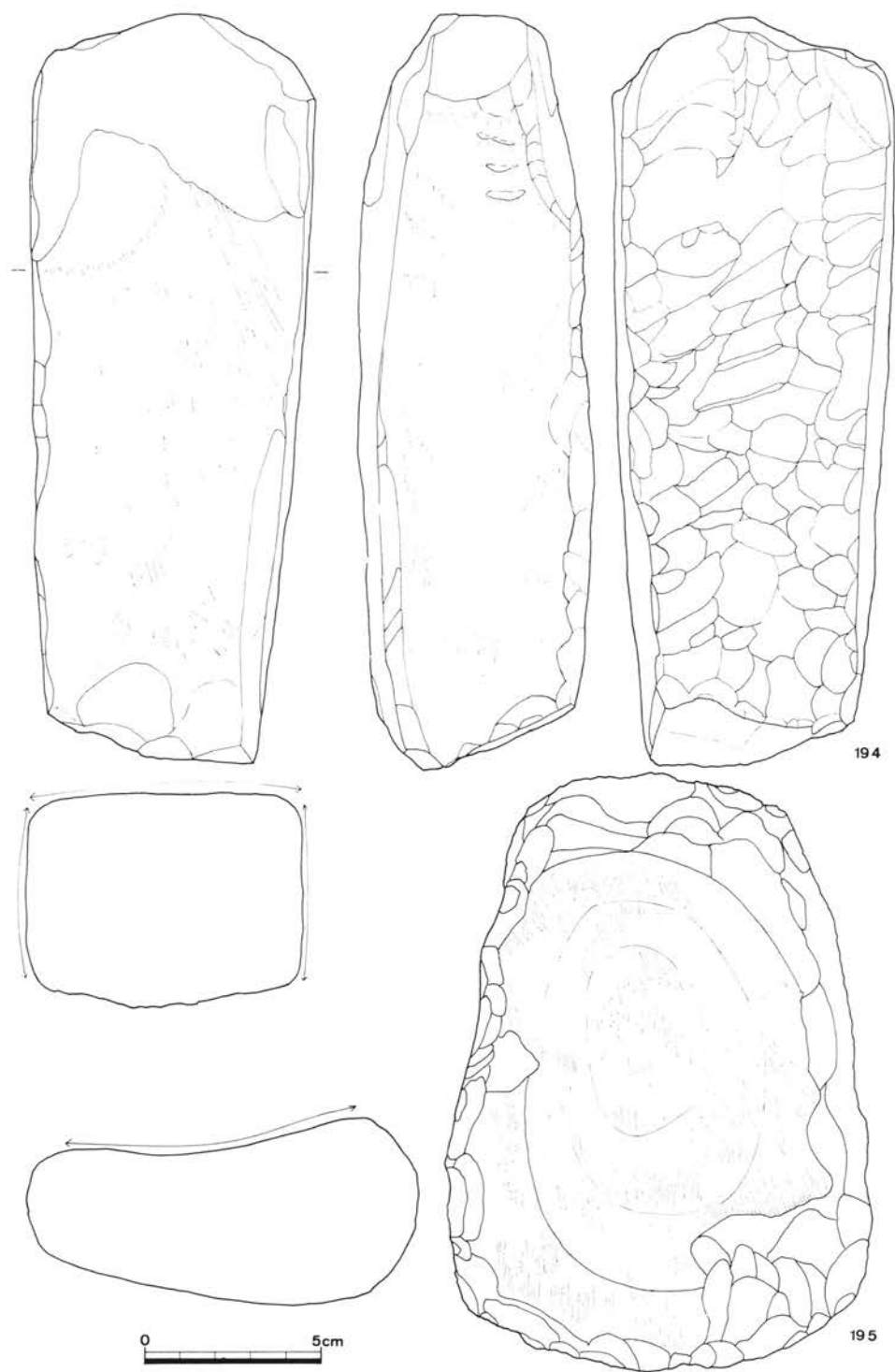
第161図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物15（敲き石・磨石）



第162図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物16（砥石1）



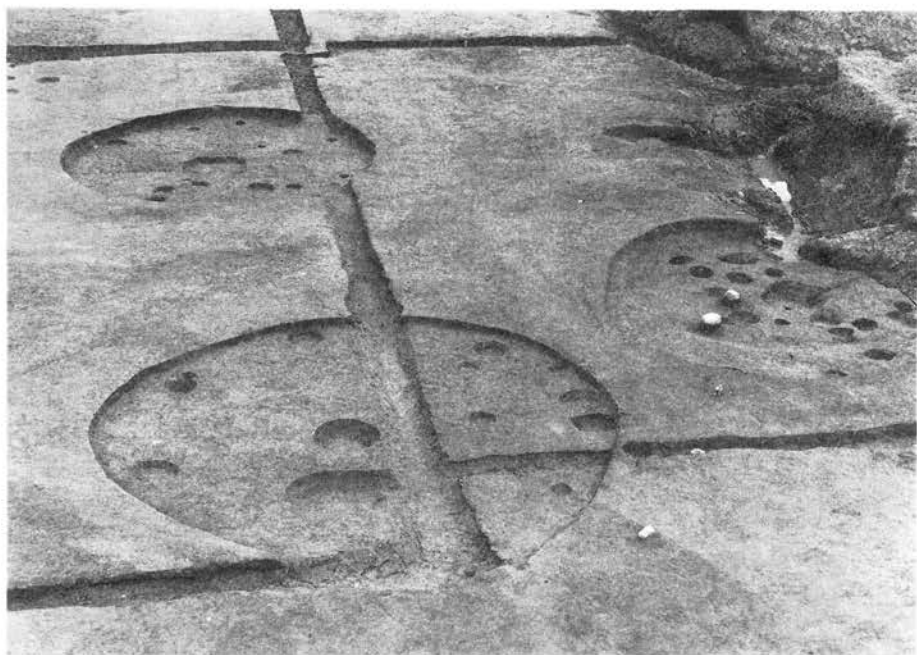
第163図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物17 (砥石2)



第164図 舟戸南地区包含層ほか出土遺物18 (砥石・石皿)

在することがわかる。これだけ多数の砥石を何に用いたか不明であるが、その可能性として鉄器・石斧等の磨製石製品・木器などが考えられる。特に、石庖丁の出土数が極めて少ないことから、木庖丁の製作に用いられた可能性が高い。また、他の木製品にも多く使用されたと思われる。

(肥後 弘幸)



円形堅穴式住居跡群(南西から)

付表3 舟戸南地区弥生時代出土石器一覧表
(弥包・古包は弥生時代・古墳時代の包含層を示す)

1. 磨製石鏃

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
1	10C	弥包	2.0	2.5	0.3	1.1	完存	無斑晶安山岩	挿図109
2	14D	弥包	3.6	2.1	0.3	2.5	完存	珪質頁岩	挿図110
3	19F・G	弥包	4.4	1.8	0.4	3.3	完存	頁岩～粘板岩	挿図111
4	21B	弥包	3.1	1.6	0.4	1.3	完存	頁岩～粘板岩	挿図108
5	自然流路	弥包	3.6	1.4	0.3	1.8	完存	珪質頁岩	挿図107
6	S H85205	埋土	4.2	1.8	0.3	2.2	一部欠損	珪質頁岩	挿図7
7	S H85218	床?	4.0	2.1	0.5	3.6	完存	頁岩～粘板岩	挿図55
8	S D86211	上層	3.3	1.9	0.4	1.6	完存	頁岩～粘板岩	挿図90
9	S H86201	下層	4.6	3.3	0.6	6.8	一部欠損	珪質頁岩	挿図62

2. 打製石鏃

1	11D	弥包	3.5	2.2	0.6	2.9	先端欠	無斑晶安山岩	凹基式	挿124
2	13E	古包	3.4	1.9	0.5	2.3	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿112
3	17E	古包	3.7	1.9	0.7	3.5	完存	無斑晶安山岩	円基式	
4	14B	古包	2.8	1.9	0.4	1.4	完存	無斑晶安山岩	有基式	挿131
5	19F	弥包	2.2	1.3	0.3	—	基部欠損	無斑晶安山岩		挿132
6	14D	弥包	2.5	1.4	0.3	1.0	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿114
7	21E	弥包	2.8	2.1	0.4	1.7	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿117
8	S H85205	埋土	4.2	1.3	0.6	2.9	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿8
9	自然流路	弥包	3.0	1.8	0.5	2.1	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿129
10	S D86211	埋土	3.3	1.6	0.5	2.2	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿93
11	S X85206	上層	3.6	1.9	0.6	2.2	完存	無斑晶安山岩	凹基式	挿123
12	13F	弥包	3.9	2.0	0.7	—	先端欠損	無斑晶安山岩	凹基式	
13	21G	弥包	2.8	1.55	0.6	2.4	完存	無斑晶安山岩	錐か平基式	
14	S H85205	埋土	5.5	2.3	0.6	5.1	完存	無斑晶安山岩	錐か円基式	挿9
15	17E	弥包	2.7	1.8	0.5	1.7	完存	無斑晶安山岩	凹基式	
16	Fライン 以東	弥包	3.3	2.5	0.5	2.5	完存	無斑晶安山岩	円基式	
17	21G	弥包	3.9	1.7	0.6	2.8	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿128
18	21C	古包	3.2	1.6	0.3	—	先端欠損	無斑晶安山岩	凹基式	
19	9D	弥包	2.3	1.4	0.6	1.5	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿118
20	12D	弥包	1.6	1.1	0.4	0.5	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿119
21	14C	弥包	2.7	1.5	0.5	1.3	完存	無斑晶安山岩	凹基式	挿122
22	19G	弥包	2.2	1.6	0.4	1.2	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿120
23	19G 20G・F	弥包	3.1	1.1	0.6	1.6	完存	無斑晶安山岩	尖基式	
24	S D86211	10B	3.9	1.5	0.9	4.3	完存	無斑晶安山岩	尖基式	挿94
25	21E	弥包	3.0	1.8	0.5	1.8	完存	無斑晶安山岩	円基式	
26	10・11G	古包	2.4	1.8	0.4	1.2	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿113
27	15E	弥包	3.7	1.2	0.8	3.5	完存	無斑晶安山岩	尖基式	挿130
28	15E	弥包	2.8	2.1	0.4	1.8	完存	無斑晶安山岩	平基式	挿116
29	22B	弥包	4.0	1.8	0.7	3.8	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿125
30	21E	弥包	2.2	1.1	0.4	0.7	完存	無斑晶安山岩	円基式	
31	Aトレ25B	奈包	4.5	2.0	0.7	—	片脚欠損	無斑晶安山岩	凹基式	
32	S H86204	床	2.5	1.7	0.3	1.0	完存	無斑晶安山岩	円基式	挿84

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
33	25F	弥包	2.1	1.4	0.4	1.0	完存	無斑晶安山岩	平基式
34	26C	弥包	2.4	1.4	0.4	—	先端欠損	無斑晶安山岩	有基式
35	SH86204	床	2.5	1.7	0.5	1.7	完存	無斑晶安山岩	平基式 挿85
36	SD86211	埋土	2.7	1.6	0.4	1.2	完存	無斑晶安山岩	有基式 挿92
37	SD86211	埋土	1.9	1.4	0.4	—	一部欠損	無斑晶安山岩	凹基式 挿91
38	SH86203	弥包	2.1	1.2	0.3	—	片脚欠損	無斑晶安山岩	平基式 挿79
39	SH86201	中層	3.1	1.2	0.5	1.5	完存	無斑晶安山岩	未製品 挿61
40	SH86201	ピット	2.7	1.9	0.5	1.8	完存	無斑晶安山岩	有基式 挿60
41	SH86203	上層	—	—	—	—	一部のみ	無斑晶安山岩	—
42	10~12G	弥包	2.5	1.4	0.5	1.6	完存	無斑晶安山岩	円基式
43	SH85202	埋土	3.8	1.8	0.7	3.9	先端欠損	無斑晶安山岩	円基式 挿2
44	SH85210	埋土	2.6	1.6	0.4	1.4	完存	無斑晶安山岩	平基式 挿43
45	19G	弥包	3.6	2.0	0.4	2.8	完存	無斑晶安山岩	円基式 挿126
46	16D	弥包	2.35	1.8	0.35	1.6	完存	無斑晶安山岩	有基式
47	25B	弥包	2.6	2.0	0.4	1.9	完存	無斑晶安山岩	円基式
48	25B	弥包	2.6	1.3	0.4	1.2	完存	無斑晶安山岩	平基式

3. 錐

1	11E	弥包	4.0	1.8	0.6	2.9	完存	無斑晶安山岩	挿136
2	SH85202	埋土	2.7	1.3	0.7	2.0	完存	無斑晶安山岩	挿1
3	SH85205	埋土	2.6	0.8	0.4	—	一部欠損	無斑晶安山岩	—
4	13D	弥包	4.8	2.4	0.6	5.3	完存	無斑晶安山岩	挿148
5	18F 付近	弥包	2.1	1.8	0.5	1.4	先端欠損	無斑晶安山岩	挿134
6	—	弥包	2.2	1.7	0.5	1.3	完存	無斑晶安山岩	挿137
7	24D	古包	2.5	2.1	0.8	1.9	完存	無斑晶安山岩	挿135
8	SH86204	床	3.9	2.3	0.6	2.7	完存	無斑晶安山岩	挿86
9	SH86201	下層	3.2	1.7	0.7	2.7	先端欠損	無斑晶安山岩	挿63
10	SD85211	18B	2.4	2.4	0.6	2.9	先端欠損	無斑晶安山岩	—

4. 石 剣(1~7銅剣形石剣・8~23鉄剣形石剣)

1	SD86211	埋土	22.7	3.1	1.4	—	先端のみ	頁岩~粘板岩	挿105
2	13E	弥包	3.9	2.0	0.7	—	一部のみ	珪質頁岩	—
3	—	弥包	4.7	2.9	0.9	—	一部のみ	頁岩~粘板岩	—
4	21B	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	—
5	22B	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	挿139
6	SH85202	埋土	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	挿4
7	SH86212	ピット	13.3	4.3	1.0	—	先端欠損	頁岩~粘板岩	挿88
8	10~12G	弥包	5.3	2.2	0.5	—	先端欠損	頁岩~粘板岩	挿143
9	SH85205	埋土	—	3.2	0.4	—	—	頁岩~粘板岩	挿10
10	SK85201	上層	4.7	1.8	1.0	—	破片	頁岩~粘板岩	—
11	SH85205	埋土	—	3.3	0.7	—	破片	頁岩~粘板岩	挿11
12	21B	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	穿孔あり
13	21B	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	—
14	—	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩~粘板岩	—
15	22G	弥包	6.4	2.0	0.8	—	先端のみ	珪質頁岩	挿140

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
16	23 B	弥包	—	2.3	0.6	—	先端欠損	頁岩～粘板岩	挿144
17	20～23区		5.7	2.9	0.7	—	基部欠損	頁岩～粘板岩	挿142
18	21 B	弥包	8.3	2.7	1.4	—	破片	頁岩～粘板岩	
19	19 F	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩～粘板岩	
20	21 C	弥包	—	—	—	—	破片	頁岩～粘板岩	
21		弥包	—	4.1	1.1	—	両端欠損	頁岩～粘板岩	挿145
22	11 F	弥包	4.5	3.1	0.6	—	一部のみ	粘板岩	
23	26 E区	弥包	3.4	2.2	0.4	—	先端のみ	頁岩～粘板岩	挿141

5. 不定形刃器他(1. 削器・2. 石庖丁?・3. 石鎌?)

1	15 D	古包	5.3	7.7	1.4		完存	無斑晶安山岩	挿147
2		弥包	4.2	9.3	0.6	—	1/2欠損	粘板岩	挿148
3	S K 85212	埋土	6.0	2.0	1.2		完存	安山岩	挿146

6. 石 鎌

1	21 C	弥包	19.4	5.8	1.9	253	完存	粘板岩	挿158
2	12 G	弥包	8.8	4.7	1.5	48	完存	粘板岩	挿150
3	14 C	弥包	7.3	4.3	1.4	—	基部欠損	粘板岩	
4	S K 85212		11.3	4.9	1.5	—	基部欠損	粘板岩	挿151
5	自然流路	弥包	11.5	4.6	1.9	—	先端欠損	粘板岩	挿156
6	15 E	弥包	11.2	5.9	1.5	75	完存?	粘板岩	挿155
7	13・14 G	弥包	9.2	3.9	0.8	—	基部欠損	粘板岩	
8	19 E	弥包	5.5	4.0	0.7	—	基部欠損	粘板岩	
9	21 C	古包	6.3	4.1	1.3	—	先端のみ	粘板岩	
10	10 F・10 G	弥包	6.2	4.1	1.5	—	先端のみ	粘板岩	挿149
11	S H 85205	炉内	9.7	4.6	2.0	—	先端のみ	粘板岩	挿16
12	16 G	弥包	7.6	3.8	1.3	—	先端欠損	粘板岩	挿152
13	S H 85111	埋土	10.3	4.6	2.5	120	完存	粘板岩	挿153
14	17 F・G	弥包	10.6	3.8	1.4	50	完存?	粘板岩	挿157
15	12 D	弥包	14.1	5.4	1.4	88	完存	粘板岩	
16	20 C	弥包	11.3	5.1	1.9	80	完存	粘板岩	
17		弥包	8.2	2.6	1.0	—	1/2欠損	粘板岩	
18	16 G	弥包	7.4	3.3	1.0	—	1/2欠損	粘板岩	
19	S H 85205	中央坑	7.5	2.7	1.3	—	基部のみ	粘板岩	
20		弥包	10.1	4.2	0.9	40	完存	粘板岩	
21	S H 85218	付近	10.9	5.3	1.7	—	先端欠損	粘板岩	挿57
22		弥包	10.4	3.9	1.5	30	完存?	粘板岩	
23	S H 86201	埋土	11.0	5.0	2.6	100	完存	粘板岩	挿68
24	25 E	弥包	8.4	4.0	1.2	—	基部欠損	粘板岩	
25	13 G	弥包	12.9	4.5	1.6	90	完存	粘板岩	
26	11 F	弥包	—	5.2	1.4	—	基部欠損	粘板岩	
27	18 F	弥包	—	6.1	1.1	—	基部欠損	粘板岩	
28	11 F	弥包	—	4.4	0.95	—	先端欠損	粘板岩	
29	19 F	弥包	12.8	4.1	1.75	100	完存	粘板岩	

7. 太型蛤刃石斧(石材のうち「花アプライト」は「花崗岩質アプライト」の略である)

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
1		弥包	10.4	5.9	3.9	255	完存	閃緑岩	挿159
2		弥包	10.1	5.9	4.8	453	完存	珩質頁岩	
3	自然流路	弥包	9.8	7.7	4.0	418	完存	砂岩	挿161
4	S H85202	埋土	9.9	5.9	3.7	325	一部欠損	蛇紋岩	挿5
5	20H	弥包	14.8	8.3	4.9	975	一部欠損	珩質頁岩	
6	14F	弥包	14.8	7.3	4.2	750	完存	砂岩	挿162
7		弥包	15.9	5.8	2.8	382	完存	珩質頁岩	挿166
8	12C	弥包	15.8	5.2	4.7	596	完存	蚊紋岩	
9	16G	弥包	12.2	6.5	5.0	644	完存	閃緑岩	
10		弥包	9.2	5.6	3.5	313	完存	ハンレイ岩	
11	17E付近	弥包	13.2	5.2	3.5	350	完存	ハンレイ岩	
12	S H85113	下層	11.9	5.2	2.9	252	完存	ハンレイ岩	
13	11D	弥包	9.5	5.5	3.1	—	表面剝離	砂岩?	挿160
14	15F~15G	弥包	9.8	6.2	4.3	—	先端欠損	珩質頁岩	
15	12D	弥包	10.5	7.2	5.7	—	刃部欠損	花崗岩	挿164
16		弥包	12.2	7.1	4.9	—	先端欠損	珩質頁岩	
17	20E	弥包	12.6	5.8	4.6	—	先端欠損	ハンレイ岩	
18	14F	弥包	11.8	6.5	4.8	650	完存	ハンレイ岩	
19	16E付近	石斧②	14.3	6.5	4.9	794	完存	ハンレイ岩	
20	12B	弥包	9.6	6.0	3.2	293	完存	ハンレイ岩	
21	21C	弥包	10.5	6.6	4.2	—	基部欠損	泥質砂岩	
22	11F	弥包	13.8	7.1	4.8	800	完存	ハンレイ岩	挿165
23	21B	弥包	14.0	7.3	3.1	422	一部欠損	珩質頁岩	
24	13G	弥包	9.9	6.6	3.2	—	刃部欠損	ハンレイ岩	
25	20E	弥包	7.6	6.7	5.3	—	刃部欠損	玢岩	
26		弥包	8.7	9.2	4.1	339	基部のみ	玢岩	
27	21C	土器溜	6.5	5.7	4.3	—	基部のみ	砂岩	
28	S H85218	7・8 C	4.7	4.9	2.2	—	先端のみ	珩質頁岩	挿56
29	16B	弥包	5.3	4.4	3.7	110	基部欠損	花アプライト	
30	21G	弥包	3.9	1.7	0.6	255	刃部欠損	花アプライト	
31	S D85211	上層3	5.3	6.6	3.4	—	1/2欠損	ハンレイ岩	挿98
32	S D85211	上層	9.5	7.0	5.0	580	完存	ハンレイ岩	
33	10F	弥包	12.4	6.4	4.3	485	基部のみ	珩質頁岩	挿163
34	12F	弥包	13.3	7.4	3.4	440	先端欠損	珩質頁岩	
35	19D	弥包	6.6	6.6	3.6	—	先端のみ	珩質頁岩	
36	17F	弥包	—	—	—	—	先端破片	ハンレイ岩	
37	S H85205	埋土	4.7	4.6	2.3	—	先端のみ	珩質頁岩	挿14
38	21D	古包	—	—	—	—	基部のみ	玢岩	
39	10C	弥包	—	—	—	—	先端欠損	ハンレイ岩	
40	S H86201	床	4.9	7.1	3.2	—	先端のみ	ハンレイ岩	挿66
41	9 B	弥包	—	—	—	—	先端破片	珩質頁岩	
42	19C	弥包	—	2.1	3.2	—	先端のみ	珩質頁岩	
43	21C	弥包	—	6.5	—	—	基部のみ	砂岩	

8. 扁平片刃石斧

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
1	16D	弥包	10.0	6.3	1.9	198	完存	珩質頁岩	挿172
2	21E	弥包	7.2	4.7	0.6	—	先端のみ	頁岩～粘板岩	小型
3		弥包	—	—	—	—	先端のみ	頁岩～粘板岩	小型
4	S X 85206	上層	8.0	6.8	1.5	110	完存	ハンレイ岩	挿169
5	17E	弥包	9.0	7.3	1.3	160	完存	珩質頁岩	挿174
6	15F～15B	弥包	7.2	4.8	1.5	70	完存	安山岩	小型 挿171
7	S H 86201	土坑-1	4.7	3.9	0.9	30	完存	珩質頁岩	小型 挿65
8	8 B	弥包	5.9	5.2	1.5	—	基部欠損	珩質頁岩	挿170
9			10.7	6.2	1.4	110	完存	頁岩～粘板岩	挿173
10	19・20D	弥包	—	—	—	—	一部のみ	珩質頁岩	
11		弥包	12.0	8.0	2.5	360	完存	ハンレイ岩	挿176
12	14E	古包	5.9	3.7	1.2	55	完存	ハンレイ岩?	小型 挿167
13		弥包	12.0	6.3	2.5	302	完存	砂岩	未製品
14	Bトレ	弥包	13.1	6.7	2.8	330	完存	珩質頁岩	
15	23F	弥包	7.5	4.2	1.8	105	完存	珩質頁岩	小型 挿168

9. 柱状片刃石斧(石材のうち「ホルンフェ」は「ホルンフェルス」の略である)

1	10F	弥包	14.0	4.1	4.1	390	完存	珩質頁岩	挿178
2	21C	弥包	9.1	3.8	2.5	—	一部欠損	珩質頁岩	挿175
3		弥包	6.7	2.1	2.3	55	完存	頁岩～粘板岩	小型 挿177
4	13・14G	弥包	5.7	1.5	0.95	—	先端欠損	珩質頁岩	
5	20C	弥包	—	—	—	—	一部のみ	珩質頁岩	
6	21D	弥包	10.7	4.1	1.4	—	2/3欠損	ホルンフェ	
7	17F	弥包	—	4.1	5.7	—	基部のみ	玢岩	

10. 小型石斧

1	S H 85205	埋土	5.9	2.1	0.8	12.1	完存	珩質頁岩	両端部刃部 挿13
2	S H 86101	埋土	6.8	1.9	1.2	25.6	完存	珩質頁岩	のみ状

11. 環状石斧

1	S H 86201	床	半径	5.1	3.0	—	1/2欠損	砂岩	挿67
2	21C	土器溜	半径	4.0	2.4	—	1/2欠損	蛇紋岩	挿179

12. 敲き石

1	20C付近		9.0	5.1	4.6	293	完存	花崗岩	
2	21E付近		10.0	—	3.0	—	1/2欠損	砂岩	
3	17F～20F	弥包	9.0	4.7	3.8	215	完存	花崗岩	
4	自然流路	弥包	8.8	6.8	4.2	335	完存	玄武岩	
5	S D 85211	上層	14.2	5.7	5.6	—	一部欠損	チャート	
6	S H 85210		12.6	5.6	5.3	525	完存	チャート	挿47
7	S H 85210	古包	6.8	6.2	4.0	250	完存	砂岩	挿46
8	26F		10.2	5.9	3.2	480	完存	玢岩	

13. 磨石（擦痕及び敲打痕の著しいもののみとりあげた）

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
1	SH85107	床面	10.9	10.0	8.2	1270	完存	花崗岩	敲打痕あり挿184
2	自然流路	古包	7.6	8.4	4.9	425	完存	花崗岩	挿183
3		弥包	10.5	9.8	7.0	1020	完存	花崗岩	敲打痕あり
4		弥包	9.45	9.2	4.3	525	完存	花崗岩	敲打痕あり
5		弥包	10.8	10.4	6.4	1050	完存	花崗岩	敲打痕あり挿182
6		弥包	11.5	9.3	6.15	910	完存	花崗岩	敲打痕あり
7		弥包	12.1	10.2	5.2	870	完存	花崗岩	敲打痕あり
8		11E	弥包	9.0	5.7	10.4	—	1/2欠損	花崗岩
9	13~15F	弥包	10.5	7.0	4.8	340	完存	花崗岩	
10	15D	弥包	9.0	8.8	7.3	935	完存	花崗岩	
11	表採	弥包	7.5	6.1	5.4	325	完存	花崗岩	
12	19E付近	弥包	10.3	8.5	5.6	710	完存	花崗岩	
13	17G	弥包	9.3	6.8	6.6	630	完存	花崗岩	敲打痕あり
14	22H	弥包	—	6.9	4.9	—	1/3欠損	花崗岩	
15	15E	弥包	—	7.0	6.3	—	1/2欠損	花崗岩	
16		弥包	—	—	5.95	—	1/2欠損	花崗岩	
17	11D	弥包	—	8.5	6.4	—	1/3欠損	花崗岩	
18	12B	弥包	—	—	—	—	1/4残存	花崗岩	
19		弥包	—	—	—	—	1/4残存	花崗岩	
20	10DE	弥包	6.4	3.15	2.6	70	完存	花崗岩	
21	20F	弥包	9.3	5.3	4.6	425	完存	チャート	敲き石か
22	29F	21E	10.4	6.0	4.8	500	完存	ハンレイ岩	敲き石か 挿180
23	試掘	上層	—	5.1	4.3	—	1/3欠損	花崗岩	
24	15・16F	弥包	8.1	8.0	4.8	455	完存	花崗岩	挿181
25	22・23C	弥包	10.5	9.4	7.6	1010	完存	花崗岩	
26	13F	古包	9.5	10.4	6.5	760	完存	花崗岩	
27		弥包	10.4	6.2	4.6	390	完存	花崗岩	
28	15~19FG	古包	9.3	5.6	5.4	395	完存	花崗岩	
29	SH86201	埋土壁	9.8	8.8	4.1	460	完存	花崗岩	敲打痕あり 挿70

14. 石皿（重さの単位はkg）

1	SH85205	床面	25.0	31.5	2.8	16.8	完存	花崗岩	台石？ 挿21
2	SH85202	床面	23.5	30.4	14.3	—	一部欠損	花崗岩	挿6
3	SD85211	13B	36.0	27.5	11.0	22.5	完存	花崗岩	
4	自然流路	弥包	36.5	30.0	13.0	—	一部欠損	花崗岩	
5	SH86101	周辺溝	20.5	17.3	11.5	6.3	完存	花崗岩	
6	SK85212	床面	40.5	18.3	7.2	8.5	完存	花崗岩	台石？ 挿89
7	SK85201	埋土	15.2	13.0	2.2	0.4	完存	砂岩	挿106

15. くぼみ石（1・3の重さはkg）

1	SH86205	床面	29.6	19.7	13.3	12.4	完存	砂岩	敲打痕あり 挿20
2	SH86201	ピット5	15.1	9.7	2.8	505	？	砂岩	石皿兼
3	SH86212	床面	15.9	18.4	6.8	1.0	完存	花崗岩	敲打痕あり 挿89
4	自然流路	弥包	11.4	8.2	4.0	780	完存	花崗岩質砂岩	石皿兼

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
5	15C	弥包	10.7	13.6	2.8	720	完存	花崗岩質砂岩	石皿兼
6	10C	弥包	11.3	9.0	3.3	745	完存	砂岩	石皿兼
7	11D	弥包	18.4	14.1	11.3	3300	完存	花崗岩	不定形
8	17G	弥包	15.9	11.2	4.5	1230	完存	砂岩	石皿兼
9	自然流路	弥包	15.2	15.2	8.7	3500	完存	ホルンフェ	
10	13D F	弥包	17.4	9.7	7.75	2300	完存	砂岩	砥石兼
11	27E	弥包	18.5	8.8	6.4	1385	完存	花アプライト	砥石兼
12	10E	弥包	7.7	6.6	6.5	405	完存	花アプライト	六方体
13	7・8B C	弥包	8.5	6.7	5.6	455	完存	花アプライト	六方体 挿59

16. 砥石(石材のうち「流アプライト」は「流紋岩アプライト」の略である)

1	S H85205	埋土	4.7	2.7	2.0	23	完存	花アプライト	挿17
2	S H85205	上層	3.0	3.5	2.5	10	完存	花アプライト	挿18
3	S H85205	埋土	6.9	4.6	2.9	—	一部欠損	花崗岩	挿19
4	S H85205	埋土	—	—	—	—	一部欠損	花アプライト	
5	S H85205	埋土	4.6	6.0	1.7	48	完存	花アプライト	
6	S H85205	埋土	3.3	3.0	2.5	12	完存	流紋岩	
7	S H85205	上層	4.1	4.0	1.7	30	完存	花アプライト	
8	S H85205	埋土	—	—	—	—	一部欠損	花崗岩	
9	S H85209	西北	12.3	10.8	3.9	—	一部欠損	?	
10	S H85210	下層	5.8	5.1	4.0	—	一部欠損	花アプライト	挿49
11	S H85210	下層	—	—	—	—	完存	花アプライト	挿48
12	S H85210	埋土	6.3	5.8	2.1	100	完存	?	挿50
13	S H85210	埋土	9.0	5.6	2.5	152	完存	?	挿51
14	S H85210	ビット	37.4	17.9	12.6	1.3K	完存	花崗岩	挿52
15	S H85210	埋土	—	—	—	—	一部欠損	泥岩	
16	S H85218	床?	6.9	3.3	1.6	32	完存	砂岩	溝あり 挿58
17	S D85211	埋土	—	—	—	—	一部欠損	花アプライト	
18	S D85211	埋土	—	—	—	—	一部欠損	花アプライト	
19	S D85211	埋土	6.6	4.0	4.3	100	完存	花アプライト	挿99
20	S D85211	埋土	6.9	5.0	3.3	—	1/2欠損	?	挿101
21	S D85211	上層	6.2	3.1	3.1	28	完存	花アプライト	挿100
22	S D85211	埋土	6.6	4.8	3.7	103	完存か	花アプライト	挿102
23	S D85211	埋土	5.5	5.7	3.1	100	完存	砂岩	
24	S D85211	埋土	6.2	5.4	5.3	—	一部欠損	花崗岩	
25	S D85211	埋土	—	—	—	—	一部欠損	花アプライト	
26	S K85212	埋土	—	—	—	—	2/3欠損	凝灰岩	
27	S K85213	埋土	5.1	3.3	2.0	30	完存	砂岩	
28	S K85215	埋土	3.9	3.0	2.25	35	完存?	花アプライト	
29	自然流路	弥包	9.7	6.8	5.6	—	1/2欠損	花崗岩	
30	自然流路	弥包	40.0	14.0	12.0	7900	完存	砂岩	
31	自然流路	弥包	—	—	—	—	2/3欠損?	花崗岩	
32	S H86201	下層	—	—	—	—	一部欠損	花アプライト	
33	S H86201	床	7.3	4.4	2.8	102	完存	花アプライト	挿73
34	S H86201	壁付近	9.5	3.5	2.9	80	完存	砂岩	挿69
35	S H86201	床	5.4	3.6	1.9	—	2/3欠損	?	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石 材	備 考
36	S H86201	下層	5.0	4.4	1.7	—	一部欠損	砂岩	挿72
37	S H86201	下層	7.0	3.8	2.0	—	一部欠損	花アブライト	挿74
38	S H86201	下層	3.5	4.2	3.3	—	一部欠損	花アブライト	挿71
39	S H86201	下層	5.5	4.7	2.8	—	一部欠損	花アブライト	
40	S H86201	下層床	3.9	4.3	3.1	—	一部欠損	花アブライト	
41	S H86201	埋土	—	—	—	—	一部欠損	砂岩	
42	S H86203	埋土	6.4	4.4	2.5	85	完存	花アブライト	
43	S H86203	埋土	—	—	—	—	一部欠損	砂岩	
44	S H86203	埋土	—	—	—	—	?	砂岩	
45	S H86212	埋土	—	—	—	—	一部欠損	砂岩	
46	S H86212	埋土	—	—	—	—	?	花アブライト	
47	S D86206	埋土	5.9	3.0	2.8	60	完存	ハンレイ岩?	
48	S D86211	下層	3.9	2.6	2.4	—	一部欠損	花アブライト	
49	S D86211	下層	9.1	5.5	4.8	—	?	砂岩	挿104
50	S D86211	下層	3.2	1.4	1.5	2	完存	花アブライト	挿103
51	S K85201	埋土	15.2	11.2	3.2	1050	完存	?	
52	16D	弥包	6.6	2.7	2.4	50	完存	花アブライト	方柱状 挿185
53	19C	弥包	6.8	2.9	2.7	62	完存	花アブライト	方柱状
54	S H86110	埋土	9.9	2.7	2.5	118	完存	花アブライト	方柱状
55	11E	弥包	8.0	4.9	3.6	—	一部欠損	半花崗岩	方柱状
56	10C	古包	3.9	2.2	1.1	—	?	花アブライト	方柱状
57	10C	弥包	9.1	2.7	2.2	108	完存	花アブライト	方柱状
58	16D	弥包	3.1	1.4	1.4	—	1/2欠損	花アブライト	方柱状
59		古包	2.3	1.8	1.8	—	1/2欠損	花アブライト	方柱状
60	19G	弥包	5.2	3.2	3.0	80	完存?	花崗岩質砂岩	方柱状
61	13~15E	弥包	5.5	3.5	3.1	98	完存	花アブライト	方柱状
62	12F	弥包	10.4	4.4	3.9	320	完存	珪質頁岩	方柱状 挿187
63	17G	弥包	8.5	4.5	1.7	100	完存	花アブライト	板状 挿186
64		弥包	8.4	4.1	3.2	110	完存	花アブライト	板状
65	S K85206	埋土	—	4.6	1.8	—	1/2欠損	花アブライト	板状
66	11A	弥包	9.6	4.9	4.0	—	一部欠損	泥質凝灰岩?	
67	11A B	弥包	5.9	4.0	2.2	99	完存	花アブライト	
68	18D	弥包	4.1	3.5	1.1	32	完存	花アブライト	
69	20B	弥包	4.0	2.8	1.8	—	一部のみ	花アブライト	
70	20C	弥包	7.9	5.1	3.2	—	一部欠損	花アブライト	
71	11F	弥包	10.0	5.4	4.5	289	完存	花アブライト	
72	Aトレ	古包	9.6	5.0	4.5	242	完存	花アブライト	挿188
73	26C	下層	8.6	3.5	4.5	—	1/2欠損	泥質凝灰岩?	
74	9C	弥包	4.4	3.4	2.8	70	完存	花崗岩質砂岩	
75	20B付近	弥包	5.9	4.9	2.4	145	完存	花崗岩質砂岩	
76	150E	弥包	3.3	—	—	—	一部のみ	泥質凝灰岩?	
77	150DE	弥包	—	3.3	—	—	一部のみ	泥質凝灰岩?	
78	10G	弥包	—	5.5	3.3	—	1/2欠損	花アブライト	
79	12D	弥包	4.8	4.1	1.5	65	完存	花崗岩質砂岩	板状
80	21	古包	—	4.0	2.6	—	1/2欠損	花アブライト	三角柱
81	20F	弥包	2.7	4.3	3.0	67	完存	花アブライト	方柱状

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
82	10FG	弥包	5.3	7.3	2.9	—	1/2欠損	花アプライト	
83	20以東	弥包	5.0	3.5	2.1	—	1/2欠損	花アプライト	
84	18・19FG	弥包	5.5	2.8	1.6	—	1/2欠損	花アプライト	板状
85	10~12FG	弥包	4.5	2.8	1.1	20	完存	花アプライト	
86		弥包	5.2	4.2	1.7	—	一部欠損	花アプライト	
87		弥包	—	—	2.3	—	2/3欠損	花アプライト	
88	25H	弥包	5.2	6.1	2.3	—	2/3欠損	花アプライト	
89	21・22E	弥包	—	—	1.2	—	?	花崗岩質砂岩	板状
90	13~15G	弥包	5.1	3.8	2.3	—	?	花崗岩	
91	15G	弥包	11.5	7.5	4.0	445	完存	花アプライト	挿190
92		古包	8.0	6.9	1.5	—	?	?	
93	11F	弥包	6.7	7.2	3.8	—	1/2欠損	花アプライト	
94	20E	弥包	7.4	9.3	2.5	—	1/2欠損	花アプライト	板状
95	Fライン	2015F	9.0	8.2	3.3	—	一部欠損	花崗岩質砂岩	板状
96	13・14FG	包含層	9.1	—	2.1	—	一部欠損	泥岩	
97	21C	弥包	13.0	8.2	2.3	—	一部欠損	?	板状
98	S H86203	床面	10.6	9.3	1.7	—	一部欠損	花崗岩質砂岩	板状
99		古弥包	10.1	10.9	3.3	345	完存	?	板状
100		弥包	5.4	5.6	1.3	—	1/2欠損	花崗岩	板状
101	14G	弥包	15.9	6.9	4.9	—	一部欠損	砂岩	
102	14E	古包	12.7	—	2.4	—	1/2欠損	珪質頁岩	
103		弥包	—	4.4	3.5	—	1/2欠損	花崗岩	
104	22F	弥包	—	—	—	—		花崗岩	
105	13D	弥包	—	—	—	—		花崗岩	
106	21ライン	弥包	—	4.7	—	—		花崗岩	
107	9C	弥包	3.6	4.9	3.4	102	完存	花アプライト	
108	13・14G	弥包	—	7.1	2.5	—	一部欠損	花崗岩	
109	21D	弥包	8.5	6.4	3.1	250	完存	砂岩	
110	16C	弥包	—	—	4.6	—	1/2欠損	花崗岩	
111	15G	弥包	8.5	6.5	3.7	—	一部欠損	花アプライト	
112	19D	弥包	7.4	—	—	—	一部欠損	花崗岩	
113	15B	弥包	9.8	5.4	4.6	—	一部欠損	珪質頁岩	
114	15D	弥包	7.9	6.3	3.0	153	完存	花アプライト	
115	27F	弥包	7.7	4.6	6.5	250	完存	花アプライト	
116		弥包	12.7	6.5	7.2	680	完存	珪岩?	挿192
117	17D	弥包	13.1	9.3	7.7	900	完存	花アプライト	挿193
118	10C	古包	6.9	5.5	4.5	—	一部欠損	花崗岩質砂岩	
119	17C	古包	7.7	3.3	2.1	75	完存	砂岩	円レキ
120	15F15G	弥包	17.1	12.2	5.4	1575	完存	流紋岩	石皿状 挿195
121	11B	弥包	21.2	8.0	6.5	1610	完存	花アプライト	方柱状 挿194
122	18F	弥包	20.0	15.0	5.6	2500	完存	花アプライト	石皿状
123		弥包	—	5.9	5.2	—	?	花アプライト	
124	10B	弥包	17.7	9.8	6.3	2800	完存	流アプライト	
125	10DF	弥包	—	8.8	6.5	—	1/2欠損	花アプライト	
126		弥包	—	—	—	—	?	花アプライト	
127	19E	弥包	10.8	8.0	—	—	1/4欠損?	花アプライト	

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
128	自然流路	上層	—	—	4.9	—	?	花崗岩	
129	S K85201	埋土	—	—	7.9	—	?	花崗岩	
130	11D	弥包	—	—	4.2	—	?	花崗岩	
131	自然流路	弥包	10.3	13.1	5.6	—	1/2欠損	花アブライト	
132	21E	弥包	—	11.2	7.1	—	1/2欠損	?	
133	自然流路	弥包	14.3	11.3	4.7	—	?	砂岩	
134	S K85201	埋土	13.4	12.0	4.5	—	?	泥岩	
135	18B	弥包	15.6	9.6	4.7	—	1/2欠損	花崗岩質砂岩	
136	11D	弥包	—	—	—	—		花崗岩	
137	124	弥包	14.4	11.7	4.4	1500	完存	花崗岩	
138	10・13D F	弥包	18.1	16.0	9.0	2300	完存	花アブライト	
139		弥包	13.5	11.1	5.4	1400	完存	砂岩	
140	自然流路	弥包	18.5	15.9	10.2	—	?	泥岩	
141	14C	弥包	—	5.8	—	—	?	花崗岩	
142		弥包	6.8	4.3	3.5	215	完存	花アブライト	
143	自然流路	弥包	22.0	15.7	9.5	4200	完存	花崗岩	

17. 管 玉(1～22と25～40と42～48は製品・23と24と41は未製品)

1	S H85205	東北部	0.9	—	0.23	0.02	完存	緑色凝灰岩	挿22
2	S H85205	東北部	0.75	—	0.15	0.06	完存	緑色凝灰岩	挿23
3	15G	弥包	0.8	—	0.23	0.07	完存	緑色凝灰岩	挿24
4	15G	弥包	0.8	—	0.15	0.06	完存	緑色凝灰岩	挿25
5	15G	弥包	0.8	—	0.23	0.06	完存	緑色凝灰岩	挿26
6	15G	弥包	0.9	—	0.23	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿27
7	15G	弥包	0.68	—	0.18	0.05	一部欠損	緑色凝灰岩	挿28
8	15G	弥包	1.05	—	0.15	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿29
9	15G	弥包	1.05	—	0.23	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿30
10	15G	弥包	0.98	—	0.15	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿31
11	15G	弥包	0.53	—	0.15	0.04	一部欠損	緑色凝灰岩	挿32
12	15G	弥包	0.75	—	0.15	0.06	完存	緑色凝灰岩	挿33
13	15G	弥包	0.45	—	0.15	0.04	1/2欠損	緑色凝灰岩	挿34
14	15G	弥包	1.2	—	0.15	0.09	完存	緑色凝灰岩	挿35
15	15G	弥包	1.05	—	0.18	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿36
16	15G	弥包	0.68	—	0.15	0.05	一部欠損	緑色凝灰岩	挿37
17	15G	弥包	1.05	—	0.15	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿38
18	15G	弥包	0.83	—	0.15	0.07	完存	緑色凝灰岩	挿39
19	15G	弥包	1.05	—	0.23	0.08	完存	緑色凝灰岩	挿40
20	15G	弥包	0.3	—	0.15	0.02	一部のみ	緑色凝灰岩	挿41
21	15G	弥包	0.7	—	0.23	0.07	一部欠損	緑色凝灰岩	挿42
22	S H85205	脇	0.89	—	0.24	0.12	完存	緑色凝灰岩	
23	S H85210	埋土	3.3	—	1.0	7.16	完存	緑色凝灰岩	未製品 挿53
24	S H85210	床	—	—	1.3	9.10	完存	緑色凝灰岩	未製品 挿54
25	S H86201	中層	1.2	—	0.25	0.05	完存	緑色凝灰岩	
26	S H86201	床	1.0	—	0.3	0.12	完存	緑色凝灰岩	挿78
27	S H86201	床	0.95	—	0.2	0.09	完存	緑色凝灰岩	
28	S H86201	床	0.75	—	0.3	0.06	完存?	緑色凝灰岩	挿77

番号	出土地	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	石材	備考
29	S H86202	床	0.7	—	0.3	0.03	一部欠損	緑色凝灰岩	
30	S H86203	下層	1.2	—	0.3	0.14	完存	緑色凝灰岩	挿83
31	S H86203		0.5	—	0.3	0.04	1/2欠損	緑色凝灰岩	挿81
32	S H86203	下層	1.3	—	0.23	0.12	完存	緑色凝灰岩	挿82
33	S H86203		0.4	—	0.23	0.02	一部のみ	緑色凝灰岩	挿80
34	S H86204	床	1.0	—	0.3	0.11	完存	緑色凝灰岩	挿87
35	S D86211	埋土	0.6	—	0.25	0.03	一部欠損	緑色凝灰岩	
36	15~17 F	弥包	2.0	—	0.4	0.30	完存か	緑色凝灰岩	
37	23 G	弥包	—	—	0.5	—	一部のみ	緑色凝灰岩	
38	21 G		—	—	0.7	—	一部のみ	緑色凝灰岩	
39	11 E	弥包	—	—	—	—	一部のみ	緑色凝灰岩	
40	10 F	弥包	2.3	—	0.9	3.12	完存	緑色凝灰岩	
41	19 F G	弥包	2.7	—	1.2	7.08		緑色凝灰岩	未製品
42	18 F 以北	弥包						緑色凝灰岩	原石
43	17 E	弥包						緑色凝灰岩	原石
44	15~17 F	弥包						緑色凝灰岩	原石
45	15~17 F	弥包						緑色凝灰岩	原石
46	16 H	弥包						緑色凝灰岩	原石
47		弥包						緑色凝灰岩	原石
48		弥包						緑色凝灰岩	原石

18. 石 鋸

1	S H86201	床	2.8	1.8	0.18	—	一部欠損	紅廉片岩	挿76
2	S D85211	埋土	3.45	2.3	0.25	—	一部欠損	紅廉片岩	
3	S D86211	埋土	5.7	1.85	0.3	—	一部欠損	紅廉片岩	
4	21 B	弥包	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
5	14 B	弥包	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
6	18・19 F G	弥包	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
7	19 F	弥包	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
8		弥包	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
9	?	?	—	—	—	—	破片	紅廉片岩	
10	21・22 E	弥包	—	—	0.5	—	破片	紅廉片岩	

第4節 古墳時代

第1項 概要

(1) 遺構・遺物の概要

この時代に該当する遺構は少なく、集落遺跡としてまとまった資料を得ることはできなかった。ただ、前期の遺物が自然流路に伴う落ち込み部分から多量に出土していることから、付近に前期集落の存在が予想される。古墳時代後期の遺構・遺物は極端に少なく、この地区での大きな空白期の存在が予想される。

古墳時代前期の遺構として、溝状遺構と土器溜まり及び自然流路に伴う落ち込みがある。包含層(灰褐色粘性砂質土)内から出土した前期の遺物は少なく、整理箱にして2箱に満たない。なお、包含層内から、小型仿製鏡が出土している。古墳時代前期に埋没した自然流路の落ち込み内から整理箱にして約30箱の土器がまとまって出土している。

古墳時代後期の遺構は土坑1基のみである。検出面は、次節の遺構群と同一面で、灰褐色粘性砂質土の上面にあたる。なお、包含層内からの古墳時代後期の遺物の出土は、皆無に等しい。

(2) 古式土師器の分類

この項で扱う古式土師器とは、布留式併行期以降、須恵器出現期以前とする。庄内式併行期の土器については、この地域の特性から考えて弥生時代の土器として扱う。

志高遺跡出土の古式土師器の量は、整理箱にして約150箱にのぼる。それは、土器総出土量の約15%にあたる。そのうち遺構から出土したものは、舟戸南地区のSD85102・SK86116・SX85118・SX85117及び自然流路の土器溜まり、舟戸北地区のSK86126・SK86127、岡安地区のSH86241・SH86247・SH86151からの土器である。その他に、遺構に準ずる一括性の高いものとしては、舟戸南地区の自然流路の上層・中層・下層がある。またこれより一括性の低くなるものに、舟戸北地区の東側排水溝出土の土器群がある。別に、舟戸南地区、舟戸北地区、岡安地区の各々の地区に包含層出土の古式土師器が認められる。

以下、各地区ごとに遺構、それに準ずるもの、包含層出土の順に古式土師器の実測図を掲示し、土器の説明を行う。遺構出土分については、原則的にはすべてを図示する。包含層出土の土器は、完形品と遺構から出土した古式土師器にない形式のものを中心に掲載する。

土器を説明するにあたり、壺形土器、甕形土器、鉢形土器(小型丸底壺を含む)、高杯形土器、器台形土器についての形式分類を行った。各々その分類基準は、主に口縁部の形態に基づき、それに全体の形状、調整の相違を勘案した。アルファベットの大文字で大別し、

必要に応じ小文字で細分している。

なお、壺形土器A～Lに含まれない3点については、個別に記述する。また、手捏ねのミニチュア土器については一括して扱う。

a 壺形土器

A～Lに大別される。

壺A 屈曲する頸部から、口縁部がさらに外上方に外反する二重口縁壺である。体部は、長胴形もしくは球形に近い形態をなし、底部は丸い。

壺B 屈曲する頸部から、口縁部がさらにやや外傾して短く立ち上がる二重口縁壺である。筒状をなす頸部外面には有軸羽状文を施す。体部は球形に近い。

壺C 屈曲する頸部から、口縁部がさらにほぼ垂直に立ち上がる二重口縁壺である。「5」字状口縁と通称される山陰系の壺と考えられる。

壺D 屈曲する頸部から、口縁部がさらにやや外上方に外傾してのびる二重口縁壺である。体部は、中位より上方に最大径をもつ大型の壺で、底部はいくぶん平底に近いと考えられる。

壺E 屈曲する頸部から、口縁部がさらに大きく外反して開く小型の二重口縁壺である。体部は、球形をなすと考えられる。

壺F 屈曲する頸部から、外上方に直線的にのびる長い口縁部が続く大型の直口壺である。体部は、ほぼ中位に最大径をもつ長胴形で、底部は丸底と考えられる。口縁端部は、自然に丸くおさまるもの、外面に肥厚するもの、内面に肥厚するもの、の3種がある。

壺G 屈曲する頸部から、やや外上方に直立ぎみに長くのびる口縁部をもつ中型の直口壺である。体部は、球形をなす。

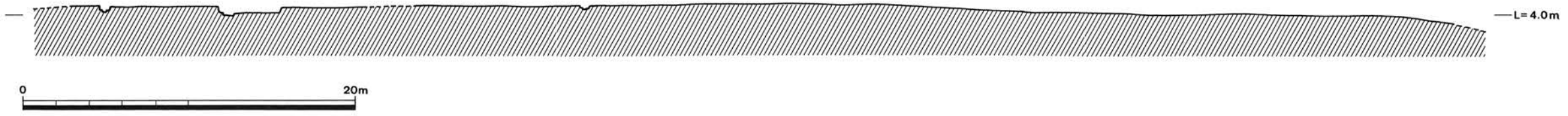
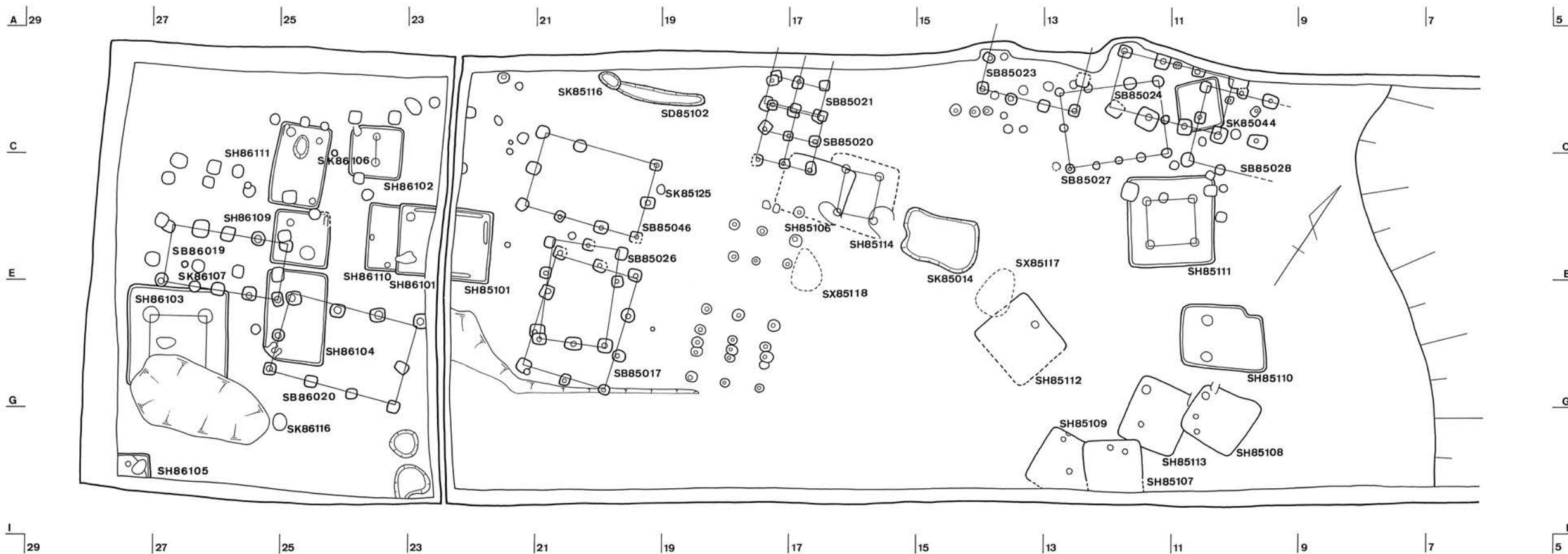
壺H 頸部から屈曲して、外上方に直線的に開く長い口縁部をもつ小型の直口壺である。体部は、扁球ぎみの球形をなし、丸底を呈する。

壺I 屈曲する頸部から、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ大型の短頸壺である。体部は、球形をなす。

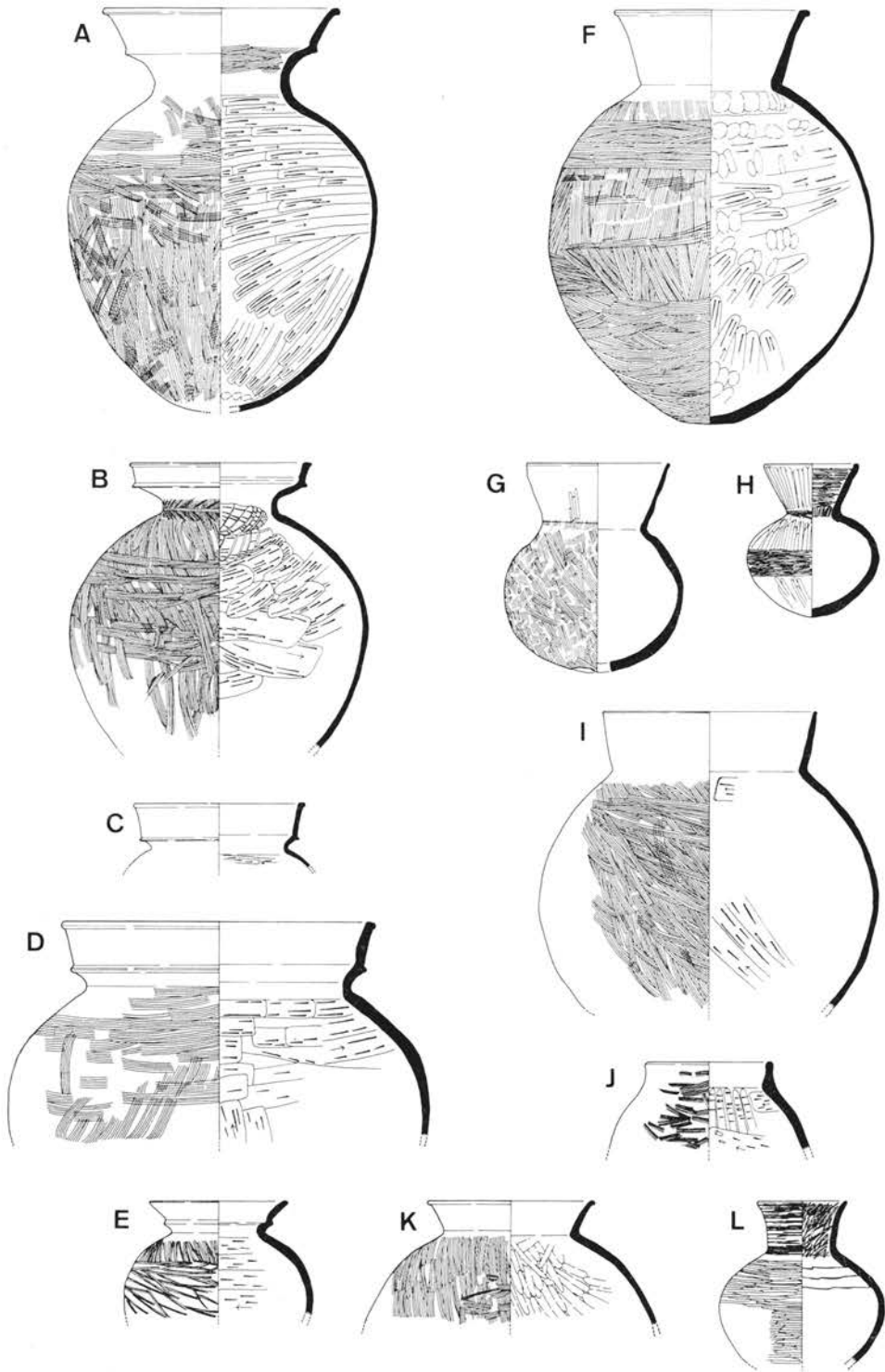
壺J ゆるやかに屈曲する頸部から、短く垂直に立ち上がる口縁部をもつ小型の短頸壺である。

壺K 屈曲する頸部から、短いながらも大きく外上方に開く口縁部をもつ広口壺である。体部は、球形に近い。口縁端部は、自然に丸くおさまるもの、外面に丸く肥厚するもの、内面にやや肥厚するもの、の3種がある。

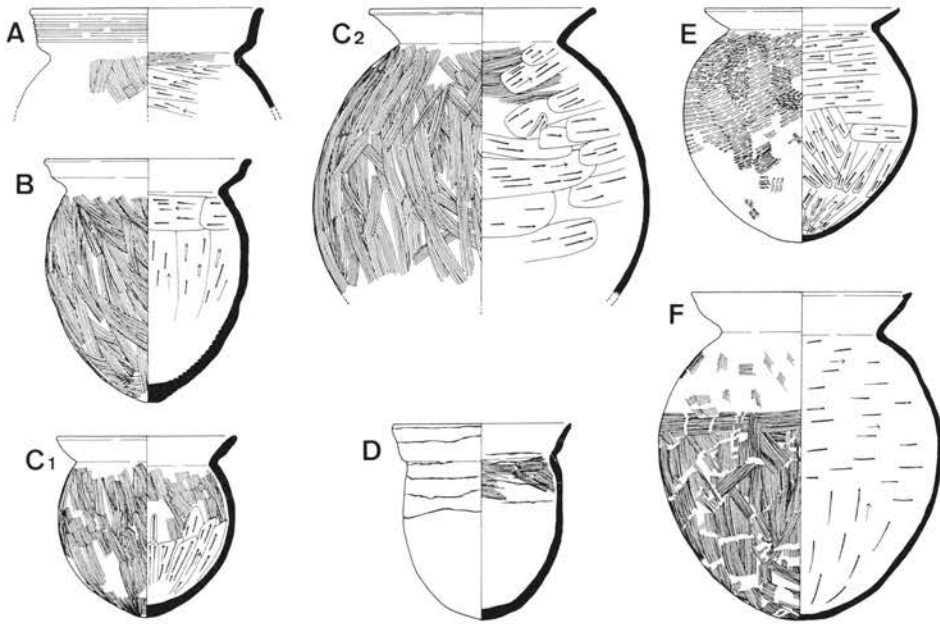
壺L 頸部がやや外上方に直立ぎみに長くのび、端部近くでさらに広がる口縁部を持つ細頸壺で、体部はやや扁球形をなす。



第165図 舟戸南地区古墳時代～奈良時代検出遺構図



第166図 古墳時代前期の土器分類図1(壺形土器)



第167図 古墳時代前期の土器分類図2(甕形土器)

b 甕形土器

A～Fに大別される。Cは、口径の大きさによりC₁・C₂に細分する。

甕A 屈曲する頸部から、やや外傾して立ち上がる複合口縁をもつ甕である。口縁部外面に5条程度の擬凹線文を施す。

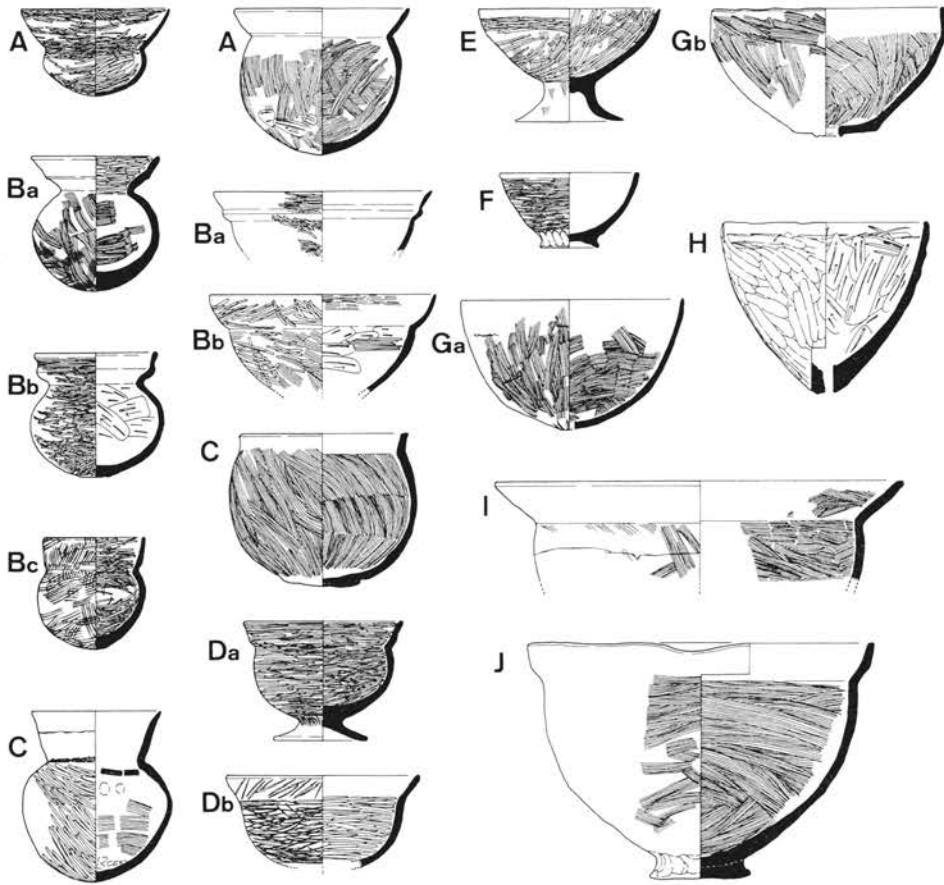
甕B 屈曲する頸部から、外反ぎみに外上方に立ち上がる複合口縁をもつ甕である。口縁部外面には擬凹線文を施さず、横ナデによって仕上げる。体部は長胴形で、底部はへこみ底、もしくは尖底ぎみとなる。

甕C 単純「く」字形に屈曲して外上方に開く口縁部をもつ甕である。口縁端部は、自然に丸くおさまる。体部は、球形または一部長胴形をなし、底部は、丸底かやや尖底ぎみを呈する場合が多い。一般に体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、またはハケにより調整する。そのうち、口径16.0cm未満のものをC₁、16.0cm以上のものをC₂に細分する。

甕D くだらかな肩部から、ゆるやかに外上方に開く口縁部をもつ広口の甕である。体部は、長胴形で、底部は、尖底ぎみの丸底を呈する。

甕E 単純「く」字形に屈曲して、外上方に開く口縁部をもつ。口縁端部は、自然に丸くおさまる。体部は球形で、底部はやや尖底ぎみの丸底を呈する。甕Cと形態的には同様だが、体部外面をタタキ成形する点で異なる。内面はヘラケズリ、またはハケ調整を施す。

甕F 単純「く」字形に屈曲して、外上方に開く口縁部をもつ。口縁端部内面を肥厚さ



第168図 古墳時代前期の土器分類図3(鉢形土器)

せる点で甕C・Eと異なる。体部は、球形もしくはやや長胴形をなし、底部は丸底を呈する。体部外面はハケ、内面はヘラケズリによって調整する。いわゆる布留式の甕である。

c 鉢形土器

小型丸底壺と通常の鉢を含める。小型丸底壺はA～Cに大別し、Bは、口縁部の形態により三つに細分する。鉢は、A～Jに大別し、さらに口縁部の形態によりB、D、Gをおのおのa、bに細分する。

小型丸底壺A 丸底で扁球体の小型の体部から、外上方に内湾しつつ大きく広がる口縁部をもつ。小型丸底壺と通称される。調整は、内外面ともヘラミガキで仕上げる場合が多い。

小型丸底壺B 丸底またはへこみ底ぎみの球形の体部から、屈曲して立ち上がる口縁部をもつ小型品である。そのうち、口縁部が二重口縁をなすものをBa、複合口縁をなすものをBb、「く」字状口縁をなすものをBcに細分する。

小型丸底壺C 丸底で球形の体部から、「く」字形に屈曲して外上方にのびる口縁部を

もつ。ヘラミガキ調整を施す薄手のものと、調整不良の厚手のものの2種がある。

鉢A 丸底または尖底ぎみの底部から、肩部に最大径をもつ半球状もしくはやや扁球状の体部が続き、「く」字形に屈曲して大きく開く短い口縁部をもつ。

鉢B 丸底で扁平な半球形の浅い体部から、ゆるやかに屈曲して口縁部が外上方に大きく広がる鉢である。口縁部の形態により、外反する複合口縁をなすものをBa, 内湾してのびるものをBbに細分する。

鉢C 球形または半球形の体部から、わずかに外反して開くごく短い口縁部をもつ。底部は、不整形な粘土円板を貼り付けたものと、丸底に近い平底を呈する杯形のものがある。

鉢D 丸底で半球形の体部から、ゆるやかに屈曲して外上方に開く口縁部をなす。円錐状に広がる低い脚台をもつ台付鉢である。口縁部の形態により、複合口縁をなすものをDa, まっすぐに外傾するものをDbに細分する。

鉢E 丸底の半球形の浅い体部が、内湾ぎみに外上方にのび、口縁端部は自然に薄くおさまる。円錐状に広がる低い脚台をもつ台付鉢である。

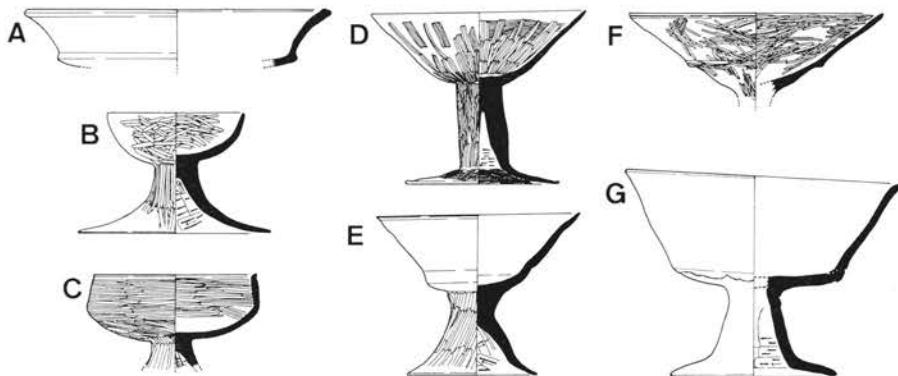
鉢F 内湾して外上方にのびる半球状の碗形の体部をもつ。口縁端部は、外反して尖りぎみにおさまるものと、丸くおさまるものがある。底部は突出し、あげ底状を呈する。

鉢G 半球状の体部をもち、底部に穿孔を施す有孔鉢である。単孔が多いと考えられる。底部及び口縁部の形態より、丸底で内湾して自然におさまるGaと、平底で直立ぎみに立ち上がるGbに細分する。

鉢H 深い逆円錐状の体部をもつ尖底の有孔鉢である。

鉢I ゆるやかに「く」字形に屈曲して外上方に開く口縁部をもつ広口の鉢である。中型・大型品を一括する。体部は半球形で丸底を呈すると推定される。

鉢J 深い半球状の体部からゆるやかに屈曲し、内湾しつつ外上方にのびる口縁部をもつ。さらに口縁部の一部を外傾させてなだらかな片口を設ける。片口付大型鉢である。



第169図 古墳時代前期の土器分類図4 (高杯形土器)

d 高杯形土器

杯部の形態によりA～Gに大別する。

高杯A 水平ぎみにのびる体部から、屈曲して大きく外反する口縁部が続く浅い杯部をもつ。

高杯B 半球状をなす碗形の杯部と、「ハ」字形に大きく裾部の広がる脚台部を有する。

高杯C 内湾しつつ水平ぎみにのびる体部から、丸く屈曲して上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は、外反して薄くおさまるものと、自然に丸くおさまるものがある。脚台部を残存させるものはないが、「ハ」字形に開く円錐状を呈するものと考えられる。

高杯D 杯部は内湾して立ち上がる体部から、わずかに外反しつつ外上方に大きくのびる口縁部をもつ。脚台部は、円筒に近い長い柱状部から、屈折して大きく開く裾部をもつものと、ゆるやかに広がるものがある。

高杯E 杯部は小さい底部から稜をなして屈曲して外上方に立ち上がり、さらに外傾して外反ぎみに開く口縁部をもつ。脚台部はなだらかな円錐状に広がる。

高杯F 内湾して外上方に広がる体部から稜をなして屈曲し、外反しながら開く口縁部をもつ比較的浅い杯部を呈する。脚台部の形状は不明である。

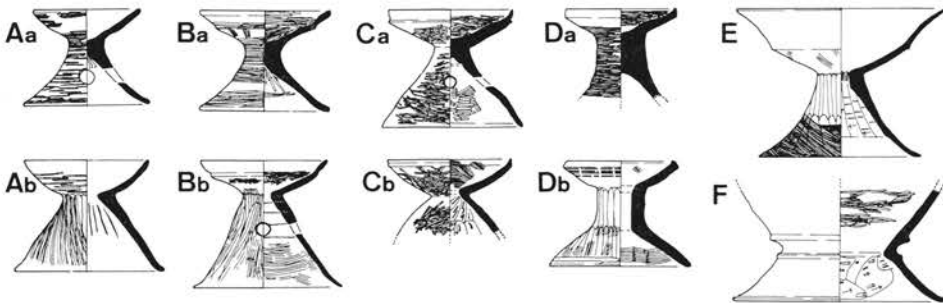
高杯G 杯部は水平ぎみにのびる体部から角度をなして明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に開く。脚台部は、ゆるやかに広がる柱状部と大きく開く裾部からなるものが多い。

e 器台形土器

受け部の形態を中心にA～Fに大別する。さらにA～Dについては体部に円孔を貫通させない中実のものをa、貫通させる中空のものをbに細分する。

器台A 外上方に内湾ぎみに開く受け部と、なだらかな円錐状に広がる脚台部をもつ小型器台である。

器台B 外上方にのびる体部から、稜をなしてさらに外反ぎみに開く複合口縁をもつ受け部と、なだらかな円錐状に広がる脚台部をもつ小型器台である。



第170図 古墳時代前期の土器分類図5(器台形土器)

器台C 外上方にのびる体部から、屈曲して直立ぎみに立ち上がる口縁部をもつ受け部と、なだらかな円錐状に広がる脚台部をもつ小型器台である。

器台D 外上方にのびる体部から、直上もしくは内上方に短く立ち上がる口縁部をもつ受け部と、円筒に近い柱状部から大きく開く裾部に続く脚台部をもつ小型器台である。

器台E 受け部は内湾ぎみに外上方にのびる体部から稜をなして屈曲し、外反しながら大きく開く口縁部が続く。脚台部は「ハ」字形に大きく広がる円錐状を呈する。体部に円孔を貫通させ中空となる。

器台F 短い頸部に大きく広がる受け部と脚台部をもつ山陰系の鼓形器台である。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

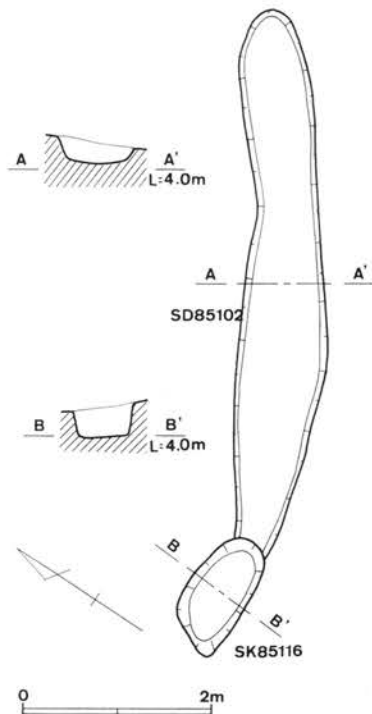
(1) 前期

SD85102(第171・172図) 長さ6m・幅0.8m・深さ0.4mを測る溝状遺構である。19B区付近で検出した。確実に両端で途切れており、遺構の性格は不明である。埋土は基本的に1層で、中層から下層にかけて遺物が出土した。

出土した土器には、壺37%(10個体 A 3点, F 4点, K 3点), 甕30%(8個体 C₁ 4点, F 4点), 小型丸底壺4%(1個体 Bc 1点), 鉢4%(1個体 底部1点), 高杯7%(2個体 G 2点), 器台19%(5個体 F 5点)がある。総個体数は27点以上である。全体に壺の割合が高く、かつヘラ記号を施すものが多い。

壺A(1・2) 1は、口縁端部がやや外反ぎみに自然におさまる。頸部・口縁部は内外面とも横ナデ調整する。両方とも頸部外面に縦2条のヘラ記号を刻む。2は、口縁部が剝離しているが、頸部内面の貼り付け面に浅いキザミを入れて接合しやすいようにしている。また、擬口縁部外面にもキザミを入れ、装飾している。ともに、淡褐色を呈する。1は口径19.8cm, 2は擬口縁部径16.8cmを測り、1より大型と推定される。

壺F(3~5) 3は、体部外面全面に縦方向の明瞭なハケ調整の痕跡を残す。内面は、3が横方向の明瞭なハケ, 5は、ヘラケズリが施される。



第171図 SD85102・SK85116実測図

3・4は、口縁部内外面に同じくハケ調整と横ナデが、5は内面に横ナデ調整がなされる。なお、口縁部外面に3は3条の、4は2条の類似したヘラ記号を施す。色調は、3・4が暗赤褐色、5が明褐色を呈する。口径は、3・4がともに16.2cm、5が14.4cmを測る。

壺K(6) 口縁端部は、内上方につまみ出す。調整は、内外面とも摩滅が著しく不明である。胎土は密で、淡黄褐色を呈し、口径は13.6cmを測る。

甕C₁(7~9) 体部外面は、7・8がハケ、9がヘラミガキで、内面は、7が上部と中央部の一部に横ハケを施す以外はヘラケズリ、8は横ハケ、9は上部にヘラミガキ、底部から中央部にヘラケズリを施す。口縁部は、外面は7・8が横ナデ、9はヘラミガキ、内面は7がハケ、8が横ナデ、9はひき続きヘラミガキで調整する。なお、7の体部と口縁部の外面に各々黒斑を有する。色調は、7が淡褐色、8・9が明褐色を呈する。口径は、7が13.4cm、8が10.4cm、9が15.6cmを測る。

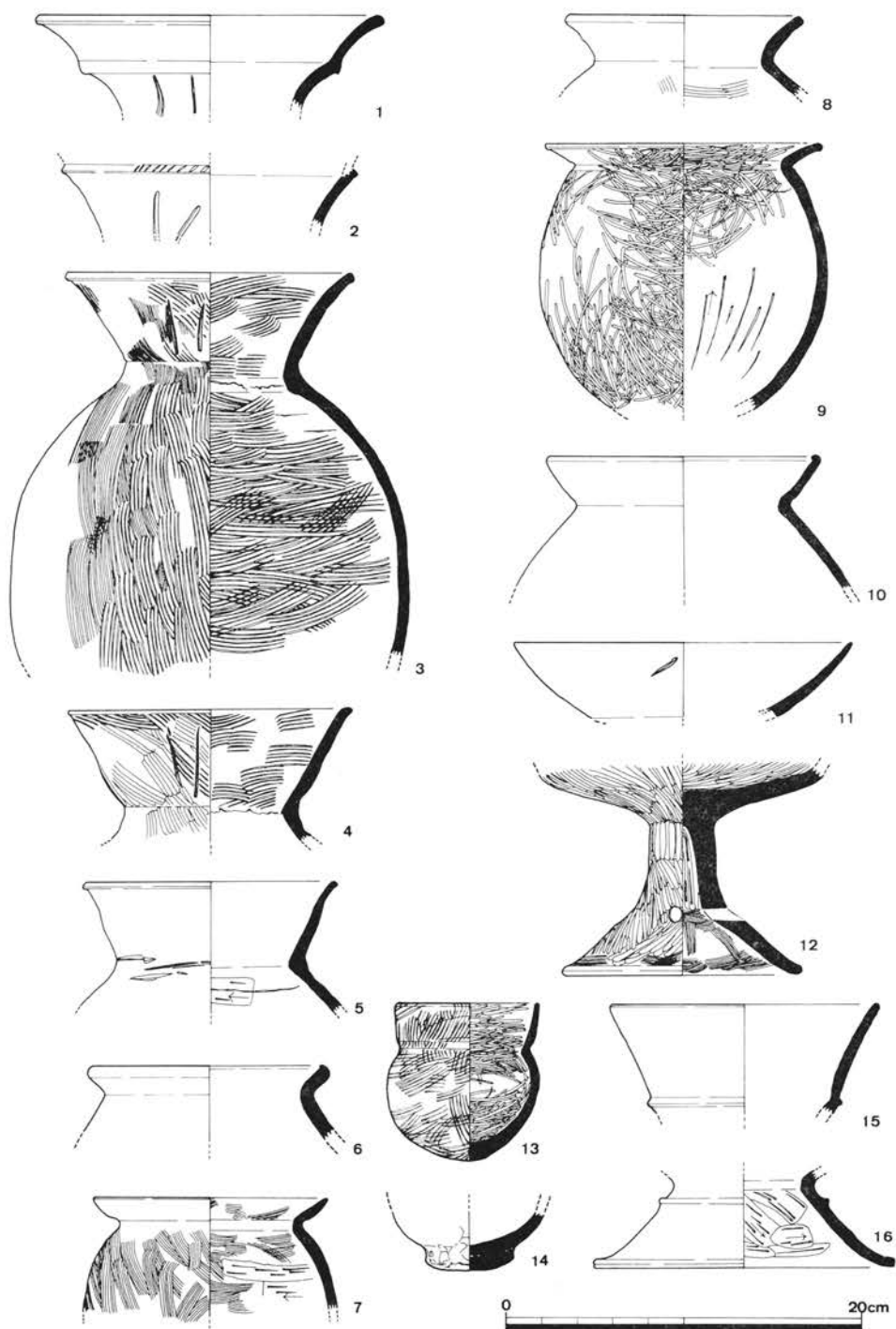
甕F(10) 口縁部内外面に横ナデを施す。胎土は、比較的密で、淡褐色を呈する。口径15.4cmを測る。

小型丸底壺Bc(13) 外面全面に粗いハケ調整、内面には細かいヘラミガキを施すが、器壁は比較的厚い。黒斑は、体部から底部にかけて内外面に各々見られる。淡橙褐色を呈し、口径8.2cm・器高8.9cmを測る。

底部(14) 鉢の底部と考えられる。内湾して外上方にのびる体部に、不整形な粘土円板を貼り付けて平底をつくったと考えられる。体部内外面は、不定方向のナデ、底部外面には粗雑な指押さえの痕跡を残し、調整は不良である。胎土は、比較的密で、淡褐色を呈する。

高杯G(11・12) 残存部分が小さいため原形は不明だが、ともに高杯Gの範疇に含まれると考えられる。11は、口縁部が外傾して開き自然に薄くおさまる。口縁部内外面は横ナデ調整する。口縁部外面に右上から左下へ斜めに1条のヘラ記号が見られる。色調は明褐色を呈し、口径19.2cmを測る。12は、水平ぎみにのびる体部から角度をなして明瞭に屈曲する。脚台部は、円筒に近くのとびる柱状部となだらかに大きく開く裾部をもつ。脚台部に1か所直径0.8cmの透孔がみられる。杯部内外面はヘラミガキ、脚台部外面は裾部に一部横ハケの後ヘラミガキ、内面は柱状部にヘラケズリ、裾部にハケを施す。胎土は、非常に密で、明褐色を呈する。裾部は径13.6cmを測る。

器台F(15・16) 15は、受け部突帯の稜がほぼ水平で鋭さを欠く。直線ぎみに開く受け部の口縁端部は自然に丸くおさまる。受け部内外面は、横ナデで調整する。胎土は密で、淡褐色を呈し、口径15.2cmを測る。16は、脚台部突帯の稜がやや上向きで鋭さを欠く。外反ぎみに開く脚台部の裾端部は垂直な面をなす。脚台部外面は横ナデ、内面はヘラケズリを施し、内面裾部には横ナデ調整する。胎土はあまり精選されていない。全体に淡黄褐



第172図 SD85102 出土遺物

1・2：壺A，3～5：壺F，6：壺K，7～9：甕C₁，10：甕F，11・12：高杯G，
13：小型丸底壺Bc，14：鉢底部，15・16：器台F

色を呈するが、焼成不良の部分は灰褐色をなす。脚裾部径は17.0cmを測る。なお、15については壺の口縁部となる可能性がある。

SK86116(第173図) 浅い土坑状を呈する土器溜まりである。24G区付近で検出した。

出土した土器には、甕11%(2個体 C₂ 2点)、小型丸底壺11%(2個体 C 2点)、鉢11%(2個体 C 2点)、高杯56%(10個体 D 3点、G 3点、脚台部 4点)、ミニチュア土器11%(2個体)がある。総個体数は18点以上である。高杯の占める割合が高い。

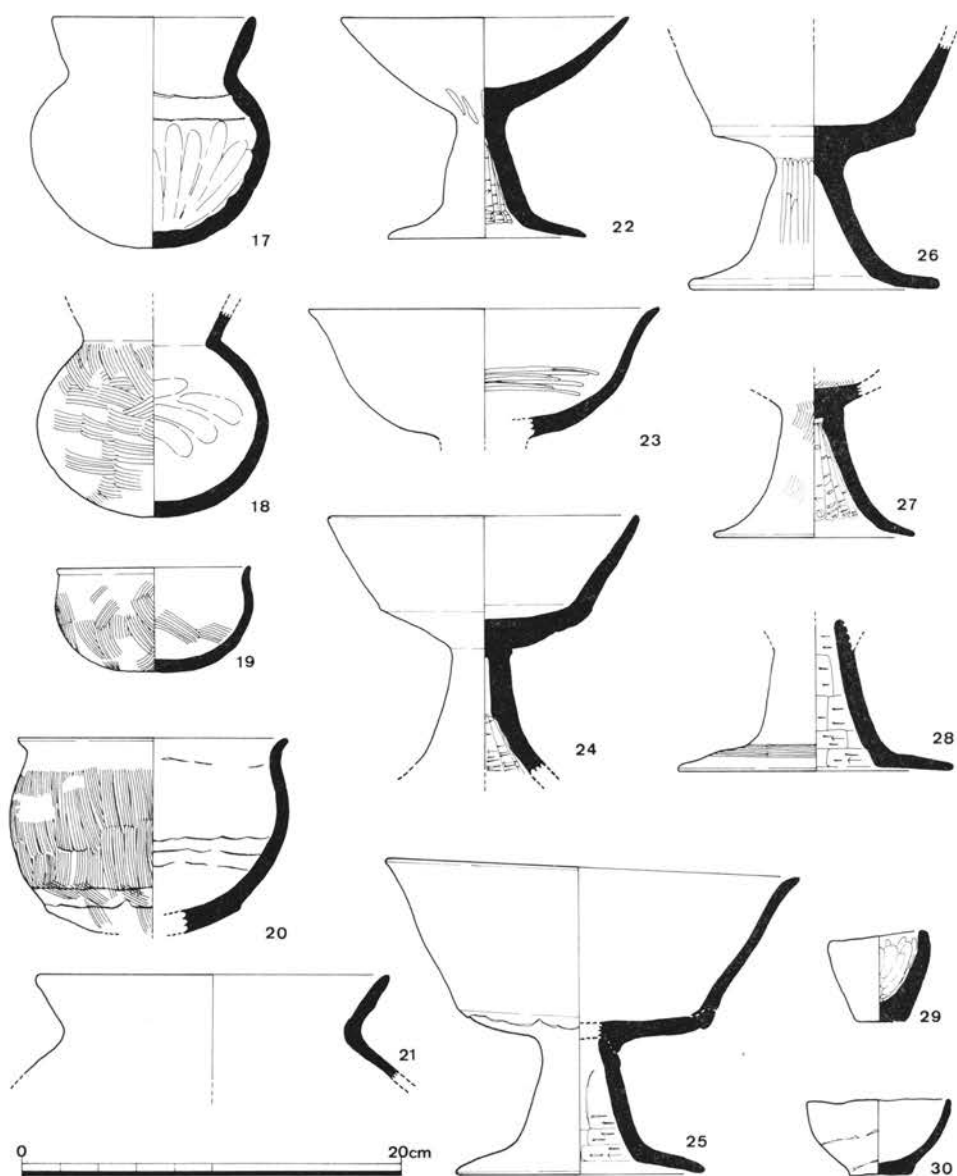
甕C₂(21) 体部は、内外面とも摩滅して調整が不明であるが、口縁部は、内外面に横ナデを施す。胎土は粗く、明褐色を呈する。口径は18.8cmを測る。

小型丸底壺C(17・18) 体部外面はハケ、内面は指による粗雑な強いナデがみられる。器壁は厚く、調整は不良でやや凹凸がみられる。口縁部は、内外面とも横ナデと考えられる。18は、内面の底部から体部にかけて炭化物が付着し、また外面には煤が付着している。胎土は、両方ともに密で、17は明褐色、18は赤褐色を呈する。17は口径10.8cm・器高12.2cmを測る。

鉢C(19・20) 19は、底部が丸底ぎみの平底で、杯ともよぶべき形態をなす。20は、底部中央部を欠損するが、不整形な粘土板を貼り付けたものと考えられる。調整は、19が外面体部にハケ、口縁部に横ナデ、内面底部に不定方向のナデ、体部下半にハケ、上半から口縁部にかけて横ナデを施す。20は、外面体部にハケ、口縁部に横ナデ、内面全面に不定方向のナデを施す。粘土接合痕を残し、調整は不良である。20の口縁部から体部に黒斑がみられる。19が明褐色、20が淡褐色を呈する。19は口径10.2cm・器高5.5cm、20が口径14.0cmを測る。

高杯D(22・23) 23の杯部は深く、口縁部の外反度も強い。ともになだらかな曲線を描く。22の脚台部は、ゆるやかに広がる柱状部と大きく開く裾部からなる。23の杯部外面に横ナデ、内面に一部ヘラミガキがみられる。22の脚台柱状部内面はヘラケズリ、裾部内面は横方向のハケが施される。胎土は、22が粗く、23が密である。22は赤褐色、23は暗黄褐色を呈する。22は、口径15.1cm・器高11.8cm、23は、口径18.8cmを測る。

高杯G(24~26) 25は、特に長い口縁部をもち、端部は外反して薄くおさまる。脚柱状部はゆるやかに広がり、裾部は25が屈折して大きく開くのに対し、26はなだらかに開く。杯部内外面にはナデ、脚柱状部外面は26がヘラミガキ、内面は24・25がヘラケズリを施す。26の裾部内外面は横ナデで調整する。その他の部分の調整は摩滅していて不明である。24の口縁部外面に薄い黒斑がみられる。25は、体部と口縁部の接合部分の調整が不良であるが、器壁は全体に薄い。一方、26の器壁は厚くシャープなつくりである。胎土は24が粗く、25・26が非常に密である。色調は、24が淡茶褐色、25が明褐色、26が赤褐色を呈する。24



第173図 SK86116 出土遺物

17・18：小型丸底壺C，19・20：鉢C，21：甕C₂，22・23：高杯D，24～26：高杯G，
27・28：脚台部，29・30：ミニチュア土器

は口径16.6cm，25は口径22.2cm・器高16.2cm，26は裾部径13.2cmを測る。

脚台部(27・28) 高杯の脚台部と考えられる。27は裾部までなだらかな円錐状に広がる。28は、ゆるやかに広がる柱状部から屈折して水平ぎみに大きく開く裾部からなる。27の外表面は、柱状部の一部にハケを残すほか、全面にナデを加えている。内面は柱状部にヘラケズリ、裾部に横ナデを施す。28の外表面は、裾部に横方向のハケ、端部に横ナデを加える。

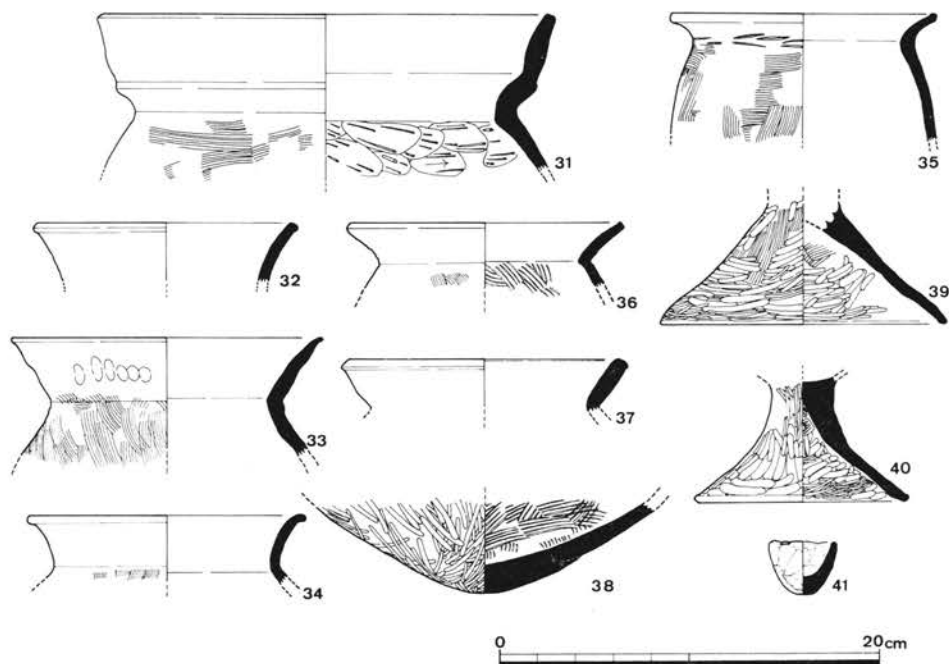
内面は、柱状部にヘラケズリ、裾部に横ナデを施す。胎土は、27が粗く、28が非常に密である。色調は、27が淡褐色、28が明褐色を呈する。裾部径は、27が10.8cm、28が14.7cmを測る。

ミニチュア土器(29・30) 手捏ねの鉢形土器である。平底の底部から体部が内湾しながら外上方にのびる。29は深く、30は広口で浅い。29は内外面にナデを施す。特に内面には指によるナデの痕跡が明瞭である。赤褐色及び茶褐色を呈し、口径5.4cm・器高4.6cmを測る。30は外面に不定方向ナデ、内面に横ナデを施す。暗褐色を呈し、口径7.6cm・器高4.0cmを測る。

SX85118(第174図) 灰褐色粘性砂質土中で検出した土器溜まりである。16E区付近で検出した。

出土した土器には、壺36%(5個体 D 1点, F 1点, K 2点, 底部1点), 甕43%(6個体 C 3点, F 1点), 高杯14%(2個体 脚台部2点), ミニチュア土器7%(1個体)がある。総個体数は14点以上である。

壺D(31) 大型の二重口縁壺である。口縁端部は、やや面をなしておさめる。体部外面は横ハケ、内面はヘラケズリを施す。頸部・口縁部内外面は横ナデで調整する。色調は淡



第174図 SX85118 出土遺物

31: 壺D, 32: 壺F, 33・34: 壺K, 38: 底部, 35~37: 甕C₁, 39・40: 脚台部,
41: ミニチュア土器

褐色を呈する。口径24.4cmを測る。

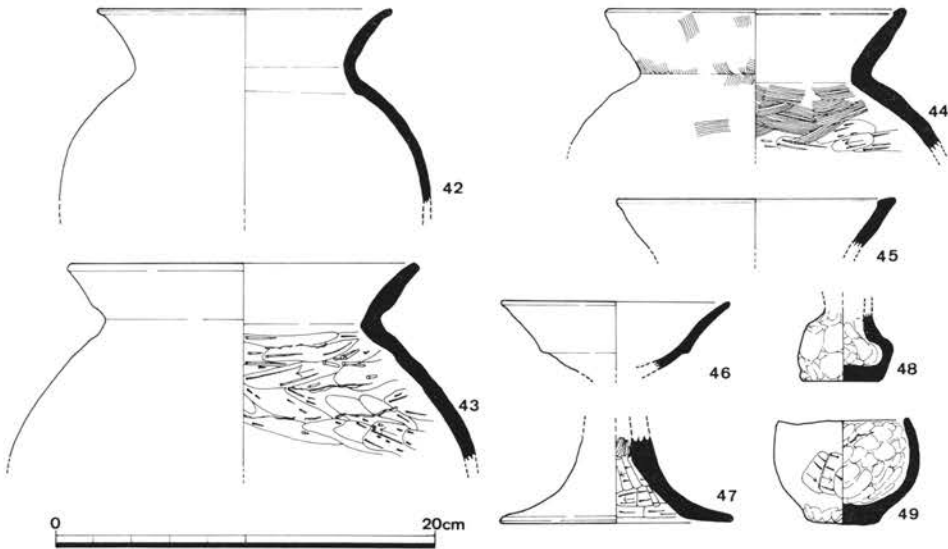
壺F(32) 口縁端部は自然に丸くおさまる。口縁部内外面ともに横ナデで調整する。淡黄褐色を呈し、口径14.0cmを測る。

壺K(33・34) 口縁端部は、33が自然におさまり、34が外面に丸く肥厚する。体部外面にはハケ調整、口縁部内外面には横ナデを施す。胎土は、比較的粗く明褐色を呈し、口径は、33が16.6cm、34が14.8cmを測る。

底部(38) やや尖りぎみの丸底で、比較的大型の壺と考えられる。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整する。底部外面に煤が付着する。色調は、外面が淡褐色、内面が明褐色を呈する。

甕C_i(35~37) 体部外面にハケ、内面には36にハケ調整がみられる。口縁部は、内外面ともに横ナデにより調整される。35の口縁部外面に煤が付着する。色調は、35が暗黄褐色、36が淡褐色、37が暗淡褐色、36・37の内面は明褐色を呈する。口径は、35が14.2cm、36が14.8cm、37が15.2cmを測る。35・36については、布留式併行期以前にさかのぼる可能性がある。37については小破片であるため詳細は不明である。

脚台部(39・40) 高杯の脚台部と考えられる。39は、なだらかな内湾ぎみの円錐形を呈し、40は、外湾ぎみの円錐形を呈する。39は、脚台部内外面とも一部ハケの上にヘラミガキを施す。40が、外面裾部にヘラケズリの上に全面にヘラミガキ、内面柱状部にヘラケズリ、裾部にヘラミガキを施す。40の裾部外面に黒斑を有する。胎土は40の方が粗い。色調



第175図 SX85117 出土遺物

42~45: 壺K, 46: 高杯F, 47: 脚台部, 48・49: ミニチュア土器

は、39の外表面が黒褐色、内表面が暗褐色、40の外表面が明褐色、内表面が暗淡褐色を呈する。裾部径は、39が15.2cm、40が11.4cmを測る。

ミニチュア土器(41) 手捏ねの鉢形土器である。丸底に近い平底の底部から体部が内湾しながら外上方にのびる。内外面に指頭圧痕が残る。また、底部外面に黒斑がみられる。明褐色を呈し、口径3.8cm・器高2.8cmを測る。

SX85117(第175図) 灰褐色粘性砂質土中で検出した土器溜まりである。12E区付近で検出した。整理箱約1箱分の前期の土器が出土した。

出土した土器には、壺36%(4個体 K 4点)、小型丸底壺18%(2個体 C 2点)、高杯27%(3個体 F 1点、脚台部2点)、ミニチュア土器18%(2個体)がある。総個体数は11点以上である。

壺K(42~45) 口縁端部は、42・43が自然に丸くおさまるが、44・45は、内面にやや肥厚して稜をつくる。45については原形が不明確である。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリを施すが、44は、上部に横ハケを加えている。口縁部は、44の外表面にハケ調整の痕跡を残すが、内外面とも横ナデと考えられる。4点とも胎土は粗く、44が赤褐色である以外、明褐色を呈する。口径は、42が15.6cm、43が18.8cm、44が16.0cm、45が14.8cmを測る。

高杯F(46) 小型品である。杯部外面は横ナデ、内面はハケの上からナデを施す。外面明褐色、内面淡褐色を呈し、口径12.2cmを測る。

脚台部(47) 高杯の脚台部である。「ハ」字形に大きく裾が開く。内面柱状部にヘラケズリの他、基部にヘラによる粗い調整の痕跡が残る。胎土はやや粗く、淡褐色及び明褐色を呈する。裾部径は12.4cmを測る。

ミニチュア土器(48・49) 48が壺形、49が鉢形の手捏ね土器である。48は安定した平底から不整形な体部が続く。口縁部を欠損するため、全体の形態は不明である。内外面には指頭圧痕が残る。淡褐色を呈し、底径4.1cmを測る。49は、深い碗状の体部をなす。外面体部中央部はヘラケズリで調整し、下部には指頭圧痕がみられる。内面は、指によるナデの痕跡が明瞭である。黒斑は、外面体部上半部及び下半部の2か所にみられる。胎土は密であるが、焼成は不良である。明褐色を呈し、口径7.2cm・器高5.6cmを測る。

自然流路に伴う落ち込み(南岸)(第176・177~185図) 弥生時代中期に舟戸地区の中央部を流れる自然流路が存在した。この流路は、弥生時代中期から埋没し始めるが、古墳時代前期になっても大きな溝状の窪みを残している。溝底の高さは、現由良川の水面より遙かに高い。この時期、すでに流路としての役割を終えていた可能性が高く、前期末には度重なる洪水のもたらした砂のためすっかり埋没してしまう。弥生時代後期初頭から古墳時



第176図 自然流路に伴う落ち込み部遺物出土状況実測図(土器溜まり)

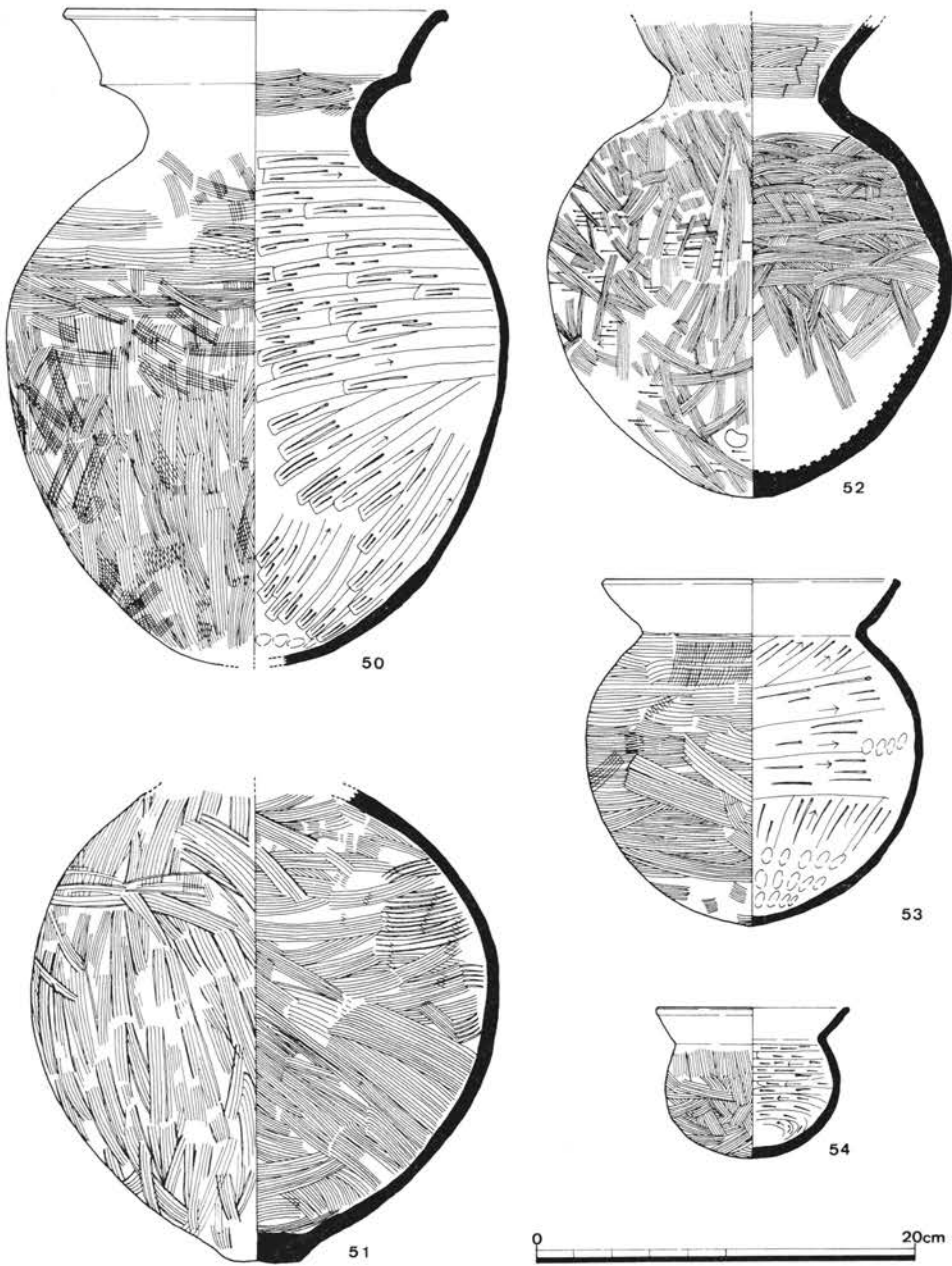
代前期にかけて起こった洪水は、単に砂を堆積させたのみではなく、弥生時代中期の集落域を一部洗い流している。そのため、集落域から自然流路に伴う落ち込みへの古墳時代前期傾斜変換点は、弥生時代中期とは違ったものになっている。前節の第140図は、流路の中央部に向かって砂の堆積の著しい傾斜変換点での土層図である。前期中葉には、集落域からの傾斜部分で何らかの行為を行ったようで、炭・灰を含む層(褐色粘性砂質土)に接して完形の土器が数個体出土した。また、同一層から多数の土器が出土している。

出土した土器群には、8F区付近の土器溜まり(前述の灰を含む層に接して出土した土器群)、褐色粘性砂質土から出土した土器群(下層土器群)、その上層の淡黄褐色砂質土から出土した土器群(中層土器群)及び上層の数層から散発的に出土した土器群がある。また、これら以外に、出土層の明確でない土器群がある。

①土器溜まり出土土器群(第177図)

5個体のほぼ完形の土器がまとまって出土している(第176図参照)。

壺A(50) 口縁端部は、外下方に丸く肥厚する。底部は、一部欠損しているが丸底と推定される。底部内面には指頭圧痕がみられる。体部外面にはていねいなハケ調整、内面にはヘラケズリを施す。頸部外面は横ナデ、内面は横方向のハケ調整、口縁部は内外面とも



第177図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物1(土器溜まり)

50: 壺A, 51・52: 体部, 53: 甕F, 54: 鉢A

横ナデで調整する。口縁部内外面に黒斑を有する。体部外面全体に煤が付着し、体部内面には炭化物が付着している。胎土は、非常に密で、淡褐色を呈する。口径20.2cm・器高約34.9cmを測る。

体部(51・52)ともに口縁部を欠損した壺である。51は、わずかに突出した平底から球形の体部をつくる。体部内外面はハケによっていねいに調整される。外面体部から底部にかけて広範囲に黒斑がみられる。胎土は比較的密で、色調は明黄褐色及び明赤褐色を呈する。52は、やや尖底ぎみの丸底で、球形の体部から、ゆるやかに外湾して屈曲する頸部が続く。底部には焼成後に不整形な小孔が穿たれている。体部外面は横方向にヘラケズリを施した後、細い板幅をもつハケで調整されている。内面にはよりていねいなハケ調整がみられる。口縁部外面には斜め方向の、内面には横方向のハケがみられる。全体に器壁が厚く重量がある。外面体部から底部にかけて黒斑及び広範囲の煤の付着がみとめられる。胎土は粗く、黄褐色及び明褐色を呈する。

甕F(53) いくぶん尖底ぎみの丸底で球形の体部を持つ。体部外面には横方向を中心とする明瞭なハケ調整が施される。内面にはヘラケズリを施し、底部内面及び体部の一部には指押さえの痕跡を残す。口縁部内外面は横ナデで調整する。外面底部から体部に煤が付着する。胎土は、非常に密で、淡褐色を呈する。口径15.4cm・器高18.4cmを測る。

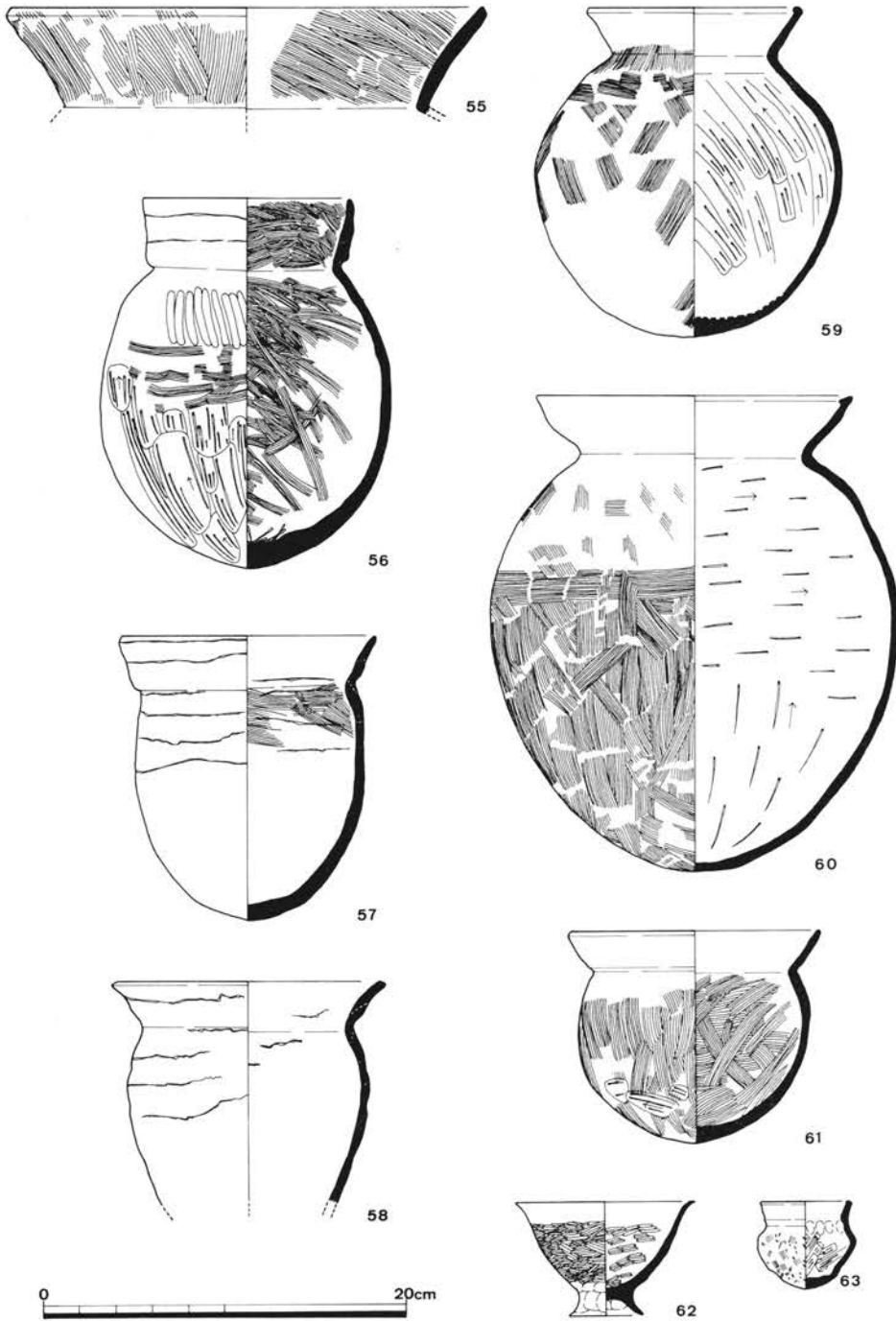
鉢A(54) 体部外面は不定方向のハケ、内面は底部も含め横方向のヘラケズリを施す。口縁部内外面は横ナデで調整する。胎土は比較的密で、淡赤褐色を呈する。口径10.3cm・器高7.9cmを測る。

②上層土器群(第178図)

出土した土器には壺K、甕D・F、鉢A・F、ミニチュア土器等がある。

壺K(55) 同型式のなかでもやや特異なものである。口縁端部は外面に稜をつくる。口縁部内外面ともに明瞭なハケ調整がみられる。胎土は比較的密で、外面明褐色、内面暗褐色を呈する。口径26.2cmの大型品である。

甕D(56~58) 56は、最大径をほぼ中位に、57・58は、やや上位にもつ。口縁部は、なだらかな肩部よりゆるやかに屈曲して、56はやや直立ぎみにのびるが、57・58は外上方に大きく開く。56は、体部外面にヘラケズリを施したのち、上部にヘラによるナデ、中央部は横ハケを加える。体部及び口縁部内面は、ハケにより調整する。底部内面は、ヘラ状工具で押さえて整形している。57・58は、体部及び口縁部外面をナデ調整する。内面は、58が全面にナデを、57が体部にハケを施したのち、ナデを加えている。3点とも粘土紐接合痕を明瞭に残し、成形及び調整は不良である。器壁も厚く、重量がある。黒斑は、56の外面体部及び底部の2か所に広範囲に、また57の外面体部にみられる。56の口縁部外面と、58の体部外面に煤が付着する。色調は、56が淡褐色、57が暗黄褐色及び赤褐色、58が暗褐色を呈する。56は口径11.4cm・器高20.3cm、57は口径14.0cm・器高15.7cm、58は口径15.2cmを測る。



第178図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物2(上層土器群)

55: 壺K, 56~58: 甕D, 59・60: 甕F, 61: 鉢A, 62: 鉢F, 63: ミニチュア土器

甕 F (59・60) 丸底で球形の体部をもつが、60はやや長胴形を呈する。口縁端部は、59が丸く肥厚するのに対し、60は断面三角形に肥厚し上部が内傾する面をなす。体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。口縁部内外面は横ナデを施す。黒斑は、59の肩部外面及び60の口縁部外面に一部みられる。ともに底部から体部にかけて外面に煤が付着する。胎土は密で、59は淡褐色、60は淡黄褐色を呈する。59は口径11.8cm・器高18.1cm、60は、口径17.6cm・器高26.2cmを測る。

鉢 A (61) 外面は体部下半から底部にかけてヘラケズリを施したのち全面にハケ、内面はていねいなハケにより調整する。口縁部内外面は横ナデを施す。黒斑は、底部から体部にかけて内面と外面に各々みられる。胎土は非常に密で、明赤褐色及び淡褐色を呈する。口径13.6cm・器高11.8cmを測る。

鉢 F (62) 口縁端部は外反して尖りぎみに薄くおさまる。底部には貼り付けと考えられる「ハ」字形に開く低い脚台を有する。体部内外面をヘラミガキ、口縁部には横ナデを施す。脚台部は内外面に指押さえの痕跡を残す。胎土は比較的粗く、明褐色を呈する。口径10.0cm・器高6.3cmを測る。

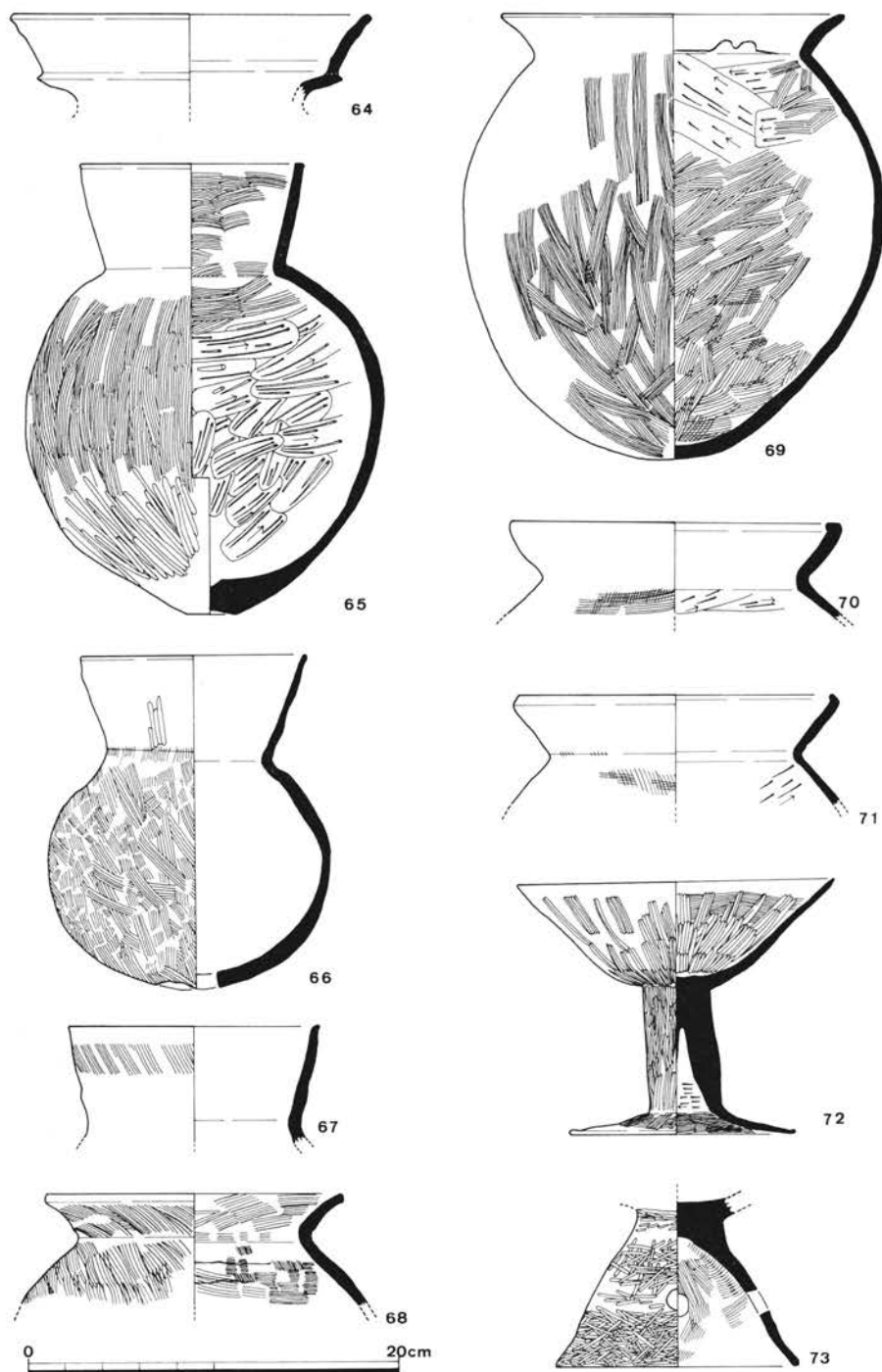
ミニチュア土器(63) 手捏ねの壺形土器である。丸底で肩部の張った不整形な半球形の体部から、屈曲して直立ぎみに外上方に立ち上がる口縁部をもつ。体部外面は、不定方向のハケとヘラミガキが部分的にみられる。内面は、ヘラケズリで指頭圧痕も残る。口縁部内外面はナデを施すが、頸部内面には指頭圧痕がみられる。胎土は、非常に密で、黒褐色を呈する。口径4.9cm・器高4.9cmを測る。

③中層土器群(第179・180図)

出土した土器には、壺A、壺G、甕C₂・F、小型丸底壺A・Bc、鉢E・Ga・H・I、高杯D等がある。

壺A (64) 擬口縁部がシャープな稜線をつくる。頸部・口縁部は内外面とも横ナデ調整を行う。淡褐色を呈し、口径19.6cmを測る。

壺G (65~67) 口縁端部は、65が上部に平坦な面をつくるが、66・67は自然に丸くおさまる。底部は丸底と推定されるが、65のみ側面形態が平底のへこみ底をなす。底部の器壁は厚い。66の底部に焼成後の穿孔がみられる。故意に施したものと考えられる。体部外面は65が下半部にヘラミガキ、上半部にていねいなハケを施す。66は、斜め方向のハケを施す。内面は65がヘラケズリ、頸部近くは横ハケで調整する。66は上方向ヘナデあげている。口縁部外面は、66に一部ヘラミガキが、67に斜め方向のハケがあるものの、3点とも最後に横ナデで調整している。内面は、65が横ハケ、66・67は横ナデ調整を加える。黒斑は、65の体部外面の中央部に、66の体部から底部にかけて2か所にわたり広範囲にみられる。ま



第179図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物3(中層土器群1)

64: 壺A, 65~67: 壺G, 68・69: 甕C₂, 70・71: 甕F, 72: 高杯D, 73: 脚台部

た、65の体部から底部にかけて外面に煤が付着している。色調は、65・66が黄褐色及び明褐色を、67が暗橙褐色を呈している。3点とも胎土は比較的粗い。65は口径12.0cm・器高24.4cm、66が口径12.2cm・器高18.1cm、67が口径13.6cmを測る。

甕C₂(68・69) 体部外面はハケ調整、内面は68が残存している上部にハケ、69が上部にヘラケズリを施し、底部から体部の上部の一部を除いて、全面に斜め方向のハケによる調整を加えている。口縁部内外面は、68がハケ、69は横ナデを施す。69は、体部外面中央部に黒斑を有し、同じく中央部に煤が付着している。また、底部内面と口縁部外面には炭化物が付着する。68は、胎土が比較的密で明褐色を、69は、胎土がやや粗で、暗褐色を呈している。68は、口径16.1cm、69は口径18.5cm・器高24.1cmを測る。

甕F(70・71) 端部上面は、70が水平な面を、71が外傾する面をなし、若干異なる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面に横ナデを施す。70の外面に煤が付着する。胎土は密で、淡褐色を呈する。口径は70が17.8cm、71が17.2cmを測る。

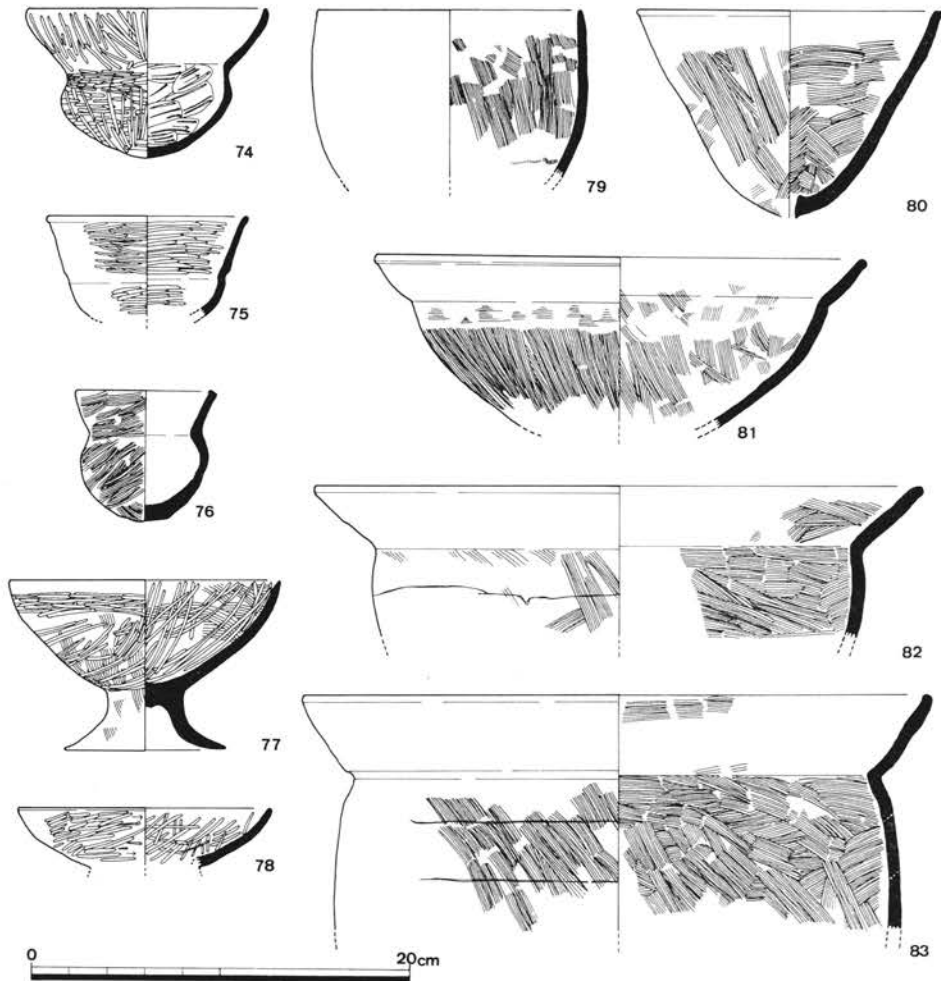
小型丸底壺A(74・75) 74は、形態的に小型丸底壺と通称されるものの典型といえる。75は、頸部はわずかに不明瞭に屈曲する点や、口縁部がまっすぐに外傾して開く点で、やや異種といえる。74は、体部・口縁部外面をヘラミガキで、体部内面はヘラケズリ、口縁部内面は横ナデで調整する。75は、体部・口縁部の内外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。黒斑は、74の口縁部から体部内面に、75の口縁部から体部外面にみられる。ともに明褐色を呈し、74は口径12.6cm・器高7.9cm、75は口径10.6cmを測る。

小型丸底壺Bc(76) 粗雑な小型品で、器壁もやや厚い。口縁端部はわずかに内面に肥厚する。外面全面に雑なハケ調整、口縁部内面に横ナデを施す。淡褐色を呈し、口径7.4cm・器高6.9cmを測る。

鉢E(77・78) 77は、裾部でさらに大きく広がる円錐状の低い脚台をもつ。78も、脚台を有していたと考えられる。体部外面は、77がハケの後、78がヘラケズリの後にヘラミガキをかけ調整している。内面は、77がハケの上にヘラミガキを、78はヘラミガキのみ施している。ともに口縁端部は横ナデを加える。77の脚台部の外面には斜め方向のハケの上にナデ調整を行う。77は、口縁部から体部外面に黒斑をもつ。77は明黄褐色及び明赤褐色を、78は明褐色を呈する。77は口径14.4cm・器高9.0cm、78は口径13.4cmを測る。

鉢Ga(79) 底部は欠損するものの、有孔鉢と考えられる。体部外面は、摩滅して調整が不明だが、内面はハケを施す。口縁端部は、内外面に横ナデを加える。胎土は密で、明褐色を呈する。口径14.0cmを測る。

鉢H(80) 口縁端部は上部に平坦面をつくる。体部内外面をハケ、口縁部内外面を横ナデにより調整する。口縁部外面に炭化物が付着する。胎土は比較的密で、暗褐色を呈する。



第180図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物4(中層土器群2)

74・75: 小型丸底壺A, 76: 小型丸底壺Bc, 77・78: 鉢E, 79: 鉢Ga, 80: 鉢H, 81~83: 鉢I

口径16.2cm・器高11.0cmを測る。

鉢I(81~83) 口縁端部はわずかに81・82が外面に, 83が内面に肥厚する。下半部を欠損するが, 半球体で丸底と推定される。体部内外面にはハケ調整を施す。口縁部外面は横ナデ, 内面は81がナデ, 82がハケ, 83はハケの後にナデがみられる。82・83の体部には粘土接合痕が残る。81の外面の一部に煤が付着する。色調は, 81が外面暗橙褐色, 内面暗褐色, 82が淡褐色, 83が淡橙褐色及び暗淡褐色を呈する。口径は81が26.0cm, 82が32.4cm, 83が33.4cmを測る。

高杯D(72) 口縁端部は尖りぎみにおさまる。脚台部は, 円筒に近い長い柱状部から屈折して大きく開く裾部をもつ。杯部外面はヘラミガキ, 内面はハケの後ヘラミガキ, 口縁

端部内外面は横ナデを施す。脚台部外面はヘラミガキ、柱状部内面はヘラケズリ、裾部内面は横方向のハケ、端部に横ナデを施す。また、裾部の外面から内面にかけて黒斑を有する。胎土は、非常に密で、淡明褐色を呈する。口径17.2cm・器高13.7cmを測る。

脚台部(73) 高杯の脚台部と考えられるが、器台に伴う可能性もある。内湾ぎみの円錐形を呈し、裾部でやや広がる。体部に円孔は貫通させない。一部欠損するが3もしくは4か所に透孔をもつと考えられる。外面にヘラミガキ、内面はハケで裾部に横ナデが施される。外面裾部に黒斑を有する。胎土は比較的密で、赤褐色を呈する。裾部径13.0cmを測る。

④下層土器群(第181~183図)

出土した土器には、壺A・F・G・K、甕C₁・C₂・D・E・F、小型丸底壺A・C、高杯B・D・F、器台Bb・E等がある。

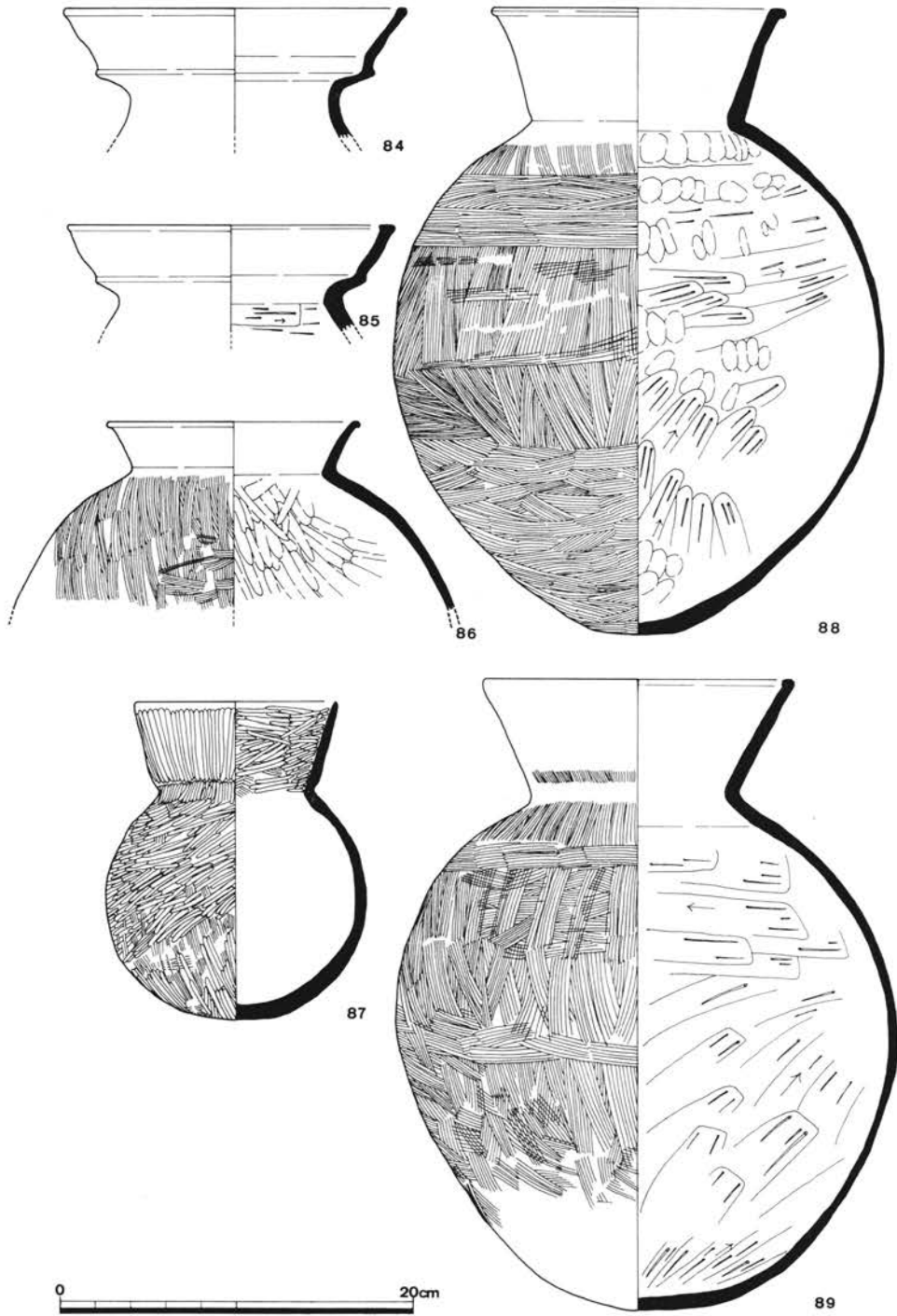
壺A(84・85) 84は、口縁部が外上方にやや外反ぎみにのび、端部は自然におさまる。一方、85は、やや内湾ぎみにのび、端部が内外面に水平に肥厚し面をなす。頸部・口縁部はともに内外面とも横ナデ、84は体部外面にハケ、85は体部内面にヘラケズリを施す。84は口径19.4cm、85は18.6cmを測る。84は、全体に暗褐色を呈し内面には煤が付着する。85は、明褐色を呈する。

壺F(88・89) 平底に近い丸底を呈する。口縁端部は、88が外面に丸く肥厚して上部に面をなし、89が内面に丸く肥厚してわずかに面をつくる。体部外面は、全面にていねいなハケメを施す。内面はヘラケズリを施すが、88には指頭圧痕が残る。口縁部は、内外面に横ナデ調整を行うが、88は一部体部までナデを施している。黒斑は、88の口縁端部近くの外面、89の体部上方に広範囲にみられる。また、89の外面肩部以下に煤が付着し、底部内面に炭化物が付着している。胎土は密で、淡褐色を呈する。88は口径16.6cm・器高36.0cm、89は口径17.6cm・器高32.6cmを測る。両者は、口縁端部の形態を除けば酷似している。

壺G(87) 体部外面は、ハケのあと斜め方向のヘラミガキで調整する。内面はナデ調整を加える。口縁部は、外面に縦方向の、内面に横方向のていねいなヘラミガキを施す。口縁端部から中央部と、体部外面肩部に黒斑がある。胎土は密で、色調は明黄褐色及び明赤褐色を呈する。口径11.6cm・器高18.1cmを測る。

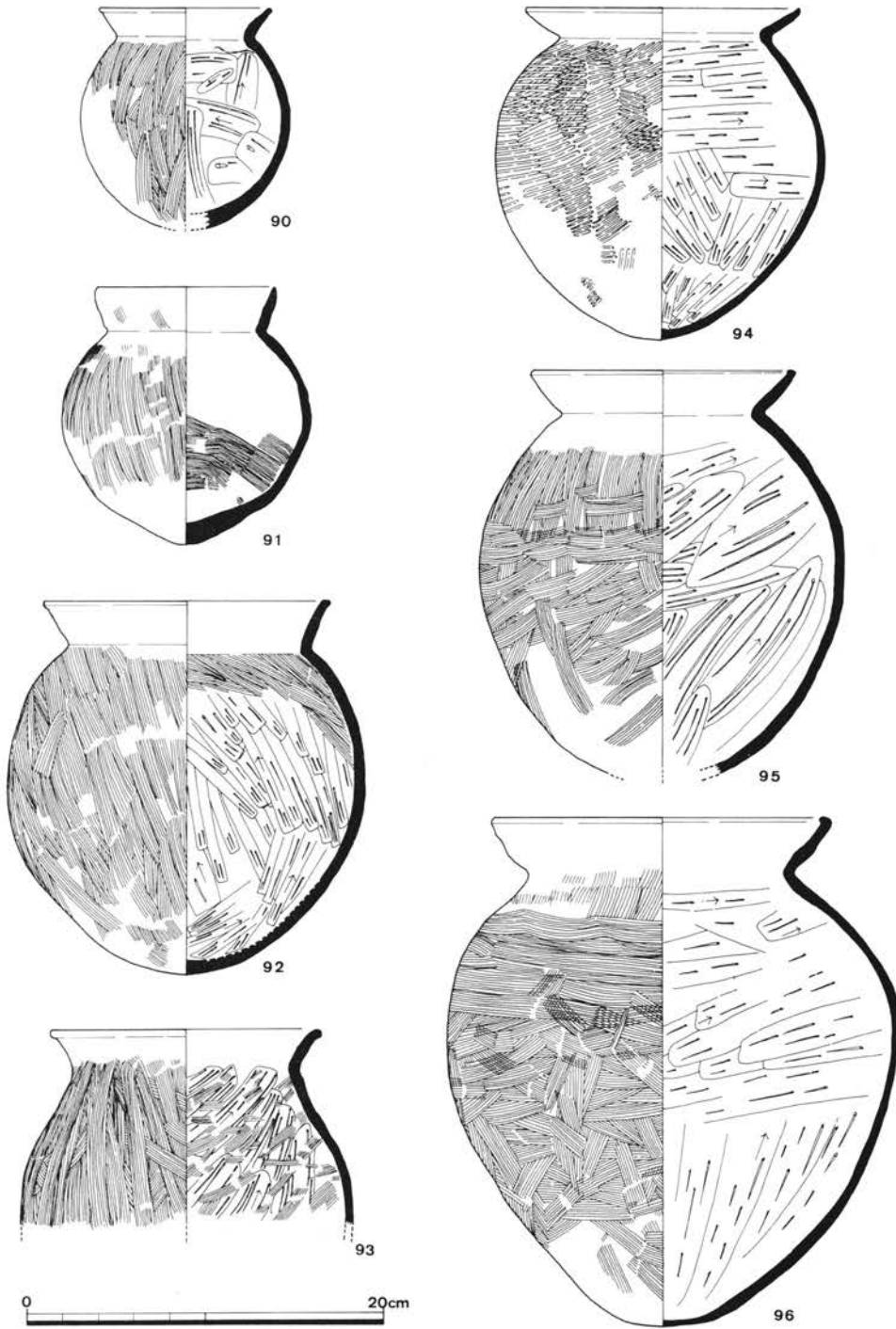
壺K(86) 口縁端部は、外面に丸く肥厚する。体部外面はハケ調整、内面は指による縦方向の強いナデがみられる。口縁部は内外面とも横ナデによって調整する。外面明褐色、内面淡褐色を呈し、口径は14.4cmを測る。

甕C₁(90・91) 底部は、90が欠損しているものの丸底を呈すると考えられ、91はやや尖底ぎみになっている。体部外面はハケ、内面は90がヘラケズリ、91が下半部をハケ、上半部をナデで調整する。口縁部は、内外面とも横ナデを施す。黒斑は、90の体部外面中央部



第181図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物5(下層土器群1)

84・85: 壺A, 86: 壺K, 87: 壺G, 88・89: 壺F



第182図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物6(下層土器群2)

90~92:甕C1, 93:甕D, 94:甕E, 95・96:甕F

に、91の口縁部外面にみられる。色調は、90が明黄褐色、91が暗赤褐色を呈する。口径は、90が9.8cm、91が10.2cm、器高は、90が約12.4cm、91が14.5cmを測る。

甕C₂(92) 丸底で球形の体部から単純「く」字形に屈曲して外上方に開く口縁部をもつ。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリで上部にハケを加える。口縁部内外面は横ナデで調整する。黒斑は、体部外面肩部、内面の底部から体部にかけての部分と口縁部にみられる。また、体部から底部外面の広い範囲に煤が付着する。胎土は、比較的粗く、明黄褐色を呈する。口径16.2cm・器高21.1cmを測る。

甕D(93) 体部外面には縦方向のハケ、内面にはヘラケズリの上にハケを加える。口縁部は内外面に横ナデ調整をする。色調は、外面が暗黄褐色、内面が淡黄褐色を呈する。成形は悪く、歪みがあり、口径は短径15.2cm・長径19.8cmを測る。

甕E(94) 体部外面には左下がりを中心とする比較的細かいタタキが施される。内面は下半部が上方向、上半部が横方向のヘラケズリがみられる。口縁部内外面は、横ナデで調整される。外面の口縁部から体部に黒斑がみられる。底部から体部の外面全面に煤が付着する。胎土は、比較的粗く、明赤褐色を呈する。口径15.4cm・器高18.8cmを測る。

甕F(95・96) 体部は、95が球形、96が中位より上方に最大径をもち、やや長胴形を呈している。体部外面はハケ、内面はヘラケズリによって調整するが、95は頸部から体部にかけて横ナデを施す。口縁部内外面は横ナデ調整する。特に96は体部外面に煤が付着する。胎土は、95が大型砂粒を含むものの全体としては比較的密で、96は非常に精選されている。色調は淡褐色を呈する。95は口径15.0cm、96は口径19.1cm・器高29.9cmを測る。

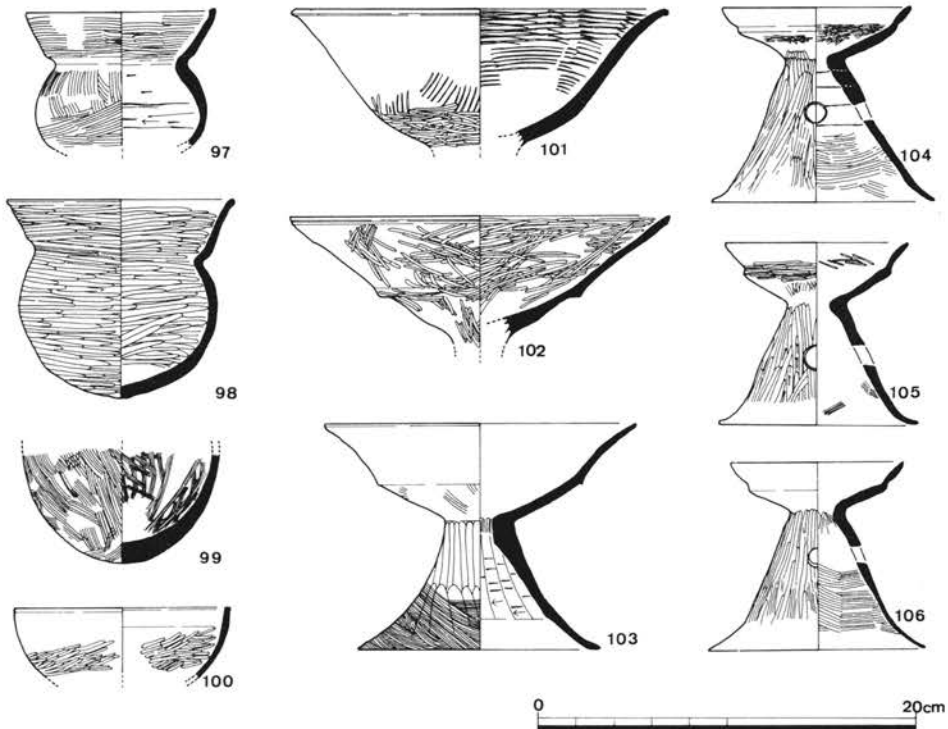
小型丸底壺A(97) 口縁端部は、やや内面に肥厚する。一般に内外面をヘラミガキで調整する精製品が多いが、97は外面にハケ、内面の体部にヘラケズリ、口縁部にハケを施す。胎土は比較的密で、明褐色を呈する。口径10.2cmを測る。

小型丸底壺C(98) 口縁端部がやや外反する。外面にハケを施した後、内外面全面に横方向のヘラミガキで最終調整を加える。口縁端部にはさらに横ナデがなされる。内面体部中央部に炭化物が、外面全面に煤が付着する。胎土は比較的密で、淡赤褐色及び淡黄褐色を呈する。口径12.2cm・器高10.5cmを測る。

底部(99) 口縁部を欠損するが、小型丸底壺BもしくはCの底部と考えられる。内外面にハケ調整を施し、明褐色を呈する。

高杯B(100) 脚台部を欠損する。体部内外面には横方向のヘラミガキで、口縁部内外面は横ナデで調整する。胎土は密で、淡褐色を呈する。口径は11.4cmを測る。

高杯D(101) ならだかに外反する杯部をもつ。杯部外面の下位にヘラミガキ、中位に斜めハケ、上位に横ナデを施す。内面上半は、粗い横ハケで調整する。胎土は密で、色調



第183図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物7(下層土器群3)

97: 小型丸底壺A, 98: 小型丸底壺C, 99: 底部, 100: 高杯B, 101: 高杯D
102: 高杯F, 104~106: 器台Bb, 103: 器台E

は淡褐色を呈する。口径は、20.2cmを測る。

高杯F(102) 脚台部が欠損している。杯部内外面はヘラミガキで調整する。口縁部外面の一部に黒斑を有する。胎土は非常に密で、淡褐色を呈する。口径20.4cmを測る。

器台Bb(104~106) 脚台部は、なだらかな円錐状に広がり、裾部でさらに開く。3点とも脚台部に透孔をもつ。104は2孔、106は1孔、105は脚台部の一部が欠損するが、1孔の可能性が高い。調整は、体部外面に104がヘラミガキ、105がヘラミガキとハケ、内面に、104・105ともにヘラミガキを加える。口縁部内外面はどれも横ナデを施す。脚台部外面は、104・106がハケの後、105がヘラケズリの後すべて縦方向のヘラミガキで調整する。内面は、下半部に横方向のハケを施し、裾部には、内外面にナデを加える。104の脚台下半部外面と内面に黒斑がみられる。胎土は、106が非常に密、104が密、105が比較的密といえる。色調は、104が淡褐色、105が明褐色及び明黄褐色、106が淡灰褐色を呈する。104が口径10.1cm・器高10.3cm、105が口径9.8cm・器高9.6cm、106が口径9.2cm・器高9.9cmを測る。

器台E(103) 器壁は全体に薄くシャープなつくりである。体部外面はハケ、口縁部内

面は横ナデによる調整と考えられる。脚台柱状部外面は、縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリを施す。裾部外面は、ハケ調整で一部ヘラミガキを重ね、内面は横ナデを加える。胎土は密で、明褐色及び黄褐色を呈する。口径14.6cm・器高12.0cmを測る。

⑤上層～下層土器群(第184・185図)

自然流路落ち込み内出土の土器群で、出土層の把握できなかつた一群がある。

出土した土器には、壺A・C・F、甕C₂・E・F、小型丸底壺Bb・C、鉢A・J、高杯F、器台Bb・F等がある。

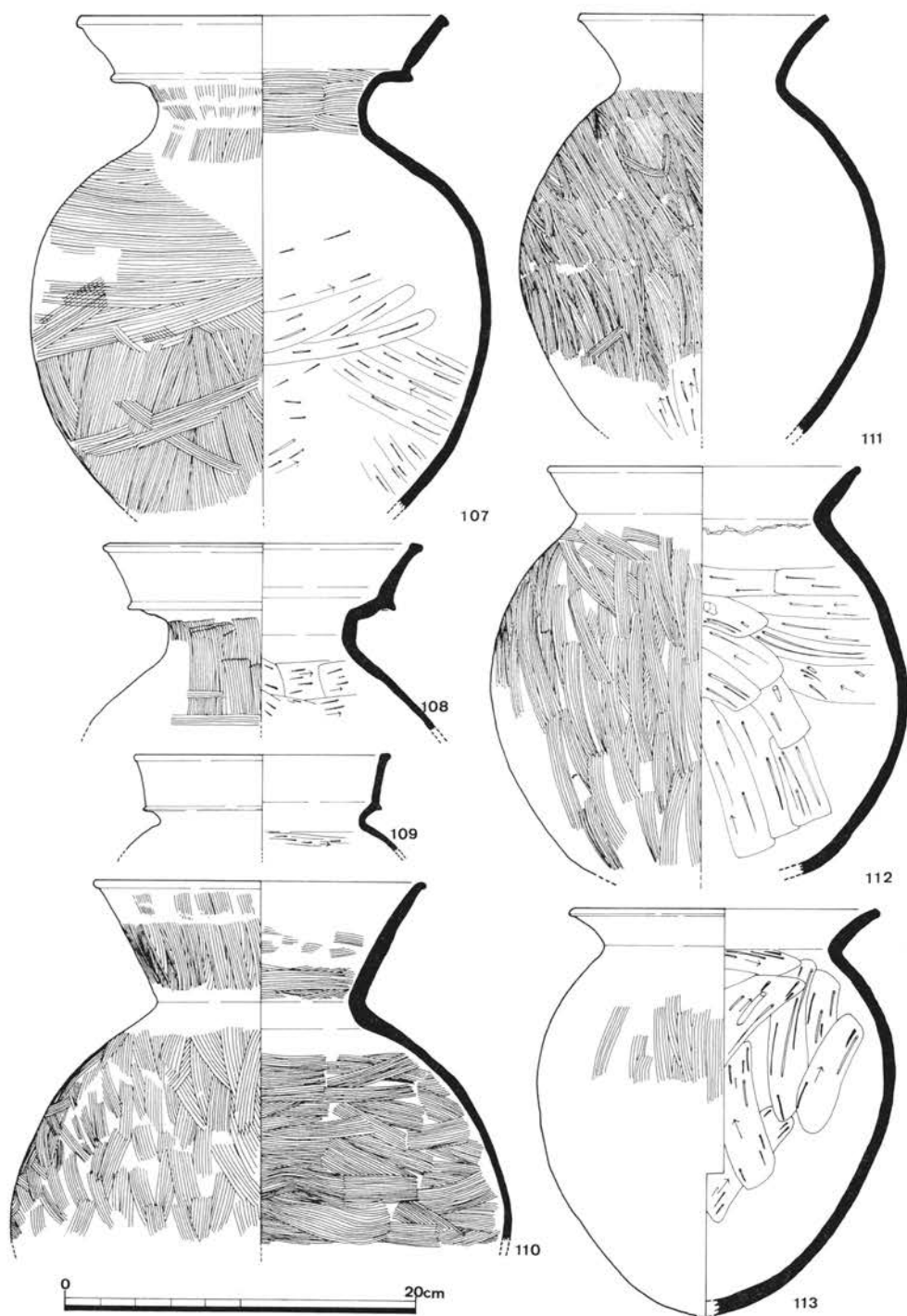
壺A(107・108) 107の口縁端部は、外下方に断面三角形に肥厚する。底部は欠損しているが、丸底と考えられる。体部及び頸部外面にはハケ調整、体部内面にはヘラケズリを施し、内面上方はその上から横ナデを加える。そして、頸部内面には横方向のハケ調整を施す。口縁部内外面を横ナデで調整する。体部外面下半部には煤が付着する。胎土は密で、淡褐色を呈する。口径21.0cm、残存高は28.3cmを測る。108は、頸部からシャープな稜線をもつ擬口縁部をつくる。口縁端部は、外上方に肥厚し、面をなす。外面の体部・頸部は、いねいなハケ調整、内面体部はヘラケズリ、頸部は横ナデを施す。口縁部は、内外面とも横ナデで調整する。淡褐色を呈し、口径17.0cmを測る。

壺C(109) 頸部・口縁部は内外面とも横ナデ調整で、体部はヘラケズリを施す。胎土は非常に密で、淡褐色を呈し、外面には煤が付着する。口径14.6cmを測る。

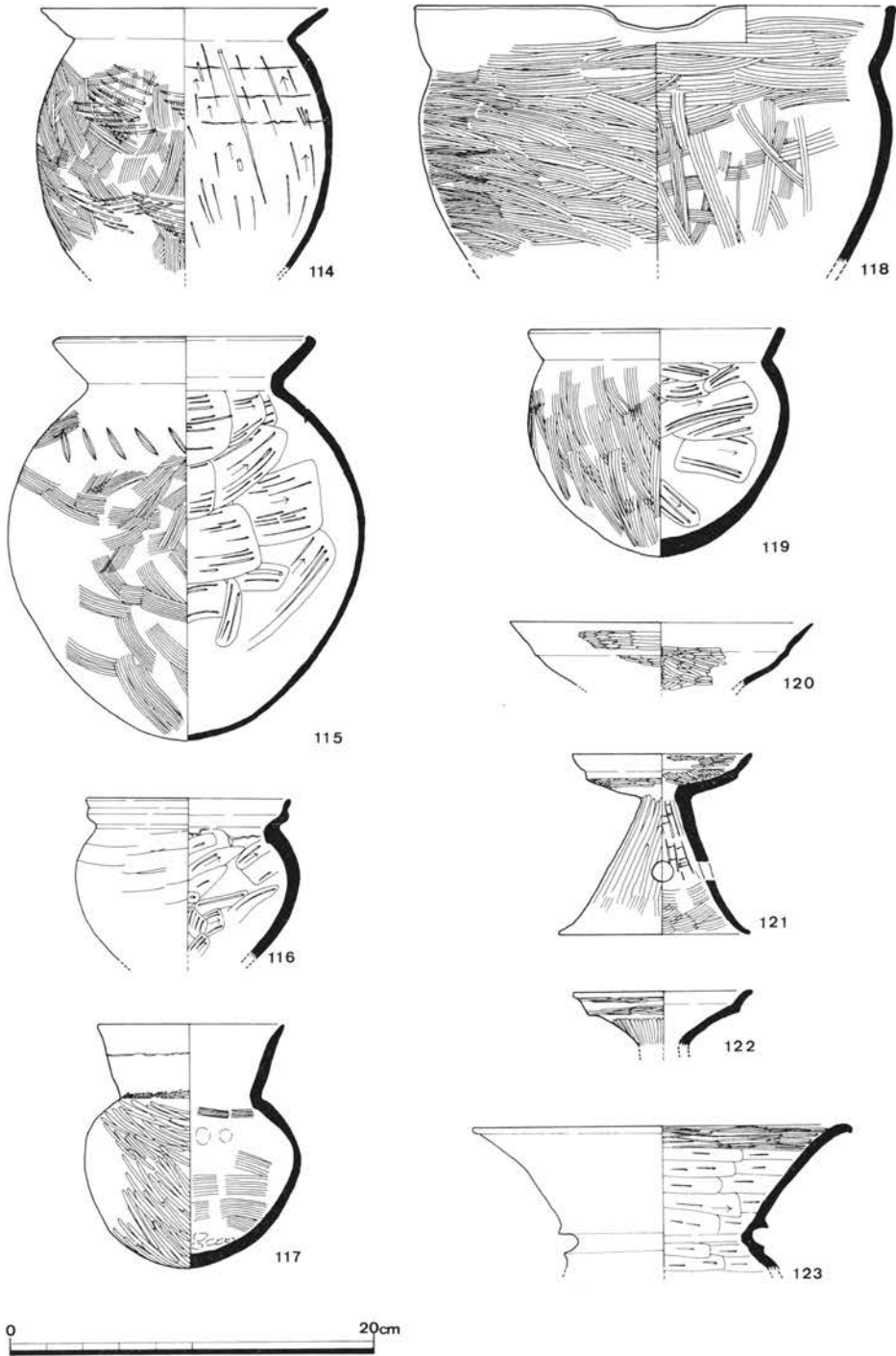
壺F(110・111) 口縁端部は、110がやや外面に丸く肥厚し、111は自然に丸くおさまる。110には、丸底を呈する体部下半があるものの、接合はできない。体部外面は、全面に斜め方向のハケを施す。111の底部近くに一部ヘラケズリが残る。内面は、110が横方向のハケ、111は上方向にナデあげている。口縁部は、110が内外面ともハケ調整で、端部付近ではさらに横ナデを加える。111は、内外面とも横ナデ調整である。黒斑は、110の肩部外面、口縁部内面に一部あり、111は、体部下半の外面にみられる。110の体部外面には煤が付着する。色調は、110が明赤褐色、111が淡灰褐色を呈する。口径は、110が18.7cm、111が14.0cmを測る。

甕C₂(112・113) 112は、底部を欠損するものの、丸底を呈する球形の体部と考えられる。113は、やや長胴形で尖底ぎみの底部である。体部外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリを施すが、112は上部をナデで調整する。口縁部は、内外面とも横ナデ調整である。黒斑は113の口縁部内面の一部にみられる。また、両者とも外面の底部から体部にかけて広範囲に煤が付着し、113は口縁部にも及ぶ。胎土は比較的粗く、112は明黄褐色、113は淡褐色を呈する。112は口径18.1cm、113は口径17.8cm・器高約23.6cmを測る。

甕E(114) 体部外面には比較的粗いタタキが施され、その上からハケ調整が加えられ



第184図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物 8 (上層～下層1)
107・108：壺A，109：壺C，110・111：壺F，112・113：甕C₂



第185図 自然流路に伴う落ち込み部出土遺物9(上層~下層2)

114: 甕E, 115: 甕F, 116: 小型丸底壺Bb, 117: 小型丸底壺C, 118: 鉢J
 119: 鉢A, 120: 高杯F, 121・122: 器台Bb, 123: 器台F

る。内面は上方向にヘラケズリされる。内面の調整は不良で粘土接合痕を残す。口縁部内外面は横ナデで仕上げる。外面全面に煤が付着する。胎土は粗く、外面暗褐色、内面淡褐色を呈する。口径16.0cmを測る。

甕F(115) 体部外面は、斜め方向のハケ、内面はヘラケズリで調整し、器壁は非常に薄い。口縁部内外面に横ナデを加える。体部外面肩部に板状工具の端面を用いた右下がりの平行する刺突文がある。他の部分は欠損するものの、半周は巡らないと考えられる。底部から体部に煤が付着する。胎土は密で、淡黄褐色を呈する。口径は14.8cm、器高は22.2cmを測る。

小型丸底壺Bb(116) 口縁部外面は、強い横ナデにより外反する。内面も横ナデを施す。体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。淡黄褐色を呈し、口径11.4cmを測る。

小型丸底壺C(117) 体部外面及び頸部にヘラミガキを施し、内面はハケで調整するが、底部と肩部に指押さえの痕跡を残す。口縁部は内外面に横ナデを加える。外面肩部から底部にかけて黒斑を有する。胎土は密で黄褐色を呈する。口径10.3cm・器高13.6cmを測る。

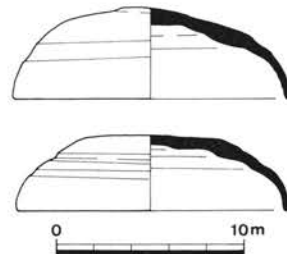
鉢A(119) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。口縁部は内外面に横ナデを施す。黒斑は、外面の口縁部から体部中央部と、向かい合う位置の体部中央部から底部にかけての2か所にみられる。体部全面に薄く煤が付着する。胎土はやや粗く、明褐色を呈する。口径14.4cm・器高12.6cmを測る。

鉢J(118) 体部及び口縁部内外面にはハケ調整、口縁端部には横ナデを施す。外面には煤が付着する。胎土はやや粗く、暗黄褐色を呈し、口径26.4cmを測る。

高杯F(120) 口縁端部は、尖りぎみに薄くおさまる。杯体部の内外面及び口縁部外面にヘラミガキ、口縁部内面及び端部内外面にはナデを施す。胎土は、非常に密で、外面明灰褐色、内面明淡橙色を呈する。口径16.8cmを測る。

器台Bb(121・122) 121の脚台部は、なだらかな円錐状に広がり、2か所に透孔をもつ。受け部の体部内外面と口縁部内面にヘラミガキを施す。脚台部外面はハケの後、ヘラミガキ、内面は上半部にヘラケズリ、下半部にハケを施す。裾部内外面に横ナデを加える。裾部外面に黒斑を有する。122は、口縁部外面に細かい横方向のヘラミガキ、体部外面に縦方向のヘラミガキで調整する。胎土は密で、特に121が非常に精選されている。色調は、淡褐色を呈する。121は口径10.0cm・器高10.0cm、122は口径10.0cmを測る。

器台F(123) 脚台部突帯の稜は、ほぼ水平で鋭さを欠くのに対し、受け部突帯の稜は鋭く突出する。口縁端部は、



第186図 SK85125出土遺物

外反して丸くおさまる。外面は横ナデ、内面は横方向のヘラケズリで、受け部にはさらにナデ調整を加え、口縁部には細かいヘラミガキを施す。胎土は密で、淡乳褐色を呈する。口径は、21.0cmを測る。

(2) 後期

古墳時代後期の顕著な遺構は少なく、土坑1基が確認できたのみである。なお、包含層内からの遺物の出土も極めて少なく、形のわかるものは数点しか存在しない。

SK85125 19E区で検出した直径約0.5mを測る小土坑である。土坑内から須恵器の杯蓋2点(第186図)が出土した。

第3項 包含層出土遺物

(1) 古墳時代前期の土師器(第187図)

出土した土器には、壺D、甕B、鉢A・F・Ga、高杯E・G、器台Ab・Ca・Db・F及びミニチュア土器等がある。

壺D(124) 比較的小型の三角形の突帯を貼りつけて擬口縁をつくる。大型の二重口縁壺である。口縁端部は、外面に丸く肥厚し、面をなす。体部外面は、横方向を中心としたハケ、内面はヘラケズリを施す。頸部・口縁部内外面は横ナデで調整する。外面肩部と頸部の一部に煤が付着する。色調は暗黄褐色で、胎土は密である。口径26.8cmを測る。

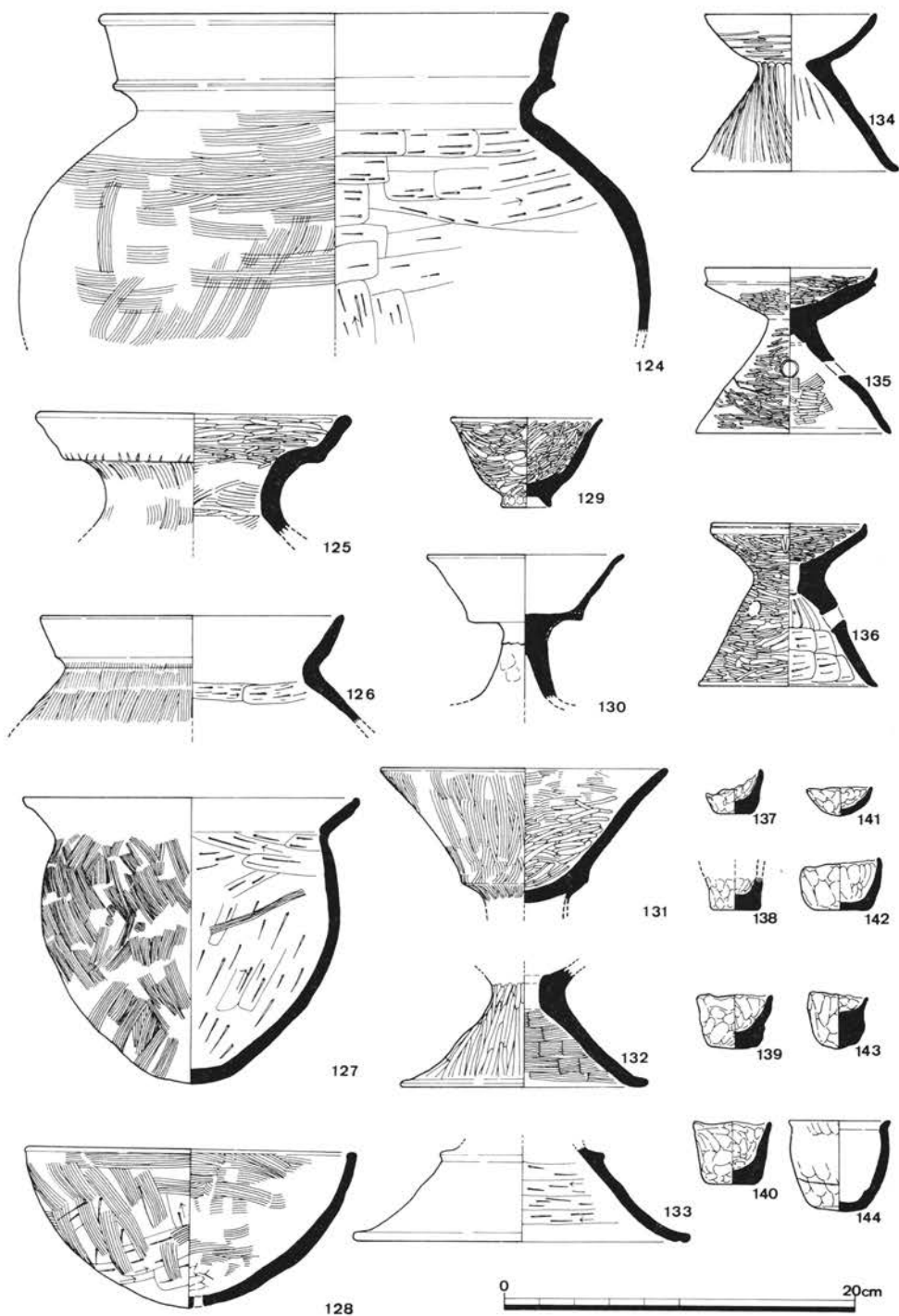
壺(125) 外反する頸部が水平ぎみに角度をかえ、さらに外上方に開く口縁部をもつ二重口縁壺である。色調は明褐色を呈し、全体に器壁は厚く、他の二重口縁壺と様相が異なる。頸部外面は斜め方向の、内面は横方向のハケ調整を施す。擬口縁部外端面に縦方向のキザミメを施す。口縁部外面は横ナデ、内面はヘラミガキを施す。口径18.2cmを測る。

甕B(126) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。口縁部内外面は横ナデにより調整する。淡茶褐色を呈し、口径17.4cmを測る。

鉢A(127) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデで調整する。黒斑は、外面肩部と、頸部から底部に至る広い範囲の2か所にみられる。外面全面に煤が付着する。胎土は比較的密で、暗淡褐色を呈する。口径19.2cm・器高16.4cmを測る。

鉢F(129) 底部にはひねり出した低い脚台を持つ。体部内外面はヘラミガキ、脚台部内面にナデ、外面に指押さえの痕跡を残す。明褐色で、口径8.8cm・器高5.1cmを測る。

鉢Ga(128) 外面は、体部にヘラケズリの後、全面にハケを加える。内面は、底部に一部指押さえの痕跡を残すものの、全面をハケによって調整し、その上に横方向のナデが加えられる。外面口縁部と、口縁部から体部に2か所の黒斑を有する。胎土は比較的密で、黄褐色を呈する。口径19.0cm・器高9.2cmを測る。



第187図 舟戸南地区包含層出土遺物 1 (土器)

124: 壺D, 125: 壺, 126: 甕B, 127: 鉢A, 128: 鉢Ga, 129: 鉢F, 130: 高杯G, 131: 高杯E
 132: 脚台部, 133: 器台F, 134: 器台Ab, 135: 器台Ca, 136: 器台Db, 137~144: ミニチュア土器

高杯E(131) 口縁端部は、自然に丸くおさまる。脚台部は、欠損する。杯部外面は縦ハケ、内面は横ハケの上に粗いヘラミガキが施される。杯部内外面に広範囲の黒斑がみられる。胎土は、比較的密で、明褐色及び暗黄褐色を呈する。口径16.6cmを測る。

高杯G(130) 洗練された小型の高杯である。脚台部はゆるやかに広がる。脚台部の外面基部に粘土を貼り付けて補強を行う。口縁部外面は横ナデ、脚台部外面に指押さえの痕跡が残る。胎土は密で、明褐色を呈し、口径11.4cmを測る。

器台Ab(134) 受け部外面は、横ナデ後一部横方向のヘラミガキ、内面は横ナデを施す。脚台部外面は、斜め方向のハケ後ヘラミガキ調整する。内面は、摩滅し詳細は不明である。胎土は非常に密で、暗褐色及び暗淡褐色を呈する。口径9.8cm・器高9.0cmを測る。

器台Ca(135) 口縁端部は、尖りぎみに薄くおさまる。脚台部に2か所の透孔がみられる。体部内外面は横方向のヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデを施す。脚台部外面は、横方向のヘラミガキ、内面はハケの上からヘラミガキされる。裾端部は、横ナデを加える。ヘラミガキ調整をていねいに行う。胎土は非常に密で、淡褐色を呈する。口径9.8cm・器高9.6cmを測る。

器台Db(136) 脚台部はなだらかに円錐状に広がる。柱状部が中空で器壁は厚い。脚台部に3か所の透孔がみられるが、等間隔に配置されていない。体部内外面はヘラミガキ、脚台部外面は横方向のヘラミガキされる。内面はヘラケズリの後、横ナデが加えられ、調整はていねいである。胎土は密で、色調は赤褐色、外面の一部は暗黄褐色を呈する。口径7.8cm・器高9.3cmを測る。

脚台部(132) 器台の脚台部である。直線ぎみに円錐状に広がる。体部に円孔を貫通させて中空にする。外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のハケを施す。裾部外面から内面にかけて黒斑を有する。淡茶褐色で、裾部径14.3cmを測る。

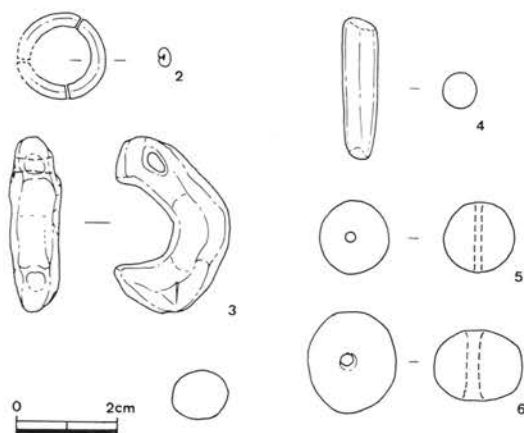
器台F(133) 脚台部突帯の稜はほぼ水平で鋭さを欠き、外反ぎみに開く脚台部の裾端部は丸くおさまる。脚台部外面は横ナデ、内面はヘラケズリ、内面裾部は横ナデ調整する。胎土は比較的密で、淡褐色を呈する。脚裾部径は19.4cmを



第188図 舟戸南地区包含層出土遺物2 (小型仿製鏡)

測る。

ミニチュア土器(137~144) 手捏ねの鉢形土器のミニチュアである。144は、他に比べて大型でやや様相が異なる。平底の底部で、口縁部は外反しておさまる。体部外面には指頭圧痕がみられ、内面には粗略なナデが施される。明褐色で口径5.8cm・器高5.2cmを測る。137から143は、141が丸底である以外、平底を呈する。137・141・143は浅鉢状で、143の底



第189図 舟戸南地区包含層出土遺物3(金環・土製品)

部の器壁は非常に厚い。調整は、内外面に指頭圧痕をとどめる程度である。黒斑は、137の体部外面、138の体部・底部外面、140の体部外面、142の体部・底部外面にみられる。胎土は比較的密であるが、焼成は全体にあまい。色調は、137・138・141・142が淡褐色、139が淡褐色及び明褐色、140が明褐色、143が暗灰褐色を呈する。137は口径3.4cm・器高1.2~2.4cm、139は口径4.4cm・器高3.1cm、140は口径5.2cm・器高3.6cm、141は口径3.7cm・器高1.6cm、142は口径4.6・器高2.6cm、143は口径3.2cm・器高3.2cmを測る。

(2) 金属器

小型仿製鏡(第188図) 面形6.0cmを測り、灰褐色粘性砂質土内から出土した。相伴する遺物はなく単独出土である。付近から小型器台(135)が出土している。鏡背の文様構成は、外側から幅広の平縁一櫛歯文一二重の圏線一変形鋸歯文一圈線によって繋がれた珠文一紐の順である。鑄上がりは比較的良好である。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に集落や墳墓からしばしば出土する重圏文鏡に似た珠文鏡である。

金環(第189図2) 遺存状態が極めて悪く、破損も著しい。金銅製である。

(3) 土製品

時期帰属不明の土製品として、土製勾玉と土製管玉及び須恵質紡錘車がある。いずれも灰褐色粘性砂質土から出土し、古墳時代に属する可能性が高いと考える。

土製勾玉(第189図3) 勾玉に似せた土製品で、精良な胎土を用いているが稚拙である。

土製管玉(第189図4) 管玉に似せたと思われる土製品で、穿孔は行われていない。

土製小玉(第189図5・6) 球形を呈し、穿孔を行った土製品が2点出土している。

紡錘車 須恵質の紡錘車が出土している。

(林 日佐子)

第5節 奈良時代(方形竪穴式住居の時代)

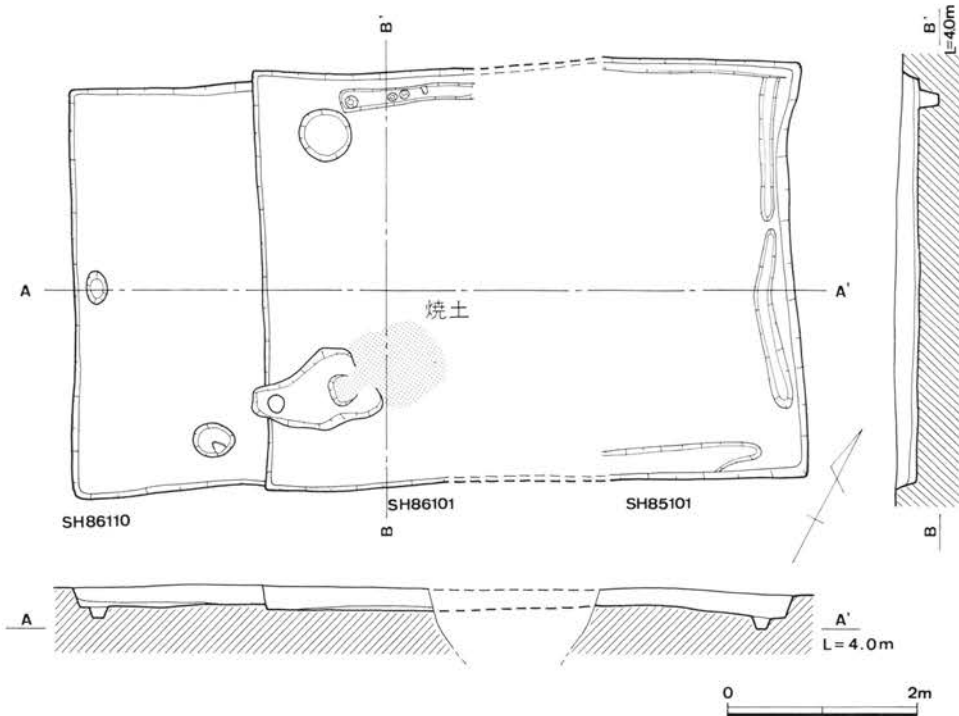
第1項 概要(第165図)

前節の遺構群と同じく、主に第21図の第11層灰褐色粘性砂質土の上面で検出した遺構群である。検出した遺構は、22～28区付近に位置する方形竪穴式住居跡群及びそれに伴う土坑、9～17区に位置する方形竪穴式住居跡群である。前者の竪穴式住居跡群は、比較的良好的な状態で検出したが、後者の竪穴式住居跡群の検出状況は良好ではない。包含層内(第10層)からこの時期の遺物が出土しているが、第8層との区別が不明瞭であったことと、検出できなかったピットに伴うものが含まれている可能性があることから次節で扱う。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

(1) 西側遺構群

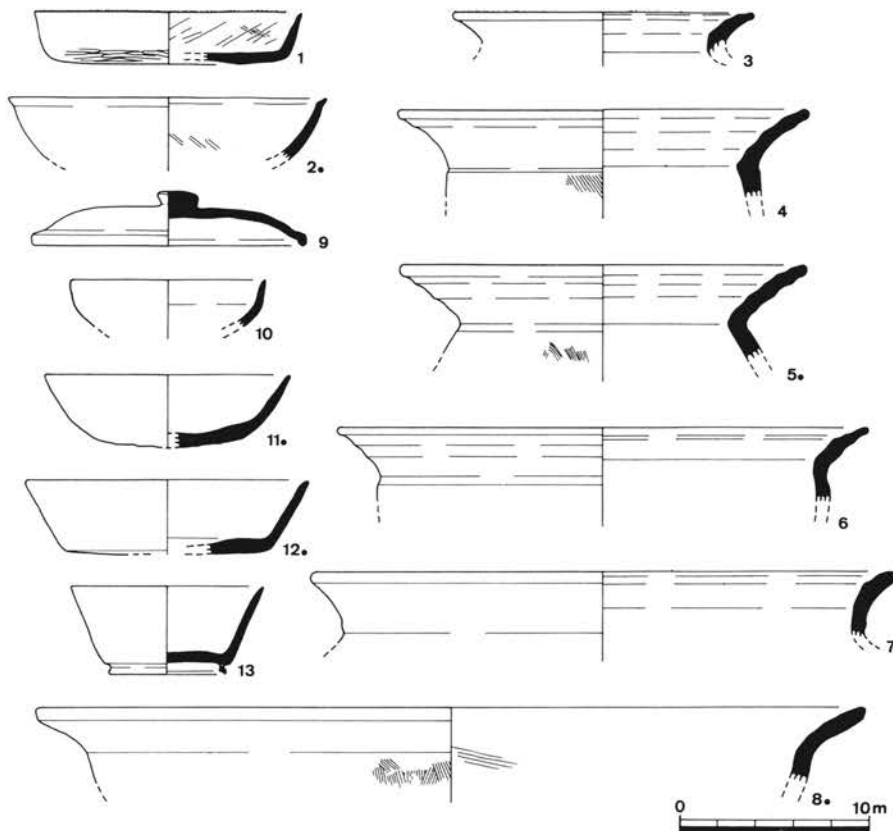
22～28区付近に位置する建物方向の等しい方形竪穴式住居跡群を含む遺構群である。竪穴式住居跡は計8基検出した。他に土坑3基が存在する。住居跡の平面形は、正方形と長方形がある。切り合い関係のあるものは2基のみであるが、検出面の違いや位置関係から



第190図 SH85101(SH86101)・SH86110 実測図

数回にわたって建て替えられたと考えられる。SH86103とSH86101により壊されているSH86110以外の住居跡は、隅部及び隅部付近に造り付けの竈をもつ。SH86103は大型の住居跡で、床面に焼土の広がりをもつものの、竈をもたないと考えられる。第4次調査でも2基の住居跡が検出されており、その西側には溝が存在する。第4次調査では造り付けの竈をもたない大型の住居跡(大壁造りの平地式住居跡の可能性ある。)が確認されている。東端はSH85101(SH86101)である。整然と建物の向きを揃えるこの集落は、次の掘立柱建物跡群に続くものと考えられる。

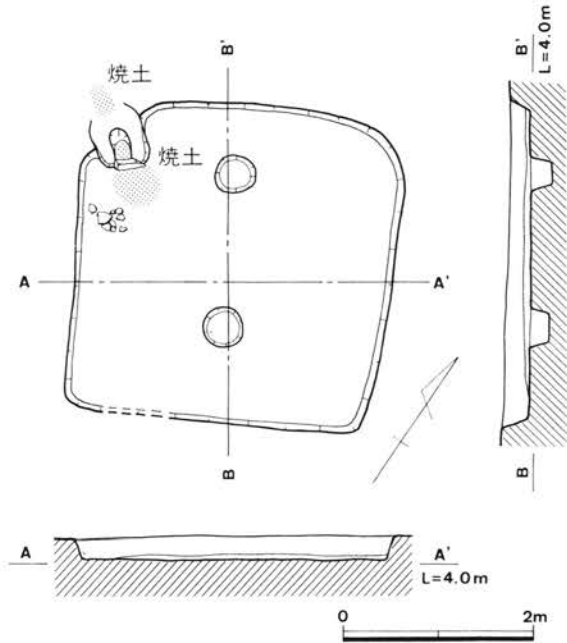
SH85101・SH86101(第190・191図) 第6次調査地区・第7次調査地区の両区にまたがって検出した長方形を呈する竪穴式住居跡である。長辺は5.8m・短辺4.5mを測る。建物の向きは、N63°Eを測る。造り付けの竈を西辺隅寄りにもつ。三辺に周壁溝をもち、北辺の周壁溝内には、杭穴が存在する。検出面から床面までの深さは、約20cmを測る。竈は粘土を含んだ土で構築されており、前面には灰が著しく堆積していた。灰の下は焼土化していた。床面



第191図 SH85101(SH86101) 出土遺物
2・5・8・11・12：床面出土

には部分的に貼り床が存在し、これを除去して精査を行ったが住居に伴う柱穴を1つ検出したにとどまった。この竪穴式住居跡は、SH86110を壊して営まれている。埋土は1層である。

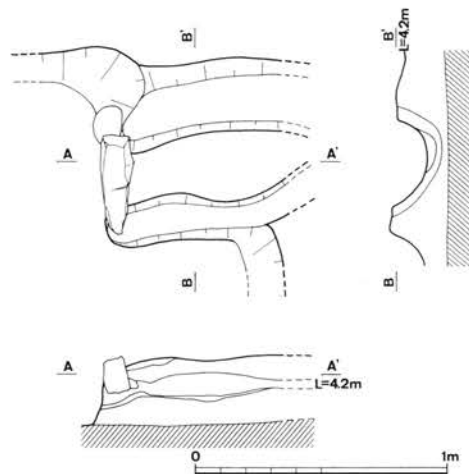
床面(8・12)・周壁溝(5)・貼り床(2・11)及び埋土中(1・3・4・6・7・9・10・13)から遺物が出土している。1～8は土師器である。1は、器高の小さい杯である。口縁部内面に暗文を施す。外面は底部をヘラケズリし、底部境から口縁部下半にかけてヘラミガキを施す。2は、内傾する口縁端面をもつ杯で、口縁部外面の調整は、器壁が荒れているためよくわからないが、口縁端部付近より下側をいねいにヘラケズリしている可能性が高い。3～7は、甕である。かなり小型のものから大型のものまであるが、いずれも口縁部内面に強いナデによる段をもつ。胴部の張るものと張らないものが存在する。8は、大口径の鍋である。



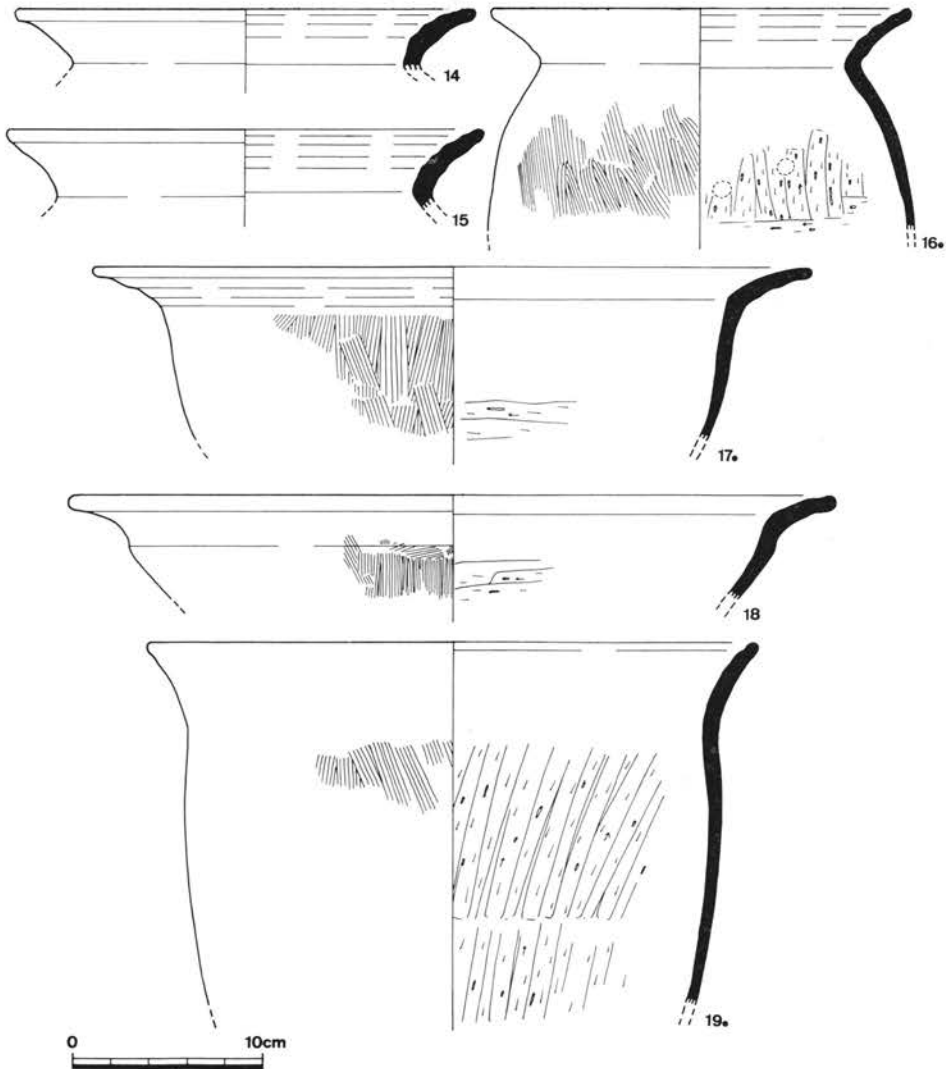
第192図 SH86102 実測図

煤が口縁端部にまで付着している。9～13は、須恵器である。9は、屈曲する口縁部をもつものの、天井部が笠形に近い杯蓋である。擬宝珠つまみは、比較的小さく不整形である。10は、小口径の杯である。11は、口径に比べて小さな底部をもつ杯である。12は、竈の脇から出土した口径15.0cmを測る杯Aである。13は、口径10.1cmを測る小口径の杯Bである。下方にのびた高台の端部が外側に拡張する。

SH86102(第192～194図) 23C区付近で検出した一辺約3.5mを測る、正方形の竪穴式住居跡である。竪穴の向きは、N62°Eを



第193図 SH86102 竈 実測図

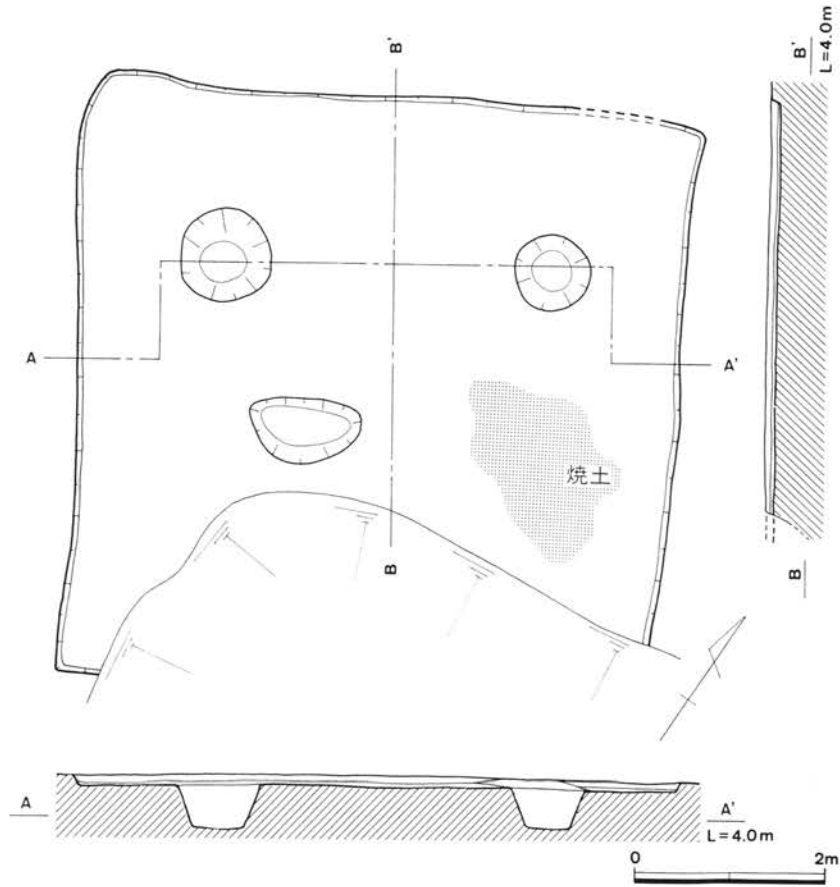


第194図 SH86102 出土遺物

16・17・19：床面出土

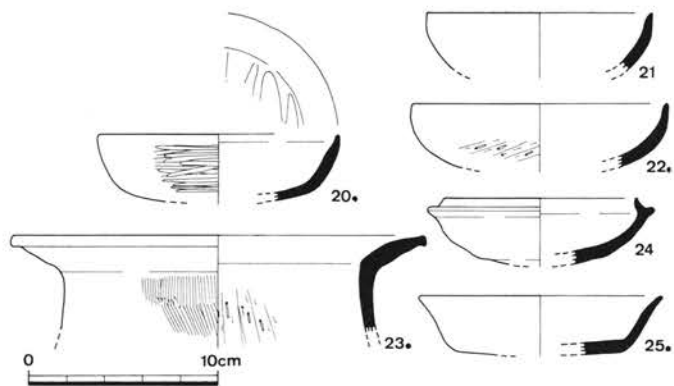
測る。堅穴の遺存状況は、比較的良好で検出面から床面までの深さは約40cmを測る。西隅部には造り付けの竈をもつ。検出当初、竈は煙道部を除いてほぼ完存していたが、調査中の雨水のため崩壊した。竈の構築には粘土混じりの土と石を用いている。床面には、遺物が残されており、特に竈の東脇に甕・鍋等が集中していた。床土と思われる硬く締まった粘質土を除去したところで、2つの主柱穴を検出した。主柱は、2本と考えられる。周壁溝は存在しない。埋土は、床土を除くと1層である。

出土した遺物は土師器・須恵器であるが、須恵器はいずれも細片で図化できなかった。



第195図 SH86103 実測図

図化した遺物は、14・15・18が埋土中、16・17・19が竈東脇からそれぞれ出土した。なお、16・19の破片が竈内からも出土している。14・15・16は、口縁部内面に強いナデによる段をもつ甕である。口径は、それぞれ24.3cm・25.1cm・22.2cmを測る。16



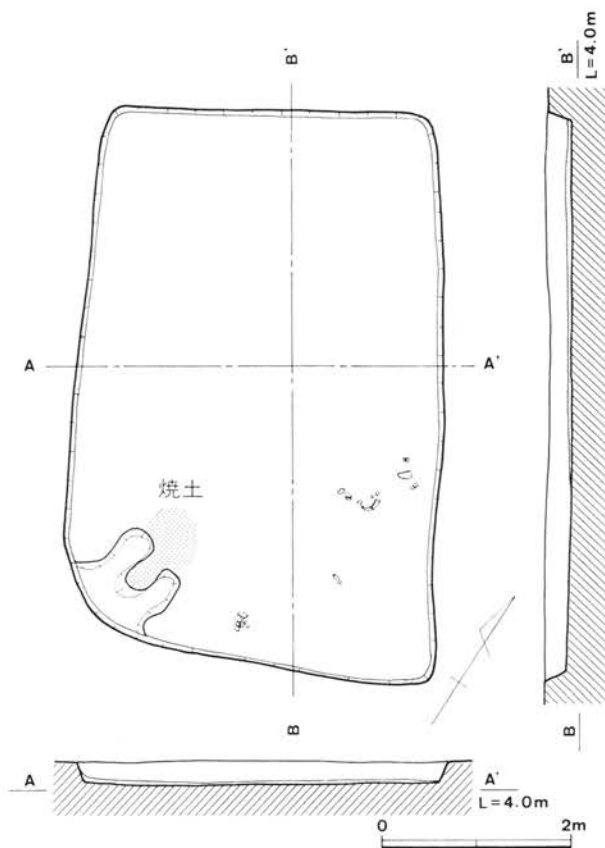
第196図 SH86103 出土遺物
20・22・23・25：床面出土

は、体部内面をヘラケズリする。17・18は、鍋である。外面は、口縁端部に至るまで煤が付着している。ともに体部内面下半部をヘラケズリし、体部外面をハケで調整する。18は、

口縁部内面にわずかながら段をもつ。19は、甔である。外面が著しく剝離しているが、煤は口縁端部にも付着していない。口縁部内面にわずかに段をもち、体部内面にはヘラケズリが見られる。

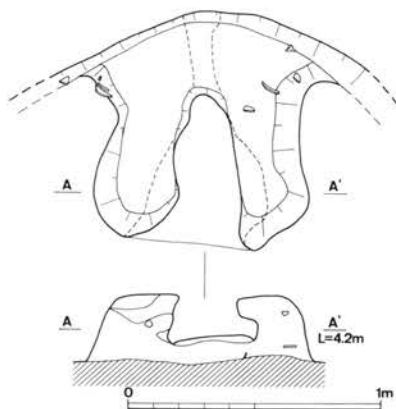
SH86103 (第195・196図)

26E区付近で検出した一辺6.5mを測る正方形の竪穴式住居跡である。竪穴の向きは、約N63°Eを測る。検出面から床面までの深さは、わずかに15cmを測るにすぎない。造り付けの竈は攪乱によって失われたとも考えられるが、造り付けの竈とは直接関係ないと思われる焼土が床面に残っていたことから、他の住居跡とは異なり、造り付けの竈をもたない住居跡と考えたい。柱穴を2か所で検出した。その位置関係から主柱穴は、4本と考えられる。竪穴の埋土は、1層で分層できなかった。



第197図 SH86104 実測図

出土した遺物は、比較的少ない。床面もしくは、床面直下から出土した遺物として20・22・23・25の土器がある。21・24は、埋土中から出土した。20は、内面の見込み部に暗文を施し、外面は、口縁部から底部にかけてヘラミガキを施す杯である。22は、口縁部下半から底部にかけてヘラケズリを施す杯である。23は、甔であるが、口縁部内面に段は見られない。24は、受け部をもつ須恵器の杯身であるが、この住居跡の時期



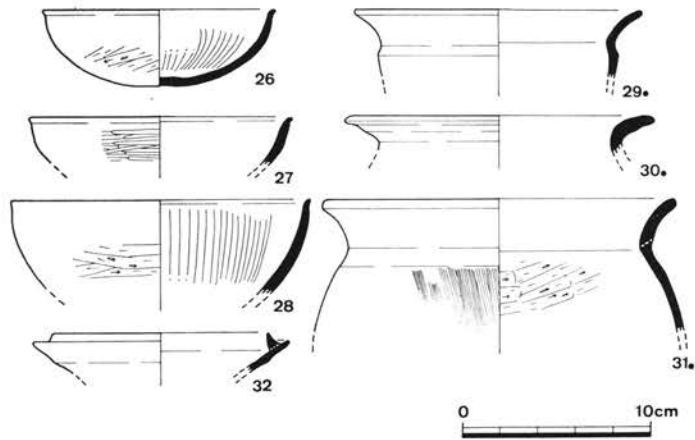
第198図 SH86104 竈実測図

を決定するものではなく混入と考えられる。25は、杯Aで口径12.8cm・器高3.2cmを測る。

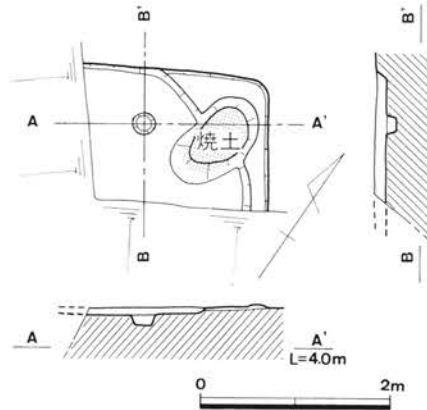
SH86104(第197～199図) 24E区付近で検出した長方形を呈する竪穴式住居跡である。長辺約6.0m・短辺約3.9mを測る。竪穴の向きは、

N58°Eを測る。造り付けの竈を南隅部にもつ。竈は、煙道部を除いて比較的よく残っており、前面には灰が堆積していた。検出面から床面までの深さは40cmを測る。床面には竈付近を中心に遺物が残されていた。埋土は、1層である。

図化した遺物は、26～32の土師器・須恵器である。床面から出土したものは29～31で、他の土器は埋土中から出土した。26は、底部から口縁部下半にかけてヘラケズリを施す椀である。内面には放射状の暗文を施す。ナデにより口縁端部を外上方につまみあげる。口径は12.2cmを測る。27は、口縁部下半をヘラミガキする椀もしくは杯である。口縁端部を26と同様にナデによって外上方につまみあげる。口径14.0cmを測る。28は、口径16.8cmを測る深い椀である。口縁端部付近をナデのち口縁部下半をヘラケズリする。内面には放射状の暗文をもつ。29～31は、竈付近の床面に残されていた甕である。いずれも口縁部内面にナデによる明瞭な段をもたない。口径はそれぞれ15.4cm・16.2cm・18.6cmを測



第199図 SH86104出土遺物
29～31：床面出土



第200図 SH86105 実測図



第201図 SH86105 出土遺物

る。31は、体部内面をヘラケズリする。32は、埋土中から出土した杯身である。蓋である可能性もあるが、ここでは混入と考えたい。

SH86105(第200・201図) 27G区で検出した造り付けの竈をもつ方形の竪穴式住居跡である。検

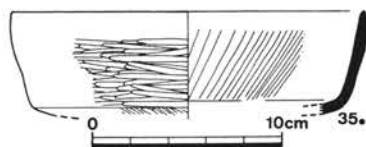
出できたのは竈のある1隅のみで、規模等は不明である。竈は、黄色の粘土を用いて造られたと考えられる。竈の前面には灰が堆積していた。竈のすぐ近くで小ピットを検出した。住居跡の埋土内から33・34の土器が出土している。33は、口径15.4cmを測る浅い杯で、口縁端部をナデたのち口縁端部から下をヘラミガキし、底部をヘラケズリする。器壁は比較的厚く、内傾する口縁端面をもつ。口径は、15.4cmを測る。34は器種不明の須恵器の端部である。端部は、外面に粘土帯を重ねることにより肥厚させている。端部より下側は、カキメの上から斜めにキザミを入れる。

SH86108(第202図) SH86102の南側で竈の残欠と考えられる灰混じりの焼土を検出したが、住居跡の輪郭を確認することはできなかった。焼土内から35の杯が出土している。

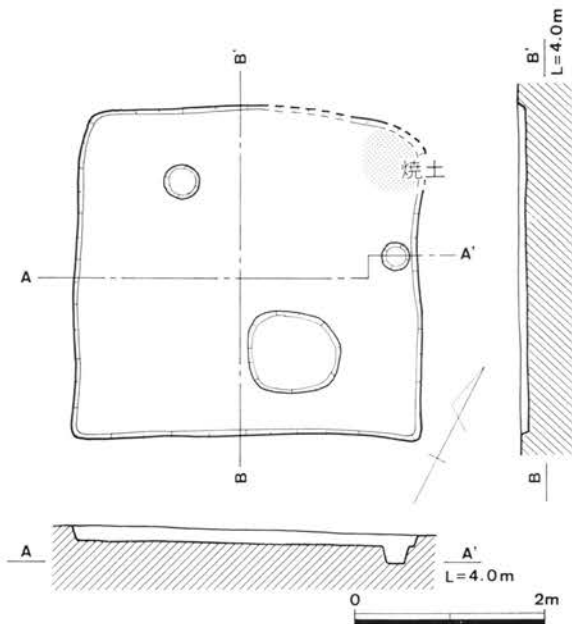
出土した杯は、法量の大きなもので、口径18.6cm・器高約5.4cmを測る。口縁端部をナデたのち、底部から口縁部にかけてヘラミガキを施す。内面に放射状の暗文をもつ。

SH86109(第203図) 24D区で

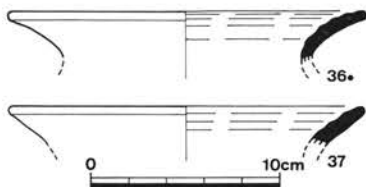
検出した3.8m×3.5mを測るほぼ正方形を呈する竪穴式住居跡である。竪穴の向きはN65°Eである。北側の隅部が検出できなかったことや、竈の位置がやや内側に入り込むことから、いわゆる青野型住居跡の可能性が^(注9)ある。竈は、他の住居跡と同一の面で検出したが、住居の輪郭を検出できたのは



第202図 SH86108 出土遺物



第203図 SH86109 実測図

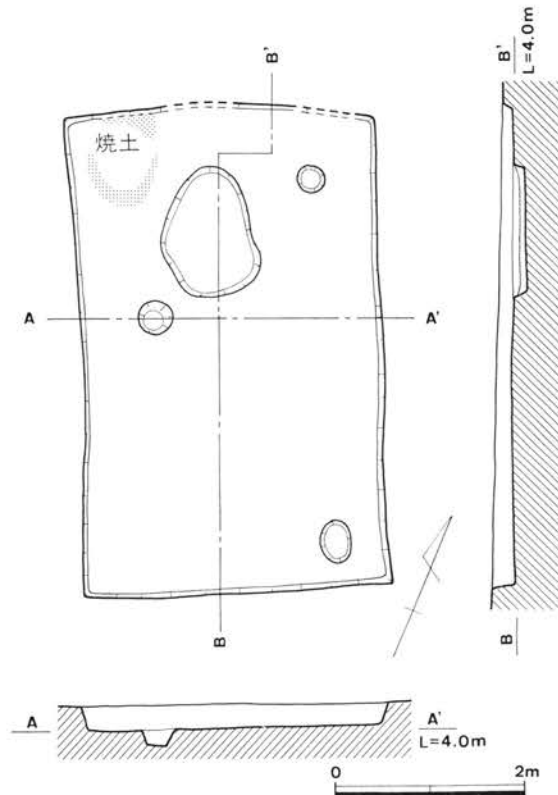


第204図 SH86110 出土遺物
36: 床面出土

約10cmほど下層である。床面の
みが残存していた。床面付近から
須恵器・土師器の細片が出土した
が、図化できるものはない。土師
器には内面に暗文をもつものがあ
る。

SH86110(第190・204図) SH
86101と切り合い関係にある方形
の竪穴式住居跡である。SH86101
に先行する。残された一辺の長さ
は、4.3mを測り、竪穴の向きは
SH86101(SH85101)にほぼ等し
くN65°Eを測る。埋土内から少量
の須恵器・土師器が出土している。

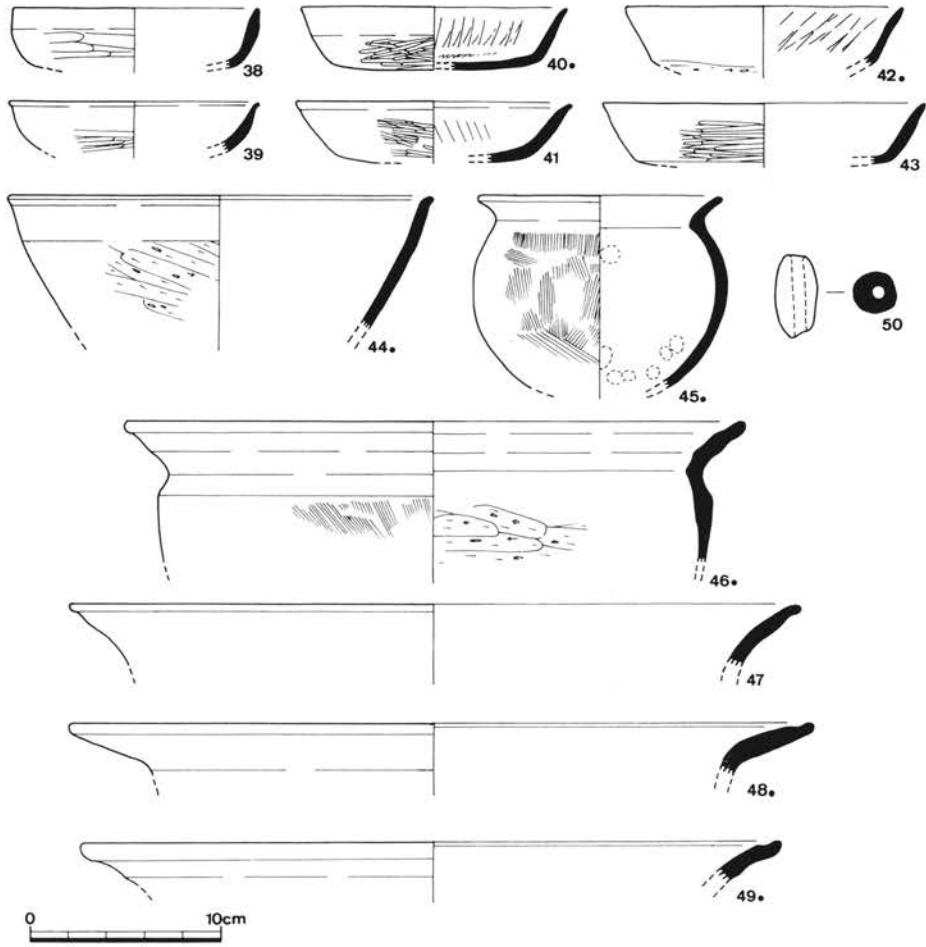
出土した遺物の内、図化できた
ものに36・37の口縁内面にナデに
よる段をもつ甕がある。口径19.0
cm・18.8cmを測る。



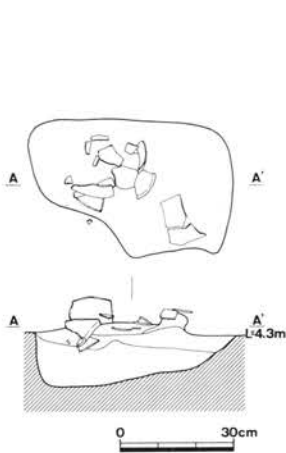
第205図 SH86111 実測図

SH86111(第205・206図) SH86102の南側24C区付近で検出した長方形を呈する竪穴式
住居跡である。長辺5.1m・短辺3.3mを測る。竪穴の向きはN65°Eを測る。造り付けの竈
が西隅部のやや北寄りに存在したと考えられるが、上層の奈良時代の柱穴により破壊され
ており、床面ではその残欠を確認するにとどまった。上層から切り込む柱穴内の埋土には、
多くの焼土が入っていた。床面で不整形な楕円形を呈する平底の土坑を検出した。住居に
伴う柱穴を3か所検出したが、主柱穴を構成するものかどうかは不明である。遺物が床面
及び土坑内・竪穴埋土中から出土した。

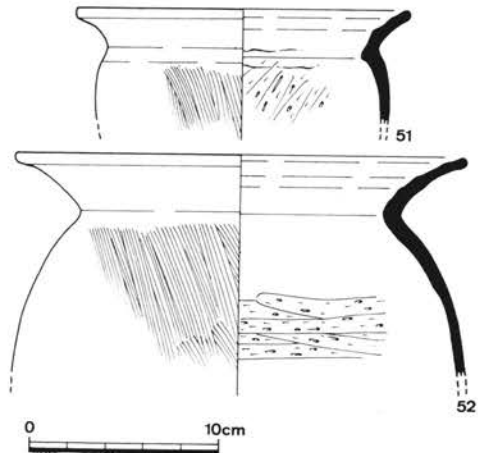
出土した遺物の内、図化できたものに38~50の土師器及び土鍾がある。須恵器も杯Aを
はじめ細片が出土しているが、図化することはできなかった。38・40~43は杯である。38
は、口縁部外面をナデたのち、口縁部下半から底部にかけて粗いヘラミガキを施す。口径
は13.0cm・器高約3.2cmを測る。40・41は、口縁部が大きく外傾し、口縁端部が内傾する
口縁端面をもち、口縁部外面をナデたのち下半部をヘラミガキする。口縁部内面に暗文を
もつ。40は、見込み部分にも暗文をもつ。口径・器高は、40が14.2cm・3.3cmを、41が
14.6cm・3.2cmをそれぞれ測る。42は、口縁部をナデたのち、底部境から底部にかけてへ



第206図 SH86111 出土遺物
 44・45：床面出土，40・42・46・48・49：土坑内出土

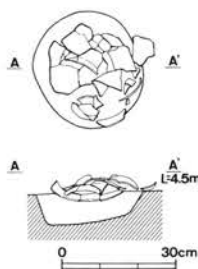


第207図 SK86106 実測図

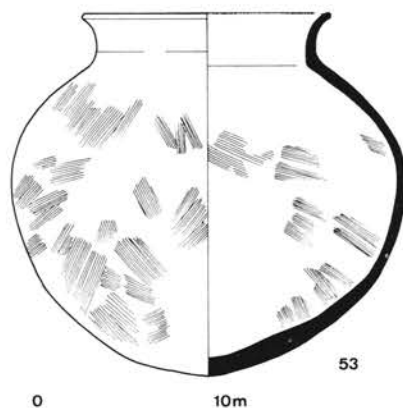


第208図 SK86106 出土遺物

ラケズリを行う。内面に放射状の暗文をもつ。口径14.6cmを測る。43は、他の杯に比べて口径が大きく、口径17.0cmを測る。口縁部をナデたのち下半部をヘラミガキする。39は、椀の可能性が高く、口縁端部を強くなでることによって内傾する



第209図 SK86107実測図

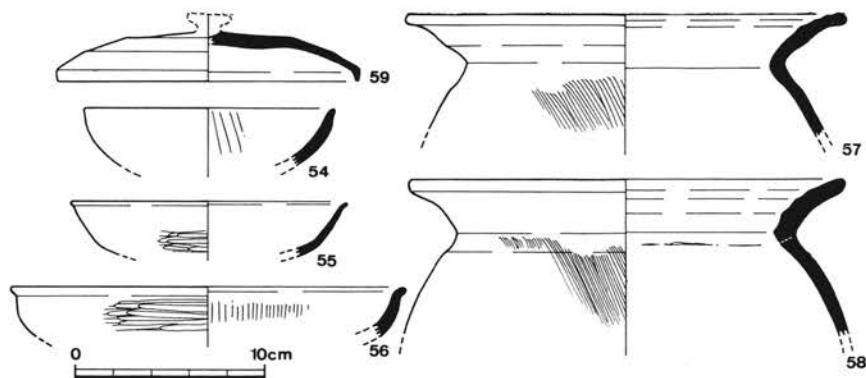


第210図 SK86107出土遺物

端面をもつ。口縁部下半をヘラミガキする。口径13.0cmを測る。44は、器種不明のものである。口縁部下半をヘラケズリする。口径22.5cmを測る。45は、球形の体部をもち、口径13.0cmを測る小型の甕である。46は、口縁部内面に段をもつ鍋もしくは甕である。体部内面をヘラケズリする。口径32.8cmを測る。47~49も鍋もしくは甕である。口径はそれぞれ38.4cm・39.2cm・37.0cmを測る。50は、土錘である。

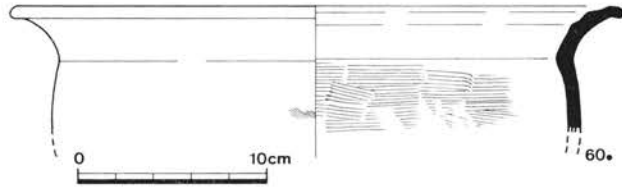
SK86106(第207・208図) SH86102の南西側で検出した長径約50cmを測る不整形な土坑である。土坑の埋土は、3層に分層することができる。上層に焼土混じりの炭・灰の堆積があり、中層には炭・灰混じりの焼土が堆積し、下層には焼土・炭・灰混じりの砂質土が堆積していた。中層から上層にかけてほぼ1個体の甕(52)が出土した。炉跡である。

出土した甕は、口径23.8cmを測る。口縁部内面に強いナデによる5条の段をもつ。体部内面は、頸部約5cm下にまでケズリが及んでいる。土坑内からは、口縁部の破片のみで



第211図 SK85116出土遺物

あるが、口径17.8cmを測る甕(51)も出土している。52と同様に口縁部内面に段をもつ。



第212図 SH85106 出土遺物

SK86107(第209・210図)

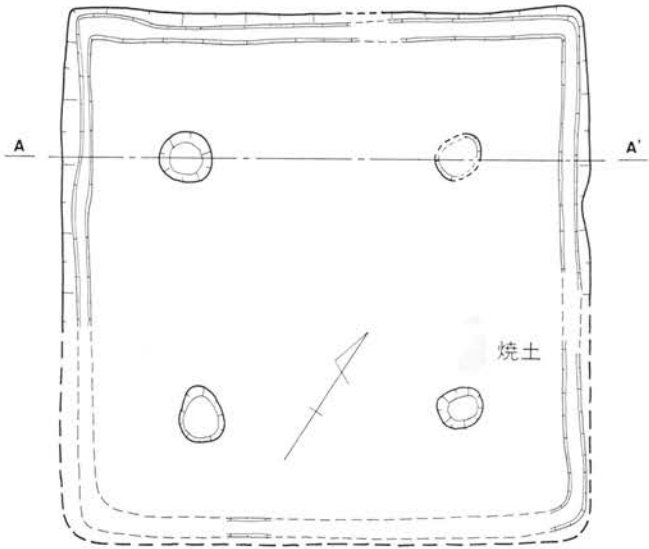
SH86103の北西側で検出し

た直径約30cmを測る円形の土坑である。土坑内には炭・灰混じりの焼土が堆積しており、そのほぼ中央部に甕(53)が1個体つぶれた状態で出土した。埋没時には甕は、この土坑の中央部に正置していたと考えられる。53は、口径12.8cm・最大径20.7cm・器高19.2cmを測る。口径に比較して胴部が大きく張る球形を呈する。

SK85116(第171・211図) 20B区で検出した長径1.3m・検出面からの深さ0.4mを測る楕円形を呈する土坑である。土坑の埋土は、1層で整理箱約1箱分の遺物が出土した。

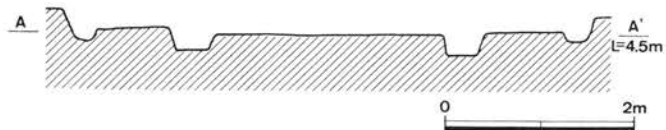
出土した遺物の内、図化できたものに54~59の土師器・須恵器がある。54は、口縁部をナデたのち、粗いヘラミガキを施す椀である。内面には暗文をもつ。口径13.2cmを測る。55は、口径14.6cmを測る口縁下半部をヘラミガキする杯である。56は、口径20.8cmを測る皿もしくは杯である。

内面に暗文をもち、外面口縁下半部をヘラミガキする。口縁端部をつまむようにしてナデているため、内傾する口縁端面をもつ。57・58は、口縁部内面にナデによる段をもつ甕である。口径は23.2cm・23.0cmとほぼ等しい。59は、笠形の天井部をもつ杯蓋である。口径16.0cmを測る。



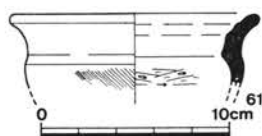
(2) 東側遺構群

9区から17区にかけて検出した竪穴式住居跡群である。方形竪穴式住居



第213図 SH85111 実測図

跡を計9基検出した。遺構の残存状況は極めて悪く、床面の
み検出したものも多い。遺物の出土量も極めて少ない。建物の
向きは西側の竪穴式住居跡群のように一様でなく、さまざま
まである。



第214図 SH85111出土遺物

SH85106・SH85114(第212図) 重なり合う2基の方形竪

穴式住居跡である。SH85106は、かろうじて竪穴の二辺を検出することができた。規模は
検出できた竈の位置から、一辺およそ4mを測るものと考えられる。竈は、東隅部に設置さ
れていると考えられる。竪穴の向きは、N75°Eを測る。SH85114は、竈と4本の支柱穴の
みを検出した。切り合い関係からSH85106に先行するものである。

2つの住居跡から出土した遺物は極めて少なく、図化できたものはSH85106の床面から
出土した甕(60)のみである。

SH85111(第213・214図) 一辺5.6mを測る正方形の竪穴式住居跡である。11D区付近
で検出した。検出面から床面までの深さは、約20cmを測る。床面上で焼土を検出したが、
その検出位置からこの住居跡に伴う造り付けの竈とは考えにくい。床下からは4本の支柱
穴と周壁溝を検出した。この住居に伴う遺物は少なく、床面付近から多くの弥生土器に混
じって、口縁部内面にナデによる段をもつ甕(61)が出土している。

SH85107・SH85108・SH85109・SH85110・SH85112・SH85113 12F付近で検出した
重なり合う方形竪穴式住居跡群である。いずれも床面しか残存しておらず、検出できた平
面形も極めていびつである。本来、SH85110は、SH85111と同規模、他の住居跡は、一辺
4m前後を測るものであったと考えられる。SH85110は北隅部が内側に入り込んでおり、
いわゆる青野型住居跡である可能性がある。SH85108・SH85113には、隅部に竈の残欠と
考えられる焼土が残されていた。

各住居跡とも時期を示す遺物が皆無に等しく、図化できるものはなかった。いくつかの
住居跡の床面から内面に段をもつ甕や暗文をもつ杯の細片が出土している。

(肥後 弘幸)

第6節 奈良時代（掘立柱建物の時代）（第165図・第215図）

第1項 概要

（1）遺構

総計19棟からなる掘立柱建物跡群をはじめとする遺構群を検出した。建物跡をはじめとする遺構群は、褐色粘性砂質土の上面から掘り込むものと、淡黄褐色粘性砂質土上面もしくは途中から掘り込むものの2群に大きく分けることができる。なお、実際に遺構調査した面は、灰褐色粘質土の上面（堅穴式住居跡等を検出した面よりやや上層）と、淡黄褐色粘性砂質土の途中から上面にかけて（実際には、淡黄褐色粘性砂質土の上面での遺構精査では上層建物群の一部しか検出できていない。）である。次項では、下層遺構群と上層遺構群とに分けて説明する。

（2）遺物

遺物は、包含層を中心に整理箱にして約30箱出土している。出土した遺物は、なお、須恵器の杯身のうち高台の付かないものを杯A、高台の付くものを杯Bとする。杯Bのうち体部下半に稜をもつものを杯B₂とする。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

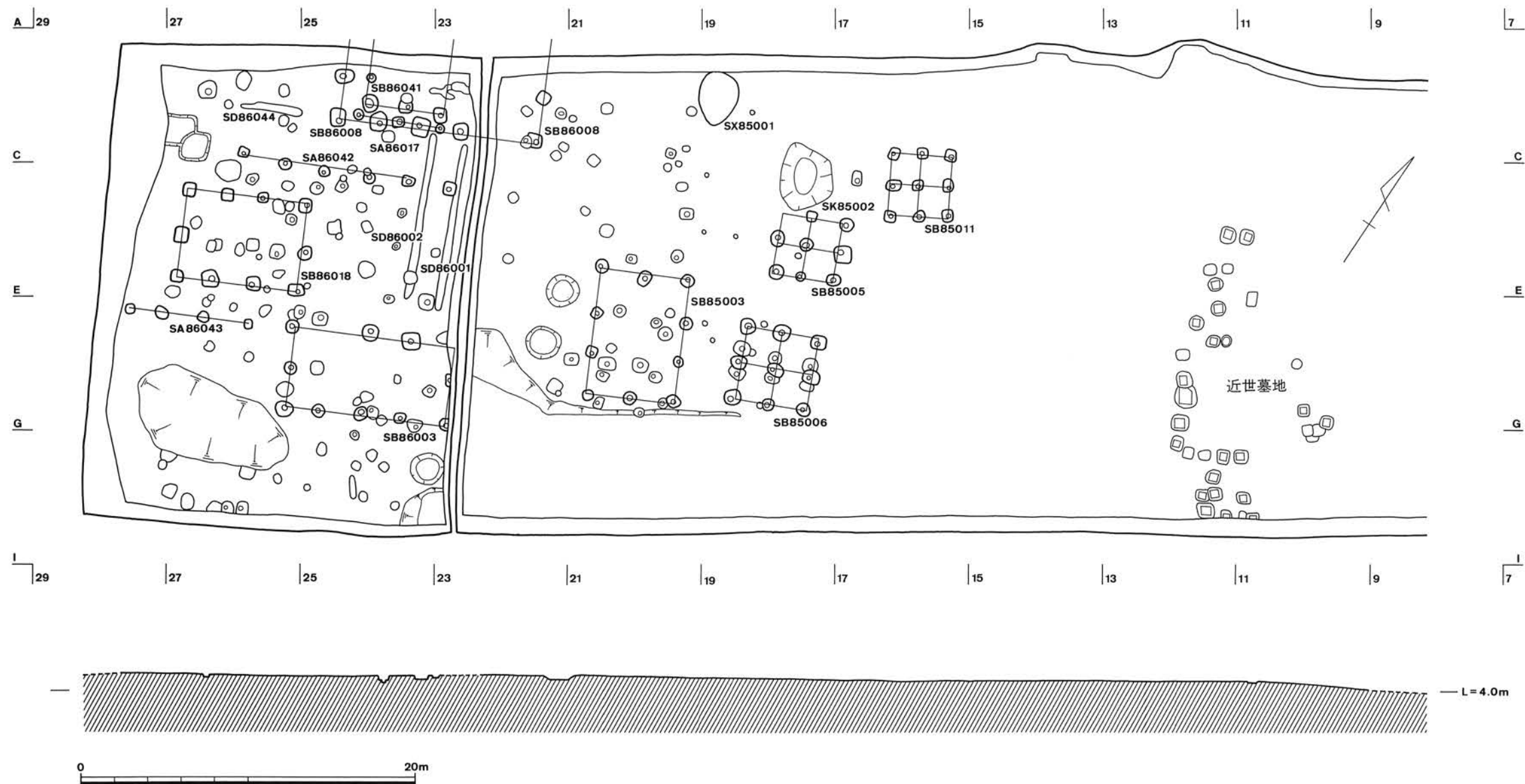
（1）下層の遺構群（第165図）

検出した遺構は、総柱の倉庫2棟を含む掘立柱建物跡11棟と2つの土坑である。

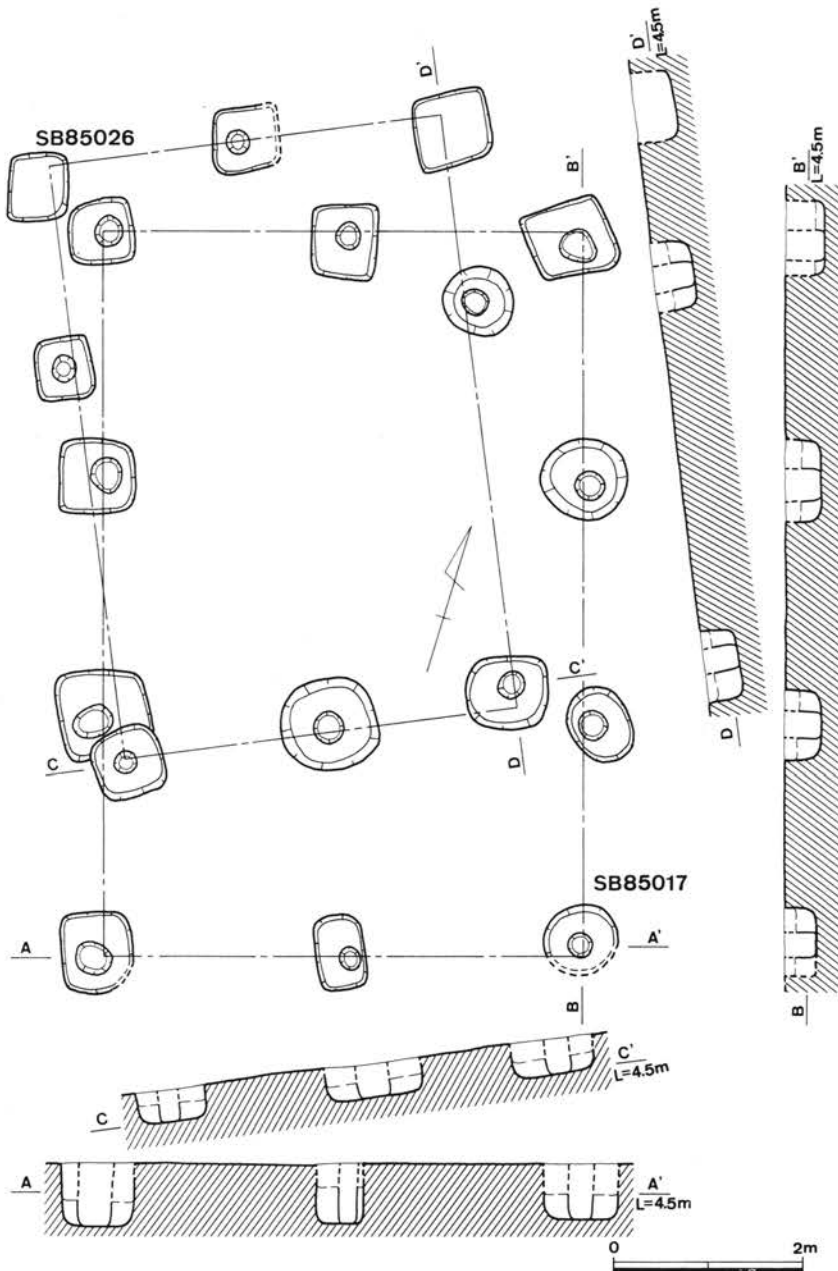
SB85107（第216・217図） 隣接するSB85046と棟方向を90度違えて、20C区付近に存在する3間(7.65m)×2間(5.1m)の建物跡である。棟方向は、N15°Wで、柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.55m(8.5尺)の等間隔を測る。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、50～100cmを、柱痕は、20～30cmを測る。SB85026と切り合い関係があり、SB85026に先行する。また、上層建物跡であるSB85003は、ほぼ同規模の建物跡で、SB85017→SB85026→SB85003と建て替えがあったものと考えられる。

柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたのは4点である。1は、外面をていねいにヘラケズリしたのちに、口縁部のみやや強いナデを施した椀である。2は、平坦な頂部と屈曲して小さく下方につまみだす縁部をもつ蓋である。3・4は、口径の小さい割に器高の高い杯Bである。同一個体の可能性もあるが、異なる柱穴から出土している。

SB85026（第216・218図） SB85107とほぼ同位置に存在する、やや小規模の3間(6.3m)×2間(4.2m)と考えられる建物跡であるが、桁方向の相対する一対が検出できていない。棟方向は、N24°Wで、柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.1m(7尺)の等間隔を測る。柱の

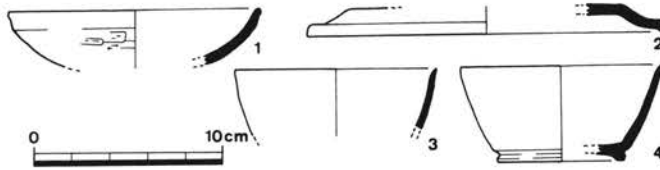


第215図 奈良時代～近世検出遺構図

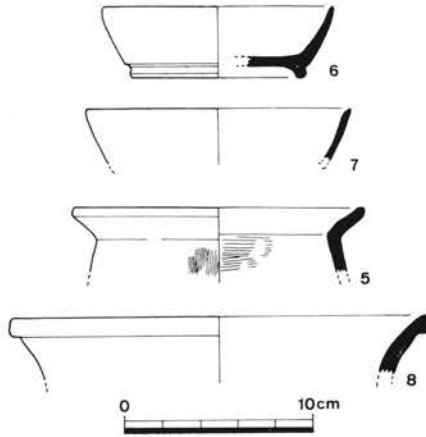


第216図 SB85017・SB85026 実測図

掘形は、隅丸方形を呈し、60~100cmを測り、検出できた柱痕は20~30cmを測る。この建物跡の柱穴のうち、いくつかは上層の遺構検出面で確認したことから、層位的にもSB85017より後出することが予想される。この建物跡は、SB85017とSB85003と切り合い関係があり、柱穴はSB85017を切り込み、SB85003によって切り込まれている。ほぼ90度棟方向を違



第217図 SB85017 出土遺物



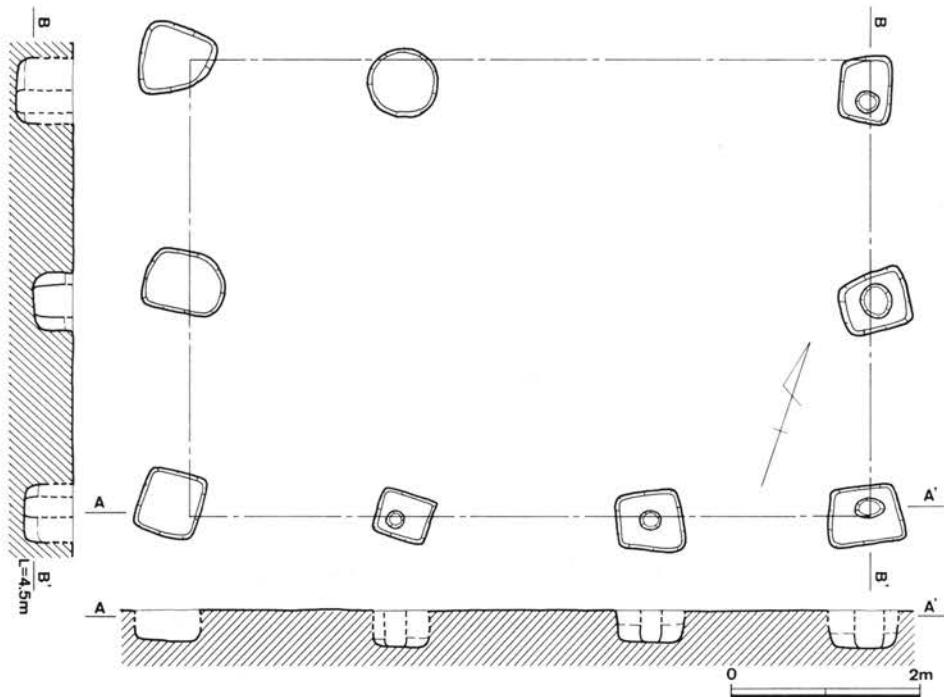
第218図 SB85026 出土遺物

えた建物にSB86019がある。

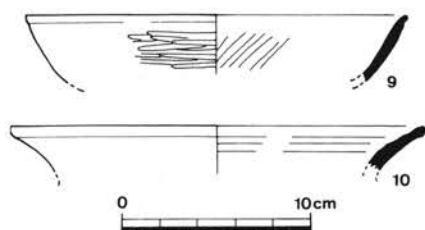
柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたのは、4点である。5は、

小型の甕で口縁部内外面を強くナデたものであるが、内面に明瞭な段を残さない。6は、高台がやや外側に開く杯Bである。8は、口縁端部を外側に小さく拡張した壺もしくは甕の口縁部である。5のみ土師器である。

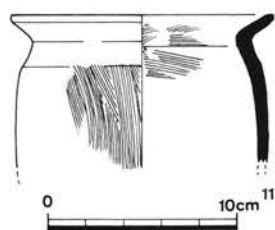
SB85046(第219・220図) SB85017に棟方向を約90度違えて接するSB85017とほぼ同規模の3間(7.2m)×2間(4.2~4.8m)の建物跡である。棟方向は、N74°Eで、柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁間2.1(7尺)~2.4m(8尺)を測る。柱の掘形は、隅丸方形で、50



第219図 SB85046 実測図



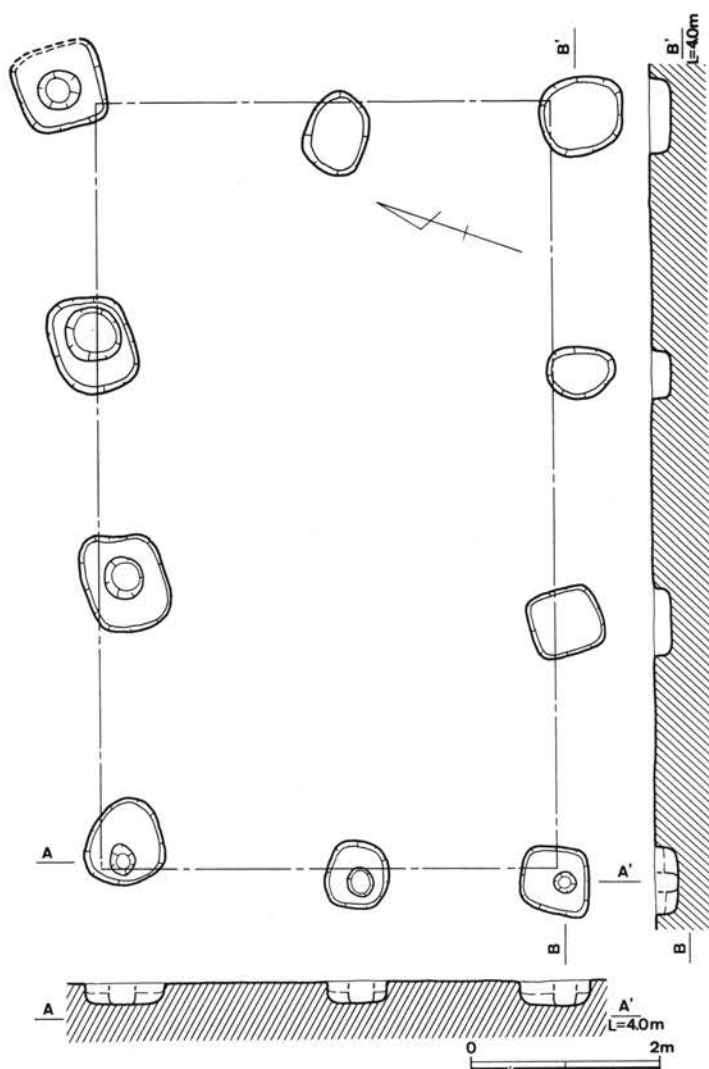
第220図 SB85046 出土遺物



第221図 SB86020 出土遺物

～70cmを測り、確認できた柱痕は、20cm前後を測る。切り合い関係にある遺構はない。

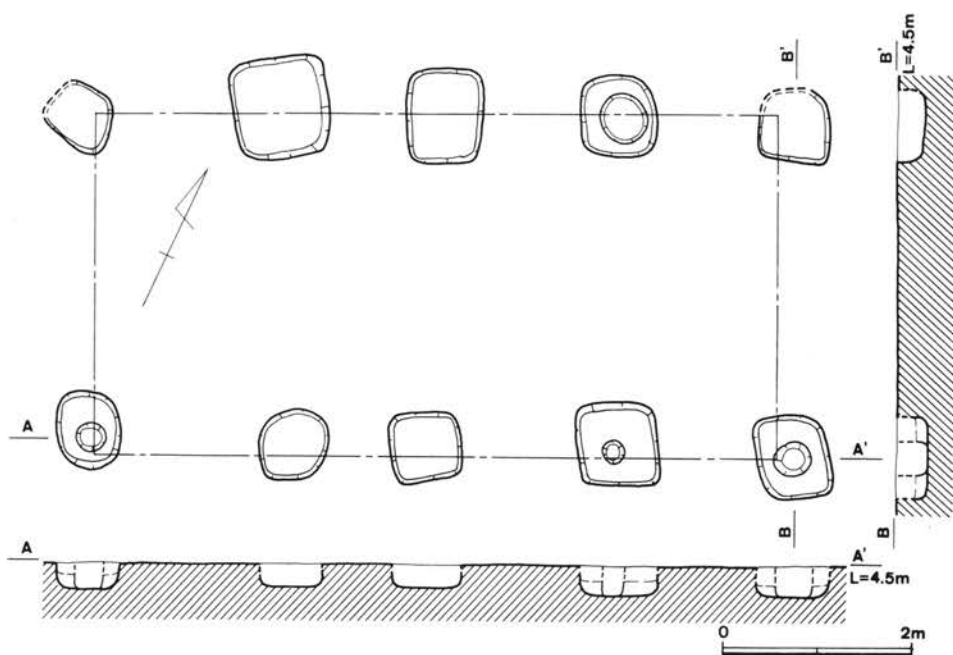
柱穴内から須恵器・土師器の細片が出土したが、図化できるものは第220図9・10のみであった。いずれも細片である。9は、口径のやや大きい杯である。外面をていねいにヘ



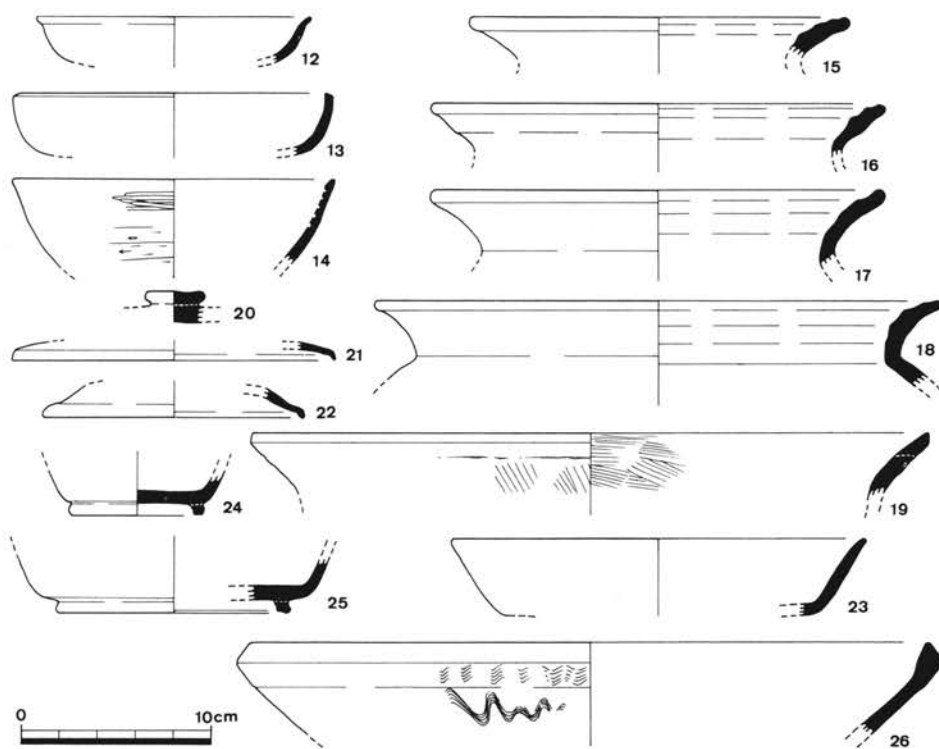
第222図 SB86020 実測図

ラミガキし、内面に放射状に暗文を施す。口縁端部を外側に小さくつまむ。10は、口縁部内面に強いナデによる段をもつ甕である。

SB86020(第221・222図) SB85017と棟方向を約90度違えて24F区付近に建っていた3間(8.1m)×2間(4.8m)の建物跡である。棟方向は、N73°Eで、柱間寸法は、桁行2.7m(9尺)・梁間2.4m(8尺)を測る。他の建物に比べてやや柱列が不揃いである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、



第223図 SB86019 実測図



第224図 SB86019 出土遺物

50~90cmを測る。確認できた柱痕は直径20~60cmを測る。切り合い関係はないが、ほぼ同位置の上層でSB86003を検出しており、SB86020→SB86003に建て替えられたものと考えられる。

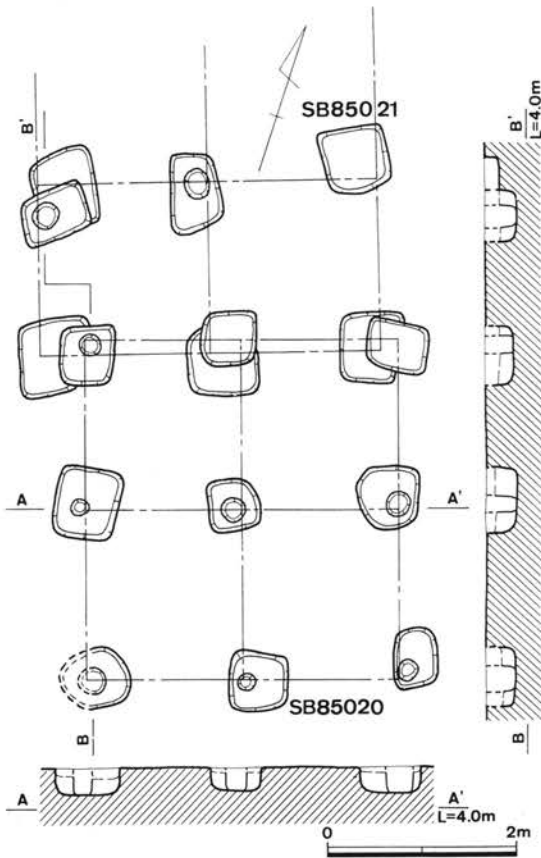
柱穴内から出土した遺物で図化できたのは1点のみである。11は、小型の甕である。体部は、口縁部径よりも大きく張り出さず、外面の頸部の強いナデによって肩部に小さい稜をもつ。胎土は暗褐色を呈する。

SB86019(第223・224図) 26E区付近に位置する4間(7.2m)×1間(3.6m)の建物跡である。確認できた柱痕は少ない。棟方向は、N66°Eで、SB85026と90度違える。柱間寸法は、確認できた柱痕が少ないため、推測ではあるが、桁行1.8m(6尺)・梁間3.15m(10.5尺)を測ると考えられる。柱の掘形は、隅丸方形で70~100cmを測り、確認できた柱痕は20~50cmを測る。SB85026と同様、柱穴のうちいくつかは上層の検出面で確認できている。

柱穴内から比較的多くの遺物が出土している。12は、口縁部をつまむように強くナデる

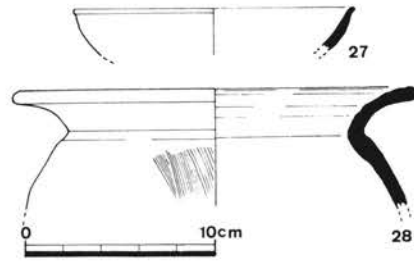
ことにより、内傾する口縁端面を造りだす小型の杯である。13は、

底部から直立気味に立ち上がる口縁をもつ杯で、外面の調整にヘラミガキが観察できる。外傾する口縁端面をもつ。14は、やや深い杯で口縁部下半にヘラケズリを残し、上半にヘラミガキを施したのち端部付近をナデる。口縁端面は内傾する。15~18は、口縁部内面に強いナデによる段をもつ甕である。15~17のような中型のものと、18のような大型のものがある。16は、口縁部内面の段が著しいもので、外面にも段がある。19は、口縁部内外面に粗いハケを残すこと等から鍋の口縁部と考えられる。20~22は、擬宝珠つまみをもつ蓋である。つまみは20に見られるように扁平なもので、天井部も扁平なも



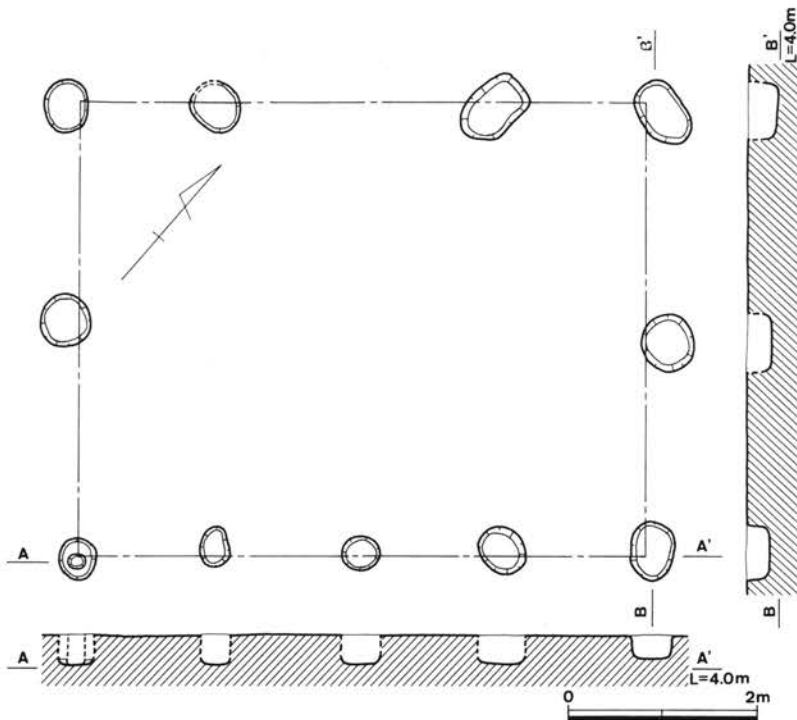
第225図 SB85020・SB85021 実測図

のが予想される。23は、法量の大きな杯Aである。色調が淡灰褐色を呈し、一見土師器に見えるが、その成形・調整手法から須恵器と判断した。内外面とも観察できる調整は、ナデのみである。24・25は、「ハ」の字状に広がる高台をもつ杯Bである。26は、口縁部外面を波状文で飾る口縁部である。器種は不明である。出土した須恵器の中で、この土器のみ石英を多量に含み胎土が異なる。



第226図 SB85020 出土遺物

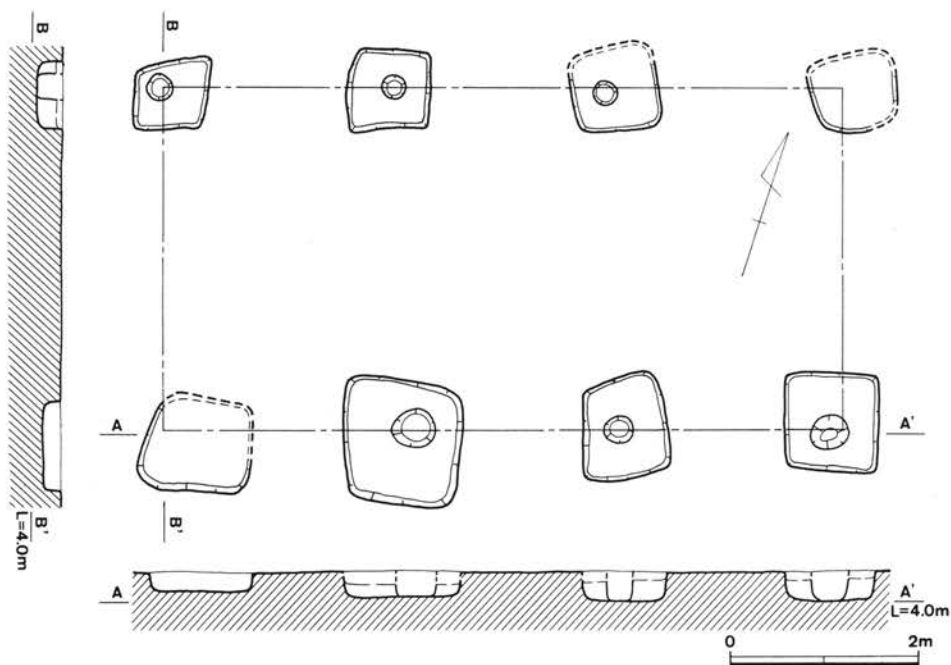
SB85020・SB85021(第225・226図) 17B区付近に位置し、切り合い関係にある2棟の2間×2間の建物跡である。他の建物との配置関係及びその構造から倉庫と考えられる。SB85020の建物跡規模は、南北3.6m・東西3.3mを測る。柱間寸法は、それぞれ1.8m(6尺)と1.65m(5.5尺)である。方向は、N18°Wである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、60~70cmを、柱痕は、20~30cmを測る。SB85021は、一部しか検出できていないので、南北方向の規模が不明であるが、東西は3.6mを測る。柱間寸法は、南北・東西ともに1.8m



第227図 SB85020 実測図

(6尺)を測ると考えられる。建物の方位は、N19°Wである。柱の掘形及び柱痕の規模は、SB85020とほぼ同規模である。柱穴の切り合い関係から、SB85021がSB85020に先行する。

SB85020



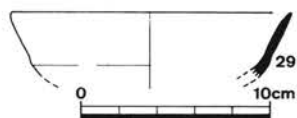
第228図 SB85024 実測図

の柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたのは27・28の2点である。27は、口縁部外面を粗いヘラミガキもしくははていねいなヘラケズリを施した杯である。28は、口縁部内面に強いナデによる段をもつ甕である。SB85021の柱穴内からは図化できるものは、出土しなかった。

なお、SB85020・SB85006・SB85005は、東側の柱列を揃えるなど、倉庫としての計画性の高い配置をする。この3棟は一時期整然と並ぶ倉庫群を形成していた可能性が非常に高いが、他の2棟は検出面の違いから上層の遺構の中で述べる。

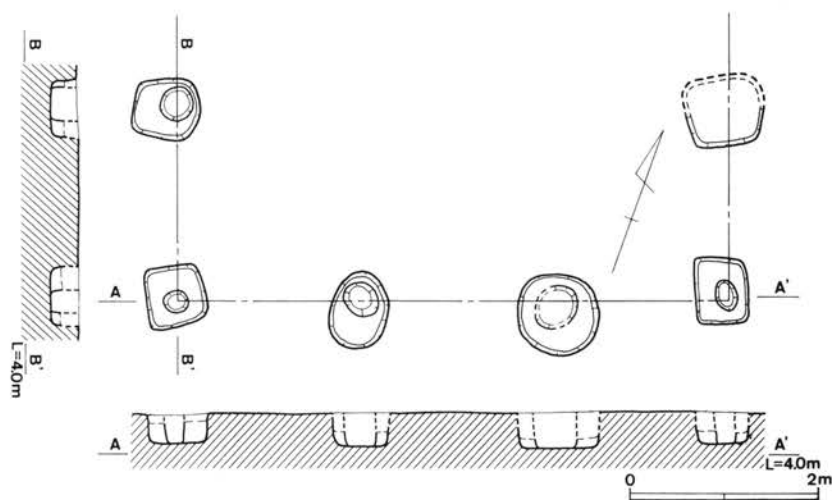
SB85027(第227図) 12B区付近に位置し、他の掘立柱建物跡に比べてやや小振りの柱穴から構成される4間(6.0m)×2間(4.8m)の建物跡である。柱間寸法は、桁行1.5m(5尺)・梁間2.4m(8尺)を測る。棟方向は、N40°Eである。柱の掘形は不整形な円形を呈し、径40～70cmを測り、唯一検出できた柱痕は、径20cm以下の小さなものである。SB85023と切り合い関係にあり、SB85023に先行する。

柱穴内からの出土遺物はない。



第229図 SB85024出土遺物

SB85028 10C区付近に位置し、3間以上×2間(4.8m)の建物跡である。東側部分を平安時代の洪水によって削平を受けており、建物の規模・構造等不明な点が多い。柱間寸法は、桁行2.1m(7尺)・梁間2.4m(8尺)を測ると考え



第230図 SB85023 実測図

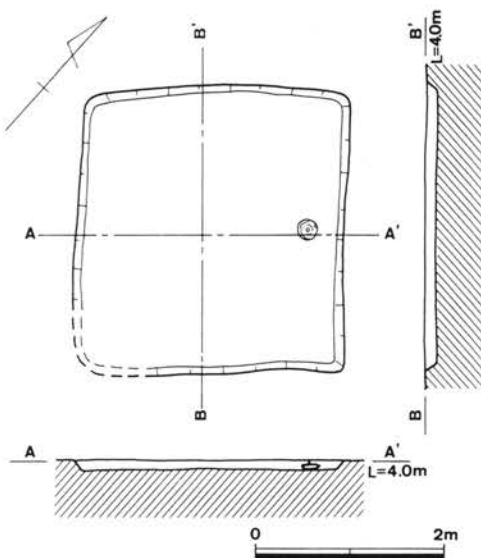
られる。

棟方向はN70°Eで、SB85023・SB85024とはほぼ同じである。柱の掘形は隅丸方形を呈し、50～80cmを測り、検出できた柱痕は20cm前後を測る。SK85044とSB85024と重複関係があり、営まれた順番は、SK85044→SB85028→SB85024の順である。

柱穴内から土器片が出土しているが図化できるものはなかった。

SB85024(第228・229図) 11B区付近に、SB85023と棟方向を揃えて隣接する3間(7.2m)

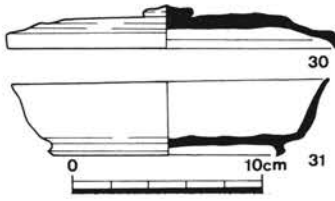
×1間(3.6m)の建物跡である。梁方向にのびて大型の総柱の建物になる可能性もある。柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁間3.6m(12尺)を測る。棟方向は、N73°Eである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、大型で80～120cmを測る。南側の柱列の掘形が特に大きい。柱痕は、25～40cmを測る。SK85044・SB85028と切り合い関係がある。SB85028のところ述べておりである。



第231図 SK85044 実測図

柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたのは1点のみである。29は、杯部下半に稜をもつ杯B₂である。

SB85023(第230図) 13B区付近に、SB

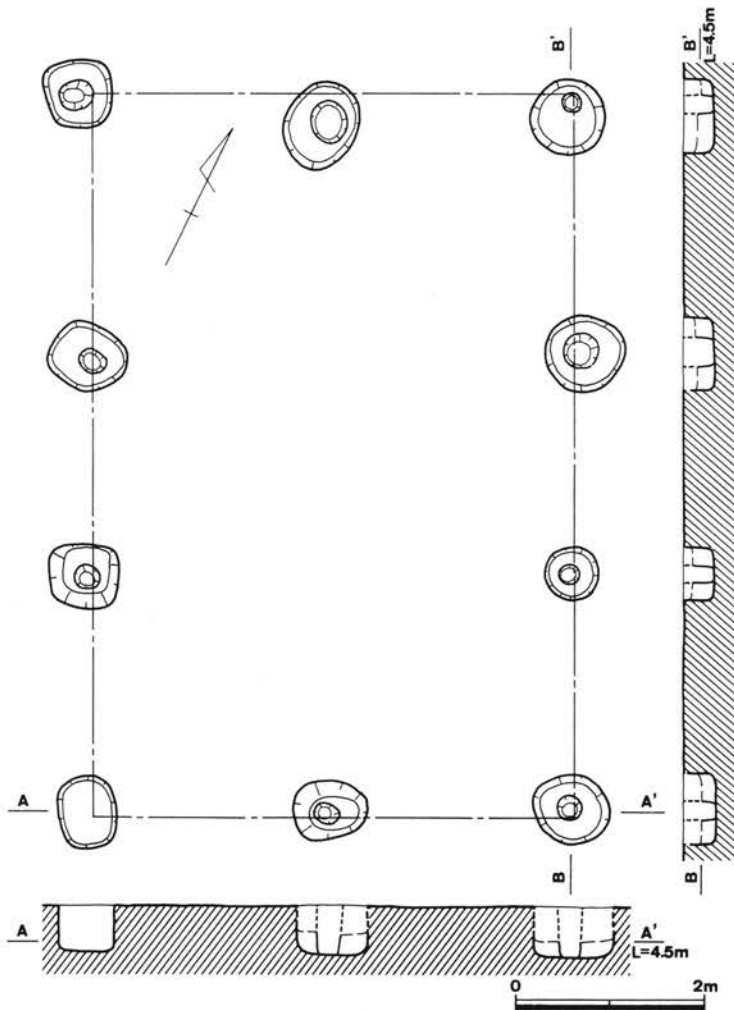


第232図 SK85044 出土遺物

85024と棟方向を揃えて隣接する3間(5.85m)×2間以上の建物跡である。柱間寸法は、桁行1.65m(5.5尺)・梁間1.8m(6尺)を測ると考えられる。棟方向は、N71°Eである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、60~80cmを、柱痕は、20~40cmを測る。SB85027と切り合い関係にあり、後出する。

柱穴内の出土遺物で図化できるものはなかった。

SK85014 14D区付近で検出した長方形に近い不定形な土坑である。検出当初竪穴式住居跡と考えて調査を進めたが、竈や柱穴・床等の施設は存在しなかった。壁高は約20cmを



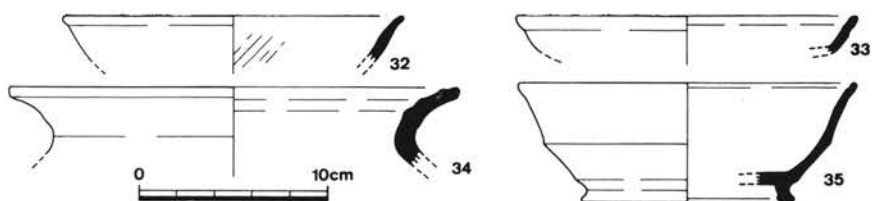
第233図 SB85003 実測図

測る。埋土は砂で、遺物は土器の細片が数点あるのみである。

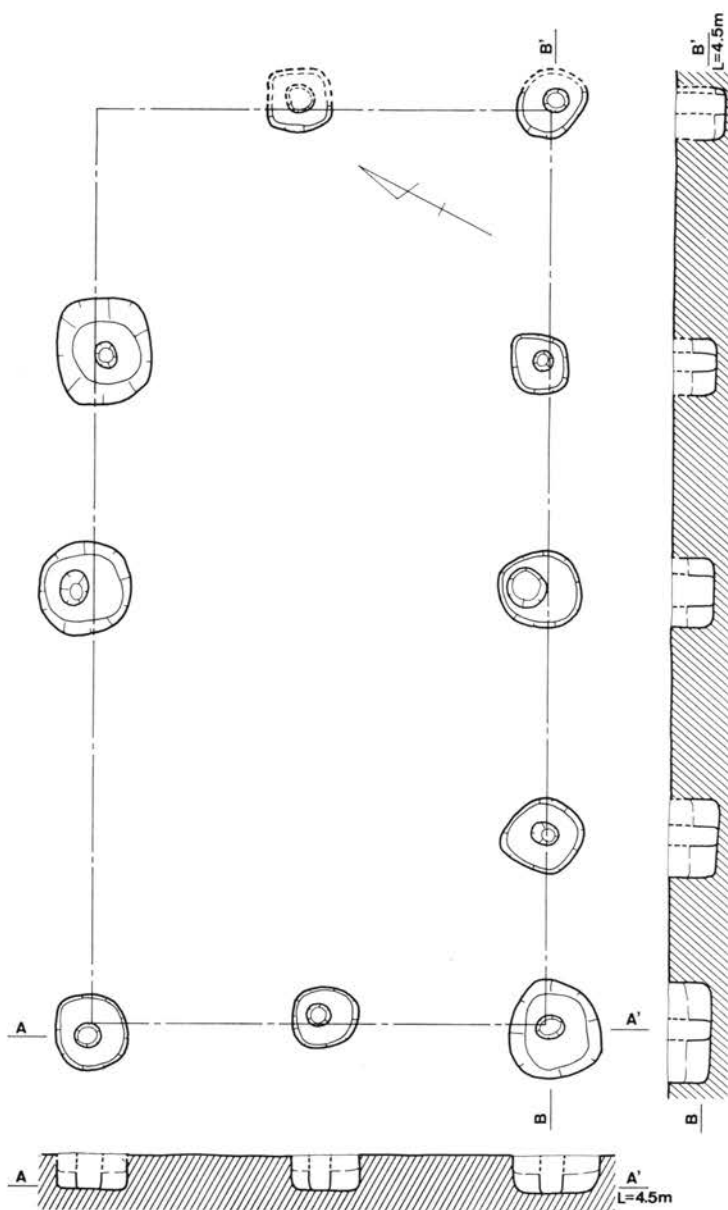
SK85044

(第231・232図)

12B区付近で検出した、一辺約3mを測るほぼ正方形を呈する土坑である。壁の残存高は、約15cmを測る。竈・柱穴が存在せず、竪穴式住居跡とは考えにくい。床面に密着して、正置した状態で蓋杯が出土した。



第234図 SB85003 出土遺物

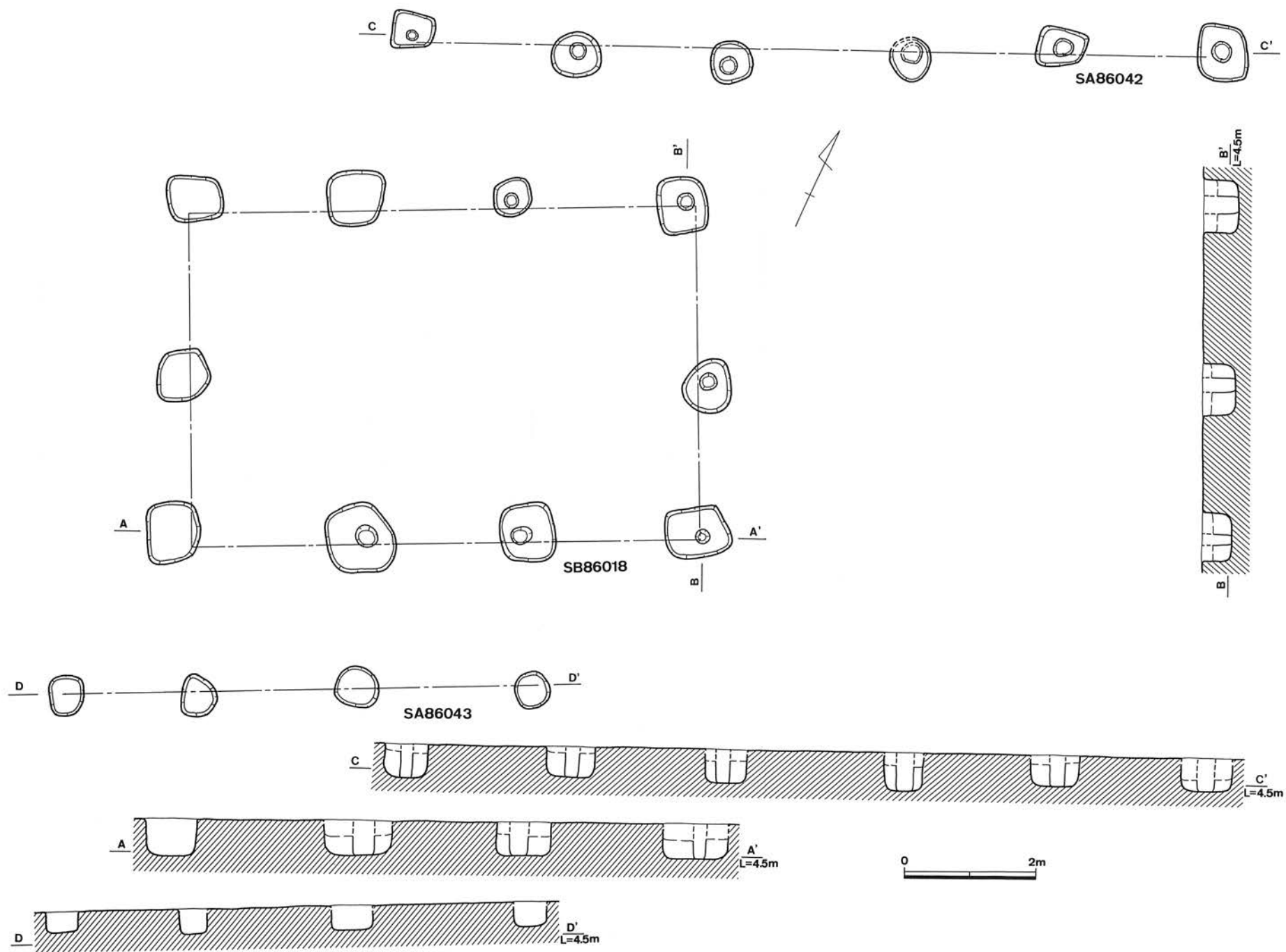


第235図 SB86003 実測図

出土した遺物は、セット関係にある杯身(31)と杯蓋(30)である。いずれも完形である。30は、平らな頂部と屈曲する縁部をもち、縁端部は下方にのびる。縁部の屈曲も比較的緩やかで、擬宝珠つまみはかなり扁平である。内面天井部には不定方向のナデがある。31は、底部端のやや内側に「ハ」の字に開く高台を貼り付けた杯Bである。30・31は、同じ胎土である。

(3) 上層の遺構群(第215図)

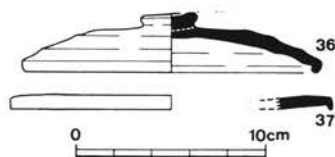
検出した遺構は、8棟の掘立柱建物跡と2棟の柵列及



第236图 SB86018 · SA86042 · SA86043 实测图

び溝状遺構・土器溜まり等である。

SB85003(第233・234図) 20E区付近に位置する3間(7.65m)×2間(5.1m)の建物跡である。柱間寸法は、桁行2.85m(8.5尺)・梁間2.55m(6.5尺)を測る。棟方向は、N26°Wである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、50~80cmを測る。柱痕は、20~40cmを測る。SB85026の柱穴を切って建てられている。



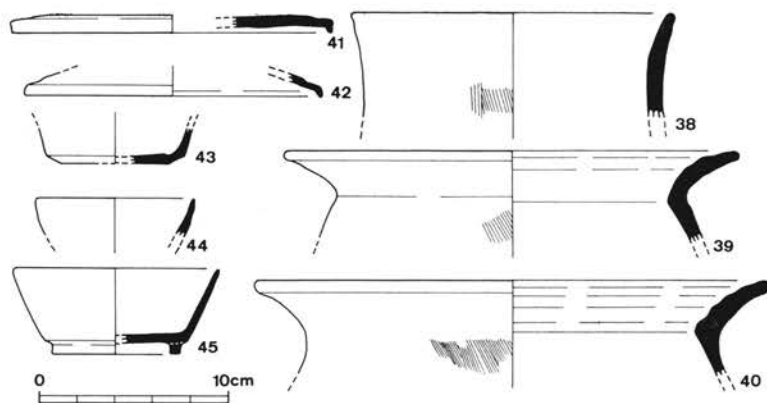
第237図 SB86003出土遺物

柱穴内から出土した遺物の内、図化できたのは4点である。32は、内面に放射状の暗文を施す杯である。口縁部外面上半をナデ、下半部には粗いヘラミガキが観察できる。33は、ろくろで成形したと考えられる土師器の皿である。丹塗り土器である。34は、口縁部内面にナデによる段をもつ甕である。35は、体部下半に稜をもつ杯B₂である。口縁部内面に沈線を施す。高台は外側に踏ん張るものである。

SB86003(第235・237図) SB85003に棟方向を約90度離れた4間(9.6m)×2間(4.8m)の建物跡である。24F区付近で検出した。その位置関係は、SB85017とSB86020の關係に酷似する。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.4m(8尺)を測る。棟方向は、N64°Eである。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、70~100cmを測る。柱痕は、20~40cmである。その位置関係と検出面の關係から、SB86020を建て替えたものと考えられる。

柱穴内から須恵器の蓋が2点出土している。36は、笠形の天井部をもつ。つまみは、扁平である。37は、極めて平らな天井部をもつ。

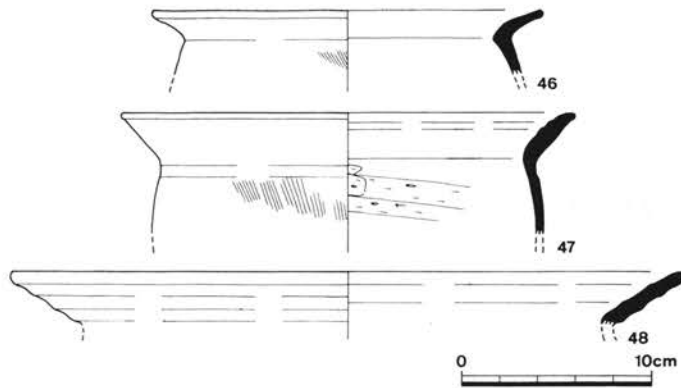
SB86018(第236・238図) 26D区付近で検出した3間(7.65m)×2間(5.1m)の建物跡である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.55m(8尺)を測る。柱の掘形は隅丸方形を呈し、70~100cmを測る。柱痕は、径20~30cmを測る。棟方向は、N64°Eで、SB85003・SB85008とはほぼ等しい。上層の検出面で確認できず、下層の検出面で確認した柱穴もある。この建物跡



第238図 SB86018 出土遺物

を挟む形でSA86042・SA86043が存在する。

柱穴内から出土したのものには、以下のものなどがある。38は、口縁部がほぼ直立する甑である。口縁部に多くの甃と同じように強いナデを施すが、段を有するには至っていない。



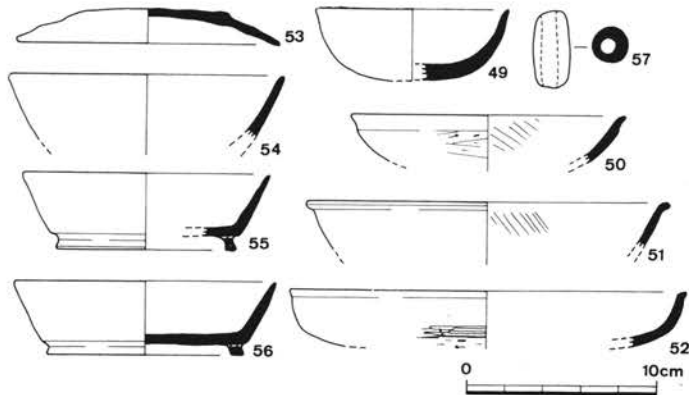
第239図 SA86042 出土遺物

口縁部と体部の境は至って不明瞭で、ナデの施されている部分が口縁部と考えられる。体部は、内外面ともハケで調整する。39・40は、口縁部内面にナデによる段をもつ甃である。体部外面はハケで調整する。41は、極めて平らな天井部をもつ蓋である。縁端部は短く垂下する。42は、屈曲する縁部をもつ蓋である。41・42ともに縁部に焼成時の重ね焼きの痕跡を残す。43は、小型の杯Aである。44は、器種の不明なものである。45は、小型の杯Bで、高台部分は外側に踏ん張ったり、「ハ」の字状に開いたりせずほぼ直立する。

SA86042(第236・239図) SB86018とSB86008のほぼ中間に位置する柵列(塀)である。規模は、5間(12.4m)で、柱間寸法はほぼ2.4m(8尺)を測る。柵列の方向は、N66°Eで、SB86018・SB86008の棟方向とほぼ平行する。SB86018・SB86008との間隔は、それぞれ2.4m(8尺)と3.0m(10尺)である。柱の掘形は、隅丸方形を呈し50~80cmを測る。柱痕は20cm前後を測る。SB86018とSB86008の目隠し塀的な役割をはたしたと考えられる。

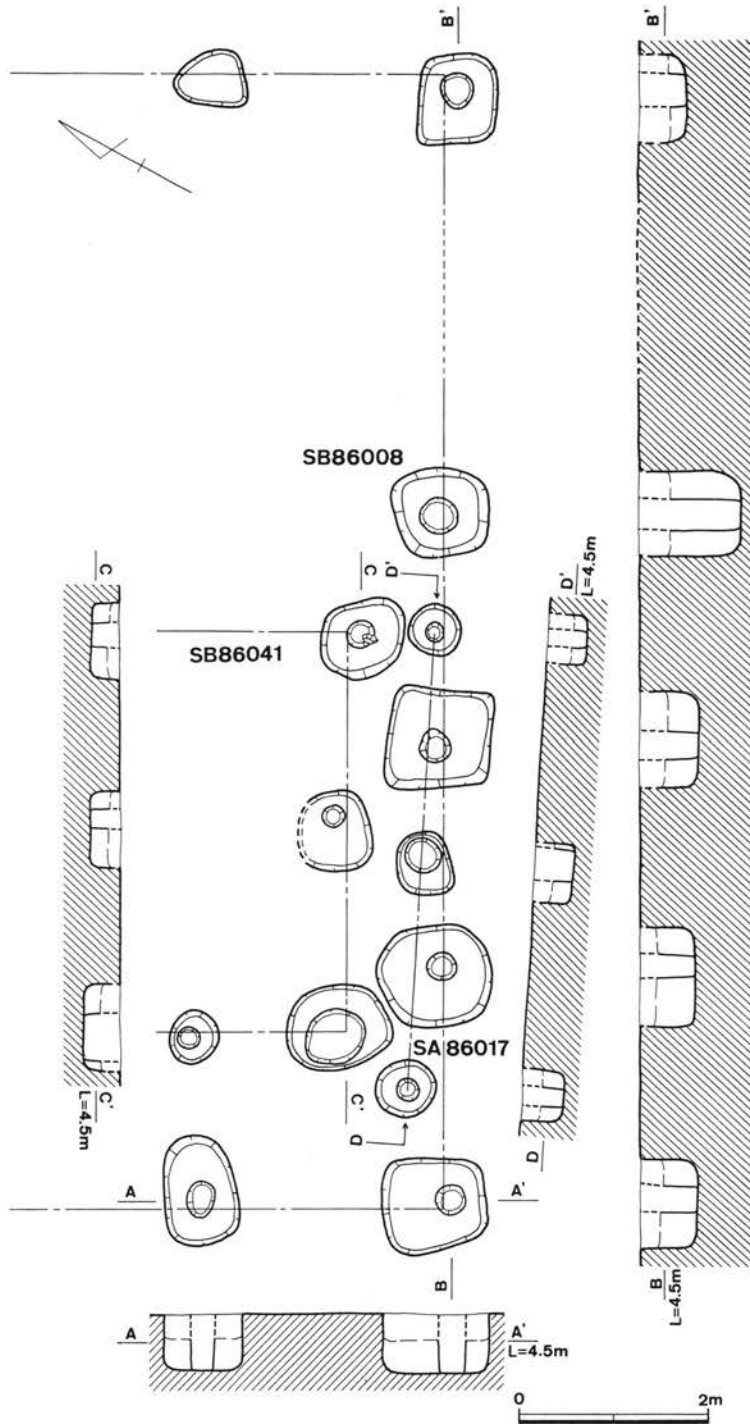
柱穴内から出土した遺物のうち、甃3点を図化した。やや小型の46は、口縁部にはナデによる段をもたない。

47は、口縁部に段をもち、体部内面をヘラケズリする。体部はあまり張り出さない。



SA86043(第236図) SB86003と柱列を揃えて、SB86018の脇に棟方向と平行に建てられた柵列(塀)である。検

第240図 SB86008 出土遺物



第241図 SB86008・SB86041・SA86017表測図

出した規模は、3間で7.2mを測る。柱間寸法は、2.4m(8尺)であると推測される。SB86018との間隔は2.1m(7尺)である。柱の掘形は、40~60cmを測る。柱痕は検出できていない。SB86018を囲むものであろうか。

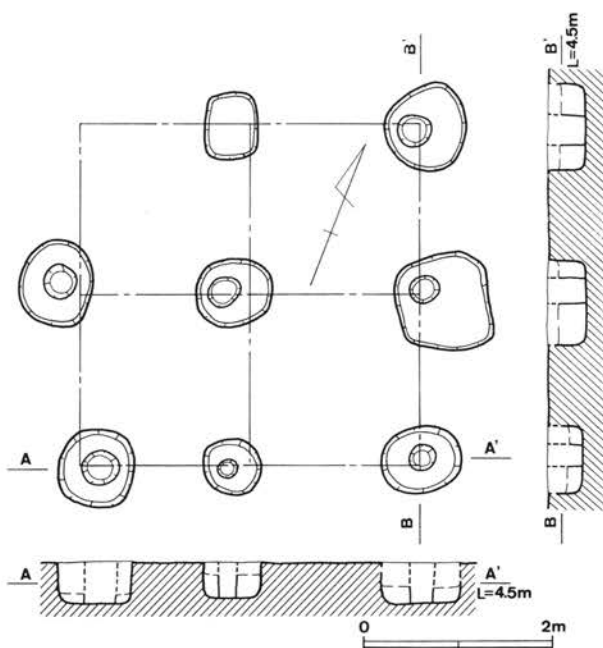
柱穴内から、土師器・須恵器片が出土しているが図化できるものはなかった。

SB86008(第240・241図) 23B区付近に位置する5間(12.0m)×2間以上の大型の建物跡である。柱間寸法は、桁行2.4m(8尺)・梁間2.7m(9尺)を測る。棟方向は、N64°Eを測り、SB86003・SB86018とほぼ等しい。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、70~120cmを測る。検出できた柱痕の大きさは20~40cmである。軒の高い建物構造を持つものであったのか、柱穴の深さも他の建物跡のものに比べてやや深い。第6次と第7次の調査区にまたがって検出しているが、第6次調査時には建物跡としての認識はできなかった。

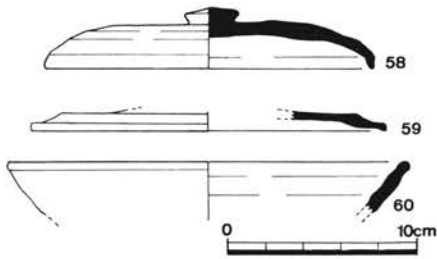
柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたものとして49~58がある。49~52は、土師器である。49は、小型の椀で、器壁が荒れているため不明な点が多いが、外面を底部から口縁部にかけてヘラケズリしたのち口縁部をナデたと思われる。50は、内傾する口縁端部をもつ椀である。口縁部内面に放射状の暗文を施し、外面はヘラケズリを行う。51は、口縁端部を外側につまみだすことによって内傾する端面をもつ杯である。口縁部内面に放射状に暗文を施す。52は、口縁端部を外側につまみだすようにナデることによって、内傾する端面をつくる浅い大口径の

椀である。底部をヘラケズリし、口縁部下半にやや粗いヘラミガキを施すものである。ヘラケズリとヘラミガキは、

53~56は、須恵器である。53は、柱穴の埋土上層から出土した。蓋として実測を行ったが、器種は定かではなく皿の可能性もある。天井部は、回転ヘラキリののち未調整である。天井部内面には、不定方向のナデはない。54~56は、杯Bである。55は、あまり開かない高台を、56は、やや外



第242図 SB85005 実測図



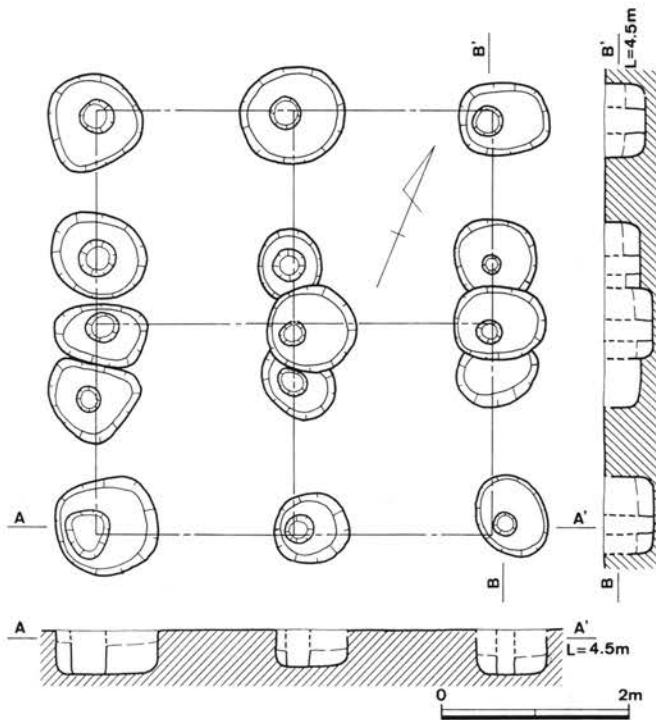
第243図 SB85005 出土遺物

側に踏ん張る高台をもつ。57は、土師質の土錘である。

SB86041(第241図) 23B区付近で検出した2間以上×2間(4.2m)の建物の跡かと考えられる。柱間寸法は、桁行1.65m(5.5尺)・梁間2.1m(7尺)を測る。棟方向は、N26°Wで、SB86008にほぼ直交する。柱の掘形は、50~80cmを測り、柱痕は20~40cmを測る。

この建物跡?は、SB86008の内側にほぼ納まることから、SB86008に関連する遺構の可能性はある。柱穴内の出土遺物で図化できるものはなかった。

SA86107(第241図) SB86008の南側の柱列内の間に位置する柱穴3つから構成される。報告の便宜上柵列として報告しているが、SB86008の柱間に存在することから、SB86008に関連する遺構と考えられる。平城京跡等で報告されている大型の建物に伴う柱を据え付けるための足場である可能性もある。その場合、柱痕と確認したものは抜き取り穴なのであろうか。



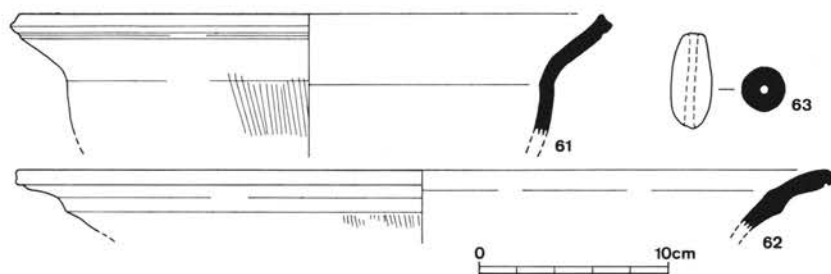
第244図 SB85006 実測図

柱穴内から土師器の細片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SD86001・SD86002

22D区付近で検出した、幅30~40cm・長さ約13.5m・検出面からの深さ約10cmを測る平行する浅い溝状遺構である。溝の方向は、N24°Wで、SB86003・SB86008とほぼ直交する。このことから上層の建物跡群に関連する遺構の可能性はある。

図化できる出土遺物



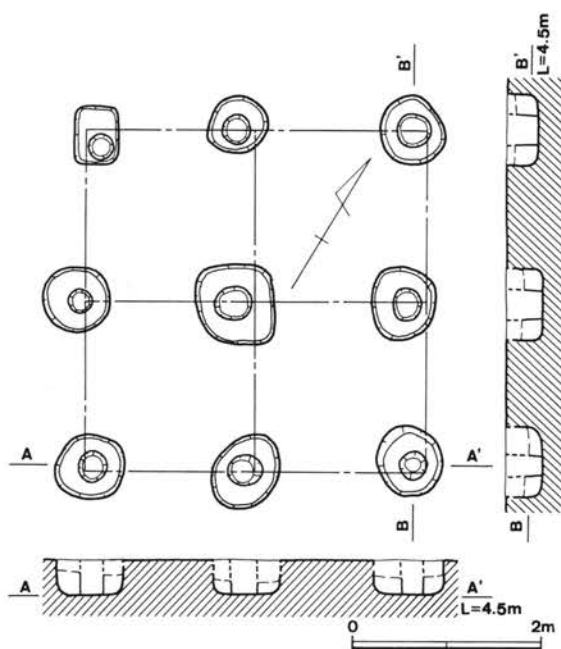
第245図 SB85006 出土遺物

はなかった。

SB86044 25B区付近で検出した浅い溝状遺構である。SB86008の柱列とほぼ揃うことから、先述の2つの溝と同じ性格のものと考えられる。

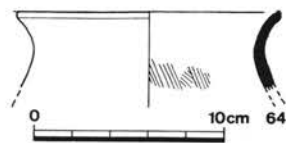
SB85005(第242・243図) 17D区付近で検出した、2間(3.6m)×2間(3.6m)の総柱の建物跡である。柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。建物の方位は、N20°Wを測る。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、60~100cmを測る。柱痕は、径20~40cmである。SB85006・SB85011等と倉庫群を形成すると思われる。

柱穴内から58~60が出土している。須恵器の蓋には、笠形の天井部をもつもの(58)と、屈曲する口縁部をもつもの(59)とがある。58は、口縁端部をやや長く屈曲させる。天井部内面には、不定方向のナデが観察できる。59は、口縁端部の屈曲が極めて短い。60は、口縁内面にナデによる段をもつ甕である。



第246図 SB85011 実測図

SB85006(第244・245図) 18F区付近で検出した2間(4.5m)×2間(4.2m)の総柱の建物跡である。柱間寸法は南北2.25m(7.5尺)・東西2.1m(7尺)を測る。建物の方位は、N19°Wである。この建物は、特異な構造を持ち、南北



第247図 SB85011 出土遺物

方向には補助柱(束柱か)とも考えられる2本の柱(計6本)がある。この2本の柱は、北側から等間隔(1.5m・5尺)に設けられている。また、中央列の柱と切り合い関係があり、中央列の柱に先行する。このことから、3間×2間の建物から2間×2間の建物に建て替えられた可能性も考えられる。なお、南列・北列の柱には2つの柱痕や抜き取り穴は検出できていない。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、80~100cmの隅丸方形を呈する。補助柱は他のものに比べてやや小さい。柱痕は20~40cmを測る。他の総柱建物とともに倉庫群を形成するが、この建物が他のものをその規模・柱穴の大きさの点で優越する。

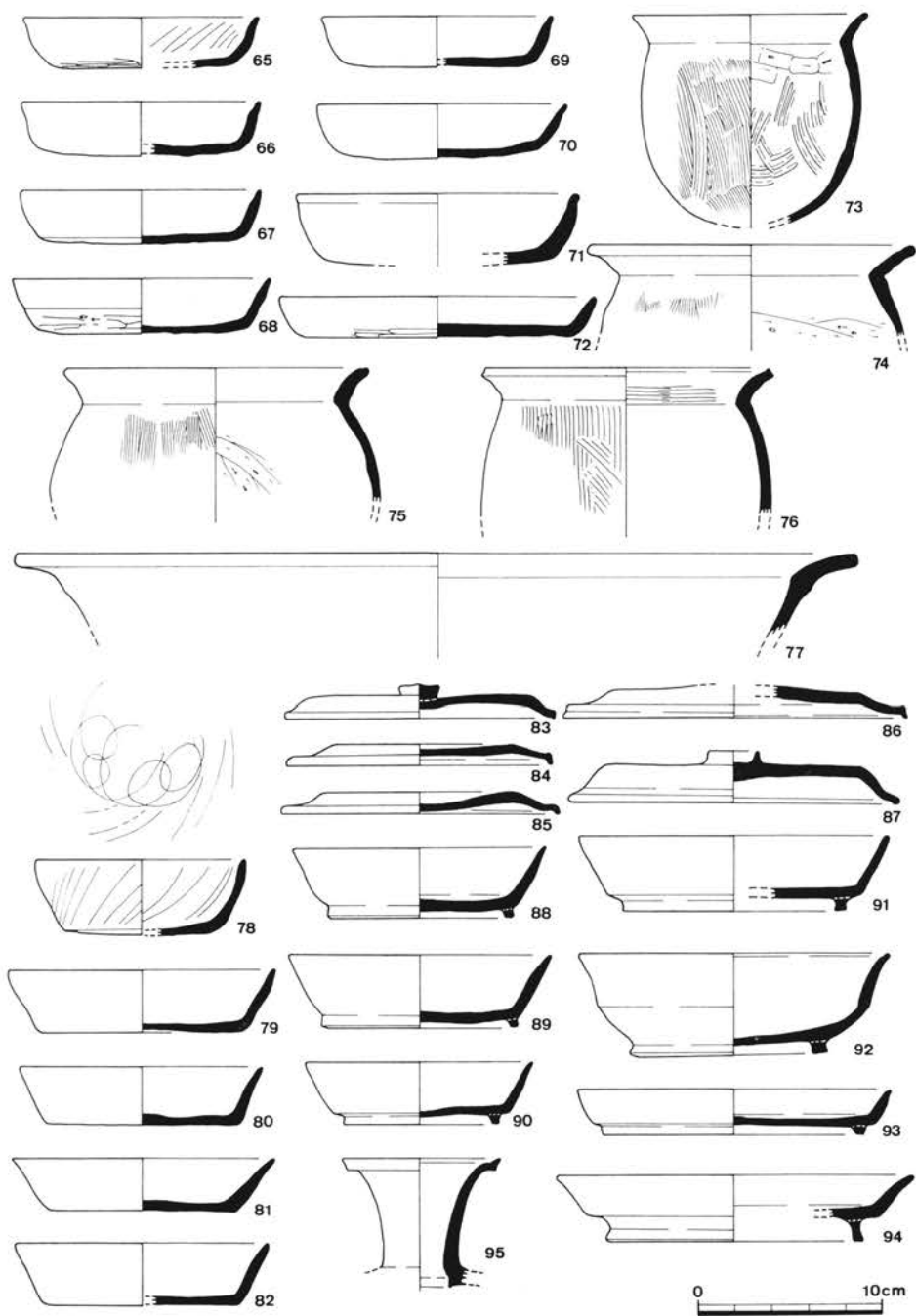
柱穴内から、61~63の遺物が出土している。61・62は、鍋である。61は、口縁端面と口縁部外面にナデによる沈線をもつ。体部外面には粗いハケが観察できる。外面は、口縁端部を含む全面に煤が付着している。口縁部が歪んでいる可能性があり、本来の器形はもう少し口縁部が傾くかもしれない。62にも、61と同様な沈線が存在する。63は、比較的精良な胎土で造られた土鍾である。

SB85011(第246・247図) 16C区付近で検出した2間(3.6m)×2間(3.6m)の総柱の建物跡である。柱間寸法は、1.8m(6尺)を測る。建物の方位は、N30°Wである。柱の掘形は、隅丸方形で50~70cmを測り、柱痕は、20~30cmを測る。柱穴のひとつから、礎板として利用したのか、須恵器の甕腹が出土している。

柱穴内から出土した遺物のうち、図化できたものとして64の甕がある。口縁部は、強いナデによって外反している。この建物の時期を示すものではない可能性もある。

SX85001(第248図) 18B区付近で検出した浅い土坑状を呈する土器溜まりである。長辺2m・短辺1.5mの楕円形状に遺物が散乱していた。検出した遺構面は、本来の遺構面がかなり削平されているので、本来はやや深い土坑であった可能性が高い。整理箱にして約1箱分の土師器・須恵器が出土した。第248図で図化したものは、甕・鍋を除くといずれも残度3分の1を越えるものである。

65~77は、土師器である。65~70は、浅い杯である。口径は、13cm前後、器高は2.8cm前後と法量の企画性の高い器種である。内面に暗文を施すものは65のみで、他のものはナデを施すのみである。口縁部外面は、下半部までナデが施されており、口縁部と底部の境をていねいなヘラケズリ(もしくはやや粗いヘラミガキ)するもの(65・68)がある。底部は、いずれもヘラケズリを行っているが、指頭痕を残すものが多い。71は、口径・器高ともにやや大きい杯である。底部のみヘラケズリを施し、他はナデで調整する。72は、口縁部と底部の境にていねいなヘラケズリのある皿である。底部は、ヘラケズリを施すものの、指頭痕が残る。73は、ほかの小型の甕より小型である。内面は、上半をヘラケズリしている。下半部には、同心円状の当て板の圧痕が観察できる。74~76は、小型の甕である。74・75は、



第248図 SX85001 出土遺物

体部内面をヘラケズリする。76は、口縁部に端面をもち口縁部内面に粗いハケを残す。77は、鍋である。土師器の胎土は、多少の差異はあるものの、すべて似ており、色調は淡褐色から黄褐色を呈する。

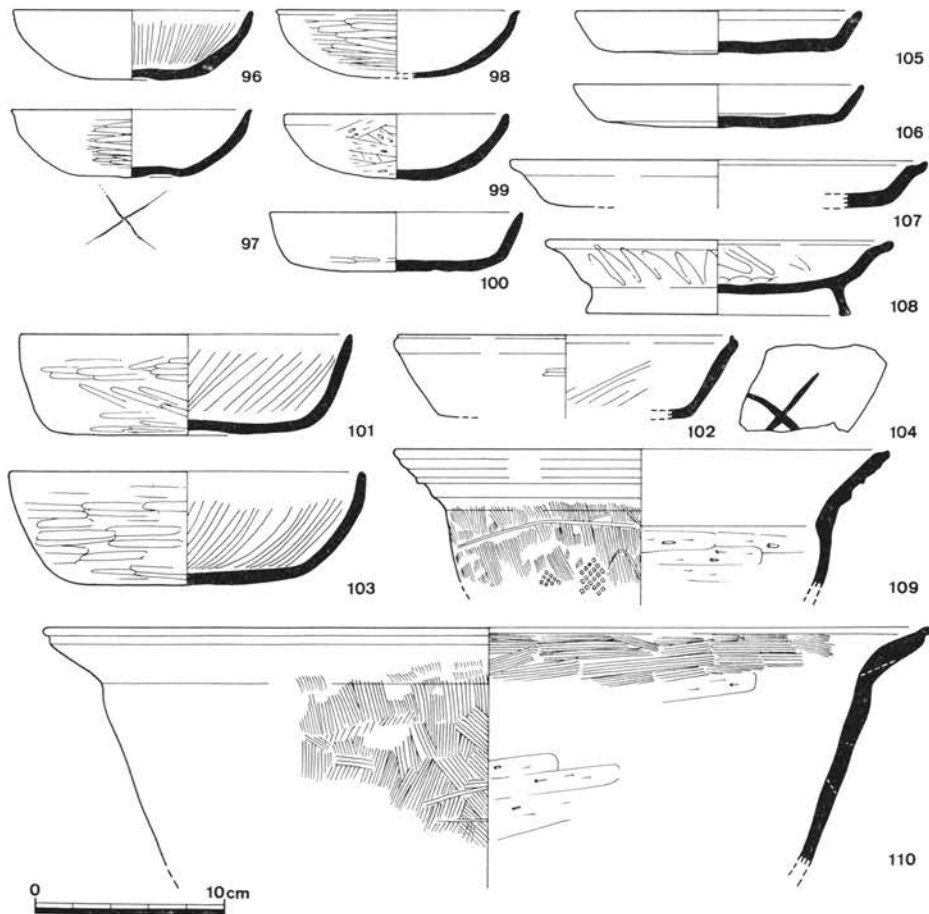
78～95は、須恵器である。78～82は、杯Aである。78は、口径11.5cm・器高4.2cmを測る杯Aで、焼成が不良で淡灰色を呈する。全面に丹を塗り、内外面に暗文を施す。内面の見込み部の暗文は輪花文である。79～82は、口径14cm前後・器高3.0～3.5cmを測る杯Aである。底部内面の調整は、回転ナデのみで不定方向のナデは見られない。底部外面には、回転ヘラ切りに伴うと思われる螺旋状の傷を明瞭に残す。81は、口縁部が大きく外傾するもので、器高が最も小さい。83～85は、口径15cm前後を測る杯蓋である。88～90の杯Bに伴うものと考えられる。天井部が扁平で口縁部付近が屈曲するもののみが存在する。83は擬宝珠つまみをもつが、84・85はつまみをもたない。口縁端部の下方への屈曲はいずれも短い。86・87は、83～85に比べて口径の大きな杯蓋である。口径は、86が19.4cm、87が17.8cmを測る。ともに平らな天井部をもつ。87は、小さな輪状のつまみ部をもち、通例92のような稜椀(佐波理椀を模したもの)に伴うものと考えられる。86は、擬宝珠つまみをもつと思われ、口径の大きい杯B(91)に伴うものであろう。88～91は、杯Bである。88・89は、それぞれ口径13.6cm・14.2cm、器高3.8cm・3.9cmを測る。高台の貼り付け位置は、底部端付近である。90は、口径12.4cm・器高3.3cmとやや小振りである。高台の貼り付け位置は、内側よりである。91は、口径16.8cm・器高4.1cmを測るやや大型の杯Bである。92は、口径16.8cm・器高5.4cmを測る稜椀である(本報告では杯B₂として扱う)。口縁端部付近内面に浅い沈線をもつ。見込み部分には、不定方向のナデがある。93は、口径17.0cm・器高2.4cmを測る高台をもつ皿である。内面中央部には、回転ナデの上に不定方向のナデがある。94も高台をもつ皿であるが、93に比べて高台が高く、口縁部は外方に大きく開く。包含層出土の土師器に同一器種が存在する。95は、卵形の体部に外反する口縁部をもつ壺の頸部から口縁部である。口縁端部は屈曲してやや幅広い面をもつ。

須恵器の胎土には、個体ごとの際だった差異は認められない。ほぼ同時期の須恵器窯として知られる舞鶴市城屋窯産のものとは胎土が異なる。

この土器溜まりは、集落の廃絶の契機となった洪水層の直下に存在し、集落の廃絶時期を限定する資料と考えられる。その時期は、土器群に見られる新しい傾向(土師器の杯の浅い傾向、須恵器の蓋の擬宝珠つまみの消失)から9世紀の前半と考えておきたい。

第3項 包含層出土遺物(第249・250図)

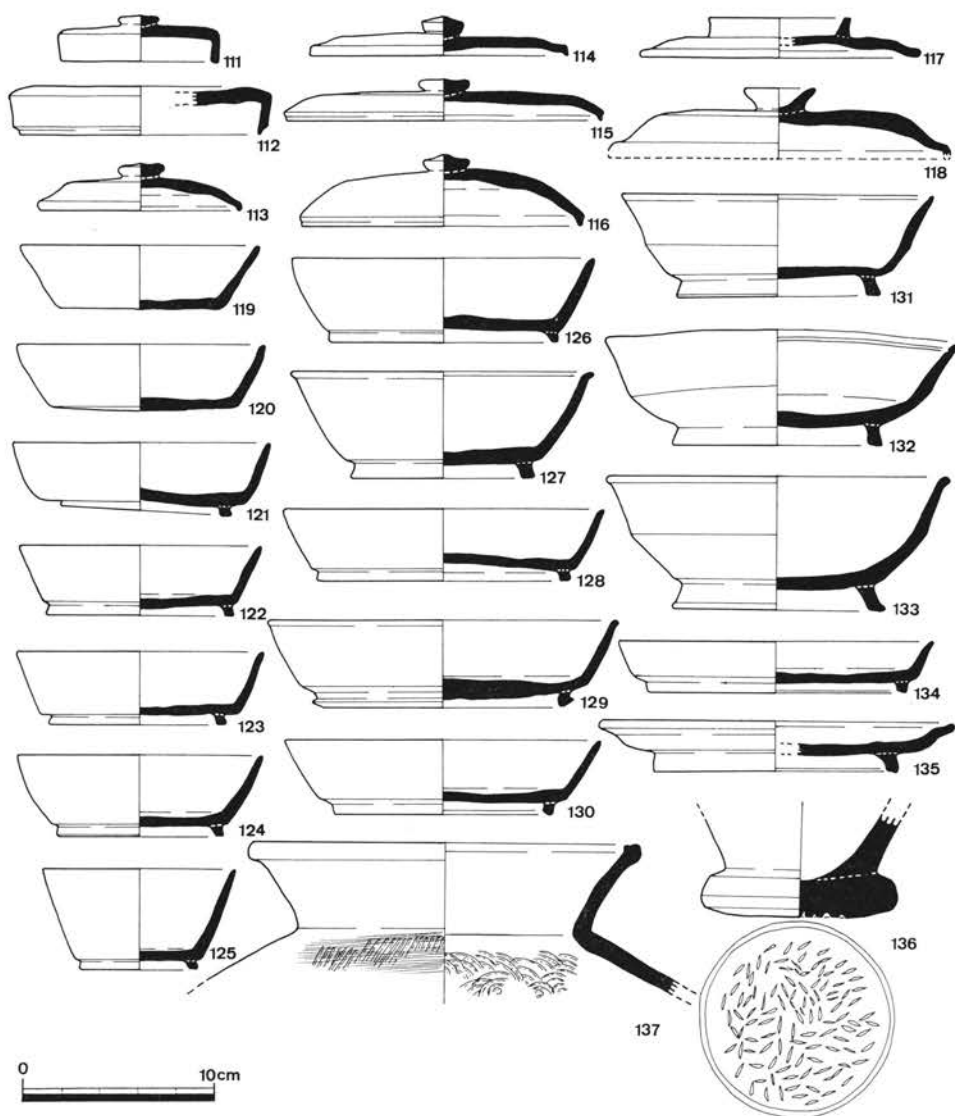
包含層内から整理箱にして約20箱の遺物が出土している。なお、包含層の調査については必ずしも厳密に行えたとは言えず、第21図の第8層と第10層の遺物が明確に分けられな



第249図 奈良時代包含層出土遺物 1 (土師器)

い。また、検出できなかった柱穴から出土したものも含まれている可能性が高い。また、本来、前章で扱うべき遺物も含めて扱う。加えて輪郭・性格の不明であった遺構出土の遺物も併せて扱うこととする。なお、扱う資料は、完形もしくは完形に近いものと特徴的なもののみである。

土師器(第249図) 96~99は椀である。96は、口径12.6cmを測り、内面に放射状の暗文をもつ。外面は不調整で、口縁端部付近のみナデを行う。底部外面中央部には指頭痕が残る。97は、底部から口縁部付近にかけて外面にヘラミガキを施したもので、底部にヘラ記号がある。口径12.6cmを測り、器壁が薄い。98も97同様に、外面にヘラミガキを施す。口径12.8cmを測る。99は、口縁部をナデのち底部から口縁部付近にかけてヘラケズリを施す。口径11.8cmを測る。100は、口径13.4cmを測る浅い杯である。底部から口縁部境にかけて粗いヘラミガキを施す。底部には指頭痕を残す。101~103は、法量の大きい杯である。



第250図 奈良時代包含層出土遺物 2 (須恵器)

内面には放射状の暗文を施し、外面は口縁端部をナデたのち幅広のヘラミガキを施す。102は、口縁端部を強くナデ、外傾する端面を造りだす。103は、形態上碗とすべきかもしれない。口径は、それぞれ17.5cm・17.6cm・18.7cmを測る。104は、杯もしくは碗の底部に書かれた墨書である。文字ではなく記号であろう。墨書土器の出土例はなく、この土器片が唯一墨痕のある土器である。105・106は、SX85018から出土したもので、一緒に出土したものとして113・123がある。105・106は、ともにロクロで成形された丹塗りの皿である。口径15.1cm・15.3cmを測る。107もロクロ成形された土師器の丹塗りの皿で、口縁端部を

水平方向に大きく拡張する。高台部が付く可能性がある。108も同じく、ロクロ成形による丹塗りの皿である。比較的高い高台をもつ。口縁部は水平方向に大きく開く。見込み部と口縁部外面に暗文が施されている。須恵器に同様の形態をもつもの(94)がある。109は、甕もしくは鍋である。口縁部外面に意識的に強いナデによる段を付け、体部外面にはハケの上にスタンプ的なものか、格子目のタタキが観察できる。110は、口径46.6cmを測る鍋である。口縁端部を強くつまみあげたため深い沈線をもつ。

須恵器(第250図) 111・112は、平坦な天井部から直角に折れ曲る口縁部をもつ蓋である。通例から壺の蓋と考えられる。111は、小型のもので口径8.3cmを測り、天井部に扁平な擬宝珠つまみをもつ。112は、口径13.0cmを測り、口縁端部に段をもつ。113は、口径10.9cmを測る小口径の杯蓋である。125のような小口径で、器高の大きい杯Bに伴うものと考えられる。114は、平坦な天井部から屈曲する口縁部に至り、端部が短く屈曲する杯蓋である。口径13.8cmを測る。116(口径15.1cm)のような笠形の天井部をもつものとともに、122~124の杯Bに伴うものと思われる。115は、114・116に比べて口径の大きなもの(口径16.5cm)で、大口径の杯B(127・129・130)に伴うものと考えられる。117・118はいずれも輪状つまみをもち、132~134の稜椀(杯B₂)に伴うものと考えられる。117は、口縁端部水平方向にのびて終わる。口径は、14.6cmを測る。118は、小さな輪状つまみをもち、平坦な天井部から緩やかに口縁部が屈曲し、端部が短く下方に屈曲する。口径は、18.2cmを測る。119・120は、口径12.4cm・13.5cmを測る。杯Aである。121~124は、口径12.8~13.5cm・器高3.9~4.2cmを測る杯Bである。125は、口径(10.1cm)に比較して器高(5.1cm)の大きい小型の杯Bである。126・128~130は、121~124に比べて口径の大きい杯Bである。口径は、それぞれ、16.0cm・16.9cm・18.2cm・16.5cmを測る。器高は、121~124と大差なく、それぞれ、4.4cm・3.8cm・4.6cm・3.9cmを測る。高台の接合位置は、底部と口縁部の境からやや内側に入る傾向がある。127も口径の大きなもの(15.8cm)であるが、他と比べて器高が大きく(5.6cm)、口縁端部は、外側に短く屈曲する。131~133は、いわゆる金属器の佐波理椀を真似た稜椀(杯B₂)である。杯部中央より下半に稜をもち高台部が高いのを特徴とする。口径は比較的大きく、それぞれ16.2cm・16.2~18.7cm・17.8cmを測る。器高は、それぞれ、5.4cm・約4.8cm・7.0cmを測る。131・132は、口縁端部内面に沈線をもつ。133は、口縁端部を短く外側に拡張する。134・135は、高台をもつ皿である。器形は全く異なり、134は、口縁部が短く斜め上方にのび、135は、口縁部が緩やかに上方に開き、端部が水平方向に屈曲する。135は、蓋の可能性もある。136は、通例捏ね鉢・練り鉢と呼ばれるもので、底部には、ヘラによる無数の切り込みがある。137は、甕である。体部内面に同心円の当て板痕を残し、外面は肩部に平行線タタキの上からカキメを施す。

(肥後 弘幸)

第7節 平安時代以降 (掘立柱建物群消失以降の時代)

第1項 概要

平安時代初頭(9世紀前半)になると、整然と並んだ掘立柱建物跡が、洪水を契機に調査地区内からその姿を消す。洪水層の上で調査を行っていないため、その様相は不明瞭なところもあるが、洪水層を切り込んで、淡黄褐色粘性砂質土に至る遺構群等からある程度窺える。洪水層の上から切り込む遺構群は、前時代の隅丸方形の柱掘形からなる建物跡群とは明瞭に区別できる。埋土に洪水層の砂質土を含み淡褐色を呈する。約40cm前後を測る円形を呈する。出土する遺物は極めて少ないが、緑釉陶器を含むことがある。また、1つの柱穴から土錘がまとまって出土している。10世紀前後の建物跡群の存在を想定させるが、建物構造を知ることはできなかった。洪水層の上には中世の包含層があり、瓦器碗が出土している。さらに上には、近世の包含層があり、この層から土坑(SK85002)と近世墓群が切り込んでいる。

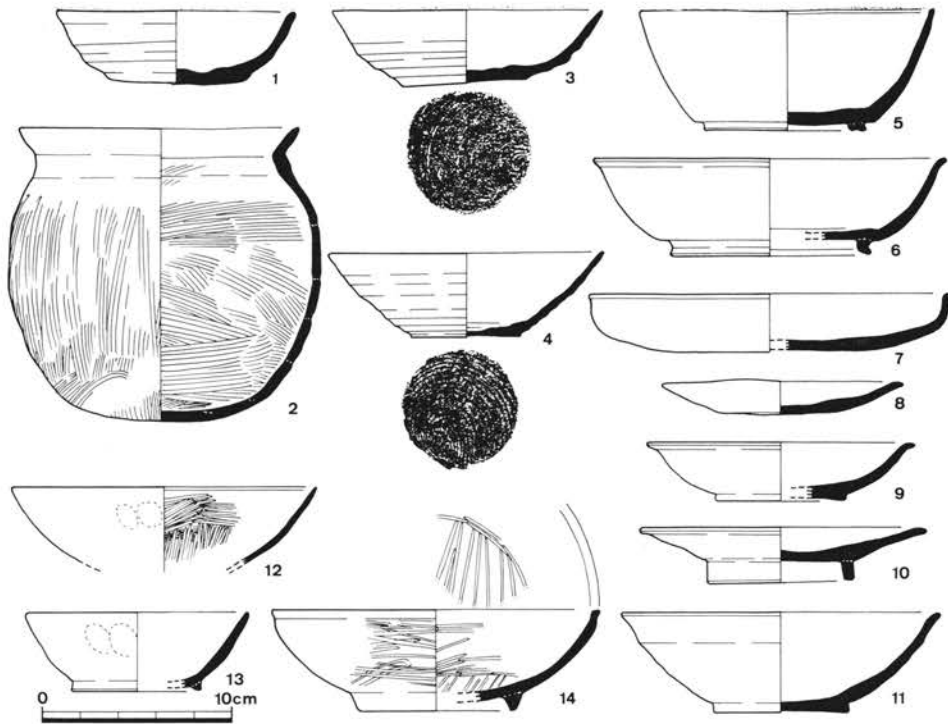
第2項 出土遺物

各遺構面で調査を行っていないことを考慮しても、その遺物の出土量は前時代に比べて極端に少なく、整理箱5箱に満たない。

土師器・須恵器・瓦器 出土した遺物のうち、1～4の土師器、5～11の須恵器、12～14の瓦器碗、15～23の緑釉陶器を図化した。

1・2は、洪水層直上から完形で並んで出土した。出土状態から意識的に置かれていた可能性が高い。第3次調査でも同様な状況で、杯7個体・甕1個体がまとまって出土している。1は、ロクロ成形によるもので、内外面に明瞭にロクロ成形痕を留める。底部はヘラ切りで、ロクロから切り離している。口径11.5cm・器高4.0cmを測る。2は、内面に明瞭に輪積みの痕跡を残す甕である。口縁部のみにナデを施し、奈良時代の甕のようにナデが頸部直下にまで及んで段を作ることはない。体部は、内外面を粗いハケで調整し、底部は、平底に近い形状を呈する。全体にいびつな器形を呈する。口径14.5cm・器高15.4cmを測る。洪水層の時間的な上限を決める資料であるが、時期は不明である。9世紀に含まれるものと考えたい。

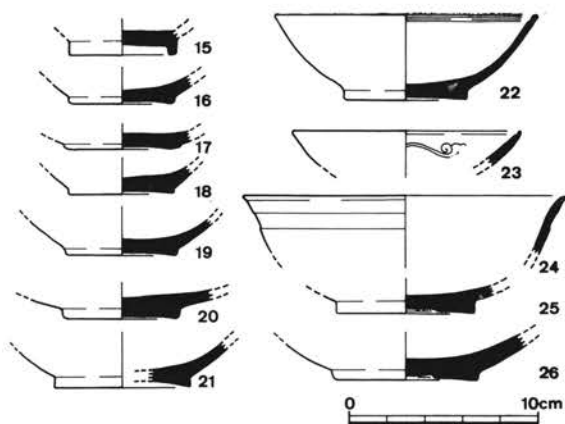
3～11は、奈良時代包含層に切り込む柱穴内及び調査区内の周壁内から出土したものである。3・4は、底部に糸切り痕を残すロクロ成形による土師器である。内外面にロクロ成形による成形痕を明瞭に残す。3が口径14.4cm・器高4.0cm、4が口径14.4cm・器高4.4cmを測る。4は、外面に丹を塗った形跡が窺える。5は、口径15.5cmに対して器高



第251図 平安時代以降包含層ほか出土遺物1(土師器・須恵器・瓦器)

5.7cmを測る深い杯Bである。高台部はやや内側よりであるが、極めて扁平なものである。6は、口径18.8cm・器高5.2cmを測る椀状の杯部をもつ杯Bである。口縁端部が大きく外反する。7は、口径19cm・器高2.9cmを測る皿である。包含層内から出土しており、帰属時期が不明である。胎土は、前章で扱った須恵器群に似ており、奈良時代後半から～平安時代初頭に属するものかもしれない。8は、口径12.8cm・器高1.8cmを測る皿である。9は、削り出し高台をもつ浅い椀である。口縁端部を短く水平方向に屈曲させる。内外面をロクロ上でていねいにミガキを行っている。施釉陶器に近似した形態をもつ。口径14.2cm・器高3.0cmを測る。10は、高台をもつ皿である。高台はやや直線的に下方にのびる。口径14.8cm・器高2.9cmを測る。11は、糸切り高台をもつ椀である。口径16.8cm・器高5.3cm・底径13.5cmを測る。亀岡市篠窯跡群でも同器形のものを生産しているが、胎土から、11は篠産とは考えられない。

12～14は、中世包含層(灰褐色中砂質土)から出土した瓦器椀である。図化しなかったが、この層内から輸入陶磁器(龍泉窯産青磁椀)の破片も出土している。12は、極めて器壁が薄く、口径16.2cmを測る。内面は暗文を密に施し、外面は口縁部付近をナデる以外は、指頭痕を残すのみである。13は、口径11.3cmを測る小口径のもので、貼り付け高台は断面三



第252図 平安時代以降包含層ほか出土遺物2(緑釉陶器)

角形を呈し、退化傾向にある。
 14は、口径17.4cm・器高4.3cm
 ・高台径8.2cmを測る瓦器碗で
 ある。内外面に暗文を施す。口
 縁端部は、わずかに内傾する端
 面を作り出す。13とともに器壁
 は比較的厚い。貼り付け高台は、
 断面台形に近いしっかりしたも
 のである。これらの瓦器碗は、
 12～14世紀に生産されたと考え
 られる。

緑釉陶器 奈良時代包含層に切り込む柱穴内及び調査区内の周壁内から、比較的多くの緑釉陶器が出土している。15～26を図化した。15は、輪高台をもつ。他の緑釉陶器に比べて硬質で緑青色を呈する。16～21は、底部中央部がやや上げ底状を呈し、いずれも軟質である。22は、約2分の1程の破片で、その器形がよくわかるものである。16～21と同様の底部から口縁部が斜上方に開き、口縁端部内面に1条の沈線をもつ。緑釉の発色は極めて良好で、黄緑色を呈する。口径13.8cm・器高4.4cm・高台径6.5cmを測る。23は、皿状を呈し、内面に印刻花文をもつ。24は、口縁部下端に段をもち、口縁端部は短く外反して終わる。口径17.2cmを測り、他に比べて口径が大きい。25・26は、蛇の目高台をもつ。

第8節 江戸時代以降

第1項 概要

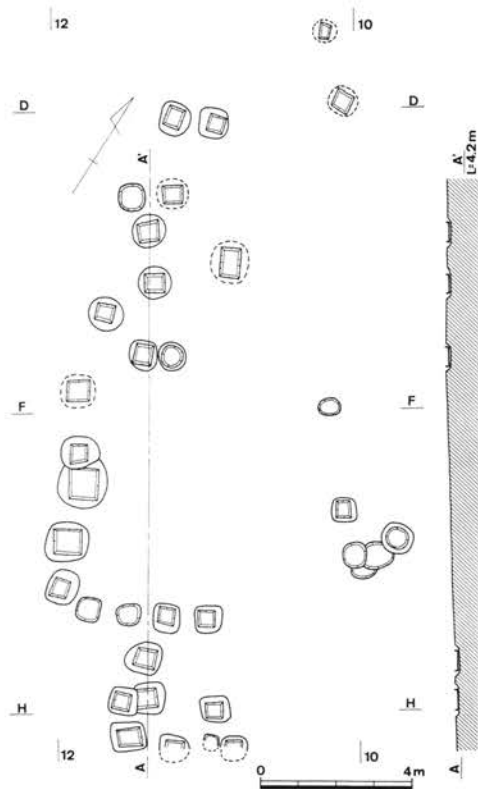
舟戸地区で検出した遺構には、土坑(SK85002)と近世墓地である。その他、調査区を囲む壁断面で多数の土坑を検出したが、これらの土坑については調査を行えなかった。SK85002は、長径約2.5mを測る不整形な円形土坑である。土坑内から、江戸時代後期の陶磁器類及び曲げ物・石臼・砥石等が出土した。また、埋土は灰色の粘土で、絶えず水が溜まっていたと考えられる。ごみ捨て場と考えられる。この土坑についての詳細な報告は割愛したい。近世墓地を9～12・D～H区にかけて検出した。検出した墓の数は34基である。

第2項 近世墓地

検出した近世墓地は、明治42年の土地区画整理前の『加佐郡岡田下村大字志高耕地整理地区及之隣接セル土地現形図』に、小字舟戸1583ノ1に墓として小さく記載されており、わずかにその痕跡が窺える。実際に検出した墓地の範囲は、記載されていた墓域よりも広

がり、検出面も深く、記載されていた墓地よりも古い時期のものと考えられる。

検出した墓墳は、34基あり、それ以外に表土掘削(重機掘削による)で失われたものが相当数あると考えられる。検出した墓墳の深さは、調査面から深いもので20cmを測るにすぎない。墓墳の施設は、素掘りの土壇のみのも、方形の座棺をもつもの、円形の座棺をもつもの、3タイプに分類することができる。棺をもつものは、比較的良好に棺材が残っていた。もっとも多いのは方形の座棺をもつもので、円形の棺をもつものは2例にすぎない。棺を検出できなかったものも、本来棺をもっていた可能性がある。棺内に頭蓋骨・歯等が残っていたものが数例あるが、多くはすでに腐敗して遺骨は残っていなかった。遺骨以外に棺内に残さ



第253図 近世墓地実測図

れていたものは、キセル・たばこ入れ・櫛・土師器小皿・銭である。なお、これらの遺物を伴うものは22例である。22例の内、寛永通寶をもつものがもっとも多い。三途の川の渡し賃として死者にもたせたのであろうが、6銭入っているものは少なく、1～3枚がほとんどである。被葬者の愛用品と思われるキセル・たばこ入れ・櫛のうちもっとも多く供献されているものは櫛で、次いでキセルである。キセルを伴うもののうち、たばこ入れ(金具のみ)を伴うものがある。伏見人形を伴うものはなく、ほぼ同時期の福知山市和田賀遺跡^(注10)の例との差異が認められる。これらの墓壙は、寛永通寶・キセル等から江戸時代後期～明治時代初頭にかけて営まれたと考えられる。(肥後 弘幸)

- 注1 弥生中期の土器の分類については以下の文献を参考に行った。
今里幾次「播磨弥生式土器の動態」(『考古学研究』第15巻4号 1969)
岡野慶隆ほか『川西市加茂遺跡』川西市教育委員会 1982
井守徳男・渡辺 昇・大平 茂ほか『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983
佐原 真編『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社 1983
吉岡博之『志高遺跡Ⅱ—弥生土器の概要—』(舞鶴市文化財調査報告第12集 舞鶴市教育委員会) 1986
石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1981
- 注2 土器の個体数については、器形のわかる土器の口縁部の破片まで用いた。胎土・色調・調整・器形の特徴から同一個体と考えられるものは除外した。以下各遺構について同じである。
- 注3 北陸における玉作りを行う弥生遺跡からは、土器片を利用した有孔円板が多数出土しており、穿孔が貫通していない例が多く見られる。玉の製作途中に、玉を固定する道具として利用された可能性がある。福井県教育庁埋蔵文化財調査センター富山正明氏の御教示による。
- 注4 田代 弘「畿内周辺部における『朝鮮系無文土器』の新例」(『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ) 1985
- 注5 石鏃の分類については以下の文献を参考にした。
小林行雄・佐原 真『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964
- 注6 渡辺 誠・片岡 肇・鈴木忠司ほか『京都府舞鶴市桑飼下遺跡報告書』平安博物館 1975
- 注7 神村 透「石製耕作具」『弥生文化の研究5 道具と技術』雄山閣出版 1985
- 注8 粘板岩は、由良川下流域右岸に多く産出する。
- 注9 青野型住居は、綾部市青野遺跡を中心に分布する竪穴式住居跡の通称で、竪穴の掘削時に一隅を掘り残し、そこに竈を造る特徴をもつ。
- 注10 肥後弘幸「土師川改修工事関係遺跡昭和160年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

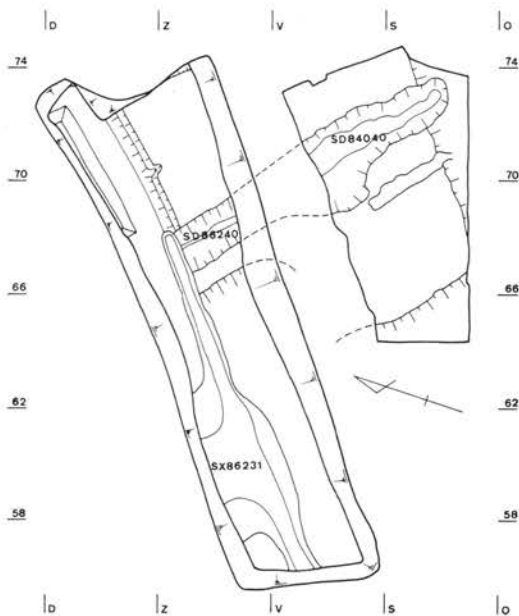
第4章 舟戸北地区の調査

第1節 層位と調査の概要

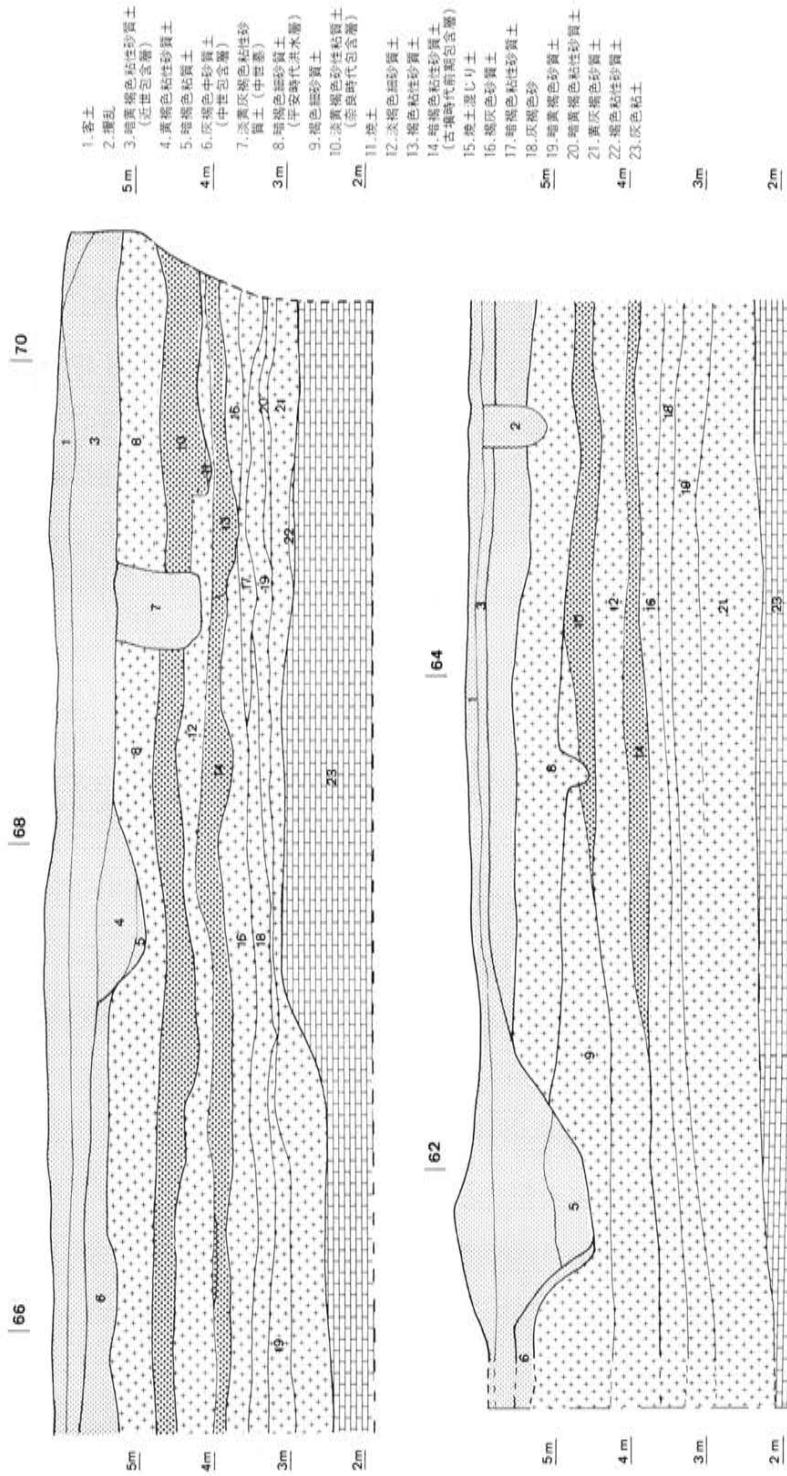
第5次調査と第7次調査B地区が舟戸北地区における調査に該当する。なお、第5次調査の下層遺構については、概報ですでに詳細に述べているので割愛したい。第5次調査では、第3次・第4次調査で舞鶴市教育委員会が設置した基準杭に基づいて地区割りをを行ったので、第7次調査でもそれに準じた。

この地区の層位関係については、第5次調査地区と第7次調査地区では層位に若干の違いがある。第5次調査地区の層位についてはすでに概報で詳しく述べているので、本報告では第7次調査B地区の土層について報告を行う。

第21図で示したように、調査区の南西側は、弥生時代中期に存在した自然流路のため、灰色粘土層が大きく挟れている。灰色粘土層の堆積がいつごろから始まったかは不明であるが、その最上層にはわずかながら弥生時代中期の土器が含まれており、灰色粘土の最後の堆積は、弥生時代中期と考えられる。この灰色粘土の上面で弥生時代中期後葉の遺構群を検出した(下層遺構群)。粘土層の上には、厚さ80cmから数mにわたって弥生時代中期末から古墳時代前期にいたる洪水層(砂層)が堆積している。舟戸南地区では弥生時代中期後葉の包含層が存在したが、この地区ではそれが存在せず、洪水層の下層から出土する遺物も弥生時代後期末葉のものが多い。弥生時代後期末から古墳時代前期にいたる洪水層は、数枚のやや締まった層を部分的に挟むものの、多くが無遺物の砂層である。この砂層の上で、調査区北東側約3分の2には古墳時代前期のやや安定した包含層(第255図第14層)がある。この包含層内で古墳時代前期の土坑及び上層から切り込む古墳時代後期と考えら



第254図 第5次調査・第7次調査関係図(下層)

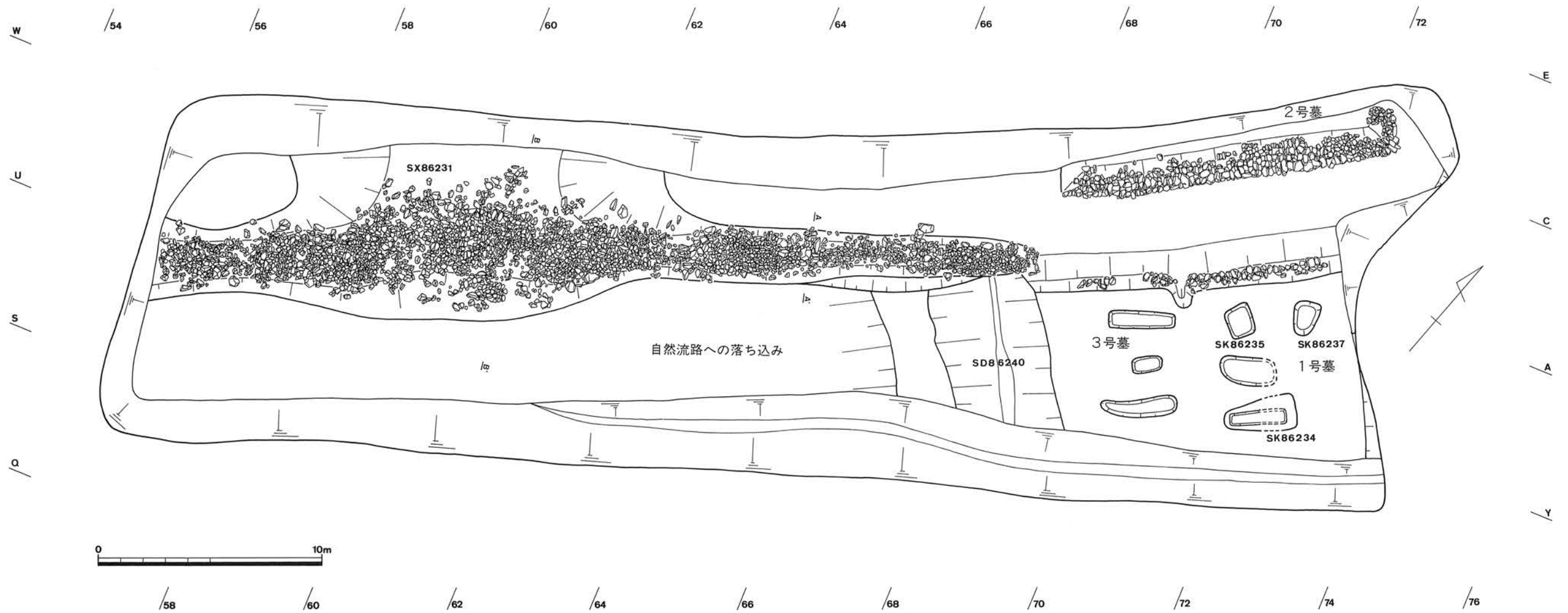


第255図 舟戸北地区第7次調査B地区北西壁土層断面図(拡張前61～70ライン付近)

れる竪穴式住居跡、奈良時代の竪穴式住居跡等を検出した(上層の遺構群)。14層の上には古墳時代前期の土器を含む層があり、その上に奈良時代の遺物を多く含む包含層(第10層)がある。奈良時代の遺物が整理箱に約30箱出土した。この層も調査区の北東側約2分の1に存在するのみで、まだ、自然流路のあとは大きな窪みとして残っていたようである。第10層を除去して遺構検出作業を行ったが、顕著な遺構は検出できなかった。青磁碗の出土した墓壙もこの面で検出できるはずだったが、輪郭を確認することはできなかった。奈良時代の包含層の上には平安時代前期の洪水層(第8層)が堆積している。この洪水層の上から青磁碗の出土したのとは別の土壙(中世墓・第7層)が掘り込まれている。洪水層から上は舟戸南地区とほぼ同じ様相を示している。このことは、平安時代の洪水以降、舟戸南地区と北地区が1つの連続する安定した自然堤防を形成していたことを示している。

なお、この地区で検出された貼石墓については建設省と協議を行い、2号墓を土嚢と砂で保護して堤防下に保存した。

(肥後 弘幸)



第256図 第7次調査B地区下層遺構図

第2節 弥生時代(第7次調査B地区下層遺構群)

第1項 概要

検出した遺構には弥生時代中期中葉の溝状遺構(SD86240)・弥生時代中期後葉の貼り石を持つ墳墓群(1号墓・2号墓・3号墓・不明遺構SX86231)がある。いずれも灰色粘土の上面で検出した。墳墓群は、一辺もしくは数辺に貼り石を持ち、一辺15.5mの大型の2号墓と、それに周溝を挟んで位置する一辺5~7mを測る1号墓・3号墓からなる。また、性格不明のSX86231も墳墓に関連する遺構と考えたい。また、概報で自然流路に伴うと考えられる落ち込みを報告したが、この落ち込みはSX86231に伴うものの可能性がある。

この地区では、舟戸南地区で検出したような弥生時代中期の顕著な包含層は検出できなかった。各遺構を検出した灰色粘土の上層(特に1号墓下層)には、弥生時代中期中葉の遺物がわずかに含まれていた。また、溝状遺構内に縄文時代後期~弥生時代中期前葉の遺物が混入しており、周囲に当該期の遺構が存在する可能性が高い。

出土遺物は、整理箱にして14箱ある。多くがSD86240と1号墓及び自然流路に伴う落ち込みから出土したもので、包含層内からの出土量は少ない。なお、この地区では舟戸南地区からほとんど出土しなかった弥生時代後期から末期にかけての土器が出土しているので、^(注1)次章で扱う岡安地区の土器を含めて土器の分類を行いたい。

弥生時代後期から後期末にかけての土器群が、この地区と岡安地区を併せて、整理箱約100箱出土している。なお、ここで扱う土器群は、畿内における庄内併行期のもも含める。北丹波・丹後地域に共通して言えることであるが、畿内における庄内併行期において、この地域ではまだ社会背景の変革が土器の形態変化にまで及んでおらず、その土器群に弥生時代後期の地域色を色濃く残している。この地域の弥生時代後期の土器の特色は、各種の土器に施される擬凹線文であり、また、壺・甕を中心に見られる複合口縁である。

器種には壺・甕・鉢・高杯・器台が存在する。

壺形土器

壺A 頸部から口縁部にかけて大きく外反する広口壺である。

壺A₁——口縁部に擬凹線文を施さないものである。

壺A₂——口縁部を上下に拡張し、擬凹線文を施す。球形の体部をもつ。

壺B 頸部が短く直立し、短く外反する口縁部の端部を上方に拡張した複合口縁をもつ。長い胴部をもつ。丹後・北丹波地域に通有し、口縁部に擬凹線文を施す。

壺C 頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部が複合口縁形を呈する。多くは擬凹線文をもつ。

壺D 直立した頸部をもつ短頸壺である。中期の壺Dの系譜をひくものもある。

壺E 長い頸部をもつ長頸壺である。

壺F 二重口縁をもつ。

甕形土器

甕A 口縁部の拡張が顕著ではない。

甕B 口縁端部を拡張し擬凹線文を施す。口縁部の形態で細分する。

甕B₁——口縁端部を上下に拡張し、断面三角形を呈する。口縁端面は内傾する。

甕B₂——口縁部を主に上方に拡張し複合口縁形を呈する。

甕B₃——口縁部の上方への拡張が著しく口縁端面が直立もしくは外反する。口縁部内面に指頭痕をもつものがある。

甕B₄——口縁端部を下方に拡張する。大型のものに見られる。

甕C 甕B₃と同じ複合口縁をもち、口縁部に擬凹線を施さない。

甕D 外反する短い口縁部と球形の体部をもつ。底部付近にタタキメが観察できる。

鉢形土器 鉢の出土数に対して器種が多いために、分類を細かく行うにはいたらなかった。ここでは代表的なもののみを分類する。

鉢A 「く」の字状に屈曲した頸部に短い口縁部がつく台付きの鉢である。口縁部は複合口縁形を呈するものもある。

鉢B 小さく突出した底部をもち、体部から口縁部にかけて大きくラップ状に開く。

鉢C 腰部の張った扁球な体部に把手を1つ付し、突出した平底をもつ。

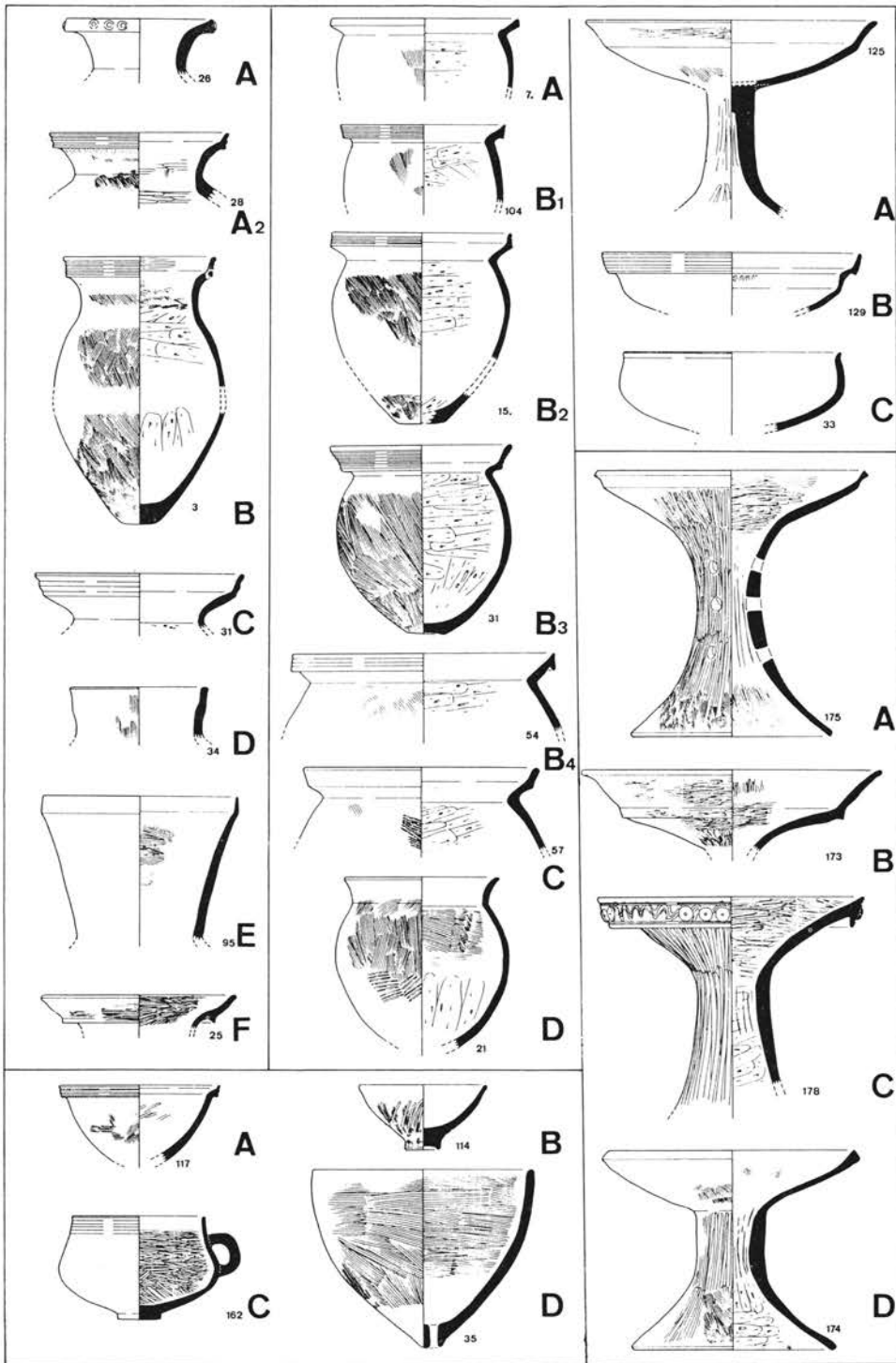
鉢D 有孔鉢である。

高杯形土器 高杯には杯部の発達の著しい大型の長い脚柱部をもつもの(高杯A・B)と、低い脚部をもち深い杯部をもつもの(高杯C)がある。

高杯A 口縁部と杯部の境が緩やかに屈曲する。脚部はラップ状に開いて終わるものが多い。口縁部が「S」字状を呈するものに1対の把手をもつものがあり、把手をもつものは脚端部を上方に拡張する。

高杯B 杯部境から口縁部にかけて「S」字状を呈し、口縁部が複合口縁になる。脚部の特徴は高杯Aと共通し、杯部に把手をもつものは脚端部を上方に拡張する。

高杯C 短い脚部に椀状の杯部をもつ。



第257図 弥生時代後期土器分類図

器台形土器

器台A 高杯Aに似た屈曲した短い口縁部をもつ。

器台B 口縁部境が屈曲し、長い口縁部をもつ。

器台C ラップ状に開いた口縁部の端部が下方に拡張され、口縁端面を加飾する。

器台D 口縁部の境が不明瞭なものである。

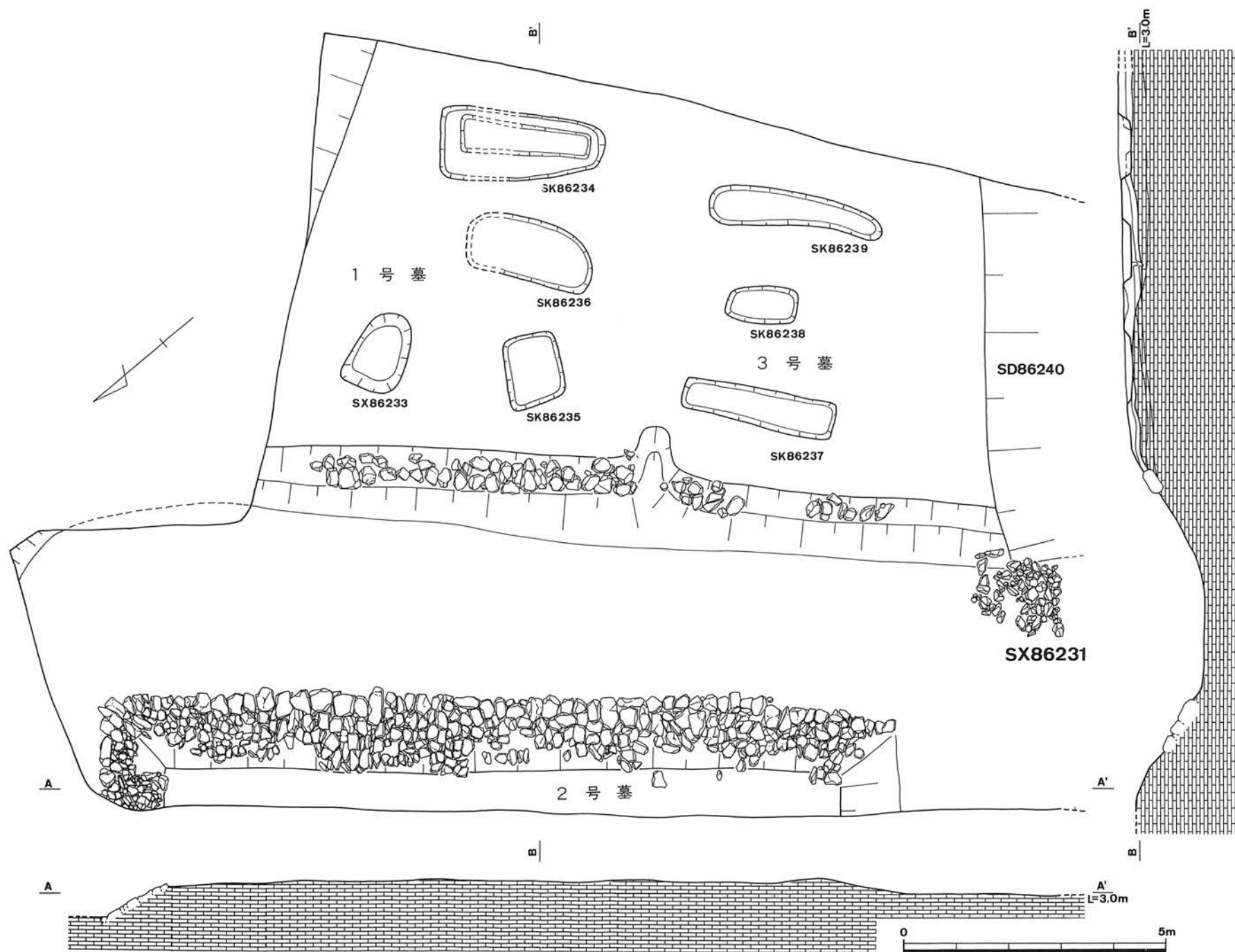
第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

(1) 貼石墓群

人頭大の石を用いた遺構を4つ検出した。検出当初(2号墓は未検出)、これらの石材を用いた遺構群の性格が全くわからなかった。とりあえず、1・3号墓の貼り石とその北東に広がる整地層を弥生時代の祭祀に伴う基壇状のものと理解して調査を進めた。また、自然流路に向かって張り出すSX86231については、灌漑施設もしくは舟着き場的なものと理解して調査を進めた。調査区の北西壁で、別の遺構に伴う人頭大の石(2号墓の一部)を検出したため調査区を拡張したところ、貼り石を伴う基壇が直角に屈曲したので、墓である可能性を認識した。その後、調査区を拡張し、その結果、1号墓で、土器を伴う土壇群等を検出した。また、一部しか検出していなかったSX86231についても調査区内における全容を知る資料を得た。2号墓を埋め戻した後、2号墓とSX86231について電波探査を行ったが、地下水を多量に含んでいたため詳しくはわからなかった。

1号墓 2号墓に周溝を隔てて向かい合い、3号墓に隣接する貼石墓である。墳丘上の調査を行えなかった2号墓と、遺物の出土しなかった3号墓に比べ、比較の様相のわかる遺構である。

<外形・墳丘> 北西斜面に長さ6.3mの2段の貼り石をもつ墳墓である。貼り石は、人頭大の花崗岩・砂岩の角礫を平らな面を表にして使用している。北西斜面の外側には2号墓と共有したと考えられる溝がある。ただし、この溝は、後述する2号墓の周溝であって、1号墓の造営時にはその大半が埋没していたと考えられる。西隅の貼り石は、短く屈曲して終わっている。南西側では、西隅の屈曲部に伴う短い溝以外、墓域を区画する施設は検出できなかった。南東側については、調査区を一部拡張して墳丘の範囲を確認しようと試みたが、墳丘を確認することはできなかった。墳丘の南東辺は、調査の便宜上、設置した排水溝のところで終わっていたと考えられる。なお、排水溝掘削中、底部を破砕した壺形土器(8)が出土している。北東辺については、その多くが工事掘削によって失われていたが、わずかに一部残っていた斜面上から甕(11)が出土した。また、水差し形土器(10)もほぼ同位置から出土したと思われる。甕の出土状況及び工事を行った人の話から、北東斜面



第258图 1~3号墓实测图

にも貼り石はなかったと考えられる。墳丘は、ベース層である灰色粘土の上に20~40cmを測る盛土(もしくは整地土)が存在する。灰色粘土中から甕(15)が出土している。盛土の下層は、かなり凹凸の激しい灰色粘土の凹部を埋めるように、粘土混じりの砂層が置かれている状態を示す。砂層内から甕(13)が出土している。上層は黄灰褐色砂質土が盛られている。黄灰褐色砂質土内から壺(12)・甕(14)が出土した。なお、検出した土壙の深さ等から見て、検出した墳丘は、後世洪水等で削平を受けた可能性が高い。以上の状況から、1号墓は、北西斜面にのみ貼り石をもつ8m×9mの規模の盛土を有する方形の墳墓であったと考えられる。

<墳丘上の施設> 墳丘上で4基の土壙を検出した。墳丘の上層と土壙埋土が砂質土で形成されているため、土壙の掘形の検出作業は困難を極めた。

SK86234は、唯一棺状の痕跡を確認できた土壙である。長辺3.2m・短辺1.5~0.9m・検出面からの深さ0.35mを測る。棺は箱形を呈する木棺と考えられる。棺の大きさは長辺2.5m・幅約0.6mを測る。棺上に壺・甕が供献されていた。壺(1)は、焼成後底部穿孔を行っている。甕(2)にも焼成後に穿孔するが、甕として利用されていた可能性もある。

SK86233は、浅い土坑状の遺構である。土坑内に台付き壺(4)・水差し形土器(3)・高杯2个体(5・6)が出土した。土坑の大きさから木棺墓は想定できないし、墓壙である可能性も低い。土器群はいずれも底からやや遊離して出土した。

SK86235は、長辺1.4m・短辺1.1mを測る長方形を呈する土壙である。壺(7)が出土した。

SK86236は、SK86234にほぼ平行に営まれた土坑である。長辺約2m・短辺1.2m・検出面からの深さ0.2mを測る。木棺の痕跡は検出できなかったが、墓壙である可能性は高い。遺物は出土していない。

<出土遺物> (第260・261図) 出土遺物には壺・甕・高杯がある。1・2は、SK86234から出土した。3~6は、SK86233から出土した。7は、SK86235から出土した。8・9は、1号墓の墳丘上から出土したと思われる。10~13は、1号墓の盛土内から出土した。

1は、壺A₇である。口縁部を斜め下方に拡張し凹線文を施す。外面をハケで調整し、下半部に粗いヘラミガキは存在しない。頸部にヘラ状工具によるキザミメを施す。焼成後に底部を穿孔するほか、口縁部を意図的に欠いたものと思われ、口縁端部は一部しか残っていなかった。胎土は、石英・長石を含み、赤褐色を呈する。2は、石英・長石を含み、赤褐色を呈する在り系土の甕B₁である。外面に煤が付着しており、日常に使用していたものと思われる。底部は、穿孔されているが、甕として利用した際に施された可能性もある。

3は、体部を櫛描文で飾る壺Dである。攪乱により約2分の1を失っている。そのため、

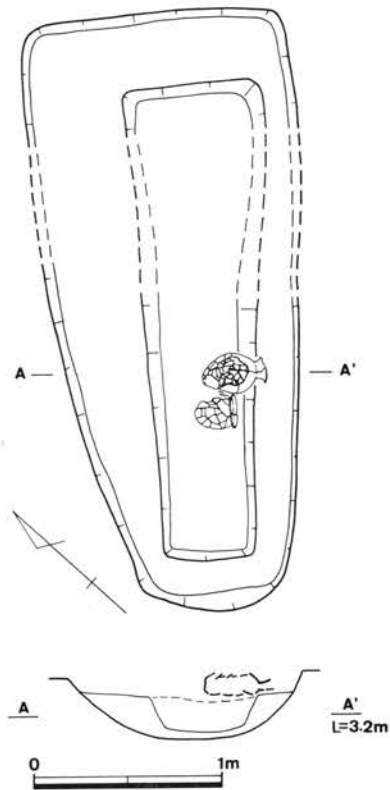
正確なことは言えないが、底部を意図的に破砕した可能性がある。肩部に櫛描文を配する。櫛は4本単位で上から直線文・波状文・波状文の構成である。口縁部に凹線文を施す。外面の調整はハケで行い、内面は体部下半をヘラケズリする。4は、長い脚部の付く台付壺(壺H)である。短い口縁部が付くと予想されるが、意図的に破砕されている。外面は、全面にヘラミガキをていねいに施している。胎土は精良で褐色を呈する。6は、高杯B₂である。脚部は、居住域で普遍的に見られるものと様相を異にし、脚端部を上下に拡張しない。胎土は精良で、外面に丹を塗っていた痕跡が観察できる。5は、6に比べて小型の高杯B₂である。杯部内外面の調整は、ハケの後ヘラミガキを施すが、ヘラミガキが不十分なためハケが観察できる。脚柱部は、太く凹線文を施す。胎土に石英・長石を含み赤褐色を呈する。

7は、壺Cである。器壁は、比較的厚く、外面にわずかにハケが観察できる。

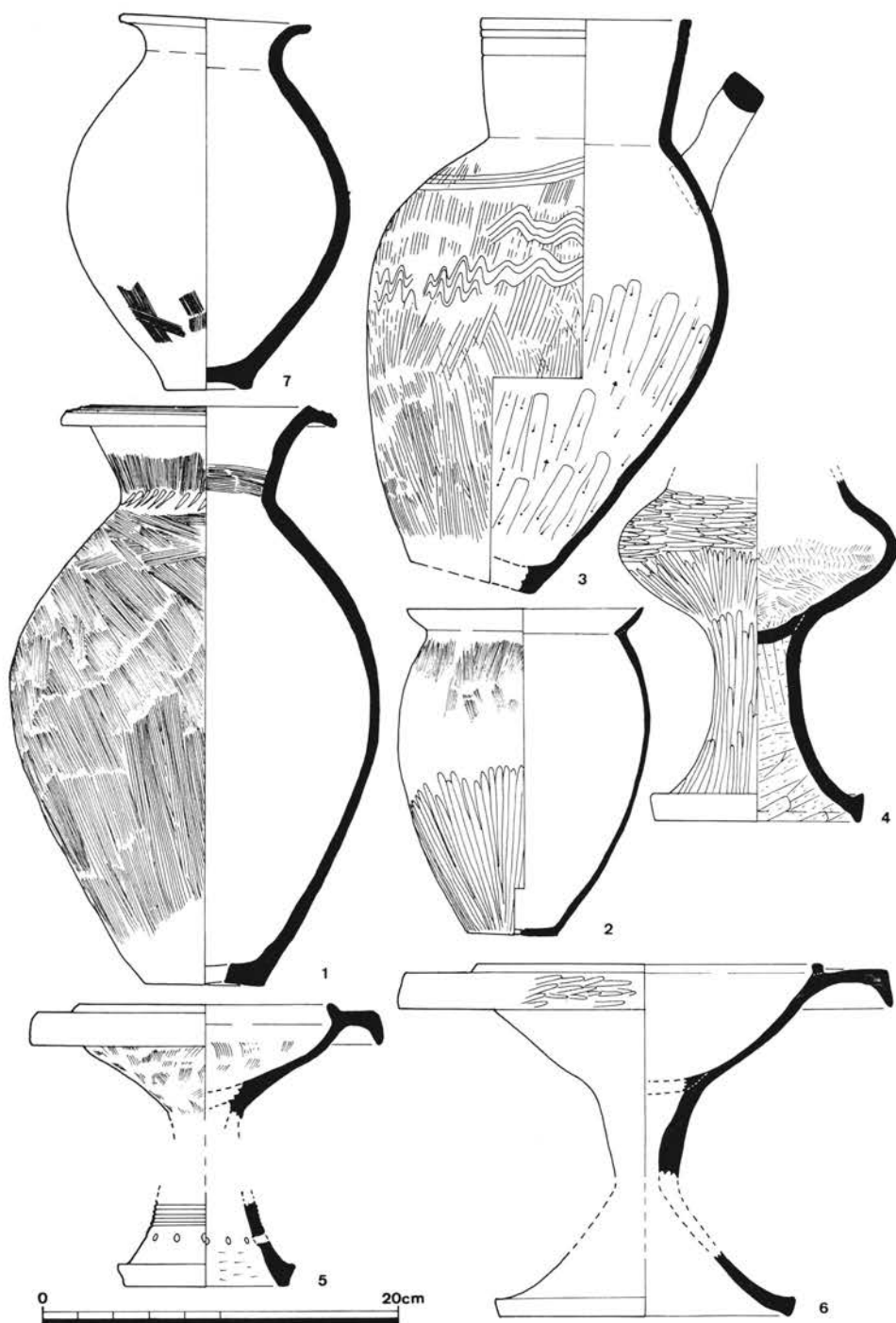
8は、大型の壺A₇である。斜め下方に拡張した口縁部と頸部に凹線文を施す。竹管を利用した記号文をもつ。体部外面上半は、ハケをていねいにナデ消している。下半には粗いヘラミガキを施す。胎土に石英・長石を含み赤褐色を呈する。甕B₁に共通する。9は、球形の体部に直立ぎみに内湾して開く口縁部と、把手をもつ水差し形土器(壺D)である。体部中央下半よりの把手と、ほぼ対角線上に焼成後の穿孔がある。口縁部には凹線文を施す。胎土に石英を含み淡乳褐色を呈する。

10は、在地系の甕B₁である。11は、内外面にハケ調整が観察できる壺A₁である。胎土に石英・長石を含み、褐色を呈する。12は、体部の張りが小さく、最大径が口縁部径を超えない。体部内面に比較的明瞭にハケを残す。胎土は在地系の甕B₁に共通するが、その器形から鉢D₁になる可能性がある。13は、在地系の甕B₁である。下半部は、強く加熱を受けたために、表面が剥離している。

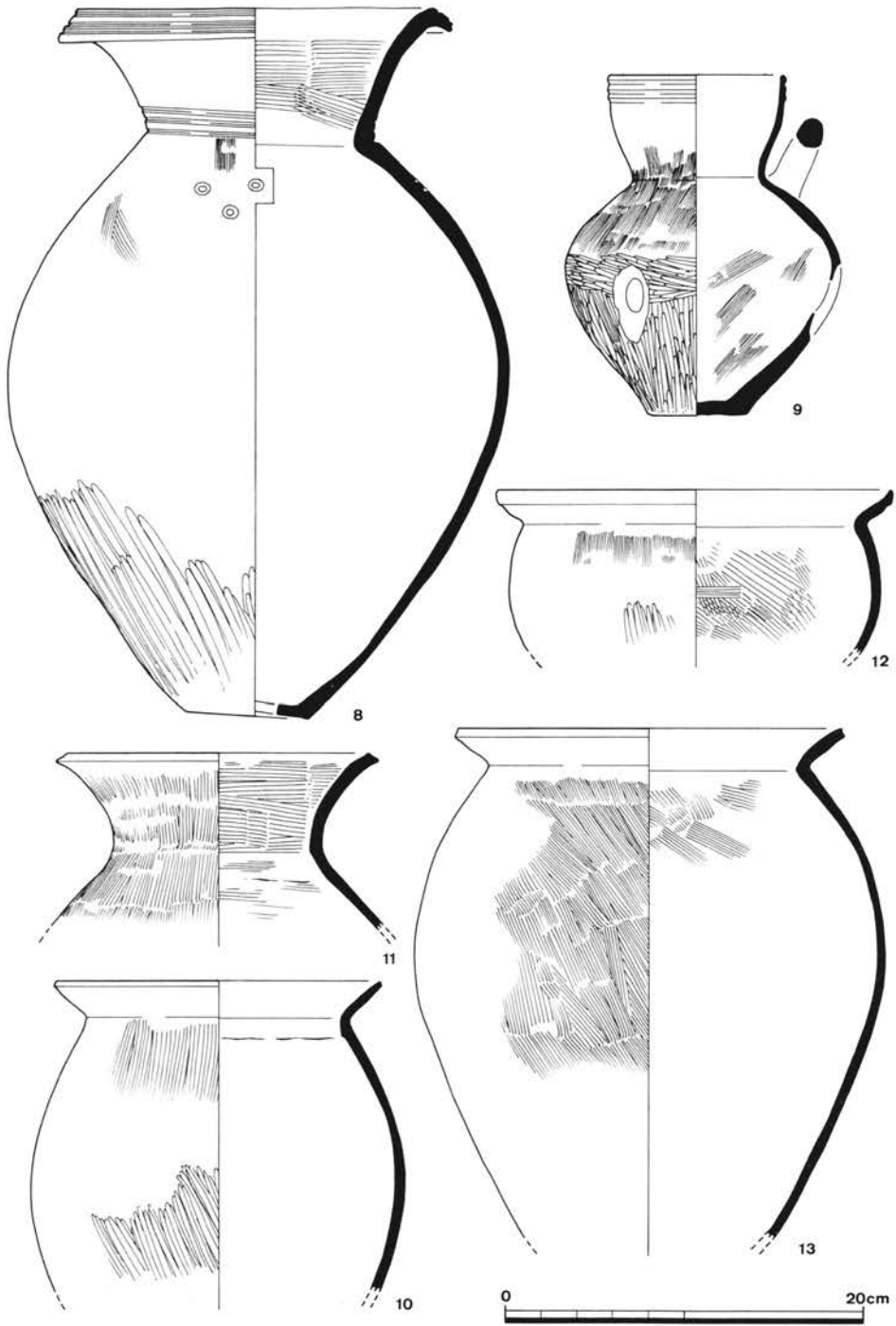
14は、1号墓の基盤(ベース)層である灰色粘土内から出土した甕Aである。舟戸南地区及びこの地区のSD86240から出土した甕Aの器形と異なる様相を示し、倒鐘形に近い。口



第259図 SK86234 実測図



第260图 1号墓出土遺物 1



第261図 1号墓出土遺物 2

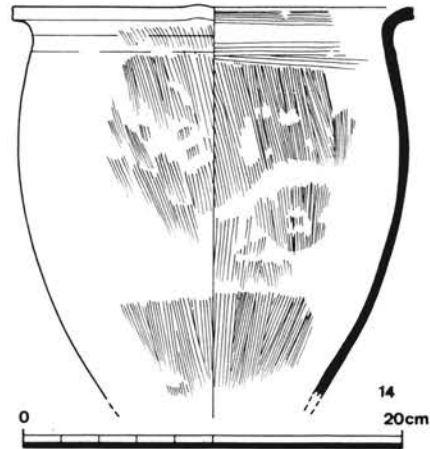
縁端部に波状を呈する押圧文が存在する。頸部内面に横方向のハケが明瞭である。外面を全面ハケ調整し、ヘラミガキは施さない。胎土に石英・長石を含み、淡褐色を呈する。

2号墓 調査区内でその一部(南東辺と2隅及び周溝部)を検出したのみである。

<外形・墳丘> 南東斜面と北東斜面に5～7段の貼り石を持つ方形周溝墓(貼石墓)である。調査を行ったのは南東辺に伴う2隅のみで北東辺・南西辺は調査区外にのびるため、2m程しか調査を行えていない。調査を行った範囲内では南西辺には貼り石は残っていない

かったし、貼っていた形跡も窺えなかった。検出した南東辺の長さは、基底部で15.5mを測る。南東辺は直線を描くものではなく、東隅から3.1mの付近までが緩やかな弧を描き、また、南隅から3.1m付近までが同じく緩やかな弧を描く。その間は、直線あるいは極めて緩やかな弧を描いている。すなわち、南東辺の特徴が四辺に見られるとすれば、2号墓は四隅がやや引き込んだ平面形を持つことになる。なお、検出した北東辺の様相からもその可能性は高い。このような形態を持つため、東隅部の屈曲角は直角ではなく95°を測る。墳丘は、確認した範囲内では、盛土をもたず、弥生時代中期後葉のベース層と考えられる灰色粘土を周溝部のみ掘削して高く見せている。貼り石の基底部から貼り石頂部まで約0.8mを測る。貼り石の遺存状態は極めて良好で、周溝内に転落していたものは、10個に満たない。貼り石に用いられた角礫は、特に扁平なものを選んで利用した形跡はなく、乱雑に切り出した角礫を比較的平らな面を表側にして、灰色粘土に埋め込むように貼っている。石の貼り方にはいくつかの規則性が見受けられる。石材を基本的に長辺を縦方向に用いること、基底石には、基本的に大きな角礫を用いること、いくつかの作業単位を復原できること等が掲げられる。貼り石の石材は、人頭大の花崗岩もしくは砂岩等の角礫を中心に用いた。1号墓が砂岩と花崗岩の比がほぼ等しかったのに対して、2号墓に用いられた石材は花崗岩が大半を占めている。墳頂は調査できなかったため、墳丘中央部に灰色粘土の上に盛土があったかどうかは不明である。ただし、幅の広い周溝を掘っていることから、周溝の掘削に伴う排土を墳丘の盛土として利用した可能性もある。

周溝は、南東辺・北東辺に平行して巡るものを検出している。南西辺の前面に周溝が存在したかどうかは、SD86240の残欠とSX86231に伴う落ち込みのため調査では判明できな



第262図 1号墓下層(灰色粘土)出土遺物

かったが、全周していたものと推定される。周溝の幅は、基底部で約3mを測る。周溝内に遺物はほとんど存在しなかった。周溝内の砂の堆積状況から、この周溝が一部埋没して後に1号墓が造られた可能性が指摘できる。また、周溝部分がSD86240を破壊して掘削されていることから、SD86240→2号墓→1号墓と営まれたことが予想できる。

以上のように、2号墓は、幅3mを測る周溝と、特異な平面形を持つ方形周溝墓になり、少なくとも二辺に貼り石を施した一辺15.5mを測る大型の墳墓と言える。

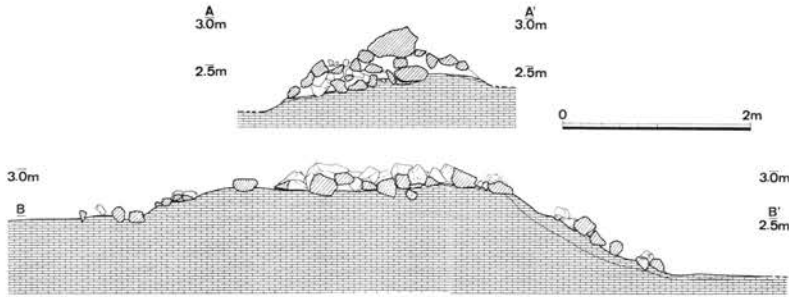
〈出土遺物〉 2号墓は、墳丘を調査するに至らなかったため、その時期を決定する遺物が出土することはなかった。ただし、貼り石の隙間から土器の細片が出土している。出土した土器片は、甕B₁の口縁部、指頭瓦痕文突帯をもつ異様に大きな壺の頸部、櫛描文を施す壺の肩部である。

3号墓 1号墳に隣接する墳墓である。概報等では墳墓として報告していないが、1号墓と同じく、北西斜面に貼り石をもつ。

〈墳丘・外形〉 貼り石は、連続せず、1号墓に近い部分と中央部のみで検出した。南西斜面の約2分の1にあたる。2号墓の周溝内からは、石材は出土しておらず、転落したようすは窺えなかった。貼り石は、1号墓付近では2段であるが、中央部付近に1段の部分も見られる。貼り石の大きさは1号墓のものとはほぼ同じである。3号墓の南西には、集落に伴う溝と考えられるSD86240が存在するが、この溝が3号墓の範囲を区画していたとは考えにくい。墳丘の構造は1号墓と同じで、ベース層と考えられる灰色粘土の上に黄灰褐色の砂質土を盛ったものである。黄灰褐色砂質土の厚さは10cm程で、検出した土壌の深さも考慮すると、1号墓に比べて墳丘の削平は著しいと考えられる。

〈墳丘上の施設〉 墳丘上で3基の土壌を検出したが、いずれも深さ10cm未満の浅いものである。遺物の出土は皆無である。3基の土壌は、主軸方向を同じくし、その方向は貼り石の方向にもほぼ一致する。SK86237は、長辺2.9m・短辺0.7mの長方形を呈する土壌である。検出面から土壌底までの深さは、わずかに8cmを測るにすぎない。その形から土壌墓の残欠と考えられる。SK86238は、長辺1.4m・短辺0.8m・検出面からの深さ0.1mを測る長方形の土壌である。土壌墓の残欠と考えられる。SK86239は、長さ3.4mを測るいびつな形を呈する土壌である。検出面からの深さがわずか4cmしかなかったために、このような形でしか検出できなかったものと思われる。本来は長さ3.4m・幅0.8m程の、長方形を呈する土壌墓であったと考えられる。

〈出土遺物〉 3基の土壌内から遺物は出土しなかった。また、ベース層である灰色粘土からは少量の土器片が出土しているが、図化するに至らなかった。

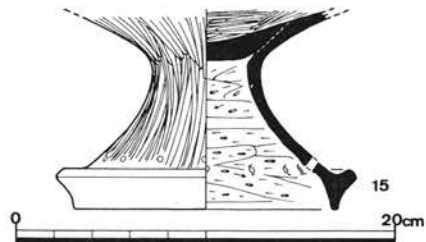


第263図 SX86231 断面実測図

SX86231 (性格不明遺構)

<外形・構造> 自然流路に向かって張り出す細長い石積み遺構である。中央部と思われる部分は、南東側に約2m膨らみ、北西側に幅約16mの範囲で調査区外に広がっている。調査区外に広がる部分には積み石はほとんど見られない。全長は、工事掘削時の立ち会いで確認した部分を含めると約50mを測り、中央部分を挟んで線対称の形を呈するものと考えられる。積み石部分の標高は、68ライン付近で3.2m、64ライン付近で2.8m、61ライン付近で3.1m、57ライン付近で2.4mを測る。中央部は周囲の灰色粘土を掘削し、掘り残した部分を成形して積み石をしている。中央部以南も同様の構築方法が用いられている。以北については、灰色粘土を特に掘削することなく、平坦な粘土面の上に石を積み上げている。SD86240に重なる部分では、SD86240の最下層～下層にかけての堆積層の上に直接石を並べている。積み石は、2号墓で見られたように、灰色粘土を石の大きさに併せて掘り窪めて石を貼り付けるものではなく、灰色粘土の上に置くだけのものである。このため、石と石の間には、洪水によると思われる砂が詰まっていた。石は基本的に重ねるものではなく、灰色粘土を覆うように用いられているが、結果的に重なってしまったところもある。中央部の積み石は裾部にまで及んでおり、裾部から中央部頂部までの高さは約1.2mを測る。用いられた石材は、2号墓で多く用いられた花崗岩の角礫と同じものを多く使っているが、一部川原石等の使用も見られる。石材の大きさは、中央部から北東側はやや小さめの角礫(10~40cm大)を用い、中央部を含めて南西側はやや大きめの角礫(30~60cm大)を用いている。最も大きな石でも1人で持ち上げることが可能である。

なお、SX86231と他の遺構との切り合い関係は、以下のとおりである。SX86231は、SD86240を切って造られており、また、2号墓に伴う



第264図 SX86231 出土遺物

周溝の上に北西端部が乗っている。3号墓との関係は不明な点が多いが、2号墓の周溝内の堆積状況から、SX86231が先行する可能性がある。また、SX86231を覆う砂層から弥生時代後期末(庄内併行期)の土器群が出土している。以上の状況から、SD86240→2号墓→SX86231の順に構築されたと考えられる。

〈墳丘上の施設〉 積み石をすべて除去して内部構造を調査したが、土坑等の遺構は検出できなかった。なお、積み石の下の灰色粘土内には中期の土器が含まれていた。

〈出土遺物〉 中央部付近の積み石の隙間内から中期後葉の甕(甕B₁)の破片が出土している。また、SD86240との交点付近の積み石の間から15の鉢脚部が出土している。15は、SD86240の積み石の間に挟まるようにして出土した。拡張する脚端部をもち、裾部には18方向に円孔を穿つ。胎土に石英・くさり礫を含み褐色を呈する。ベース層である灰色粘土内からも少量の土器片が出土しているが、図化するには至らなかった。

〈性格〉 類例の知られていない遺構で、その性格は不明としか言いようがない。ただ、1～3号墓(貼石墓)に隣接していること、ほぼ同じ石材を用いていること、2号墓と同じく灰色粘土を掘削して周溝状のものを持っていることから、主体部を検出することはできなかったが、墳墓の可能性を指摘したい。

墳墓群の時期 遺構の切り合い関係・出土遺物から以下のことが言える。

- 1) 1号墓は、2号墓の周溝との関係から、2号墓に後出するものである。墳丘内の土壌から中期後葉の遺物が出土している。
- 2) 1～3号墓及びSX86231は、中期中葉の包含層である灰色粘土層をベースにして構築されている。
- 3) SX86231は、中期中葉の溝状遺構(SD86240)を壊して造られており、また、2号墓に伴う周溝の上に北西端部がのっている。3号墓との関係は不明な点が多いが、2号墓の周溝内の堆積状況から言って、SX86231が先行する可能性がある。
- 4) 3号墓は、時期を決定すべき遺物が出土していないが、1号墓との関係から1号墓とあまり時間差のないものと考えられる。
- 5) 1～3号墓及びSX86231は、弥生時代後期末(庄内併行期)～古墳時代前期初頭の洪水層に覆われている。

以上のことから、墳墓群は弥生時代中期中葉～後葉のある時期に営まれはじめ、中期後葉にはこの地区での築造が終了し、弥生時代後期には埋没したのと考えられる。

(2) 溝状遺構と自然流路に伴う落ち込み

SD86240 第5次調査で検出されたSD84040に続く溝状遺構である。概報ではSD86140と報告したが、ここでSD86240と名称を変更する。SD86240は、幅約5m・深さ1.5mを測

る。検出した長さは約8mである。溝の北西端は、SX86231と2号墓の周溝によって破壊されている。溝の埋土は、上層・中層・下層・最下層と大きく4層に分層できた。遺物は、下層と最下層から多く出土し、中層・上層からは少量出土したのみである。最下層は、溝底に部分的に堆積していた褐色の粘土層である。下層は、褐色の粘性砂質土で、最下層との境界は、鮮明ではない。中層は、黄灰褐色の砂質土である。上層の砂層の堆積層は厚く、この溝がある時期に一度に埋まったことが予想できる。SD86240は、第5次調査で検出されたSD84040と比べると溝幅も狭く、数回にわたって掘削された形跡も窺えなかった。SD84040の底の標高が2.3m付近であるのに対して、SD86240は2.6m付近であることから、この溝が北西方向に流れていたことが予想できる。

下層から最下層にかけて出土した遺物には、縄文時代後期の土器(磨り消し縄文土器・条痕文系土器)・石器、弥生時代前期の土器、中期の土器・石器がある。

16は、ヘラ描き沈線による多条文をもつ壺の体部片である。前期新段階のものである。胎土に石英・長石を含み淡褐色を呈する。17は、頸部をヘラミガキする壺A₁である。器壁は、薄く、胎土にチャートを含み、淡黄褐色を呈する。18は、頸部がほぼ直立し、口縁端部が水平方向に開く壺A₁である。口縁部内面と頸部外面をヘラミガキする。器壁は厚く、胎土に3mm大の石英・長石を含み、淡褐色を呈する。19は、頸部に櫛描直線文を持つ。胎土に石英・くさり礫を含み、淡黄褐色を呈する。20は、胎土に2mm大の長石・石英などを含む壺A₁である。口縁端部をわずかに肥厚させる壺A₃には24・25・27がある。24は、口縁端面の上端・下端にキザミメ文を施す。淡褐色を呈する。25は、端面に斜格子文を施す。胎土に石英・長石・雲母を含む。SD86206出土の264・267に胎土が一致する。淡灰褐色を呈する。27は、口縁部内面に櫛描波状文を施す。胎土にチャート・長石・くさり礫を含み、淡黄褐色を呈する。口縁端部が口縁部内面より下方に下がる壺A₁には、30がある。30は、拡張しない口縁端面に斜めのキザミメ文を施し、口縁部内面には、内側から櫛によって、列点文・波状文・直線文・列点文を施す。胎土に2~3mm大の石英を多く含み、淡黄褐色を呈する。口縁端部を拡張した壺A₅には、21~23・26・28・29・31がある。21は、口縁端部を主に下側に拡張するものである。胎土にくさり礫を多量に含み、淡黄褐色を呈する。22は、口縁部が水平方向にのびる。胎土に石英・長石を含み、淡褐色を呈する。23は、下方に拡張した口縁端面に、縦方向にキザミメを施す。頸部内面にヘラミガキが観察できる。胎土に石英・長石を含み、淡黄褐色を呈する。26は、口径24.8cmを測り、頸部に断面三角形貼り付け突帯をもつ。下方に拡張した口縁端面に綾杉文を施す。胎土に長石などを多く含む。28は、口縁端部を上方に拡張し、口縁部内面を刺突文(?)と櫛描波状文・扇形文で飾る。刺突文は、直径3mmほどの細い枝状のものを用いており、2個のみ紐穴として利用し

たため貫通している。胎土にくさり礫・長石を含み、淡黄褐色を呈する。29は、頸部に断面三角形貼り付け突帯をもつ。胎土にチャート・石英を含み、淡黄褐色を呈する。31は、口縁部内面を28と同様の刺突文と櫛描波状文で飾る。口縁端面を強くナデたためか、擬凹線文を施したように見える。同一個体と考えられる体部片が出土しており、体部肩部に口縁部内面と同じ構成の文様をもつ。胎土にくさり礫を多く含む。32は、壺Bである。口縁端部を内側に拡張し、口縁外端にキザミメを施す。頸部には、指頭圧痕文突帯をもつ。中期後葉のものに比べて、大型化していない。口縁部外面をヘラミガキする。胎土に石英・くさり礫・チャートほかを含み、淡褐色を呈する。33は、ほぼ直立する口縁部をもち、口縁端面にキザミメ文を施し、口縁部外面を櫛描波状文で飾る。摂津地方を中心に分布する水差し形土器になる可能性がある。胎土に長石・くさり礫を含み、淡褐色を呈する。

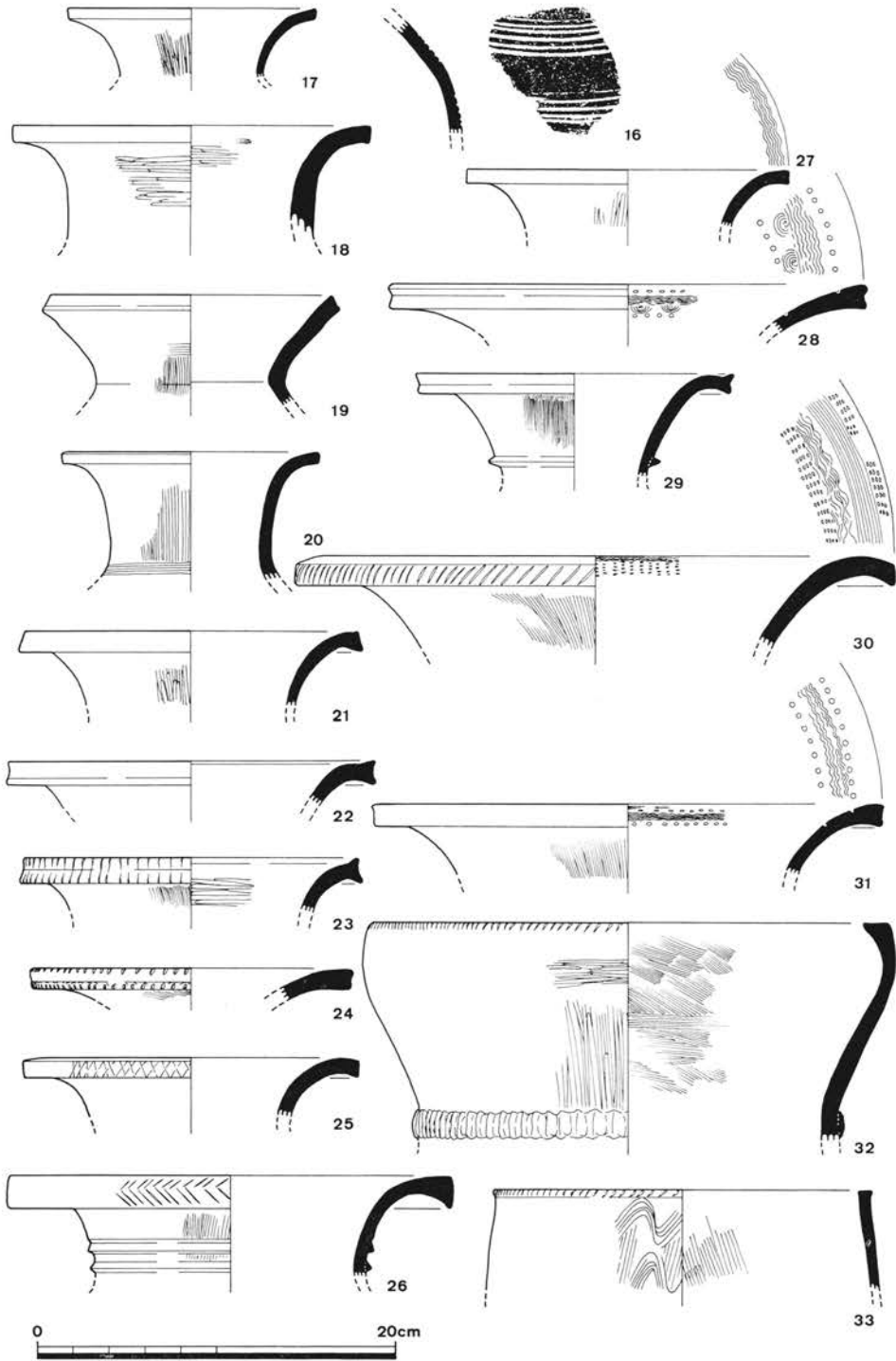
壺形土器のうち、図化しなかったものに以下のものがある。壺A₃には、口縁端部に斜格子文を施し、口縁部内面に突起をもつものがある。壺A₅には、口縁端面にキザミメをもつもの(2点)、櫛描波状文を施すもの、円形浮文をもつもの、無文のものがある。

甕形土器の内、図化したものには34～39がある。34は、緩やかに外反する頸部をもつ甕Aである。口縁端面に波状を呈する押圧文をもつ。内外面をハケで調整する。胎土は精良で、石英・長石を含み淡褐色を呈する。舟戸南地区出土の甕Aとの差異は認められない。34の形態をもつ甕Aには、図化しなかったものが8個体ある。そのうち、口縁端部にキザミメをもつものが3個体存在する。35・38は、頸部が緩やかに屈曲する甕である。胎土にチャートが目立つ。36は、甕Aに属する。胎土に石英・長石・雲母を含み、胎土・色調ともに35の壺に一致する。37は、口縁端部を上方につまみあげる甕B₂である。外面に粗いハケを施す。胎土にチャート・石英を含み、淡黄褐色を呈する。甕には、他に体部を櫛描波状文で飾るものがある。39は、口径39.2cmを測る大型の甕B₃、もしくは甕B₄である。胎土に石英・くさり礫他を含み、淡灰褐色を呈する。

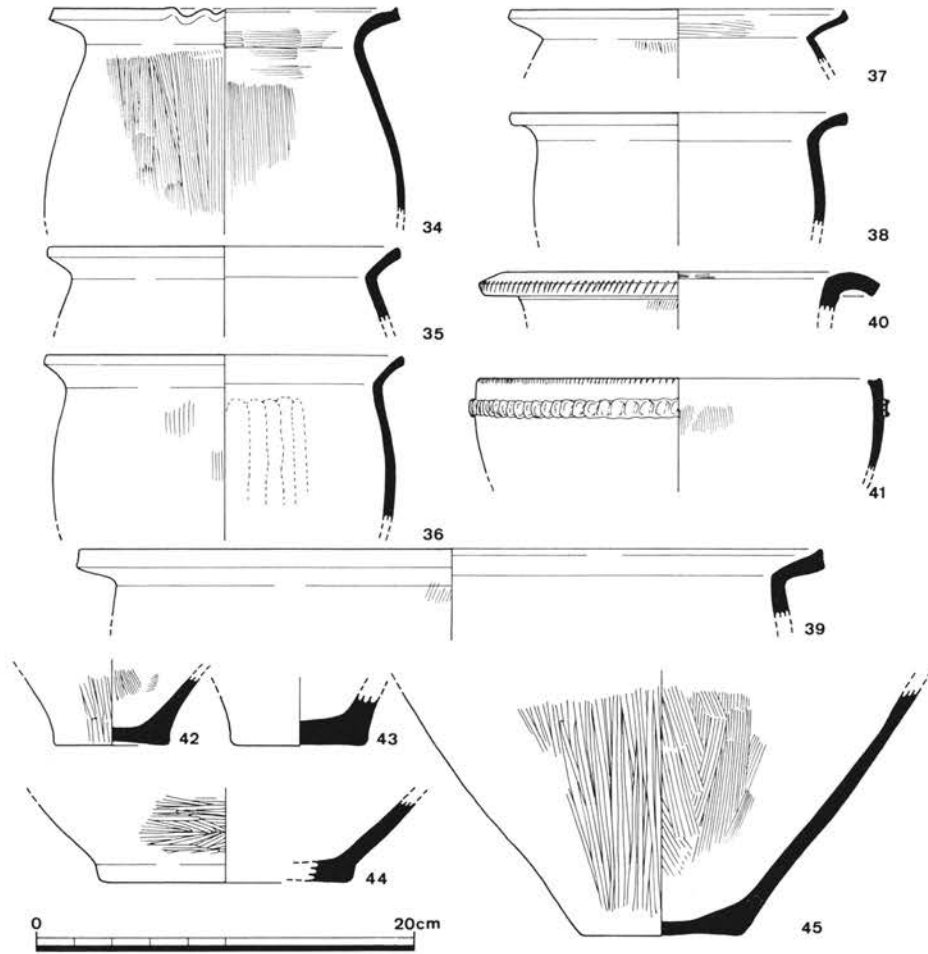
鉢には、40・41がある。40は、口縁部の屈曲する鉢Dである。口縁部内面より口縁端部が低く位置する。口縁端面にキザミメをもつ。鉢Dは、他に1個体出土している。41は、ほぼ直立する口縁部の外端にキザミメを施し、やや下位に指頭圧痕文突帯をもつ鉢B₂である。胎土にくさり礫を多く含む淡褐色を呈する。

高杯は全く出土しなかった。他に底部が出土しているが、ここでの説明は割愛する。

出土した石器には、縄文時代後期のものと弥生時代中期のものがある。1は、黒曜石製の凹基式の石鏃である。縄文後期のものと考えられる。2・3は、無斑晶安山岩製のもので、弥生時代中期と考えられる。2は、五角形を呈する凹基式石鏃で、3は、円基式石鏃である。4・5は、先端部の擦痕が顕著でないことと、硬質の粘板岩を石材に用いること



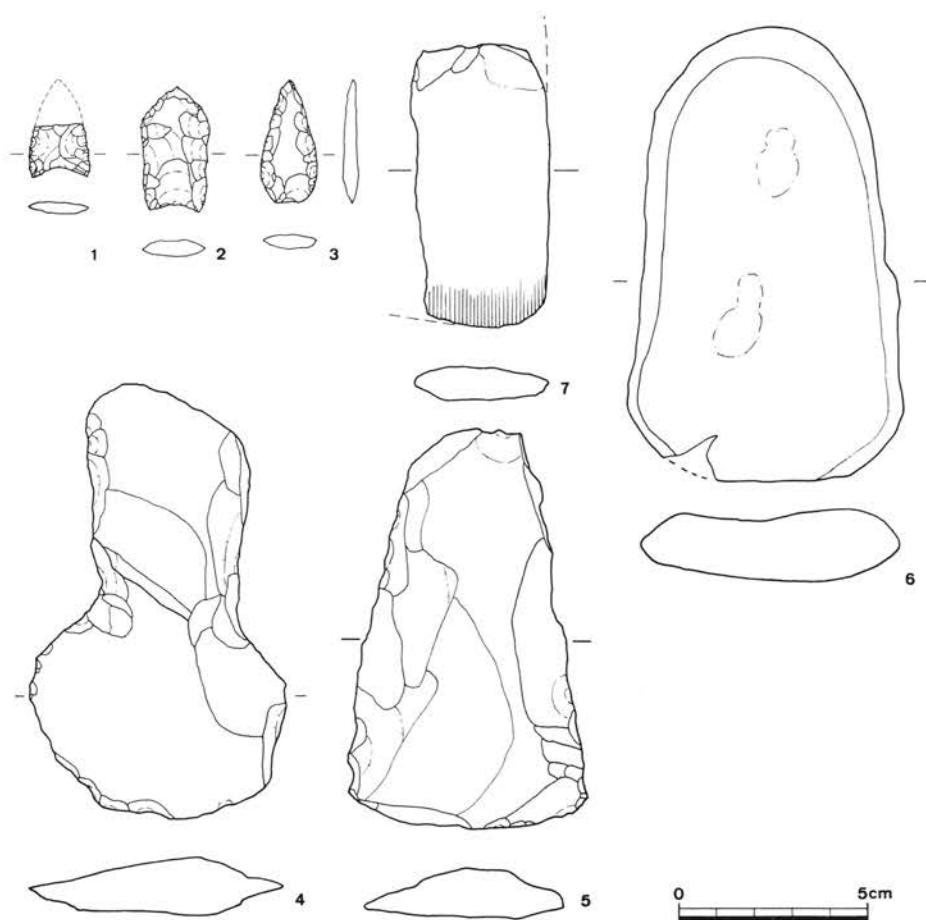
第265図 SD86240 出土遺物 1 (弥生土器 1)



第266図 SD86240 出土遺物 2 (弥生土器 2)

から、縄文時代後期の打製石斧と考えられる。7の先端部の擦痕の著しい弥生時代中期の石鍬とは明瞭に区別できる。6は、珊瑚(菊目石)を扁平な長方形に加工したもので、中央部が何等かの使用のため窪む。舟戸南地区で類例のないことから、縄文時代後期に属すると考えられる。

自然流路に伴う落ち込み SD86240の南側約2m付近から、砂層を埋土とする落ち込みが存在する。しかし、この落ち込みはSX86231に伴う可能性もあり、事実SX86231中央部付近ではSX86231裾部と落ち込みの底が一致している。すなわち、この落ち込みは、SX86231の周溝として存在している部分がある。一方、この落ち込みが南側で自然流路に続くことは、掘削後の土層観察及び第5次調査で確認したSD85042の存在から確実である。SX86231に伴う落ち込みを含めて、堆積していた埋土はすべて砂層である。この砂層内か



第267図 SD86240 出土遺物 3 (石器)

1～3：石鏃，4・5：打製石斧，6：不明石製品，7：石鏃

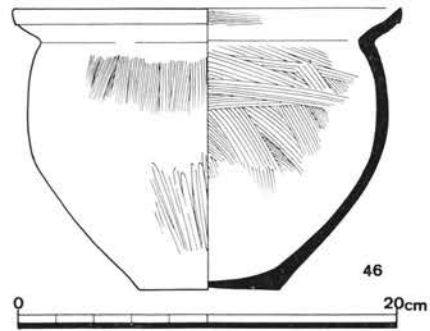
ら弥生時代中期後葉から弥生時代後期末葉の土器が出土している。その多くは、弥生時代後期後葉から末葉にかけてのものである。

46は、中期後葉の鉢D₁である。砂層の上層(古墳時代の包含層?)から出土しており、混入したものと考えられる。在地系の甕B₁との共通点が多く、調整・胎土・色調等が一致し、体部の張り(体部最大径が口縁部径を超えない)と器高のみに差異が認められる。

47～49は、弥生時代後期に属する。47が甕B₁で、48が口縁部に浅い擬凹線文を施す鉢Cである。49は、口縁端部を肥厚した高杯Aである。

50～53は、第6次調査時に調査地外の自然流路内を土層観察のための掘削に際し、固まって出土したものである。いずれも完形に近い。50は、球形の体部をもつ甕Dである。突出した底部の中央部がやや窪む。底部付近にタタキメが観察できる。51も甕Dである。体

部内面下半をヘラケズリし、上半をハケで調整する。外面下半部にタタキメが残る。52は、腰部の張った球形の体部をもつ壺Dである。内外面ともハケで調整する。53は、腰の張った球形の体部に突出した底部をもつ壺である。体部下半をタタキ締めた後、全面をハケで調整し、部分的にヘラミガキを施す。口縁部は欠損して不明であるが二重口縁をもつ可能性がある。

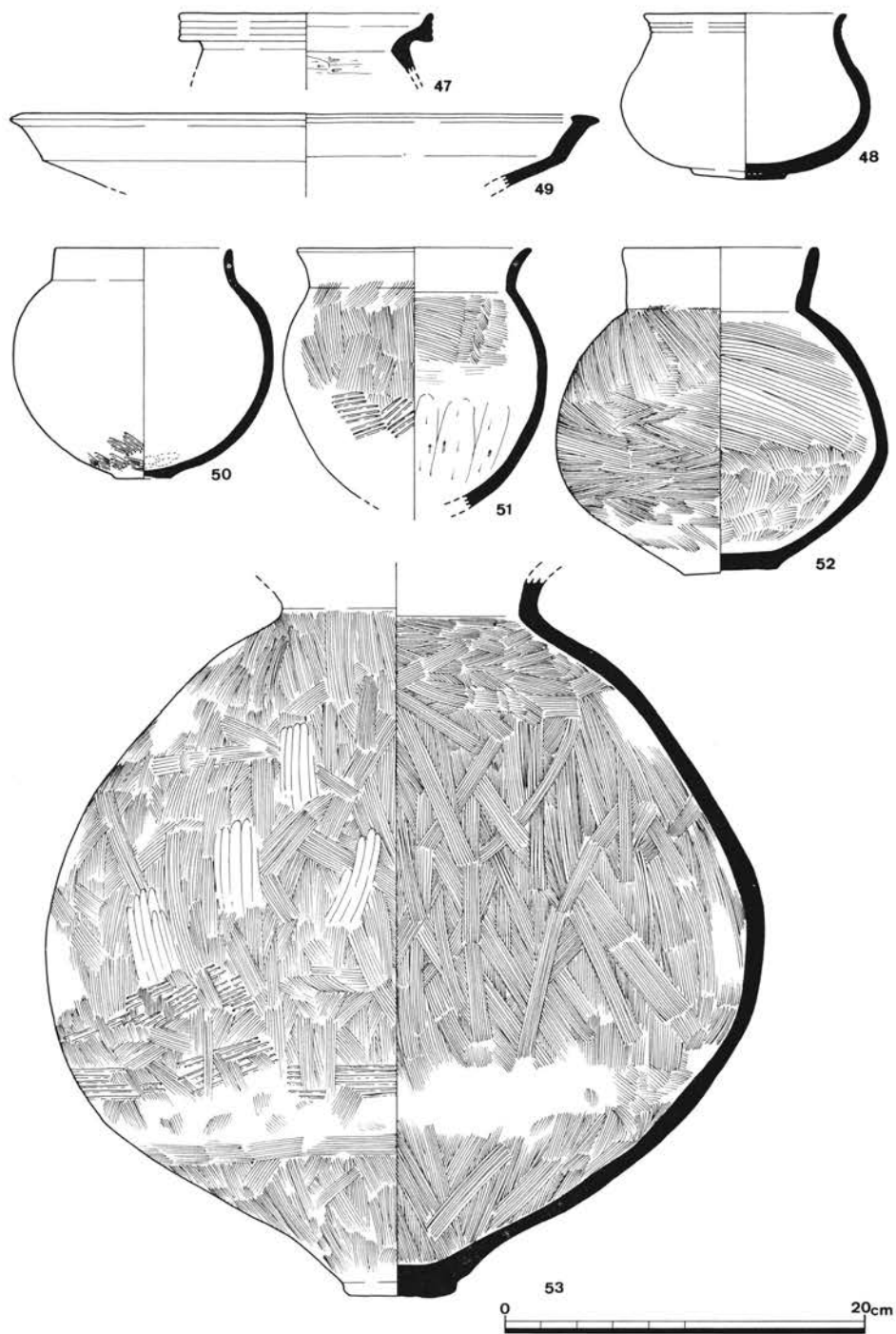


第268図 自然流路に伴う遺物1

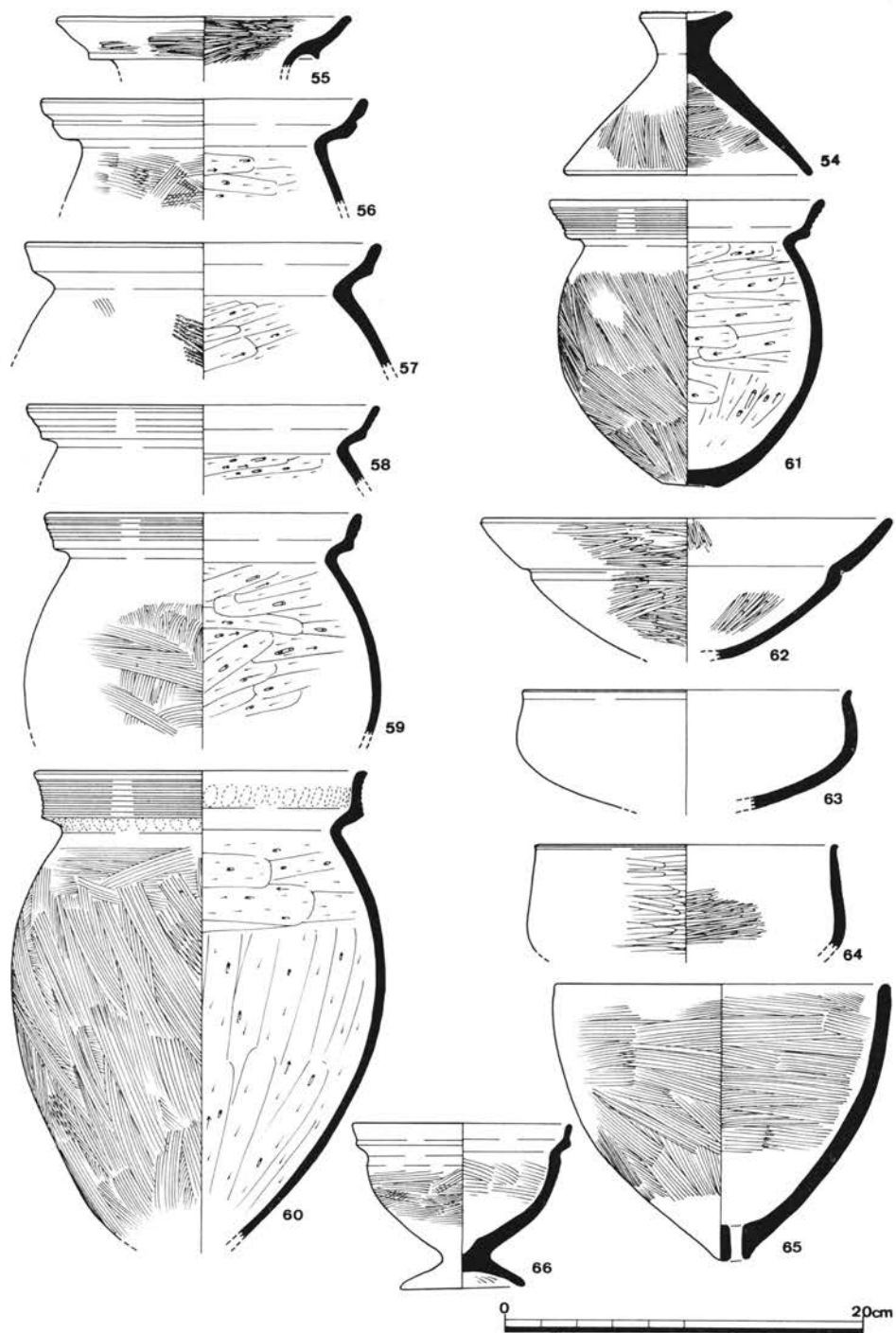
57～62・65は、SX86231の約50cm上層で一括して出土した。57は、甕Cである。58～61は、甕B₃である。岡安地区出土の甕B₃口縁部に比べて発達は著しい。60は、口縁部内面と下端に指頭痕を残し、口縁部が直立気味に外反する。北陸系の土器と考えられる。62は、脚部の低い高杯である。65は、有孔鉢(鉢D)である。

54は、器高の高い甕の蓋である。55は、内外面をていねいにヘラミガキで調整した壺Fである。56は、口縁部をナデで調整する甕Cであるが、ナデが強いため中央部が窪んでいる。63・64は、高杯Cである。66は、鉢Bである。甕Cと同様に口縁部の擬凹線文はナデに変わっている。

(肥後 弘幸)



第269図 自然流路に伴う遺物 2



第270図 自然流路に伴う遺物 3

第3節 古墳時代

第1項 概要

古墳時代の包含層は、第255図の第14層(暗褐色粘性砂質土)である。下層の16・17層の砂質土も古墳時代前期の包含層であるが、いわゆる洪水層で、明確な遺構面を形成するに至っていない。また、上層の12層は、古墳時代後期の遺物を含むが、奈良時代の遺物も含んでいる。古墳時代の遺構は、14層の下層付近で検出した。検出遺構には、古墳時代前期の土坑2基と古墳時代後期と考えられる方形竪穴式住居跡2基である。また、14層内から古墳時代前期の土器が比較的多く出土した。

第2項 遺構及びそれに伴う遺物

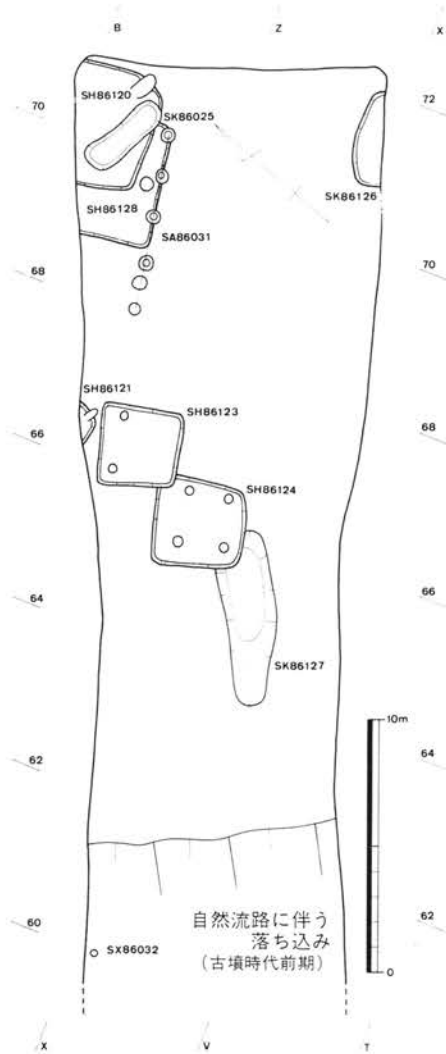
(1) 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構には、SK86126・SK86127及び自然流路に伴う落ち込みがある。検出した遺構は、少ないものの、遺物が比較的まとまって各遺構内から出土した。

SK86126(第272・273図) 71X区付近で検出した土坑である。調査の便宜上、設けた排水溝によって、その約2分の1を失っている。

検出面からの深さは約0.4mを測り、土坑の遺存状態は、比較的良好である。土坑の埋土は、洪水に伴うと考えられる灰褐色砂層のみで、分層することはできなかった。土坑底から整理箱1箱分の古式土師器が出土した。また、付近の排水溝内及び壁内から、この遺構に伴うと考えられる土器が整理箱にして約2箱出土した。土坑の性格は不明であるが、完形の土器の出土からごみ捨て場の存在とは考えにくい。

出土した土器には、壺15%(4個体 B 1点, G 1点, I 1点, その他 1点), 甕46%(12個体 A 1点, B 1点, C 6点, F 4点), 小型丸底壺12%(3個体 A 2点, Bc 1点), 鉢12%(3個体 A 2点, Da 1点), 高杯8%(2個体 B 1点, C 1点), 器台8%(2個体



第271図 第7次調査B地区上層検出遺構図

B 2点)がある。総個体数は、26点以上である。全体に甕の、特にCとFの占める割合が高い。

甕B(1) 体部及び頸部外面は、ていねいなハケで、内面はヘラケズリで調整される。口縁部内外面は横ナデが加えられる。なお、頸部外面には板状工具の端面で刺突したと考えられる有軸羽状文が施される。体部外面中央部に黒斑がみられ、中央部から底部にかけて薄く煤が付着する。胎土は粗く、暗黄褐色を呈する。口径15.6cmを測る。

壺(2) 口縁部が外上方に開く二重口縁壺である。口縁部外面は細かい横方向のヘラミガキ、内面は横ナデで調整する。明褐色を呈し、口径11.9cmを測る。

壺I(3) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。口縁部外面に横ナデを施す。外面肩部に帯状の黒斑が認められる。口縁部外面に煤が付着する。色調は淡黄褐色で、焼成があまいため一部暗褐色を呈する。口径18.4cmを測る。

甕A(4) 口縁部外面に2条の擬凹線文を施す。頸部から体部外面は粗いハケ、内面はヘラケズリを施す。口縁部内外面には横ナデを加える。淡褐色を呈し、口径14.8cmを測る。

甕B(5) 擬口縁部は、丸く不明瞭に屈曲する。口縁部内外面は横ナデで調整する。外面には煤が付着する。明褐色を呈し、口径17.6cmを測る。

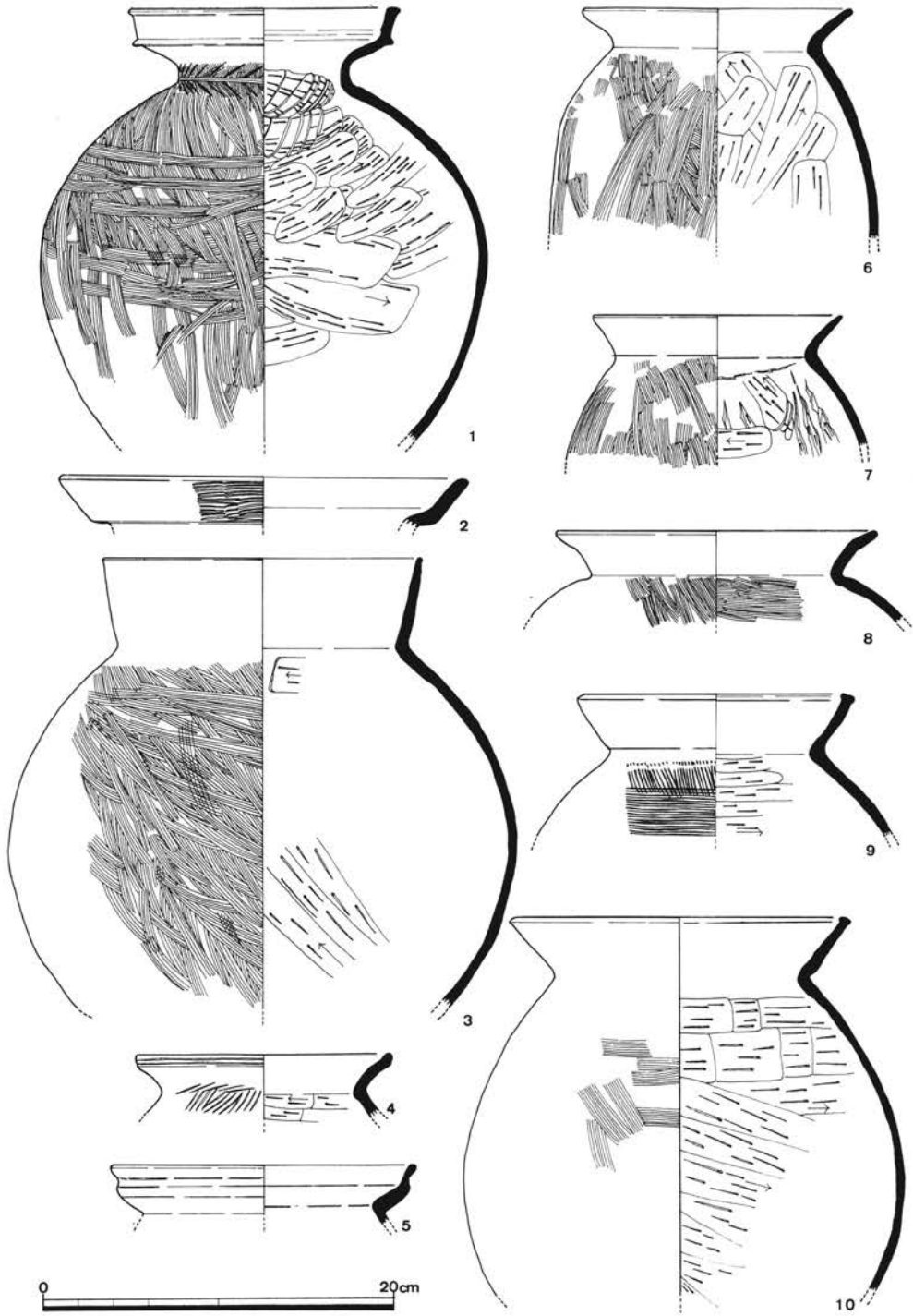
甕C₁(6・7) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリを行うが、6は一部ハケも加える。7の内面の調整は粗雑である。口縁部内外面は横ナデで調整する。黒斑は、6の体部外面と内面の全面に、7の口縁部内面に一部ある。ともに淡褐色を呈し、6は口径15.2cm、7は14.4cmを測る。

甕C₂(8) 体部内外面はハケ、口縁部内外面は横ナデで調整する。胎土は粗く、明褐色を呈し、口径18.6cmを測る。

甕F(9・10) 9の口縁端部上面は凹面をなす。体部外面はハケで、9は肩部にていねいな横ハケを施す。内面はヘラケズリで調整する。口縁部内外面には横ナデを用いる。10の体部外面に煤が付着する。胎土は比較的密で、淡褐色を呈する。口径は9が14.8cm、10が19.2cmを測る。

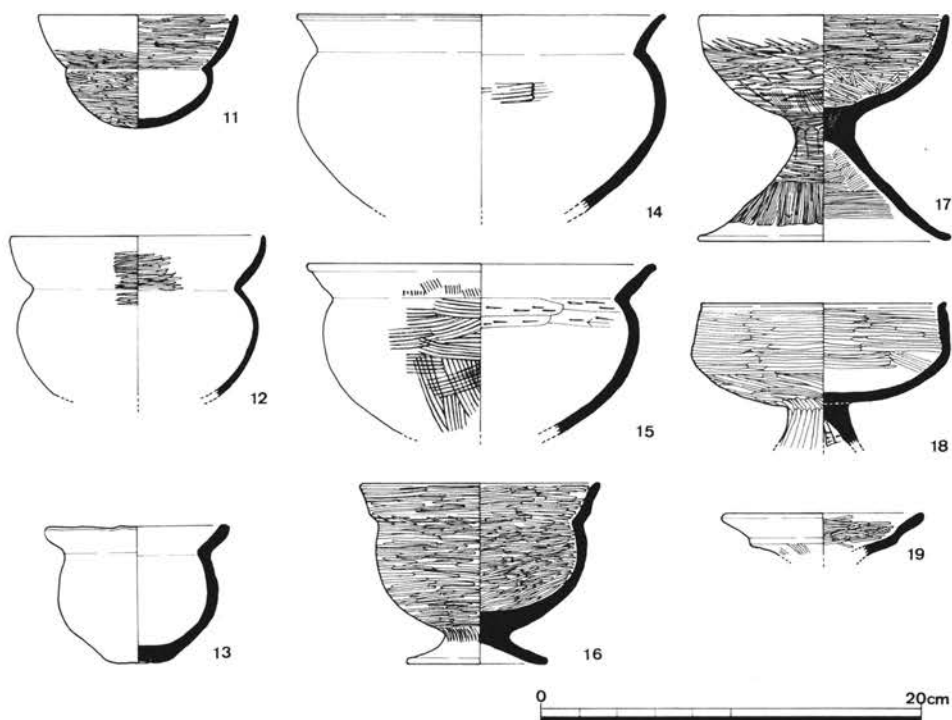
小型丸底壺A(11・12) 11が小型の体部をもつ典型的な小型丸底壺であるのに対し、12は、口縁部に比して大型の体部を有する。調整は、11の外面底部にヘラケズリの後、全面に横方向のヘラミガキ、内面体部は不明だが、口縁部は同じくヘラミガキを施す。また、12は、外面底部と内面体部に不定方向のナデのほかは、横方向の細かいヘラミガキで仕上げる。11の口縁部から体部にかけての外面に黒斑を有する。2点とも胎土は密で、焼成がややあまく、明褐色を呈する。11は口径10.6cm・器高5.9cm、12は口径13.4cmを測る。

小型丸底壺Bc(13) 中央部を指で押さえたへこみ底をなす。外面体部は、粗略なナデ、



第272図 SK86126 出土遺物(1)

1 : 壺B, 2 : 壺, 3 : 壺I, 4 : 甕A, 5 : 甕B, 6・7 : 甕C₁, 8 : 甕C₂, 9・10 : 甕F



第273図 SK86126 出土遺物(2)

11・12：小型丸底壺A，13：小型丸底壺Bc，14・15：鉢A，16：鉢Da，17：高杯B，
18：高杯C，19：器台B

その他は内外面とも横ナデを施す。成形・調整は粗雑である。暗茶褐色を呈し、口径9.8cm・器高7.2cmを測る。

鉢A(14・15) 調整は、14が内面体部にハケ、口縁部に横ナデを施し、15が外面全体にハケ、内面体部にヘラケズリ、口縁部に横ナデを施す。色調は14が赤褐色、15が明褐色を呈し、口径は14が19.4cm、15が18.6cmを測る。

鉢Da(16) 体部・口縁部内外面は横方向のていねいな細かいヘラミガキを施す。脚台部の調整は不明である。黒斑は、内面の頸部から底部の広範囲に、また外面全面にまだら状に薄くみられる。色調は、暗黄褐色から淡橙色を呈し、口径12.8cm・器高9.4cmを測る。

高杯B(17) 体部外面は、斜めハケの上に細かいヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、杯部内面はていねいなヘラミガキ調整をする。脚台部外面はヘラケズリの上にハケを加え、上半部を細かいヘラミガキで調整する。内面に横方向のハケ、裾部内外面に横ナデを施す。口縁部外面に黒斑を有する。胎土は密で、明黄褐色を呈し、口径13.3cm・器高11.8cmを測る。

高杯C(18) 口縁端部はやや外反しておさまる。脚台部は欠損するが、円錐形を呈する

と考えられる。杯部内外面は、ていねいなヘラミガキ、脚台部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。胎土は比較的密で、明褐色を呈する。口径13.0cmを測る。

器台B(19) 外面は体部にハケを施した後、全面に横ナデ、内面はヘラミガキで調整する。焼成はややあまく明褐色を呈する。口径10.8cmを測る。

SK86127(第274~276図) 65X区付近で検出した浅い土坑状の土器溜まりである。土器は、長辺約7m・短辺が約3mを測る不定形な長方形に広がる。整理箱約3箱分の遺物が出土した。

出土土器には、壺10%(4個体 A 1点, D 1点, G 1点, その他1点), 甕64%(27個体 C 19点, D 1点, E 2点, F 5点), 小型丸底壺2%(1個体 A 1点), 鉢12%(5個体 A 1点, C 1点, Ga 1点, Gb 1点, 脚台部1点), 高杯5%(2個体 A 1点, E 1点), 器台7%(3個体 B 2点, 脚台部1点)がある。総個体数は42点以上である。甕が過半数をなし、甕Cは全体の45%を占める。

壺A(20) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、頸部から口縁部内外面は横ナデを施す。口縁部外面・肩部外面2か所の計3か所に黒斑がみられる。胎土は密で、外面淡黄褐色、内面淡明褐色を呈する。口径19.6cmを測る。

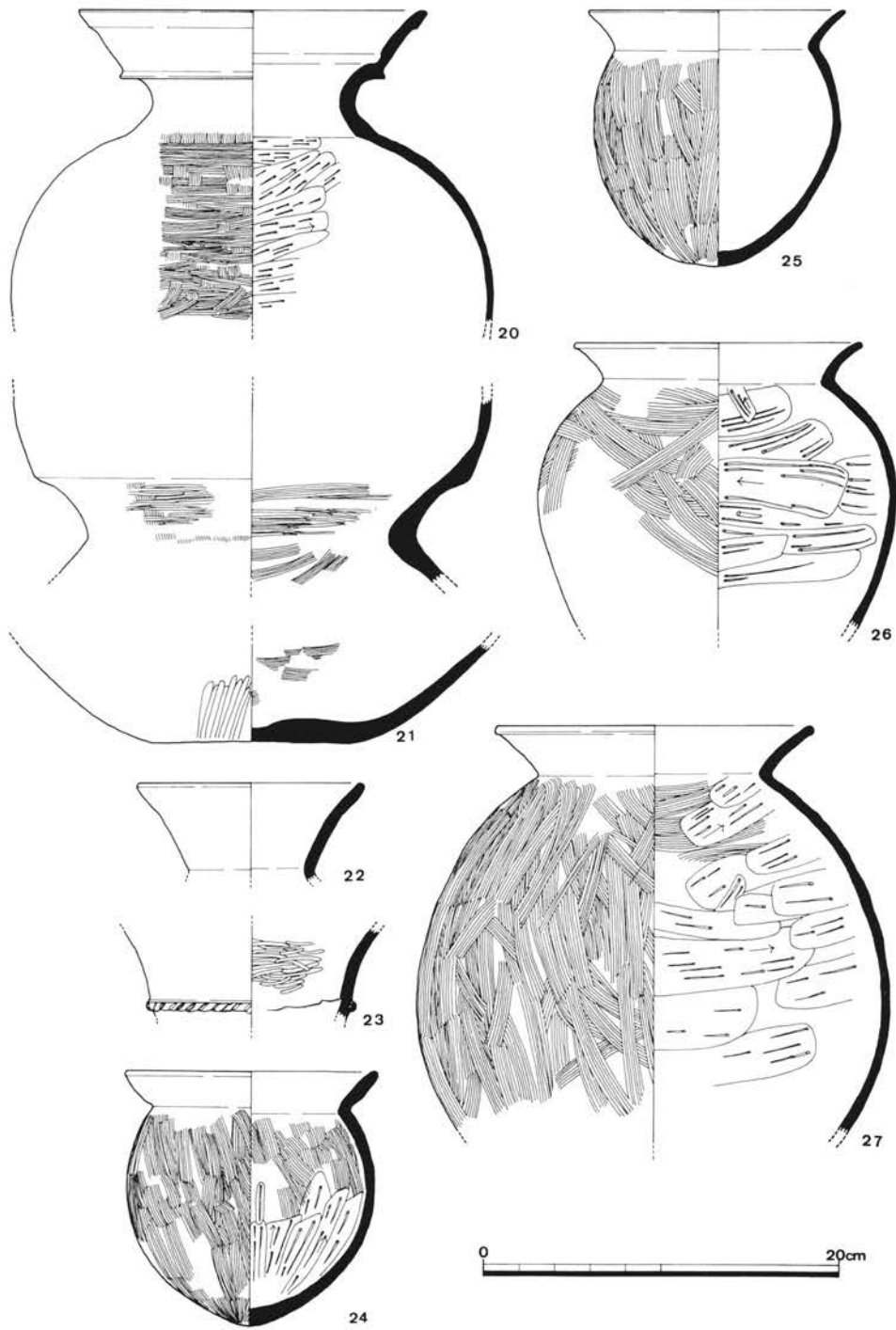
壺D(21) 平底を持つ大型の二重口縁壺で、体部と口縁端部を欠損する。頸部内外面ともハケの後に、一部雑なヘラミガキが加えられる。底部に近い体部外面はヘラミガキ、内面はハケ、底部外面には部分的にヘラケズリがみられる。胎土は比較的粗く、明黄褐色を呈する。

壺G(22) 摩滅しているが、口縁部内外面とも横ナデと考えられる。胎土は粗く、外面暗褐色、内面淡褐色を呈し、口径13.0cmを測る。

壺(23) 頸部にキザミメをいれた突帯を貼り付ける。口縁部や体部を欠損するため詳細は不明であるが、長頸壺と考えられる。外面は横ナデ、内面はヘラミガキを施す。胎土はやや粗く、淡褐色を呈する。突帯部の径は11.7cmを測る。

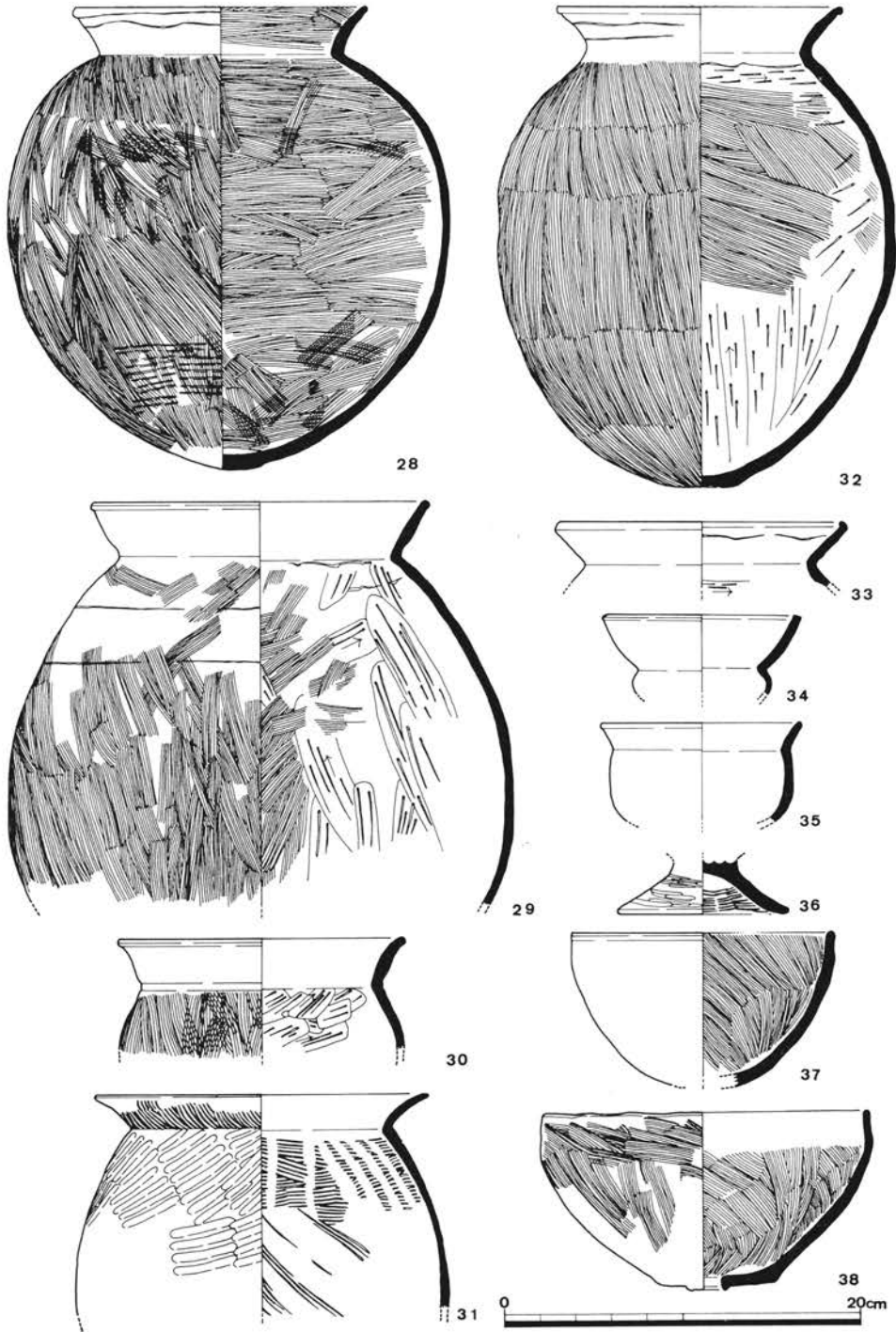
甕C₁(24・25) 体部外面はハケ、内面は24が下半部にヘラケズリ、上半部にハケを施す。25の内面は、摩滅して不明である。口縁部内外面は、横ナデで調整する。黒斑は、2点とも外面体部から底部にかけて円形にみられる。25の外面全面には煤が付着する。24は淡褐色を呈し、口径14.4cm・器高14.4cmを測る。25は暗黄褐色を呈し、口径14.6cm・器高14.2cmを測る。

甕C₂(26~29・32) 32は丸底ぎみのへこみ底で、長胴形の体部を、その他は丸底で球形の体部をつくる。体部外面は5点ともハケ調整する。28の下半部には一部タタキと思われる成形の痕跡が残る。内面は、26がヘラケズリ、27・29・32がヘラケズリとハケ、28がハケ



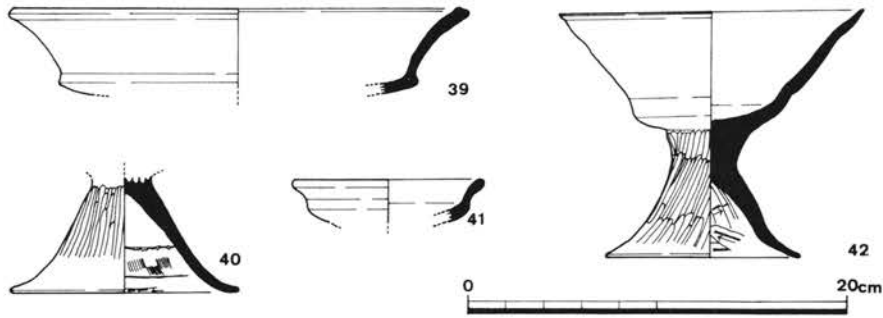
第274図 SK86127 出土遺物(1)

20：壺A，21：壺D，22：壺G，23：壺，24・25：甕C₁，26・27：甕C₂



第275図 SK86127 出土遺物(2)

28・29・32：甕C₂，30：甕D，31：甕E，33：甕F，34：小型丸底壺A，35：鉢A，
36：脚台部，37：鉢C，38：鉢Gb



第276図 SK86127 出土遺物(3)

39：高杯A，40：脚台部，41：器台B，42：高杯E

を施す。口縁部内外面は横ナデで、28のみ内面にハケを用いる。黒斑は、26が体部内面中央部、28が体部内面中央部と体部から底部にかけての外面の2か所、32が体部から底部にかけての内面と体部外面中央部の2か所に各々みられる。煤は、27の外全面、28の体部外面中央部に付着する。胎土は、28が密で、27・29が粗い。色調は、暗黄褐色が基調で、26・28が明褐色をおびる。32は明褐色で、外面下半部は暗褐色に近い。26は口径16.4cm、27は口径18.2cm、28は口径16.6cm・器高25.8cm、29は口径18.2cm、32は口径16.2cm・器高27.0cmを測る。

甕D(30) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデで調整する。内面の口縁部から体部にかけて黒斑がみられる。淡黄褐色を呈し、口径16.4cmを測る。

甕E(31) 体部外面には左下がりの幅広いタタキが施される。内面上半部は横ハケの上からナデを加える。口縁部外面はハケ、内面は横ナデで調整する。焼成はややあまく、暗赤褐色を呈する。口径19.0cmを測る。

甕F(33) 体部内面はヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデで調整する。口縁部外面に煤が付着する。胎土は非常に密で、暗黄褐色を呈する。口径16.2cmを測る。

小型丸底壺A(34) 口縁端部は外傾する面をなす。内外面とも横ナデで調整する。外面体部に黒斑がみられる。胎土は密だが、焼成は不良で、外面暗褐色、内面暗淡褐色を呈する。口径11.2cmを測る。

鉢A(35) 体部内面は不定方向のナデ、口縁部内外面は横ナデで調整する。胎土は非常に粗く、焼成も不良である。色調は、黄褐色を呈し、口径11.4cmを測る。

脚台部(36) 円錐状に広がる低い脚台で、台付鉢に伴うと考えられる。外面はヘラミガキ、内面には粗いハケがみられる。内面中央部に黒斑がみられる。赤褐色を呈し、脚裾部径は9.7cmを測る。

鉢C(37) 底部は欠損していて不明だが、不整形な粘土円板を貼り付けた可能性が高い。

外面は縦方向のナデ、内面はていねいな斜めハケを施す。焼成はややあまく、黄褐色を呈する。口径15.0cmを測る。

鉢Gb(38) 外面全面にハケ、内面体部・底部にハケ、口縁部に横ナデが加えられる。色調は黄褐色から淡茶褐色を呈し、口縁は楕円形をなし、長径18.8cm・短径18.2cm・器高10.1cmを測る。また、孔は楕円形で1.2cm×1.0cmを測る。

高杯A(39) 布留式併行期以前に盛行する形態であろう。杯部内外面は横ナデで調整される。焼成は不良で、口縁端部に黒斑がみられる。淡黄褐色を呈し、口径24.6cmを測る。

高杯E(42) 口縁端部は、自然に薄くおさまる。脚台部は、なだらかに円錐状に広がる。杯部内面は、ヘラケズリの後に横ナデ、外面も横ナデと考えられる。脚台部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリで調整する。外面の口縁部・杯底部・裾部の縦一線の上に黒斑がみられる。焼成はやや不良で、明淡褐色を呈する。口径16.2cm・器高12.8cmを測る。

器台B(41) 摩滅しているが、外面は、横ナデと考えられる。胎土は密で、暗淡褐色を呈する。口径10.2cmを測る。

脚台部(40) 器台に伴うものと考えられるが、高杯の可能性も残る。体部との接合部には円孔を貫通させない。円錐状に広がり、裾部でさらに開く。外面に縦方向のヘラミガキ、内面柱状部の一部にハケ、裾部にヘラケズリを施す。胎土は密で、明褐色及び淡褐色を呈する。裾部径は12.2cmを測る。

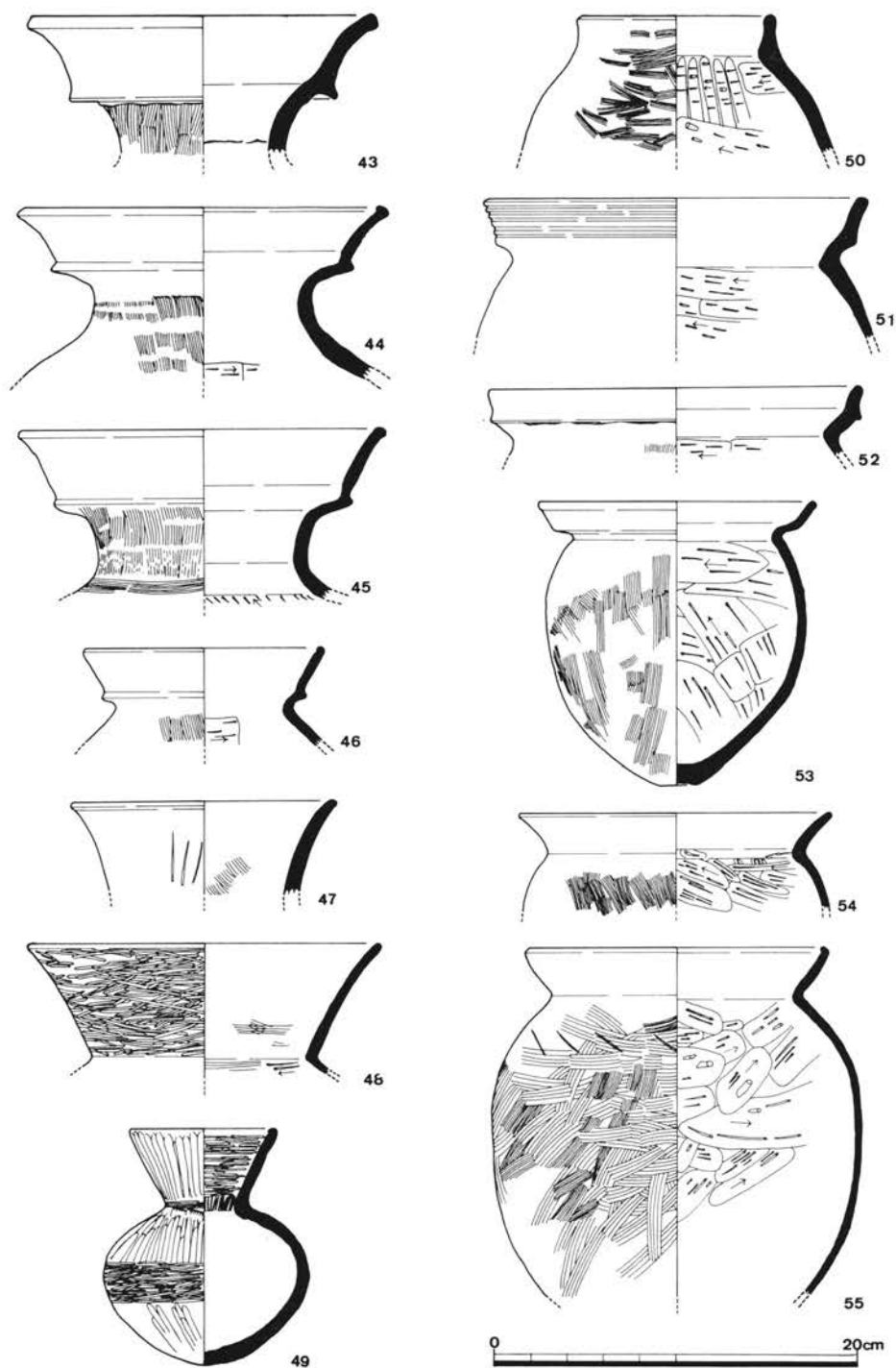
東側排水溝出土遺物(第277・278図) 調査の便宜上、設定した調査区東側の排水溝内から多量の土器が出土した。その多くはSK86126から出土したと考えられる。それ以外の古い様相の土器群は、自然流路に伴う落ち込み部から出土したと考えられる。

出土土器には、壺A・E・F・H・J、甕A・B・C₂・F、小型丸底壺A、鉢A・Ba・Bb・F・H、高杯B・D、器台Ba・F等がある。

壺A(43~45) 43の擬口縁部断面は、外下方に突出するシャープな三角形を呈する。44の口縁端部は、内面に断面三角形に肥厚する。頸部外面は、縦方向のハケを施し、45は、その上に横ナデを加える。44・45の体部にはヘラケズリがみられる。3点とも口縁部内外面は、横ナデで調整する。43は、擬口縁部の貼り付け痕や粘土紐接合痕を残し、調整は雑である。44は口縁部内面に黒斑を有する。胎土は、43・44が粗く、45が密である。43・44が淡褐色、45が淡黄褐色を呈する。口径は、43が19.0cm、44が20.4cm、45が20.4cmを測る。

壺E(46) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整し、口縁部内外面には横ナデを施す。胎土は密で、淡褐色を呈する。口径は13.2cmを測る。

壺F(47・48) 口縁端部は、自然に丸くおさまる。47は、口縁部内面にハケを施した後、



第277図 東側排水溝出土遺物(1)

43~45: 壺A, 46: 壺E, 47・48: 壺F, 49: 壺H, 50: 壺J, 51: 甕A, 52・53: 甕B, 54: 甕C₂, 55: 甕F

内外面に横ナデを加える。口縁部外面に鋭利なヘラ状工具による3条のヘラ記号が施される。胎土は密で、淡褐色を呈し、口径14.8cmを測る。48は、体部上方内面にヘラケズリと横ハケがみられる。口縁部外面はヘラミガキ、内面は一部横ハケが残る。口縁部外面には煤が付着し、内面には黒斑がみられ、焼成は不良である。暗褐色を呈し、口径19.6cmを測る。

壺H(49) 口縁端部は、粗雑に内面に肥厚する。外面底部は縦方向のヘラミガキ、体部中央部は横方向の細かいヘラミガキ、上半部はハケの上に縦方向のヘラミガキが施される。口縁部外面は縦方向の、内面は横方向のヘラミガキで調整される。体部外面中央部に円形の黒斑を有する。胎土はやや粗く、黄褐色を呈する。口径8.2cm・器高13.1cmを測る。

壺J(50) 外面は全面をハケで調整し、内面体部にはヘラケズリを施す。胎土は非常に粗く、焼成もややあまい。淡褐色を呈し、口径10.6cmを測る。

甕A(51) 口縁部外面には5条の擬凹線文を施す。内面体部はヘラケズリ、口縁部は横ナデで調整する。胎土は非常に粗く、淡褐色を呈するが、内面は焼成が悪く、一部灰色を呈する。口径21.0cmを測る。

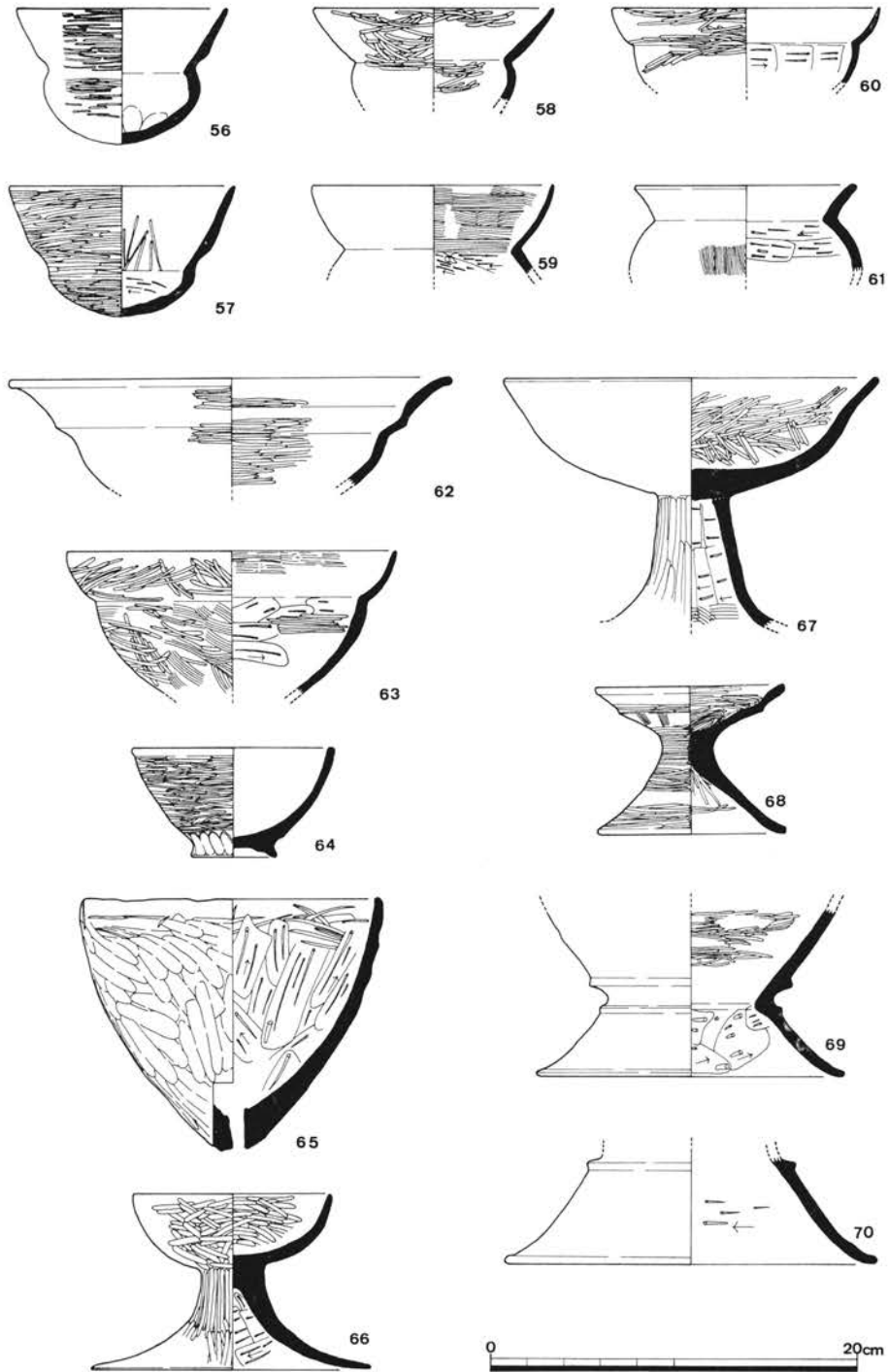
甕B(52・53) 53は、側面形態は小さい平底だが、その中央部をへこませている。52・53とも体部外面はハケ、内面にヘラケズリを施し、口縁部内外面は横ナデで調整する。52は、頸部外面に粘土接合痕を残す。53の体部外面には煤が付着する。52は淡褐色を呈し、口径20.6cmを測る。53は、胎土が非常に粗く、黄褐色及び明褐色を呈し、口径15.4cm・器高15.6cmを測る。

甕C₂(54) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデで調整する。外面体部に黒斑が、口縁部に煤の付着がみられる。淡黄褐色を呈し、口径17.6cmを測る。

甕F(55) 体部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整する。口縁部内外面に横ナデを加える。体部外面肩部に板状工具の端面を用いた右下がりの平行する細かい刺突文が巡る。色調は、明褐色から明黄褐色を呈し、口径16.8cmを測る。

小型丸底壺A(56~60) 57は、体部から口縁部への屈曲部が不明瞭である。また、60は、口縁部に比して大型の体部を有する。調整については、59が摩滅して不明確である以外、外面はヘラミガキを施す。内面体部は、57・59・60がヘラケズリ、58がヘラミガキ、口縁部は56が横ナデ、57・58がヘラミガキ、59が横ハケを用いる。黒斑は、60の外面にみられる。胎土は比較的密で、特に57が精良である。焼成は、56・58があまい。色調は、明黄褐色で、60がやや明褐色をおびる。56は口径11.6cm・器高7.3cm、57は口径12.4cm・器高7.0cm、58は口径13.2cm、59は口径13.4cm、60は口径14.8cmを測る。

鉢A(61) 体部外面にハケ、内面にヘラケズリ、口縁部内外面に横ナデを施す。外面体



第278図 東側排水溝出土遺物(2)

56~60: 小型丸底壺A, 61: 鉢A, 62: 鉢Ba, 63: 鉢Bb, 64: 鉢F, 65: 鉢H,
66: 高杯B, 67: 高杯D, 68: 器台Ba, 69・70: 器台F

部に黒斑が、口縁部に煤の付着がみられる。胎土は粗く、焼成もややあまい。淡褐色を呈し、口径12.2cmを測る。

鉢Ba(62) 摩滅していて不明確だが、内外面全面に横方向のヘラミガキがみられる。胎土は密で、赤褐色を呈する。口径24.4cmを測る。

鉢Bb(63) 外面は体部にハケを施した上に全面にヘラミガキ、内面は体部にヘラケズリを施した上にヘラミガキ、口縁部は横ハケが施される。外面に煤が付着する。淡乳褐色を呈し、口径18.2cmを測る。

鉢F(64) 底部にはひねり出したと考えられる低い小型器台を有する。体部外面はヘラミガキ、内面下半部は不定方向の、上半部は横方向のナデを施す。脚台部外面には指押さえの痕跡を残す。口縁部から体部外面に広範囲の黒斑を有する。淡黄褐色から淡明褐色を呈し、口径11.2cm・器高6.0cmを測る。

鉢H(65) 焼成前に外面より施した直径0.9cmの穿孔を有する。器壁は全体に厚く、特に底部は顕著である。外面全面に強い指によるナデがみられ、器面は平滑でない。内面はヘラケズリで調整され、口縁部内面にはヘラ状工具によるナデがみられる。外面上半部に黒斑がみられる。胎土は粗く、淡黄褐色を呈する。口径16.6cm・器高13.6cmを測る。

高杯B(66) 杯部内外面はヘラミガキ、脚台部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。外面口縁部から体部にかけて黒斑を有する。胎土は密で、赤褐色を呈する。口径11.0cm・器高9.6cmを測る。

高杯D(67) 脚台部は、ゆるやかに広がる柱状部から、裾部が大きく開くと考えられる。杯部内面はヘラミガキ調整、脚台部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施し、裾部内面には横ハケが加えられる。杯部内面に広範囲の薄い黒斑がみられる。胎土は粗く、暗黄褐色を呈する。口径20.6cmを測る。

器台Ba(68) 外面は体部にハケを施した上、全面に横方向の細かいヘラミガキをかける。内面口縁部は横方向に、体部・底部は楕円形にヘラミガキを施す。脚台部は横ナデと一部、ヘラミガキがみられる。胎土は密で、明褐色を呈し、口径10.4cm・器高8.1cmを測る。

器台F(69・70) 2点とも脚台部突帯の稜はほぼ水平で鋭さを欠く。69の受け部突帯の稜は、下方ぎみに比較的鋭く突出する。2点とも外反ぎみに開く脚台部の裾端部は、自然に丸くおさまる。69の受け部は、脚台部に比べて大きく外上方にまっすぐにのびる。ともに外面全面を横ナデ、脚台部内面をヘラケズリ調整する。69の受け部内面は、ヘラミガキで調整される。69の脚台部外面には煤が付着する。胎土は密で、淡黄褐色を呈する。脚裾部径は、69が17.0cm、70が20.4cmを測る。

自然流路に伴う落ち込み 弥生時代中期後葉から埋没をはじめ自然流路に伴う落ち込

みが古墳時代前期にも明瞭に残っており、61ラインから南西にかけて、砂の堆積が著しい。古墳時代前期に属する土器が少量出土しているが、図化するには至らなかった。

(2) 古墳時代後期

SH86123・SH86124 古墳時代後期の遺構として、竪穴式住居跡2基(SH86123・SH86203)を検出した。検出した竪穴式住居跡は、遺存状態が極めて悪く、わずかに残る床面と4個の柱穴及び竈の残欠を検出したにすぎない。竈の位置は、SH86123が南隅部、SH86124が東隅部である。床面に遺物はほとんど残っておらず、須恵器・土師器の細片が出土したにすぎない。唯一、この住居の時期を決定する遺物としてSH86123の柱穴から出土した須恵器の杯身がある。ほぼ完形で、6世紀後半のものである。

第3項 包含層出土遺物

古墳時代前期の遺構検出面の上層で、古墳時代前期の遺物包含層(暗褐色粘性砂質土)が堆積し、古墳時代前期の土器が出土している(第279~281図)。

出土土器には、壺A・E・G・L、甕A・B・C₁・E、小型丸底壺A・Ba・Bb、鉢A・Ba・Bb・C・Db・Ga・I・J、高杯C・D、器台Aa・Ba・Ca・Cb・Da・Db・F及びミニチュア土器等がある。

壺A(71) 口縁部外面には浅い16条程度の擬凹線文の上から、細かい横方向のヘラミガキを施す。内面は、粗い横ハケの上に横ナデを加える。焼成はややあまく、明褐色を呈し、口径21.6cmを測る。

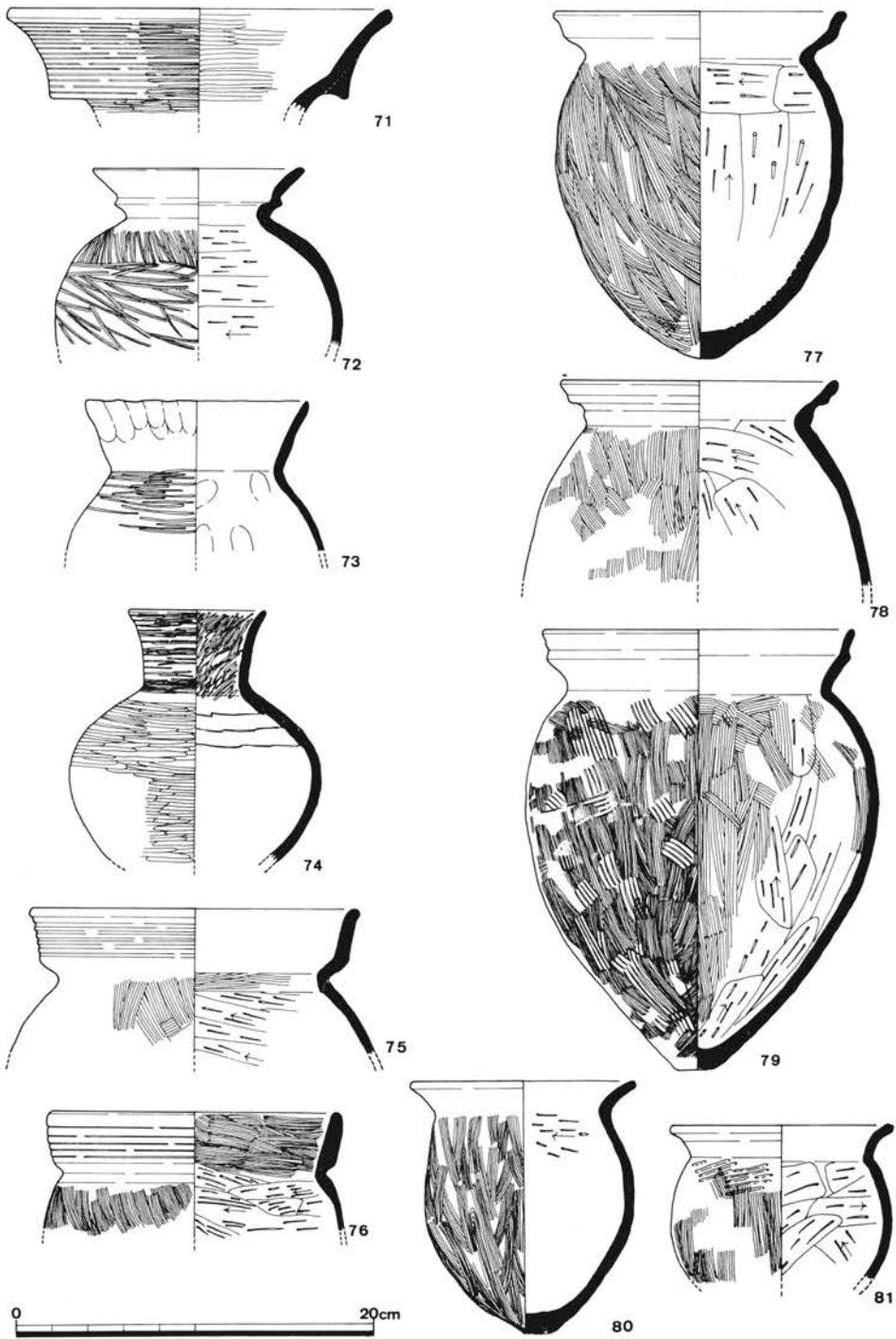
壺E(72) 体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリを行う。口縁部内外面は横ナデを施す。明褐色を呈し、口径12.0cmを測る。

壺G(73) 体部外面はヘラミガキ、内面には一部指頭圧痕を残す。口縁部外面は指でなでて調整するが、口縁端部はやや不整形となる。明褐色を呈し、口径12.6cmを測る。

壺L(74) 外面は、全面にいてねいな横方向のヘラミガキをかける。内面体部は、下半部の一部にナデがあるのみで、上半部は不調整である。口縁部内面は細かいヘラミガキを施す。淡褐色を呈し、口径7.8cmを測る。

甕A(75・76) 口縁部外面に5条の浅い擬凹線文を残す。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施すが、75は頸部に横ハケを行う。口縁部内面は、75が横ナデ、76がハケで調整する。76の体部と口縁部外面に部分的に黒斑を有する。75が淡黄褐色、76が淡橙色を呈し、口径は75が18.6cm、76が16.8cmを測る。

甕B(77~79) 79は、側面形態は小さい平底で、中央部をへこませている。78の底部は不明だが、長胴形を呈すると考えられる。調整は、体部外面が3点ともハケ、内面は77・



第279図 第7次調査B地区包含層出土遺物(1)

71：壺A，72：壺E，73：壺G，74：壺L，75・76：甕A，77～79：甕B，80：甕C₁，81：甕E

78がヘラケズリ，79がヘラケズリの上にハケを用いる。77の底部内面にはナデが加わる。口縁部内外面は横ナデを施す。黒斑は，79の体部内面下半部に円形にみられる。煤は，77・79の外全面，79の口縁部内面，78の体部外面の一部に付着する。胎土は，78が粗く，79が密である。色調は，77・78が黄褐色，79が淡褐色を呈し，底部は赤色となる。78の焼成はややあまい。77は，口縁部が楕円形をなし，短径15.0cm・長径16.4cm・器高19.4cmを測る。78は，口径15.6cmを測る。79は，口径17.6cm・器高24.6cmを測る。

甕C₁(80) 体部外面はハケ，内面はヘラケズリ，口縁部外面は横ナデで調整する。外面底部から体部にかけて黒斑がみられる。胎土は粗く，色調は淡黄褐色で，底部外面は赤色を呈する。口径12.4cm・器高14.3cmを測る。

甕E(81) 体部外面にはやや左下がりのタタキの上から，縦方向のハケを加える。内面は，ヘラケズリで調整する。口縁部内外面は，横ナデを施す。外面全面に薄く煤が付着する。胎土は粗く，赤褐色を呈する。口径12.6cmを測る。

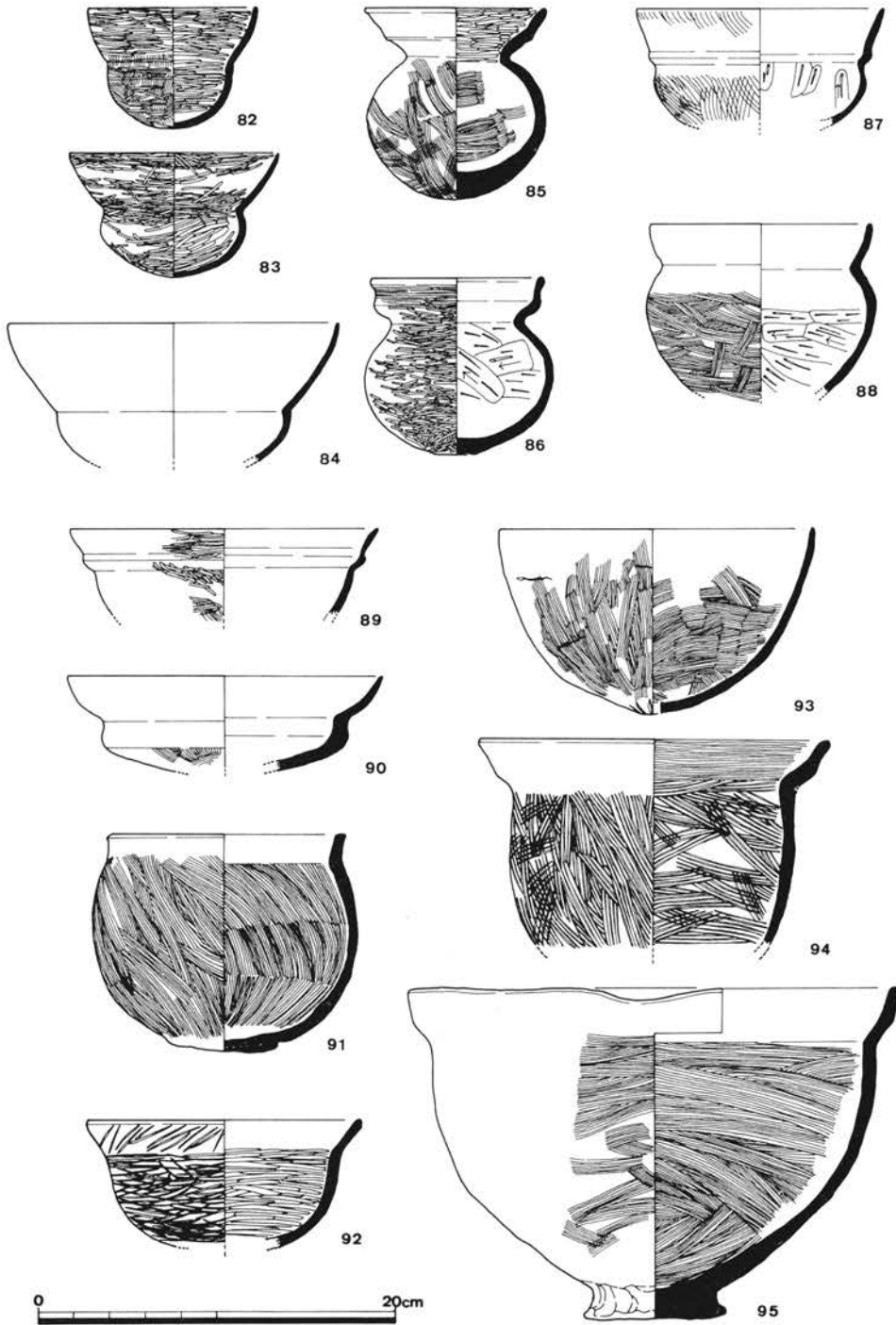
小型丸底壺A(82~84) 84は，大型品である。調整は，84が摩滅して不明である以外，内外面全体にヘラミガキを施す。82の体部・底部外面は，ヘラミガキの下にハケ調整がみられる。83の体部内面に炭化物が付着する。胎土は密で，特に82が精良である。色調は，82が明赤褐色，83が明褐色，84が淡褐色を呈する。82は口径9.6cm・器高6.8cm，83は口径11.9cm・器高7.0cm，84は口径18.6cmを測る。

小型丸底壺Ba(85) 底部の器壁は厚い。底部から体部内外面はハケ，口縁部外面は横ナデ，内面はヘラミガキで調整する。体部外面中央部に黒斑がみられる。色調は明褐色で，口径10.3cm・器高10.7cmを測る。

小型丸底壺Bb(86・87) 86は，平底ぎみの底部中央を切り取ったへこみ底から球形の体部をつくる。口縁部は，直立ぎみに外反する。一方，87は，扁球形の体部から不明瞭に屈曲して口縁部に続く。調整は，外面全面に86が横方向のヘラミガキ，87が斜め方向のハケを施し，2点とも内面体部にヘラケズリ，口縁部に横ナデを用いる。色調は，86が外面黄褐色，内面黄灰色，87が明褐色を呈する。86は口径9.8cm・器高9.8cm，87は口径14.0cmを測る。

鉢A(88) 体部外面はハケ，内面はヘラケズリを施す。口縁部から頸部・体部にかけての内外面は，横ナデで調整する。体部外面に薄く煤が付着する。胎土は密で，淡褐色を呈する。口径12.6cmを測る。

鉢Ba(89) 形態的には山陰系有段鉢に近い。外面全面にヘラミガキ，内面は磨滅しているが，ヘラミガキの可能性が高い。体部外面に黒斑がみられる。胎土は密で，明褐色を呈する。口径17.4cmを測る。



第280図 第7次調査B地区包含層出土遺物(2)

82~84: 小型丸底壺A, 85: 小型丸底壺Ba, 86・87: 小型丸底壺Bb, 88: 鉢A, 89: 鉢Ba, 90: 鉢Bb, 91: 鉢C, 92: 鉢Db, 93: 鉢Ga, 94: 鉢I, 95: 鉢J

鉢Bb(90) 外面体部にハケ、口縁部に横ナデを施す。焼成は不良で、淡褐色を呈する。口径17.8cmを測る。

鉢C(91) 不整形な粘土円板を貼り付けた平底の底部から球形の体部をつくる。口縁部の形態は、部分によって異なり、ゆるやかに外反して立ち上がる器壁の薄い部分と、明瞭に屈曲して外上方にのび、端面を水平にする器壁の厚い部分がある。体部内外面は、ていねいな斜めハケ、口縁部内外面は横ナデを施す。体部外面に黒斑がみられる。焼成はややあまく、暗黄褐色を呈し、口径13.4cm・器高12.1cmを測る。

鉢Dd(92) 底部は欠損するが、円錐状に広がる低い脚台をもつと考えられる。外面全面には横及び斜め方向のヘラミガキ、内面体部には横方向のヘラミガキ、口縁部には横ナデが施されている。外面に円形の黒斑がみられる。胎土は、非常に密で、淡黄褐色を呈し、口径15.6cmを測る。

鉢Ga(93) 口縁端部は、自然に薄くおさまる。底部には、焼成前に外面から施された直径1.0cmの穿孔を持つ。体部外面には縦ハケ、内面には横ハケを施す。底部外面は、ヘラでおさえた痕跡が残る。色調は黄褐色を呈し、口径は楕円形で、長径17.8cm・短径16.5cm・器高10.3cmを測る。

鉢I(94) 口縁部は、やや外反して複合口縁に近い形態をなす。口縁部外面に横ナデを用いる以外、内外面ともハケ調整を加える。外面全面に煤が付着する。色調は淡褐色を呈し、口径19.8cmを測る。

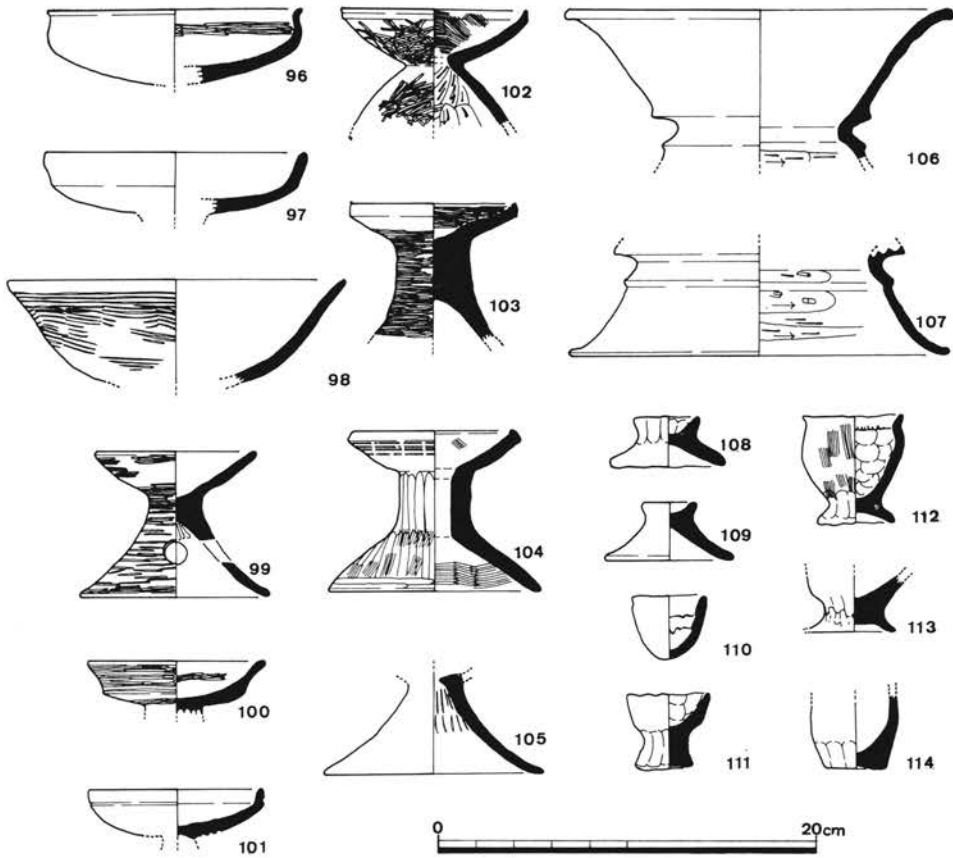
鉢J(95) 底部には、不整形な厚い粘土円板を貼り付けて脚台をつくる。体部内外面は、細かいハケ、口縁部内外面は横ナデ調整する。脚台部は、成形・調整とも雑で、外面は指押さえの痕跡が明瞭に残る。外面口縁部から体部の広範囲に黒斑がみられる。また、内面体部から底部には炭化物が付着する。胎土はやや粗く、色調は淡褐色を呈する。口径27.8cm・器高18.6cmを測る。

高杯C(96・97) 口縁部は、96がやや内上方に立ち上がり、端部で外反して薄くおさまる。97がやや外上方に立ち上がって自然に丸くおさまる。2点とも磨滅が著しいが、96の口縁部内面にはヘラミガキがみられる。色調は、明褐色を呈する。96の胎土は、非常に密である。口径は、96が13.6cm、97が14.0cmを測る。

高杯D(98) 杯部外面に横ハケ、内面に横ナデを施す。乳褐色で、口径18.0cmを測る。

器台Aa(99) 口縁端部は、自然に丸くおさまる。脚台部に2か所の透孔がみられる。外面全面に横方向の細かいヘラミガキを施す。内面は、磨滅して不明である。胎土は、比較的密で、淡黄褐色を呈する。口径8.7cm・器高6.7cmを測る。

器台Ba(100) 受け部外面と内面屈曲部に、細かいヘラミガキを施す。胎土は密で、明



第281図 第7次調査B地区包含層出土遺物(3)

96・97：高杯C，98：高杯D，99：器台Aa，100：器台Ba，101：器台Ca，102：器台Cb，
103：器台Da，104：器台Db，105：脚台部，106・107：器台F，108～114：ミニチュア土器

褐色を呈する。口径9.4cmを測る。

器台Ca(101) 受け部外面は、横ナデ調整する。胎土は粗く、暗黄褐色を呈する。口径9.3cmを測る。

器台Cb(102) 口縁端部は、尖りぎみに薄くおさまる。脚台部は、内湾するなだらかな円錐形を呈すると考えられる。外面全面にヘラミガキ、内面受け部にハケの後ヘラミガキ、脚台部にヘラケズリが施される。明褐色を呈し、口径10.0cmを測る。

器台Da(103) 外面は、横方向の細かいヘラミガキで、体部上半から口縁部に横ナデを施す。内面受け部もヘラミガキ調整する。胎土は密であるが、焼成はややあまく、明褐色を呈する。口径9.0cmを測る。

器台Db(104) 器壁は、全体に厚い。外面体部上半に横ハケを施し、脚台裾部にハケの後、脚台全面にヘラミガキをかける。内面体部及び裾部にはハケ調整を加える。裾部の外

面から内面にかけて薄い黒斑がみられる。淡褐色を呈し、口径8.6cm・器高8.4cmを測る。

脚台部(105) 器台の脚台部である。なだらかに円錐状に広がり、体部には円孔を貫通させて中空にする。内面にはヘラ状工具による器面の調整がみられるのみで、摩滅して詳細は不明である。胎土は非常に密で、明褐色を呈し、裾部径は11.7cmを測る。

器台F(106・107) 受け部突帯の稜は、106がほぼ水平で鋭さを欠き、107が下方ぎみに鋭く突出する。脚台部突帯の稜は、ほぼ水平にあまく小さく突出する。106の受け部は、外反しつつ大きく広がり、端部もそのまま外反して丸くおさまる。107の脚台部は、外反して開くが低い。端部は、自然に丸くおさまる。外面は両方とも横ナデし、106の受け部内面は横ナデ、2点とも脚台部はヘラケズリを行う。胎土は107がやや粗い。色調は、106が淡黄褐色、107が明黄褐色である。106の口径は20.5cm、107の脚裾部径は20.2cmを測る。

ミニチュア土器(108~114) 108・109が蓋形、110~114が鉢形の手捏ね土器である。108・109は、「ハ」字形の笠部に頂部のくぼんだつまみを付ける。108のつまみ部内外面には指頭圧痕が残る。2点とも淡褐色を呈し、108は、口径6.1cm・器高2.6cmを測る。109は口径6.7cm・器高2.1cmを測る。110は、丸底で深い半球形をなし、111は、浅い半球形の体部に大型の脚台を付ける。112は、深い半球形の体部に外反する口縁部が続き、底部には「ハ」字形の脚台を付ける。113は、「ハ」字形の脚台部のみ残存し、114は、上げ底ぎみの平底で深い体部をなす。調整は、110の内面に横ナデ、111・112の体部内面・脚台部外面に指頭圧痕、112の体部外面に縦ハケ、113の体部内外面にナデ、114の体部内面にナデ、外面に指頭圧痕がみられる。黒斑は、111の体部外面、113の体部内面に残る。胎土は、114が密である以外、全体的にやや粗い。色調は110の外面・112・114が淡黄褐色、110の内面・111が明褐色、113が暗褐色を呈する。110は口径4.0cm・器高3.4cm、111は口径4.4cm・器高4.0cm、112は口径5.4cm・器高5.6cmを測る。 (林 日佐子)

第4節 奈良時代

第1項 概要

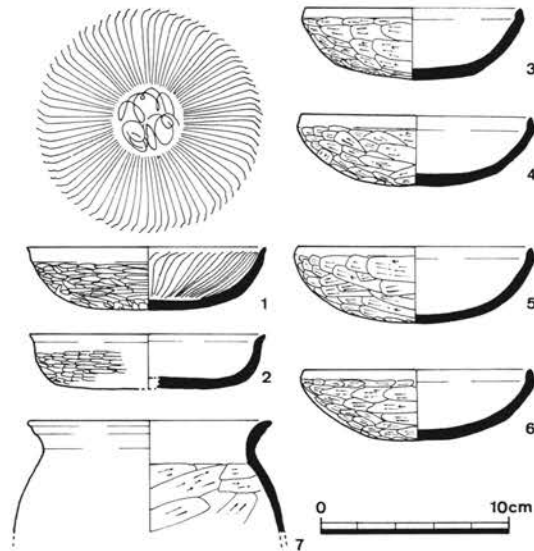
遺構を検出したのは、古墳時代の遺構検出面と同じ14層下層で、この時期の遺構自体はさらに上層から切り込む。ただし、奈良時代の包含層である第10層を除去して遺構精査した段階では検出できず、結果的に第14層下層で検出した。検出遺構には、飛鳥時代の性格不明遺構(SX86032)、奈良時代の竪穴式住居跡3基(SH86120・SH86121・SH86128)・柵列(SA86127)がある。また、包含層(第10層)内から多量の奈良時代の遺物が出土した。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

性格不明遺構(SX86032) (第282図) 60X区付近で検出した性格不明遺構である。杯・碗が6個体・甕1個体が重なるように出土した。杯・碗はすべて正置していた。遺構のラインの検出を試みたが、砂層内にあったため、遺構の輪郭を検出することはできなかった。

出土した遺物は、すべて土師器である。杯1・碗5・甕1が出土した。この内、杯・碗の5点は完形である。1は、内面に放射状の暗文と見込み部に図化したような暗文をもつ杯である。外面は口縁部付近をナデた後底部から口縁部付近までといねいにヘラミガキする。口縁端部は、やや外反気味に終わる。口径12.4cm・器高3.3cmを測り、胎土は極めて精良で明褐色を呈する。2は、内傾する口縁端面をもつ杯である。外面はといねいにヘラミガキを底部から約3分の2のところまで施す。胎土は精良で、色調は明褐色を呈する。

3～6は、いずれもほぼ同一の器形を呈する。口縁部をやや強くナデるため、口縁端部は口縁部から屈曲して上方に立ち上がる。ナデの後に施したヘラケズリは口縁端部下端まで及んでいる。胎土・色調はすべて等しく、0.5mm大の長石・雲母を含み淡褐色を呈する。3は、口径11.4cm・器高3.8cmを測る。4は、口径12.2cm・器高3.7cmを測る。5は、口径12.3cm・器高4.1cmを測る。6は、口径13.4cm・器高4.1cmを測る。7は、口径13.0cmを測る甕の口縁



第282図 SX86032 出土遺物

部である。外面は加熱のため、表面の剝離が著しく、調整は不明である。内面にはヘラケズリの痕跡を残す。

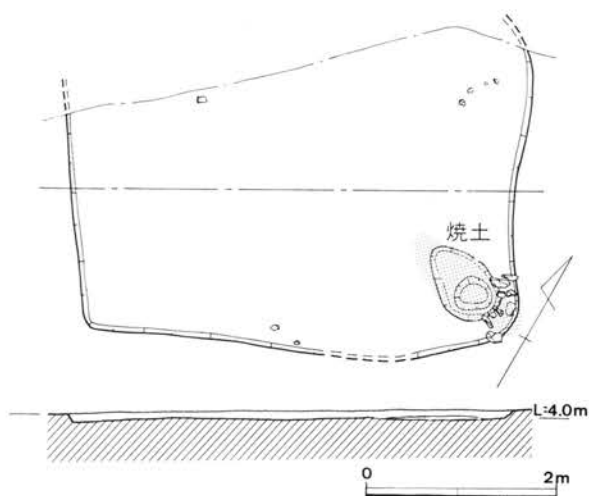
SH86120(第283・284図) 70B区付近で検出した方形竪穴式住居跡である。SH86128と切り合い関係にあり、後出する。検出したのは全体の約3分の2である。検出できた一辺は4.6mを測る。検出面から床までの深さは約10cmである。東隅部に石を用いて構築された造り付けの竈をもち、竈の前面には灰の堆積する浅い土坑が存在する。最終的に床面を除去して柱穴の検出作業を行ったが、検出するには至らなかった。埋土と床面及び竈内から比較的多くの遺物が出土している。特に、竈付近から多く出土している。

出土した遺物のうち、土師器の杯(8~14)・甕(15~19)・鍋(20・21)、須恵器の杯蓋(22・23)・杯A(24)・杯B(26・27)・皿(25)などを図化した。

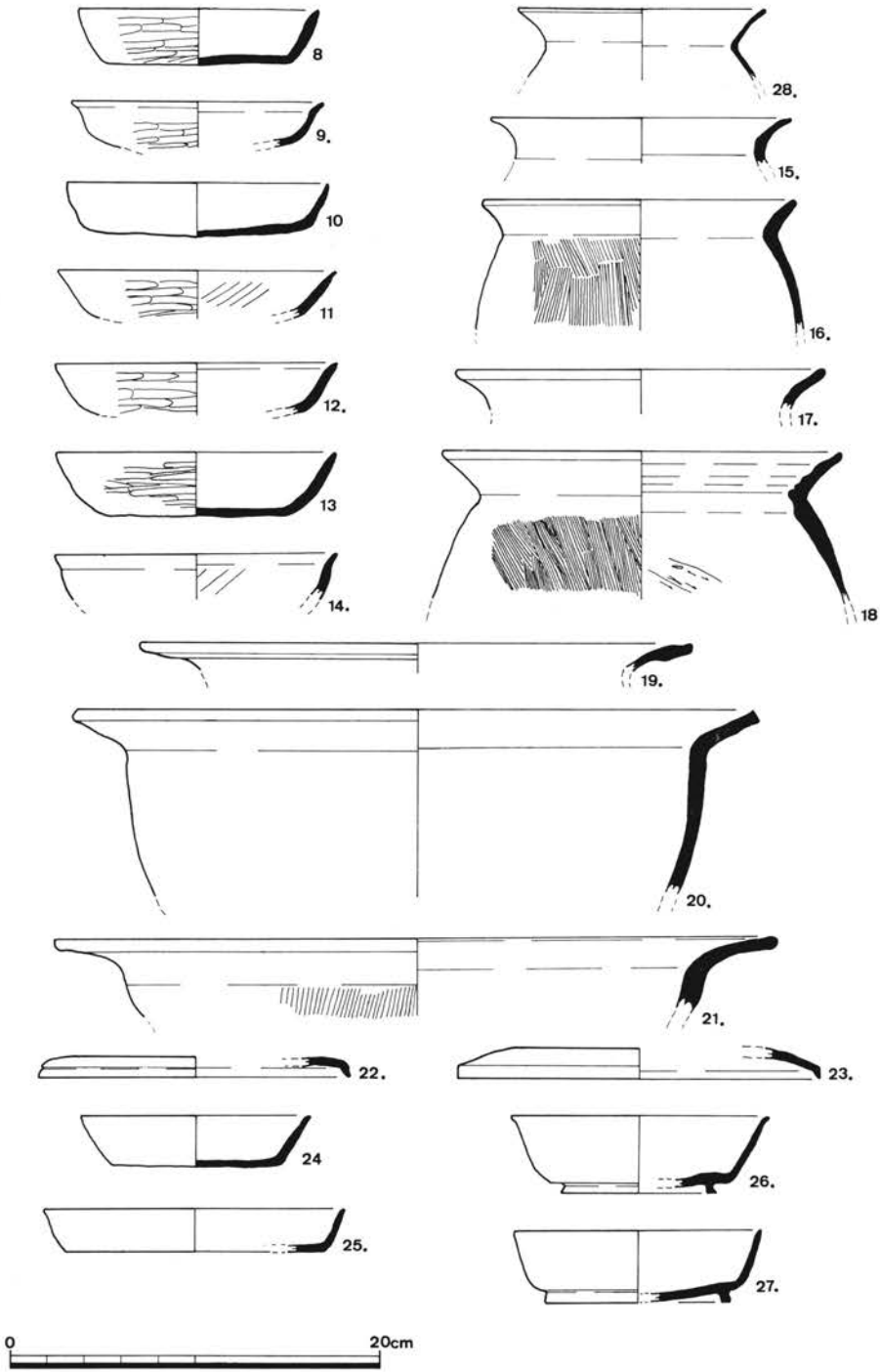
杯は、すべてナデを施した後、底部から口縁部にかけて外面を粗くヘラミガキする。8は、口径13.0cm・器高3.1cmを測り、底部に指頭痕を残す。内面に暗文が施された可能性がある。9は、口縁端部が外反する。口径13.6cm・器高2.5cm以上を測る。10は、口径14.2cm・器高2.9cmを測る。11は、口縁部内面に放射状の暗文をもち、口径15.2cmを測る。口縁端部がわずかに外反する。12は、内傾する口縁端面をもち、口径15.4cmを測る。口縁部外面のヘラミガキは、ヘラケズリの可能性がある。13は、口径15.2cm・器高2.5cmを測る。底部にはヘラケズリと指頭痕が観察できる。14は、口縁端部を外反させ、内面に放射状の暗文を施す。細片のため口径は図化したものより小さくなる可能性がある。

甕には口縁部内面に強いナデによる段をもつものと、もたないものがある。15~17は、段のないもの、もしくは消失しかかっているものである。15は、口径16.4cmを測る。16は、内面に全く段をもたず、口径17.0cmを測る。17は、口径20.0cmを測る。18は、内面に明瞭に段をもち、口径21.6cmを測る。19は、口縁部の傾きが大きく、頸部付近が薄い。甕もしくは鍋である。

鍋に深い器形をもつもの(20)と、浅い器形(21)をもつものが出土している。20は、口径37.0cmを測る深い器形をもち、内外面とも加熱のため表面の剝離が



第283図 SH86120 実測図



第284図 SH86120・SH86122 出土遺物

9～27：SH86120，28：SH86122，9・12・14・17・19・21～23・25～27：床面出土，16・20・28：竈内出土

著しい。21は、口縁部内面にわずかに段を有し、口径39.2cmを測る。

杯蓋には、22・23がある。22は、平坦な天井部をもち、口径17.0cmを測る。23は、低い笠形の天井部をもち、口径19.6cmを測る。ともに口縁端部は短く、下方に屈曲する。

杯Bには26・27がある。いずれも高台部が口縁部境よりやや内側に入り込む。26は、口縁端部が短く外反し、口径13.2cm・器高4.2cmを測る。口縁部がほぼ直立し、口径13.4cm・器高4.0cmを測る。図化しなかったが、椀状の杯部をもち口縁端部が水平方向に屈曲する第3章第7節の127に類似するものが床面上で出土している。

25は、口径15.8cm・器高2.4cmを測る皿である。

土器以外に花崗岩アブライト製の砥石が3点出土している。これらの砥石は弥生時代中期の砥石との顕著な差異は認められない。

SH86122(第284図) 66Z区付近で石材を利用した造り付けの竈を検出した。方形竪穴式住居跡に伴うものと考えられ、竪穴式住居跡と考えられる落ち込みが調査区外にのびていた。竪穴式住居跡に対する竈の位置はSH86120と同じく東隅部と考えられる。竈内から数個体の甕の破片が出土したが、いずれも細片で図化できたものは28のみである。

28の甕は、口縁部内面に段をもたず、口径13.4cmを測る。外面は加熱のため剝離が著しく、実測図より本来はやや厚かったと思われる。

SH86128 69B区付近で検出した方形竪穴式住居跡である。SH86120と切り合い関係にあり、先行する。検出できた一辺の長さは5.0mを測る。竈は検出できなかったが、SH86120の下層で焼土を検出しており、この焼土を竪穴式住居跡に伴うとしたら、竈は北隅部にあった可能性がある。竪穴式住居跡の遺存状態が悪く、検出面から床面までの深さは10cmに満たない。

埋土及び床面付近から少量の土師器が出土したが、図化するには至らなかった。

SA86031 SH86128の南辺に重なって存在する柵列状遺構である。等間隔に並ぶ5本の柱列からなる。柱間寸法は約1.7mである。舟戸南地区とは異なった寸法が用いられている可能性がある。図化できる遺物は出土しなかった。

第3項 包含層出土遺物

第255図の第10層である淡黄褐色砂性粘質土は、奈良時代～平安時代初頭の遺物を多量に含む包含層である。この包含層内から整理箱にして約30箱分の土器類が出土した。

(1) 土師器(第285・286図) 土師器には、杯蓋・椀・杯A・杯B・甕・甌・鍋がある。

杯蓋(29・30)は、ロクロ成形で造られたもので、須恵器の杯蓋と大きな差異は認められない。29・30ともに口縁部が緩やかに屈曲して、口縁端部が下方に短く屈曲する。

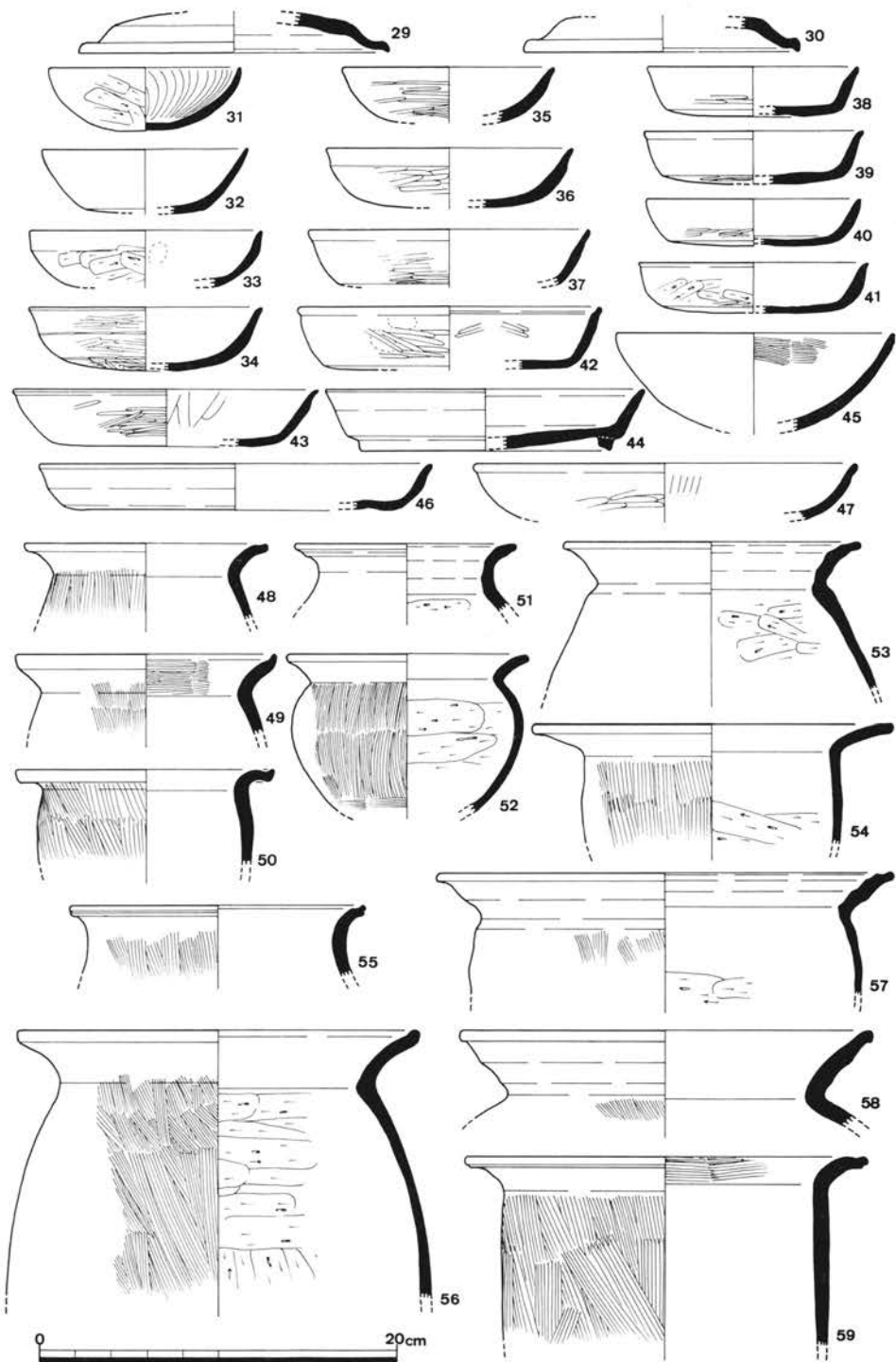
腕には外面をヘラケズリし、内面に放射状の暗文を施すもの(31)がある。口径10.7cm・器高4.5cmを測る。また、口径15.2cm・器高5.4cmを測る大型のもの(45)も出土している。

杯(32~43)は、大きく第1類と第2類に分類することが可能である。第1類は腕に近い形を呈する。33~36が相当する。33は、第1類のなかでは他と異なり、内面と口縁部をナデた後、外面を底部から口縁部付近にかけてヘラケズリする。口径12.8cmを測る。34~36は、底部から口縁部にかけてヘラミガキを行い、底部に指頭痕を残す。34は、口径13.0cm・器高3.5cmを測る。35は、口径11.6cmを測る。36は、口径13.6cm・器高3.3cmを測る。第2類は、器高の小さい皿に近い形態をもち、口径の小さなものと大きなものがある。器高指数は0.19~0.23を測る。37~43が相当する。38~41は、口径が小さく、口縁部のナデを残す範囲が広いが、ヘラミガキは器高の3分の1程度にまでしか及ばない。底部を粗くヘラミガキするものの指頭痕を残す。40を除いて口縁端部を短く外反させる。38は、口径11.6cm・器高2.7cmを測る。39は、口径12.2cm・器高2.8cmを測る。40は、口径1.6cm・器高2.6cmを測る。41は、口径12.8cm・器高2.7cmを測る。口径の大きなものとして37・42・43がある。いずれも底部から口縁部付近にかけてヘラミガキを行う。37は、口径15.6cmを測る。42は、内傾する口縁端面をもち、口径16.8cm・器高3.4cmを測る。43も、内傾する口縁端面をもち、口縁部内面には暗文がある。口径17.0cm・器高3.2cmを測る。他に須恵器の杯Bの形態をもち、丹塗りのもの(44)がある。

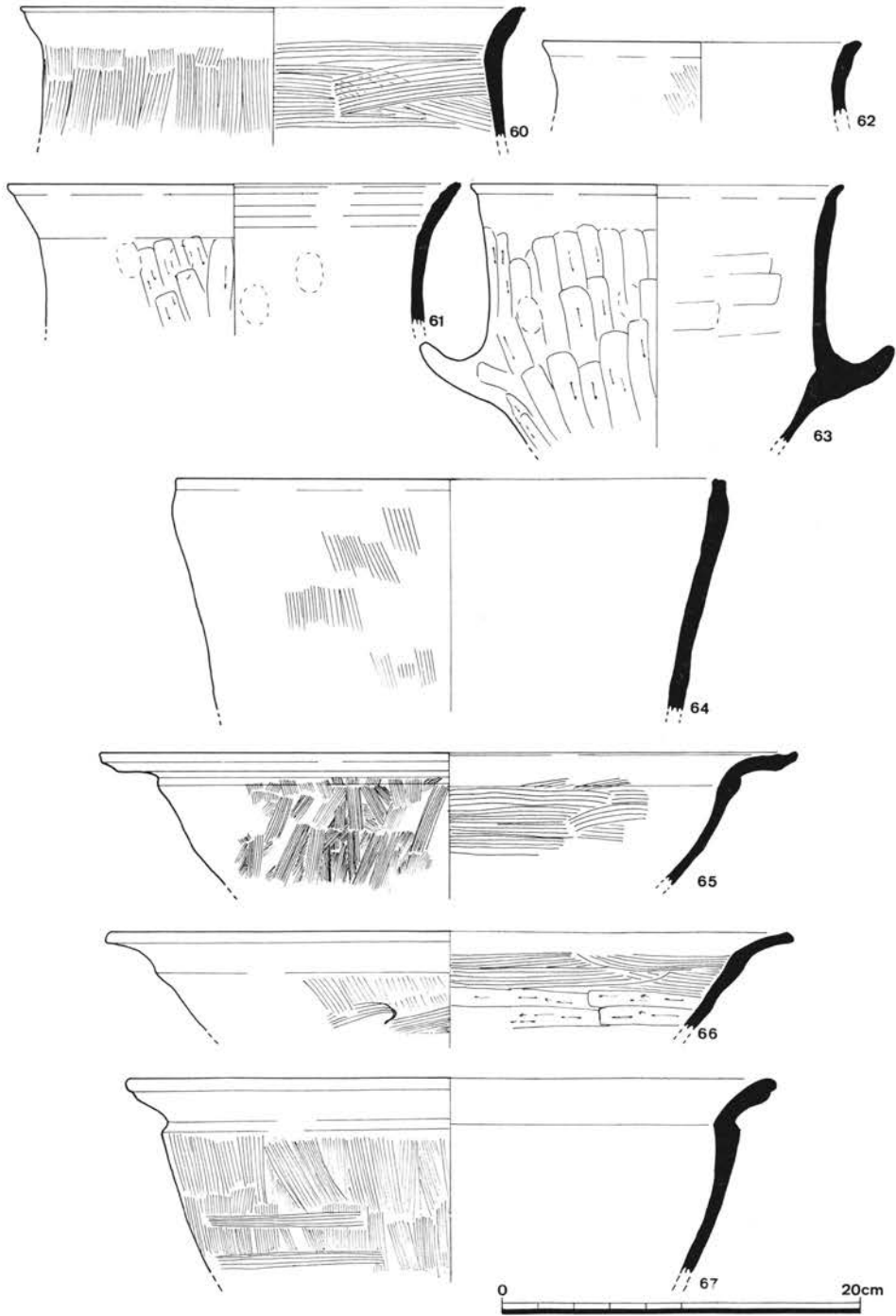
皿は、外面を底部から口縁部にかけてヘラミガキする。46は、口径22.0cm・器高2.5cmを測る。47は、口径21.2cm・器高約3.2cmを測り、内面に放射状の暗文をもつ。

甕には口径15cm前後を測るものと、口径23cm前後を測るものがある。48~55は、小口径である。51・53は、口縁部内面に強いナデによる段をもつ。内面の頸部下半のヘラケズリが著しい。51は、口径12.2cmを、53は、口径16.2cmを測る。口縁部内面に段をもたないものの内、52は、球形の体部をもつ。口径13.4cmを測る。48~50・55は、外面に粗いハケを施すもので、口縁端部を上方につまみあげる特徴を有する。口径の大きなものには、口縁部に段をもつもの(57・58)と、段をもたないもの(56・59)がある。57は口縁部内面に、58は口縁部外面にそれぞれ段を有する。56は、頸部以下の内面にヘラケズリを明瞭に残し、59は、口縁部が水平方向に開き長胴を有する。

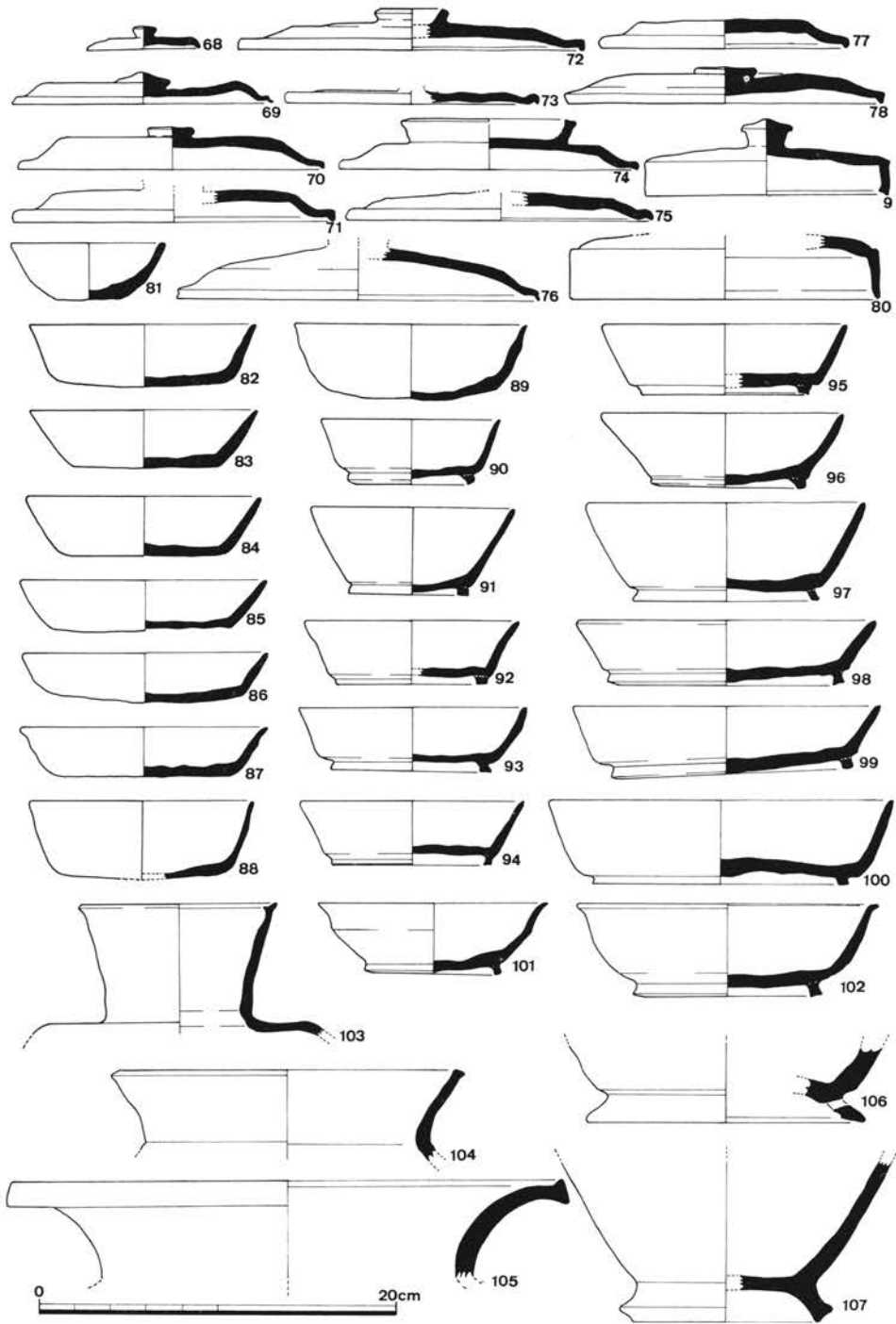
口縁部がほぼ直立し、甗と考えられるものに60~64がある。甗は、舟戸南地区ではほとんど出土せず、それに対してこの地区では比較的顕著に存在する。口縁部下半の外面をハケで調整するものに60・62がある。61は、外傾する口縁部内面に段を有し、頸部以下の外面をヘラケズリする。63は、その器形の様相がほぼわかるものである。口縁端部が短く外反し、体部内外面をヘラケズリし、一對の把手をもつ。64は、直立する口縁部をもち、口



第285図 第7次調査B地区奈良時代包含層出土遺物1(土師器1)



第286図 第7次調査B地区奈良時代包含層出土遺物2(土師器2)



第287図 第7次調査B地区奈良時代包含層出土遺物3(須恵器)

径約30cmを測る大型のものである。内面には暗褐色を呈する塗料が厚くていねいに塗られている。器種は不明である。

出土した鍋の個体数は多く、おおまかに65～67の3類に分類することが可能である。なお、鍋の口径は規格性が高く、口径36～40cmに納まる。65に代表されるものは、口縁部に強いナデによる段をもち、内面に段をもつものと外面に段をもつものがある。浅い器形をもつ。66に代表されるものは口縁部に段をもたず、浅い器形を呈する。67に代表されるものは、深い器形を呈する。口縁部に段をもたない。

(2) 須恵器(第287図) 出土した須恵器には、壺蓋(68・79・80)、杯蓋(69～78)、杯A(81～89)、杯B(90～102)、壺(103)、甕(104・105)等がある。なお、包含層から出土した土器のうち、土師器に比べて須恵器の量はやや多い。

壺蓋には口径6.4cmを測り杯蓋に近い形態をもつもの(68)と、扁平な天井部に直角に折れ曲る口縁部が付くもの(79・80)がある。

杯蓋は、平らな天井部に口縁部が屈曲して続き、口縁端部が短く下方に屈曲するものが多く、笠形の天井部をもつものは少ない。つまみは、扁平な擬宝珠つまみをもつものが多く、少量ながら輪状のつまみをもつもの(72・74)がある。また、つまみをもたないもの(77)も存在する。

杯Aは、大きく3類に分類することが可能である。81は、口径8.4cmを測る小型のものである。82～87は、器高が小さく口縁部の外傾度が大きく、器高指数が0.21～0.27を測る。口径12.8cm前後を測るもの(82～84)と、13.7cm前後を測るもの(85～87)がある。88・89は口縁部の外傾度が小さく、器高が大きい。器高指数0.35を測る。杯Bは大きく6類に分類することが可能である。90は、口径10.0cmを測る小型のものである。92～94・95・96は、器高が小さくて口縁部の外傾度が大きく、器高指数0.27～0.31を測る。口径は12.8cm前後を測るもの(92～94)、口径13.6cmを測るもの(95・96)がある。98・99も口縁部の外傾度が大きく、器高指数0.21を測り、口径17cm前後を測る。91は、口径が小さく(11.4cm)、器高が大きい(4.7cm)。97は、口径(15.8cm)・器高(5.5cm)ともに大きく、器高指数0.35を測る。100は、口縁部の外傾度が小さく、口径19.2cm・器高4.7cmを測る。101は、口縁部に稜をもつもの(杯B₂)である。102は、内湾気味に立ち上がる口縁部の端部が短く水平方向に屈曲する。

壺には肩の大きく張るもの(103)がある。

甕には、口が広く口縁部の短いもの(104)と、大きく外反する口縁部をもつもの(105)がある。

(肥後 弘幸)

第5節 鎌倉時代

第1項 概要

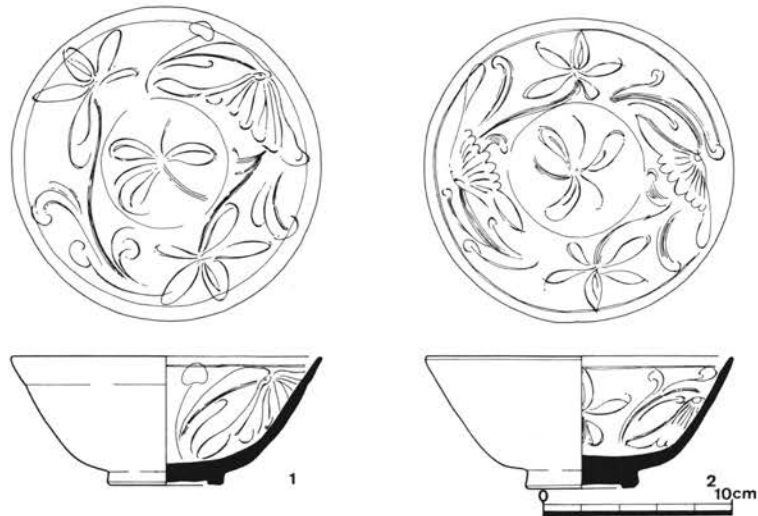
舟戸南地区と同様の包含層(第255図第6層)が存在し、この層の下層から切り込む遺構群がわずかだが存在する。これらの遺構群の中に中世墓が存在した。

第2項 中世墓の概要

調査区内には、3基の墓壇が存在したと思われる。第271図のSK86025は、平面的に確認し得た唯一のもので、長さ3.5m・幅1.1mを測る不定形な楕円を呈する。墓壇内は粘土混じりの砂が堆積しており、木棺痕跡及び遺物等は出土していない。これと同様の遺構を奈良時代の包含層の上面で検出しており、検出当初、近世以降の遺構と速断して調査を行わなかった。遺物の少ない第13層を重機で除去していた際に、ほぼこの位置から青磁碗2点(第288図)が完形で出土した。急遽、遺構検出作業を行ったが、すでに青磁碗も本来の位置にはなく、墓壇の輪郭等も検出できなかった。出土遺物は青磁碗2点のみであり、木棺に伴う木質等も出土していない。なお、ほぼ墓壇と考えられる土坑が北西壁断面に露出している(第7層)。壁面精査時に検出したが、断面には木棺痕跡は確認できなかった。

出土した青磁碗は、口縁部がわずかに欠損しているものの完形である。被葬者が生前使用したものと思われ、内面がわずかに痛んでいる。2個体ともほぼ同一の劃花蓮華文を内面にもつ龍泉

窯産のものである。1が、口径16.5cm・器高7.0cm・高台径6.0cmを測り、2が、口径16.2cm・器高7.2cm・高台径5.8cmを測る。12世紀末～13世紀前半に製作年代が求められる。



第288図 中世墓出土龍泉窯青磁碗

(肥後弘幸)

第6節 江戸時代(第5次調査)

第1項 概要

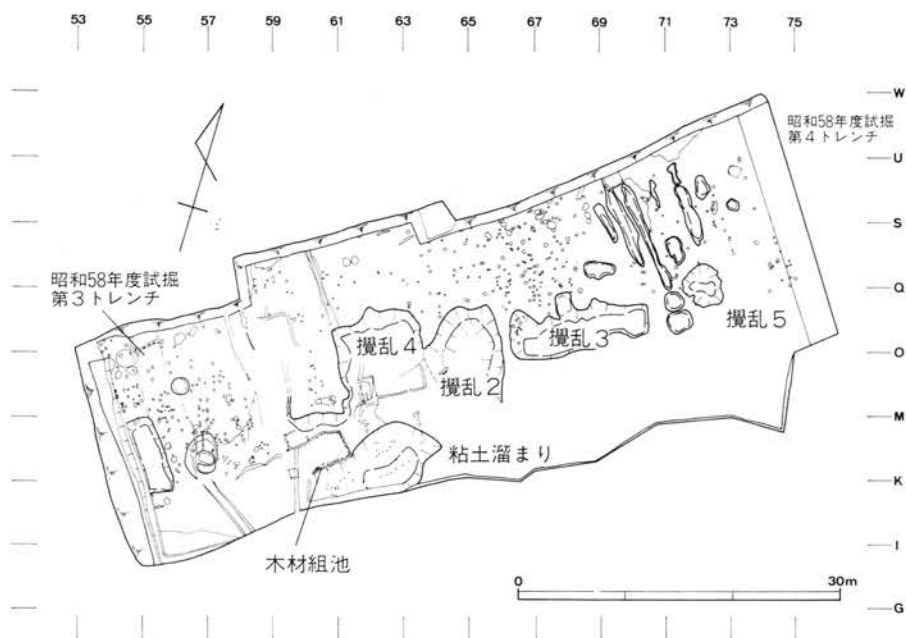
この節では、第5次調査の成果について、近世の遺物を中心に報告する。第5次調査では、上層で近世の遺構群と多量の遺物を検出した。下層では、弥生時代から奈良時代の遺構群及び遺物を検出した。

第2項 検出遺構

淡褐色砂上面では、全面にわたり、多数の柱穴・土坑・溝状遺構や井戸・木枠組み池等が検出できた(第289図・図版第43-1・2)。この淡褐色砂層は、中世～平安時代の包含層である。

土坑(攪乱と表示)は、径3.5～8.0m・深さ0.3～0.7mで、埋土の粘土中に磁器片・瓦片・漆塗りの椀等の木製品・板材・植物質などが挟まっていた。生活廃棄物を埋めたと想定される。

59～63-K・L地区では、木枠組み池とその排水が川岸に作った粘土だまりを検出している。木枠組み池は5m×3mで、竹筒による排水施設を設けている。共同の炊事・洗濯場と推定できる(図版第44-1)。また、粘土だまりからは多くの近世陶磁器片が出土した。



第289図 淡褐色砂上面検出遺構平面図

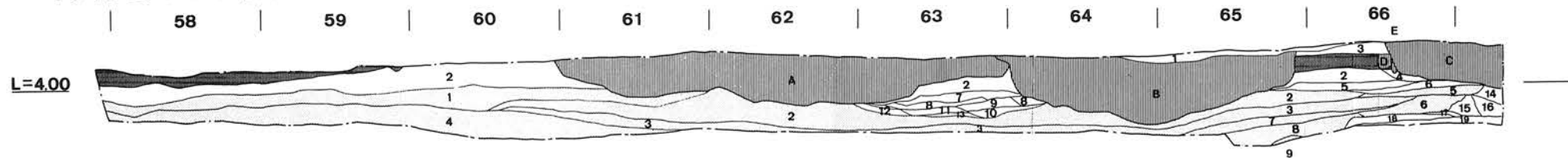
溝状遺構は、調査地の北部で東西方向に長さ12.6m・幅0.7~1.3m・深さ0.3mで数条を検出した。その形状から、屋敷地内の簡単な畑作に伴うものとする。柱穴と判断される小ピットは、調査地のほぼ全域で検出できたが、この検出面まで重機で一気に掘り下げたため、上部を削平してしまい、建物に結びつかない。柱穴・溝状遺構からは磁器片の出土するものがあること、中世遺物の出土が皆無であることから、これらの遺構は、すべて近世一特に18世紀後半以降19世紀半ばのものとする。実際、この舟戸地区には、明治40年^(注2)の洪水時には36戸の民家で集落を形成していた。この集落につながっていく村落遺構と判断できる。



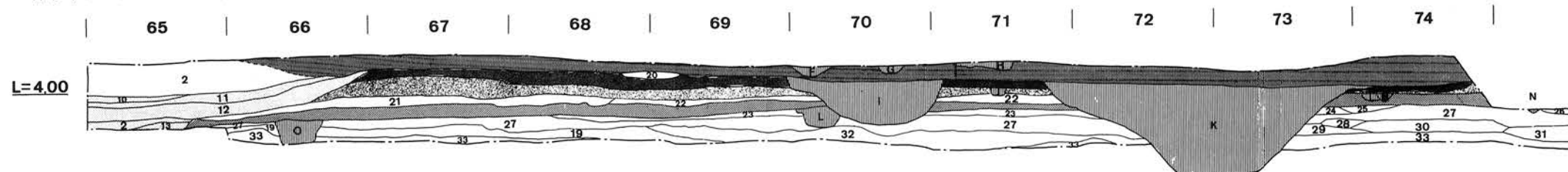
第290図 暗茶褐色砂質土上面検出遺構平面図

由良川旧河岸は、現由良川に平行して検出した。調査地幅のほぼ半分にわたる東西の傾斜地である。この傾斜地上の堆積土は、①河道内堆積と推定する砂及び粘質砂、②整地層と判断される土質層と大きく分けられる。①は、砂・粘質砂が細かく層をなして堆積しており、時々によって流れが変わる由良川の河底で堆積した状況を示す。②の整地層は、基本的に同一の層であり、わずかに土質の差が指摘できる程度である。②の

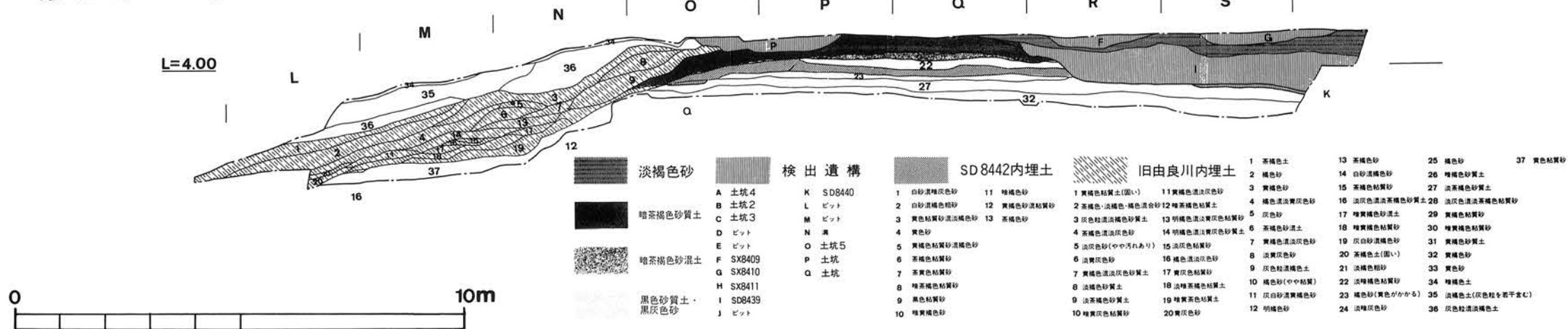
0ラインセクション土層図



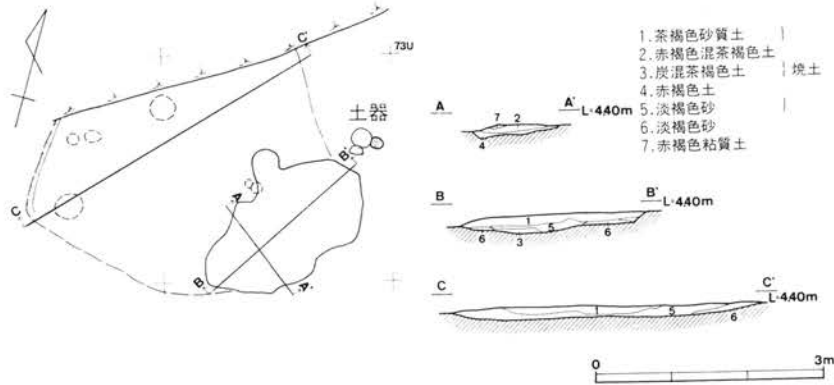
Rラインセクション土層図



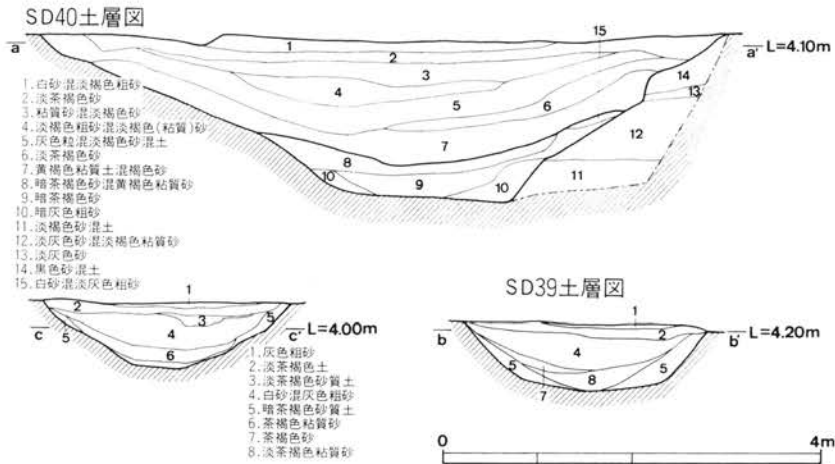
70ラインセクション土層図



第291図 調査地土層図



第292図 SX8441 実測図



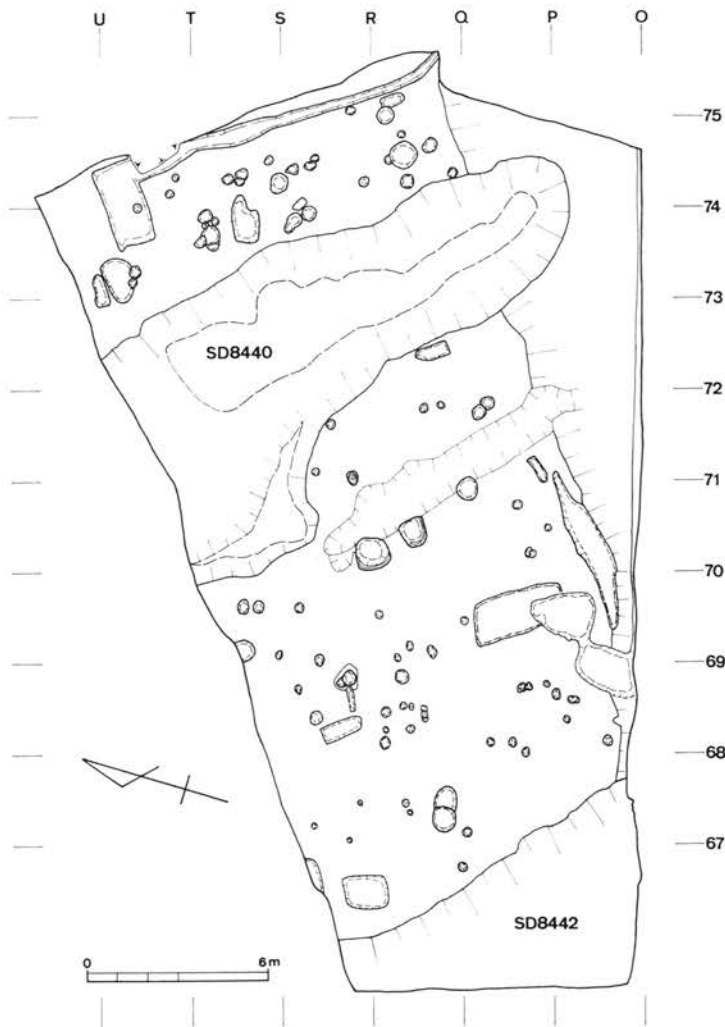
第293図 SD8439・40 土層図

整地層は、重機でその大半を除去したが、淡褐色砂上面と同レベルの整地層中に近世のピットが認められ、本来は現川岸付近まで遺構が広がっていたと考えられる。住空間の拡大を図った造成と考える。この整地層の出土遺物から、中世頃までの河道と推定される。また、河川内堆積の土層に黒色砂質土層(後述の弥生時代中期の生活面)に対応する層が認められたので、少なくとも弥生時代中期以降の河道と考えられる。

暗茶褐色砂質土上面では、SD39, SD40, SX41, SD42を検出した(第290・292図)。

SX41は、SD40の埋土上面で検出した3m×4.5mの焼土の広がり、特に1.3m×2.5mがよく焼けていた。この傍らで、土師器甕が据えられた状態で検出された(図版第45-2)。また、SX41の周囲及びこの焼土中より土器片の出土をみた。これらの須恵器はⅣ-2・3型式にあたり、実年代が8世紀半ば頃と考えるが、その性格は不明である。

SD39とSD40は一部重複し、切り合い関係からSD40がSD39に先行する。SD39の検出



第294図 黒色砂質土下面検出遺構平面図

長は15.2m, 幅0.7
 ~3.4m, 深さ0.2
 ~0.7mで東下す
 る傾斜を持つ。埋
 土の最下層中から
 弥生時代中期の土
 器が出土している
 が, 検出層位・切
 り合い関係の検討
 により, 溝の存続
 時期の一部をも示
 すものではない。
 検出層位から判断
 すると, 奈良時代
 頃の遺構である。

SD40は, 検出
 長16.5m・幅4.0
 ~9.0m・深さ0.3
 ~1.8mの大溝で
 ある。検出長は短
 いが, この範囲内
 での傾斜は西流す
 る。遺物は最下層

付近で集中して出土し, 多くの弥生時代中期の土器とともに, 少量ながら弥生時代前期・縄文時代後期の土器が含まれている。また, 最下層で管玉・小玉各1点が出土した。土器は, 1個体にまとまるものがないことから, 意図的に廃棄されたものではなく, 流入物と考える。また, 第293図7の層から奈良時代の土師器が出土し, この頃に再掘削がなされたとわかった。埋没年代はSX41の年代観から8世紀半ば頃である。

SD42は, 67ライン近辺で肩部を検出し, 古式土師器片が多く出土した。Oラインに沿ってサブ・トレンチを設定し, 対応する南側の肩部と底面の検出に努めた。しかし, 南側の肩部は, この調査地内では検出できなかった。サブ・トレンチ内を約1.5m掘り下げた時点で, 湧水による壁の崩落が著しくなり, 底面の確認はできなかった。埋土は, 褐色系

の砂層で、北半の遺構面のベースである粘質土系とは明らかに異なることから、河川跡と判断できる。砂層中からの遺物の出土は、肩部の検出時を除くと少なかった。また、幅が45mを超える規模をもつことから、かなりの流量を持つものと想定する。

その他に土坑やピットを検出したが、掘立柱建物などに結びつくものはない。

黒色砂質土下面で検出した遺構は、弥生時代中期頃のものである(第294図・図版第45-1)。ここでは、当初のSD40が掘削されている面であるが、奈良時代の再掘削によりその形状が変更を受けていると判断される。また、SD42の埋土における弥生時代中期の層は確認できなかったが、黒色砂質土に対応する土層の堆積が認められた。このことと検出した層位から、SD42の自然河川は、少なくとも弥生時代中期～奈良時代頃まで存続していたと考えられる。奈良時代中頃にこの地域で大地震があったことを裏付ける痕跡(噴砂)が舟戸南地区で検出されている。ほぼ同じ時期にSD42(由良川分水)が急激に埋まり、陸化している。大地震により、SD42の陸化を含めて、周辺の地形が大きく変動した可能性が指摘できる。

その他、溝や土坑・ピットを検出したが、掘立柱建物に復原されるものはなく、また、竪穴式住居跡等も検出できなかった。

B区1～3トレンチでは、それぞれで、由良川の旧川岸の傾斜面と弥生～近世に至る土器片を検出したに留まった。

第3項 出土遺物

この調査地では、縄文時代以降の各時代にわたる土器を中心とした遺物が出土している。最も多く出土したのは、弥生時代中期の土器で、ついで近世の陶磁器類である。ここでは、SX41の奈良時代の土器と中世以降の土器を中心にまとめる。

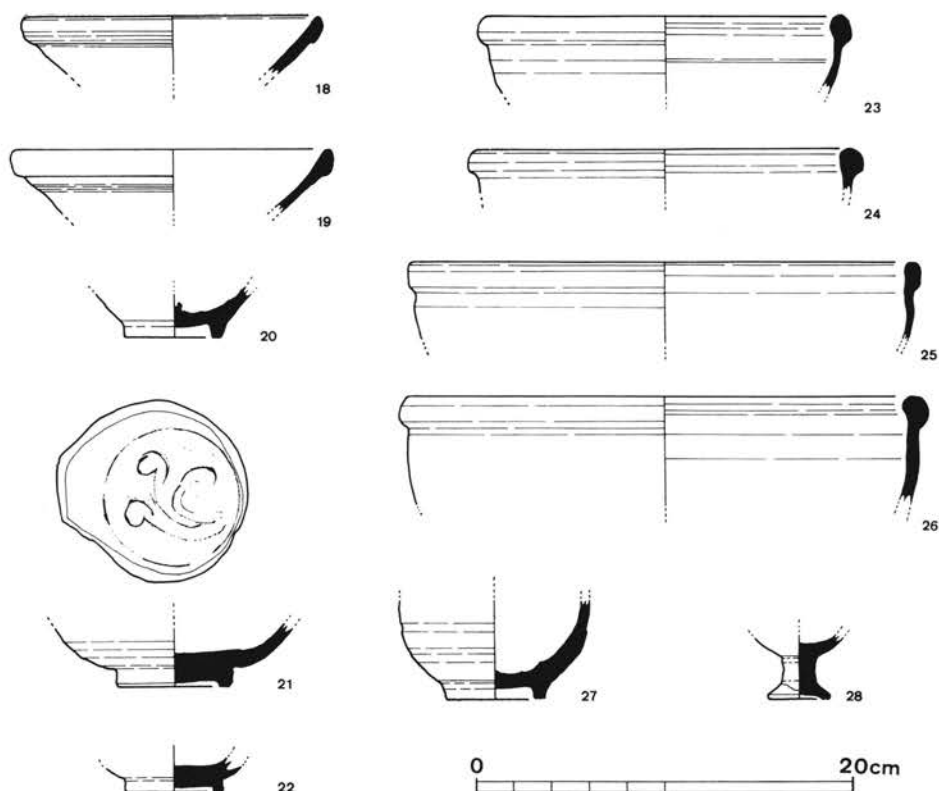
第295図に掲げる土器は、主としてSX41とその周辺の淡褐色砂層で出土した奈良時代の土師器・須恵器である。15は、SD40の黄褐色粘質土混褐色砂層より出土しており、SD40の再掘削を示す資料といえよう。また、2・4・7～9・11・13～17は、SX41及びその周辺から出土した。このうち、13・17はSX41に接して検出した土器である。これらは、SX41の年代とともにSD40の埋没年代を示すものである。概ね8世紀中頃の時代区分が与えられよう。

中世の遺物は、土師器・須恵器・中国製陶磁器・国内産陶磁器等が出土しているが、その量は少ない。しかも、近世攪乱土坑や整地層からの出土が多い。

第296図は、中国製陶磁器の実測図である。21・22は、龍泉窯系の青磁で、18～20・22～28は白磁である。また、瓦器としては皿が出土している。他に丹波焼きのすり鉢(第302図



第295図 第5次調査出土遺物(1)



第296図 第5次調査出土遺物(2)

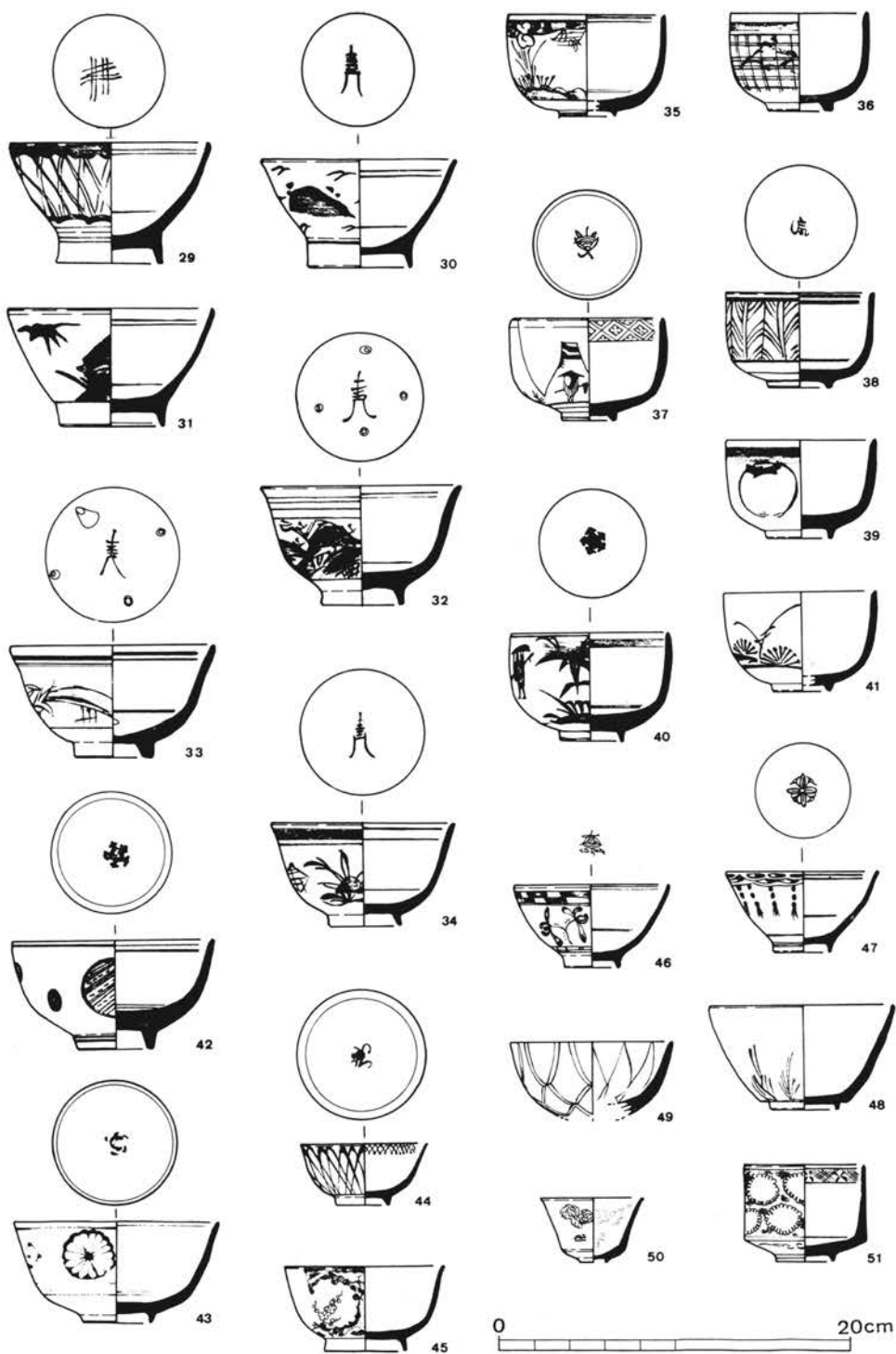
102)や魚住系の須恵器すり鉢が出土している。魚住系のもは、口縁端部が上方に突出し断面三角形を呈する。これらの土器の年代は13~14世紀代と考えられる。

第298図52・53は瀬戸・美濃系の皿で、概ね16世紀代のものであるが、この時期も、他にすり鉢がある程度で、数量的に多くない。

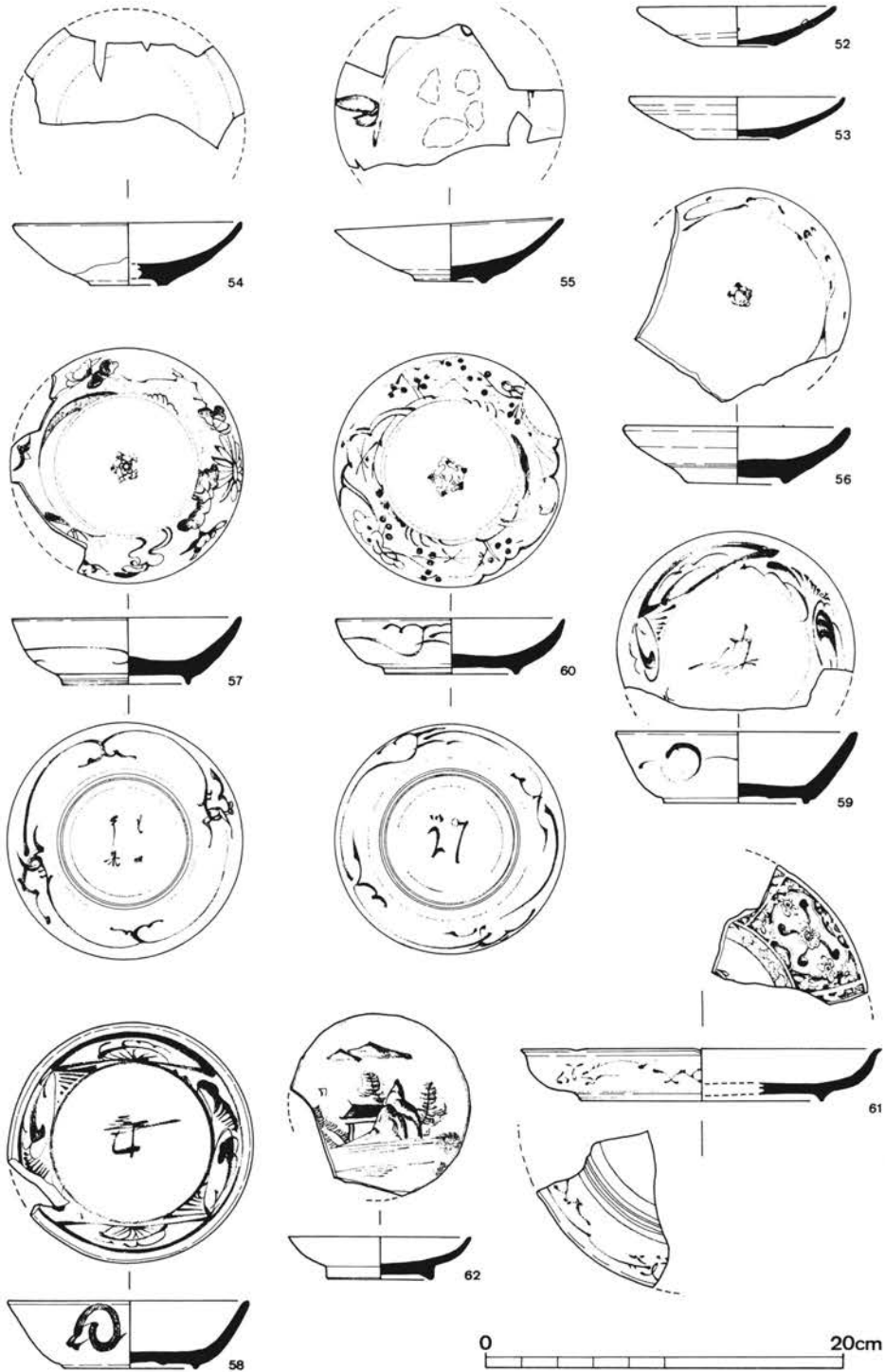
17世紀代の土器は、唐津系の皿が出土している。55は砂目痕が内面に付着しており、54は胎土目の痕が認められる。唐津系の土器としては、他にハケメ大皿(第304図134)がある。17世紀後半と考えられる。

豊富に出土したのは近世国内産陶磁器で、時代的には18世紀後半以降のものである。これらは、由良川への埋め立て土及び排水地に溜った粘土層・攪乱土坑から多く出土した。第297図は、肥前系染め付け椀である。広瀬向窯の分類によると、29~31は、^(注3) 広東茶椀で、見込みは30が「青」、31が簡略化した「寿」である。32~34は端反椀、35~41は小丸椀、42~44・49は丸椀、46・47は朝顔形椀、51は筒形椀である。40・42・51の見込みは五弁花文である。これらの器形は、18世紀後半から19世紀半ばにかけて盛行するものである。

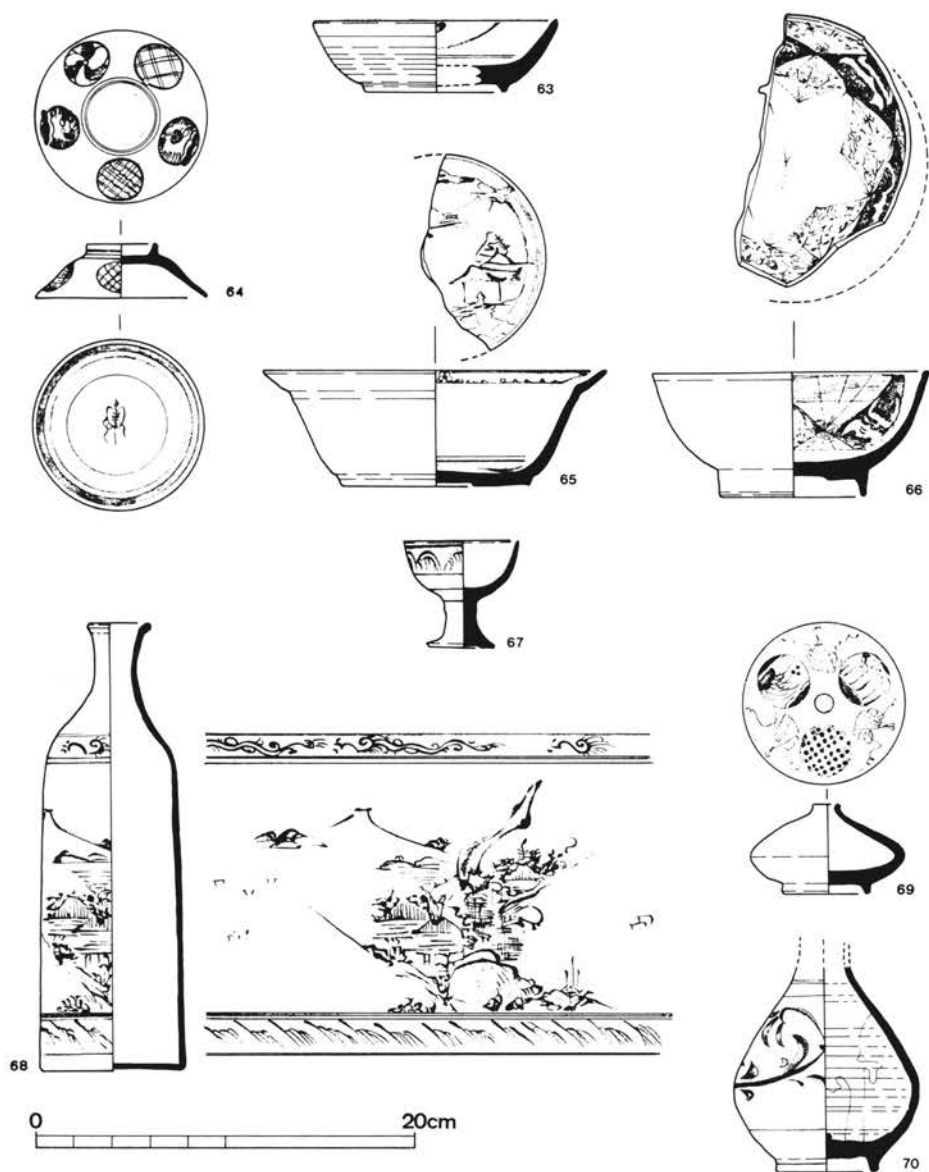
第298図57~62、第299図63は染め付け皿である。57・60は、見込みに五弁花文、底裏銘



第297図 第5次調査出土遺物(3)



第298図 第5次調査出土遺物(4)

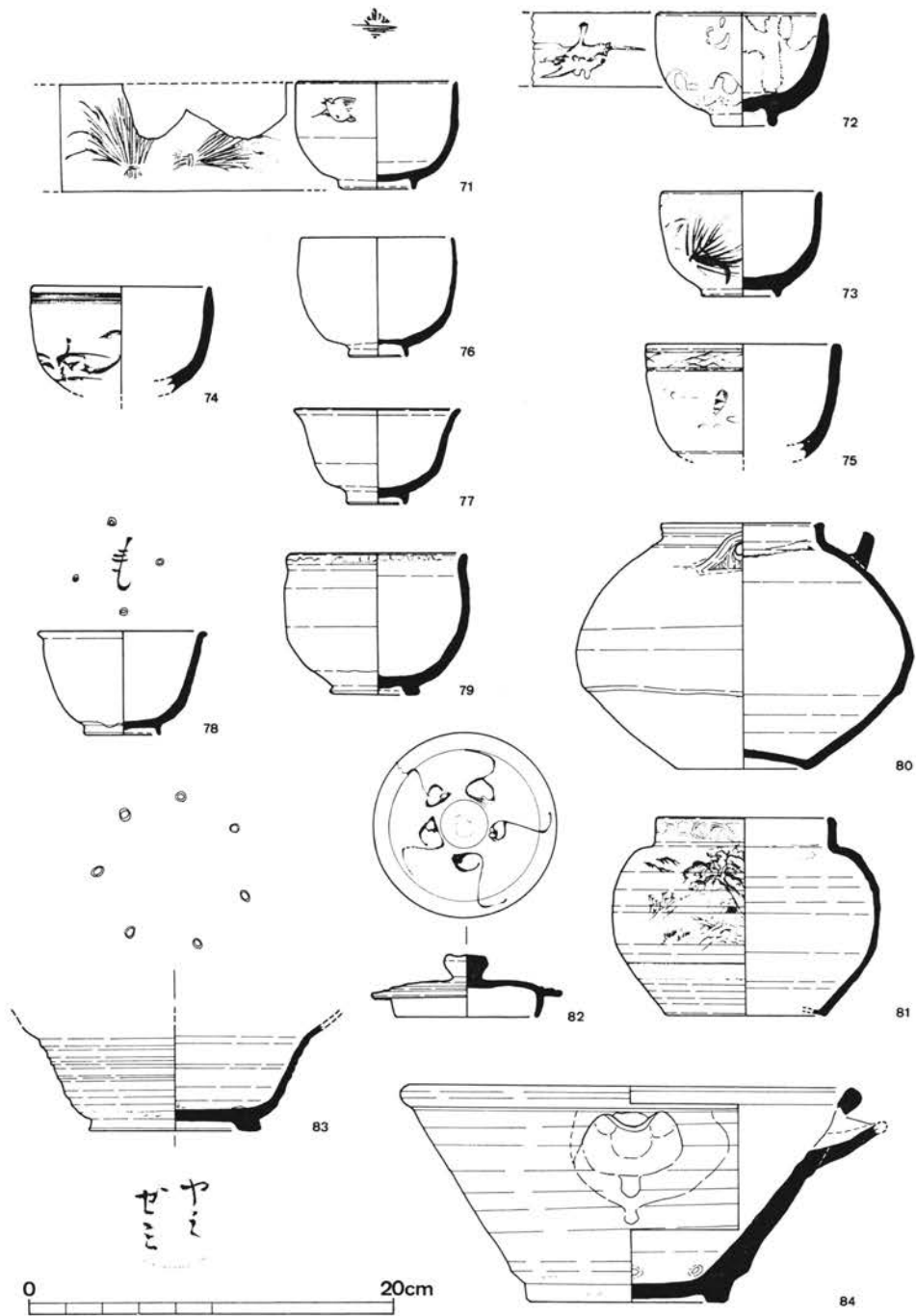


第299図 第5次調査出土遺物(5)

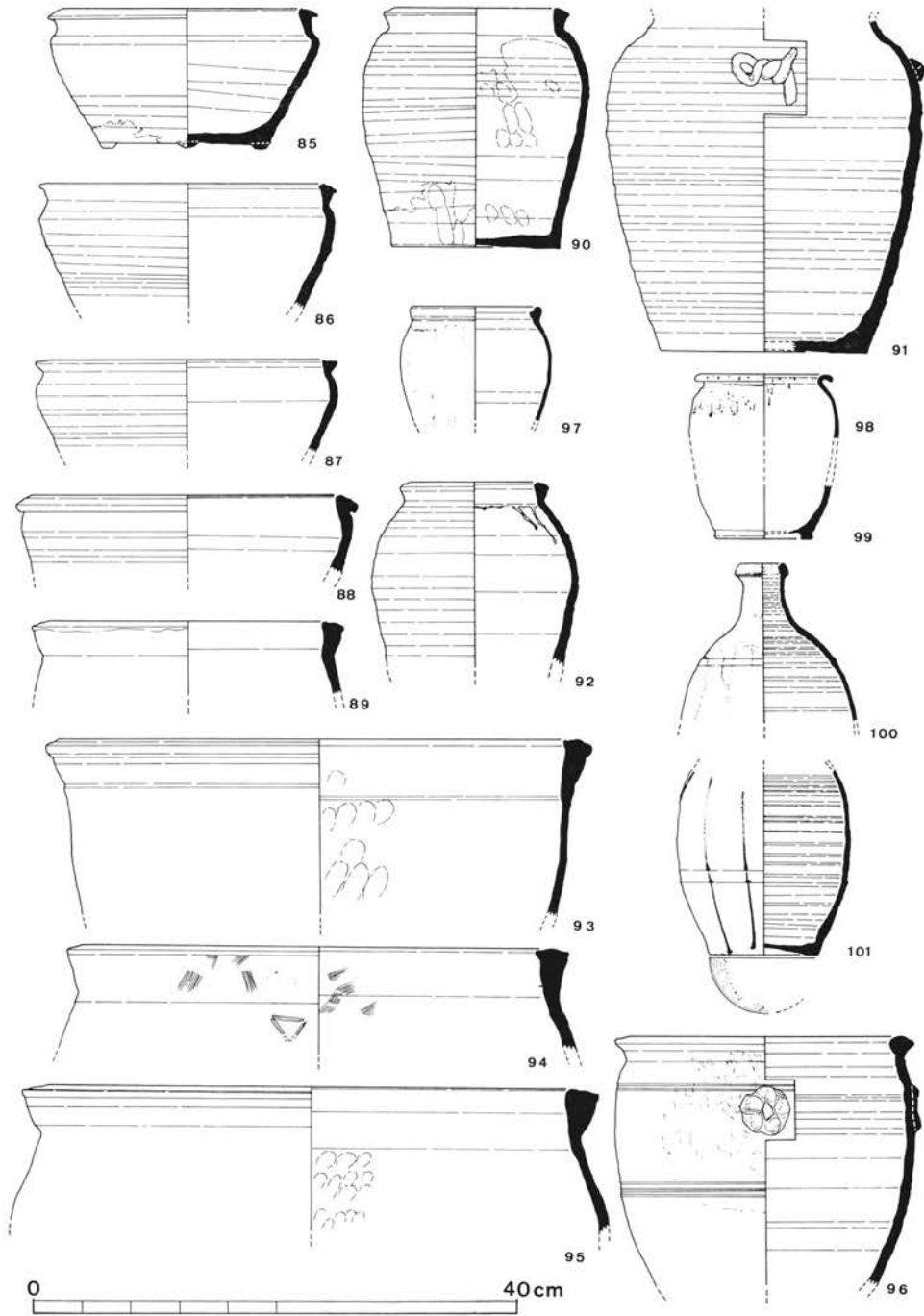
に「大明年製」の簡略化した銘が付されている。58・59は、蛇の目凹形高台を有する。

第299図は、その他の染め付け類である。蓋類(64)、鉢類(65・66)、瓶類(68～70)がある。

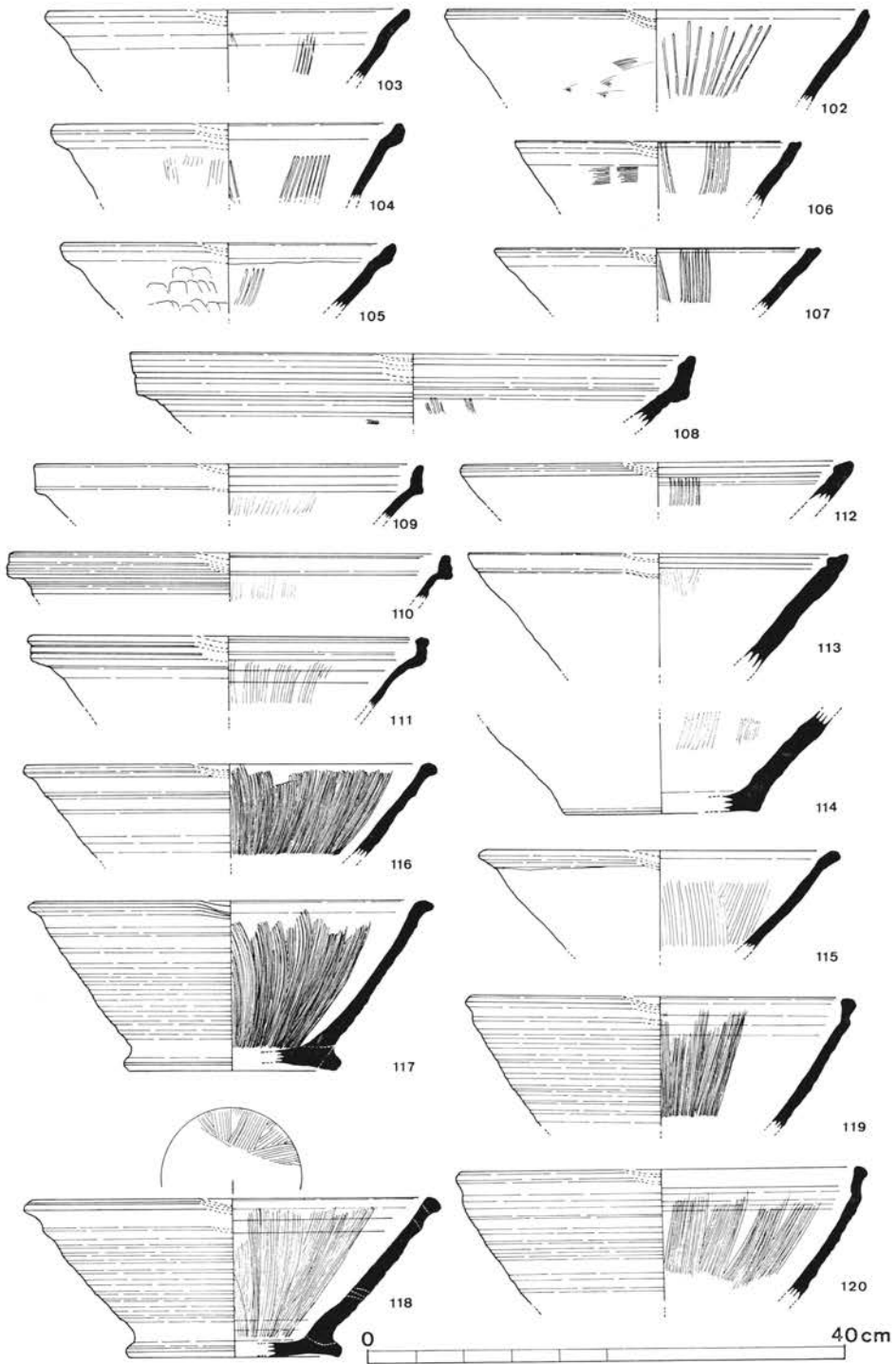
第300～304図は、陶器類である。71～78はいわゆる「京焼き」で、体部がほぼ垂直に立ち上がるもの(71～76)や、やや開いて立ち上がるもの(77・78)がある。102～132はすり鉢で、多くの破片が出土した。内面をヘラで一本一本描く古相のものや、ハケ状工具で間隔をあけて描くもの、密に調整を行うものに大別できる。他の器種の遺物の出土比率の状況



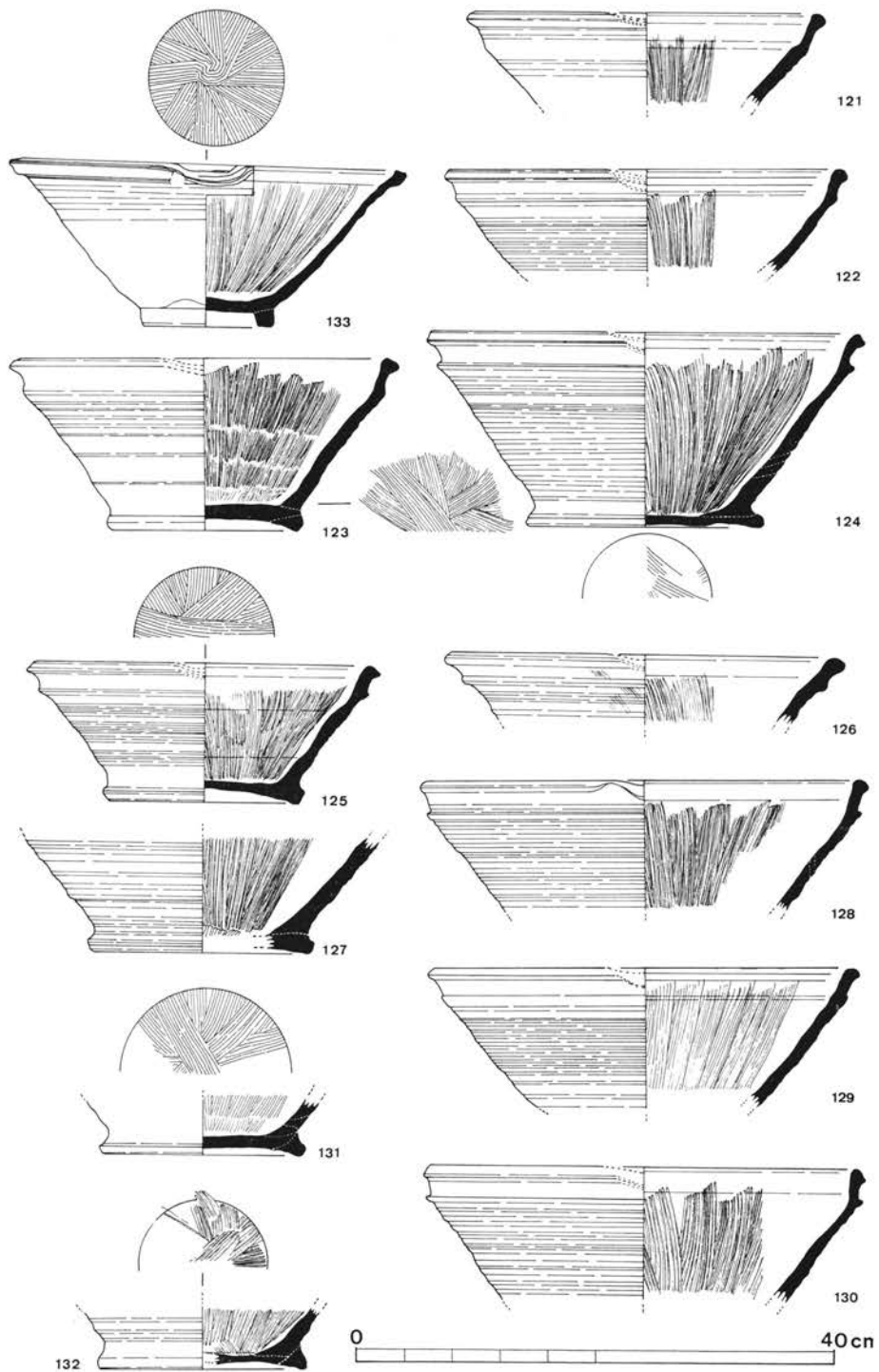
第300図 第5次調査出土遺物(6)



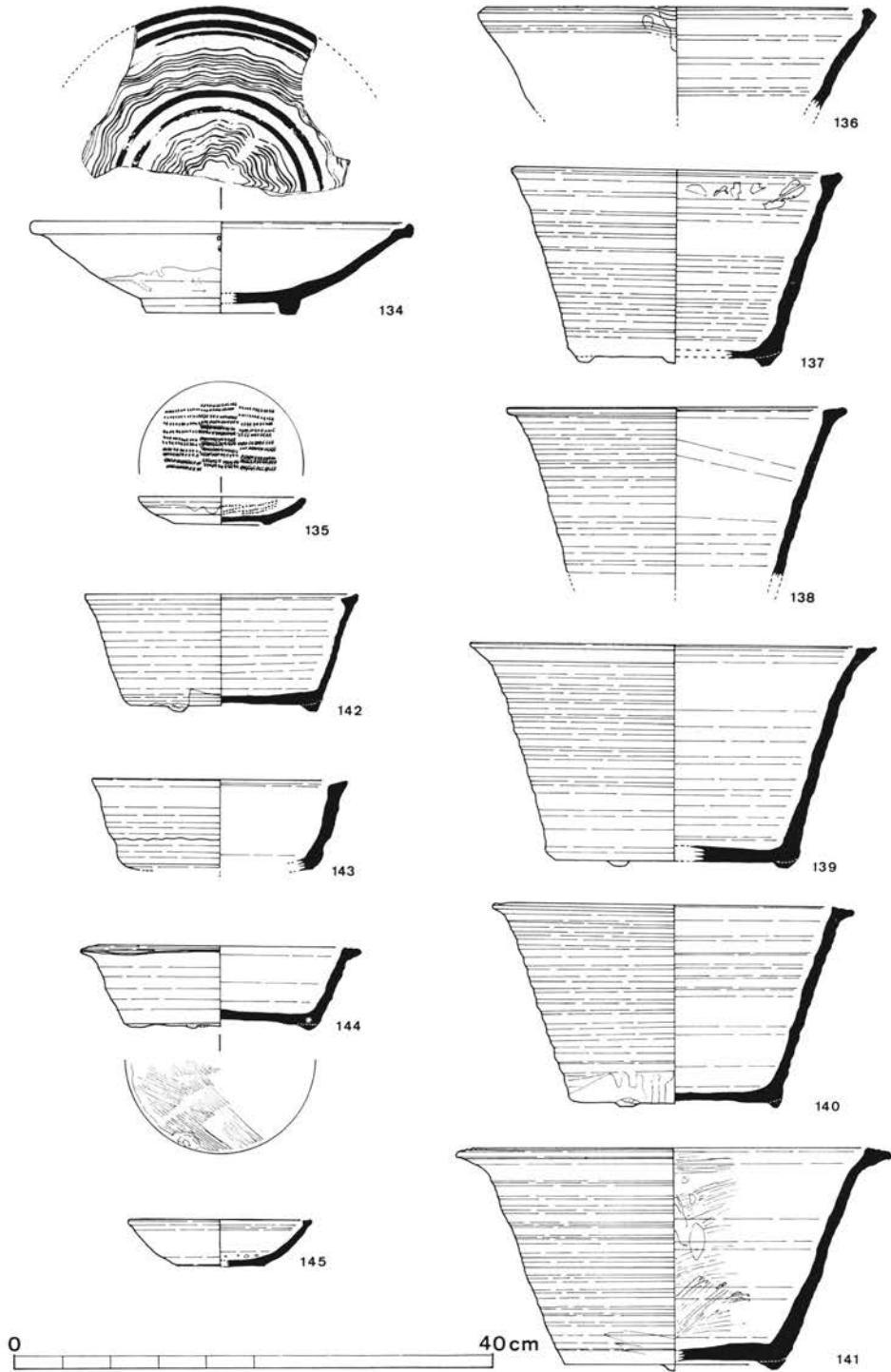
第301図 第5次調査出土遺物(7)



第302図 第5次調査出土遺物(8)



第303図 第5次調査出土遺物(9)



第304図 第5次調査出土遺物(0)

から、それぞれ13～14世紀、16～17世紀、18世紀後半以降と捉えられよう。多くは素焼きで、釉薬は施されていない。133は、茶褐色の釉が施されており、現代で使用されているものと酷似する。108は、備前焼き、102は、丹波焼きと考えられ、107は、瓦質である。135は、おろし目皿、136～141は、深鉢、142～144は、浅鉢である。

これらの陶器類は、この調査地の各時代の遺物の出土比率からみて、染め付け椀から得られる年代観—18世紀後半～19世紀半ば頃のもの—と推定される。(岩松 保)

注1 弥生時代後期の土器分類については、以下の文献を参考にした。

石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981)』京都府教育委員会) 1981

石井清司「京都府下出土の山陰系土器について」(『京都考古』第45号 京都考古刊行会) 1987

平良泰久ほか『丹後大山墳墓群』(京都府丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会) 1983

注2 『舞鶴市史』通史篇(中) 舞鶴市 1978, 381頁。

注3 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯—肥前地区古窯跡調査報告書』第3集 佐賀県立九州陶磁文化館 1986

付表4 第5次調査出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
1	須恵器	杯	74-O P	灰色粒混・淡明褐色砂質土・淡褐色砂	12.4	3.65	精良	堅	1/2	灰色	ロクロナデ, ヘラ切り落し後ナデ
2	須恵器	杯	73-U T	S X 41近辺	12.4	3.4	精良	堅	1/2	灰白, 淡暗青灰	水引, 口縁弱いナデ, 貼り付け高台
3	須恵器	杯	64-K L	淡明褐色土	13	3.9	良	堅	1/8	暗灰色	ロクロ回転
4	須恵器	杯	73-T	S X 41近辺	12.15	3.2	精良	堅	ほぼ完存	灰白色	ロクロナデ, 底部未調整
5	須恵器	杯	74-O P	灰色粒混・淡明褐色砂質土・淡褐色砂	14.8	5.4	精良	堅	1/2	灰色	ロクロナデ, 外面底部ヘラ切り痕
6	須恵器	杯	67・68-O	淡明色土	8.4(底径)	3.4	良	堅	1/3	明灰色	ロクロ回転
7	須恵器	杯	72-U	S X 41近辺	14.8	2.3	精良	堅	1/4	灰色	ロクロナデ, 外面底部回転ヘラ削り, 口縁いびつに波打つ
8	須恵器	杯	72-U	S X 41近辺	14.7	2.5	密	堅	7/10	淡暗灰	横ナデ
9	須恵器	杯	72-T	焼土(S X 41)内	15.8	1.8	精良	堅	1/3	灰色	ロクロナデ, ヘラ切り落し後ナデ
10	須恵器	蓋	74-O P	灰色粒混, 淡明褐色	14.8(底径)	2.6	良	堅	1/8	淡灰色	ロクロ成形ナデ
11	須恵器	蓋	72-T	S X 41近辺	19.4	1.2	精良	堅	1/8	灰色	ロクロナデ, ヘラ切り落し後ナデ
12	須恵器	蓋	74-O P	灰色粒混, 淡明褐色砂質土, 淡褐色砂	14.6	1.55	精良	堅	2/12	灰色	ロクロナデ, ヘラ切り落し
13	土師器	皿	73・T 焼土	S X 41近辺	19.0	4.3	粗	軟	3/8	明淡茶褐色	暗文らしき文字, 外面底部もみから痕
14	土師器	甗	72・T 焼土	S X 41近辺	13.2	11.3	粗	軟	1/2	明茶褐色	二次焼成で磨滅部分あり
15	土師器	甗	S D-40	黄褐色粘質土混褐色砂	23.0	7.7	粗	軟	1/4	赤茶褐色	口縁横ナデ, 外面ハケメ, 内面ナデ後ヘラ削り, 指頭圧痕あり

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径 (cm)	器高 (cm)					
16	土師器	甕	72-T	S X 41近辺	24.5	16.5	やや粗	やや軟	1/2	明茶褐色	口縁部分つまむ、ハケ後ナデ、内面へラ削り及び指頭圧痕あり
17	土師器	甕	73-T焼土	S X 41近辺	17.8 (頸部)	27.9	やや粗	やや軟	7/10	明茶褐色	ハケ原体9条/1.6cm、スス付着黒斑あり
18	中国製白磁	鉢	62-K	淡明褐色土	15.8	3.0	良	堅	1/18	青白褐色	半陶質、ロクロ回転
19	中国製白磁	鉢	62-K L	淡明褐色土	16.8	3.4	良	堅	1/16	乳白褐色	半陶質、ロクロ回転
20	中国製白磁	德利	61-K L	炭混暗灰色砂質土	5.2	2.3	良	堅	4/5	白灰色	
21	中国製青磁	椀	63・64-J K	淡明褐色土	6.0 (高台径)	3.4	良	堅	底部完存	波い草褐色	青磁、酸化素地一灰色
22	中国製青磁	椀	64-M N	カクラン-2	5.2 (高台径)	1.8	良	堅	1/4	緑茶褐色	青磁、酸化素地一灰色
23	中国製白磁	鉢	61-J K, 60-K	炭混暗灰褐色砂質土	19.0	4.1	良	堅	1/12	淡黄褐色	半陶質、ロクロ回転
24	中国製白磁	鉢	61・62-J	淡暗青灰色粘土	20.0	2.3	良	やや堅	1/10	淡黄茶褐色	半陶質、ロクロ回転
25	中国製白磁	鉢	60・61-L	カクラン-4	27.2	4.0	良	堅	1/16	黄褐色	半陶質、ロクロ回転、内外ともに透明釉
26	中国製白磁	盤	62-M	淡灰色粒混淡明褐色土	17.4	5.6	良	堅	1/10	白灰褐色	ロクロ成形半陶質透明釉
27	中国製白磁	德利	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	5.2 (高台径)	5.3	良	堅	1/2	白灰色	外面透明釉
28	中国製白磁	脚	61-K L	炭混暗灰色砂質土	3.2 (底径)	3.2	良	堅	1/8	白灰褐色	脚部のみ灰釉
29	染付	椀	61・62-K L, 63・64-J K	淡明褐色, 炭混暗灰色砂質土	11.4	6.8	良	堅	4/5	淡青色	ロクロ回転、削り出し高台
30	染付	椀	62・63-J K		11.2	6.15	良	良		白色藍色	呉須にて染付
31	染付	椀	62・63-K L	淡明褐色土	11.8	6.6	良	堅	2/3	淡黄青色	ロクロ回転重ね焼痕
32	染付	椀	61・62・63-J, 62-K, 62・63-J K	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	11.4	6.7	良	堅	4/5	淡青色	ロクロ成形、重ね焼胎土目4個

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
33	染付	碗	61・62・63-J, 62-K	炭混暗灰色砂質土	11.4	6.3	良	堅	1/2	淡青色	ロクロ成形, 重ね焼痕土目5個
34	染付	碗	62・63-J K		10.4	5.9	良	良		白色明青色	
35	染付	碗	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	9.2	5.7	良	堅	1/4	乳灰色	半磁器質, ロクロ成形
36	染付	碗	62-K	淡明褐色土	8.0	5.5	良	堅	1/2	青白色	
37	染付	碗	62・63-J K L	淡明褐色土 淡暗青灰色粘土	3.0	5.8	良	堅	2/3	白色	削り出し高台
38	染付	碗	62-K L, 62・63-J K	淡明褐色土	8.6	5.4	良	堅	完形	白色	ロクロ成形, 削り出し高台
39	染付	碗	62-K L		8.6	5.6	良	堅	完形	白色	ロクロ成形
40	染付	碗	62・63-K L		9.0	6.1	良	良		灰青色	
41	染付	碗	67・68-O, 68・69-Q P	淡暗色土	8.8	5.7	良	堅	1/3	青白色	ロクロ成形, 削り出し高台
42	染付	碗	61-K L	炭混暗灰色砂質土	11.6	6.2	極細	堅	2/3	淡褐色	呉須が茶色に変色
43	染付	碗	62・63-K L	淡暗青灰色粘土, 淡明褐色土	11.8	5.8	良	堅	7/16	淡灰青色	ロクロ成形, 貫入
44	染付	碗	62・63-J K	淡明褐色土	7.2	3.5	良	堅	完形	白色藍色	ロクロ成形, 削り出し高台
45	染付	碗	61-K L	炭混暗灰色砂質土	4.8	4.9	良	堅	1/5	白褐色	半磁器質
46	染付	碗	62・63-J K L	淡暗青灰色粘土, 淡明褐色土	8.8	4.7	良	堅	完形	乳白色紺色	ロクロ成形, 削り出し高台
47	染付	碗	62・63-J K L	淡暗青灰色粘土, 淡明褐色土	8.8	4.6	良	堅	2/3	淡青黄色	ロクロ成形, 削り出し高台
48	染付	碗	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	10.4	5.9	良	堅	1/2	白灰褐色	ロクロ成形, 貫入
49	染付	碗	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	9.4	4.3	良	堅	1/3	青白色	
50	染付	碗	60・61-L	カクラン-4	6.0	3.8	精細	堅	1/2	赤茶褐色	ロクロ成形, 鉄釉, 赤土
51	染付	碗	62・63-J K, 65-K L, 63-M		7.0	5.5	良	堅	完形	青味白色	ロクロ成形, 白色釉, 削り出し高台

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
52	陶器	皿			11.0	2.2	良	堅	2/3	灰白褐色	ロクロ成形, 内面施釉, 貫入, 土目4個
53	陶器	皿	65~70-Q~R	褐色砂	12.0	2.3	良	堅	7/8	淡緑黄褐色	ロクロ成形, 内面施釉, 土目4個
54	唐津	皿	72ラインサブトレ72-P		12.8	3.5	良	良	1/5	茶褐色	施釉一緑灰色
55	唐津	皿	65-N	カクラン-2	12.8		良	良	1/2	淡赤褐色	外面底部以外に施釉
56	染付	皿	55-J K L, 54-L	カクラン一括	12.6	3.2	良	堅	2/3	淡褐色	中央-カキメ, 白化粧の上に薄く施釉
57	染付	皿	61-K L	炭混暗灰色砂質土	13.0	3.7	極細	堅	完形	白色	ロクロ成形
58	染付	皿	61-K L		13.6	3.8	良	良			呉須
59	染付	皿	61-K L, 62・63-J K	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	13.8	4.0	良	ややあまい	2/3	乳白色気味	ロクロ成形
60	染付	皿	62・63-J K	淡明褐色土	13.0	3.1	極細	堅	完形	白色	ロクロ成形
61	染付	皿	62-K	淡明褐色土	20.4	2.9	良	堅	1/6	白色	
62	染付	皿	62・63-J K	淡明褐色土	10.4	2.4	良	堅	完形	青白色	ロクロ成形, 口縁に鉄釉
63	染付	皿	61-K L	炭混暗灰色砂質土	13.0	3.8	良	堅	1/3	青白色	磁土, 呉須の染付
64	染付	皿	67-O	カクラン-3	9.0	2.8	良	堅	完形	青白色	
65	染付	鉢	62-K	淡明褐色土	18.0	6.1	良	堅	3/8	淡青	ロクロ成形
66	染付	鉢	62-K	淡明褐色土	14.8	16.6	良	堅	2/3	白色	口縁に鉄釉
67	染付	杯	61-K L	炭混暗灰色砂質土	6.2	5.7	良	堅	完形	青白色	ロクロ成形
68	染付	德利	62・63・64-J K	淡明青灰色粘土, 淡明褐色土	7.8(底径)	23.6	良	堅	9/10	白色	ロクロ成形, 呉須染付
69	染付	油壺	58・59-K	カクラン-4	4.6	4.7	良	堅	完形	白色	ロクロ成形
70	染付	瓶	62-K L	淡明褐色土	5.2	10.8	良	堅	2/3	淡青色	ロクロ成形
71	陶器	碗	62・63-K L	淡明褐色土	8.8	5.85	良	堅	3/4	淡白黄茶褐色	ロクロ成形, 京焼絵付

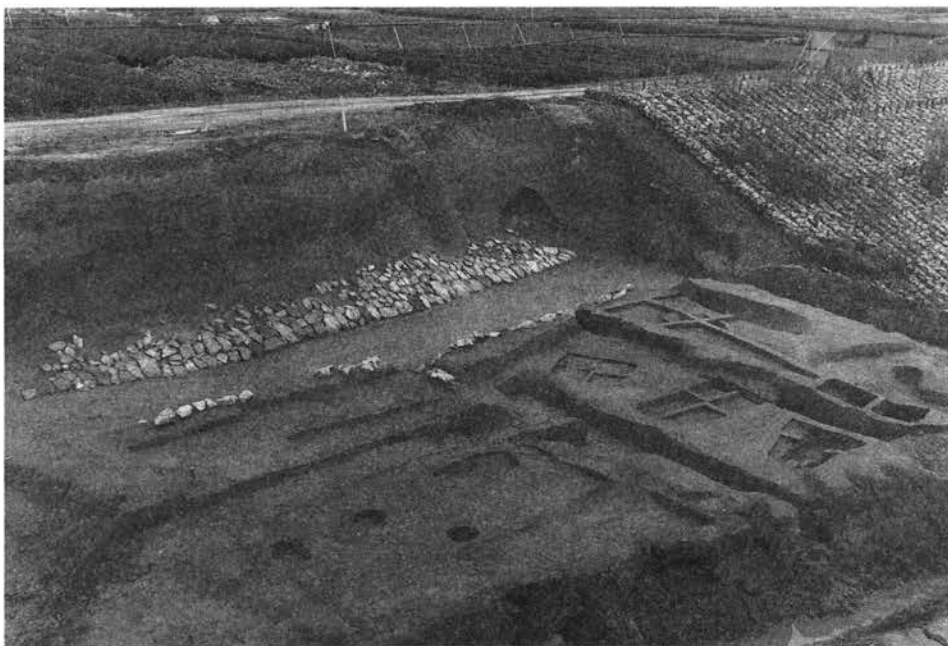
番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
72	陶器	碗	62・63-K L	淡明褐色土	9.4	6.15	良	堅	1/2	暗灰白茶褐色	ロクロ成形, 白化粧, 貫入内面に鉄釉
73	陶器	碗	63-K L, 62-L		9.0	5.7	良	堅	完形	黄味白色	ロクロ成形
74	唐津	碗	62・63-J K	淡明褐色土 淡暗青灰粘土	10.0	5.7	やや粗	堅	1/3	乳灰褐色	酸化焼成, 鉄絵付
75	唐津	碗	62-K L, 62・63-J K	淡明褐色土 淡暗青灰色粘土	10.8	6.2	やや粗	堅	1/3	乳灰褐色	陶土, 呉須絵付, 貫入
76	陶器	碗	62・63-K L	淡暗青灰色粘土	8.4	6.5	良	堅	7/12	淡黄白褐色	ロクロ成形, 施釉, 貫入
77	陶器	碗	62-K L	淡明褐色土	8.8	5.2	良	堅	1/2	灰茶褐色	ロクロ成形, 施釉, 貫入
78	陶器	碗			9.2	5.6	良	堅	3/5	乳灰褐色	ロクロ回転, 施釉, 貫入
79	陶器	碗	62・63-K L	淡暗青灰色粘土	9.8	7.7	良	堅	1/3	淡緑褐色	ロクロ成形, 施釉
80	陶器	耳付水差し	67・68・69-OP	淡暗色土 カクラン-3	7.6	13.4	良	やや堅	1/2	淡褐色	緑釉, スス付着
81	陶器	壺	60・61-J K L	炭混暗灰色砂質土	10.0	10.8	良	堅	2/5	灰白色	ロクロ成形, 施釉
82	唐津	蓋	62-K L	淡明褐色土	8.0	3.4	良	堅	7/8	黒茶褐色	ロクロ成形, 施釉
83	瀬戸美濃	鉢	61・62-M N	暗青灰色粘土・砂	9.3 (高台径)	5.8	良	堅	高台完形	暗茶黄緑褐色	貫入, 土目7個
84	陶器	片口鉢	67・68-OP	カクラン-3	24.6	12.0	良	堅	2/3	外面 内面	暗茶黒色 乳白褐色, 施釉
85	陶器		63・64-J K	淡明褐色土	19.8	11.5	やや荒い	堅	1/2	茶褐色	回転ナデ, 内外とも薄く釉薬を施す
86	陶器	甕	62・63-J K L, 64-M	淡明褐色土 淡暗青灰粘土, 茶褐色 混淡灰色砂	24.0	10.5	良	堅	2/3	暗茶褐色	ロクロ成形, 素地一灰褐色
87	陶器	甕	62・63-J K L, 70~72-L M	淡明褐色土, 灰色粒混褐色砂質土, 淡暗青灰粘土	23.0	7.7	やや粗	やや軟	1/2	暗赤褐色, 淡橙黄色	粘土ひも積重ね, ロクロ成形, 鉄釉
88	陶器	甕	59-J K, 58-K L	炭混橙色粒混暗茶褐色土	15.8	6.5	良	堅	1/20	暗茶褐色	ロクロ成形, 鉄釉, 素地一淡橙色

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径 (cm)	器高 (cm)					
89	陶器	甗	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	13.2	5.9	やや粗	堅	1/20	暗茶褐色	内外面施釉, 素地-淡灰青色
90	陶器	甗	61-K L, 63・64-J K	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	14.0 (底径)	19.7	やや粗	やや軟	1/2	暗茶褐色	外面及び内面口縁に施釉, 素地-淡橙黄褐色土
91	陶器	甗	61-K L	炭混暗灰色砂質土	17.9	27.3	良	堅	1/3	暗茶褐色	ロクロ成形, 鉄釉, 耳付
92	陶器	甗	71-Q 62-K L	カクラン	12.4	15.2	良	堅	1/6	暗茶褐色	ロクロ成形, 鉄釉, 素地-灰茶褐色
93	陶器	甗	58・59-M	カクラン-4	43.6	14.5	やや粗	やや軟	1/4	暗茶褐色	ロクロ回転調整, 鉄釉
94	陶器	甗			38.4	8.5	やや粗	やや軟	1/6	淡橙褐色	ロクロ成形, 鉄釉
95	陶器	甗	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	43.4	12.0	やや粗	やや軟	1/8	暗橙褐色	ロクロ成形, 鉄釉
96	陶器	甗			22.8	20.7	良	堅	1/2	黒茶褐色	アメの釉上から乳白色の流釉, ニツ耳付
97	陶器	甗	58・59-M	暗青灰色粘土	11.0	9.4	良	堅	1/5	暗茶褐色, 灰色	ロクロ成形, 鉄釉, 頸部黒釉, 光沢
98・99	陶器	甗	60-K, 61-J K	炭混暗灰色砂質土	10.8	13.6	精良	堅	1/4	茶褐色	ロクロ成形, 内外面共施釉, 頸部流釉, 削り出し高台
100	陶器	徳利	67-O	カクラン-3	3.6	12.8	良	堅	1/5	茶褐色	ロクロナデ, 内面施釉, 砂粒多含
101	陶器	甗	66・67・68-O P	カクラン-3	9.0 (底径)	15.4	良	堅	1/3	茶褐色	外面施釉, 頸部に流釉, 内面釉なし
102	陶器	すり鉢	71・72-O	灰色粒混褐色砂質土	35.2	7.6	良	堅	1/10	暗橙褐色	ロクロ成形
103	陶器	すり鉢	74-P Q	灰色粒混淡褐色土	30.4	6.0	良	やや軟	1/8	灰黒色	ロクロ成形
104	陶器	すり鉢	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	29.2	6.3	良	良	1/5	淡灰褐色	ロクロ成形, ハケメ痕
105	陶器	すり鉢	58・59-K	褐色混淡褐色粘質土	28.0	5.6	良	軟	1/12	黒灰褐色	瓦のような素地及び焼成
106	陶器	すり鉢	60-M(サブトレ)	淡灰色粒混淡明褐色土	24.0	5.5	良	やや軟	1/14	橙褐色	ロクロ成形, カキメは8条/3cmの原体

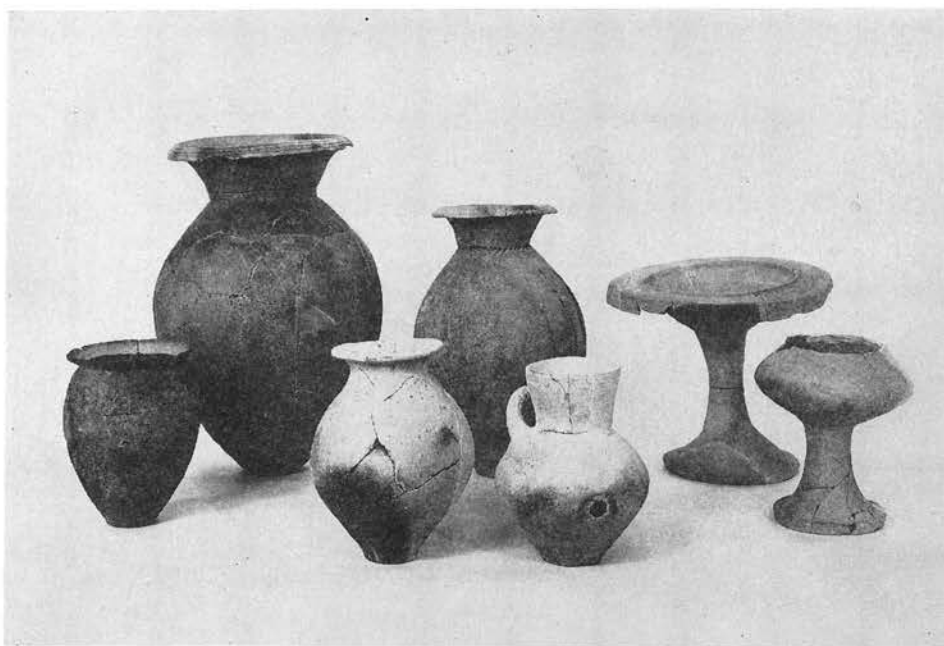
番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
107	陶器	すり鉢	74・75-K S	4トレンチ内埋土	27.4	5.3	良	堅	1/12	暗茶褐色	ロクロ成形, 素地-灰黒褐
108	陶器	すり鉢	62・63-K L	淡明褐色土	48.0	6.0	やや荒	堅	1/36	淡橙褐色	ロクロ成形
109	陶器	すり鉢	71・72-O	カクラン-3	33.0	4.5	やや粗	堅	1/14	茶褐, 黄褐色	ロクロ成形, クシメ
110	陶器	すり鉢	62・63-K L	淡暗青灰色粘土	37.0	3.8	やや粗	堅	1/10	黄褐, 暗茶色	ロクロ成形, クシメ, 施釉
111	陶器	すり鉢	62・63-K L		34.0	6.0	良	堅	1/9	淡灰褐色	ロクロ成形, クシメ, 施釉
112	陶器	すり鉢	67-Q	カクラン-3	33.0	3.5	良	堅	1/10	淡乳褐色	ロクロ成形, クシメ
113	陶器	すり鉢	59-L M	褐色混淡灰色粘質土	32.2	9.8	やや粗	軟	1/6	淡乳白黄褐色	ひも作り, ロクロ調整
114	陶器	すり鉢	71・72-P, 72-Q	灰色粘混淡褐色砂質土, 淡褐色土	16.4	8.3	良	やや軟	1/6	乳白褐色	ひも作り後ロクロ調整, クシメ
115	陶器	すり鉢	64-M	茶褐色混淡灰色砂	29.6	8.5	やや粗	やや軟	1/6	暗茶褐色, 橙褐色	ロクロ成形, 施釉
116	陶器	すり鉢	61~63-J, 62・63-J K	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	32.4	7.8	粗	やや軟	1/4	乳白橙黄色	ロクロ成形
117	陶器	すり鉢	62-K	淡明褐色土	33.2	14.2	やや粗	やや軟	1/3	赤淡褐色, 淡橙褐色	ひも作りの後ロクロ調整, 焼きしめ, 一口注ぎ口付
118	陶器	すり鉢	64-M	茶褐色混淡灰色砂	33.2	13.5	やや粗	堅	1/8	淡灰黄褐色	ひも作りの後ロクロ調整, 焼きしめ, 砂質気味
119	陶器	すり鉢	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	32.2	10.9	やや粗	堅	1/8	暗茶褐色	ひも作りの後ロクロ調整, 焼きしめ
120	陶器	すり鉢	61-K L, 62-K, 64-M	炭混暗灰色砂質土, 茶褐色混淡灰色砂	33.8	10.4	やや粗	やや堅	1/4	淡灰黄褐色	ロクロ調整, 焼きしめ, 砂質気味
121	陶器	すり鉢	63-M N	カクラン-4	29.0	7.7	やや粗	やや軟	1/10	淡橙黄色	ロクロ成形, 13条/2.4cmのクシメ
122	陶器	すり鉢	67-O, 67・68-O P	カクラン-3	33.0	8.6	やや粗	堅	1/14	橙褐色	ロクロ成形, 10条/2.3cmのクシメ
123	陶器	すり鉢	62-K L	淡明褐色土	31.0	14.4	粗	堅	1/3	赤橙褐色	ひも作りの後ロクロ調整, 焼きしめ

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径 (cm)	器高 (cm)					
124	陶器	すり鉢	62-K L	淡明褐色土	25.8	16.2	やや粗	やや軟	1/2	橙褐色土	ひも作りの上からロクロ調整, 焼きしめ
125	陶器	すり鉢	61・62・63-J, 62-K L	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	24.0	16.9	やや粗	やや軟	2/3	淡黄灰褐色	ひも作りの後ロクロ調整, 砂質土
126	陶器	すり鉢	62-K L	淡暗褐色土	32.6	5.6	やや粗	堅	1/12	暗茶褐色	回転ナデ, ハケメ, クシメ
127	陶器	すり鉢	62・63-J K L	淡暗青灰色粘土	18.0 (底径)	9.5	やや粗	堅	1/8	暗茶褐色	ロクロ成形, 回転ナデ
128	陶器	すり鉢	62-K L	淡明褐色土	36.4	11.0	やや荒	堅	1/6	赤茶暗褐色	ひも作り, ロクロ調整, クシメ
129	陶器	すり鉢	61・62-MN, 61-J K・MN	暗青灰色粘土・砂, 淡暗青灰色粘土	36.4	11.5	良	堅	1/8	橙褐色	ロクロ成形, ナデ調整, クシメ10条/2.5cmの原体
130	陶器	すり鉢	62-K L		36.2	11.4	やや粗	やや軟	1/6	赤褐色 淡橙色	回転ナデ調整の上から12条/3cmのクシメを施す
131	陶器	すり鉢	67・68-O P	カクラン-3	16.2 (底径)	4.5	やや粗	やや軟	1/4	橙褐色	ロクロ成形
132	陶器	すり鉢	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	17.6 (底径)	5.2	やや粗	やや軟	1/2	橙赤色	ひも作りの後ロクロ調整, 焼きしめ
133	陶器	すり鉢	60-O, 67・68-O P	淡暗褐色土 カクラン-3	31.6	13.5	良	堅	完形	暗茶褐色	ロクロ成形, クシメ, 重ね焼き痕
134	陶器	鉢	62・63-J K		31.6	7.7	砂粒	良	1/5	赤褐色	白化粧の上にカキメ, 施釉
135	陶器	摺皿	65-O	淡暗褐色砂	14.0	2.3	良	堅	完形	濃茶褐色	赤土, 鉄釉
136	陶器	片口鉢	70-L (トレンチ)	淡暗褐色土	32.4	8.5	やや粗	やや軟	1/8	橙褐色	ロクロ回転調整, 内面に施釉
137	陶器	鉢	63・64-J K, 61・62-N	淡明褐色土, カクラン-4	27.2	16.1	やや粗	やや軟	1/2	赤褐色	粘土ひも積重ね, ロクロ成形, 鉄釉
138	陶器	鉢	62-K L	淡明褐色土	28.4	13.8	粗	堅	1/2	橙茶褐色	ロクロ成形, 内外面とも薄く施釉
139	陶器	鉢	62-K L	淡明褐色土	34.2	18.5	粗	堅	1/3	暗茶褐色	内外面共施釉, 推定3個の脚, 鉄釉

番号	器種	器形	地区・遺構	層位	各部長		胎土	焼成	残存	色調	調整
					口径(cm)	器高(cm)					
140	陶器	鉢	61・62・63-K L, 63・64-J K	炭混暗灰色砂質土, 淡明褐色土	26.9	16.9	粗	堅	9/10	暗茶褐色	ロクロ成形, 筆により施釉脚3個
141	陶器	鉢	62・63-J K	淡明褐色土	33.0	18.2	やや粗	やや軟	2/5	茶橙褐色	ロクロ成形, 筆により鉄釉を施す
142	陶器	鉢	62・63-J K	淡暗青灰色粘土	23.0	9.8	粗	堅	1/3	暗茶褐色	回転ナデ, 内外面共に施釉ロクロ成形, 脚は1個残存推定3個
143	陶器	鉢			21.4	7.5	やや粗	やや軟	1/5	橙褐色	ロクロ成形, 施釉
144	陶器	鉢			21.0	6.8	良	堅	19/20	暗黒茶褐色	ロクロ成形, 鉄釉の上に灰釉が散る
145	陶器	鉢	60-K, 61-J K, 60・61-L	炭混暗灰褐色砂質土, カクラン-4	15.4	4.0	良	堅	1/8	暗黒褐暗茶褐	ロクロ回転, 内面施釉



B地区下層貼石墓群(1～3号墓)全景(南から)



貼石墓(1号墓)出土遺物

第5章 岡安地区の調査(第7次調査C地区)

第1節 層位と調査の概要

岡安地区は旧小字岡安に所在し、現在の岡田下橋の下流に位置する。岡田下橋は、昭和53年に由良川改修工事に先立って、橋脚の付替工事が行われており、その時に杉本嘉美氏によって須恵器3片が採集されている。その後、舞鶴市教育委員会が試掘調査を行い、弥生時代後期の遺物が出土している。これらのことから、この地区に弥生時代後期を中心とする集落跡の存在が調査以前から予想された。

この地区の由良川改修工事に伴う掘削対象面積は、約4,000m²で広大であったため、中央部よりやや下流側で由良川に直交する5m×30mの試掘トレンチを設置した。この試掘トレンチを調査した結果、トレンチ内は、遺物を含まない砂質土と粘質土の堆積が著しく、遺構は存在しないものと判断した。このため、すでに由良川改修に伴う工事掘削で断面の一部に包含層の露頭していた上流側の地区に調査区を設定した。調査は、重機により無遺物層を除去し、奈良時代の包含層の上面から調査を開始した。調査面積は1,750m²である。

奈良時代～平安時代の包含層の上には、約2mにわたり、江戸時代に形成されたと考えられる砂層と粘質土の互層が存在した。この互層は、現在のIライン付近から由良川に向かって急激に傾斜していた。舟戸地区で見られたような中世の包含層及び平安時代の洪水層は存在しなかった。奈良時代～平安時代の包含層である黄色粘質土(厚さ10～15cm)を除去した段階(古墳時代前期の包含層の上面)で、数条からなる平安時代の浅い溝状遺構と飛鳥時代～奈良時代にかけての竪穴式住居跡(SH86150)と、古墳時代前期?の竪穴式住居跡(SH86151)を検出した。古墳時代前期の包含層は、褐色粘質土である。この層の上面は、ほぼ水平に堆積しており、その厚さは堤防側で約20cm、由良川側で約10cmを測る。褐色粘質土の下には弥生時代後期の洪水層と考えられる淡黄灰色砂質土が堆積していた。この砂質土は、上層と下層に分けることが可能で、上層は細かい砂質土で、下層は粗い砂質土である。砂質土の堆積は、全面約30cmほど堆積しており、下層を中心に整理箱にして約50箱分の弥生時代後期の土器が出土した。淡黄灰色砂質土の下には淡黄褐色の粘性砂質土が存在し、弥生時代後期の遺構面を検出した。この遺構面は、現在の堤防方向に向かって傾斜しており、この地区の集落の中心部は、現在の由良川付近に存在したものと予想される。遺構面で、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基と多数の柱穴群及び弥生時代後期の竪穴式住居跡1基・掘立柱建物跡2棟・多数の柱穴群・多数の土坑・溝等を検出した。

第2節 弥生時代



第305図 岡安地区下層検出遺構図

第1項 概要(第305図)

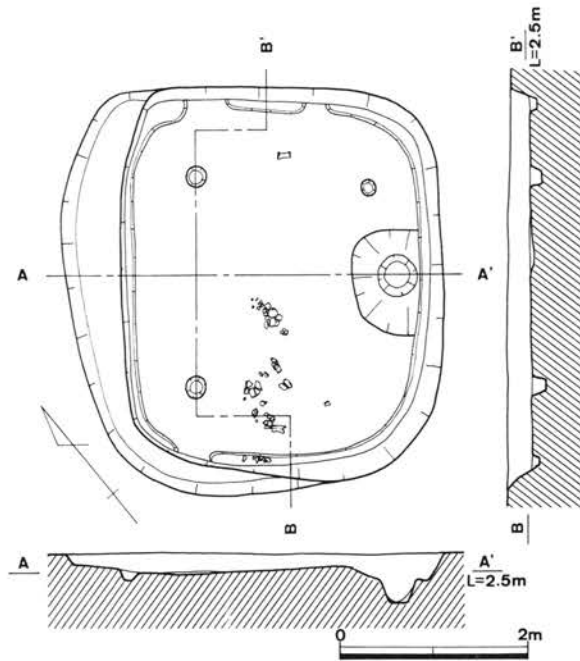
淡黄褐色粘性砂質土の上面で、弥生時代後期の遺構群を検出した。遺構には、竪穴式住居跡(SH86246)・溝状遺構(SD86245・SD86237等)・掘立柱建物跡(SB86240・SB86249・SB86250)・多数の柱穴群・土坑(SK86255・SK86256・SK86265等)及び土器溜まり等の遺構がある。また、この遺構面を覆うようにして存在した淡黄灰色砂質土内からは、下層を中心に多数の土器が出土した。

第2項 検出遺構及びそれに伴う遺物

とりあげる遺構は、竪穴式住居跡(SH86246)・掘立柱建物跡(SB86240・SB86249・SB

86250)・土坑(SK86255・SK86256)である。

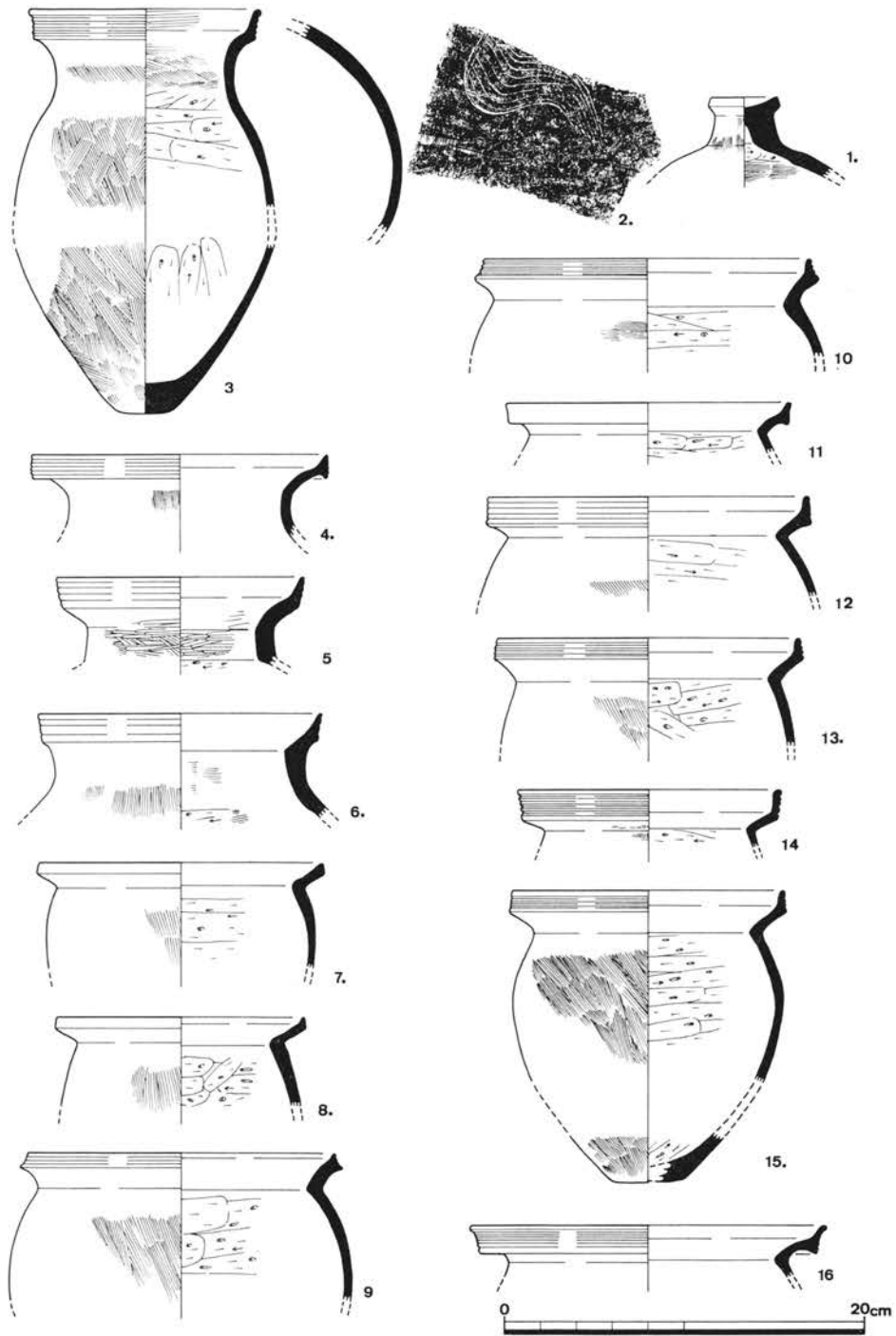
SH86246(第306～308図) 7E区付近で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。長辺4.1m・短辺3.5mを測る。4本の柱穴・周壁溝・特殊ピットを検出することができた。柱間寸法は、南北2.2m・東西1.8mを測る。周壁溝は全周するものではなく、部分的に途切れている。特殊ピットは、南東辺中央部に存在し、段を有する。床面からの深さ24cmを測り、埋土は住居内の埋土と同一であり、住居廃棄当時開口していたと考えら



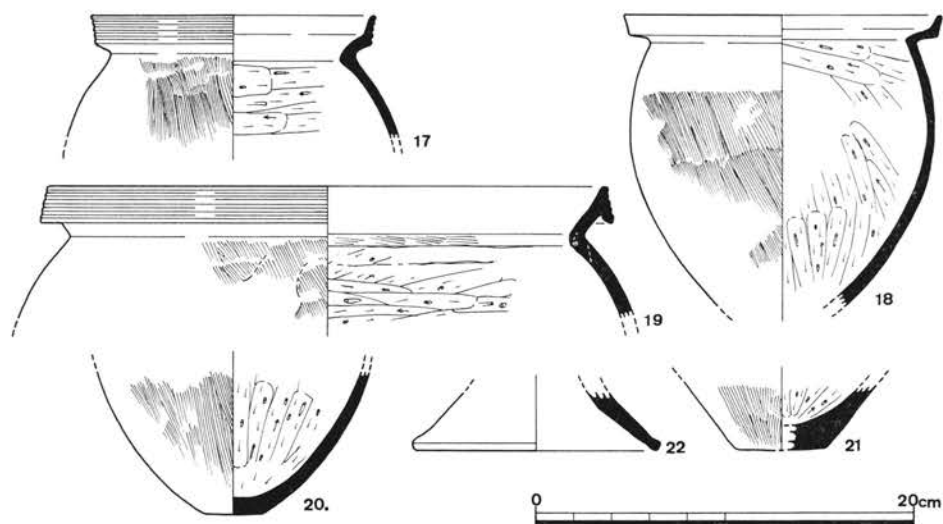
第306図 SH86246 実測図

れる。床面に密着して多くの遺物が出土したこと、住居内の埋土が粗い灰色砂質土で均一に堆積していたことから、洪水によって廃棄された住居と考えられる。住居の北西側に一段上がるような施設があり、住居内の埋土との差異が認められなかったことから、住居に伴う施設の可能性がある。

住居内からは、床面を中心に多くの弥生土器が出土した。出土した土器は、甕が最も多く、次いで壺が多い。鉢・高杯・器台は極めて僅少である。1は、蓋形土器である。2は、体部の張った壺の肩部で、線刻画が刻まれている。何を図化したものかは不明である。3は、床面からやや遊離して出土した壺Bである。底部は平底であるが、自立することはできない。5は、壺Bの形態をもち頸部内外面をヘラミガキする。甕A(7・8)は、口縁端部をわずかに上方に肥厚する。9・10は、甕B₁に属するものと思われる。11は、口縁部下端部を拡張し、甕B₂の形態をもつが、口縁部に擬凹線文が観察できない。12は、頸部から下を幅約3cmにわたって横方向にナデる。18にも同様の手法が認められる。14は、口縁端部が直立する甕B₃である。擬凹線文は他の擬凹線に比べて明瞭であり、施文工具の違いが予想される。器壁も薄く作りがていねいである。15も直立する長い口縁端面をもつが、下端部を拡張して造られた。甕B₂に属する。16は、口縁部下端部を拡張し、口縁端部の外反が著しい甕B₂である。17は、体部の張りの大きい甕B₃である。18は、口縁端面に擬凹



第307図 SH86246 出土遺物(1)
1・2・4・6～8・13・15：床面出土



第308図 SH86246 出土遺物(2)

20:床面出土

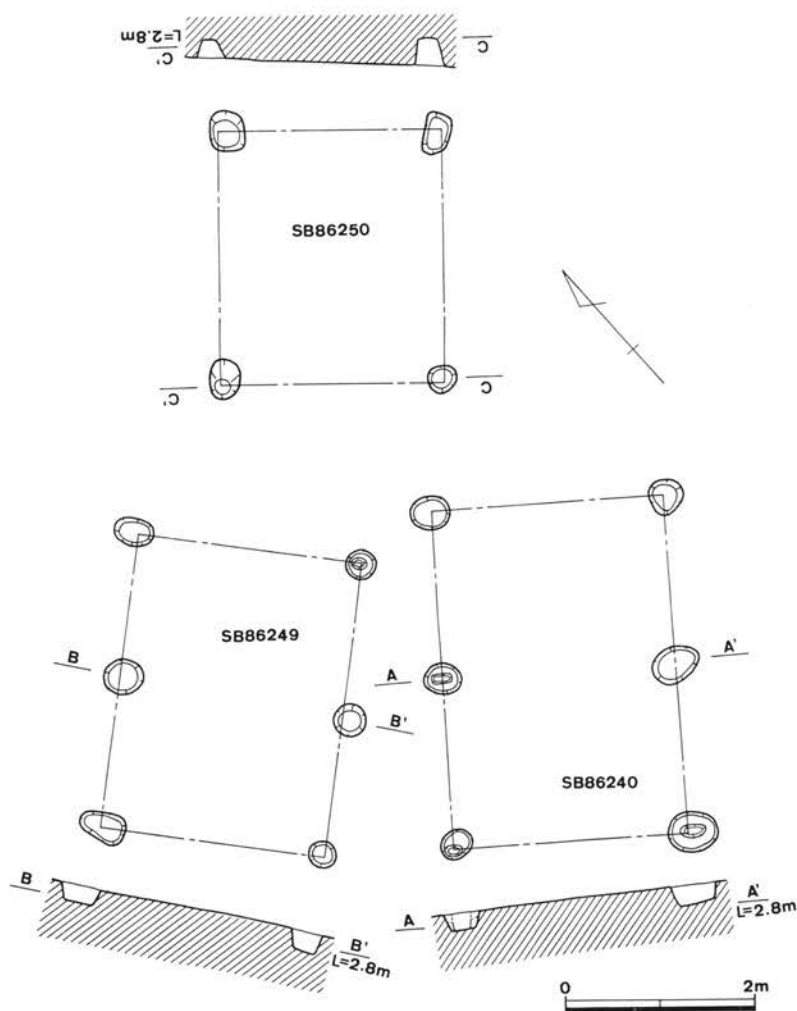
線文をもたない甕Cである。口縁部の発達は著しくなく、甕B₂と共通する形態をもつ。19は、大型で口縁端部を下方に大きく拡張する甕B₄である。把手をもつ。鉢は、ほとんど出土していない。高杯(AもしくはB)の脚柱部が床面から出土している。ほかに器台Cが埋土内から出土している。

SB86240(第309図) 弥生時代後期の包含層、淡黄灰色砂質土を埋土とする柱穴から構成される1間×2間の掘立柱建物跡である。8H区付近で検出した。梁間2.4m・桁行3.6mを測る。建物の方位はN38°Eである。柱の掘形は、円形を呈し、直径約40cmを測る。柱痕を検出できたものがあり、半截した丸太もしくは長方形に加工した木材を用いたものと思われる。柱穴内から後期後葉の土器片が出土したが、図化できるものはない。

SB86249(第309図) 8G区付近で検出した淡黄灰色砂質土を埋土とする柱穴から構成される1間×2間の掘立柱建物跡である。梁間2.4m・桁行3.1mを測り、SB86240に比べてやや規模が小さい。建物の向きはN50°Eである。柱の掘形は、円形を呈し、直径約40cmを測る。柱穴内から後期後葉の土器片が出土したが、図化できるものはない。

SB86250(第309図) 9G区付近で検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、南北2.7m・東西2.4mを測る。建物の方位はN40°Eである。柱の掘形は、円形を呈し、直径40cmを測る。柱穴内から後期後葉の土器片が出土したが、図化できるものはない。

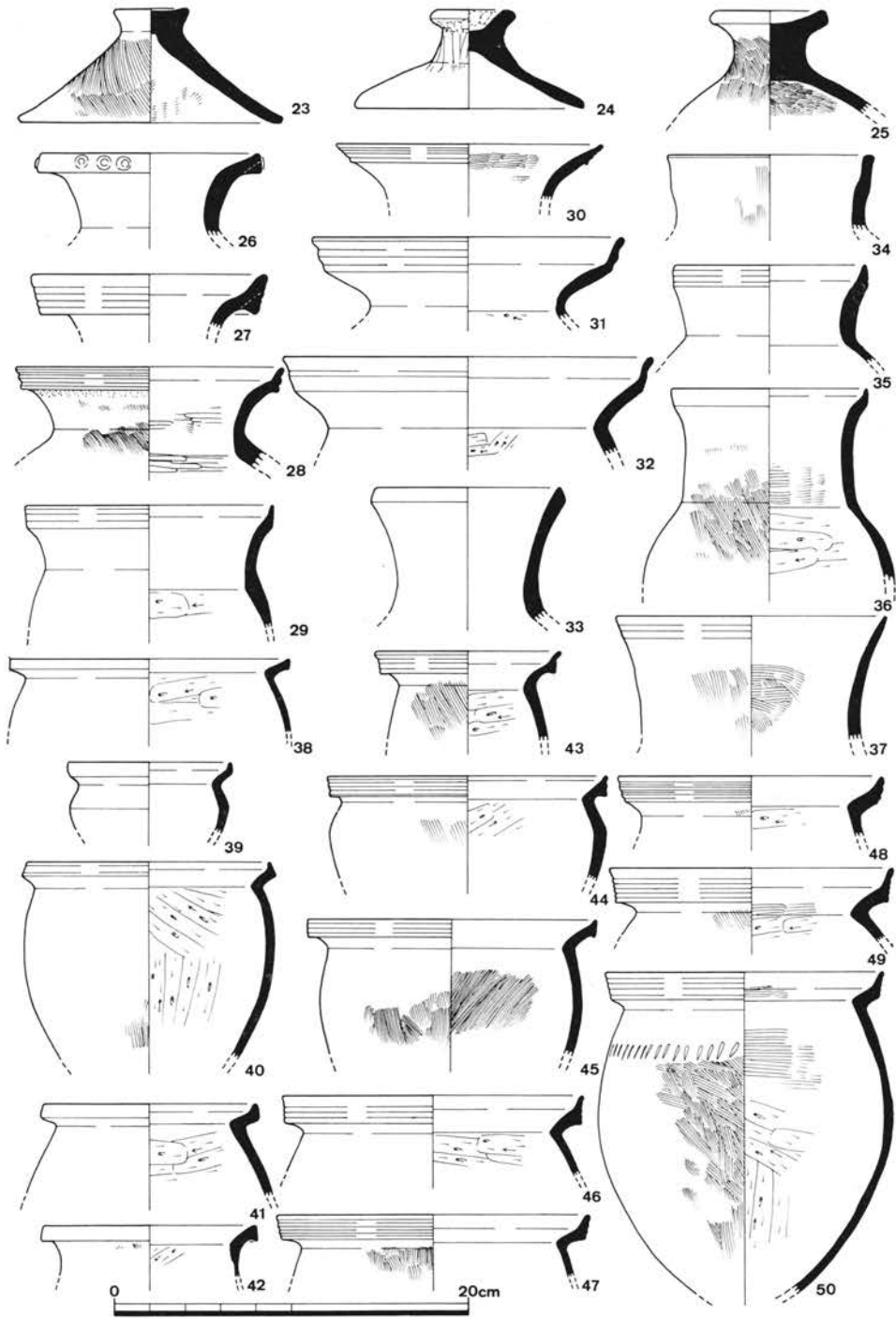
検出した3棟の掘立柱建物跡の内、建物方向の一致するSB86240・SB86250は、同時併存していた可能性がある。また、同じ埋土のピットは、他にも多数検出できており、この時期の掘立柱建物は、他にも存在すると思われるが、建物を復原するにはいたらなかった。



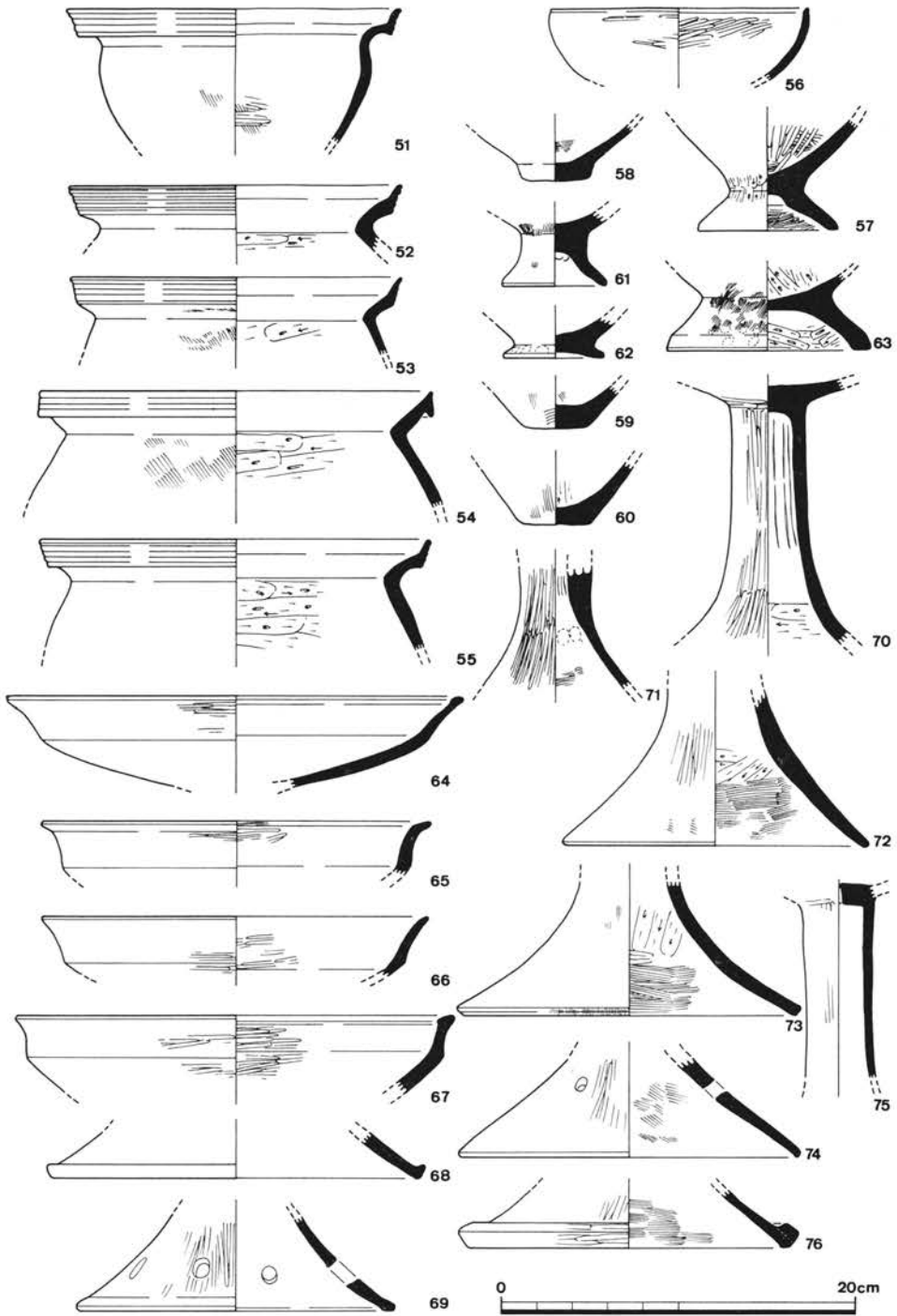
第309図 SB86240・SB86249・SB86250 実測図

SK86255(第310～312図) 工事掘削によって、すでに南側を失った長方形もしくは正方形を呈する平底の土坑である。検出面から床面までの深さ約20cmを測る。壁は直立する。埋土は、上層と下層に区分でき、主に上層から多量(整理箱にして2箱)の弥生土器が出土した。

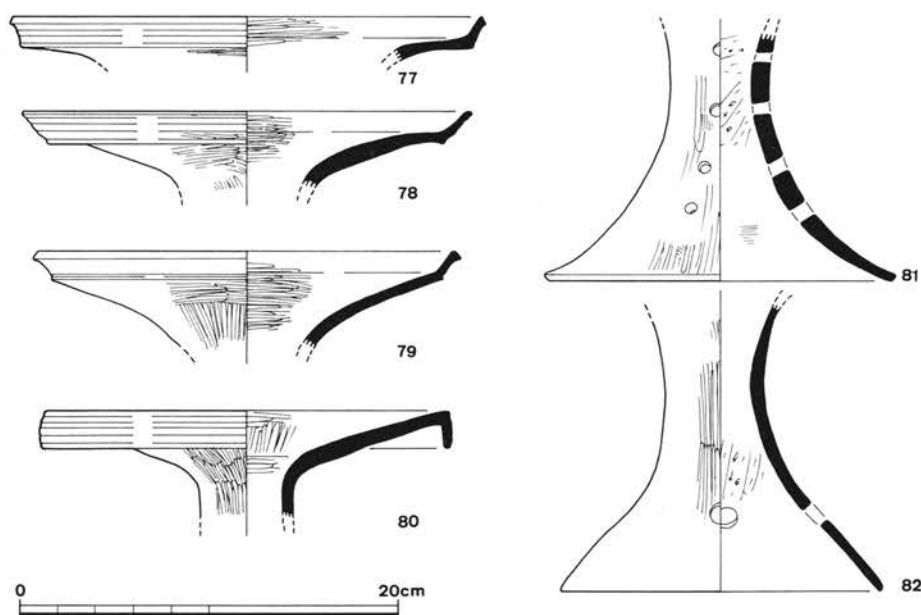
23～25は、蓋形土器である。26は、口縁下端部を拡張する壺A₁である。口縁端面に円形浮文を貼り付け、その上に竹管文を施したものである。27は、口縁端部を上下に大きく拡張し、擬凹線文を施した壺A₂である。28も壺A₂であるが、27とは異なった形態をもつ。口縁部下端に指頭痕を残す。壺B(29・35)は、頸部が明瞭でない。壺Cには擬凹線文を施すもの(31)と、施さないもの(32)がある。壺Dに属するものとして33・34・37がある。33は、



第310図 SK86255出土遺物(1)



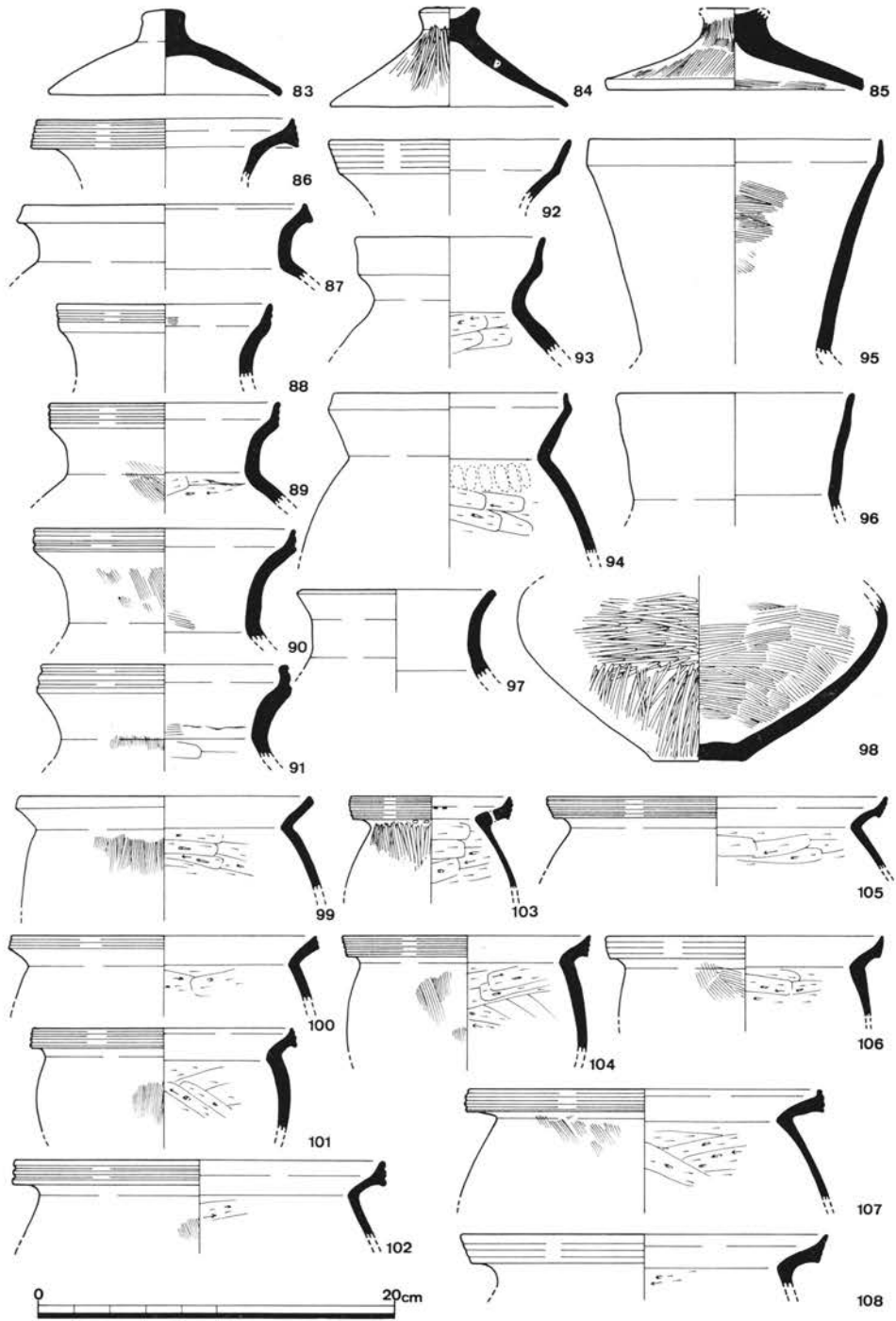
第311図 SK86255 出土遺物(2)



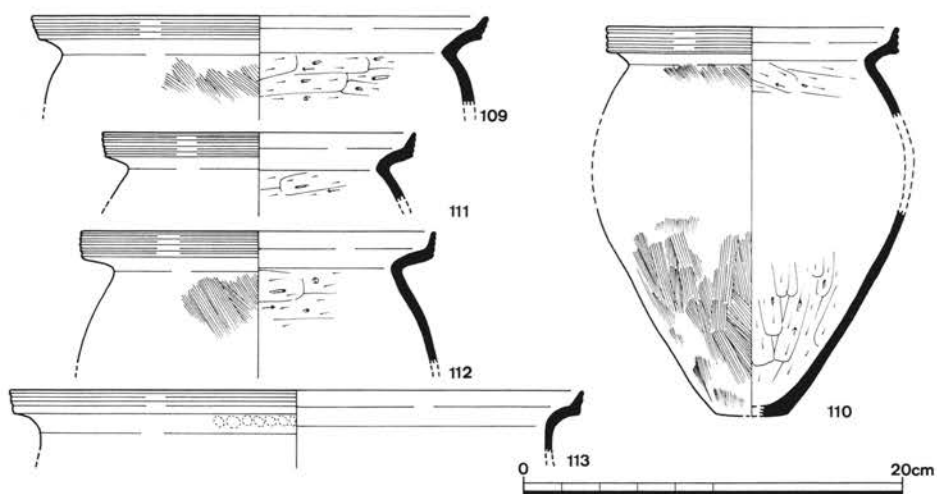
第312図 SK86255 出土遺物(3)

やや斜め上方にのびる口縁部をもつ。37は、口縁部外面に擬凹線文を施し、中期の壺Dの系譜を引くと思われる。長頸壺(壺E)には、頸部が短く、口縁部は外反して直上に短く立ち上がるもの(36)がある。口縁端部の擬凹線の有無は不明である。甕Aには、38がある。口縁端部はほとんど肥厚しない。甕B₁には42・44・45がある。甕B₂には40・41・43・46～48・50がある。50は、肩部にハケ状工具による刺突を施している。甕B₃には、49・52・53・55がある。甕B₄には54がある。鉢の出土数は、他の器種に比べて少ない。鉢Aには、39・51・56がある。39は、極めて精製された胎土を用いて造られた、丹塗りの小型品である。51は、やや大型で、頸部のナデの範囲が広い。56は、椀状を呈する。58は、鉢Bの底部である。高杯には高杯Bが1点存在するのみで、他はすべて高杯Aである。高杯Aには、口縁端部の内側が肥厚するものと、肥厚しないで口縁部が「S」字状を呈するものがある。脚部は、多くがラップ状に開き、脚端部が拡張しないが、76のように上方に拡張するものもある。75は、高杯の脚柱部であるが、杯部との接合部に直径2mmに満たない貫通しない穴が存在する。丹後地域の高杯にしばしば見られ、脚柱部と杯部の接合方法に起因すると考えられる。器台には器台Aと器台Cがある。器台Aには、口縁部に擬凹線文を施すもの(77・78)と、施さないもの(79)がある。器台C(80)は、垂下した口縁端部に凹線文を施す。

SK86256(第313～315図) 2B区付近で検出した浅い土坑状を呈する土器溜まりである。検出面からの深さは、中央部で約10cmを測るにすぎない。また、この地区は、弥生時代後期では自然堤防を下ったやや低い位置であり、遺構面が灰色粘土層で湿地化している。



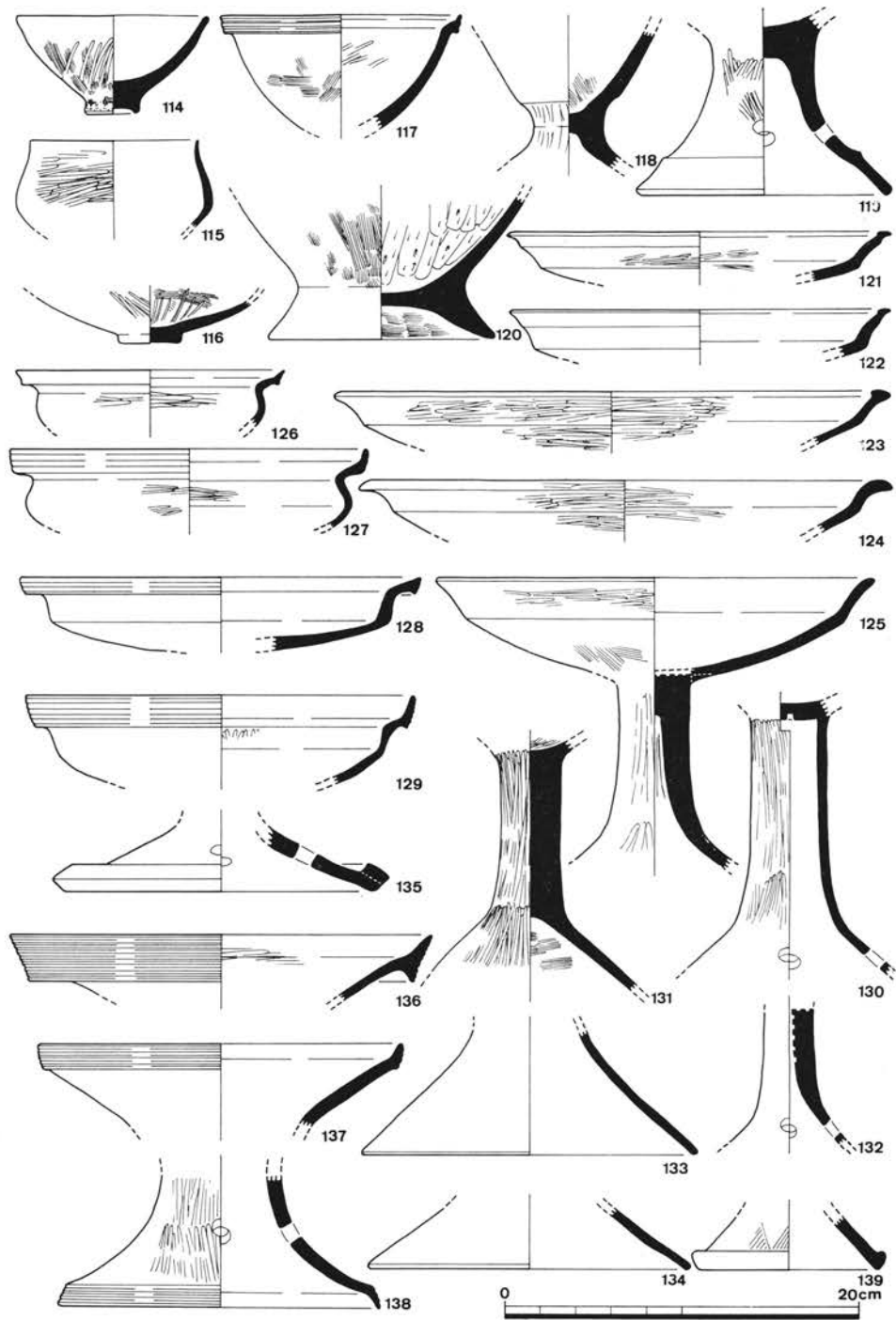
第313図 SK86256 出土遺物(1)



第314図 SK86256 出土遺物(2)

土器は、この土坑を溢れるように出土しており、いわゆるごみ捨て場的な存在であったと考えられる。土器が整理箱にして3箱分出土した。

出土した土器群には壺・甕・鉢・高杯・器台があり、器種構成に恵まれている。83～85は、蓋形土器である。内外面ともハケで調整する。86は、壺A₂である。87は、頸部の太いもので、口縁端部を上下に拡張する。擬凹線の有無は不明である。88～91は、壺Bである。91は、口縁部が内傾し、口縁端面に間隔の広い2条の擬凹線文を施す。92・93は、壺Cである。94・96・97は、壺Dである。94は、口縁端部を短く屈曲させる。96は、ほぼ直立する頸部をもつ。97は、外反する頸部をもつ。95は、長い頸部から口縁部が短く屈曲して直立する長頸壺(壺E)である。98は、胴の張った壺の体部である。外面を全面ヘラミガキする。99は、甕Aである。甕B₁には100～103がある。102は、他の甕と胎土が著しく異なり、精良で金雲母を多く含む。103は、紐穴をもち、外面をヘラミガキする小型の特殊な甕である。わずかに煤が付着している。104～109・113は、甕B₂である。107は、口縁端面が内傾し、体部が張る。113は、大型の甕で体部はほとんど張らない。110～112は、甕B₃である。110は、ほぼその全様がわかるもので、底部は、小さい平底をもつが、自立することはできない。鉢には、鉢A(117)・鉢B(114)・鉢C(115・116)がある。114は、外面をハケ調整の後、粗くヘラミガキする。117は、口縁部が短く、口縁端面に擬凹線文を施す。115は、内外面を丹塗りしている可能性がある。ほかに鉢の脚部(118・119)がある。高杯には、高杯Aと高杯Bがほぼ同じ割合で存在する。高杯Aには、口縁端部を肥厚するもの(121～123)と、口縁部が「S」字状を呈し端部が肥厚しないもの(124・125)がある。口径に大小が存在する。高杯Bには、口縁端部が斜上方に大きく拡張するもの(127・129)



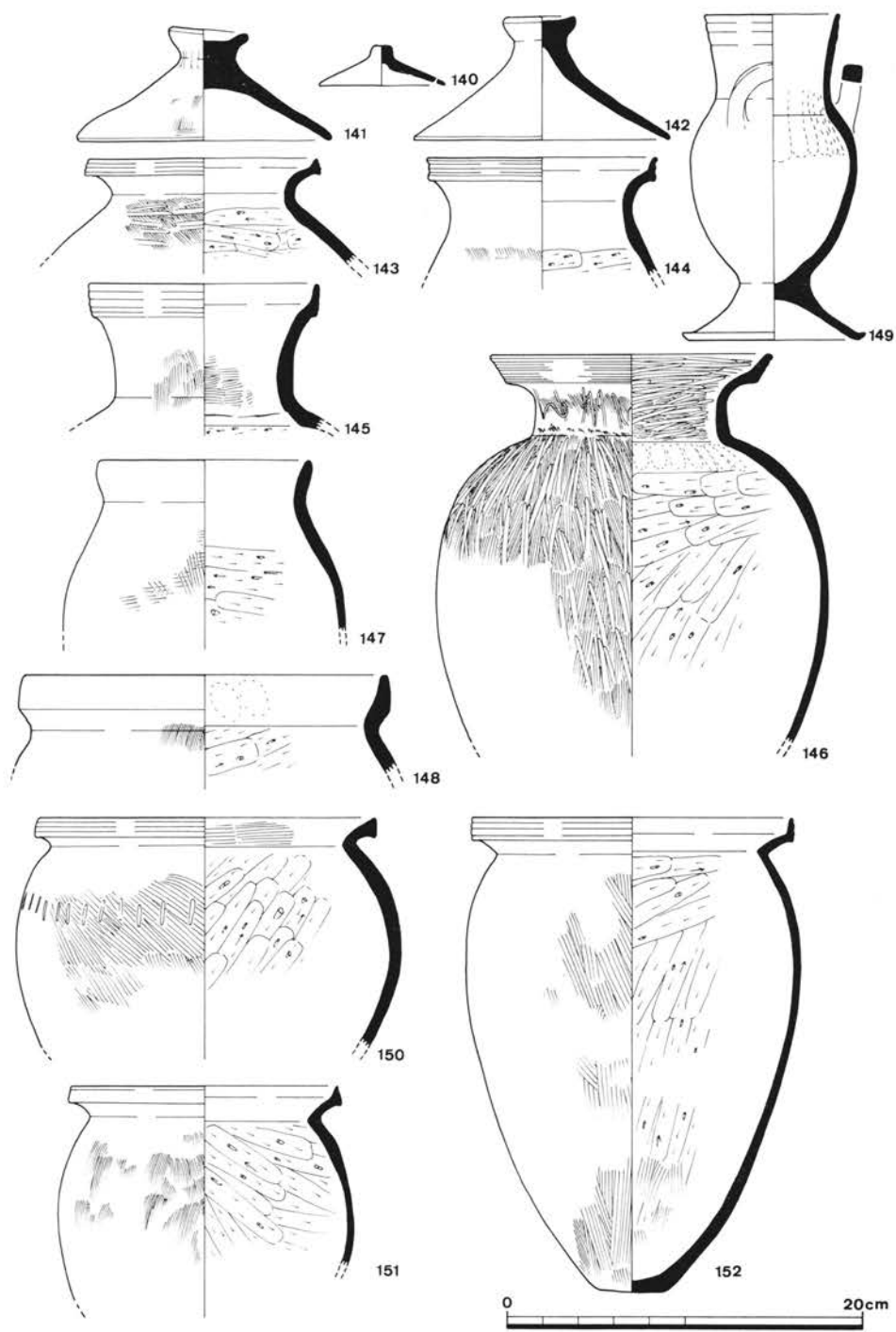
第315図 SK86256 出土遺物(3)

がある。高杯Aと同様に口径に大小が見られる。高杯の脚部には、脚端部が拡張しないもの(133・134)、上方に拡張するもの(135)、同じく脚端部を上方に拡張し断面三角形を呈し、裾部にヘラ描きによる鋸歯文を施すもの(139)がある。器台には、器台A(137)と器台C(136)があり、いずれも口縁端面に擬凹線文を施す。138は、器台の脚部である。脚端部を拡張し、擬凹線文を施す。

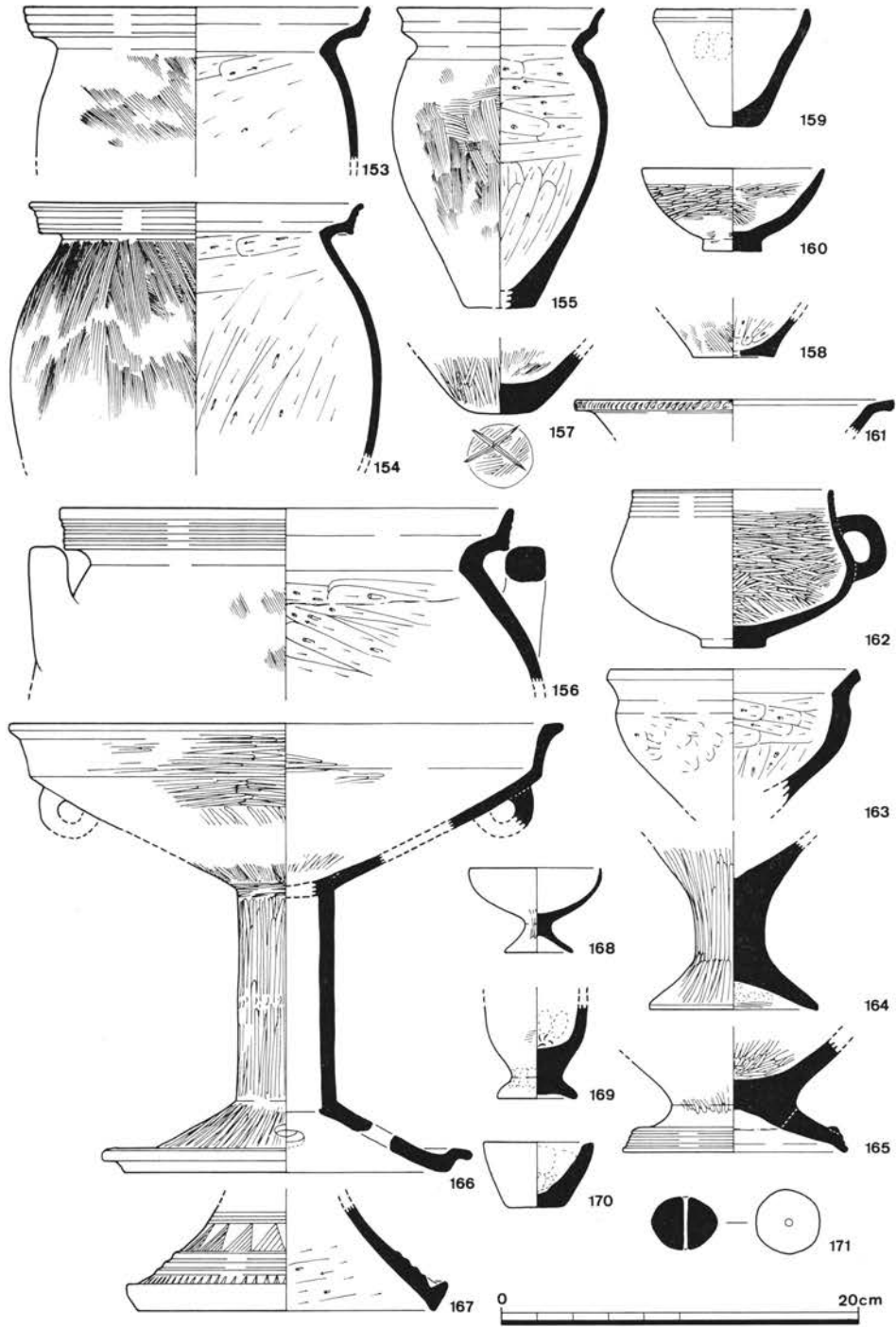
第3項 その他の遺構及び包含層出土遺物(第316～318図)

前項で取り上げなかった遺構から出土した遺物、及び包含層内出土遺物をこの項で取り上げる。包含層内(淡黄灰色砂質土)からは、土器以外に鉄器及び石器類(花崗岩質アブライト製の砥石・浮石質凝灰岩製の軽石等)が出土しているが割愛する。

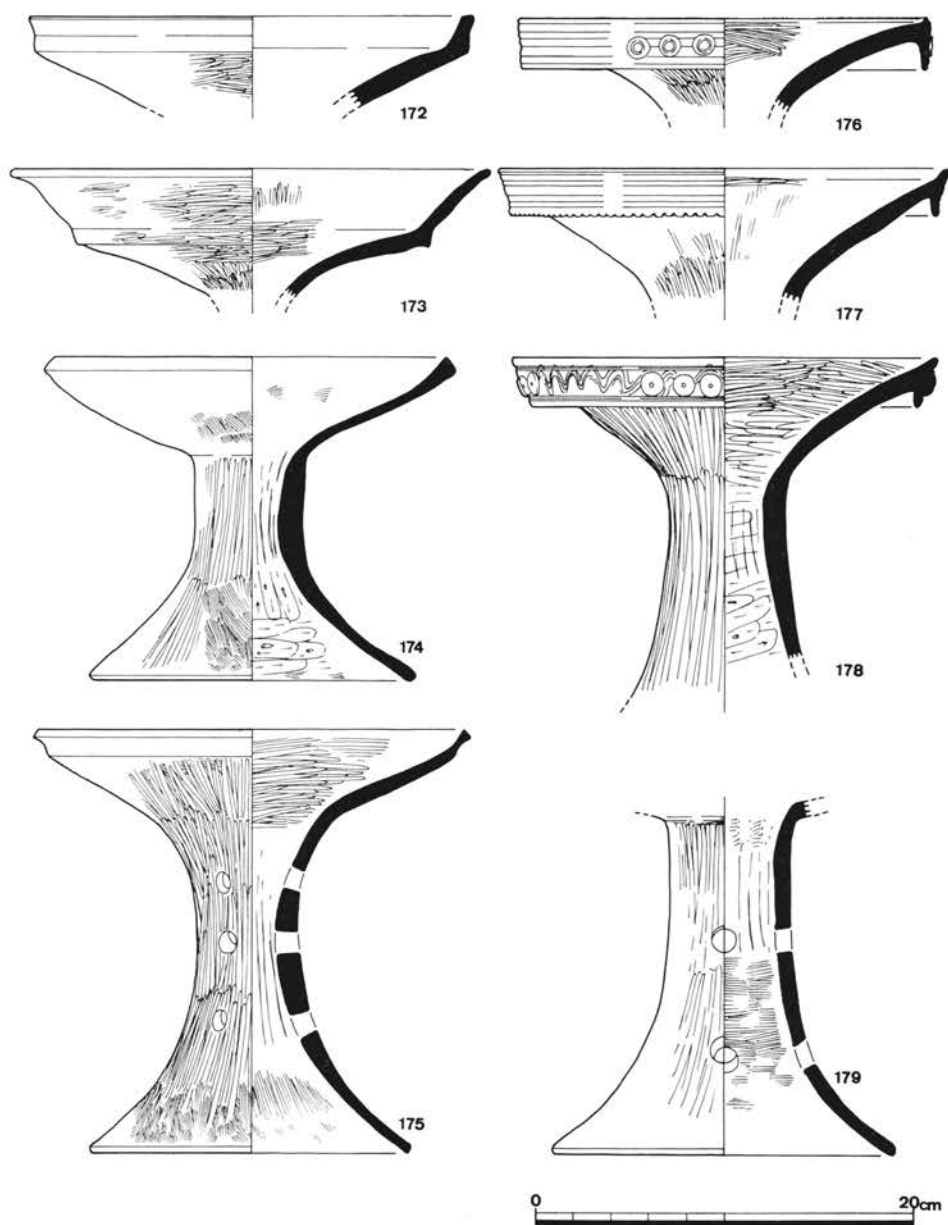
140～142は、蓋形土器である。140は、口径7cmを測る小型のもので、焼成後紐穴を2個穿っている。143は、肩部に部分的にヘラミガキを施した壺A₂である。144～146は、壺Bである。146は、ヘラミガキを多用したもので、肩部が他の壺Bに比べて張っている。内面頸部直下に指頭痕を残す。147・148は、とりあえず壺Dに分類する。149は、中期の壺Dの形態を留めた台付きの壺Dである。器壁は極めて薄い。150は、甕B₁である。球形の体部にハケ状工具を刺突する。151は、SX86254から出土した甕B₂である。152は、胴部の長い甕B₃である。153・154は、甕B₃である。154は、SX86254から出土した。155は、小型の甕Cである。157は、壺の底部である。壺の底部にはこのようなヘラ記号をもつものが多数ある。158は、甕もしくは壺の底部を焼成後穿孔して甕として利用している。弥生時代後期には有孔鉢(鉢D)が存在せず、末期になって専用の器種が誕生する。159は、平底を呈する小型の鉢である。160は、鉢Bである。161は、口縁端部にキザミメを施すもので鉢と思われる。162は、内外面をていねいにヘラミガキし、口縁部に浅い擬凹線文を施した鉢Cである。163は、外面にヘラケズリの痕跡を残す鉢Aである。164・165は、鉢の脚部である。166は、杯外面に半環状把手をもつ高杯Aである。脚柱部に意図的な爪の圧痕文を施し、脚端部の拡張が著しい。167は、高杯の脚部である。脚端部が断面三角形を呈し、裾部の加飾が著しい。裾部の文様構成は、上から3条の沈線文、ヘラ描きによる鋸歯文、2条の凹線文、先端部が長い三角形を呈する工具による刺突文である。山陽地域からの搬入品と思われ、中期後葉にまで遡る可能性がある。台付き甕の脚部の可能性もある。172・175は、器台Aである。175は、脚柱部に3方向の計9個の円孔をもつ。173は、器台Bである。174は、器台Dである。176～178は、下方に拡張した口縁端面の加飾の著しい器台Cである。168は、鉢の形態をもつミニチュア土器である。169・170は、同じく手捏ね土器である。171は、柱穴内から出土した紡錘車である。やや扁平な球形を呈する。



第316図 岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(1)



第317図 岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(2)



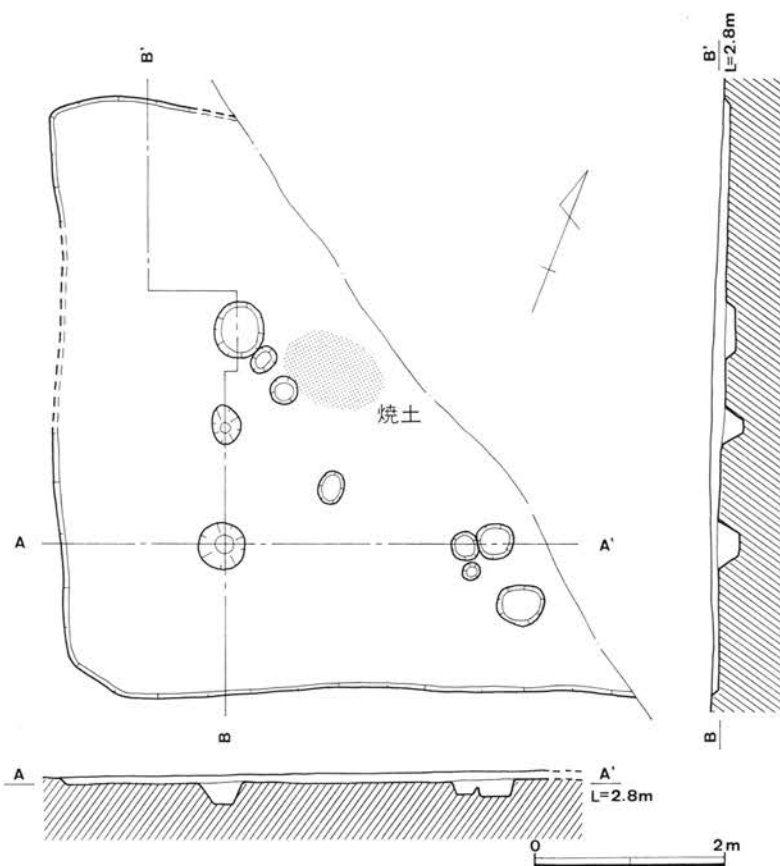
第318図 岡安地区弥生時代後期包含層ほか出土遺物(3)

(肥後 弘幸)

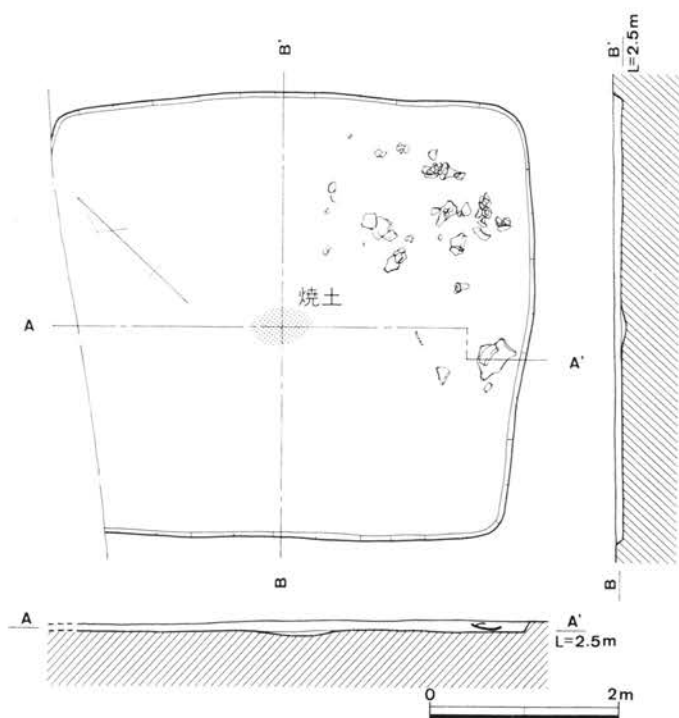
第3節 古墳時代

第1項 概要

古墳時代前期の包含層(褐色粘質土)の下層から掘り込まれた、竪穴式住居跡が2基(SH86241・SH86247)存在する。この面で遺構検出作業を試みたが、輪郭が不明瞭であったため、最終的に弥生時代後期の遺構面で検出した。2基ともに方形を呈し、中央部に炉をもつ。また、同一面で、弥生時代後期の柱穴とは埋土により明瞭に区別できる柱穴群(柱穴内に古墳時代前期の土器片を含む。)を検出したが、建物を復原できなかった。2基の竪穴式住居跡のほかに、奈良時代の竪穴式住居跡と同一面で検出したもの(SH86151)とやや下層で検出した不明方形土坑(SH86152)があるが、時期や建物規模に不明な点が多いので割愛する。また、遺物についてはSH86247の床面資料を報告するにとどめる。



第319図 SH86241 実測図



第320図 SH86247 実測図

第2項 検出遺構及
びそれに伴う
遺物

SH86241(第319図)

9F区付近で検出した方形竪穴式住居跡である。検出できた一辺が、6.5mを測る。検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は、2つしか検出できなかったが4柱あったと想定できる。床面中央部に焼土が広がっており、炉跡と考えられる。床面から高杯が出土している。

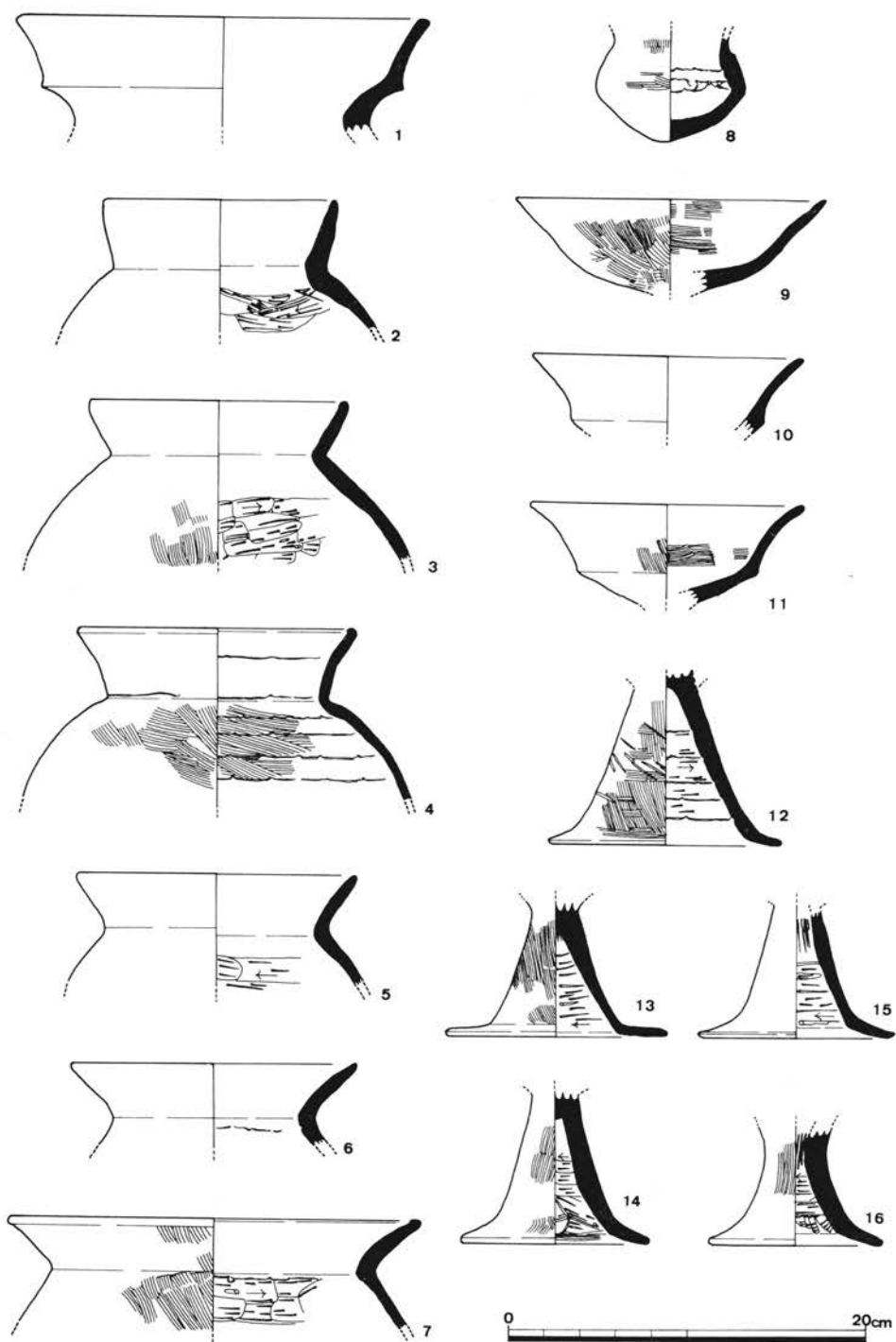
SH86247(第320～322図) 9C区付近で検出した方形竪穴式住居跡である。一辺4.7mを測る。検出面からの深さは、約20cmを測る。床面中央部に焼土からなる浅い土坑があり、炉跡と考えられる。柱穴等の施設は、検出できなかった。床面には、完形であったと思われる多数の遺物が散乱しており、何等かの契機で突然住居を廃棄したと考えられる。床面に散乱していた遺物の中には碧玉製の勾玉もある。

出土した土器には、壺14%(4個体 A 1点, G 1点, K 2点), 甕25%(7個体 C 6点, F 1点), 小型丸底壺4%(1個体 Bc 1点), 高杯50%(14個体 D 2点, F 3点, 脚台部 9点), ミニチュア土器7%(2個体)がある。総個体数は28点以上である。

壺A(1) 擬口縁部は、断面が正三角形に近く、器壁は全体にやや厚い。外面は横ナデ調整、内面は摩滅して不明である。明褐色を呈し、口径22.4cmを測る。

壺G(2) 内面体部はヘラケズリ、頸部から口縁部にかけては横ナデで調整する。外面は摩滅していて不明である。色調は、外面が淡褐色及び明橙色、内面が明橙色を呈する。焼成はややあまく、口径13.0cmを測る。

壺K(3・4) 口縁端部は、内面にやや肥厚する。体部外面はハケ、3の内面はヘラケズリ、4はハケを施す。2点とも口縁部は内外面に横ナデ調整を加える。4は、調整・胎



第321図 SH86247 出土遺物

1 : 壺A, 2 : 壺G, 3・4 : 壺K, 5・6 : 甕C_i, 7 : 甕F, 8 : 小型丸底壺Bc,
9 : 高杯D, 10・11 : 高杯F, 12~16 : 脚台部

土・焼成ともにやや不良である。色調は、3が淡褐色、4が暗黄褐色を呈する。口径は、3が14.6cm、4が15.6cmを測る。

甕C₁(5・6) 5の体部内面はヘラケズリ、外面はハケと推定される。6の口縁部は内外面とも横ナデを施す。その他は摩滅しており調整は不明である。胎土は、ともに密で、6の焼成はややあまい。色調は、5が暗黄褐色、6が淡褐色を呈する。口径は、5が15.4cm、6が15.8cmを測る。

甕F(7) 体部は外面にハケ、内面にヘラケズリ、口縁部は、外面にハケの上に横ナデ、内面に横ナデを施す。胎土は密で、焼成はややあまい。淡褐色を呈し、口径23.1cmを測る。

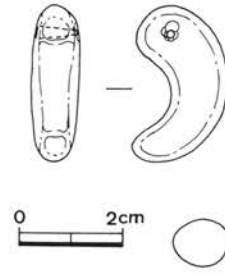
小型丸底壺Bc(8) 口縁部を欠損するがBcに属すると考えられる。外面は摩滅するが、ハケ調整と推定される。内面は粘土紐接合痕を残し、粗雑である。胎土は、大型砂粒を含み粗い。明褐色を呈する。

高杯D(9) 口縁端部は尖りぎみにおさまる。杯部内外面にハケを施し、内面にはさらにナデを加える。胎土はやや粗く、明褐色を呈し、口径17.4cmを測る。

高杯F(10・11) 11は、杯体部外面をナデ、口縁下半部に内外面ともハケを施した後、口縁部全面に横ナデを加える。色調は、2点とも暗褐色を呈する。口径は、10が15.0cm、11が15.4cmを測る。

脚台部(12~16) 高杯の脚台部である。13は、ゆるやかに広がる柱状部から屈折して水平ぎみに大きく開く裾部をもつ。ほかの4点は、裾部までなだらかな円錐状を呈する。柱状部外面は、15がナデである以外、ハケ調整、内面はすべてヘラケズリが施される。なお、12の外面にヘラで押さえた痕跡が残る。裾部は、14の内面にハケが見られる以外、内外面ともにナデ調整がなされる。12~14の外面柱状部から裾部にかけて黒斑が見られる。胎土は、12が密で、その他はやや粗い。色調は、12・13が明褐色、14が外面明黄褐色、内面暗褐色、15が外面淡褐色、内面明褐色、16が暗黄褐色を呈する。裾部径は、12が12.9cm、13が12.3cm、14が10.5cm、15が11.0cm、16が9.8cmを測る。

勾玉(第322図) 暗緑色を呈し碧玉製である。長さ2.9cm・厚さ0.8cmを測る。片側穿孔である。



第322図 SH86247出土勾玉

(林 日佐子)

第6章 総括

第1節 志高遺跡の変遷

ここでは、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の志高遺跡の様相について簡単に記述することで、前章までのまとめにかえたい。

(1) 縄文時代

第7次調査A地区の下層で、縄文時代早期末から前期末の良好な包含層と、少量の遺構群を検出した。また、包含層から層位的に出土した土器群は、近畿地方では他に類を見ない豊富なものであった。この土器群を指標にすると、A地区下層を5期に区分することができる。^(注1)

早期末葉 12～13層で土器群が出土した。また、この層では、珪藻分析の結果から当時陸地化しており、集落が存在していた可能性が高い。標高0.0m付近という極めて低い地点に立地する。

前期初頭 9～10層で包含層が認められ、羽島下層Ⅱ式に代表される土器群が出土した。また、5基の炉跡が見ついている。標高0.8m付近に位置する。

前期前葉 7層で北白川下層Ⅰ式に代表される土器群が出土した。遺構を検出することができなかった。土器は、摩滅しておらず、流入したものととは考えにくい。

前期中葉 5層から北白川下層Ⅱ式に代表される土器群が出土した。また、炉跡をもつ土坑をはじめとする遺構群も存在する。

前期後葉・末葉 1～3層から北白川下層Ⅲ式及び大歳山式に代表される土器群が出土した。また、住居跡の可能性の高い大型土坑をはじめ、炉跡・土坑等の遺構群を検出した。

以上のように、この地区では標高0.0～2.0m付近の低地に早期末から前期末にかけての集落跡の存在が明白である。

なお、調査結果から、集落は南西方向に広がっていた可能性がある。また、工事掘削時に多量の貝が出土したとの報告があり、貝塚の存在も考えられる。

近年、日本海側を中心に低湿地の縄文集落が検出されているが、そのなかでも志高遺跡は、とりわけ低位置に立地し、縄文海進時の海水面の高さを考えると理解しにくい。^(注2) 由良川下流域での自然堤防の発達と考え合わせて検討することが今後の課題である。

志高遺跡内から縄文時代後期を中心とする土器群が散発的に出土しているが、まとまっ

た遺構群を検出するにはいたらなかった。しかし、土坑等の遺構もあり、遺跡内に集落が存在したことはほぼ確実で、カキ安地区(第3次調査)及び舟戸北地区付近に集落跡の存在が予想できる。^(注3)

(2) 弥生時代

弥生時代になると志高遺跡の様相がやや詳細にわかってくる。以下、各時期ごとに集落の変遷を述べる。なお、本文中の「志高弥生Ⅰ期～Ⅹ期」は、遺構群の変遷を加味して土器様式に基づいて区分したもので、その詳細は後述(本章第3節)する。

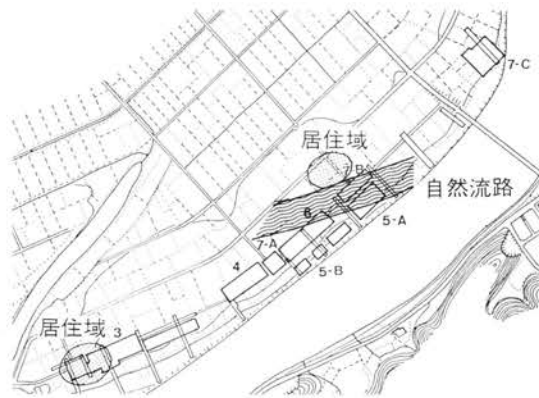
①前期(志高弥生Ⅰ期・第323図)

弥生時代になって志高遺跡に人々が居住するようになるのは、出土土器から見て、前期でも新しい時期(畿内第Ⅰ様式新段階)のようである。居住域がカキ安地区(第3次調査)で検出されている(居住域1)ほか、SD86240の出土遺物から、舟戸北地区の北西に居住域2が存在した可能性がある。また、第6次調査区では、弥生時代中期遺構面直下に砂層の堆積が著しく、当時自然流路が大きく広がっていた可能性が高い。その場合、この流路は、由良川の本流もしくは分流として機能し、河川を挟んで自然堤防上に2つの前期集落が存在していたと予想される。

この時期以前(畿内第Ⅰ様式・中段階)に丹後町竹野遺跡・峰山町途中カ丘遺跡等では集落が営まれているのに対して、由良川下流域ではこの時期の集落遺跡がみつかっていない。^(注4) 現段階では、この地域に弥生文化の到達がやや遅れる可能性がある。

②中期前葉(志高弥生Ⅱ期)

この時期の集落の様相については不明な点が多い。居住域1付近にこの時代の土坑が営まれていることから、居住域1はやや位置を変えて付近に存在するのであろうか。舟戸北地区の下層遺構群(貼石墓群)の基盤層である灰色粘土層はこの時期に形成され、そのなかに居住域2からの流入物と考えられる土器が含まれている。このことから、居住域2も存在している可能性が高い。自然流路は確実に埋没する傾向にある。



第323図 弥生時代前期(志高弥生Ⅰ期)の集落分布

③ 中期中葉(志高弥生期III~IV
期・第324図)

この時期の後半(志高弥生IV期)に、志高遺跡内の集落構造に大きな変化が生まれる。居住域1は、後半にまで残っている(竪穴式住居跡9・10)が、その機能を失い、方形周溝墓群(墓域1)が造営されるようになる。舟戸南地区の自然流路付近には、居住域3 (SH85202



第324図 弥生時代中期中葉(志高弥生III・IV期)の集落分布

・SH85210等)が出現する。この居住域は、後期初頭まで位置を南西に移動させながら継続する。

居住域3に営まれる竪穴式住居跡の構造は、円形を呈し、直径6~8mを測り、多くが床面中央部付近に炭・灰の堆積する直径1m前後の土坑を持つ^(注5)。柱穴の数は不明なものが多いが、6本前後を数えるものと考えられる。柱の建て替えは認められるが、住居の竪穴を拡張する等の大幅な建て替えは認められない。床下もしくは床面に排水溝と考えられる溝状遺構を持つものがある^(注6)。居住域内では玉作りを行う^(注7)。この特質は、この居住域が消滅するまで大きな変化は認められない。

SD86240から遺物が出土しており、居住域2はこの時期の前半(志高弥生III期)まで存続している。しかし、この時期に消滅する。自然流路は埋没する傾向にあり、すでに水の流れている幅は6m前後である。

④ 中期後葉(志高弥生V期~VI期・第325図)

居住域3は隆盛し、住居の数も増加傾向にある。住居跡の位置が前時期に比べて自然流路からやや南西に移動し、墓域1に接近してくる。墓域1と居住域の間には大溝(第4次調査流路跡)が存在し、墓域と居住域を画している。この時期の住居跡には、SH85205・SH86203・SH86204(以上志高弥生V期)・SH86201・SH86212(以上志高弥生VI期)がある。居住域3は、自然堤防の傾斜から見て、現由良川の上に大きく張り出し大きく広がっていた。志高遺跡が由良川下流域の拠点集落として発展していた可能性は極めて高い。

居住域3の特筆すべき出土遺物として、銅剣形石剣を始めとする磨製石剣と他地域から搬入された土器群がある。SH86212内からは銅剣形石剣が半分に破砕され、埋納された状態で出土しており、また、他の銅剣形石剣もことごとく破砕されて出土している点は興味深い。銅剣形石剣を用いた祭祀が行われた可能性があり、それが急激に廃絶されたい。

出土した土器は、在地の赤褐色を呈するもののほかに、他地域からの搬入品と考えられるものが多く存在する。土器全体の様相は、播磨・摂津地域の影響がうかがえると言える。加えて、出土土器の構成にも注目すべき点がある。磨製石斧・打製石斧・砥石が、多量に出土するのに対して、石庖丁の出土は皆無に等しい^(注8)。石庖丁の出土が少ないことは丹後地域に共通する事例とも言える。また、打製石斧の出土は、弥生時代中期では異例のことであり、志高遺跡における生産活動の実態が注目される。

墓域1では、前段階から引き続き方形周溝墓群が営まれ続けるが、方形周溝墓以外に土壙墓群も存在するようである。

居住域3の北側に存在した自然流路は、この時期に流路底部に泥炭層が一挙に堆積している。水位が上昇するか、もしくは自然流路の機能を停止し、落ち込みとして存在するに留まるかである。この時点で、確実に自然流路は、志高遺跡地内での由良川分流としての役目を失うのである。居住域3から落ち込み部への傾斜部分に多量の弥生土器が投棄されており、その中に完形の土器群が存在する。これは、落ち込み部を隔てて墓域2が存在することと何等かの関係があると思われる。

舟戸北地区では、墓域2が出現し、貼り石をもつ墓(貼石墓)が営まれるようになる。貼石墓は、1号墓や3号墓で明らかなように、墳丘上に複数の埋葬主体部をもち、墓域1に見られる方形周溝墓とは様相が異なっている。2号墓は、墳頂部が未調査ながら、丹後地域を中心に最近相次いで発見された貼石墓を代表するものである^(注9)。その規模は、一辺15.5mと比較的大きい。規模の点では、墓域1内にも規模の大きな方形周溝墓(17号方形周溝墓)が存在し、遺跡内で突出する大きさと考えすることはできない。また、中期後葉は、畿内及びその周辺部で大型の方形周溝墓(たとえば、加美遺跡・玉津田中遺跡・朝日遺跡)が営まれる特異な時期であることから、その規模についての問題性も志高遺跡についてのみ言えるものではない。志高遺跡の貼石墓の問題点は、集落内における3種類の墓(貼石墓・方形周溝墓・土壙墓)の共存にある。その中で主体部を複数もつ貼石墓は、最も労働力を必要とする墓である。一方、方形周溝墓では墳丘内に埋葬施設が1基しか存在せず、当時の有力な個人が想定されている。その意味で、貼石墓の被葬者と方形



第325図 弥生時代中期後葉(志高弥生V・VI期)の集落分布

周溝墓の被葬者の関係を考えることが今後の課題であろう。

⑤ 弥生時代中期末～後期前葉
(志高弥生VII期・第326図)

居住域3がこの時期の終わりにその終焉を迎え、集落全体が解体する方向に向かう。

居住域3は、さらに南西方向に移動する。この時期の住居として、SH86202・竪穴式住居跡22が存在する。墓域1は、その機能を停止した可能性が高い。墓域2につい



第326図 弥生時代中期末～後期前葉(志高弥生VII期)の集落分布

ては、その多くが調査範囲外に広がると思われるため不明である。

新たに周辺の低丘陵上に墳墓群(墓域3・墓域4)が営まれるようになる。墓域3は、シゲツ墳墓群である。^(注10)シゲツ墳墓群と同様の立地であり、いくつかの平坦面をもつシゲツ東墳墓群(墓域4)も、この時期から墳墓の造営が始まる可能性がある。^(注11)例えば、弥生時代後期の由良川を望む丘陵状の墳墓遺跡に、舞鶴市水無月山遺跡・綾部市久田山遺跡の例がある。^(注12)これらでは、両者とも区画をもたない土壇墓群の存在が確認されている。このように、当時の周辺地域の墳墓では区画をもたない土壇墓群が多くなることから、墓域3・墓域4でも同じく土壇墓が多く営まれた可能性がある。

また、丹後半島・但馬では弥生時代後期には台状墓群が丘陵上に営まれており、^(注13)由良川流域でも後期後半になると、福知山市豊富谷丘陵でもその影響を受けた台状墓群の造営が開始されている。^(注14)志高遺跡周辺では、先述の土壇墓群の存在が明確なので、台状墓が導入されるのは、シゲツ墳墓群で認められるように、古墳時代前期に入ってからと考えられる。

⑥ 弥生時代後期中葉(志高弥生VIII期)

調査地内からは当該期の遺構が検出されておらず、集落のようすは全く不明である。

⑦ 弥生時代後期後葉～末期(志高弥生IX期～X期)

後期後葉(志高弥生IX期)には岡安地区に集落(居住域4)が出現し、竪穴式住居・掘立柱建物からなる居住域を形成する。竪穴式住居跡は小型で隅丸方形を呈し、壁に沿って特殊ピットをもつ。中期には検出できなかった掘立柱建物跡の存在は、居住域内での住居構成に大きな変革をもたらしていると考えられる。居住域4は、弥生時代後期の洪水とともに廃棄され、その存続時間は極めて短い。後期集落については、由良川流域には比較的多数

知られており、志高遺跡周辺で発掘調査を行った遺跡では必ずといってよいほど後期の集落遺跡が検出される。^(注15)

出土した土器は、胎土がすべて似通っており、他地域からの搬入土器と考えられるものは極めて少なく、居住域3の中期の土器群とはその様相が大きく異なる。

弥生末期(志高弥生X期)では、自然流路に伴う落ち込み部出土の土器から、舟戸北地区の北方に集落の存在が予想されるが、その実態は不明である。



第327図 弥生時代後期後葉～末葉(志高弥生IX・X期)の集落分布

(3) 古墳時代

志高遺跡の古墳時代については、この地域の土器区分のあいまいさから、前・中・後という時期区分を用いず、須恵器出現をもって前期・後期と区分して記述している。なお、前期の土器の編年を後論に付載した。

古墳時代前期の遺構は、カキ安地区と岡安地区にやや密集してみられる。舟戸地区でも土坑・溝等の遺構が存在する。カキ安地区及び岡安地区には、前期の後葉の居住域が存在する。これ以前の居住域については、自然流路に伴う落ち込み部や土坑出土の土器類から、調査区外に存在すると思われる。

居住域は、方形竪穴式住居と掘立柱建物からなると考えられるが、後者については不明である。竪穴式住居跡は、方形を呈し、床面中央部に炉跡を持つ。

自然流路は、古墳時代前期前葉にはすでに大きな落ち込みとして残っているだけで、中葉にはすっかり埋没してしまう。花ノ木遺跡でも旧由良川と考えられる大きな河川が埋没しており、この時期、由良川河道に大きな変化があったことが予想できる。由良川は、弥生時代中期にはいくつかの分流が存在し(舟戸北・南地区にまたがる自然流路もそのひとつであろう)、後期には大きなひとつの流れになり、古墳時代前期にその流れが大きく変わると考えられる。以降、中世までその変動はあまりなく、自然堤防が発達する。その後、中世～近世にかけて再び大きな変動があり、現河道が成立すると考えられる。

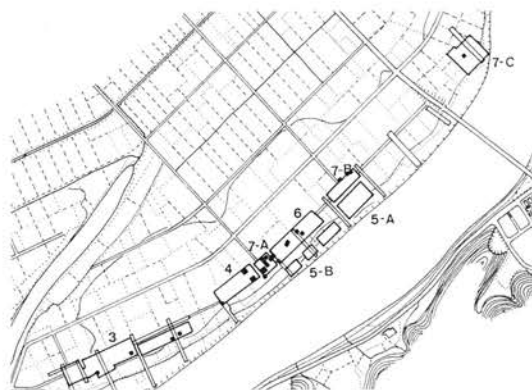
古墳時代後期(須恵器出現から7世紀中ごろまで)の遺構は、志高遺跡全体を見通しても極めて少なくその状況は不明である。前期中葉に自然流路が埋没したため、カキ安地区～

舟戸北地区まで、地区は1本の連続する自然堤防として発達しつつある。

(4) 7世紀～8世紀中頃(第328図)

古墳時代前期の由良川の変動以降、著しく発達を続ける自然堤防上に方形の竪穴式住居(多くが竈をもつ)が営まれる。住居跡は、

8世紀前後では第7次調査A地区にやや密集する傾向にあるが、それ以外は比較的平均に存在する(第328図)。住居の多くは、竪穴式住居跡であるが、第4次調査区には平地式住居も存在する。竪穴式住居跡の多く(3次調査区の青野型住居を含む)は、隅部に竈を造り付けたものである。第7次調査A地区を中心に存在する住居跡は、出土遺物から、7世紀後半～末の古い住居として平地式の住居跡20・21(第4次調査)・SH86103・SH86104があり、8世紀中頃の新しい住居としてSH86101(SH85101)・SH86111等がある。この地区の竪穴式住居跡は、建物方位に統一性がみられることが特徴である。



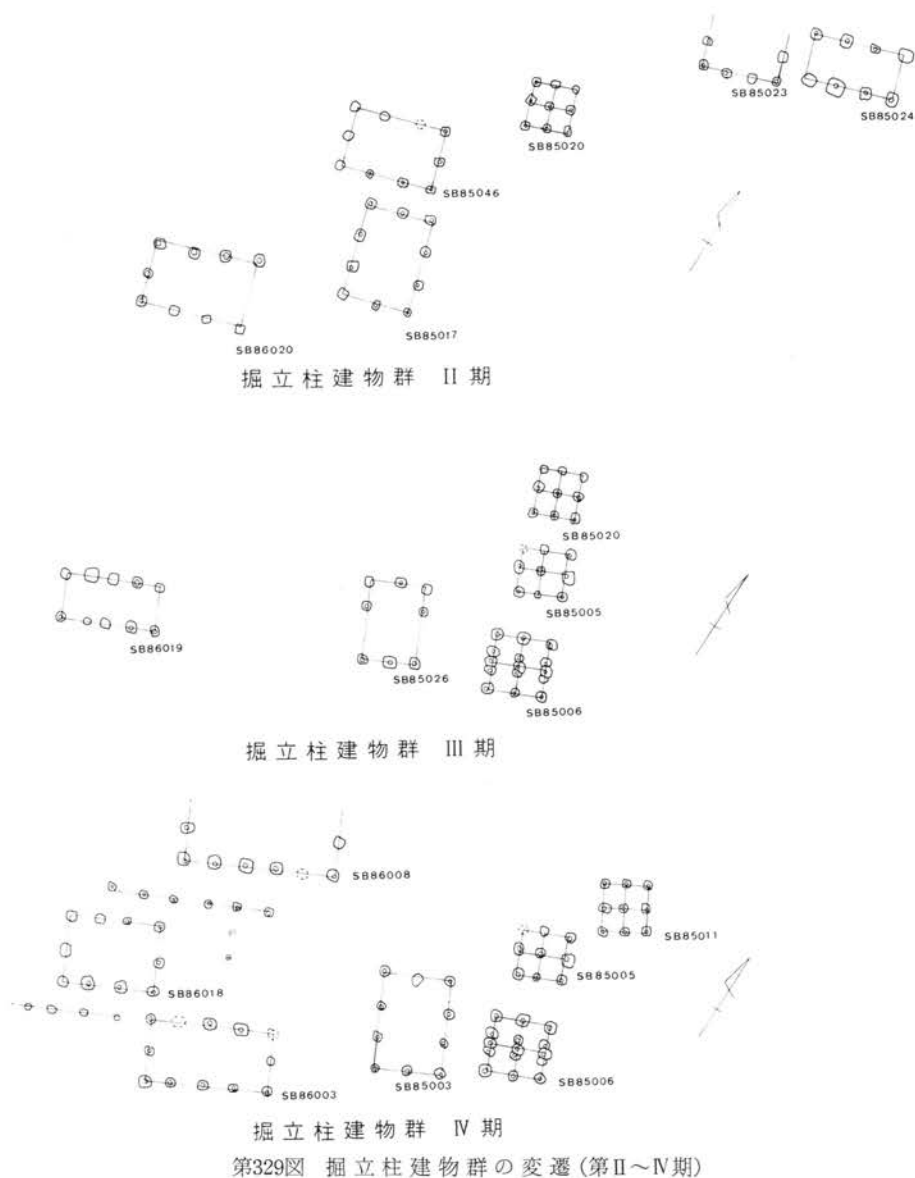
第328図 7～8世紀中頃の竪穴式住居跡の分布

(5) 8世紀中頃～9世紀前半(掘立柱建物群の時代)

舟戸南地区では、竪穴式住居から掘立柱建物に建物構造が変化し、倉庫を伴う整然と配置された掘立柱建物群が成立する。時をほぼ同じくしてカキ安地区(第3次調査地区)でも掘立柱建物群が出現する。ここでは前者の建物群をとりあげ、検出面と建物の柱穴の切り合い関係及び建物方位を基準にしてその変遷を考えたい。なお、掘立柱建物跡群の時期については、柱穴内出土の遺物を参照したが、出土量に限界があり、以下のように設定した。掘立柱建物跡群に先行するSH86101(SH85101)・SH86111を8世紀中頃と考え、洪水による掘立柱建物群消失時にあたるSX85001の上限を9世紀第2四半期と考えた。

①第Ⅰ期

整然と配置された掘立柱建物群の出現前の時期である。次に説明する第Ⅱ期以前の掘立柱建物群で、SB85027・SB85021がある。SB85027に平行して存在する方形土坑(SK85044)もこの時期に属する可能性がある。建物群の中心は調査区の北西に広がっている。7次調査A地区付近には掘立柱建物が存在せずに、竪穴式住居(SH86101・SH86111)が残っている可能性もある。8世紀の中頃と考えられる。



②第II期(第329図上段)

倉庫を伴う整然とした掘立柱建物群が存在する。建物の方位は、 $N16^{\circ}W(N74^{\circ}E)$ 前後を測る。建物群は、倉庫(SB85020)を挟んで東側と西側に存在する。東側には2間×3間の建物3棟(SB85017・SB85046・SB86020)をL字形に配列する。3棟の建物の間には著しい差異が認められない。西側には2棟の建物(SB85023・SB85024)をI字形に配列する。西側の建物群は、倉庫群が北へのびること(SB85021)等から、さらに広がる可能性があり、その構造は不明な点が多い。8世紀第3四半期頃と考えられる。

③第Ⅲ期(第329図中段)

倉庫群を西側に配した建物群が成立する時期である。この時期は、比較的短いかもしれない。倉庫群を除く建物は、2棟(SB86019・SB85026)存在するのみで、その建物の方位は、N24°W(N66°E)を測る。第Ⅱ期のSB85024のかわりにSB86019が建てられたことが、その特異な形状(桁行：梁間=2：1)と規模が同じことから予想される。倉庫群はSB85020の南側に2棟の倉庫(SB85005・SB85006)が建ち並ぶ。3棟の倉庫は、東側の柱列を揃え、ほぼ等間隔で配置される。8世紀第4四半期頃と考えられる。

④第Ⅳ期(第329図下段)

倉庫群の西側に4棟の建物(SB85003・SB86003・SB86018・SB86008)が存在する。倉庫群も古くなったSB85020がSB85011に建て替えられる。建物群が、南向きであることがその建物配置から予想できる。建物方位は、N26°W(N64°E)を測る。建物群の奥に5間×2間以上の大型の建物(SB86008)が配置され、その右前面に3間×2間の建物(SB86018)が存在する。この建物の前面と背面に柵列が存在している。柵列は、東側にも存在した可能性がある。SB86008のほぼ正面には4間×2間の建物(SB83003)が存在する。SB86003は、Ⅱ期にSB86020が建っていた地点にあり、Ⅲ期にまでSB86020が残り、建て替わったものとも考えられる。倉庫群にほぼ接して存在する建物(SB85003)は、他の3棟と建物方位を90°違えるもので倉庫群との関係が強い。9世紀第1四半期頃の建物群と考えられ、9世紀第2四半期に起こった大洪水によってこれらの建物群は消失する。

検出した掘立柱建物群は、先述のように、8世紀の中頃に出現する。その出現の契機としては、種々の要素が考えられるが、ここでは3つの要素を取り上げる。第1の要素は、8世紀中頃に起こった地震による竪穴式住居群の崩壊があげられる。^(注16)地震の痕跡として、86101(SH85101)・SH86110ほかの各住居跡を寸断する噴砂が認められた。第2の要素としては、この地域では8世紀の中頃が竪穴式住居から掘立柱建物への移行期に相当することである。^(注17)第3に建物群の性格に関わるが、志高遺跡の8世紀中頃における役割の変化が考えられる。竪穴式住居から掘立柱建物への移行は比較的スムーズに行われたようにみえるが、前段階の竪穴式住居跡群と掘立柱建物跡群は、その建物面積の差や倉庫群の存在から明らかに違う性格を示す。何等かの必要性がこれらの倉庫群を伴う建物群を生んだと考えられる。これらの建物群の性格がわかれば解決する問題である。現段階では、建物群の性格を知ることは難しい状態である。(肥後 弘幸)

注1 層位的には5群に分けることができるが、型的には最上層の土器群(第1～3層)が2型式(北白川下層Ⅲ式・大歳山式)に分かれ、6群となる。

- 注2 山陰から北陸にかけての低湿地における縄文遺跡としては以下のものが代表的である。
西川津遺跡(島根県松江市) 陰田遺跡(鳥取県米子市) 目久美遺跡(鳥取県米子市) 桂見遺跡(鳥取県鳥取市) 布施遺跡(鳥取県鳥取市) 桑飼下遺跡(京都府舞鶴市) 田井野貝塚(福井県美方郡美方町) 鳥浜貝塚(福井県美方郡美方町) 真脇遺跡(石川県鳳至郡能都町) 南太閤山I遺跡(富山県射水郡小杉町)
- 注3 第3次調査カキ安地区の弥生時代前期の遺構面で縄文時代後期の土坑を検出している。また、舟戸地区のSD86240の最下層内から弥生土器に混じって後期の土器片約10点が出土している。
- 注4 坪倉利正『竹野遺跡発掘調査報告書』1968
坪倉利正・平良泰久・黒田恭正・常盤井智行ほか『丹後竹野遺跡』(京都府丹後町文化財調査報告第2集 丹後町教育委員会) 1983
奥村清一郎・吉田 誠『竹野遺跡』(京都府丹後町文化財調査報告第3集 丹後町教育委員会) 1987
坪倉利正・釋 龍雄・田中光浩・増田信武・杉原和雄・林 和廣『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』(京都府峰山町遺跡調査報告 第3集) 1977
- 注5 弥生時代中期から後期において多く見られる竪穴式住居内の炭・灰を含む土坑については、炉跡とする考え方もあるが、土坑の壁が焼けていることはほとんどなく、他に床面から炉跡と考えられる焼土が検出されることが多いことから中央ピット(特殊ピット)とよび、炉跡と区別する考え方がある。
参考文献 宮本長次郎『住居と倉庫』「弥生文化の研究7 集落遺跡」雄山閣出版 1986
井守徳男・渡辺 昇・大平 茂ほか『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』兵庫県教育委員会 1983
- 注6 溝状遺構を伴う竪穴式住居跡としては、SH85205・SH85210・SH86204等がある。当遺跡の円形竪穴式住居跡には周壁溝を伴う例はなく、建て替え前の住居に伴う周壁溝とは考えにくい。なお、管見ながら同様の例が大阪府城山遺跡に見られる。
杉本二郎・岩瀬 透ほか『城山(その1)』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター 1986
- 注7 京都府の日本海側における弥生遺跡において玉作りの事例は普遍的である。本章第5節に詳しい。
- 注8 志高遺跡と同水系における春日七日市遺跡においても同時期の集落遺跡が検出されている。この遺跡からは比較的多数の石庖丁が出土している。石材には、磨製石剣類に利用されている粘板岩が用いられている。志高遺跡の場合、石剣類や打製石斧に見られるように粘板岩の利用は普遍的に行われており、石庖丁製作の石材が存在しなかったことは考えにくい。春日七日市遺跡については井守徳男・種定淳介・久保弘幸の3氏に御教示いただいた。
- 注9 現在確認されている丹後地域における貼石墓の類例としては以下のものがある。
奈具岡遺跡 方形区画1・2
奥村清一郎・林日佐子『奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書』(京都府弥栄町文化財調査報告第4集 弥栄町教育委員会) 1986
小池古墳群 12・13号墳
鈴木忠司・植山 茂ほか『京都府中郡大宮町小池古墳群』(大宮町文化財調査報告 第3集 大宮町教育委員会) 1984
寺岡遺跡 方形周溝墓SX56
奥村清一郎・後藤公一ほか『寺岡遺跡』(京都府野田川町文化財調査報告 第2集 野田川町教育委員会) 1988
千原遺跡 第16グリッド貼石墓・第17グリッド貼石墓

- 羽瀨賢良ほか『岩滝町文化財調査報告 第11集 千原遺跡第3次』岩滝町教育委員会
1988
- 注10 肥後弘幸・田中史生・岸岡貴英「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注11 シゲツ東墳墓群については、舞鶴市教育委員会が現在行っている分布調査の成果である。
- 注12 増田信武・釋 龍雄・杉原和雄『水無月山遺跡 発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館
1980
- 大槻真純『久田山 久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書』(綾部市文化財調査報告
第5集 綾部市教育委員会) 1979
- 注13 丹後半島における代表的な弥生時代後期の台状墓群として以下のものがある。
- 大山墳墓群
平良泰久・黒田恭正・常盤井智行ほか『丹後大山墳墓群』(京都府丹後町文化財調査報告
第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 帯城墳墓群
岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴「帯城墳墓群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都
府教育委員会) 1987
- 西谷墳墓群
『西谷遺跡発掘調査現地説明会資料』野田川町教育委員会 1988
- 注14 竹原一彦・増田孝彦ほか『京都府遺跡調査報告書』第1冊 1983
- 注15 志高遺跡周辺の弥生時代後期の集落遺跡として以下が発掘された。
- 大川遺跡
吉岡博之『京都府舞鶴市大川遺跡発掘調査概報』(舞鶴市文化財調査報告 第13集 舞鶴市
教育委員会) 1987
- 花ノ木遺跡
志高遺跡第2次調査でみつかった遺跡を花ノ木遺跡とした。
- 桑飼下遺跡
渡辺 誠・鈴木忠司ほか『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会
1975
- 注16 本章第7節に詳しい
- 注17 綾部市・福知山市においても8世紀中頃の竪穴式住居跡が確認されており、8世紀中頃が当
地域においては、竪穴式住居→掘立柱建物への変換期と考えられる。このことについては藤
原敏見氏の論文がある。
- 「中丹地域における8世紀の竪穴式住居跡」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都
府埋蔵文化財調査研究センター 1987

第2節 志高遺跡出土の縄文土器

志高遺跡の縄文時代遺物包含層は、^(注1)大きな齟齬もなく堆積していることから、層位的な分類が可能である。上層部は、遺物の出土量が多かったため、形態的な分類も可能であった。ここでは、志高遺跡出土の縄文土器を志高Ⅰ期から志高Ⅵ期までの6時期に区分した。

志高縄文Ⅰ期 13層・12層出土の土器群を縄文時代早期末に位置づけ、志高Ⅰ期とした。完形で出土した第30図Bを時期比定の根拠としたい。この土器の施文の特徴は、条痕文を地文とした口縁部貼付隆帯とキザミメ隆起帯とである。宮本一夫氏の土器細分によると、^(注2)前者はA2a類にあたるものと考えられ、山陰を中心とした分布がみられる。後者はB2a類に該当すると思われ、轟B式第2類として九州に広く分布する施文手法である。本資料は、いわばA2a類とB2a類との折衷型といえる土器である。また、53・79・105のタイプや、61・62のタイプ、73・74などのタイプの^(注3)ように段帯をもつ土器は、山陰地域などにみられる段帯を形成する土器との関係が考えられよう。

この時期は、羽島下層Ⅱ式が西日本に波及する前の段階で、地域色の色濃い時期でもある。志高遺跡の最下層出土の土器の様相も、単純ではなく、さまざまな形態がみられる。他地域からの影響を受けた結果と思われる。

志高縄文Ⅱ期 10層・9層出土の土器群を縄文時代前期初頭に位置づけ、志高Ⅱ期とした。条痕文施文を主体とする土器の一群で、「3」字状刺突文を特徴とする時期である。この時期、西日本一円に流布した羽島下層Ⅱ式に併行する時期である。志高遺跡での特徴は、4・6・114・116にみられるモチーフにある。現時点で、このようなモチーフは他地域ではみとめられておらず、羽島下層Ⅱ式の消長を考える上で、重要な資料となる。

志高縄文Ⅲ期 主として7層出土の土器群を縄文時代前期前葉に位置づけ、志高Ⅲ期とした。条痕文施文を主体とする土器の一群である。刺突文を施す土器では、D字状刺突文を特徴とするものが多い。北白川下層Ⅰ式に併行する時期と考えられる。

志高縄文Ⅳ期 5層・5層・4層出土の土器群を縄文時代前期中葉に位置づけ、志高Ⅳ期とした。縄文施文を主体とする土器の一群である。刺突文を施す土器では、C字状刺突文を特徴とするものが多い。北白川下層Ⅱ式に併行する時期と考えられる。

なお、図示はしていないが、赤色顔料を塗布する土器が、表面採集遺物を含めて3点出土している。第278図のタイプ1点と、^(注4)『京都府遺跡調査概報』第21冊第15図40のタイプが2点ある。この時期に相当するものである。

志高縄文Ⅴ期 3層・2層・1層出土の土器のうち、^(注5)第1形態・第2形態及び第3形態を縄文時代前期後葉に位置づけ、志高Ⅴ期とした。北白川下層Ⅲ式に併行する時期と考え

られる。口縁部形態から、第1形態a類・第1形態b類・第2形態c類・第2形態d類及び第3形態に分類した。

第1形態a類は、北白川下層Ⅱ式からの発展形態と考えられ、志高V期のなかでは初出形態として位置づけたい。

第1形態b類は、第1形態a類から派生した形態と思われる。この段階は、北白川下層Ⅲ式に特徴的にみられる四角形土器の占める割合が、他の類に比べて高いことから、第1形態b類が北白川下層Ⅲ式の主体をなしているものと推察される。

第2形態と第1形態との関係については、明確にはできなかった。後続する第3形態には、第1形態及び第2形態の4タイプすべてが認められることから、第3形態成立の前段階には、第1形態と第2形態とが併存していた可能性が強い。

第2形態c類の成立については、口縁端部内側の縄文帯の幅が広いところから、口縁端部内側の縄文帯の幅が狭い第1形態a類からの発展形態とも考えられる。この点については、施文技法や文様構成の展開について、志高Ⅳ期や他の地域をも含めた考察が必要とされるところである。

第2形態d類については、第2形態c類に装飾的要素が加えられたものとして理解しておきたい。

第3形態は、第1形態及び第2形態から第4形態への移行の形態として、現段階では認識している。したがって、ここでは第3形態を志高V期の新段階に位置づけておく。

志高縄文Ⅵ期 3層・2層・1層出土の土器のうち、第4形態を縄文時代前期末葉に位置づけ、志高Ⅵ期とした。大歳山式に併行する時期と考えられる。

第4形態は、口縁端部内側の縄文帯の幅が広く、この上にさらに粘土紐を貼り付けていることから、第3形態c類もしくは第3形態d類の発展形態として理解しておきたい。この形態のなかには、四角形土器は認められておらず、第3形態a類及び第3形態b類の形態は、断絶したものと思われる。 (三好 博喜)

注1 志高遺跡縄文関係文献

- a. 肥後弘幸・酒井彰子「志高遺跡 昭和60年度発掘調査概要(第6次調査・舟戸地区)」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- b. 三好博喜「由良川下流域における縄文時代前期の土器群」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- c. 三好博喜・肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区下層)」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- d. 三好博喜「志高遺跡出土の縄文時代草創期の土器をめぐって」(『京都府埋蔵文化財情報』第25号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

- e. 肥後弘幸「志高遺跡昭和61年度発掘調査概要(第7次調査舟戸・岡安地区)」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
 - f. 三好博喜「志高遺跡出土の轟式系統の土器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第27号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
 - g. 三好博喜「志高遺跡出土の大歳山式系統の土器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第28号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
 - h. 三好博喜「志高遺跡出土の土器にみる北白川下層Ⅲ式の発展過程」(『京都府埋蔵文化財情報』第29号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注2 宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1987
- 注3 a. 米子市教育委員会・建設省中国地方建設局倉吉工事事務所『陰田』 1984
b. 米子市教育委員会・鳥取県河川課『目久美遺跡』 1986
c. 島根県教育委員会・島根県土木部河川課『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1987
- 注4 注1 aに同じ。
- 注5 当該期の口縁部形態の分類については以下の報告での考察がある。
松井政信・古川 登「三方郡美浜町浄土寺遺跡出土の遺物について(その1)」(『福井考古学会会誌』創刊号 福井考古学会) 1983

第3節 弥生土器の編年

第1節で述べたように、志高遺跡は弥生時代では断続的に集落を形成している。弥生時代の志高遺跡は前期新段階の時期に始まり、後期末まで続く。ここでは、遺構資料を主に用いてこの遺跡で出土した弥生土器の編年作業を行いたい。

編年の基準とした資料には、第6次調査・第7次調査の資料を主に用いたが、資料の補えなかった時期については、志高遺跡第2次調査の溝資料ほか、シゲツ墳墓群・水無月山遺跡^(注1)の資料で補った。また、使用した資料は、いわゆる良好な一括資料(焼失家屋等)^(注2)に恵まれていないので、編年の試案として提示するにとどめたい。

出土した弥生土器を、志高弥生Ⅰ期～志高弥生Ⅹ期に編年した。

志高弥生Ⅰ期

畿内第Ⅰ様式新段階に相当する資料である。集落は、カキ安地区を中心に存在したと考えられるが、舟戸南地区の包含層内及び舟戸北地区のSD86240内から土器が少量出土している。資料が少ないため、その様相は不明であるが、丹後地域に比較的多く見られる貝殻施文の壺が存在しており、丹後半島地域の様相と大差がないと思われる。^(注3)

志高弥生Ⅱ期

畿内第Ⅱ様式に相当する時期であるが、良好な資料が存在せず、特に壺の様相が不明である。資料としては第2次調査溝7・土坑25の資料及びB地区1号墓下層の資料がある。^(注4)壺(土坑25出土)は、口縁端部に施文を行わない広口壺で、頸部から体部にかけて4条の櫛描直線文を施す。甕には、口縁端部にキザミメをもち、倒鐘形を呈する甕Aと、口縁端部に波状を呈する押圧文をもち、やや体部が丸みを帯びた甕A^(注5)が存在する。後者の方が新しい様相を呈する。

志高弥生Ⅲ期

畿内第Ⅲ様式古段階に相当する時期と思われる。SD86240の新相(縄文土器及び志高弥生Ⅰ期の資料を除く)がある。また、SD86206内からもこの時期の資料と思われるものが出土している。広口壺(壺A)には、口縁部内面を櫛描文で著しく加飾し、口縁端部をキザミメ文・斜格子文・綾杉文等を施すものと、口縁端部に同様の加飾するものがある。口縁部内面の加飾は、櫛描文を複数種類用いる。口縁端部を拡張するものも多く存在するが、拡張の著しいものではない。頸部に貼り付け突帯をもつものがある。壺Bも存在し、頸部に指頭圧痕文突帯をもち、口縁端部にキザミメ文を施す。甕では、甕Aが多く存在し、前段階に比べて体部の張りが大きくなり、体部最大径は口縁部径を超える。甕B₁に近い形態

をもつものも存在するが、頸部の屈曲は甕Aとの中間的なものである。他地域の影響を強く受けたと考えられる甕B₂が出現する。鉢では、鉢A₁(無頸壺)と、壺Bと同様の文様構成をもつ鉢B₂が存在する。高杯は、出土量が少なく様相が不明であるが、椀状の杯部をもつものが存在すると考えられる。

志高弥生IV期

畿内第Ⅲ様式新段階に相当する時期と考えられる。SH85202・SH85210の資料がある。壺には大きな変化は認められないが、口縁部内面の櫛描文の多用化傾向はなくなり、内面に櫛描文を複数種類施すものはない。第Ⅴ期から第Ⅶ期に多く存在する壺Dが出現する。甕は、甕Aが残るものの甕B₁が出現し、甕Aが少なくなる傾向にある。鉢には、鉢A₁(無頸壺)以外に長胴の鉢Cが存在する。高杯には高杯Aが存在するが、凹線文は施さない。播磨・摂津地域では、この時期が凹線文の導入期と考えられるが、志高遺跡のこの時期の住居内からはほとんど凹線文をもつ土器は出土していない。^(注6)

志高弥生Ⅴ期

志高遺跡での土器様式の変遷(凹線文の盛行と器種の小型化傾向等)と、住居群の南への移動から、畿内第Ⅳ様式に併行する時期を2期に区分した。

志高第Ⅴ期は、畿内第Ⅳ様式の前半に相当すると考えられる。SH85205・SH86203をはじめ、SK85201・SK85207・SK85208等多くの遺構資料がある。壺・甕・鉢・高杯の各器種に凹線文が施され、凹線文の多用化傾向がみられるが、盛行するには至っていない。壺・甕・鉢ともに在地の赤褐色を呈する土器が増える傾向にある。この赤褐色の胎土をもつ土器は、志高弥生第Ⅵ期に盛行すると考えられ、施文を多用しない土器(壺A₁・甕B₁・鉢A₁等)に多く見られる。また、この胎土の壺A・甕B₁は、体部外面の上半部をハケで調整し、下半部を粗くヘラケズリし、器壁が薄い(特に甕B₁)にもかかわらず、内面にヘラケズリの痕跡を留めない特徴をもつ。壺Aには、依然、櫛描文を用いるものが多く存在する。壺Aの頸部に施された貼り付け突帯は凹線文に変化する。搬入土器壺Bにも口縁部に凹線文が施される。甕Aは、口縁端部にキザミメを施すものは消失し、口縁端部に押圧による波状部をもつものもほとんど見られなくなる。甕Aに代って、甕B₁が大半を占めるようになるが、口縁端部に甕Aの影響を残して波状部をもつものも存在する。甕B₂は、普遍的に見られる。SH85205からは、久美浜町橋爪遺跡第2次調査SK186の甕A₁とほぼ同じ形態をもつ甕B₂が多く出土している。^(注7) 甕B₄が出現するが、この時期には大型のものが大半で、中型のものには頸部に指頭圧痕文突帯をもつものがみられる。鉢は、増加傾向にあり、鉢A₂や小型の鉢Cが出現する。高杯は、依然、量的に少ないが、高杯Aに凹線文が施され、高杯B₂が出現すると考えられる。

志高弥生VI期

畿内第IV様式の後半に相当する時期と考えられる。SH86201(第3次調査竪穴式住居跡22)とB地区1号墓の土器群に代表される。また、SD85211の大半の資料もこの時期に相当すると考えられる。凹線文の盛行及び鉢・高杯の増加傾向(器種の増加)と、各器種の小型化傾向がうかがえる。また、在地系の胎土(赤褐色を呈する)を持つ壺・甕も増加する。壺Aには、体部内面をヘラケズリするものが目立つ傾向にある。短頸壺の一種である壺Dが急激に増加し、その型式も数種類存在する。長頸壺もすでに出現している可能性が高い。甕は、甕Aが消失し、甕B₁が大半を占めるようになる。甕B₄も増加傾向にあり、内面のヘラケズリが顕著になる。甕B₂は、甕B₄と形態的に区別できなくなったのか、あるいは消失した可能性がある。近江系の甕Cも存在する。鉢には、鉢A₂が多く存在する。鉢A₂は、小型及び中型で口縁部を内側に大きく拡張する。外面に凹線文を多用するものが顕著に存在する。鉢Cでは、大型で長胴のものは見られなくなり、小型のものが増える傾向にある。高杯が急激に増加する。住居内では、それ以前にはほとんど出土していなかったのに対し、SH86201から高杯Aが多量に出土している。高杯Aは、口縁部外面に凹線文を多く施し、浅い杯部をもつ。小型のものには碗状を呈し、凹線文をもたないものがみられる。大型の高杯には、口縁部に円形浮文をもつものが存在する。高杯Bは、1号墓から2点出土しているが、脚端部の上下への拡張が退化傾向にある。ほかに器台の可能性のある高杯Dが存在する。

志高弥生VII期

畿内第IV様式末から第V様式前葉に相当する時期と考えられる。SH86202・SK86208及び第3次調査竪穴式住居跡23の資料がある。また、周辺の墳墓遺跡の資料として、シゲツ墳墓群・水無月山遺跡の資料がある。なお、水無月山遺跡の資料は、他の資料に比べて新しい傾向にある。壺・甕ともに内面のヘラケズリが頸部付近にまで達し、口縁端部に擬凹線文が施されるようになる。壺・甕ともに体部の球形のものが多く存在する。長頸壺が存在する。高杯は、中期の高杯Aの口縁部が短くなり、口縁部と体部の境が不明瞭になる。代って、後期の高杯Aが出現している。

志高弥生VIII期

畿内第V様式中葉に相当する時期である。志高遺跡では現在のところ空白期である。

志高弥生IX期

畿内第V様式後葉に相当する時期である。岡安地区に集落が存在し、SH86246ほかの資料がある。前段階の資料がないため、器種の消長については不明な点が多い。壺・甕・鉢ともに擬凹線文が多用されている。壺には、短頸壺の一種である後期壺Bが多く存在し、

広口壺(後期壺A)は少ない。また、中期の壺D(短頸壺の一種)の系譜をひく後期の壺Dが存在し、口縁部外面に擬凹線文を施すことが多い。甕には、単純「く」字形を呈する甕Aが存在するが、中期の甕B₁に系譜がたどれるかは不明である。甕の大半は、甕Bである。型式学的(複合口縁の発達)には甕B₁→甕B₂→甕B₃の変化が考えられるが、量の差はあるものの共存している。複合口縁をもち擬凹線文を施さない甕Cが出現しており、形態は甕B₂に近い。鉢の様相は、出土量が少なく詳しくはわからないが、小型の器種が目立って存在する。有孔鉢は出現しておらず、壺ないし甕の底部を穿孔することで代用されている。高杯には、後期前葉に出現した後期高杯A以外に高杯Bが出現する。器台には、短く外傾する口縁部をもつ器台Aと、口縁端部を上下に拡張して加飾する器台Cの存在が顕著である。

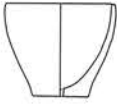
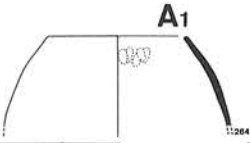

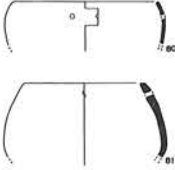

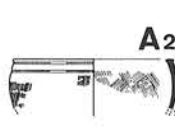
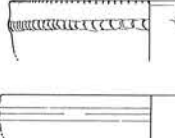
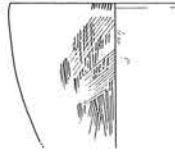


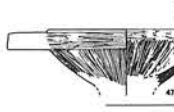



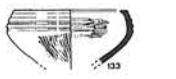






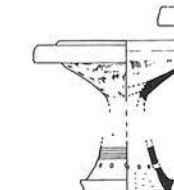
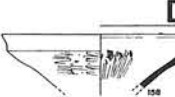
志高弥生X期

畿内の庄内併行期にはほぼ併行する時期と考えられる。一括性の高い資料はないが、舟戸北地区自然流路内の2地点からまとまって出土した資料がある。埋土一括1及び2と呼称する。埋土一括2の資料は、他地域の影響を強く受けた土器群で、埋土一括1よりも若干新しい様相をもつ可能性があるが、資料数が少ないため断言できない。この時期の壺の資料は極めて少なく、2点あるのみである。二重口縁壺(壺F)は、この時期に出現すると考えられる。甕には、甕B₃・C・Dがある。甕B₃は、複合口縁の発達が著しく、また、口縁端部の擬凹線文も明瞭で、丹後地域の弥生時代後期の擬凹線文をもつ甕Bとはやや異なった様相を呈する。また、口縁部内面に指頭痕をもつものがあり、北陸地方の影響を強く受けている。埋土一括2の資料中に、畿内系のタタキをもつ甕Dが存在する。タタキをもつ甕(甕D)は、この時期に部分的にこの地域にまで広がってくると思われる^(注8)。鉢の様相は、資料が少ないため不明であるが、鉢Bは甕同様、口縁部の擬凹線文を失っている。有孔鉢(鉢D)が出現する。高杯については、資料が皆無に等しいため不明であるが、周辺地域の様相から、高杯Aは消失し、高杯Bの口縁部が発達し、杯部の巨大化したものが存在する可能性がある。また、布留式併行期に盛行する高杯Cが出現する。

以上、志高遺跡出土の土器群を用いて、弥生土器の編年を示してきた。今後の資料の増加で変更する余地はあろうが、問題提起としておきたい。^(注9) (肥後 弘幸)

畿内第I様式新段階	志高弥生I期	カキ安地区 ビット群 舟戸南地区 包含層	<p>壺</p>	<p>甕</p>
畿内第II様式併行期	志高弥生II期	第3次調査 溝7・土坑25		
畿内第III様式併行期	志高弥生III期	SD86240 (SD86206)		
畿内第IV様式併行期	志高弥生IV期	SH85202 SH85210		
畿内第IV様式併行期	志高弥生V期	SH86203 SH85205 SK85207 SK85208 SK85201 自然流路		
	志高弥生VI期	SH86201 B地区1号墓		

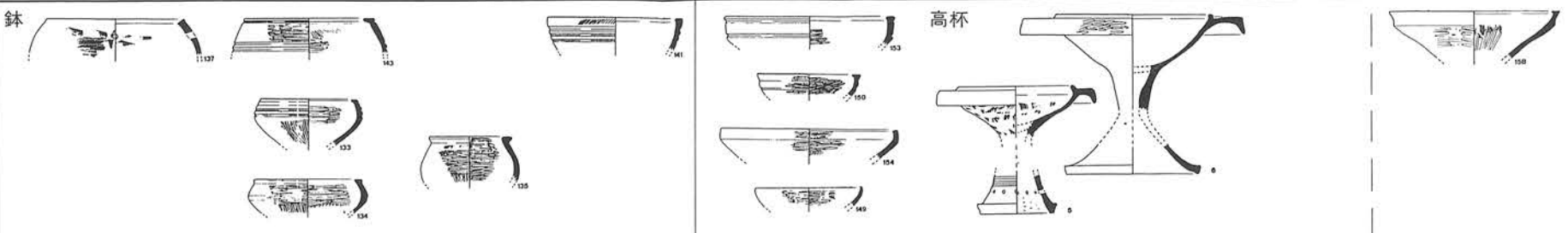
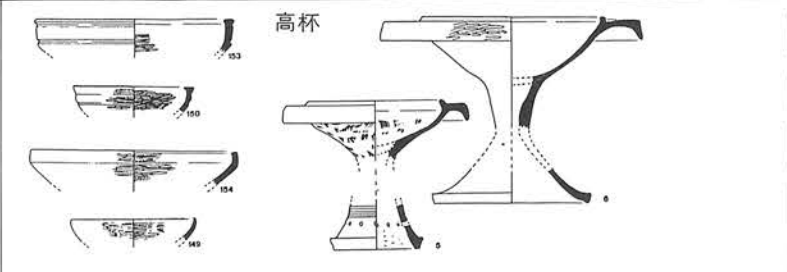
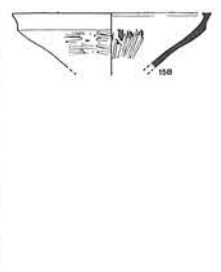
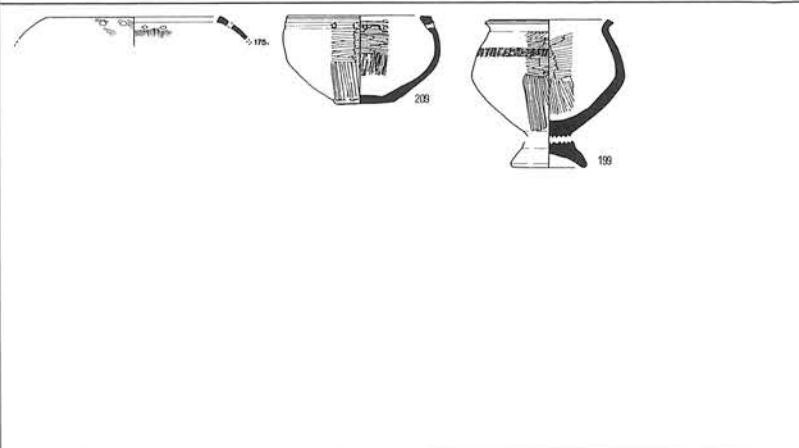
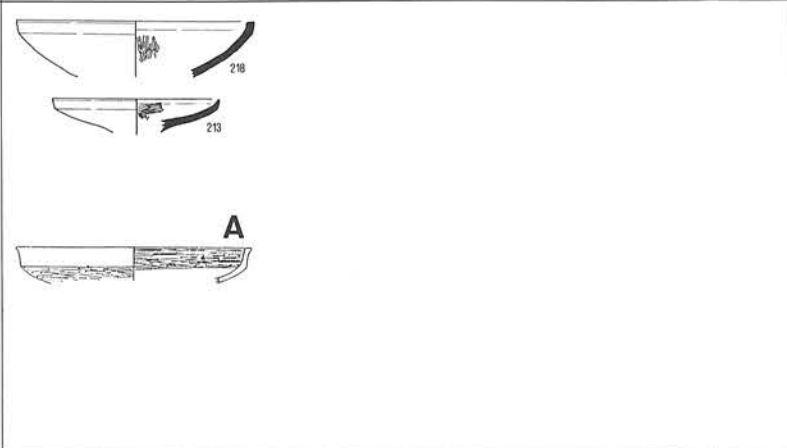
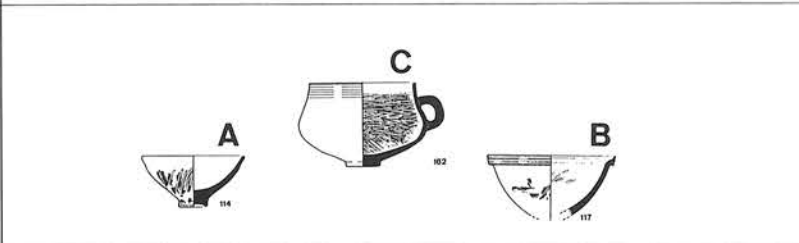
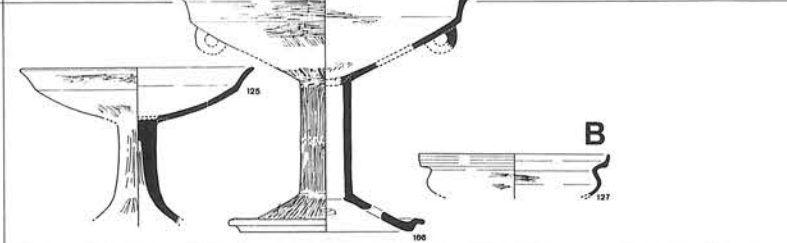
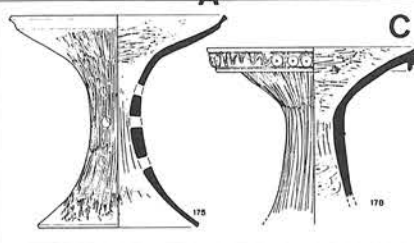


第330図 弥生土器編年表1 (壺・甕)

畿内第I様式新段階	志高弥生I期	第3次調査 カキ安地区 ビット群 舟戸南地区 包含層	鉢 	高杯
畿内第II様式併行期	志高弥生II期	第3次調査 溝7・土坑25 B地区 1号墓下層		
畿内第III様式併行期	志高弥生III期	SD86240 (SD86206)	 A1  B2	
	志高弥生IV期	SH85202 SH85210	  C	
畿内第IV様式併行期	志高弥生V期	SH86203 SH85205 SK85207 SK85208 SK85201 自然流路	 A2  C 	 A  C  B2
	志高弥生VI期	SH86201 B地区1号墓	     	      D

第331図 弥生土器編年表 2 (鉢・高杯)

畿内第IV様式併行期	志高弥生VI期	SH86201 B地区1号墓	壺 A D	甕 B ₁ B ₄
	志高弥生VII期	SH86202 SK86208 竪穴住居23 (第4次調査) シゲツ墳墓群 水無月山遺跡	D E	
畿内第V様式併行期	志高弥生VIII期			
	志高弥生IX期	SH86246 SK86255 SK86256 岡安地区 包含層	A ₁ A ₂ B D D D	A B ₁ B ₂ B ₃ C
庄内併行期	志高弥生X期	舟戸北地区 自然流路 埋土一括1 舟戸北地区 自然流路 埋土一括2	F 52	B ₃ D 51

第332図 弥生土器編年表3(壺・甕)

畿内第IV様式併行期	志高弥生VI期	SH86201 B地区1号墓	鉢 	高杯 	
	志高弥生VII期	SH86202 第4次調査 竖穴住居23 SK86208 水無月山遺跡			
	志高弥生VIII期				
	志高弥生IX期	SH86246 SK86255 SK86256 岡安地区 包含層			
	庄内併行期	志高弥生X期	舟戸北地区 自然流路 埋土一括1 舟戸北地区 自然流路 埋土一括2		

第333図 弥生土器編年表4(鉢・高杯)

- 注1 肥後弘幸ほか「シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注2 増田信武・釋 龍雄・杉原和雄『水無月山遺跡発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館 1980
- 注3 丹後半島における弥生時代前期古・中段階の土器の出土した遺跡には、丹後町竹野遺跡・網野町松ヶ崎遺跡・峰山町途中ヶ丘遺跡等がある。
- 注4 吉岡博之『志高遺跡Ⅱ—弥生土器の概要—』(舞鶴市文化財調査報告第12集 舞鶴市教育委員会) 1986
- 注5 口縁端部に波状の押圧文をもつ甕は、峰山町途中ヶ丘遺跡からも少量出土しているが、その出土地域の中心は、由良川流域に集中し、この地域における在地の甕となっている。将来、その資料の増加から、この甕によって、この地域の土器文化圏を想定することが可能になるかもしれない。
- 注6 SH86210出土の壺Dに凹線文を持つものがあるが、住居埋土上層から出土したもので、この住居に確実に伴うものではない。当地域での凹線文の導入は、他地域よりやや遅れて、中期後葉に入ってからと考えられる。なお、SH85202から出土した凹線文を持つ壺Dの小破片を評価して、壺Dにのみ凹線文の導入を認めることもできる。
- 注7 石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981)』京都府教育委員会) 1981
- 注8 綾部市小西町田遺跡から庄内併行期と考えられる畿内系のタタキを有する甕が多量に出土している。その状況は、この地域で、異常ともいふべきものである。また、志高遺跡から5km上流の桑飼上遺跡からも、タタキを有する土器群が出土している。
三好博喜ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
肥後弘幸・細川康晴「桑飼上遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注9 この地域における土器編年としては、青野西遺跡の編年試案がある。现阶段では志高弥生X期と青野西Ⅰ・Ⅱ式との併行関係が考えられる。(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985)。

第4節 古式土師器の編年

1. 志高古式土師器Ⅰ～Ⅲ期の設定

志高遺跡の赤焼系統土器の組成における大きな画期の一つに、伝統的複合口縁甕の消滅と布留式甕・小型丸底壺・小型器台の出現があげられる。これ以降、新来の須恵器が共存するまでの間を古式土師器と呼び、土器組成と甕の形態の変遷により3時期に区分した(第334・335図)。

志高古式土師器Ⅰ期

甕形土器は、弥生土器以来の伝統を引く在地系の複合口縁の甕A・Bが衰退し、新たに単純「く」字状口縁の甕Cがこれにとってかわる。以降、甕Cがその中心をなす。畿内系の土器では、前段階に盛行する体部外面にタタキをもつ庄内式甕(甕E)が減少し、かわってハケ調整を施し、口縁端部がわずかに内面に肥厚する布留式甕(甕F)が出現する。

壺形土器は、装飾性のあるものが姿を消し、前段階のものと様相の異なる山陰系の二重口縁壺A・D・Eが出現する。また、新たに中型直口壺Gも出現する。その他、在地系の直口壺Fに、口縁端部内面の肥厚や、体部・底部内面の指押さえなど布留式土器の影響がみられるようになる。

鉢形土器では、小型丸底壺が出現する。典型的なAとともにB・Cも同様にみられ、各々の形態の変遷をたどる。その他の鉢類については、単純「く」字状口縁の鉢A、有段鉢に近い形状をなすBa、及びBb・Eがこの時期に出現すると考えられる。一方、鉢C・Dや有孔鉢G・Hについては前段階からのつながりがみられ、この段階で他の器種と同様に一部形態や調整の変化をとげたと言える。大型品I・Jは、この地域では前段階の弥生X期にみられない器種である。なお、鉢Fはむしろ弥生土器に通有の器種であり、この時期まで残らない可能性がある。

高杯形土器は、高杯A・B・C・Eが、その中心を前段階におき、一部残るものの大勢としては衰退の方向に向かう。それに対して、高杯Dが盛行し、これ以降の高杯の主流となる。

器台形土器では、大型器台が消滅し、小型器台が出現する。なかでも在地的色彩の強い複合口縁形の受け部をもつBが圧倒的に多いという特徴をもつ。その他には、Dが存在する可能性が高い。また、高杯に形態が近似する中型器台Eがこの時期にみられるが、前後につながりが認められず、Ⅰ期に限定されるものと考えられる。

ミニチュア土器は、確実な遺構からの出土はないが、前段階から継続して認められる。

志高古式土師器Ⅱ期

甕形土器は、甕A・B・Eが完全に消滅し、在地系のC・D及び布留式甕Fが主流となる。なかでも甕Cが中心で、中型のC₁・大型のC₂は数量的にあい半ばして、盛んに用いられる。FはI期に比べて、口縁端部内面の肥厚の増大、底部の丸底化の進展がみられる。

壺形土器は、I期に引き続き、壺A・D・E・F・G・Kが存在する。これらについては、形態・調整においてI期とそれほど大きな差異が確認できない。

鉢形土器では、小型丸底壺Aの形態が崩れ、体部の大型化、調整の粗略化がみられる。B・Cについても同じく全体に成形・調整の粗雑化傾向がうかがえる。その他の鉢類に関してはその様相が明らかでない。鉢A・B・C・Db・E・I・Jは、つながっていく可能性が高いものの、Da及び有孔鉢G・Hは衰退すると考えられる。

高杯形土器は、A・B・C・Eが消滅し、D・Fがその主流となる。

器台形土器では、A・C・Dが存在すると考えられるが、これらが在地的なBを払拭して出現するのか、共存するのかは不明である。今のところは、BがI期に盛行し、II期にA・B・C・Dが揃って存在すると推定できる。またこの段階から、山陰系の鼓形器台(器台F)が出現する。

志高古式土師器III期

III期になると、I・II期とは器種構成上に大きな断絶がみられ、甕形土器・高杯形土器が中心となる。また、個々の土器は全体に厚手で、シャープさを欠いたものになる。

甕形土器は、II期から引き続き、C・Fが主流である。布留式甕Fの口縁端部内面の肥厚は形骸化する。

壺形土器は、二重口縁壺A・Dがみられるが、口縁部の稜線があまくなり、器壁も厚く全体にシャープさがなくなる。この傾向はG・Kにも共通する。

鉢形土器では、小型丸底壺Aが消滅し、不整形なBが一部残る。そして、III期を特徴付けるCが主流となる。Cは器壁が厚く、体部は大型化し、内面を指による粗いナデで仕上げるものが多い。その他の鉢類の系譜関係は不明確だが、鉢Cに杯形のものが加わる。

高杯形土器は、新たに典型的なGが加わり、D・Fとともにこの時期の主流をなし、量的にも多くなる。

器台形土器は消滅し、III期には残らない。

ミニチュア土器は遺構出土のものとして、確実に存在する。

2. 志高古式土師器I～III期の遺構

今回の調査では、畿内布留式併行と考えられる古式土師器が大量に出土した。包含層資料を含めて、その大部分は志高古式土師器I期にあたる。志高I期の土師器が出土した遺

構は、舟戸南地区自然流路に伴う落ち込み部の土器溜まり・下層及び舟戸北地区のSK86126・SK86127である。舟戸北地区からは、I期のなかでも古段階の土器群が、南地区の土器溜まりを除く一帯からは新段階の土器群が出土している。

志高古式土師器Ⅱ期にあたる遺構として、舟戸南地区のSD85102が考えられるのみで、包含層を含めて土器数が極端に少なくなり、ある意味の空白期間となる。このことは、洪水等の影響によって、利用する土地の中心が調査区外に移動したと考えられる。

志高古式土師器Ⅲ期は、舟戸南地区にSK86116が遺構として存在する以外、舟戸地区の土器は激減し、岡安地区及びバキ安地区(第3次調査)に移る。岡安地区ではSH86241・SH86247・SH86151の住居跡内及び包含層資料がすべてこの時期に相当する。

3. 志高遺跡の古式土師器

志高遺跡出土の古式土師器には以下の特徴があげられる。

在地系の土器については、複合口縁の甕から、単純「く」字状口縁の甕への移行が非常にスムーズである。これは急激に変化したとも考えられる反面、志高弥生X期と志高古式土師器Ⅰ期の間に、両者の甕が共伴する過渡的な時期をもう一段階想定する方が自然かもしれない。

畿内系の土器については、庄内式甕と布留式甕が在地での模倣ではなく、搬入されたと考えられる土器を中心とすることがあげられる。それらは在地の甕と共存しながら、綿々と使用されてゆく。また、精製土器三種のうち、典型的な有段鉢が存在しない点は今後の問題を残す。

山陰系の土器については、肩部に刺突文をもつ土器などが存在するものの、典型的な「5」字状口縁をもつものがわずか一点しかみられないことが特筆される。反面、由良川流域ではあまりみられない鼓形器台がまとまって存在し、それも在地の胎土ではなく、搬入土器の可能性が高いことが特徴である。

志高古式土師器Ⅰ～Ⅲ期は、畿内布留式併行期にはほぼ相当すると考えられる。志高Ⅰ期については、その中に古い様相と新しい様相をみることができ、由良川流域の調査の進展により、細分の余地を残している。志高編年の各段階と、畿内編年との併行関係の設定が、今後に残された課題である。

(林 日佐子)

畿 内 布 留 式 併 行 期	志高弥生X期		壺	A	D	E	F	G	K	甕	C ₁	C ₂	E	F
	志高古式土師器I期	SK86126 SK86127 自然流路にともなう落ち込み部(土器溜まり) (下層土器群)												
	志高古式土師器II期	SD85102												
	志高古式土師器III期	SK86116 SH86247												
(・印は遺構および一括性の高い土層出土の土器を示す。)														

第334図 古式土師器編年表 1

期	式	併	行	布	内	畿	志高弥生X期	小型丸底壺	高杯	器台	ミニチュア
								A Bc C	A B C D E F G	Aa Bb Ca Db E F	
							志高古式土師器I期	SK 86126 SK 86127 自然流路にともなう落ち込み部 (土器満まり) 下層土器群			
							志高古式土師器II期	SD 85102			
							志高古式土師器III期	SK 86116 SH 86247			

(・印は遺構および一括性の高い土層出土の土器を示す。)

第335図 古式土師器編年表2

第5節 志高遺跡の碧玉製管玉生産について

1. はじめに

志高遺跡は、由良川下流域を代表する弥生時代の集落遺跡である。過去7年間にわたって調査が実施され、弥生時代中期を中心とする遺構群とともに膨大な量の遺物が検出されている。

従来から、これらの出土資料中に玉作りに関する資料の存在が知られ、この遺跡において玉生産が行われていたことが指摘されてきた。しかし、各調査で出土した資料は散発的であり、帰属時期も限定しにくいものが多いことなどから、その内容についてはこれまであまり詳しく触れられていない。

本稿では、碧玉製管玉に関する従来の出土資料を紹介し、その製作工程の復原を試みるとともに、当該遺跡での碧玉製管玉生産について考えてみることにしたい。

2. 出土資料について

志高遺跡で出土した碧玉製管玉生産に関する資料は、図(第336図から第340図)に掲げるとおりである。出土地区、法量等については別表に示した。

これらの資料は、帰属時期の不確かなものも含んでいるが、大半は弥生時代中期の遺構・包含層から出土している。おおむね弥生時代中期後半(第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式)に製作・廃棄されたものと考えている。^(注1)

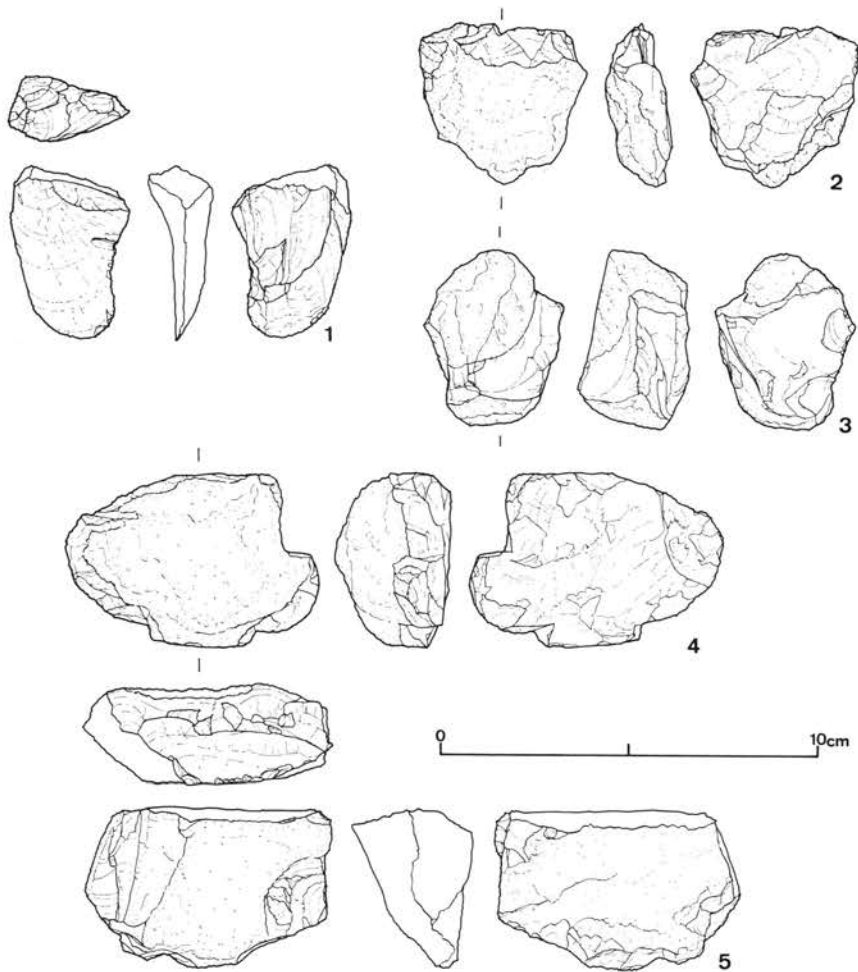
遺物の内訳は、碧玉製管玉完成品・未製品・原石(剥片)、石鋸などである。管玉には太身で大型のものと、細身で小型のものとの2種類があり、未製品にも両者が認められる。未製品には、原石に近いものから完成直前までのものがある。石鋸は、使用痕跡のあるものとそうでないもの(素材あるいは剥片)とがある。

なお、ハンマーや錐、玉砥石などは出土しておらず、玉作りに直接関係するような遺構も確認するには至っていない。生産規模はあまり大きいものではなく、自給的・限定的なものであったと思われる。^(注2)

3. 製作工程の復原

先に記したように、この遺跡の玉作り関係資料は一括性に乏しく、一連の作業工程を示す資料が同一の遺構内に共存しているという事例は確認されていない。

ここでは、比較的まとまった資料を有する第3次調査土坑32出土資料を中心として検討していくことにしたい。



第336図 碧玉製管玉の原石

第1工程 原石の搬入と石核の作出

搬入時の形状をそのまま残している原石は出土していないが、剥片や削片、自然の礫面をとどめる石核などから、原石は、塊状を呈する握り拳大のものであったと推定することができる(第336図)。自然面はほとんどのものが著しく風化しており、原石産出地の露頭から直接採取したのではなく、その近辺に散在する礫のうち素材に適したものを採取したと思われる。

第1工程は、このような原石の風化面を剝離して方形に近い石核(第336図4・5)を作る段階である。作出方法は主にフリーフレーキングによる。この段階での施溝の有無は不明である。

第2工程 石核の分割、板状剥片の作出

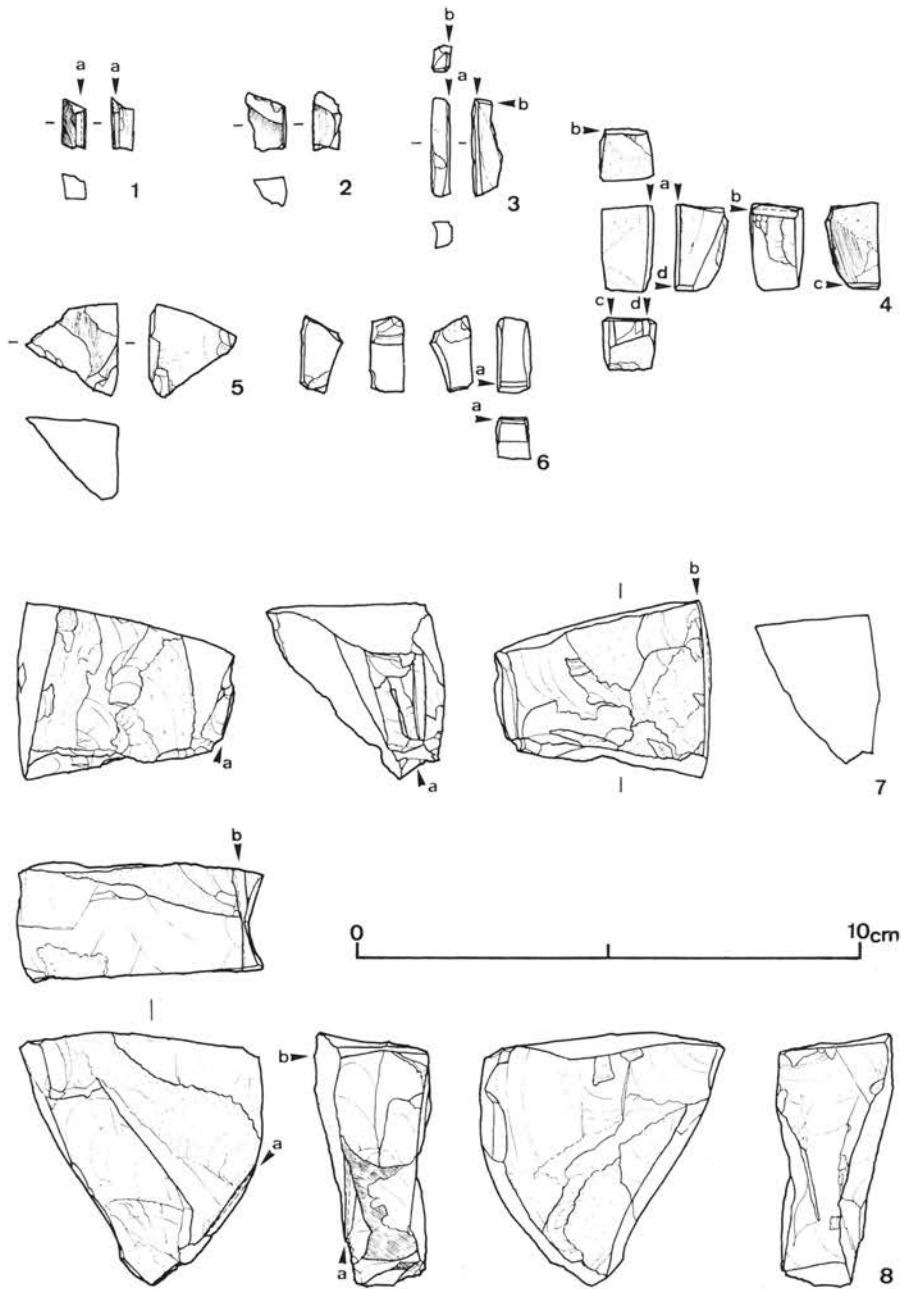


第337図 碧玉製管玉の未製品(1)

石核の作業面を敲打、あるいは研磨して平坦面を作り、施溝具を用いて擦り切り施溝して小型の石核に分割する(第338図7・8)。この石核をさらに施溝分割して、目的とする管玉の形にみあった板状剥片を得る(第337図5)。

第338図7は、第1工程で得られた石核を施溝分割した後の残核である。第337図6、第338図8は分割後の小型の石核である。第338図8には施溝がみられ、次の工程へ移行する状況をよく示している。

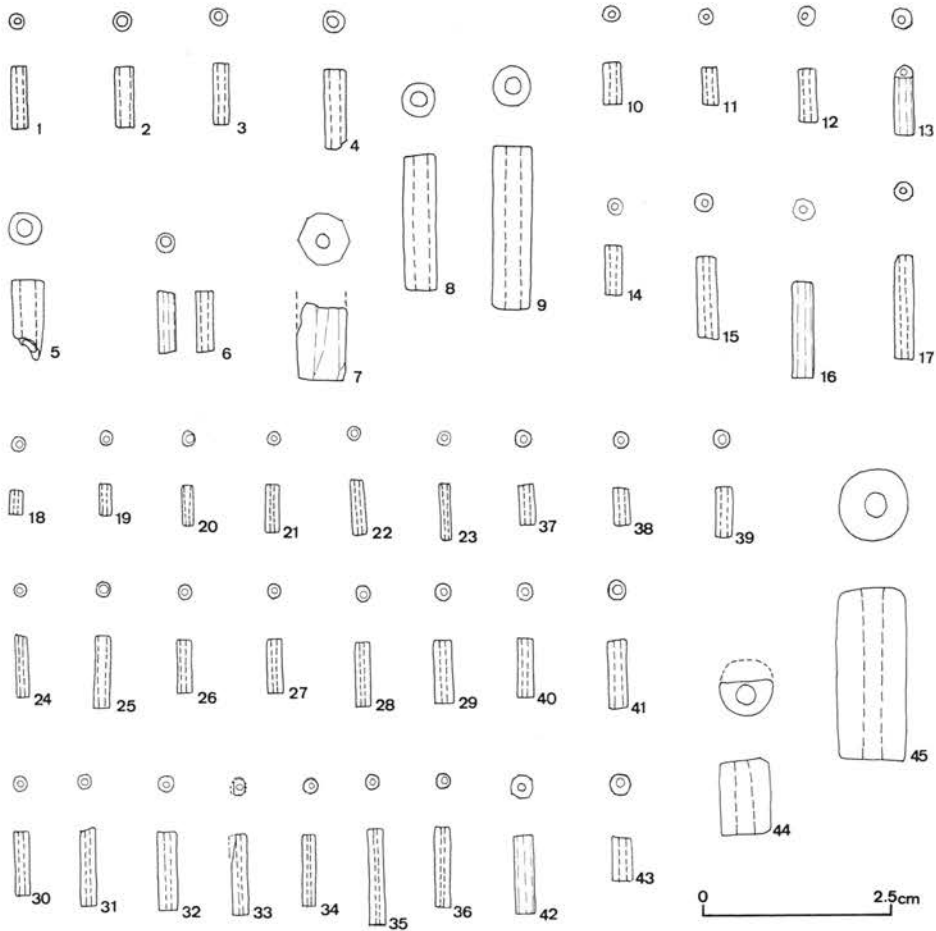
第337図5は板状剥片である。志高遺跡では、太身と細身の管玉を製作しており、板状剥片はそれぞれの目的に応じて大型のもの、小型のものと作り分けられているようである。この資料は太身管玉用のものであろうか。



第338図 碧玉製管玉の未製品(2)

第3工程 角柱体の作出

前工程で製作された板状剥片を施溝分割して角柱体を作成する段階である(第337図2・3, 第338図1~6)。



第339図 碧玉製管玉

板状剥片への施溝は長辺と短辺に対して行い(第337図3, 第338図6), 目的とする角柱体を得る。また, 施溝は剥片の両面から施すものとそうでないものがある。

角柱体作出の際に端部を切断して長さを整えるようであり, その残片が見られる(第338図1)。

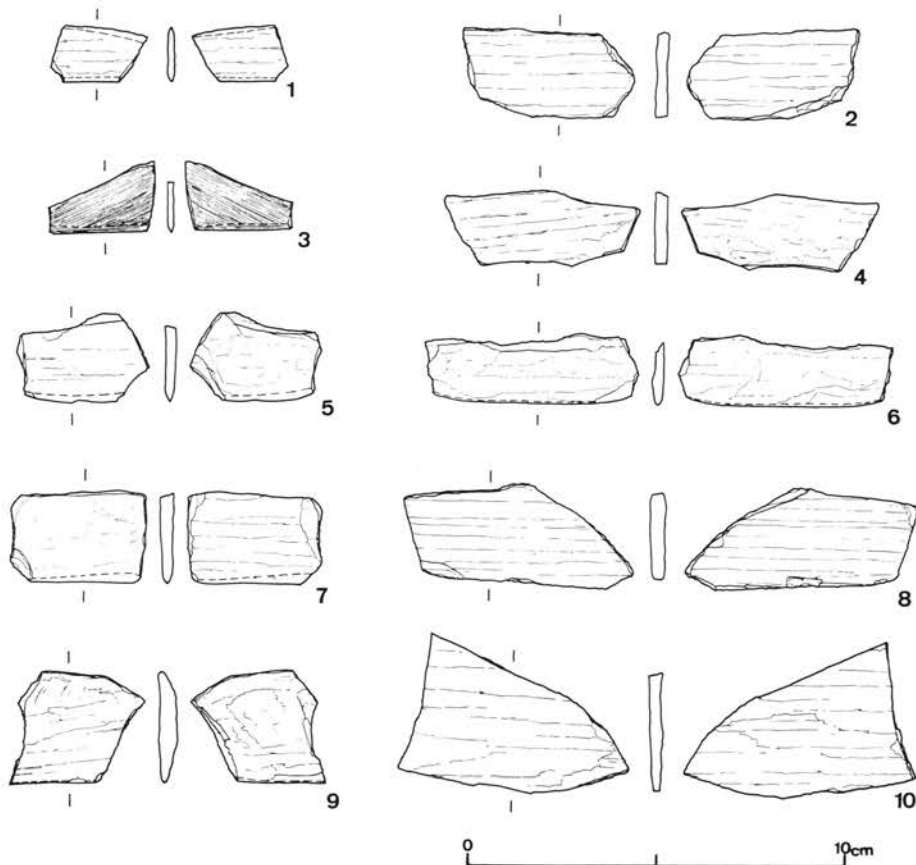
第4工程 多柱体へ

角柱体の稜を研磨して落とし, より円柱体に近い多柱体へと加工する。上下両端面についても研磨して整え, 平滑な面を形成する。第339図7・13・16・42などがこの段階の資料である。

第5工程 穿孔

錐を用いて上下両端から穿孔を行う。

第337図1は, 穿孔途中の未製品である。片側からの穿孔がみられる。孔の径は上面で4



第340図 擦り切り施溝具及びその素材

mm, 底で約3mmを測る。孔底は平坦に近いが、やや丸みを帯びている。2~3mm程度の径を持ち先端がやや丸い円柱状の錐を用いたのであろう。

この遺跡では錐が出土していないため、錐の用材、形態等は不明であるが、この資料から打製石錐のほかに福井県吉河遺跡や加斗下屋敷遺跡などでみつまっているような円柱状の磨製石錐を用いていたことがうかがえる。^(註4)

第6工程 仕上げ

穿孔された多柱体の全面をていねいに研磨して円柱体の製品に仕上げる(第339図)。

以上、製作手順の復原を試みたが、この遺跡での碧玉製管玉製作技法の特徴は次のようにまとめることができよう。

1. 原石を打割して不定形な大型の石核を形成したのち、平坦面を持つ小型の石核を作る。
2. 小型の石核を分割し、完成品の直径にみあった板状剥片を得る。

3. 施溝具を用いる擦り切り施溝分割技法を主要な技法としている。

3. まとめ

山陰・北陸日本海沿岸を中心として、各地で弥生時代の玉作り関係の資料が確認されている。京都府下においても、久美浜町函石浜遺跡での発見以来、12の遺跡で玉作り関係の遺跡が確認されるに至っている(付表)。

志高遺跡も、近年になって集落内で玉生産を行っていることが明らかとなった遺跡のひとつである。

志高遺跡での玉生産は、現在までの資料でみる限り碧玉製管玉生産に限られているが、ヒスイ製の小型の勾玉なども確認されており、碧玉以外の素材を用いた玉生産を行っていた可能性も残されている。

この遺跡での碧玉製管玉生産は、弥生時代中期後半(第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式)に行われていたことは確実である。これに先行、あるいは後出資料が検出されていないため、開始時期がどの時点までさかのぼるのか不詳であるが、この遺跡の中期前半がどのようであったかという問題とあわせ、興味がつきない。

今回、製作技法について、石鋸を伴う擦切施溝分割手法を技術的前提としていること、押圧剝離による調整が認められないこと、石核から板状剝片を作出した後、角柱体を切断することなどから、大中の湖技法と同様のものであることを確認することができた。

大中の湖技法は、中期を通じて広く行われた技法である。滋賀県市三宅遺跡^(注6)や愛知県朝日遺跡^(注7)、福井県加斗下屋敷遺跡^(注8)などで中期前半には既に存在することが確認されており、京都府下で途中ヶ丘遺跡や扇谷遺跡^(注9)等で同時期の資料群がみつまっている。

今回報告した資料は、中期後半の比較的良好な資料であるとともに、若狭湾岸の分布地図の空白を埋めるものとして重要である。

素材及び製品の流通や石器生産体制全体の中での玉作り工人の位置付け等、玉生産をめぐる問題は、由良川下流域最大の拠点集落としてこの集落を捉える上での課題である。

(田代 弘)

注1 遺構出土のものについては本文(遺構編)を参照されたい。

注2 当遺跡では居住区に接して多数の方形周溝墓が確認されており、玉類の副葬なども確認されている。この玉類なども集落内での生産物であろう。集落内の需要に対応する生産形態であったと思われる。

注3 分割は間接剝離による。愛知県朝日遺跡では玉の未製品とともに、いわゆる「クサビ形石器」が検出されており、報告者はこれを分割具としての「タガネ状石器」として認識している。〔丹羽 博「朝日遺跡の玉作」(『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和160年度』(財)

愛知県埋蔵文化財センター) 1986]

志高遺跡においても「クサビ形石器」が多数出土している。この中に分割の際の工具として用いられたものがあるかもしれない。

注4 『吉河遺跡発掘調査概報』福井県埋蔵文化財調査センター 1986

注5 佐藤宗男「大中の湖南遺跡における玉作について」(『古代文化』第22巻1号) 1970

注6 『野洲町史』第1巻 野洲町 1987

注7 注3文献と同じ

注8 『日本考古学年報』1985年度版・1986年度版 日本考古学協会

注9 釋 龍雄「丹後地方玉造りの消長」(『歴史公論』第9巻3号) 1983

付表5 京都府下玉作り関係遺跡一覧表

遺跡名称	所在地	出土状況	時期	備考	文献
函石浜遺跡	久美浜町葛野箱石	表採		緑色凝灰岩製管 玉未製品・原石 ・瑪瑙剥片	1～3, 22
奈具遺跡	弥栄町黒部奈具		Ⅲ新～Ⅳ	緑色凝灰岩原石 ・剥片等	4・22
途中ヶ丘遺跡	峰山町長岡・新治		I～V	緑色凝灰岩製管 玉未製品・砥石 ・石鋸	5～7, 22
扇谷遺跡	峰山町字杉谷, 丹波, 荒山	溝	I新～Ⅱ	緑色凝灰岩製管 玉未製品・砥石 ・石鋸	8～10, 22
寺岡遺跡	野田川町字石川小字寺岡			緑色凝灰岩原石 ・剥片・砥石	11
谷内遺跡	大宮町谷内	土坑	V末	緑色凝灰岩製管 玉未製品	12
須代遺跡	加悦町字明石小字池田	住居跡壁溝	Ⅳ	緑色凝灰岩原石 ・剥片	13
志高遺跡	舞鶴市志高	土坑・包含層, 住居跡・溝	Ⅲ新～Ⅳ	緑色凝灰岩原石 ・未製品・石鋸	14～16
桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	包含層	Ⅳか	緑色凝灰岩原石 ・剥片 調査継続中	
鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町	溝・土坑	I～Ⅱ	緑色凝灰岩原石 ・管玉未製品・ 石鋸(剥片)	17～19
神足遺跡	長岡京市東神足1・2丁目	住居跡, 包含層		玉砥石, 緑色凝灰岩原石, 石鋸	20
金石衛門垣内遺跡	八幡市	表採	Ⅳか		21

1 梅原末治「淡村函石濱石器時代ノ遺蹟」(『京都府史蹟勝地調査會報告』2 京都府) 1922

2 梅原末治「淡村函石濱石器時代遺蹟(補遺)」(『京都府史蹟勝地調査會報告』3 京都府) 1924

3 松本 勇・直良信夫「丹後函石浜遺跡の査報」(『考古学雑誌』第19巻11号 日本考古学会) 1929

- 4 『奈具遺跡発掘調査報告書』弥栄町教育委員会 1972
- 5 『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1977
- 6 『京都府峰山町新治地区圃場整備に伴う途中ヶ丘遺跡発掘調査概報』峰山町教育委員会 1978
- 7 『途中ヶ丘遺跡発掘調査概報(Ⅱ)』峰山町教育委員会 1981
- 8 『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1975
- 9 『扇谷遺跡発掘調査概要』峰山町教育委員会 1983
- 10 『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1988
- 11 『寺岡遺跡』野田川町教育委員会 1988
- 12 細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 13 『須代遺跡Ⅰ』加悦町教育委員会 1988
- 14 『志高遺跡一昭和56年度花ノ木・スド口戴下地区および久田美地区の調査概要』舞鶴市教育委員会 1982
- 15 『志高遺跡一昭和57年度カキ安地区の調査一』舞鶴市教育委員会 1983
- 16 『志高遺跡Ⅱ一弥生土器の概要一』舞鶴市教育委員会 1986
- 17 山中 章ほか「長岡京跡左京第100次(7ANEHD地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会) 1984
- 18 辻本和美ほか「長岡京跡左京第151次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 19 田代 弘「長岡京跡左京第151次調査で出土した玉作り関係の遺物について」(『京都府埋蔵文化財情報』第25号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 20 『神足遺跡第16次調査略報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1988
- 21 『八幡市史』第1巻 八幡市 1986
- 22 釋 龍雄「丹後地方玉造りの消長」(『歴史公論』第9巻3号) 1983

付表6 出土石器一覧表

図番号	調査 回数	出土地点	出土層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	備考
336図1	6次	18F以北	包含層	4.6	3.1	1.6	緑色凝灰岩	
〃 2	6次	15ライン断割	〃	4.7	3.6	2.8	〃	
〃 3	6次	15~17F	〃	4.3	4.5	1.6	〃	
〃 4	6次	15~17F	〃	6.4	4.2	2.9	〃	
〃 5	6次	15ライン断割	〃	6.8	4.6	3.0	〃	
337図1	6次	SH85210(SD埋土 85211下層)		3.2	1.2	1.1	〃	
〃 2	3次	KS82, J-3・4 ・5	灰色砂層	4.6	1.2	1.2	〃	
〃 3	6次	SH85210	床面	2.5	1.8	1.3	〃	
〃 4	6次	19F・G	包含層	2.9	1.3	1.1	〃	
〃 5	4次	KS83D59	暗褐色砂質土	2.9	2.1	1.3	〃	No.1551

図番号	調査 回数	出土地点	出土層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	備考
337図6	4次	K S 83 L 5	暗茶灰色砂質土	4.2	3.1	3.0	緑色凝灰岩	
338図1	3次	坑32	灰色斑混茶褐色土	1.0	0.5	0.5	〃	K S P 1(1983)
〃 2	〃	〃	〃	2.0	0.4	0.6	〃	
〃 3	〃	〃	〃	1.5	0.7	0.8	〃	
〃 4	〃	〃	〃	1.2	0.7	0.6	〃	
〃 5	〃	〃	〃	1.8	1.9	1.7	〃	
〃 6	〃	〃	〃	1.7	1.0	1.0	〃	
〃 7	〃	〃	〃	3.5	4.3	2.7	〃	
〃 8	〃	〃	〃	5.0	4.2	2.3	〃	
339図1	4次			0.8	0.2	0.2	〃	No.1648D-73
〃 2	〃			0.8	0.2	0.2	〃	No.1446C-72
〃 3	〃			0.8	0.25	0.2	〃	No.139H-75
〃 4	〃			1.0	0.3	0.3	〃	No.1647E-73
〃 5	〃			1.0	0.4	0.4	〃	No.1646D-59
〃 6	〃			0.8	0.2	0.2	〃	未製品(多角柱体) No.1452D-57
〃 7	〃			1.0	0.7	0.6	〃	未製品(多角柱体) No.1418
〃 8	〃			1.8	0.4	0.4	〃	No.1438C-59
〃 9	〃			2.1	0.5	0.5	〃	No.1444
〃 10	7次	S H 86203	埋土	0.5	0.3	0.3	〃	
〃 11	〃	〃	〃	0.5	0.2	0.2	〃	
〃 12	〃	S H 86201	床面	0.7	0.2	0.2	〃	
〃 13	〃	〃	〃	0.9	0.3	0.3	〃	未製品(多角柱体)
〃 14	〃	S H 85202	埋土	0.7	0.2	0.2	〃	
〃 15	〃	S H 86204	〃	1.1	0.3	0.3	〃	
〃 16	〃	S K 85206	〃	1.2	0.3	0.3	〃	
〃 17	〃	S H 86203	〃	1.3	0.3	0.3	〃	
〃 18	6次	15G地区	包含層	0.3	0.2			
〃 19	〃	〃	〃	0.4	0.2			
〃 20	〃	〃	〃	0.5	0.2			
〃 21	〃	〃	〃	0.6	0.2		緑色凝灰岩	

図番号	調査 次数	出土地点	出土層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石 材	備 考
339図22	6次	15G地区	包含層	0.7	0.2		緑色凝灰岩	
// 23	//	//	//	0.7	0.2		//	
// 24	//	//	//	0.8	0.2		//	
// 25	//	//	//	0.9	0.2		//	
// 26	//	//	//	0.7	0.2		//	
// 27	//	//	//	0.7	0.2		//	
// 28	//	//	//	0.8	0.2		//	
// 29	//	//	//	0.8	0.2		//	
// 30	//	//	//	0.8	0.2		//	
// 31	//	//	//	1.0	0.2		//	
// 32	//	//	//	1.0	0.2		//	
// 33	//	//	//	1.0	0.2		//	
// 34	//	//	//	0.9	0.2		//	
// 35	//	//	//	1.3	0.2		//	
// 36	//	//	//	1.0	0.2		//	
// 37	//	S D85211	遺構埋土	0.5	0.2	0.2	//	
// 38	//	S H85205	//	0.5	0.2	0.2	//	
// 39	//	//	//	0.7	0.2	0.2	//	
// 40	//	S H86201	//	0.8	0.2	0.2	//	
// 41	//	//	//	0.9	0.3	0.3	//	
// 42	//	//	//	1.0	0.3	0.3	//	未製品・角柱体
// 43	//	S H85205	//	0.6	0.3	0.3	//	
// 44	//	21G地区	包含層	0.9	0.7	0.45	//	
// 45		10F地区		2.2	0.9		//	
340図1	4次			2.2	1.5	0.2	紅簾片岩	使用痕あり A-53 No.1419
// 2	6次	18・19EG地区		4.6	2.2	0.3	//	剥片
// 3	7次	S H86201	S H201床面直上	2.8	1.8	0.2	//	使用痕あり
// 4	6次		包含層	5.2	1.9	0.4	//	剥片
// 5	//	S D85211	遺構埋土	3.5	2.3	0.3	//	使用痕あり
// 6	7次	S D86211	//	5.7	1.9	0.3	//	使用痕あり

図番号	調査 次数	出土地点	出土層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石 材	備 考
340図7	7次	13F地区	包含層	3.6	2.4	0.4	紅簾片岩	使用痕あり
〃 8	6次	不明	〃	6.1	2.5	0.5	〃	剥片
〃 9	〃	21B地区	〃	3.6	3.0	0.5	〃	使用痕あり
〃 10	4次	K S 6地区	〃	6.0	3.8	0.4	〃	剥片

第6節 地震跡

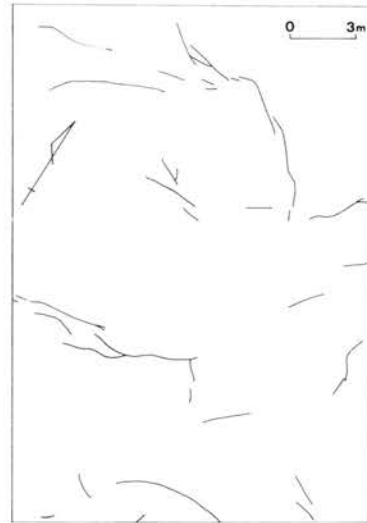
志高遺跡において、大きな地震に伴う液状化現象の跡が多く認められた。この現象は、地表面下1~2mに、地下水で満たされたゆる詰まりの砂層が分布し、その上を粘土質堆積物が覆っている状態で発生しやすく、発生メカニズムは次のように説明されている。^(注1)

通常の状態では、砂層中の砂粒はお互いに支え合ってバランスをとっている。しかし、地下水で満たされた状態で急激な地震動が加わると、砂粒間の水圧が上昇し、砂粒がばらばらに離されて全体が流動状になる(液状化)。さらに、圧力の上昇した水は上位の地層を引き裂いて地表へ逃げ、その時に砂も一緒に噴き上がる(噴砂)。

このような現象は、最近の大きな地震でも沖積平野に広範囲に発生して大被害をもたらしている。特に、1964年の新潟地震では砂層の流動化により200棟前後の鉄筋コンクリートの建物が傾いたり沈んだりしている。

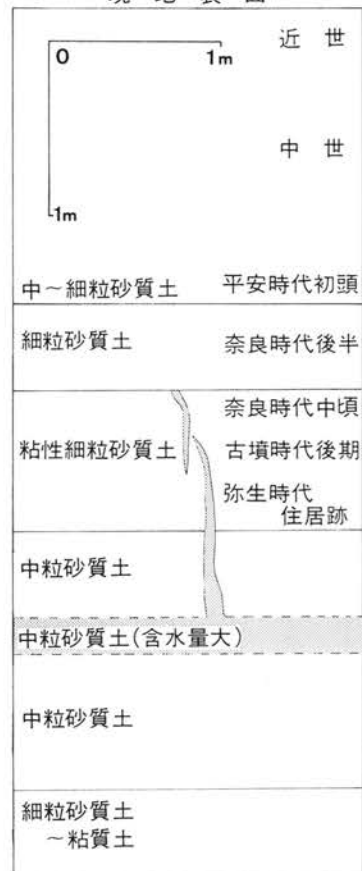
近年、液状化現象の跡が、各地の遺跡発掘現場で見られるようになり、この現象の解明に大きな役割を果たしている。^(注2)特に典型的な例は京都府八幡市の木津川河床遺跡で、液状化による地層の変形・噴砂などの様々な形態がよく観察できた。^(注3)また、液状化をもたらせた地震も、地震史料の検討により、1596(慶長元)年伏見地震、または1662(寛文2)年近江地震のいずれかに限定できた。

志高遺跡において、8世紀前半の遺構面上で数多くの噴砂の割れ目が認められた(第341・343図)。^(注4)これらは、最大幅20cm、最長6mで密に分布しており、方向には特に規則性がなく、割れ目内は混



第341図 噴砂の割れ目の分布

現 地 表 面



第342図 液状化層と噴砂の模式図

入物のない黄褐色の中粒砂で満たされていた。

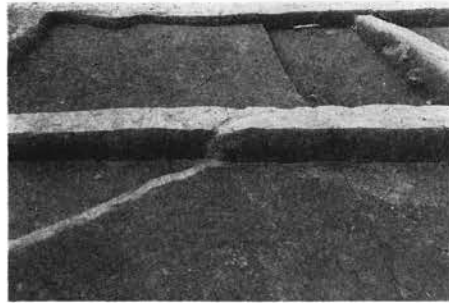
第342図は噴砂の模式断面図である。現地表面下約3.5mの位置に特に含水量の多い中粒砂層が堆積しており、噴砂はこの層から生じ、弥生時代から奈良時代中頃までの堆積物(粘性砂質土～砂質土)を引き裂いて1～2m上昇していた。噴砂の上部は9世紀前半の洪水による堆積物に削られているので、液状化をもたせた地震は8世紀に生じたと考えられる。

当遺跡において、さらに古い時期の噴砂が認められた。これは、現地表面下約6mに分布する砂層が、縄文時代前期前葉の粘質土～砂を幅5～10mで引き裂いて約1m上昇したものである。この噴砂は、縄文時代前期中葉の層に切られているので、同時代前期前葉から中期にかけての大きな地震(約5,500年前)によるものと考えられる。

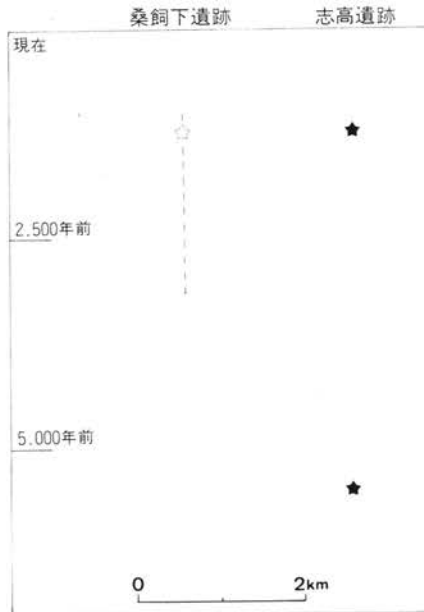
このように、志高遺跡周辺に、液状化が生じうる震度(通常、震度V以上)をもたせる大きな地震が、約5,500年前、及び、8世紀

に生じたことが明らかになった。同一地点で新旧2時期の液状化跡が認められた例は、我が国でも初めてで、貴重な発見と言える。当地域周辺で歴史時代の大きな地震として知られているものは、701(大宝元)年と1927(昭和2)年の2例のみである。^(注5) 後者は、北丹後地震(マグニチュード7.3)で、郷村断層・山田断層に沿って地震断層が生じ、丹後半島中心に著しい被害が生じた。前者は、『続日本紀』に「大宝元年三月甲戌朔、己亥、丹波国地震三日」と記されている。これは、丹波国の国司の報告を基にして記述されており、信憑性は高い。さらに、この地震に関して、『丹後風土記残欠』に凡海郷が海水に没して2つの小島(冠島・沓島)になったという記述があるが、このような大規模な地殻変動が内陸の1回の地震で生じるとは考え難く、かなりの誇張があると考えられている。^(注6)

志高遺跡の約2km西方で、由良川の自然堤防上に位置する桑飼下遺跡でも多くの地震跡



第343図 8世紀中頃の住居跡を切る噴砂



第344図 志高遺跡と桑飼下遺跡の地震跡

が認められている。^(注7)これらは、縄文時代後期の炉跡を垂直変位させる^(注8)断層、同時期の炉跡を引き裂く噴砂、同時期の遺物包含層を切る断層と噴砂である。このため、桑飼下遺跡において、縄文時代後期以降に強い地震動に見舞われたことがわかる。

志高遺跡と桑飼下遺跡は近接した位置(地震による震動を考える上で)にあり、地形・地質的な立地条件も類似している。大きな地震に伴う地殻変動は同時に広範囲に発生するもので、桑飼下遺跡の地震跡も8世紀に生じた可能性がある(第344図)。

今後、両遺跡周辺の発掘調査において、5,500年前、及び、8世紀の地震跡が検出される可能性が強い。8世紀の地震跡の場合701(大宝元)年の地震との関係について十分に吟味しながら、調査する必要がある^(注9)と思う。(寒川 旭)

- 注1 町田 洋・小島圭二『自然の猛異<日本の自然8>』岩波書店 1986、及び陶野郁雄・安田進「液状化—大地が溶けるとき」(『科学朝日』9) 1988などに平易な説明がある。
- 注2 寒川 旭「考古学の研究対象に認められる地震の痕跡」(『古代学研究』116) 1988など。
- 注3 寒川 旭・岩松 保・黒坪一樹「京都府木津川河床遺跡において認められた地震跡」(『地震』40) 1987、岩松 保・寒川 旭「八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号) 1987、及び寒川 旭・岩松 保「発掘された地震の液状化跡」(『科学』58 岩波書店) 1988など。
- 注4 寒川 旭・肥後弘幸「京都府舞鶴市において認められた古代の地震跡」(『地震学会講演予稿集』1) 1988。
- 注5 文部省震災予防評議会編『大日本地震史料』第1巻 1941、及び宇佐美龍夫『新編 日本被害地震総覧』東京大学出版会 1987など。
- 注6 萩原尊禮編『古地震—歴史資料と活断層からさぐる—』東京大学出版会 1982。
- 注7 渡辺 誠編『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975。
- 注8 日本列島には、現在、東西方向の圧縮力が働いており、活断層周辺にひずみエネルギーが蓄積されている。この蓄積量が一定の値に達すると断層活動が生じて、断層の両側の岩盤(地表面も)が食い違ふと共にひずみエネルギーも開放される。この断層「本来の意味の断層」活動に伴う震動を我々は地震として感じる。また、地震動に伴って軟弱地盤に食い違いが生じることがある。この食い違いは、「受動的な断層」で、地震の結果生じたものである。当遺跡の断層は、後者である。
- 注9 東京大学地震研究所編『新収 日本地震史料』第1巻 1981に、748(天平20)年に敦賀地方に地震が生じたことが述べられている。この地震の影響についても考える必要がある。

第7節 石器の材質

志高遺跡から出土した縄文時代から弥生時代の石器石材数100点について、ルーペ等の補助具を使用して肉眼による岩石の観察を、昭和63年7月25・26日の両日に行った。

観察結果は付表2・3の石材の覧に示したとおりである。^(注1)

出土石材の岩石名と産地とのおおまかな関係は下記のようになる。

- A. 砂岩・頁岩・チャート類 丹波・舞鶴層群
- B. 蛇紋岩・ハンレイ岩・滑石類 大江山塩基性岩体及びその周辺
- C. 紅簾石片岩・石墨片岩等の結晶片岩類 三波川帯
- D. 花崗岩類 宮津花崗岩

上部のものに大江山塩基性岩体に伴うものがある。

- E. 安山岩・凝灰岩・碧玉・めのう等 日本海側に分布する新生代第三紀層のグリーンタフ地域産出
- F. 無斑晶安山岩(サヌキトイド)・黒曜石 新生代第三紀層産出

今後は、岩石学的な室内分析や、野外調査による研究を進め、詳しい記載と、総合的な産地分析を進める必要がある。(橋本 清一)

注1 第3章で縄文時代と弥生時代の石器を付表2・3に掲げた。石材については、私が観察したが、一部肥後が援用した。

第8節 縄文時代前期の珪藻分析・花粉分析の結果

戸南地区で検出した縄文時代前期の包含層の土壌資料について、朝日航洋株式会社に珪藻分析・花粉分析を業務委託した。試料及び結果は以下のとおりである。

珪藻分析 試料No.3で、少ないながらも土壌珪藻を検出できたことから、縄文時代早期末の包含層が好気的環境下にあったことが推定できた。他の試料では、珪藻を検出できなかった。その理由として、土質が砂質であったために、シルト以下の細粒物質と挙動をともにする珪藻化石が流失したこと、珪藻が生育するに足る水分がなかったことが考えられる。

付表7 珪藻分析結果一覧表

試料No.	層名	時期	分析結果
1	第3層	前期後葉	ほとんど検出できなかった
2	第10層	前期初頭	ほとんど検出できなかった
3	第13層	早期末	39個体検出好気的環境に特徴的なHantzschia ambioxys, Navicula mutica等の土壌珪藻

花粉分析 花粉化石の保存状態は非常に悪く、産出もほとんどない。このため、古環境を復原することはできなかった。花粉化石の少なかった理由として、土質が砂質であったため花粉化石は流失してしまい堆積しなかったこと、酸化的状態で(土壌が酸性のため)花粉化石が分解・消失してしまったことがあげられる。

付表8 花粉分析結果一覧表

試料No.	層名	時期	分析結果
1	第3層	前期後葉	シダ類胞子1個体(イノモトソウ属)
2	第10層	前期初頭	樹木花粉1個体(モミ属)・不明花粉1個体・シダ類胞子1個体(イノモトソウ属)
3	第12層・第13層間層	早期末	樹木花粉1個体(モミ属)・草木花粉1個体(イネ属)・不明花粉1個体・シダ類胞子2個体

今回の分析結果は、残存化石がほとんどなかったため、当初の目的(縄文時代の古環境の復原)を達成することはできなかった。しかし、遺構の検出できなかった早期末の包含層(標高0m)が、当時の遺構面である可能性を指摘できたのは大きな成果である。

付表9 検出建物跡一覧表

(1) 竪穴式住居跡

第2次調査

遺構名	形態	規模 (m)	面積 ㎡	方位	備考
竪穴式住居跡1	方形	3.8×(2.9)	(10.6)	N20°E	柱数4, 炉1, 古墳時代前期
竪穴式住居跡2	隅丸方形	5.3×(3.8)	(18.0)	N2°W	古墳時代前期
竪穴式住居跡3	不明				炉2, 古墳時代前期
竪穴式住居跡4	不明				炉4, 古墳時代前期
竪穴式住居跡5	不明				炉1, 古墳時代前期
竪穴式住居跡6	隅丸方形	(6.0)×4.9	(27.0)	N16°E	壁溝あり, 古墳時代初頭

第3次調査・第4次調査

遺構名	形態	規模 (m)	面積 ㎡	方位	備考
竪穴式住居跡1	方形	5.6×4.8	26.1	N23°E	柱数4, 炉2, 壁溝あり, 掘立柱建物に建て替えか, 7世紀
竪穴式住居跡2	隅丸方形	4.2×(3.0)	(12.6)	N12°W	竈あり? 古墳時代前期
竪穴式住居跡3	方形?	(2.8)×(0.7)			炉, 古墳時代前期
竪穴式住居跡4	方形?	(2.7)×(2.5)			古墳時代前期
竪穴式住居跡5	方形	(3.5)×3.9		N9°W	竈あり, 1隅が入り込む
竪穴式住居跡6	方形	5.1×4.0	20.4	N4°W	柱穴4, 竈・壁溝あり, 対角の柱穴脇2か所に敷石あり, 6世紀後半~7世紀初頭
竪穴式住居跡7	方形	4.9×4.4	21.6	N17°E	竈あり, 6世紀後半
竪穴式住居跡8	方形?	(2.7)×(2.6)		N22°W	竈あり, 1隅が入り込む
竪穴式住居跡9	方形?	(1.4)×(1.0)		N36°E	
竪穴式住居跡10	方形?	(3.0)×(2.0)		N22°W	竈あり, 1隅が入り込む, 7~8世紀
竪穴式住居跡11	方形?				竈1, 古墳時代中期
竪穴式住居跡12	方形?				竈1, 古墳時代中期
竪穴式住居跡13	円形	直径約8.5	56.7		弥生時代中期
竪穴式住居跡14	不明				炉1, 弥生時代中期
竪穴式住居跡15	不明				炉1
竪穴式住居跡16	方形?				7世紀
竪穴式住居跡17	方形?				7世紀
竪穴式住居跡18	方形				炉あり, 勾玉・白玉出土, 古墳時代
竪穴式住居跡19	方形				竈あり, 1隅が入り込む, 古墳時代

遺構名	形態	規模 (m)	面積 ㎡	方位	備考
竪穴式住居跡20	方形				平地式住居、竈あり、7世紀
竪穴式住居跡21	方形				平地式住居、竈あり、7世紀
竪穴式住居跡22	円形	直径約13~14			S H86201と同一、炉3、土坑1、志高弥生Ⅵ期
竪穴式住居跡23	円形	直径9	63.5		炉3、土坑1、志高弥生Ⅶ期

第6次・第7次調査舟戸南地区

遺構名	形態	規模 (m)	面積 ㎡	方位	備考
S H86202	円形	直径6.5	33.2		炉1、土坑1、志高弥生Ⅳ期
S H86205	円形	直径6.5	33.2		土坑1、排水溝?あり、志高弥生Ⅴ期
S H86209	円形	直径7.3	41.8		柱穴8、中央にピット?、弥生中期
S H86210	円形	直径7.5	44.2		柱穴5~6、排水溝?あり、志高弥生Ⅳ期
S H86218	円形?				土坑1、志高弥生Ⅳ~Ⅴ期
S H86201	円形	直径約13~14	約140		土坑1、炉1、志高弥生Ⅵ期
S H86202	円形?	直径約8	約50		土坑1、炉1、柱穴6、志高弥生Ⅶ期
S H86203	円形	直径8.4	55.4		土坑2、炉1、志高弥生Ⅴ期
S H86204	円形	直径約8	約50		排水溝?あり、志高弥生Ⅴ期?
S H86212	円形	直径約8	約50		銅剣形石剣出土、土坑2、志高弥生Ⅴ期?
S H85・86101	長方形	5.8×4.5	26.1	N63°E	竈・壁溝あり、8世紀中頃
S H86102	正方形	3.5×3.5	12.2	N62°E	竈あり、柱穴2、8世紀前半
S H86103	正方形	6.5×6.5	42.3	N63°E	柱穴4、7~8世紀
S H86104	長方形	6.0×3.9	23.4	N58°E	竈あり、7~8世紀
S H86105	方形?				竈あり、7~8世紀
S H86108	不明				竈の残欠のみ検出
S H86109	正方形	3.8×3.5	13.3	N65°E	竈あり、青野型?
S H86110	方形	4.3×不明		N65°E	S H85・86101に先行する
S H86111	長方形	5.1×3.3	13.3	N65°E	竈あり、8世紀中頃
S H85106	方形	4.0×不明		N75°E	竈あり、7世紀?
S H85114	方形?				竈あり、S H85106に先行
S H85111	正方形	5.6×5.6	31.3	N56°E	竈・周壁溝あり、7世紀?
S H85107	方形	一辺4m前後			床面のみ検出

遺構名	形態	規模 (m)	面積 m ²	方位	備考
S H85108	方形	一辺4 m前後			竈あり, 床面のみ検出
S H85109	方形	一辺4 m前後			床面のみ検出
S H85110	方形	一辺約5			青野型住居?
S H85112	方形	一辺4 m前後			床面のみ検出
S H85113	方形	一辺4 m前後			竈あり, 床面のみ検出

第7次調査舟戸北地区

遺構名	形態	規模 (m)	面積 m ²	方位	備考
S H86120	方形	4.6×不明			竈あり, 8世紀中頃
S H86122	方形?				竈あり, 7~8世紀
S H86128	方形	5.0×不明			竈あり, S H86120に先行, 7~8世紀
S H86123	方形?				柱穴4, 竈あり, 6世紀後半?
S H86124	方形?				柱穴4, 竈あり, S H86123に先行

第7次調査岡安地区

遺構名	形態	規模 (m)	面積 m ²	方位	備考
S H86246	隅丸方形	4.1×3.5	14.0		柱穴4, 土坑・壁溝あり, 志高弥生Ⅸ期
S H86241	方形	6.5×不明	42.2?		柱穴4, 炉あり, 古墳時代前期
S H86247	正方形	4.7×4.7	22.1		炉あり, 勾玉出土, 古墳時代前期
S H86151	長方形?				古墳時代前期?
S H86150	正方形				竈あり, 7~8世紀

(2) 掘立柱建物跡

第3次調査

遺構名	規模・桁×梁(柱間寸法)	方位	備考
掘立柱建物跡1	5間・9.0m(不定)×2間・4.6m(2.3m)	E22°N	屋, 東西棟, 柱穴円形
掘立柱建物跡2	5間・10.2m(不定)×2間・4.6m(2.3m)	E22°N	屋, 東西棟, 柱穴円形
掘立柱建物跡3	3間・6.3m(2.1m)×2間・4.2m(2.1m)	N27°W	屋, 南北棟, 柱穴不定円形
掘立柱建物跡4	2間・4.8m(2.4m)×2間・4.2m(2.1m)	N28°W	屋?, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡5	4間・8.4m(2.1m)×2間・4.2m(2.1m)	N23°W	屋, 南北棟, 柱穴円形
掘立柱建物跡6	2間・3.2m(1.6m)×2間・3.2m(1.6m)	N28°W	倉, 柱穴隅丸方形

遺構名	規模・桁×梁(柱間寸法)	方位	備考
掘立柱建物跡7	3間・7.2m(2.4m)×2間・4.6m(2.3m)	E27°N	屋, 東西棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡8	2間・3.3m(不定)×2間・3.0m(1.5m)	E25°N	倉, 柱穴円形
掘立柱建物跡9	2間・2.4m以上×2間・3.6m(1.8m)	N35°W	屋?, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡10	4間・7.8m(不定)×2間・4.8m(2.4m)	N32°W	屋, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡11	3間・6.0m(2.0m)×2間・4.4m(不定)	N31°W	屋, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡12	1間・2.4m以上×2間・4.2m(2.1m)	N32°W	屋, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡13	1間・2.4m以上×2間・4.4m(不定)	N32°W	屋?, 南北棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡14	4間・8.1m(不定)×1間・2.4m以上	E27°N	屋?, 東西棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡15	(2間)・4.9m(不定)×2間・4.4m(不定)	N30°W	屋?, 東西棟, 柱穴隅丸方形
掘立柱建物跡16	2間・3.1m(不定)×2間・3.0m(1.5m)	E3°N	倉?, 東西棟, 柱穴は不定円形

第6次・第7次調査舟戸南地区

遺構名	規模・桁×梁(柱間寸法)	方位	備考
S B 85017	3間・7.65(8.5尺)×2間・5.1m(8尺)	N15°W	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85026	3間・6.3m(7尺)×2間・4.2m(7尺)	N24°W	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85046	3間・7.2m(8尺)×2間・4.2~4.8m	N74°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 86020	3間・8.1m(9尺)×2間・4.8m(8尺)	N73°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 86019	4間・7.2m(6尺)×1間・3.6m(12尺)	N66°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85020	2間・3.6m(6尺)×2間・3.3m(5.5尺)	N18°W	倉, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85021	2間以上(6尺)×2間・3.6m(6尺)	N19°W	倉, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85027	4間・6.0m(5尺)×2間・4.8m(8尺)	N40°E	屋, 柱穴不定形な円形, 奈良時代
S B 85028	3間以上(7尺)×2間・4.8m(8尺)	N70°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85024	3間・7.2m(8尺)×1間3.6m(12尺)	N73°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85023	3間・5.85m(5.5尺)×2間以上(6尺)	N71°E	屋, 柱穴隅丸方形, 奈良時代
S B 85003	3間・7.65m(9.5尺)×2間・5.1m(8.5尺)	N26°W	屋, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 86003	4間・9.6m(8尺)×2間・4.8m(8尺)	N64°E	屋, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 86018	3間・7.65m(8.5尺)×2間・5.1m(8.5尺)	N64°E	屋, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 86008	5間・12.0m(8尺)×2間以上(9尺)	N64°E	屋, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 86041	2間以上(5.5尺)×2間・4.2m(7尺)	N26°W	屋?, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?

遺構名	規模・桁×梁(柱間寸法)	方位	備考
S B 85005	2間・3.6m(6尺)×2間・3.6m(6尺)	N20°W	倉, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 85006	2間・4.5m(7.5尺)×2間・4.2m(7尺)	N19°W	倉, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?
S B 85011	2間・3.6m(6尺)×2間・3.6m(6尺)	N30°W	倉, 柱穴隅丸方形, 平安時代初頭?

第7次調査岡安地区

遺構名	規模・桁×梁(柱間寸法)	方位	備考
S B 86240	2間・3.6m(1.8m)×1間・2.4m	N38°E	屋?, 志高弥生Ⅸ期
S B 86249	2間・3.1m(不定)×1間・2.4m	N50°E	屋?, 志高弥生Ⅸ期
S B 86250	1間・2.7m×1間・2.4m	N40°E	志高弥生Ⅸ期

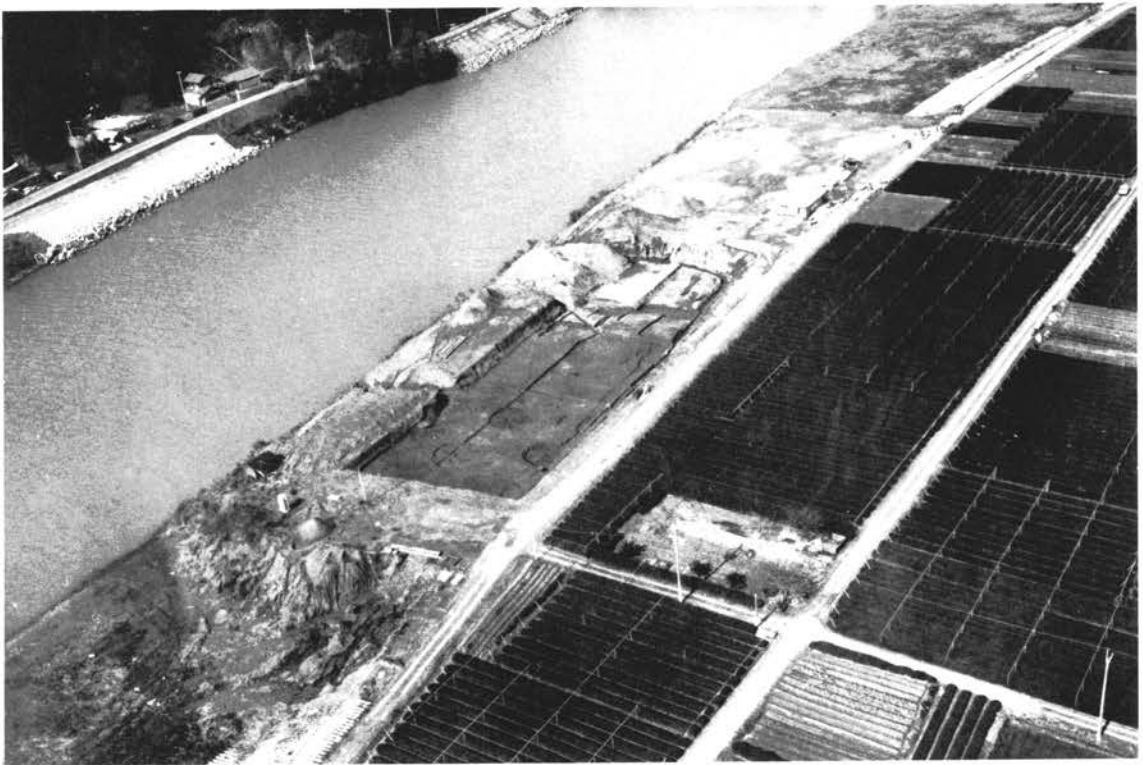
圖 版



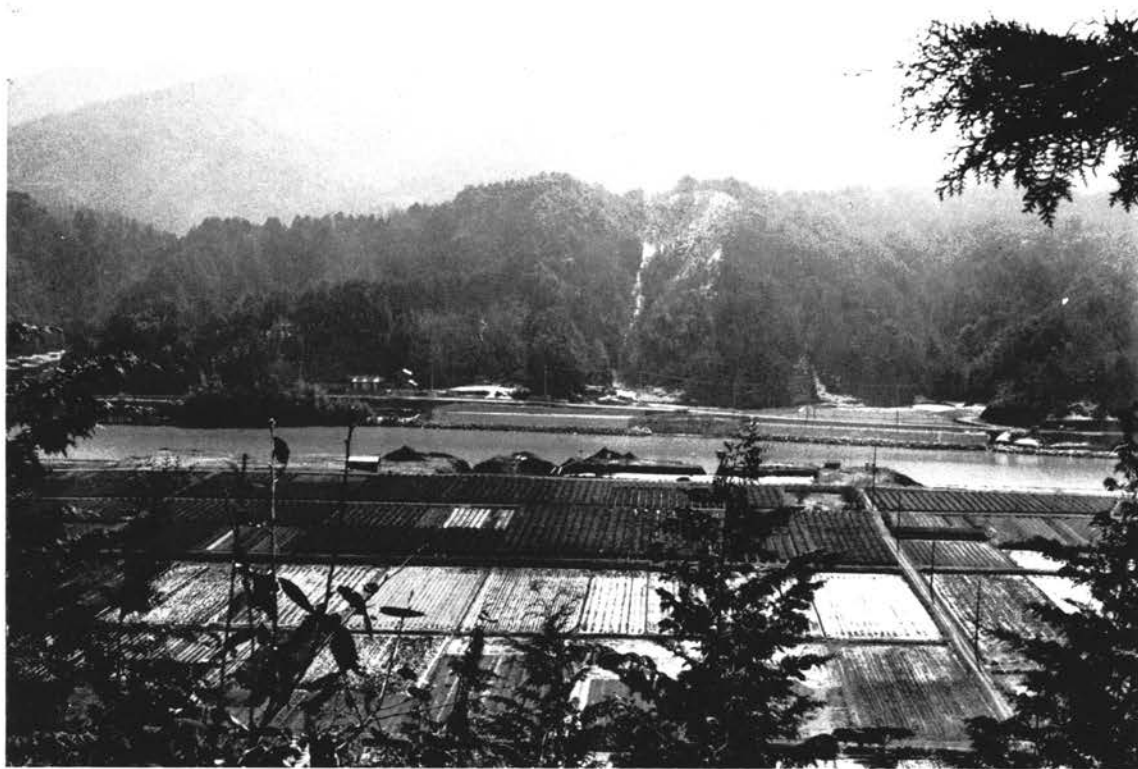
志高遺跡全景（調査前）



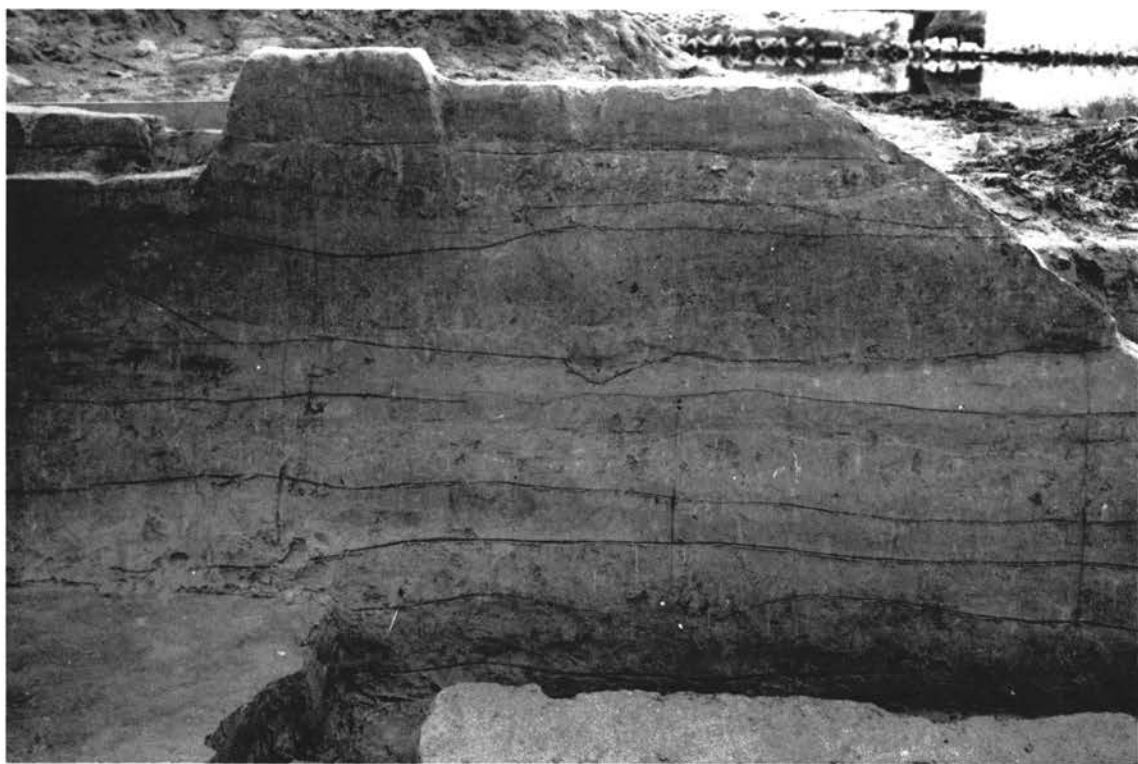
(1) 由良川下流域全景



(2) 舟戸地区近景 (航空写真)



(1) 舟戸地区遠景 (志高城跡から)



(2) 縄文時代前期土層断面



(1) 縄文時代前期前葉全景（北西から）



(2) 縄文時代前期前葉炉跡完掘状況（北西から）



(1) 石組遺構



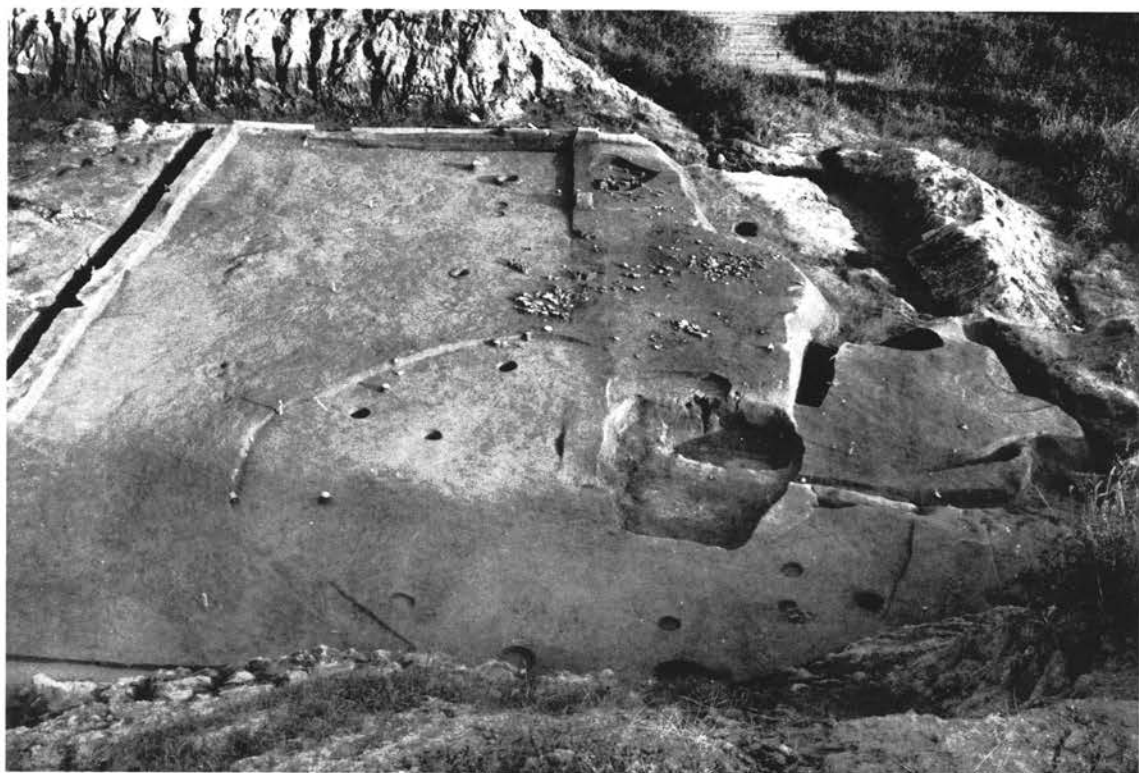
(2) 縄文時代前期中葉全景 (北東から)



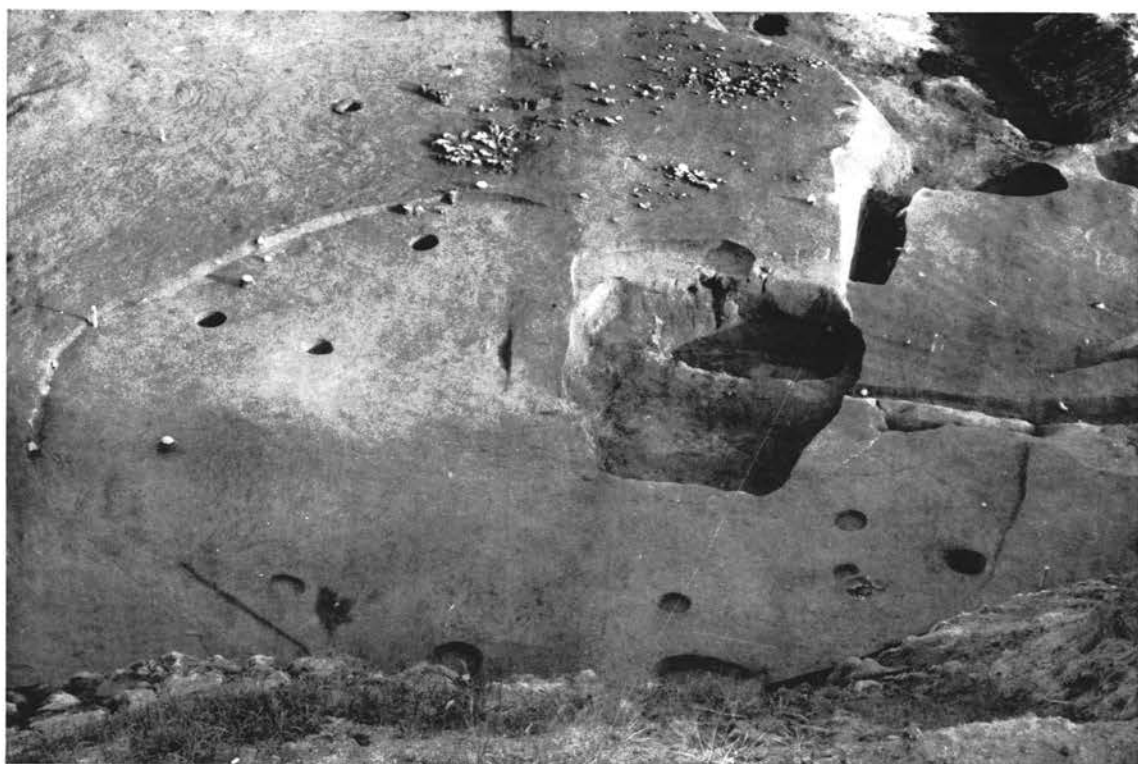
(1) 竪穴式住居跡 (S H86307)



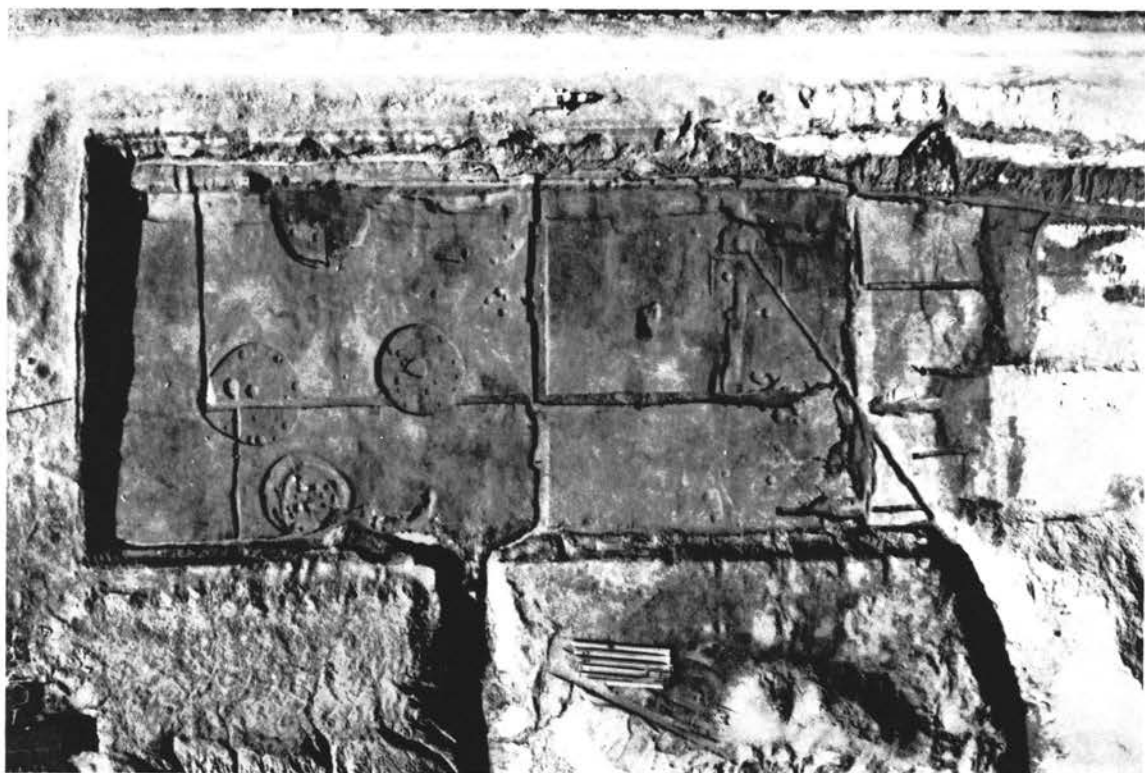
(2) 縄文時代前期中葉土器出土状況



(1) 縄文時代前期後葉全景 (北西から)



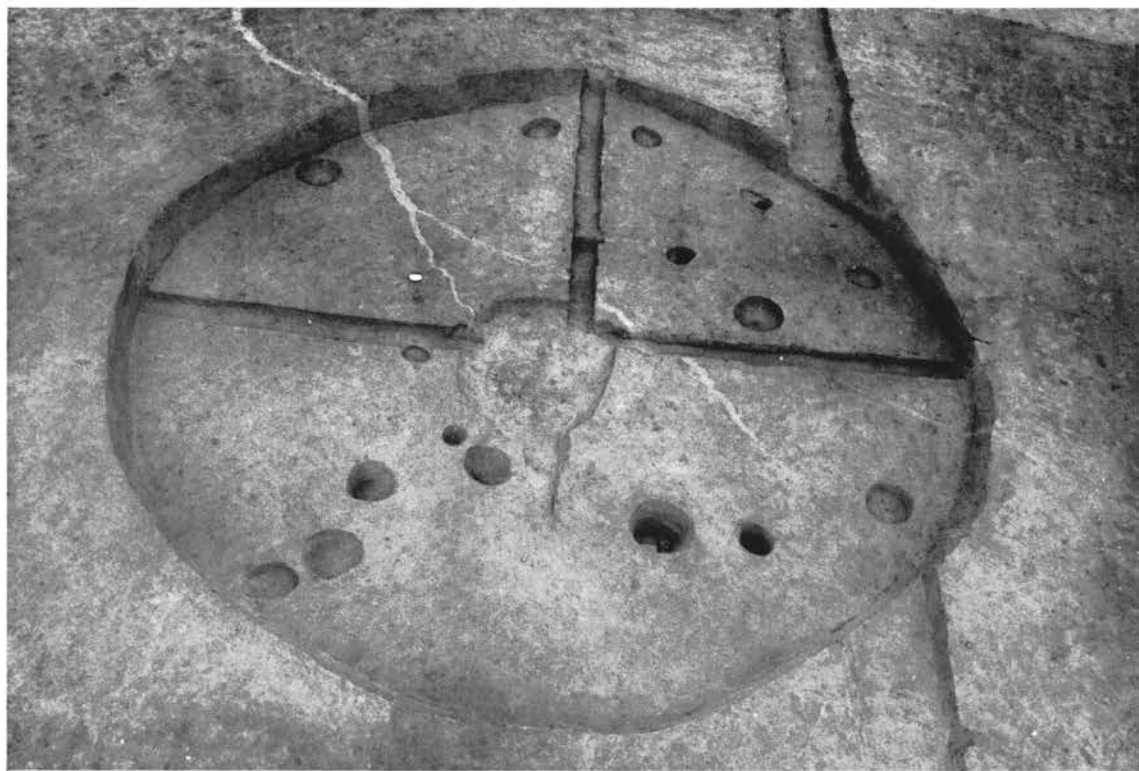
(2) 竪穴式住居跡 (S H86302) (北西から)



(1) 弥生時代中期全景（第6次調査舟戸南地区）



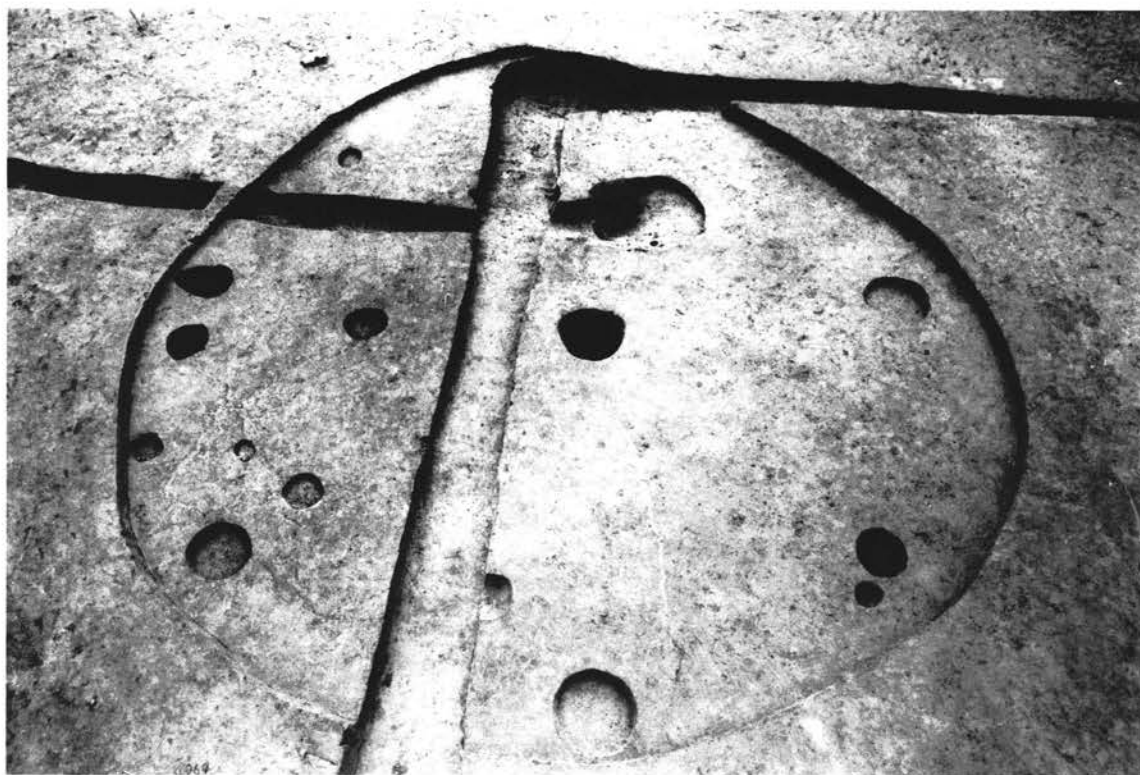
(2) 弥生時代中期竪穴式住居跡群（第6次調査，南西から）



(1) 竪穴式住居跡 (S H85202) (南西から)



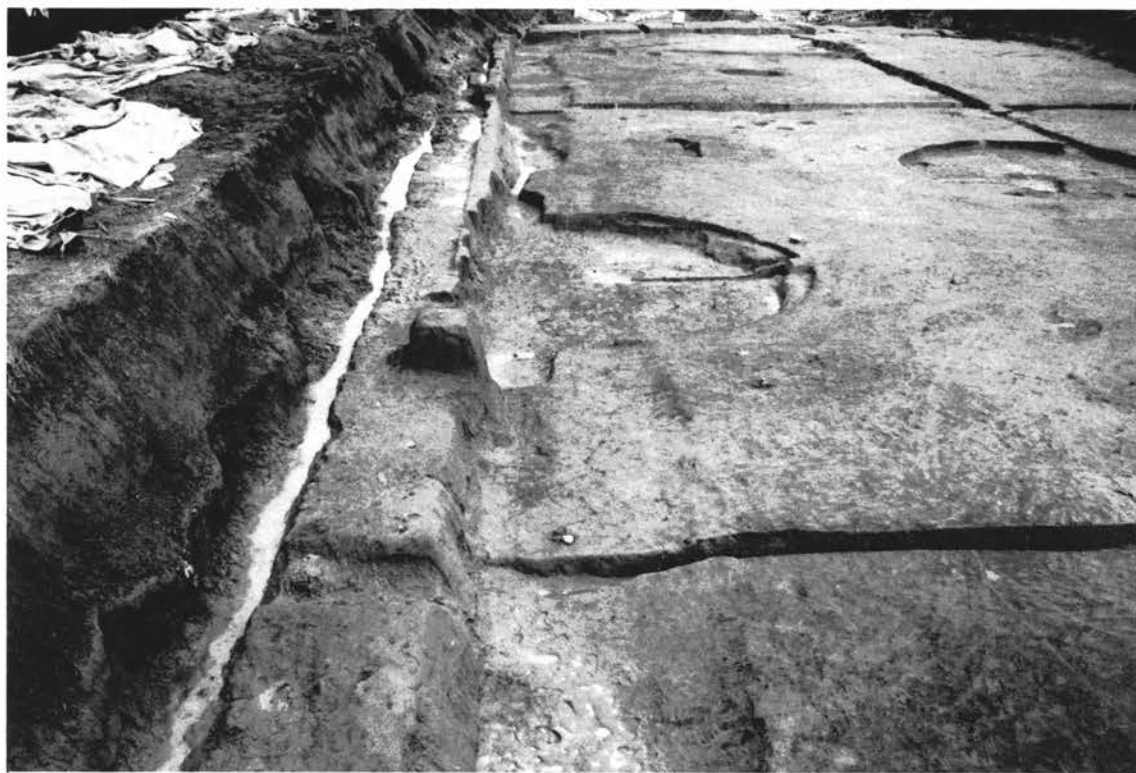
(2) 竪穴式住居跡 (S H85205) (北から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H85209) (南西から)



(2) 竪穴式住居跡 (S H85210) (北西から)



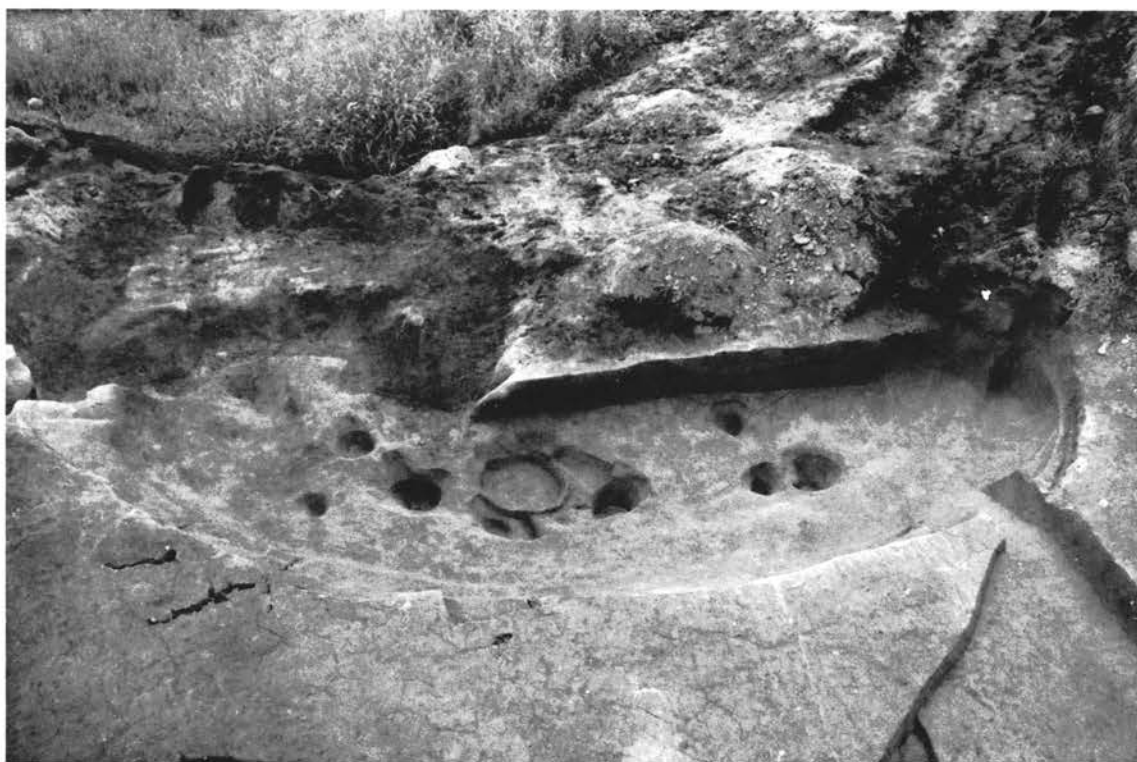
(1) 溝 (S D85211) (南東から)



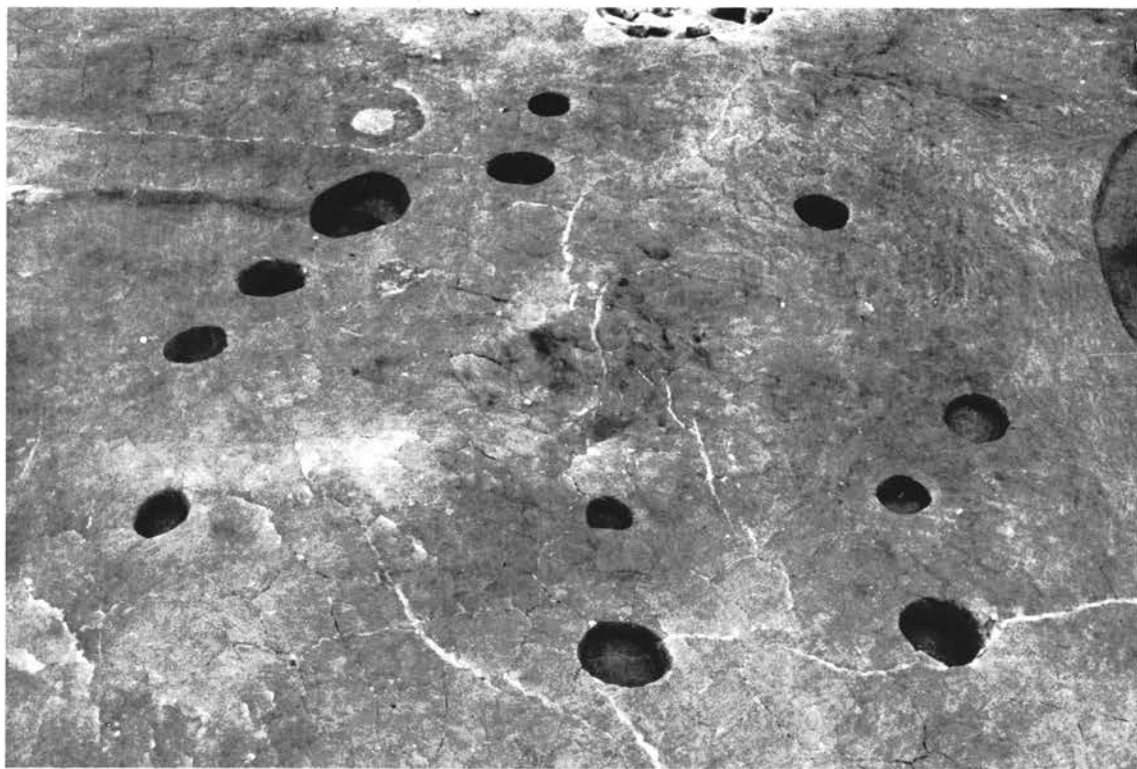
(2) 土坑(S K85201)検出状況 (南東から)



(1) 弥生時代中期全景（北西から）



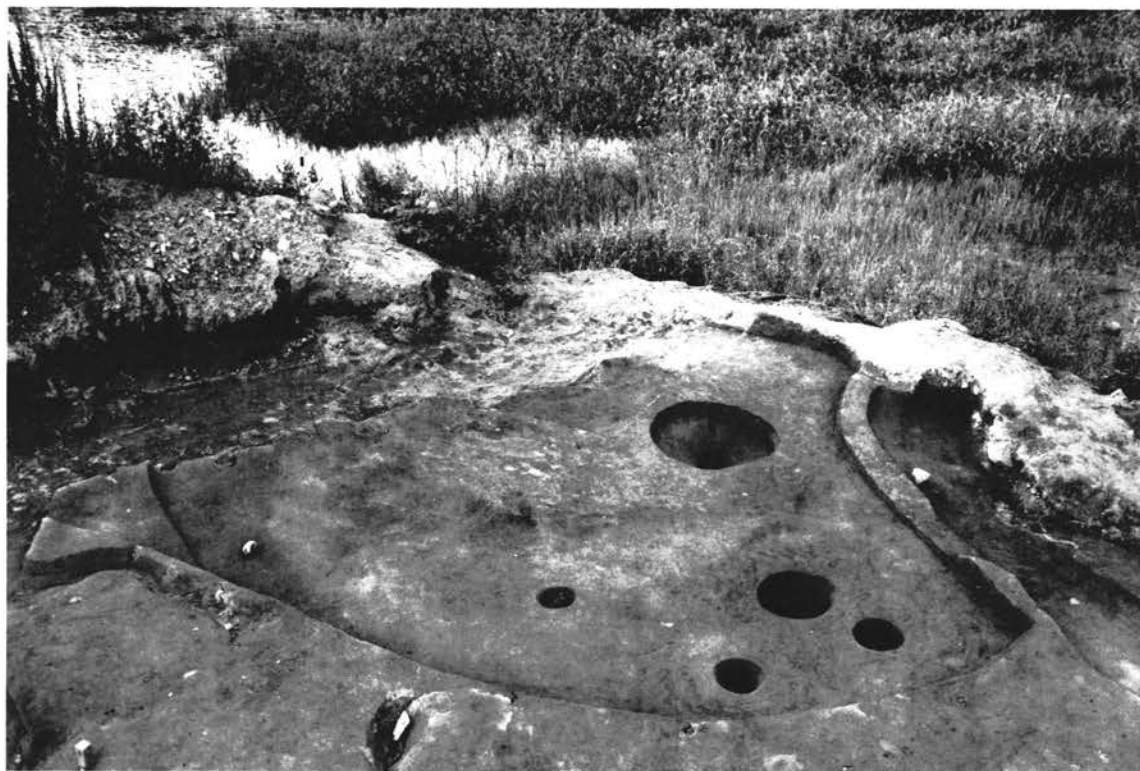
(2) 竪穴式住居跡（S H86201）（北東から）



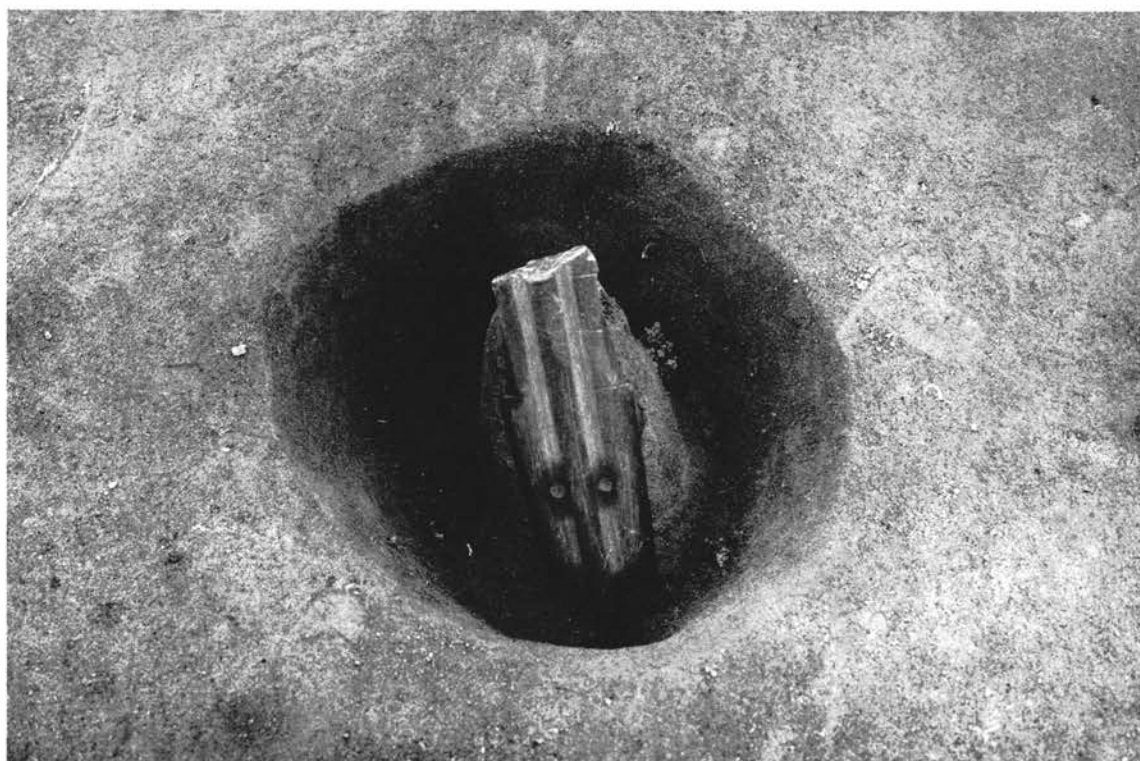
(1) 竪穴式住居跡 (S H86202) (北東から)



(2) 竪穴式住居跡 (S H86203) (北西から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H86212) (北から)



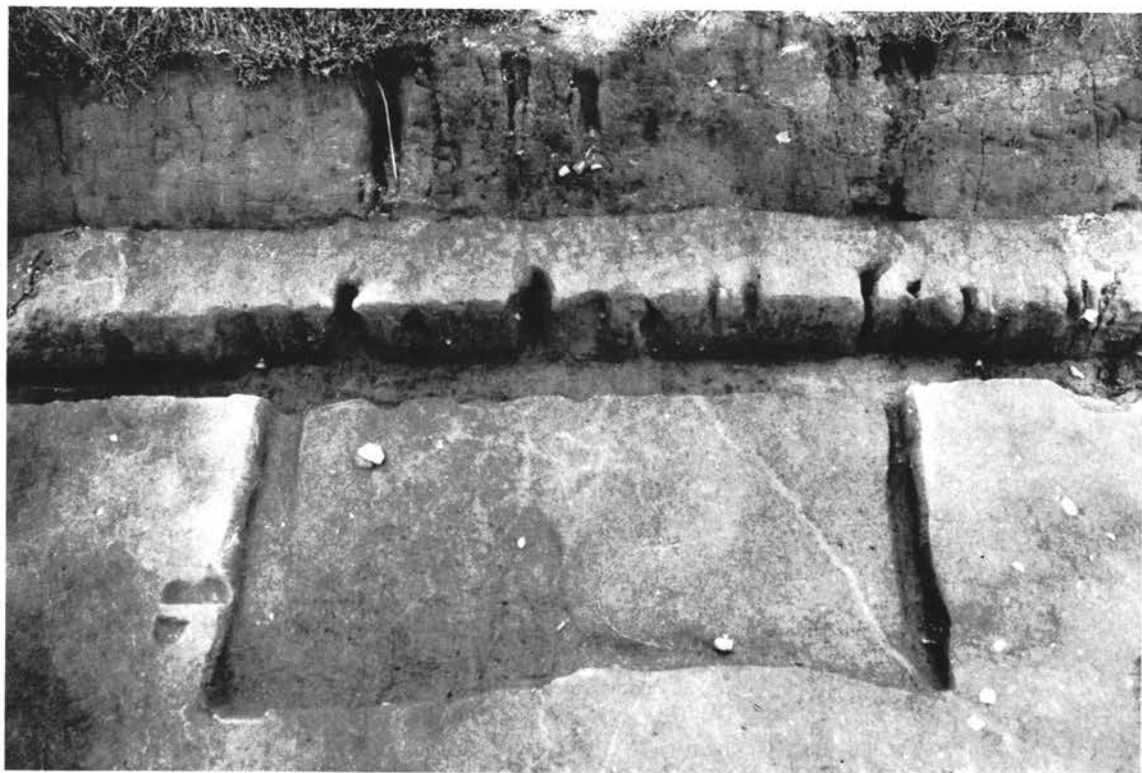
(2) S H86212ピット内銅剣形石剣出土状況



(1) 溝 (S D86206) (北西から)



(2) 土坑 (S K86208) 遺物出土状況



(1) 竪穴式住居跡 (S H85101) (北東から)



(2) 竪穴式住居跡群 (S H85107・108・112・113) (南東から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H85111) (南西から)



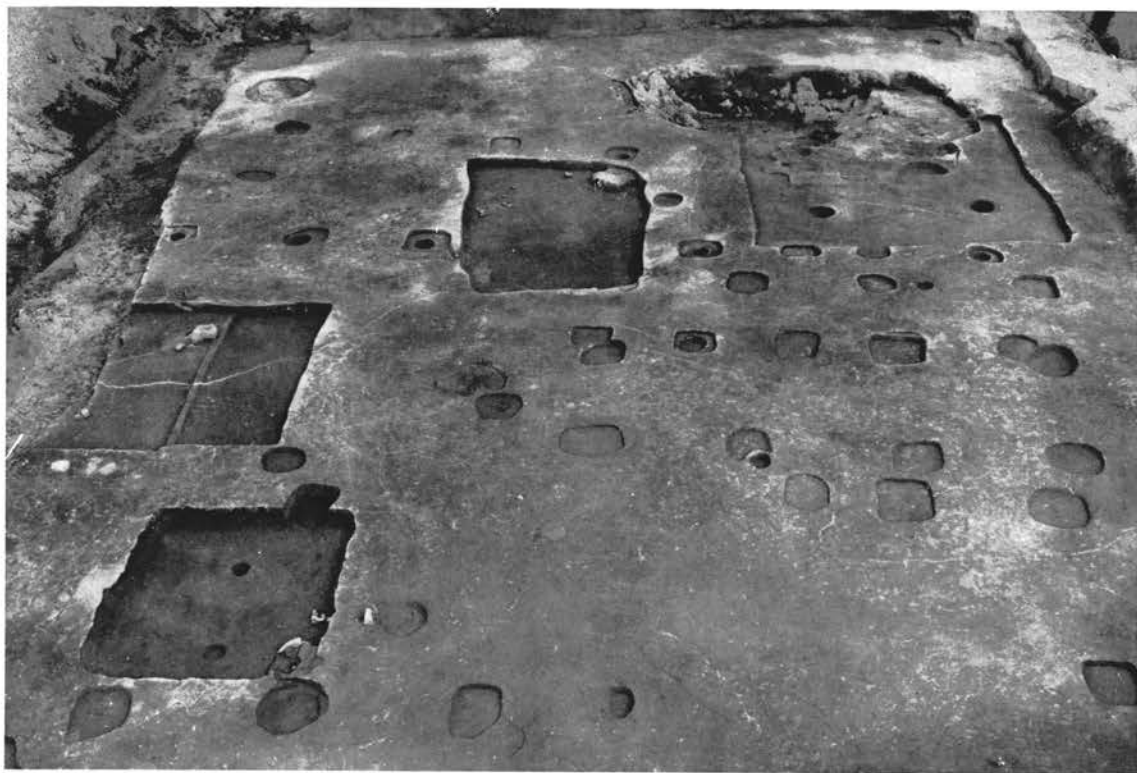
(2) 溝 (S D85102)・土坑 (S K85116) (北東から)



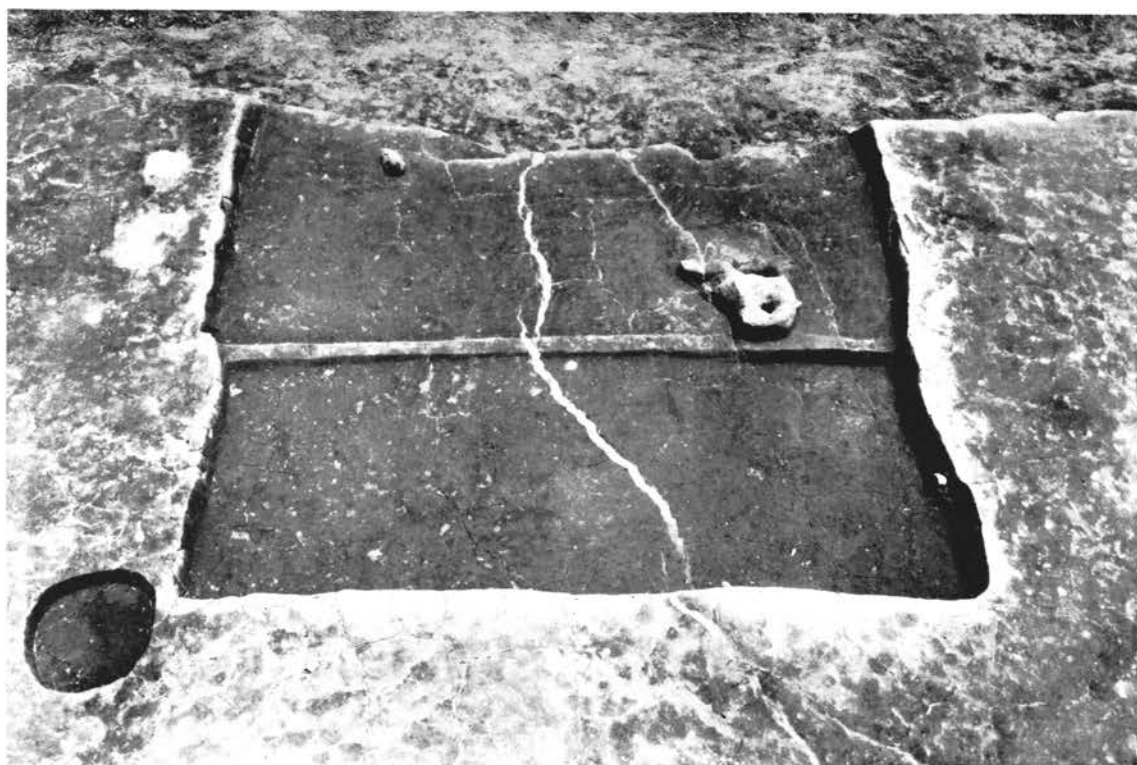
(1) 自然流路に伴う落ち込み部（北東から）



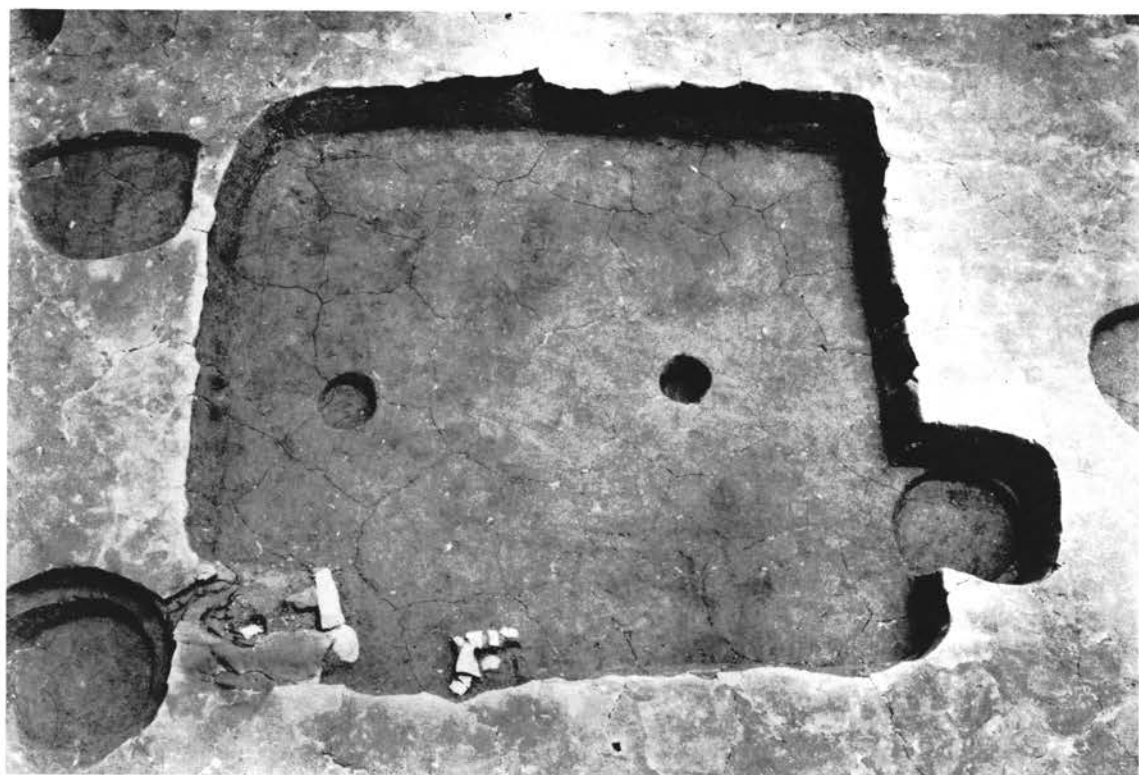
(2) 自然流路に伴う落ち込み部（土器溜まり）



(1) 竪穴式住居跡群全景 (北西から)



(2) 竪穴式住居跡 (S H86101・S H86110) (南西から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H86102) (南西から)



(2) S H86102竈



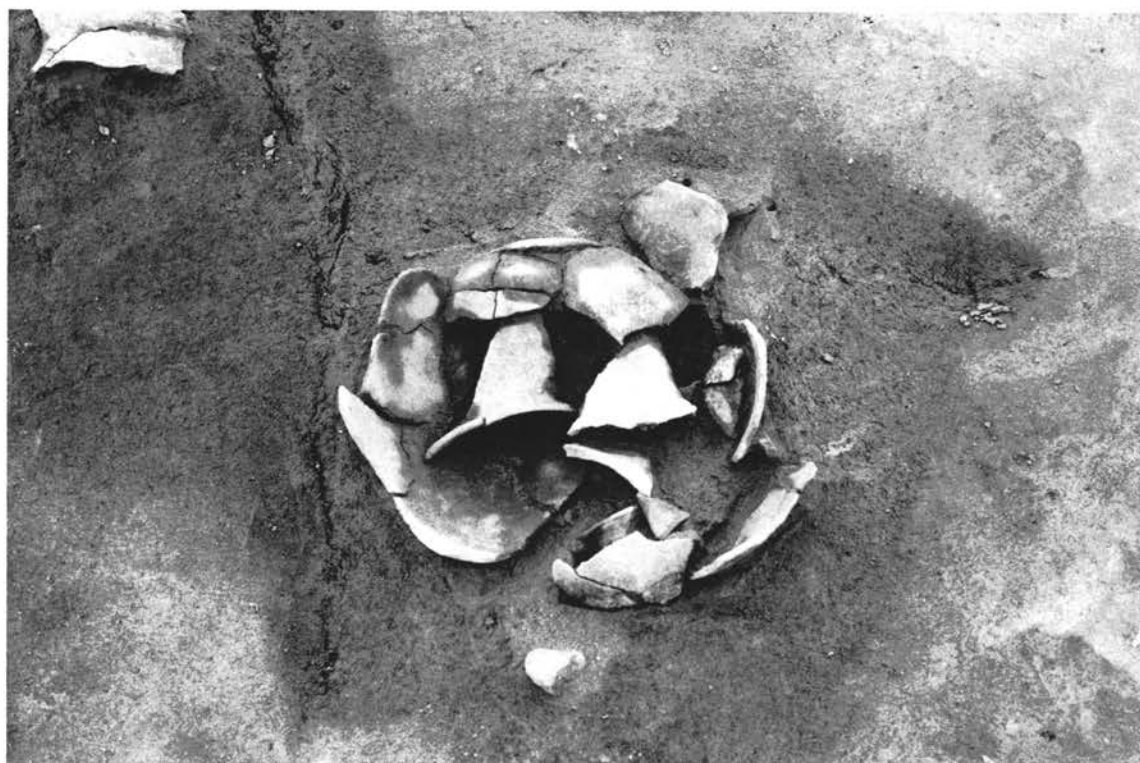
(1) 竪穴式住居跡 (S H86103) (北西から)



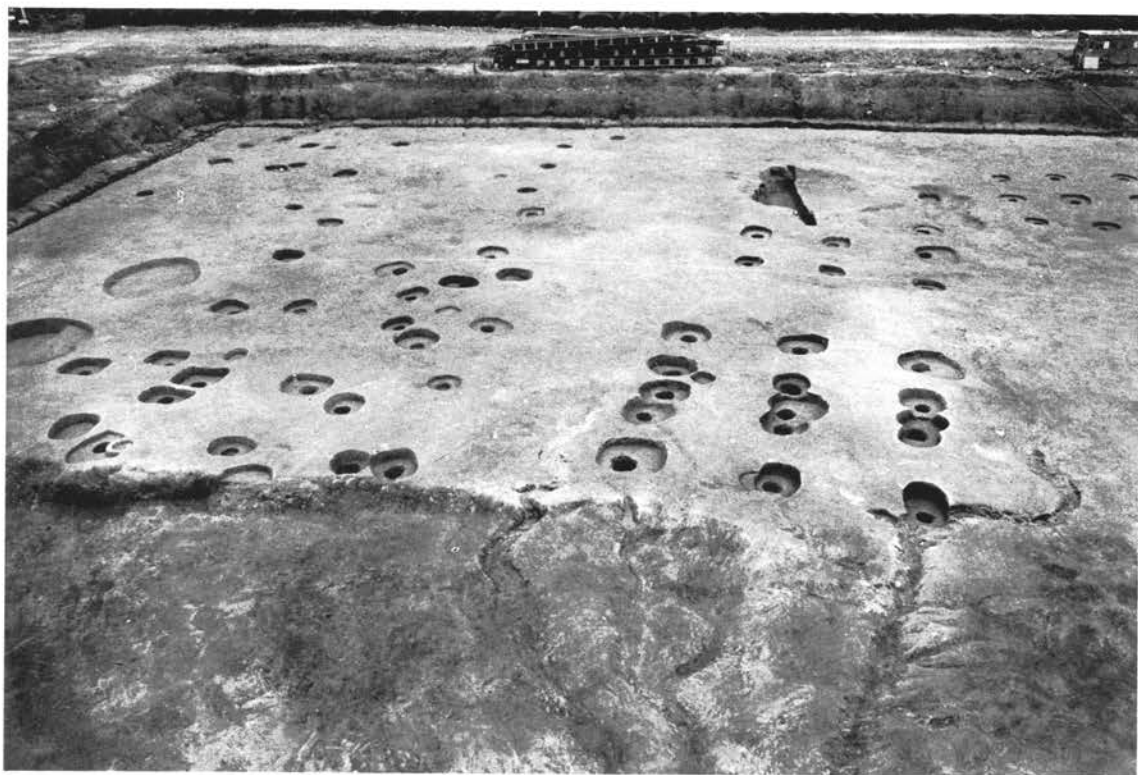
(2) 竪穴式住居跡 (S H86104) (北西から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H86109・S H86111) (北西から)



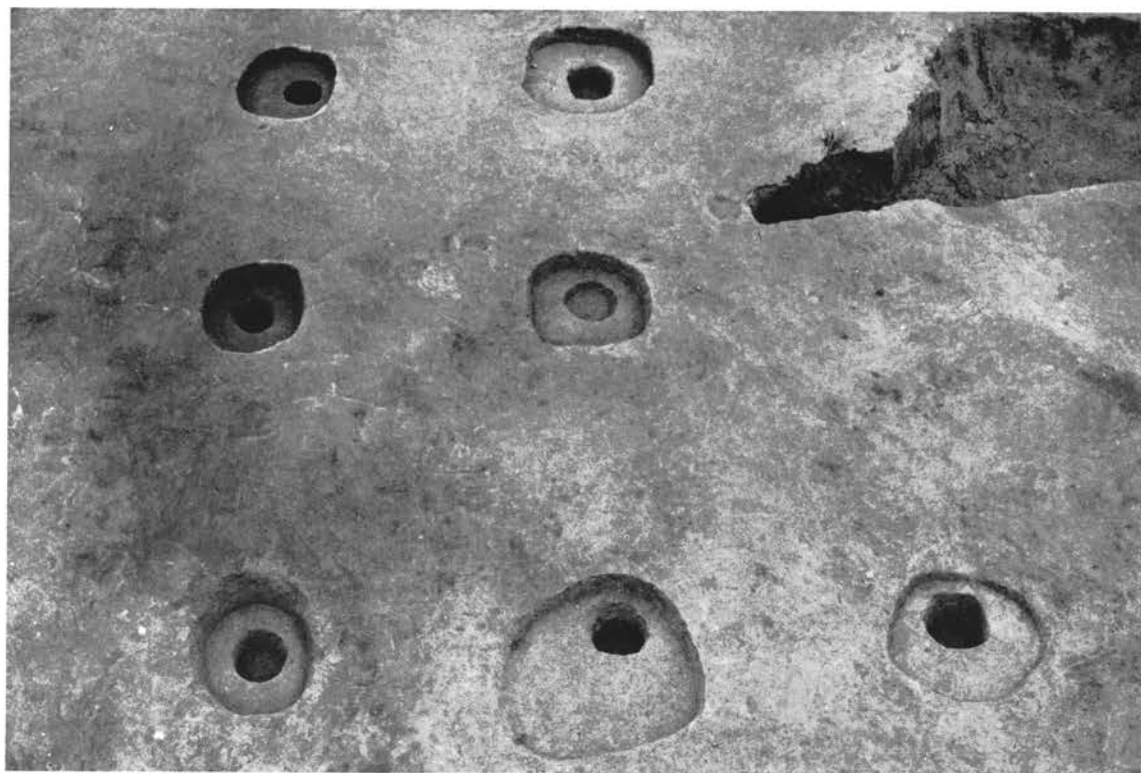
(2) 屋外炉 (S X86107)



(1) 下層～上層建物跡群全景 (南東から)



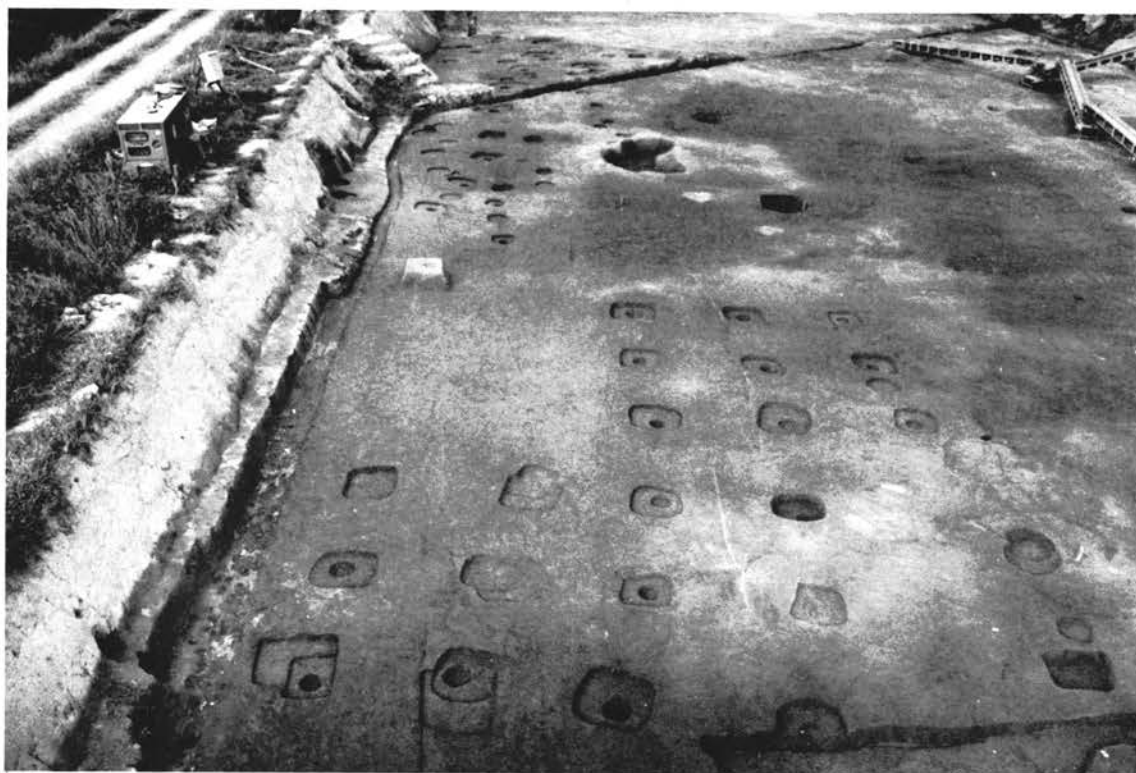
(2) 掘立柱建物跡 (S B85046) (南東から)



(1) 掘立柱建物跡 (S B85005) (北東から)



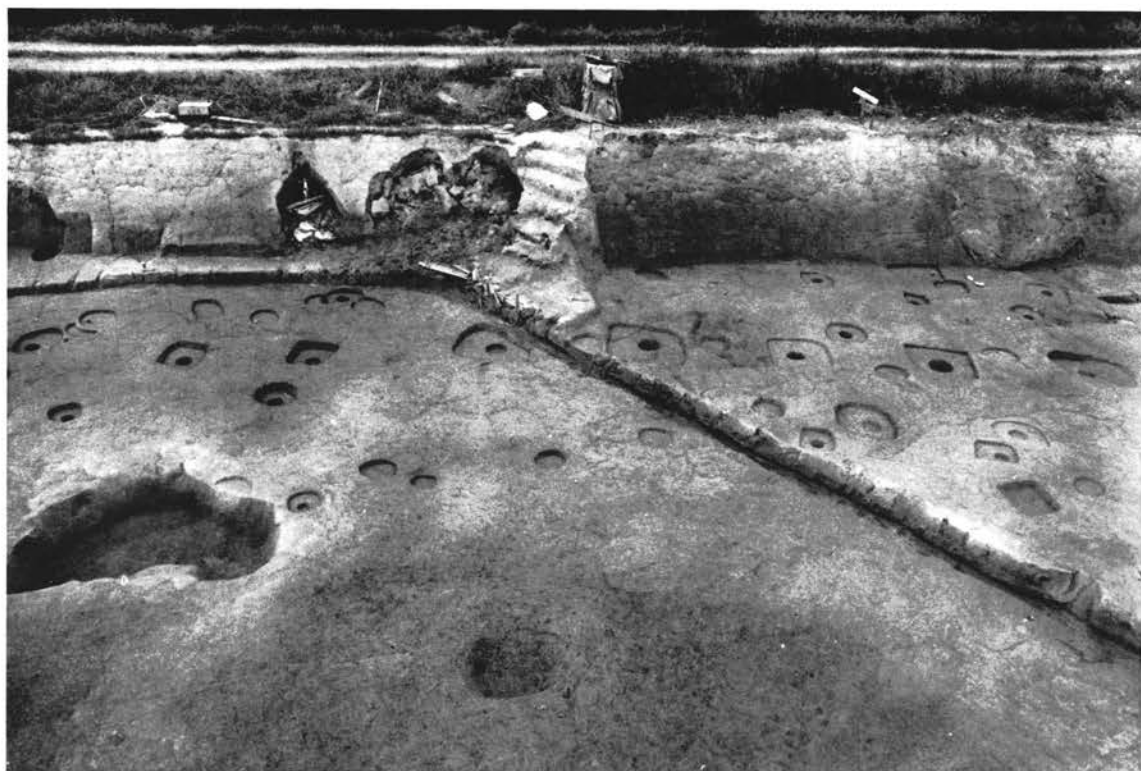
(2) 掘立柱建物跡 (S B85006) (南東から)



(1) 下層建物跡群全景 (南西から)



(2) 掘立柱建物跡 (S B85005・S B85011・S B85019・S B85020) (北東から)



(1) 掘立柱建物跡 (S B85023・S B85024) (南東から)



(2) 掘立柱建物跡 (S B85024) (南東から)



(1) 土坑 (S K85044) (北西から)



(2) 土器溜まり (S X85001)



(1) 下層建物跡群全景（北東から）



(2) 掘立柱建物跡（S B86018・S B86019）（北東から）



(1) 掘立柱建物跡 (S B 86020) (北西から)



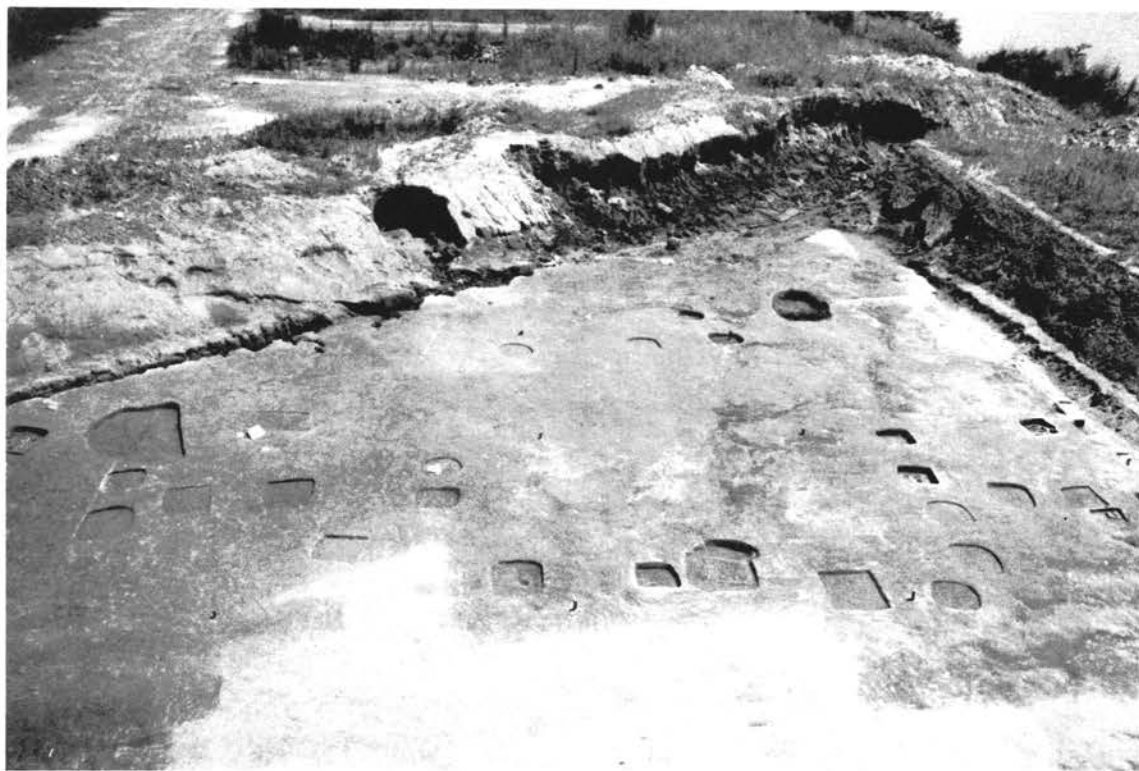
(2) 上層建物跡群全景 (北東から)



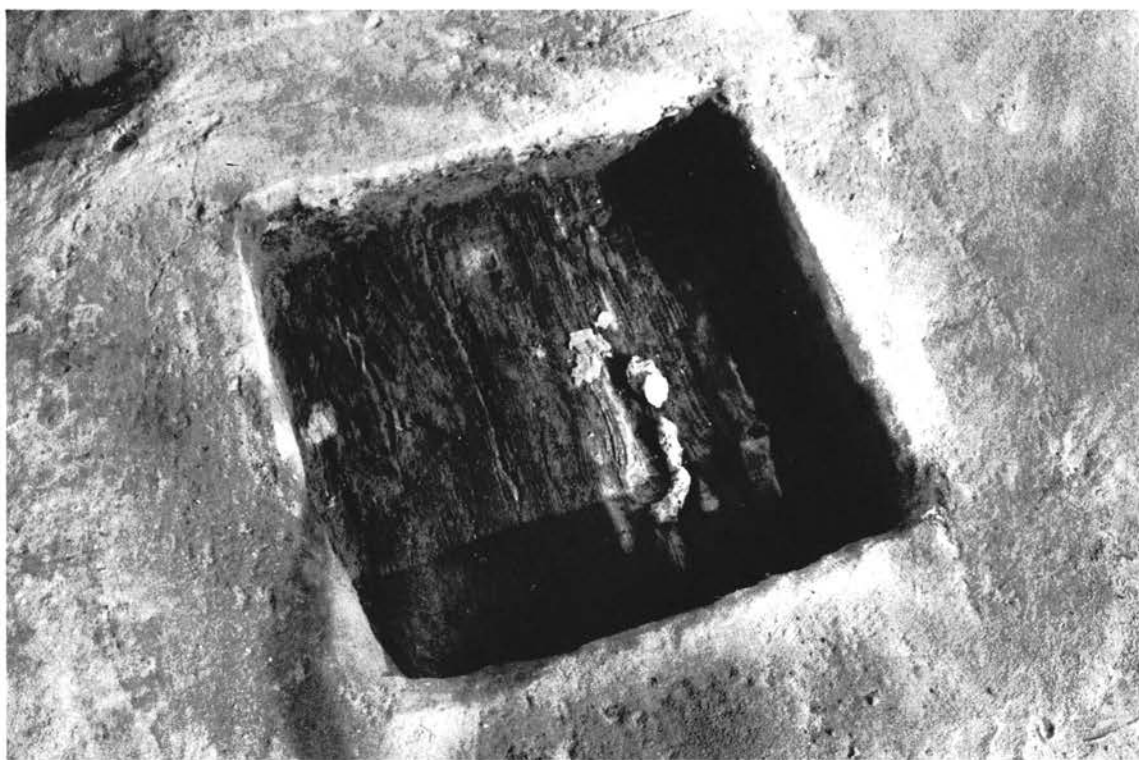
(1) 掘立柱建物跡 (S B86003) (北東から)



(2) 掘立柱建物跡 (S B86008) (北西から)



(1) 近世墓地（南西から）



(2) 近世墓



(1) 弥生時代全景



(2) 1・2号墓全景（南東から）



(1) 1号墓貼り石部検出状況（西から）



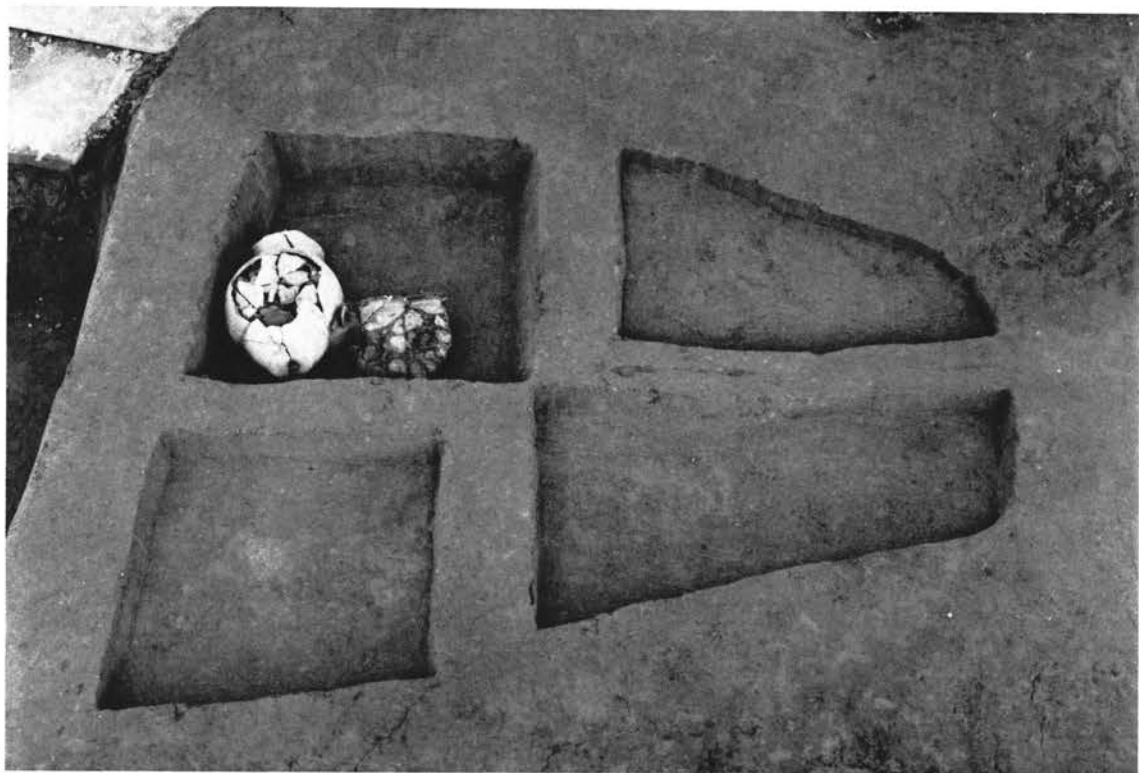
(2) 1号墓西隅部



(1) 1号墓断面及び貼り石部分



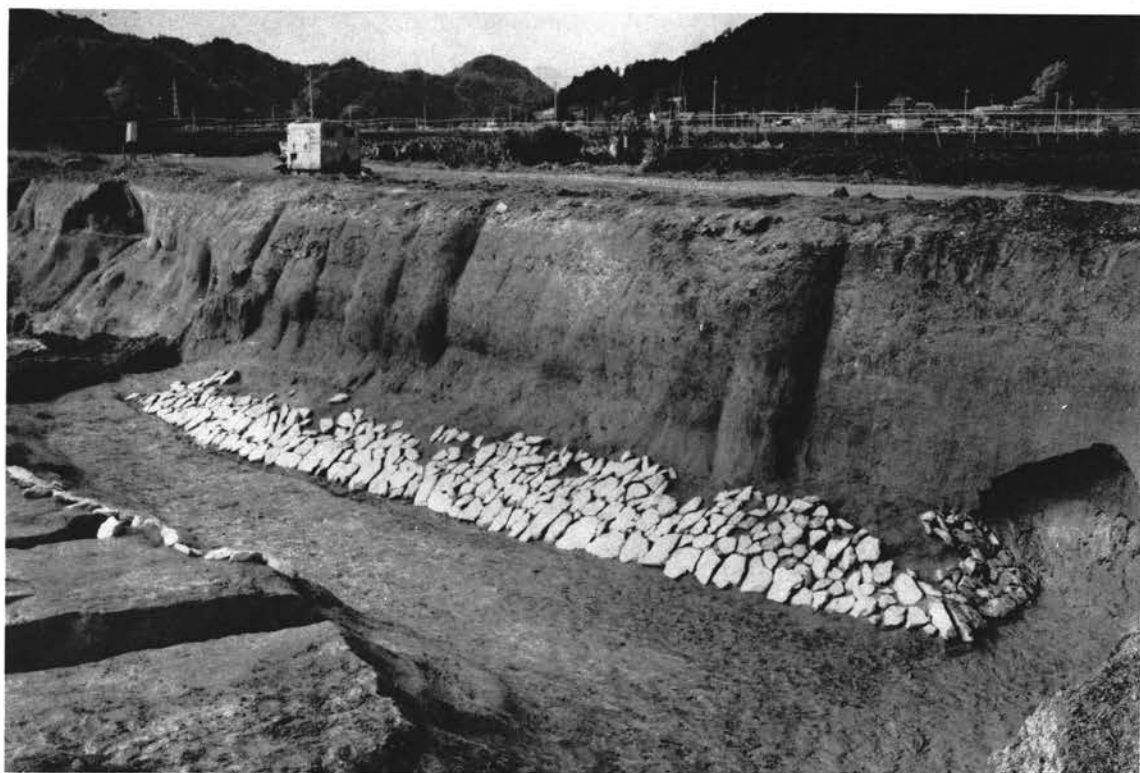
(2) 1号墓土壌内(S K86233)遺物出土状況



(1) 1号墓土城内(S K 86234)遺物出土状況



(2) S K 86234完掘状況



(1) 2号墓全景 (東から)



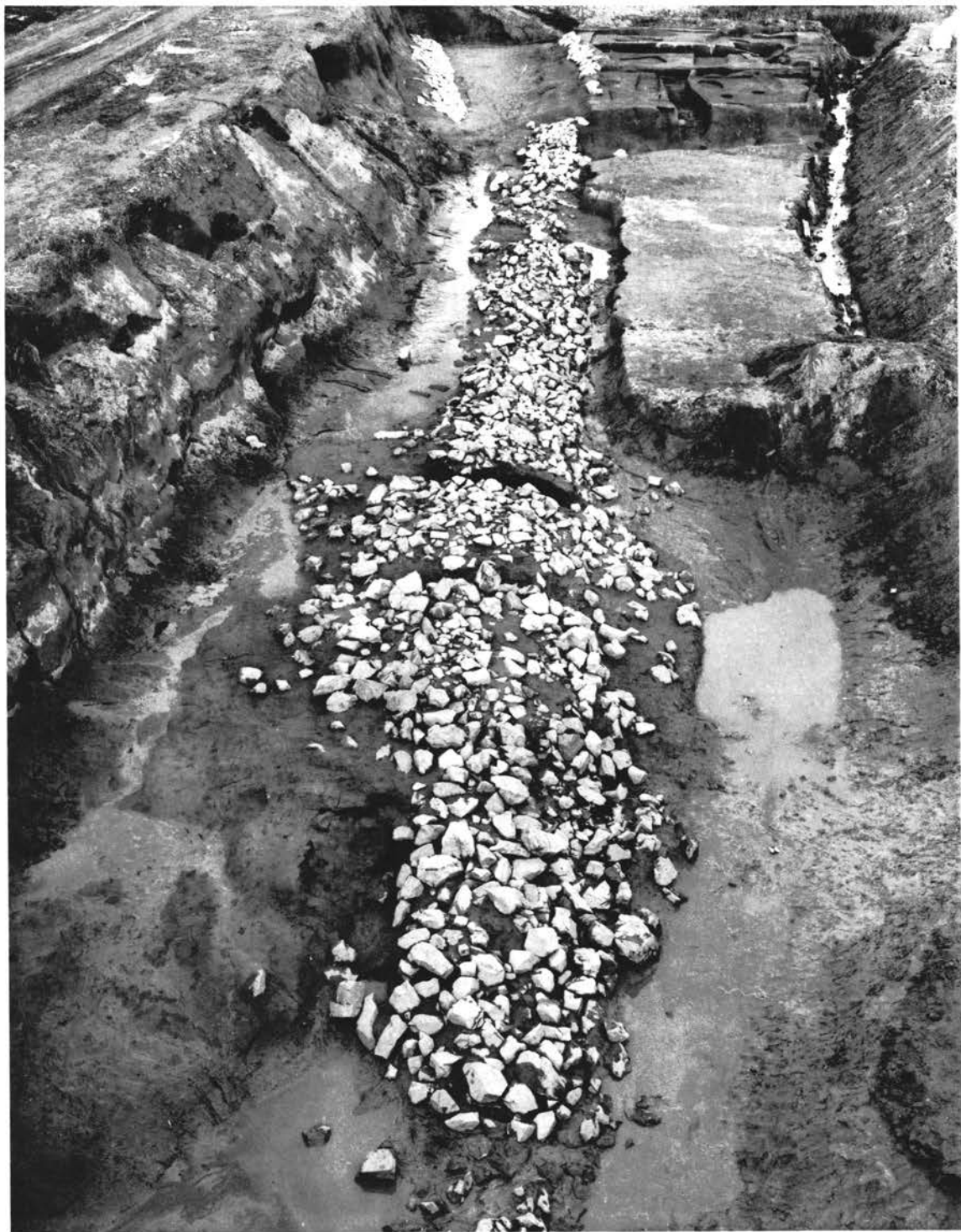
(2) 1号墓・2号墓 (北東から)



(1) 2号墓東隅部



(2) 2号墓斜面貼り石中央部



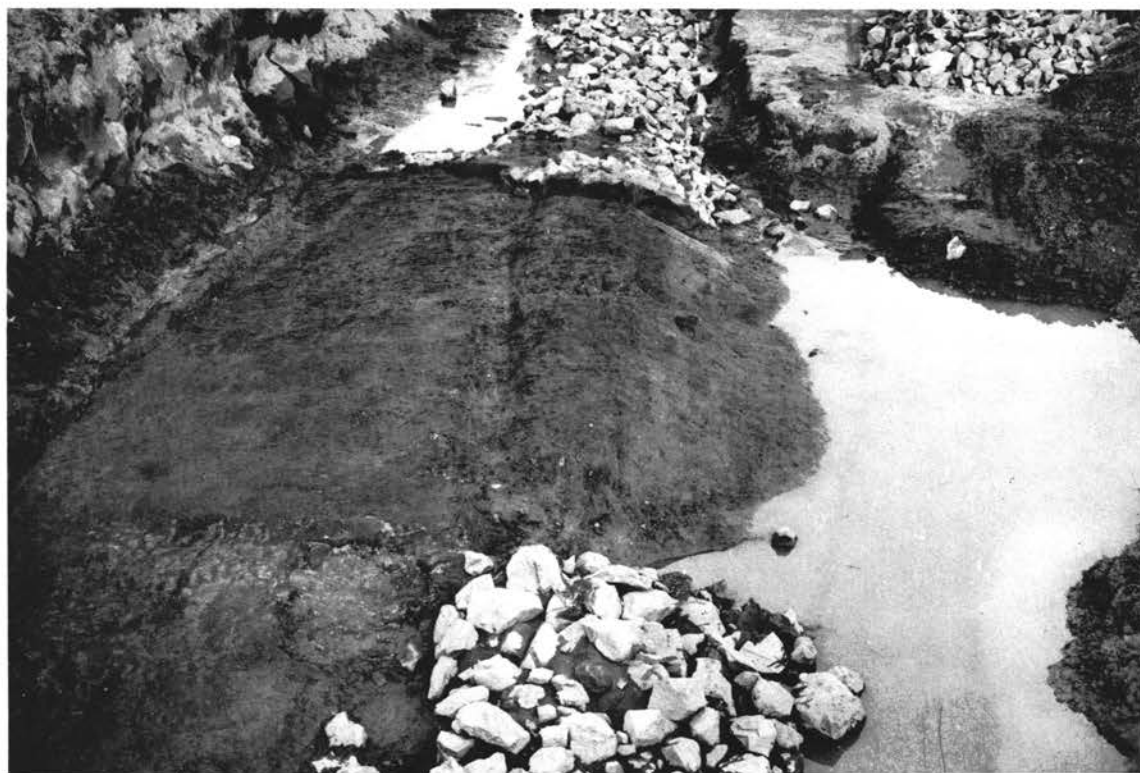
不明遺構(S X86231)と貼り石墓群(南西から)



(1) S X86231中央部 (南東から)



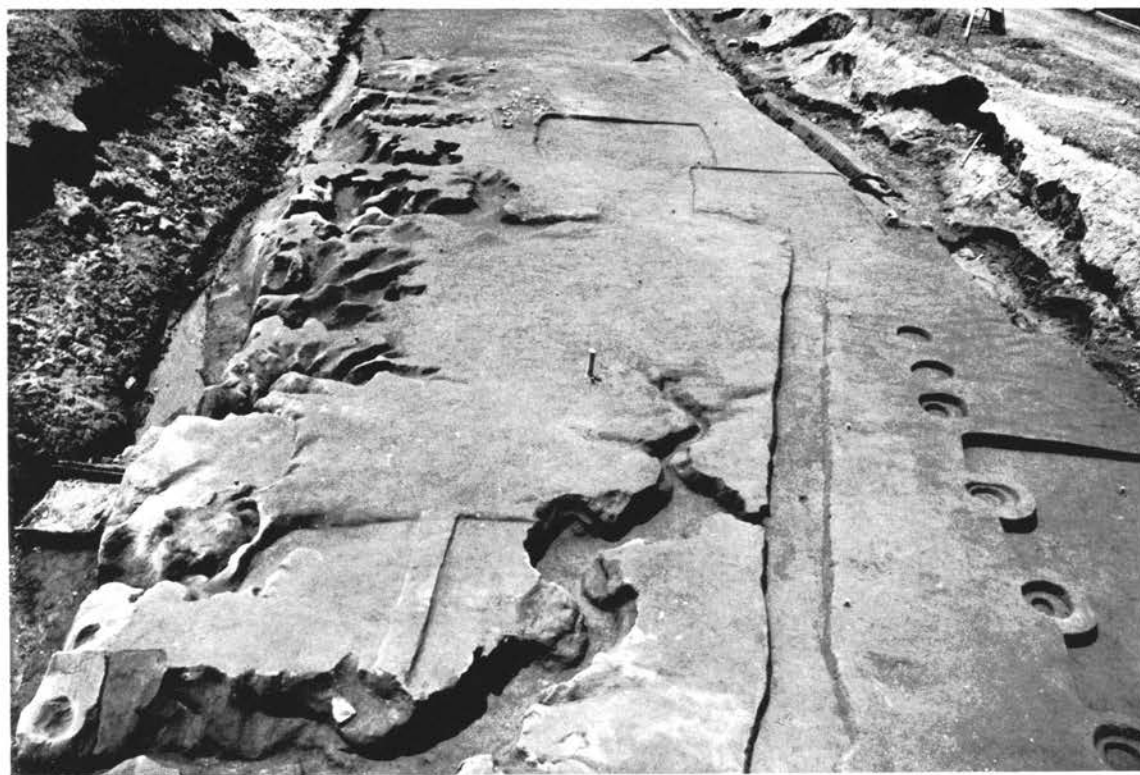
(2) S X86231断面



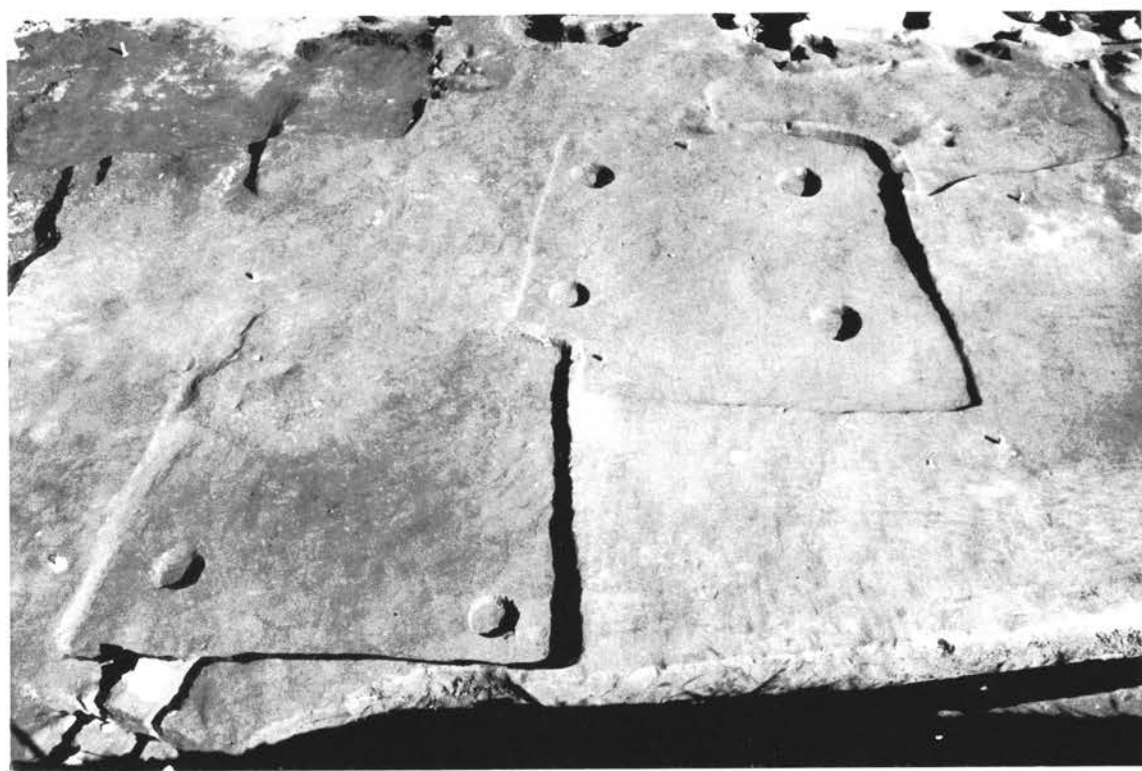
(1) S X 86231中央部貼り石除去後



(2) 溝 (S D 86240) (南東から)



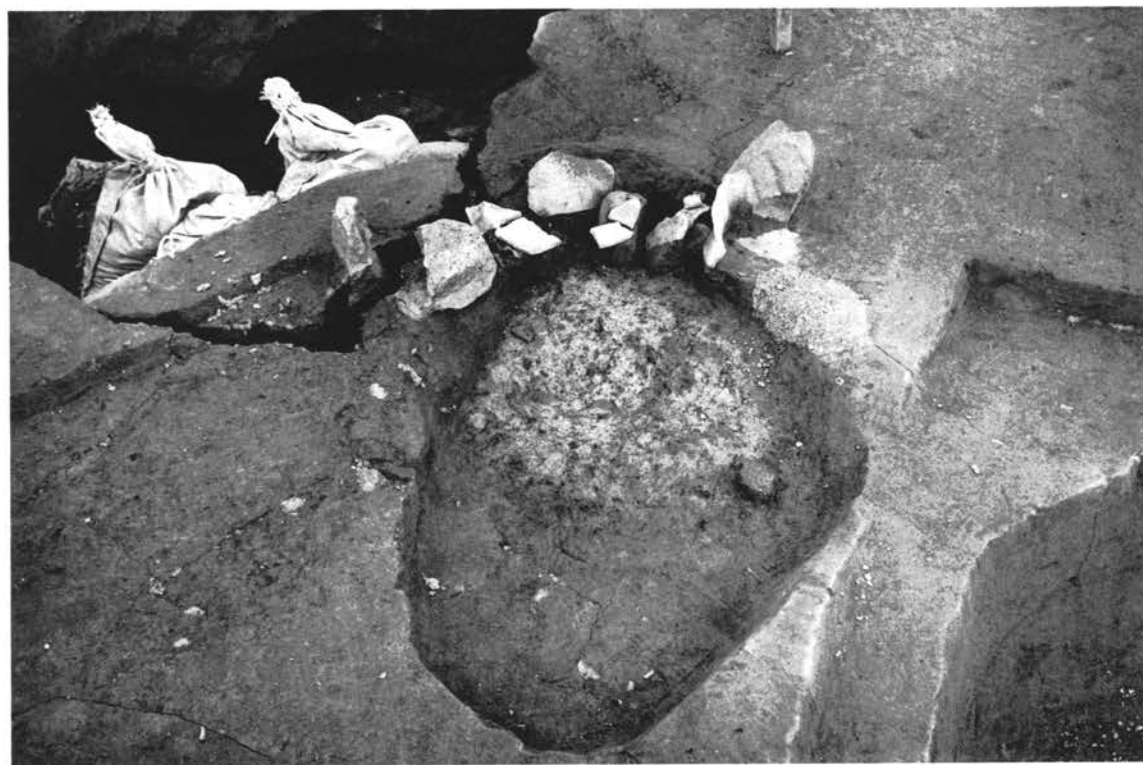
(1) 古墳時代～奈良時代全景（北東から）



(2) 竪穴式住居跡（S H86123・S H86124）（北西から）



(1) 土坑 (S K86126) 遺物出土状況



(2) 竪穴式住居跡 (S H86120) 竈



(1) 淡褐色砂層上面検出遺構（東北から）



(2) 淡褐色砂層上面検出遺構（西南から）



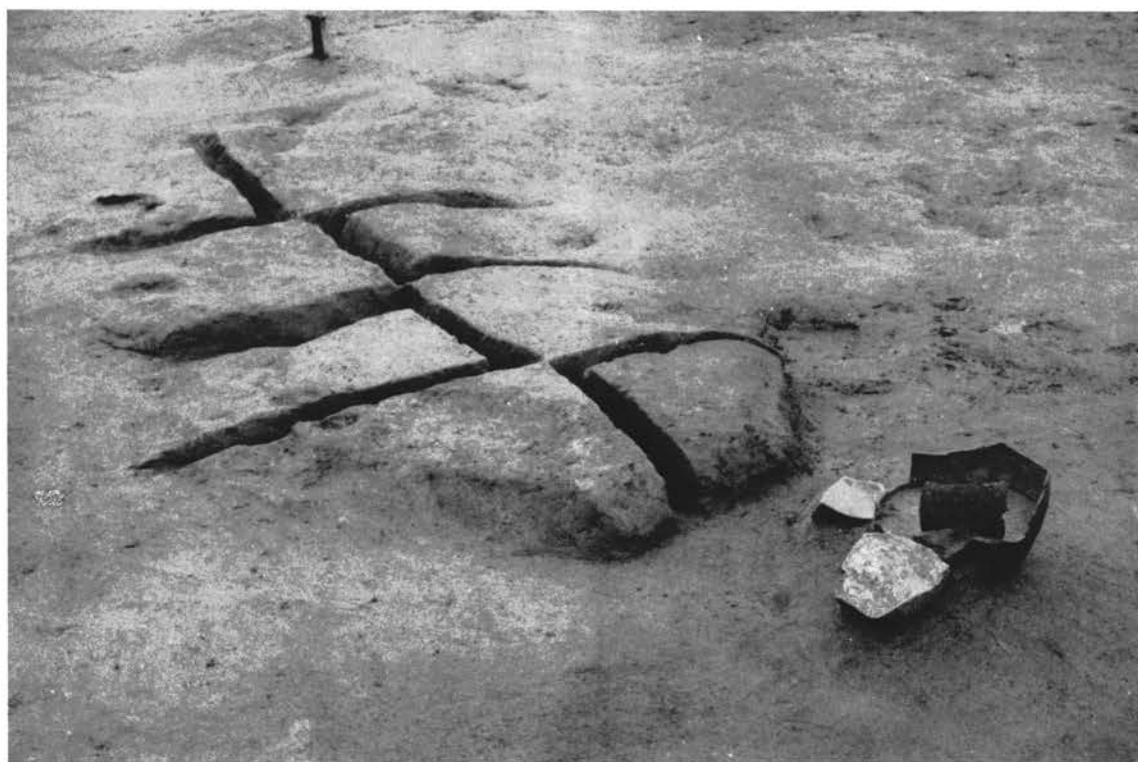
(1) 近世排水施設（西から）



(2) 由良川旧流路肩部（東から）



(1) 黒色砂質土下面検出遺構（西南から）



(2) S X 8441全景



(1) S D 8440・S D 8439全景 (西から)



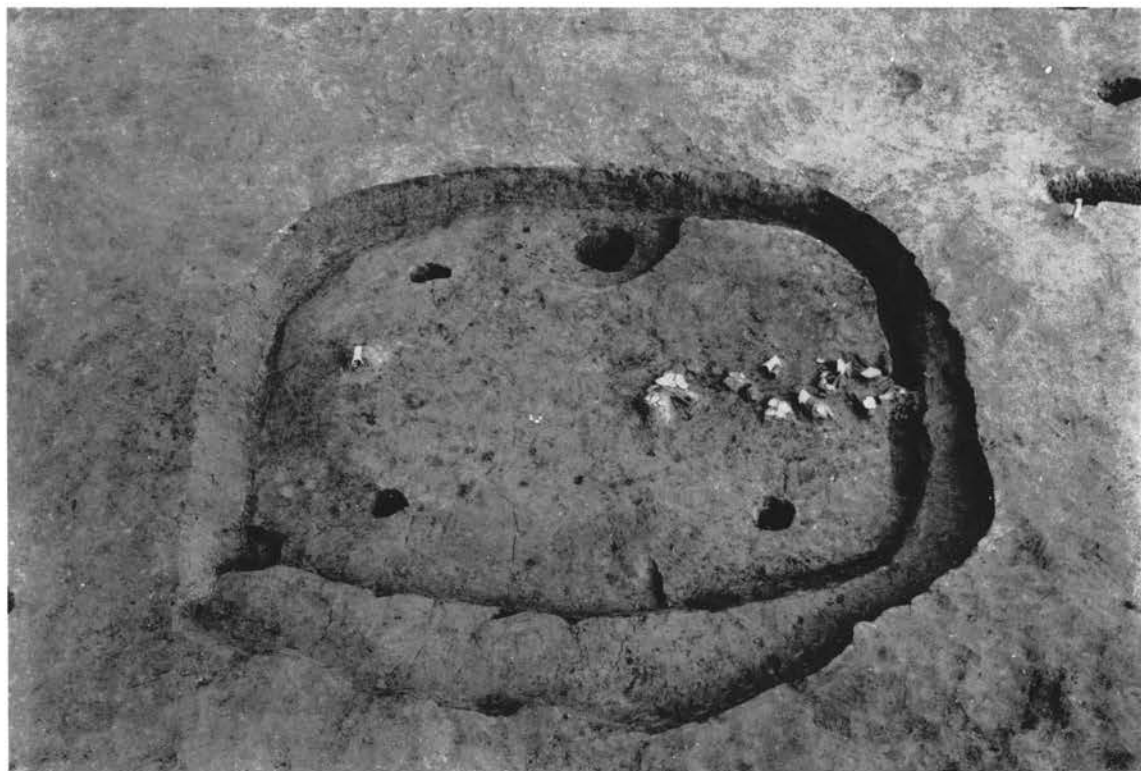
(2) S D 8440内土層図 (東南から)



(1) 岡安地区遠景 (久田美城跡から)



(2) 岡安地区全景 (北東から)



(1) 竪穴式住居跡 (S H86246) (北西から)



(2) 掘立柱建物跡 (S B86240・S B86249・S B86250) (南東から)



(1) 土坑(S K 86255)遺物出土状況



(2) 土坑(S K 86256)遺物出土状況



(1) 竪穴式住居跡 (S H86241) (西から)



(2) 竪穴式住居跡 (S H86247) (南東から)



31-1



30-A



31-2



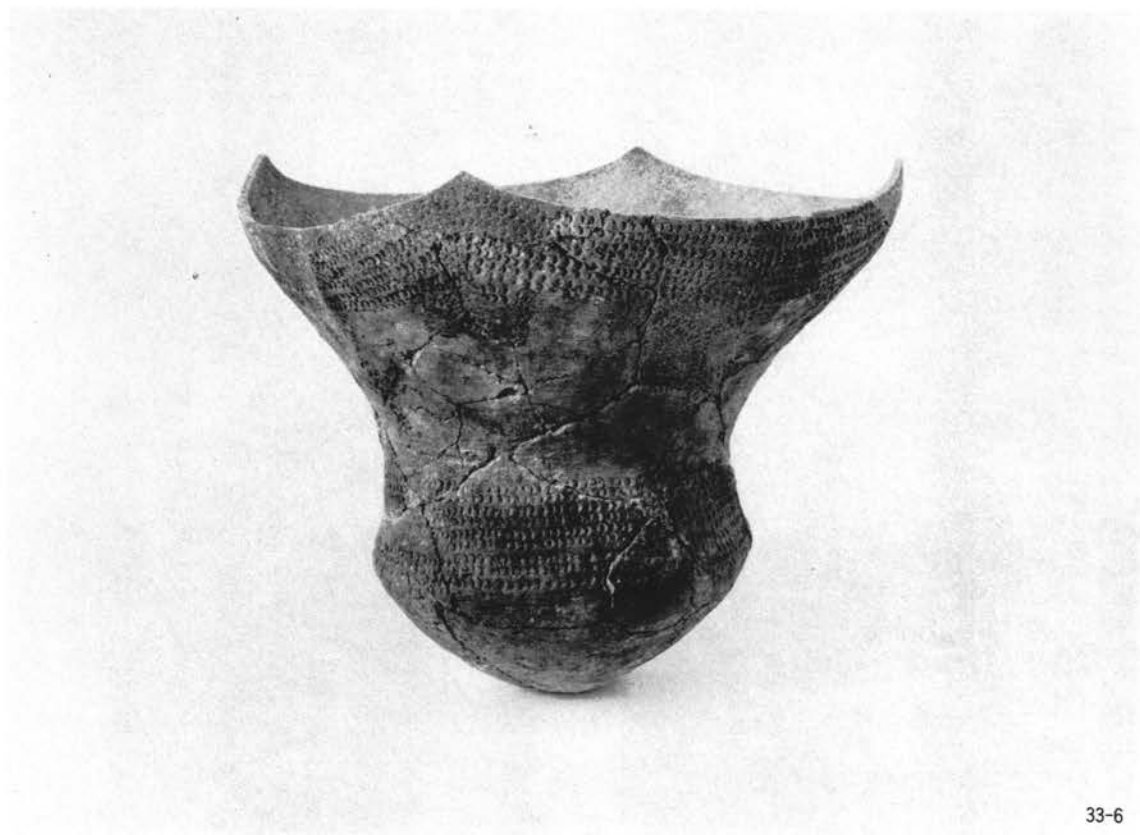
30-B



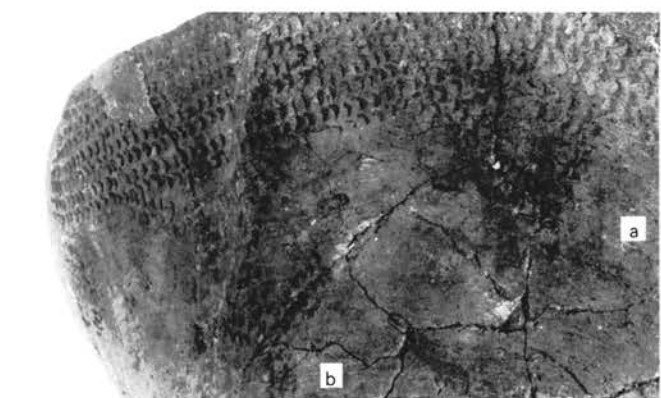
33-3



30-C



33-6



縄文土器(2)



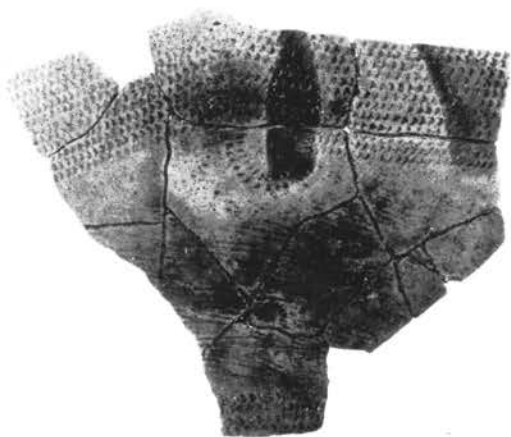
32-5



32-4- a



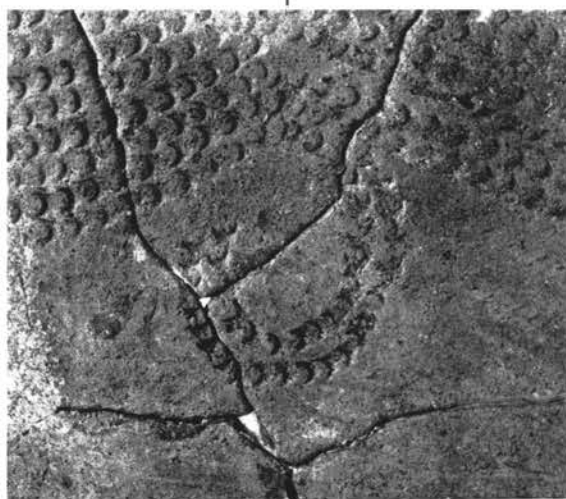
32-4- b



45-116



45-117



33-8



33-10



33-9



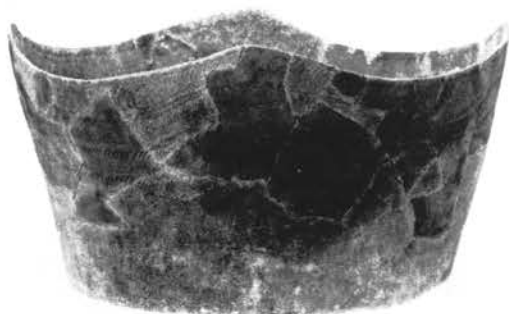
33-11



34-13



34-14



34-12



34-16



34-15



35-17



36-20



35-18



36-22



35-19



37-25



37-24



37-26



38-29



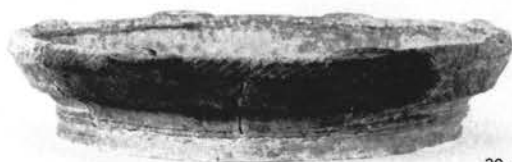
38-28



442



38-27



39-31



443



39-34



39-33



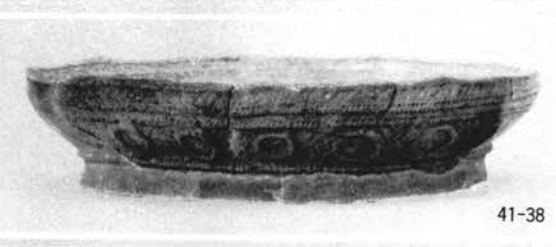
40-35



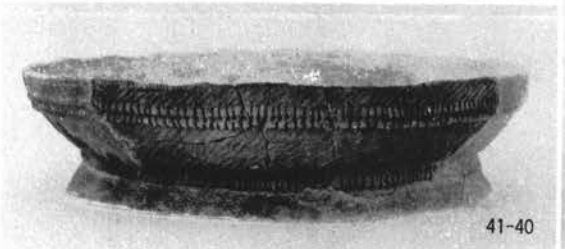
41-39



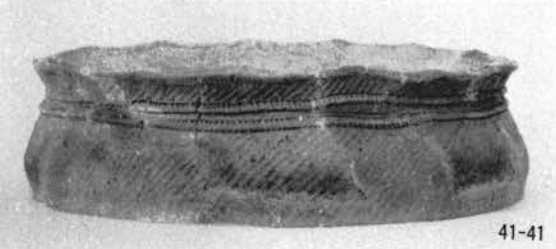
40-37



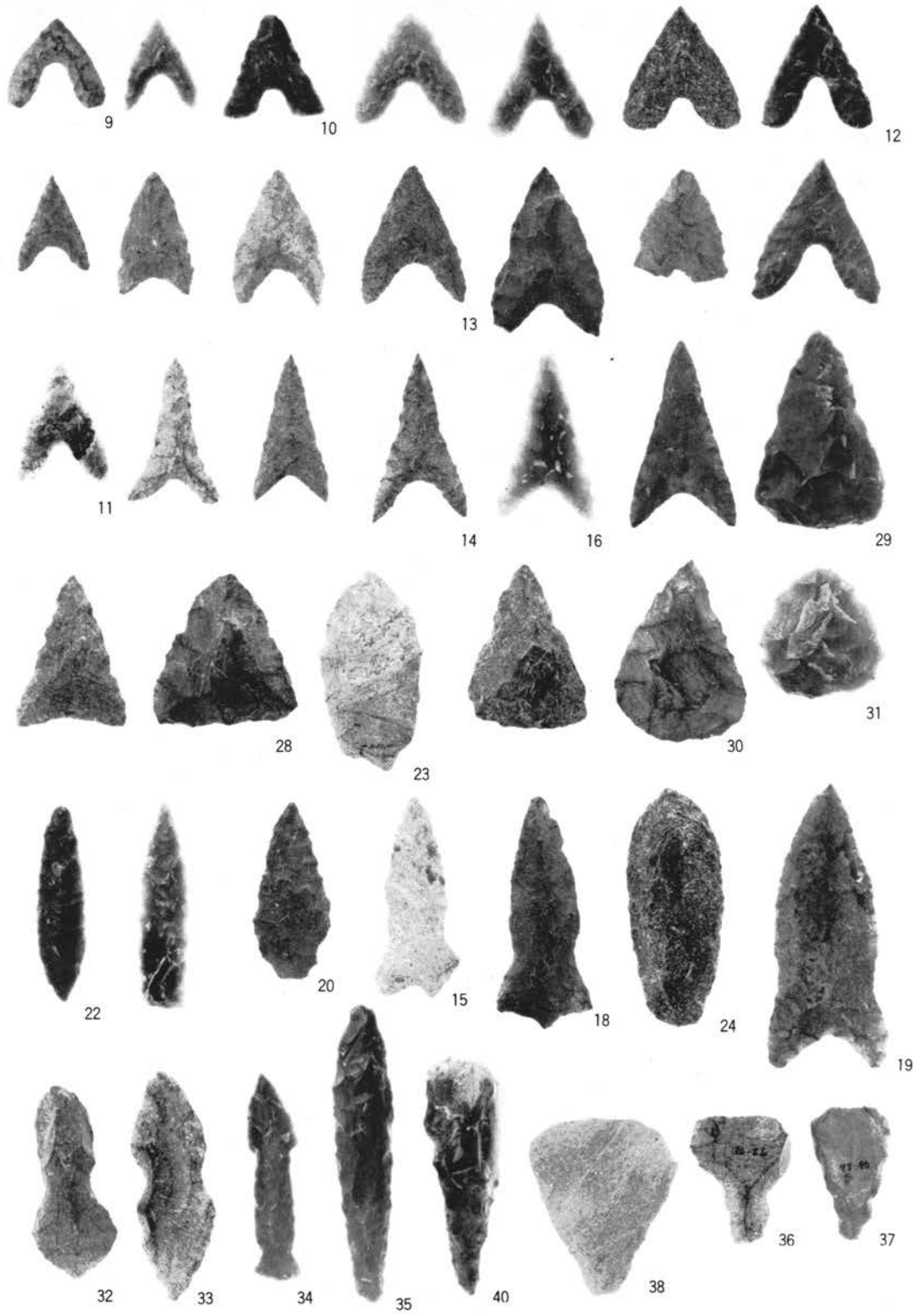
41-38



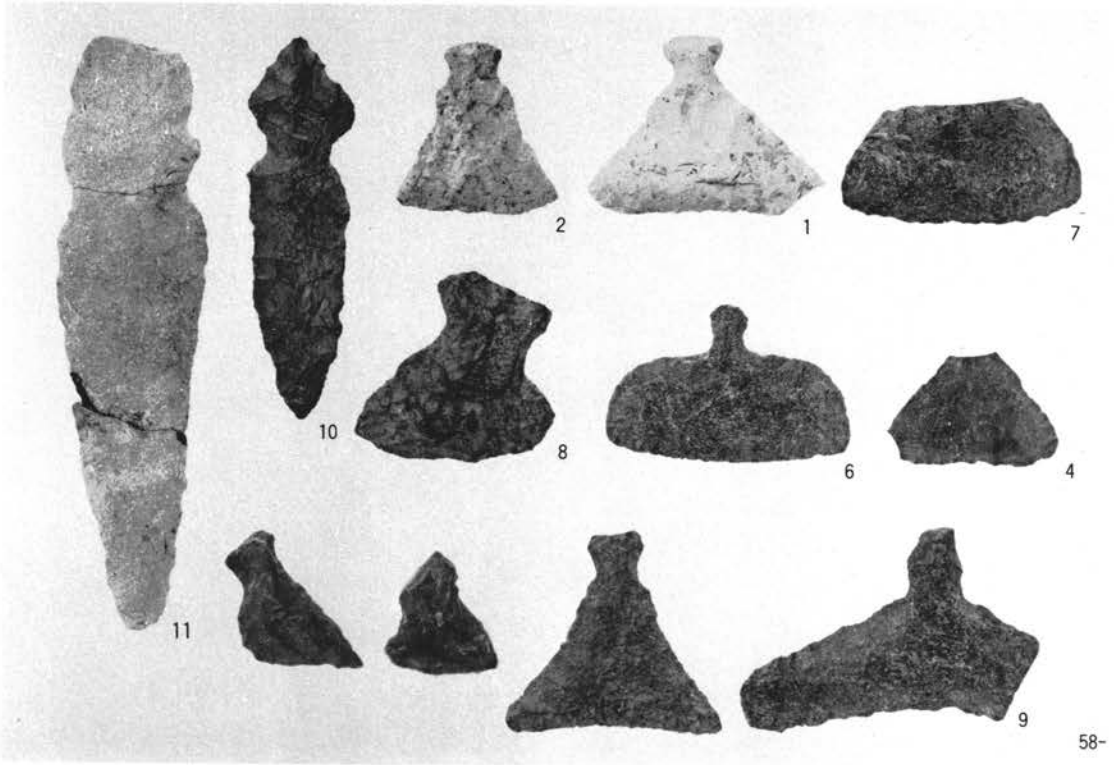
41-40



41-41

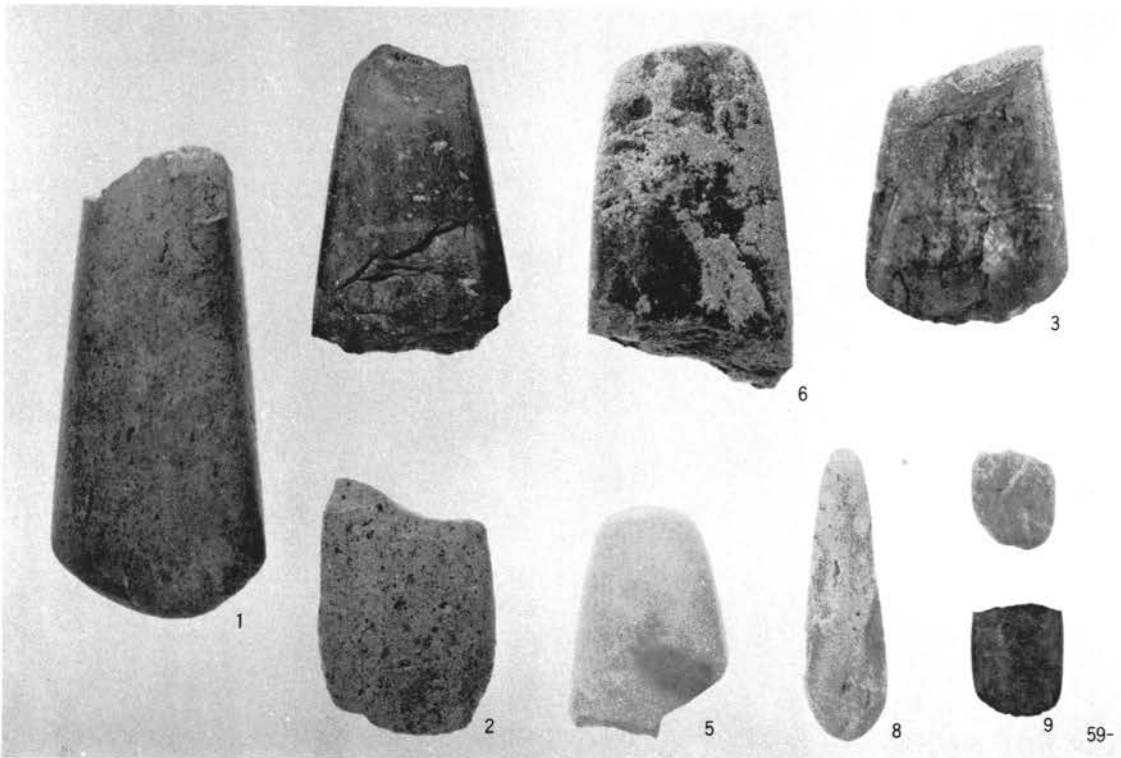


縄文時代石器 1 (石鏃・石錐・異形石器)



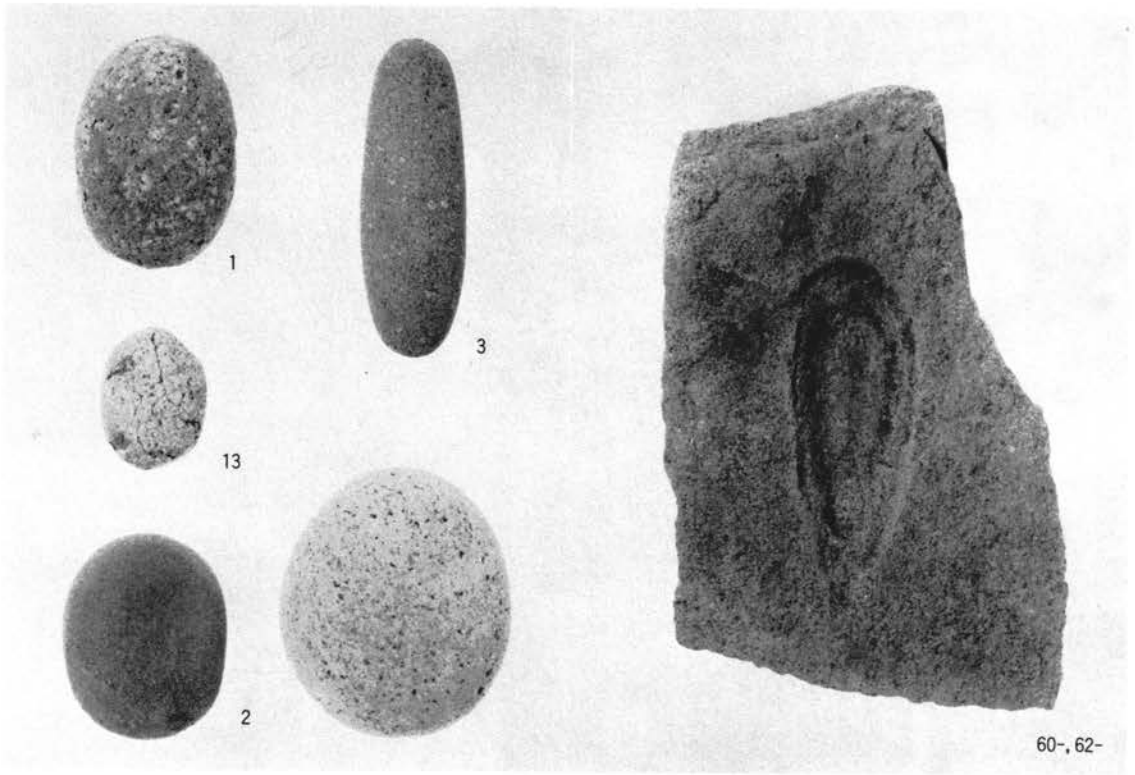
58-

(1) 縄文時代石器 2 (石匕)

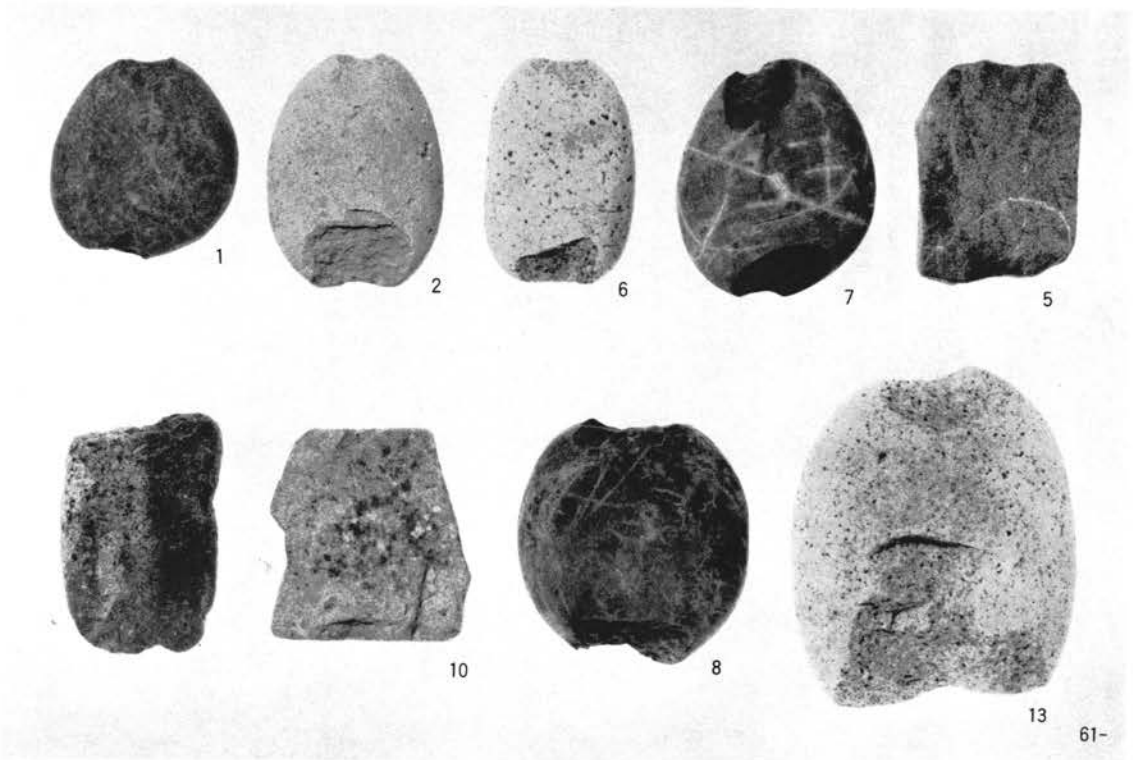


59-

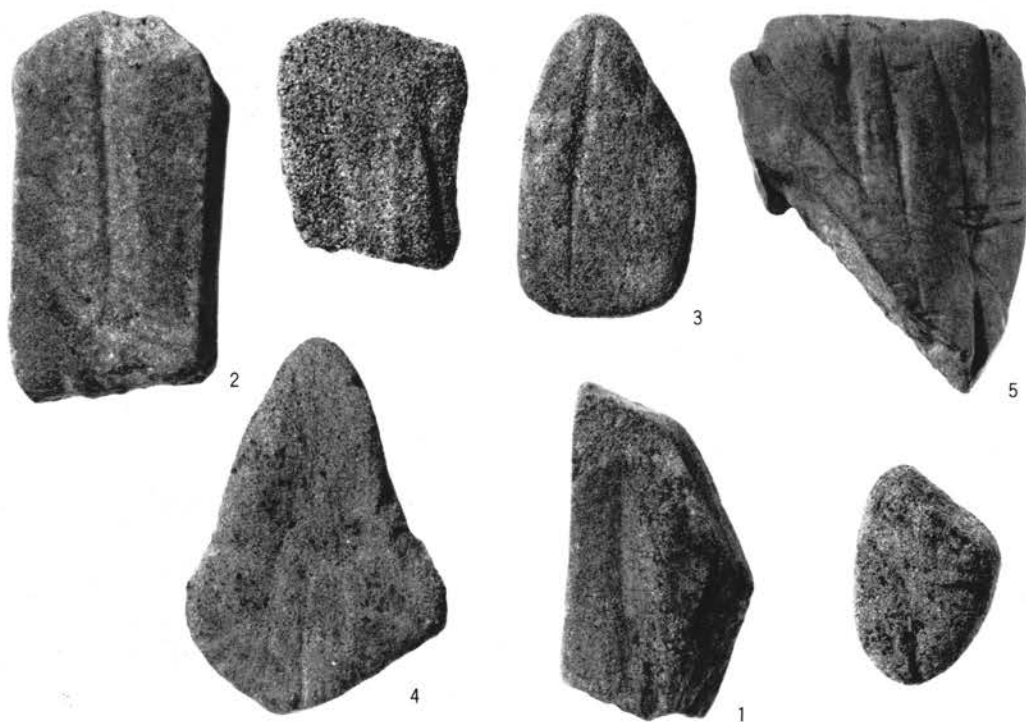
(2) 縄文時代石器 3 (磨製石斧)



(1) 縄文時代石器4 (磨石・敲石・石皿)



(2) 縄文時代石器5 (礫石錐)



62-

(1) 縄文時代石器6 (砥石)



(2) 縄文時代石器7 (けつ状耳飾り・垂飾り類)



466



470



575



428



528



295



422



109



397



599



598



531



537



603



518



608



124



474



634



39



621



602



560



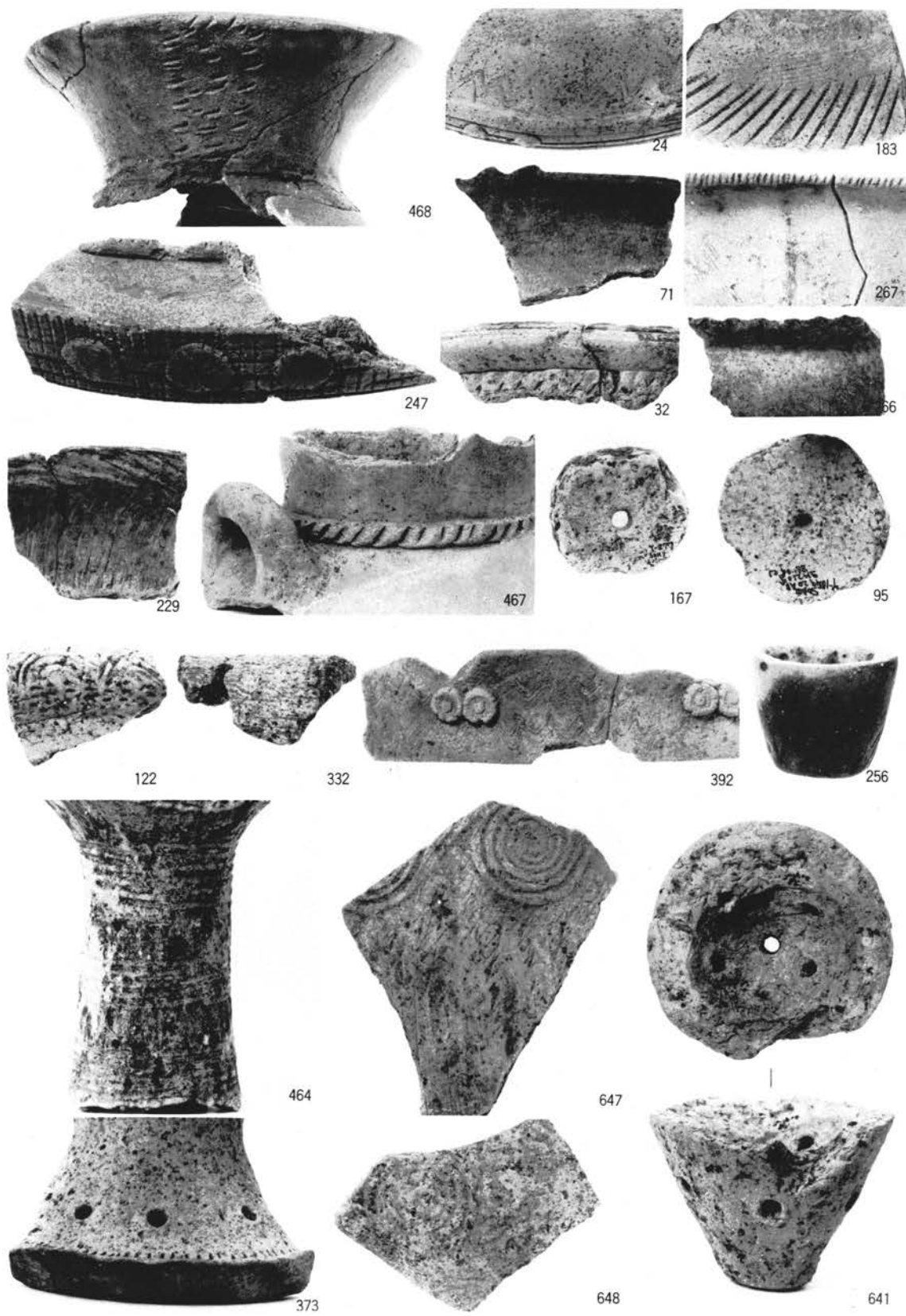
463



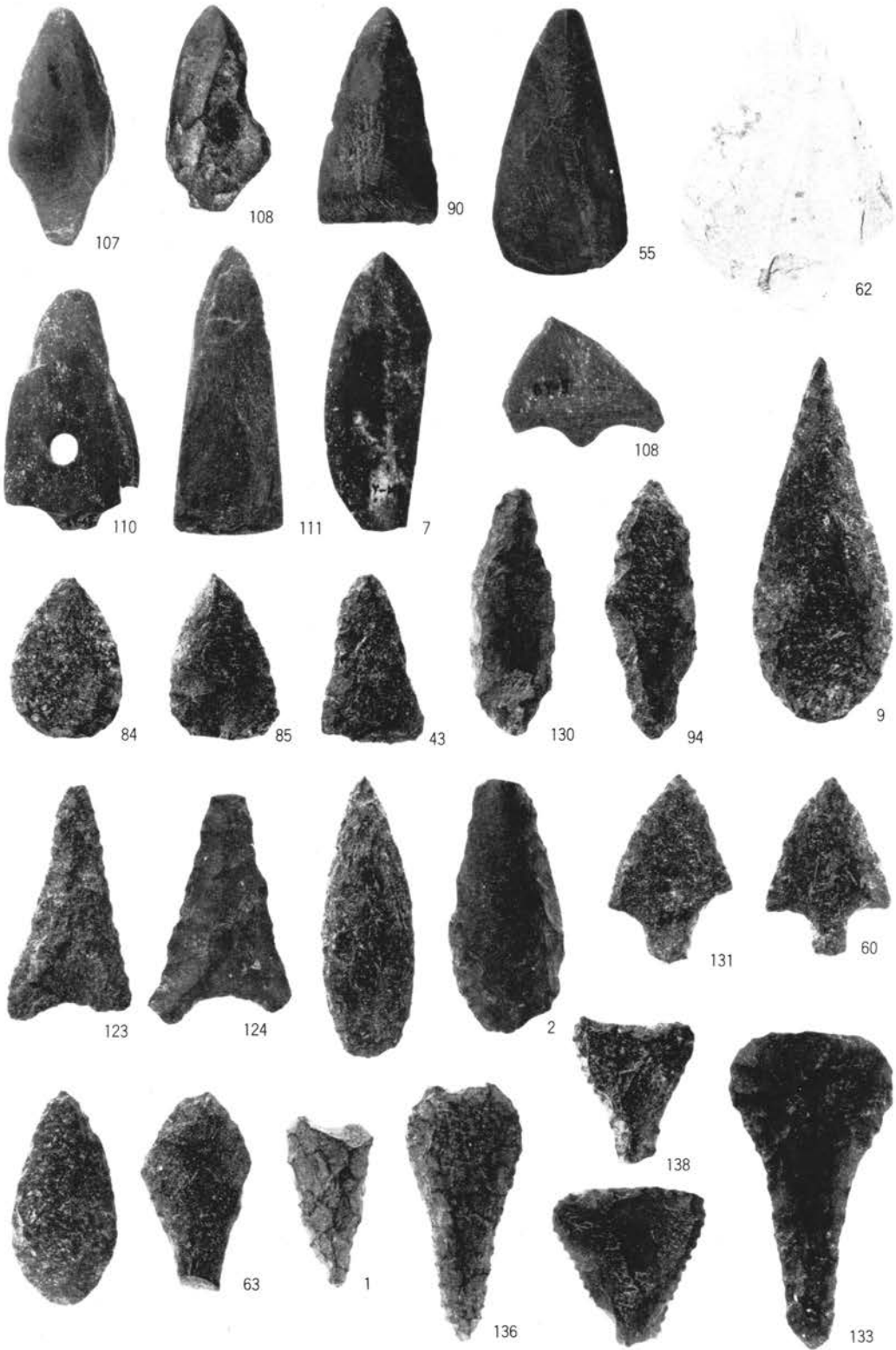
618



627



弥生土器(5)



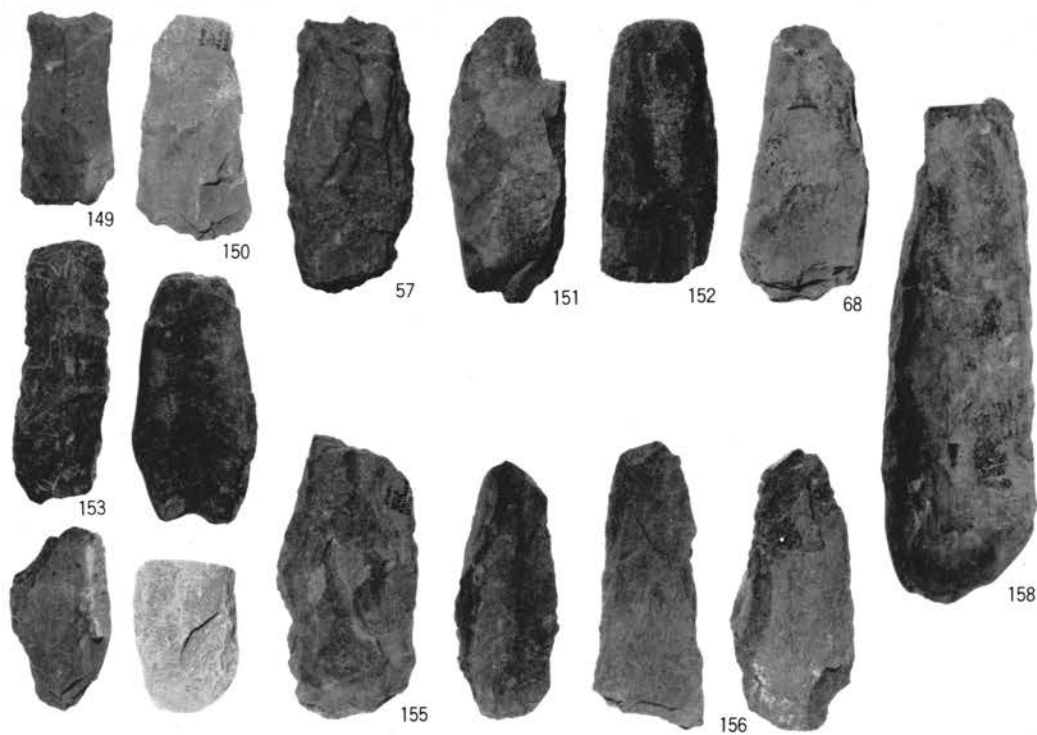
弥生時代石器 I (磨製石鏃・打製石鏃・石錐)



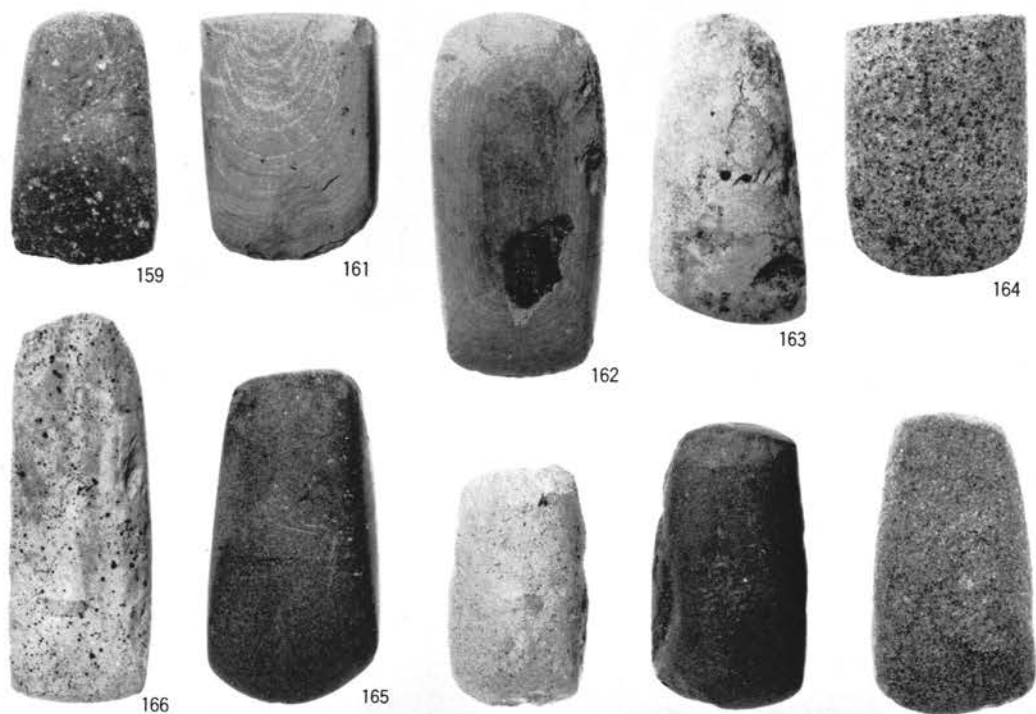
105



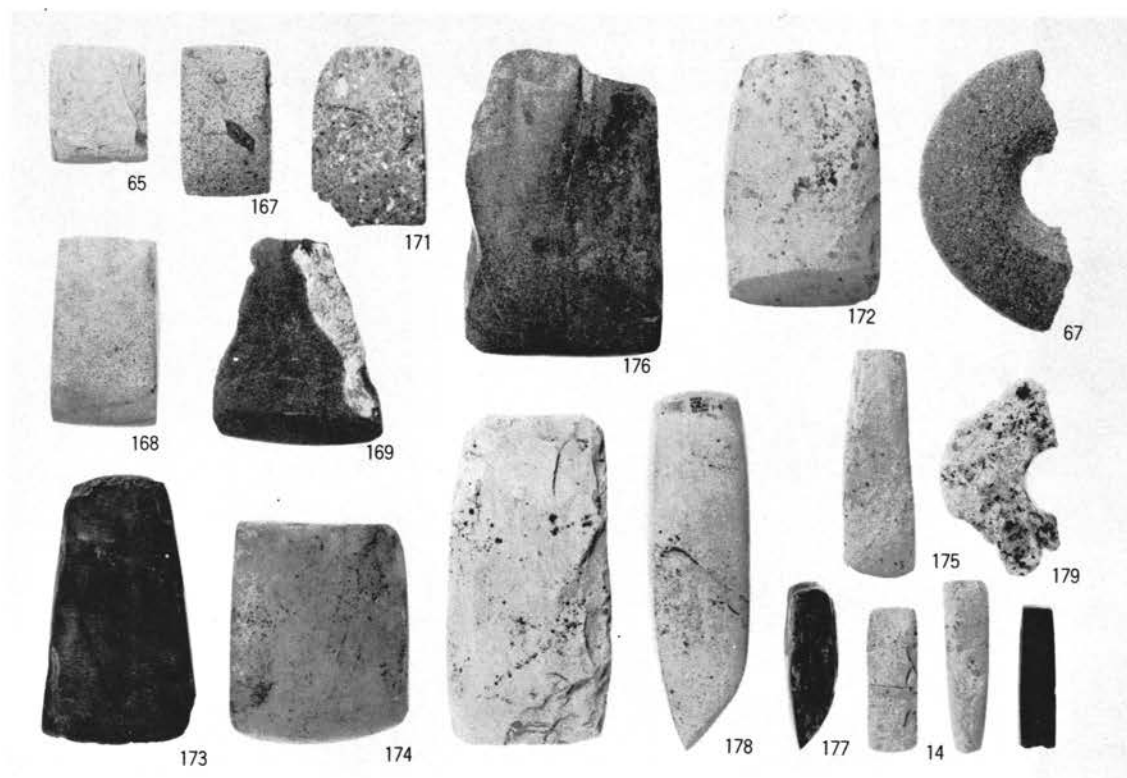
88



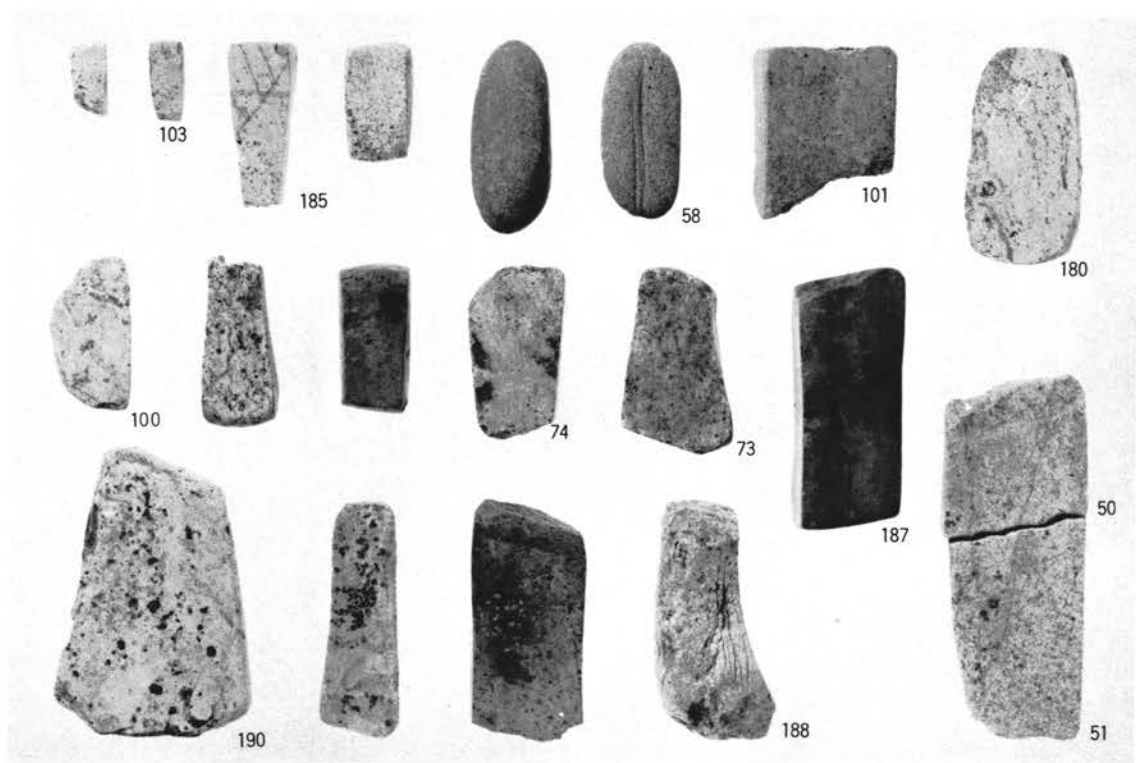
(1) 弥生時代石器3 (石鍬)



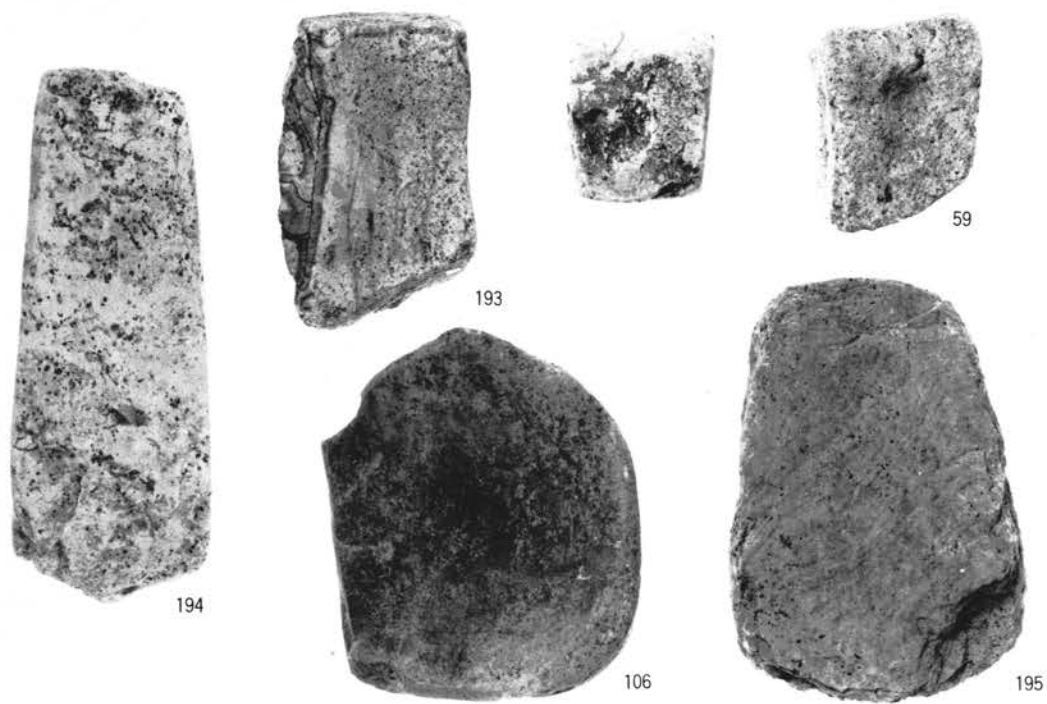
(2) 弥生時代石器4 (太型蛤刃石斧)



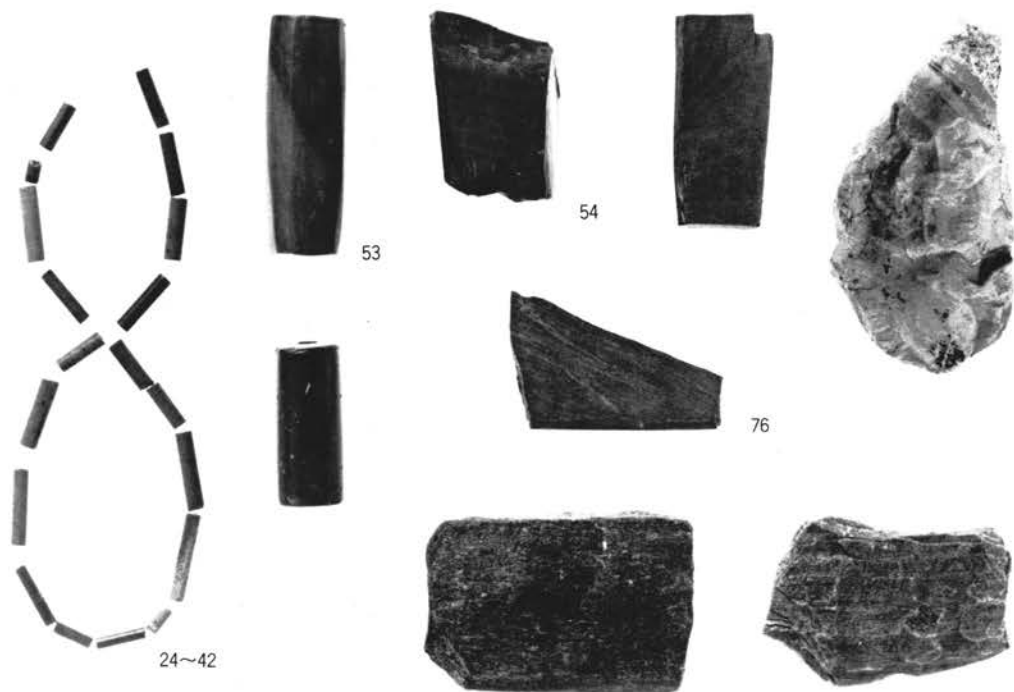
(1) 弥生時代石器5 (扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・環状石斧・小型石斧)



(2) 弥生時代石器6 (砥石)



(1) 弥生時代石器7 (砥石・石皿・凹み石)



(2) 弥生時代石器8 (管玉・管玉未製品・管玉石材・石鋸)



172-3



173-17



172-9



173-25



172-13



173-20



177-53



177-50



177-54



178-57



178-60



178-61



180-74



180-77



179-72



179-65



181-87



181-88



182-96



182-94



182-92



187-135



183-105



184-113



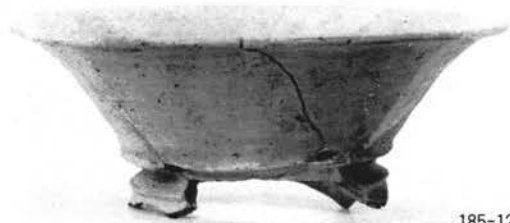
185-117



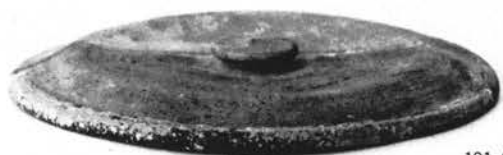
187-134



185-115



185-123



191-9



248-84



232-30



248-87



232-31



248-78



206-40



248-89



248-65



248-92



248-72



248-93



210-53



248-73



249-98



249-103



249-106



249-108



250-119



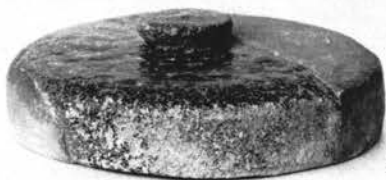
250-130



250-133



250-135



250-111



250-113



250-116



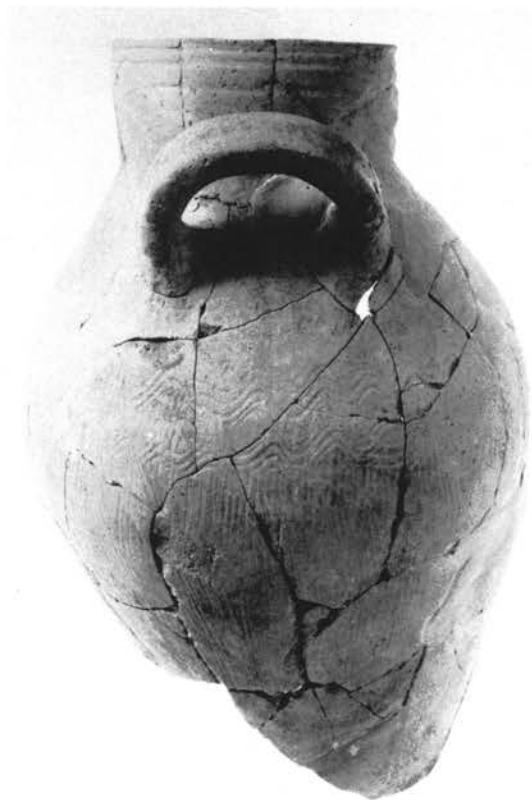
251-9



251-11



251-2



260-3



260-7



260-4



260-5



260-6



260-1



261-8



260-2



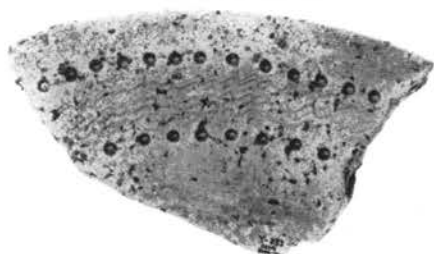
261-9



60



61



31



15



1

2

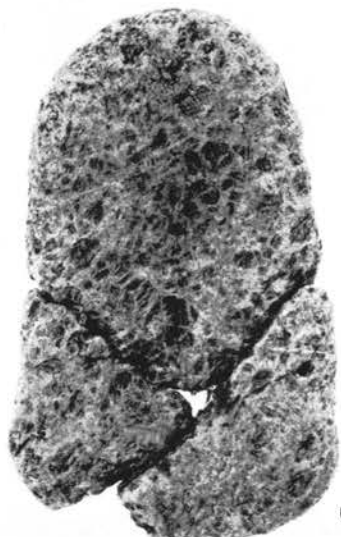
3



4



5



6



272-1



274-24



273-17



273-16



273-11



275-38



278-66



278-65



276-42



277-53



275-32



277-49



279-79



279-80



280-95



280-85



280-91



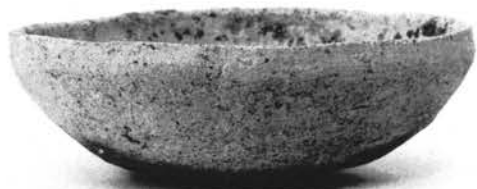
281-104



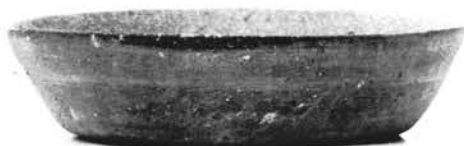
1



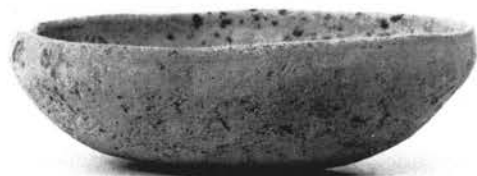
8



3



24



4



63



5



1



2





32



54



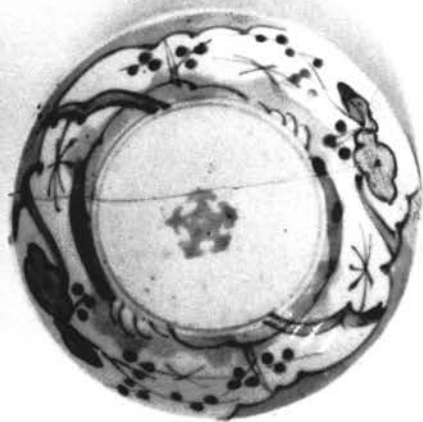
39



57



38



40



53



42



62



43



69



46



51



135



71



84



72



90



73



91



77



307-3



316-149



307-2



316-146



308-18



310-50



316-152



316-150



317-162



317-168



317-166



318-175



318-178

京都府遺跡調査報告書 第12冊

平成元年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)